

奇譚クラブ

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

9

9

1972・9



◆ 新しい風俗文献誌 ◆

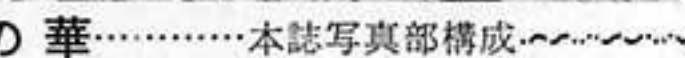
雑誌 2805-9

9月号 ¥400

1972・9

カメラ・ハント楽我記…辻村隆
 女体緊縛の醍醐味を語る…塚本鉄三

本鉄三



女体緊縛の華

・本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・グニ	谷打ちの態勢	関谷富佐子	鞭撻の痛苦	関谷富佐子	浣腸責の序曲	長井葉津子	亀甲縛りの美態	左近麻里子	麻縄と白肌の対照	左近麻里子	陽を浴びた柔肌	中河恵子	猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子	緊縛裸身の驚り	中河恵子	責め疲れの放心	梨花悠紀子	没我的心境	中河恵子	痛打の末の悦虚	関谷富佐子	沖縄美人の緊縛	座間明子	剣玉子の縛り	佐々木真弓	狂変する裸女	川路叢子	責めくたびれて	佐々木真弓	紅毛碧眼の白人を責める	シラ・グニ
海老責の狂態	川路叢子	ポリウムに挑戦	座間明子	鞭打の下に	関谷富佐子	祭壇の人身御供	渡部好美	稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子	開股の正面と背面	中河恵子	華麗な開股責め	中河恵子	イルリガートルを前に	長井葉津子	非情な責めの終末	長井葉津子	両手吊りの晒し	中河恵子	柱縛りの完了	川路叢子	処女縛りとまどう	三浦純子	盗視するSMの目	中河恵子	盗視するSMの目	佐々木真弓						

·編集部構成

両手挙げ棒責め	川路 叢子
柱宙縛りに浮く	長井 葉津子
後手吊りに苦しむ	中河 恵子
どこでも責めて	佐々木 真弓
鞭の法悦境	関谷 富佐子
ムチが痛い、許して	関谷 富佐子
柱を挟んだ連縛	渡部・川路 恵子
花と蛇の静子です	中河 恵子
針責めをして頂戴	渡部 好美
二つ折りの女体	長井 葉津子
猿くつわの哀歓	中河 恵子
日本式縛りの白人	シラ・ケニ
マゾの女王に答	関谷 富佐子
柱しばりに恥らう	金原 奈加子
夫婦プレイの趣味	渡部 好美
長襦袢の艶姿	花坂 道子
豊満ボインを誇る	愛川 悦子
受女今縛られる	梨花 悠紀子
受人態勢充分	関谷 富佐子
折檻にも汚れず	前田 真知子
海老責への展開	佐々木 真弓
責めてみたい碧眼の女	シラ・ケニ
日本式高手小手縛	シラ・ケニ
猫の目のような女	絹川 文代
足吊りのある風景	中河 恵子
亀甲縛り燐懸	中河 恵子
M女二輪の花	渡部・川路 恵子
苛責に乱れた黒髪	中河 恵子
開股縛りの幻想	前田 真知子
鏡の前での放恣	川路 叢子
愉悅のひとつき	左近 麻里子
ハリツケ晒し	左近 麻里子

美しき吊り	前田真知子	長井葉津子	これから、どうするの？
苦痛か悦楽か	関谷富佐子	関谷富佐子	
逆エビ縛りの魔術	三浦恵子	三浦恵子	
愛撫の責め	渡部好美	渡部好美	
俯瞰撮影	前田真知子	前田真知子	
黒縄と白肌	中河恵子	中河恵子	
身動きできぬ境地	関谷富佐子	関谷富佐子	
ポリウムを縛る	座間恵子	座間恵子	
浮上した女体	中河恵子	中河恵子	
麗しき背面	中河恵子	中河恵子	
汚辱の縄	金原奈加子	金原奈加子	
高手小手本縛り	佐々木真弓	佐々木真弓	
責めの陶酔境	川路叢子	川路叢子	
失神したマゾ女	関谷富佐子	関谷富佐子	
前手縛り悶悦	関谷富佐子	関谷富佐子	
柱の彼方の天国	三浦純子	三浦純子	
荒縄の海老責	中河恵子	中河恵子	
美と縛の女神	前田真知子	前田真知子	
はずれた猿轡	梨花悠紀子	梨花悠紀子	
可憐な置物	長井葉津子	長井葉津子	
ながし目の天使	佐々木真弓	佐々木真弓	
酒の肴になる	川路叢子	川路叢子	
妖蛇の洗礼	関谷富佐子	関谷富佐子	
奔弄されるままに	前田真知子	前田真知子	
海老縛りの妙味	川路叢子	川路叢子	
柱につながれた女	長井葉津子	長井葉津子	
痛さをこらえる異国	シラ・ケ下	シラ・ケ下	
責の果の諦観	前田真知子	前田真知子	
痛打の一瞬	関谷富佐子	関谷富佐子	
ホステス裸人生	佐々木真弓	佐々木真弓	

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

選外佳作	佳作	入選作品	入選作品	入選作品	入選作品	入選作品
作品	作品	第五席	第四席	第三席	第二席	第一席
五	一	二	三	五	十	十
千	萬	萬	萬	萬	萬	萬
元	元	元	元	元	元	元
10篇	15篇	10篇	5篇	3篇	1篇	1篇

▽内 容 △

一、創刊以來二十數年、終始広く讀者の方々から原稿を募集し、幾多の傑作を以て誌上を飾つてまいりました。この再度皆様の力作をしてまいるました本誌として、更に一層充實したものでないと思ひます。

一生長創刊以來、特異な風俗文獻誌を標榜してふさわしい力作、読む維新誌としての新鮮で異色あふれる内容をお待ちたいのである。

一、傑作を心から読み、結構です。にふさわしいものでもあれば何でも結構ですが、サデイズムに関連したものも、切腹嗜好、各種マゾヒズムに関連したものと、首狂、淫婦嗜好、女相撲、女斗美、変装、同性愛、風俗、風俗文獻紹介、アブノーマル・テクニクなど、古今東西を問はず特異風俗に関する題材を中広取り上げて下さい。

一、題材形式小説、連載形式読物などのフィクションで、読切形式、体験、手記といずれでも結構です。

すし、告白、結構です。更に見聞記、実見談やシヨボルタージュといったものから論説

[illegible]

て御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下さいれば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さいよう願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はブレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに関してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真と同封下さいれば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
晚出版株式会社編集部宛

大阪市住吉郵便局私書箱第41号
曉出版株式會社編集部宛

自ら求めた痛苦の果

＜鈴木千鶴子＞



奇
譚
ク
ラ
ブ



九月号目次

△昭和四十七年△

△第二十六卷Ⅱ第九号Ⅱ通刊第二九五号△

本

文

荒縄と柔肌のコントラスト△前田真知子△	早川 卓志	(21)
告白『縄とライトとカメラと』	中河 恵子	(22)
三部作「不毛の愛」△きりぎしの花△	久留木 栄	(32)
M男通信「青山かおり様の奴隷として」	青山 土玲	(44)
SMカメラ・ハント△渡部好美の巻△		
『吊りの醍醐味』	辻村 隆	(52)
浣腸体験告白「妖花の泉」(下)	上条 直	(82)
奴隷妻小説『命預けます』(1)	柴 利好	(90)
緊縛・切腹フォートの幻想「M子受難」	泉 一郎	(102)
連載・時代S小説『紫蘭の門』(13)	風流極道軒	(110)
告白「美と醜の谷間にあって」	田宮 雅夫	(126)
みさ子の「緊縛花電車」と性本能	佐野みさ子	(136)
SMプレイ		
連載小説「大噴火」△第四十八回△	千葉 青鬼	(142)
文献渉猟「女相撲書誌雑考」(上)	雄松比良彦	(150)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ		
『霖雨余情(りんうよじょう)』	塚本 鉄三	(164)

巻頭緊縛美フォト

自ら求めた痛苦の果……鈴木千鶴子
羞恥に耐える乙女の表情……笠井奈保子
菱縄縛りと猿ぐつわ……笠井奈保子
昇りつめたSMの階段……深田 菊子
脚はひろげられるのに委せて……鈴木千鶴子
「東京の踊子」悦虐記……鈴木千鶴子
二の腕に縄痕を残して……前田真知子
いたぶられる緊縛女体……前田真知子
噛まされた猿ぐつわの表情……松本 たえ
縛られた女体の哀歎……前田真知子
「京都慕情」の佳人を縛る……前田真知子
見事な乳房の縛り……高村 浩子
菱縄で飛び出す乳房……深田 菊子

浣腸通信 神田の古書店で……竹迫 誠也
イメージ画「さらしもの」……小川 茂正
和装緊縛「花嫁無残美」……山本 五郎
浩子よ、苦しめ……貴苦与之助
菱縄マニアの生きがい……早木 夢二
秘めたる悦楽「奇ク入門」……青山 三樹
サロン楽我記「第99回」……辻村 隆
フォト わがプレイ記録……浜浦 順一
イメージ画「憲兵再来」……森 荆
SMの佳人に捧ぐ……本牧 野人
告白 色街の灯ともし頃……愛打 網雄
私達のプレイ心情……高松 志朗
フォト「プレイの一駒」……津山 逸夫
短信往来 石田令子様へ……井上 雅人
川路叢子様へ……志羽 利也
最上卓也様へ……福島 水野

短信往来 渡部好美様へ……北川まりこ
フォト「裕子の縛り」……最上 卓也
「好美の悦虐」……渡部 光雄
止められたフォト発表……小田原一郎
編集部だより……編集部
奇クに想う 私も一言……高崎エネマ
フォト「私の縄掛け」……紀川 正信
勝手にしやがれ……原 多津男
一輪花であれかし……城野 洋之
フォト「憧れのドミナ」……佐野 寿
無惨絵秘帖「被腸の誓い」……桐原 紫門
「切腹女」のおたより……井上 則子
私の淡い浣腸の思い出……金沢 吾一
イメージ画「不安な時間」……あらいかず
映画通信最近の緊縛シーン……東山 映史

連載・S大河小説

『パロディ』花と蛇 (九) ……山光 純 (186)

M読切創作「不安症候群」……芳野 眉美 (198)

マダム美美代の饒舌 近日堂々開店 ……福井 桃子 (206)

連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(30) ……鬼山 絢策 (212)

奈保子の自由日記帳『紫陽花の咲く朝』……笠井奈保子 (225)

読者通信 ……編集部選 (266)

イメージギャラリーⅡ「冷やかな新居」飯田ひろくに (39) ……「仕置場」岡た

かし (97) ……「SM部新設」須坂旭 (100) ……「群狼の賛」岡たかし (116) ……「苦

悦開眼」志羽利也 (120) ……「胎動」室井亜砂路 (128) ……「叫声タイム」飯田ひろ

くに (130) ……「乗馬練習」須坂旭 (133) ……「鞭跡検査」須坂旭 (191) ……「女体

机」志羽利也 (193) ……「麗花受難」岡たかし (195) ……「ヒザ鉄砲」春川ナミオ (221)

目次フォトⅡ「仕止められた人魚」「豆絞りの手拭い」……絹川文代

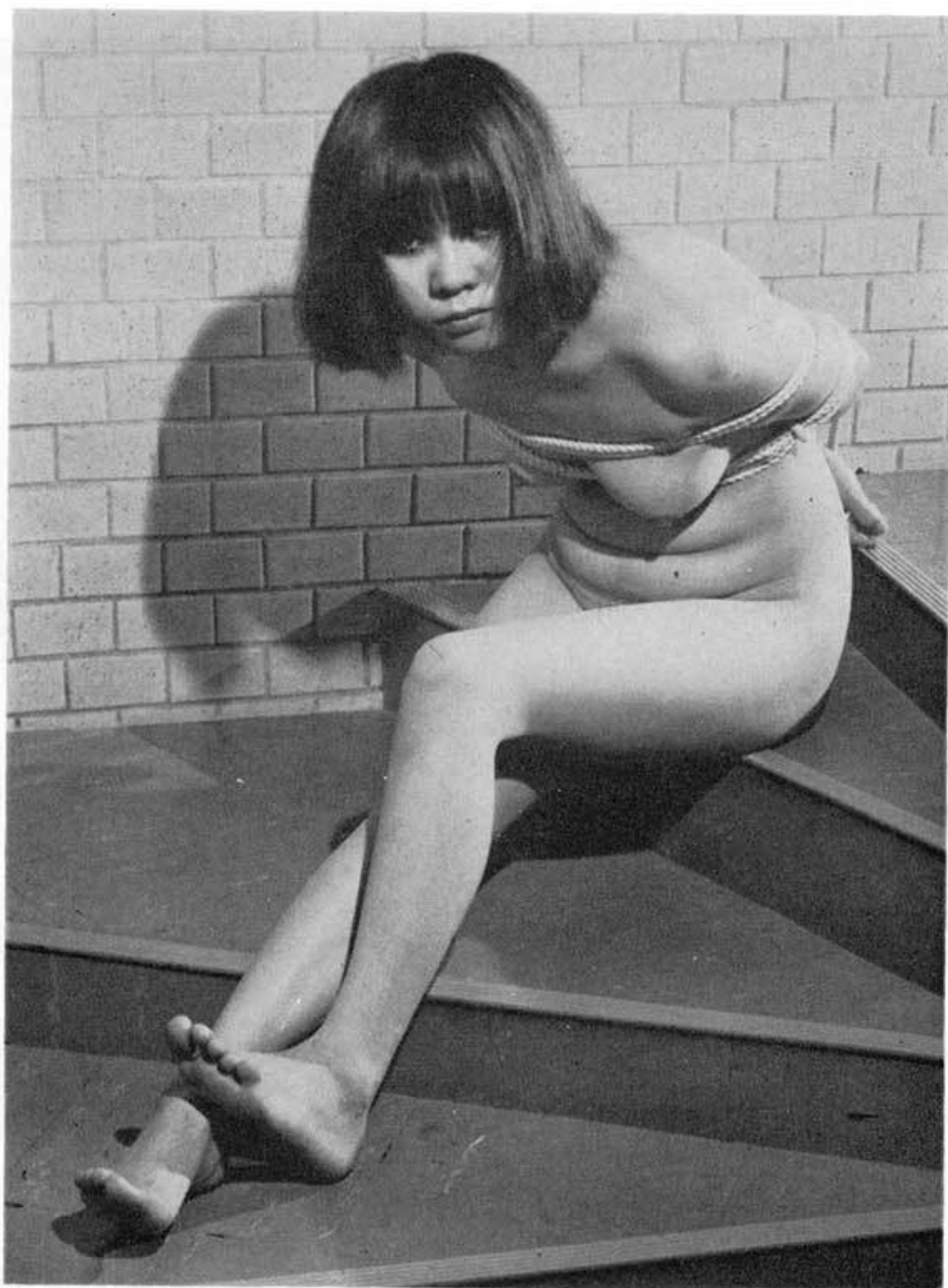




〈笠井奈保子〉

菱縄縛りと猿ぐつわ

△深田菊子▽



昇りつめた S M の 階 段





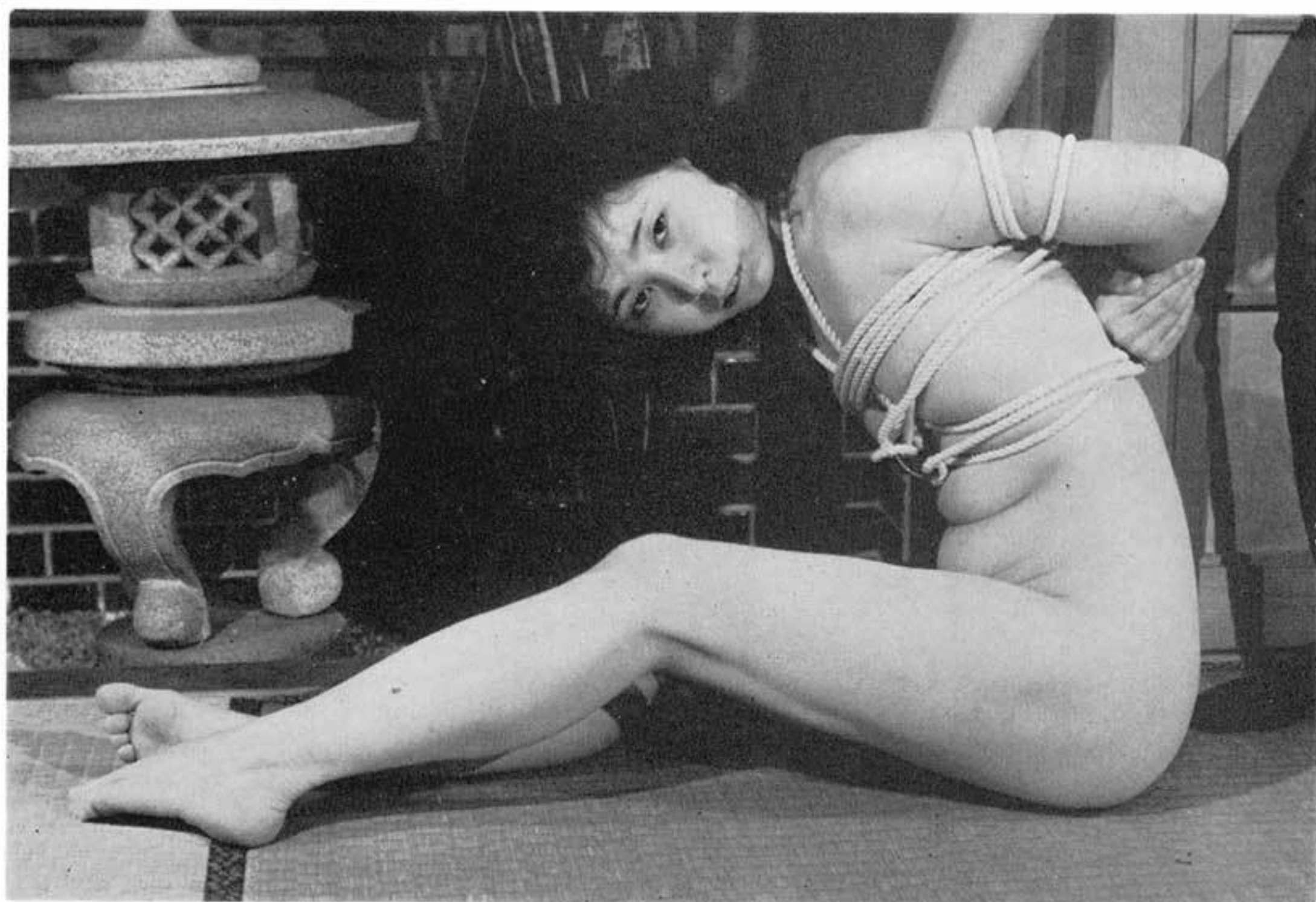
脚はひろげられるのに委せて。

＜鈴木千鶴子＞

東京の踊子、悦虐記

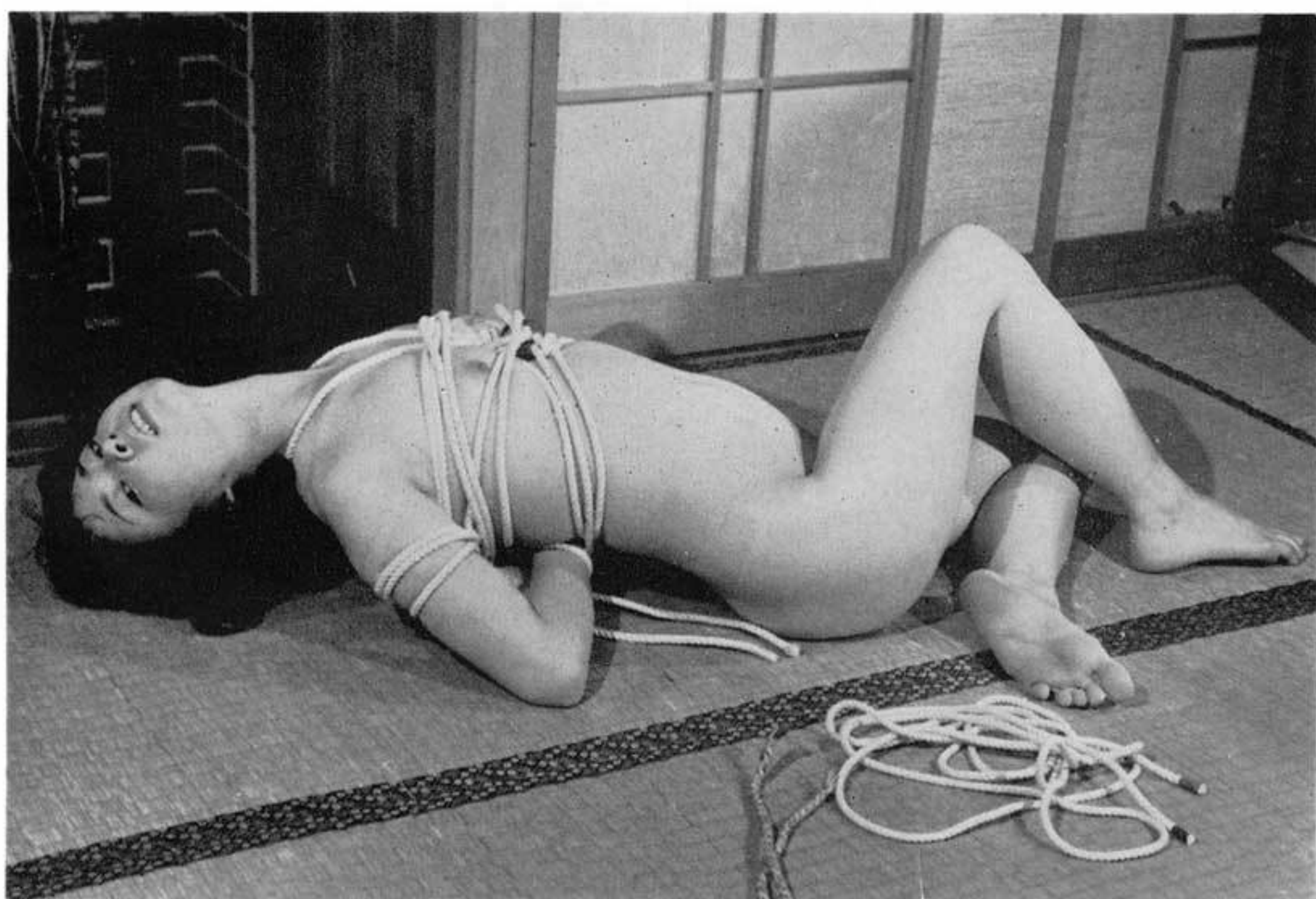
＜鈴木千鶴子＞





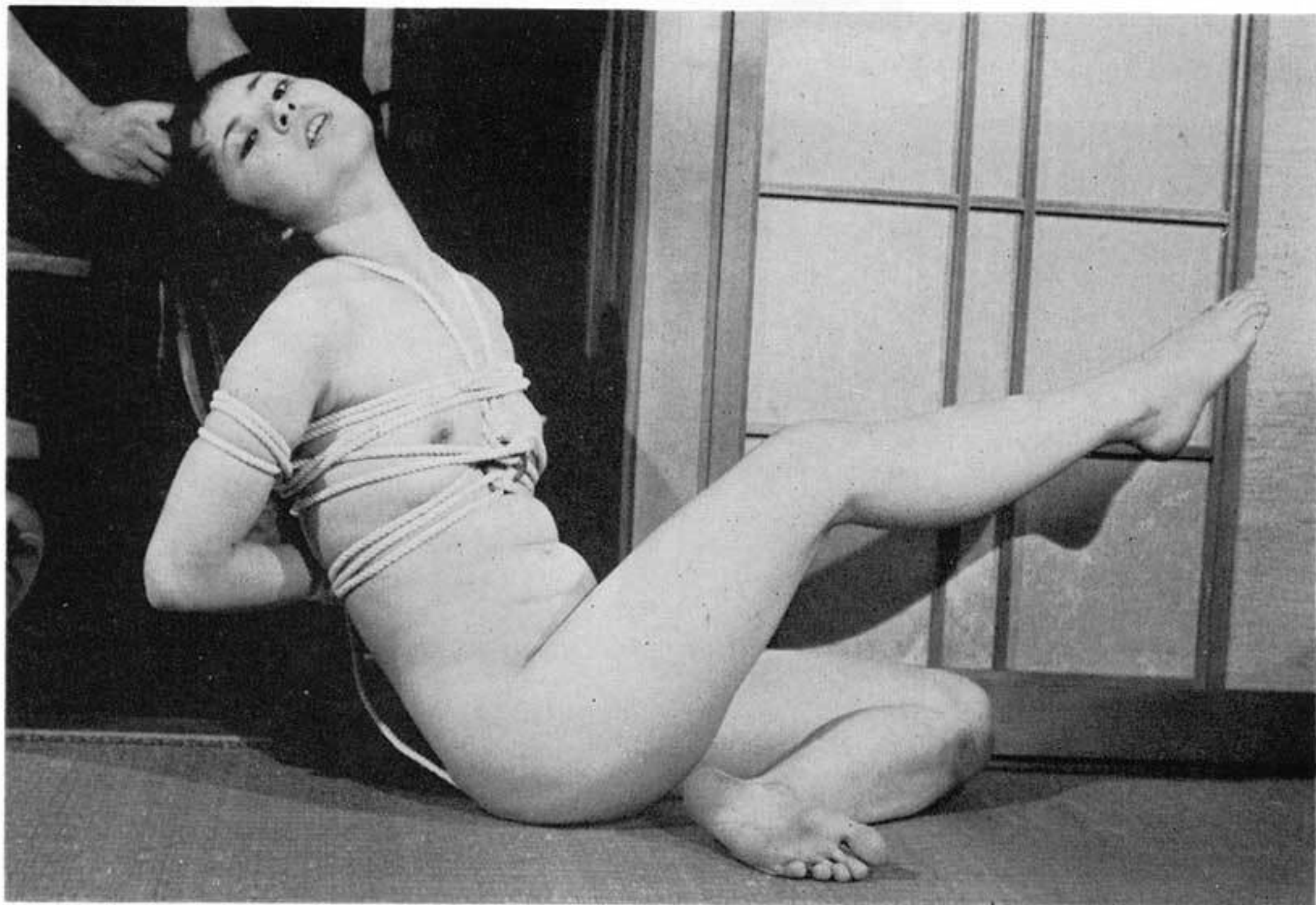
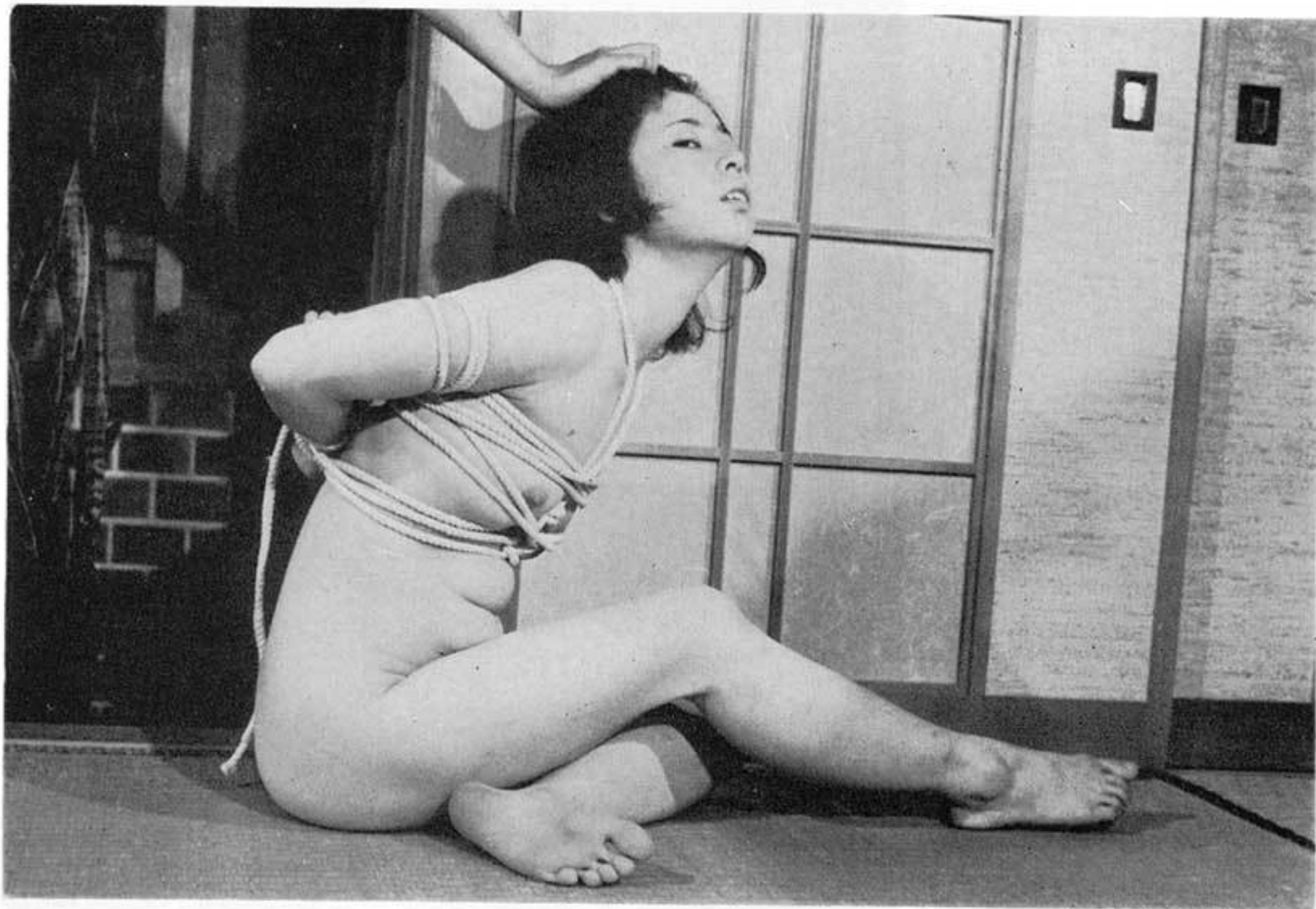
二の腕に縄痕を残して……

〈前田真知子〉

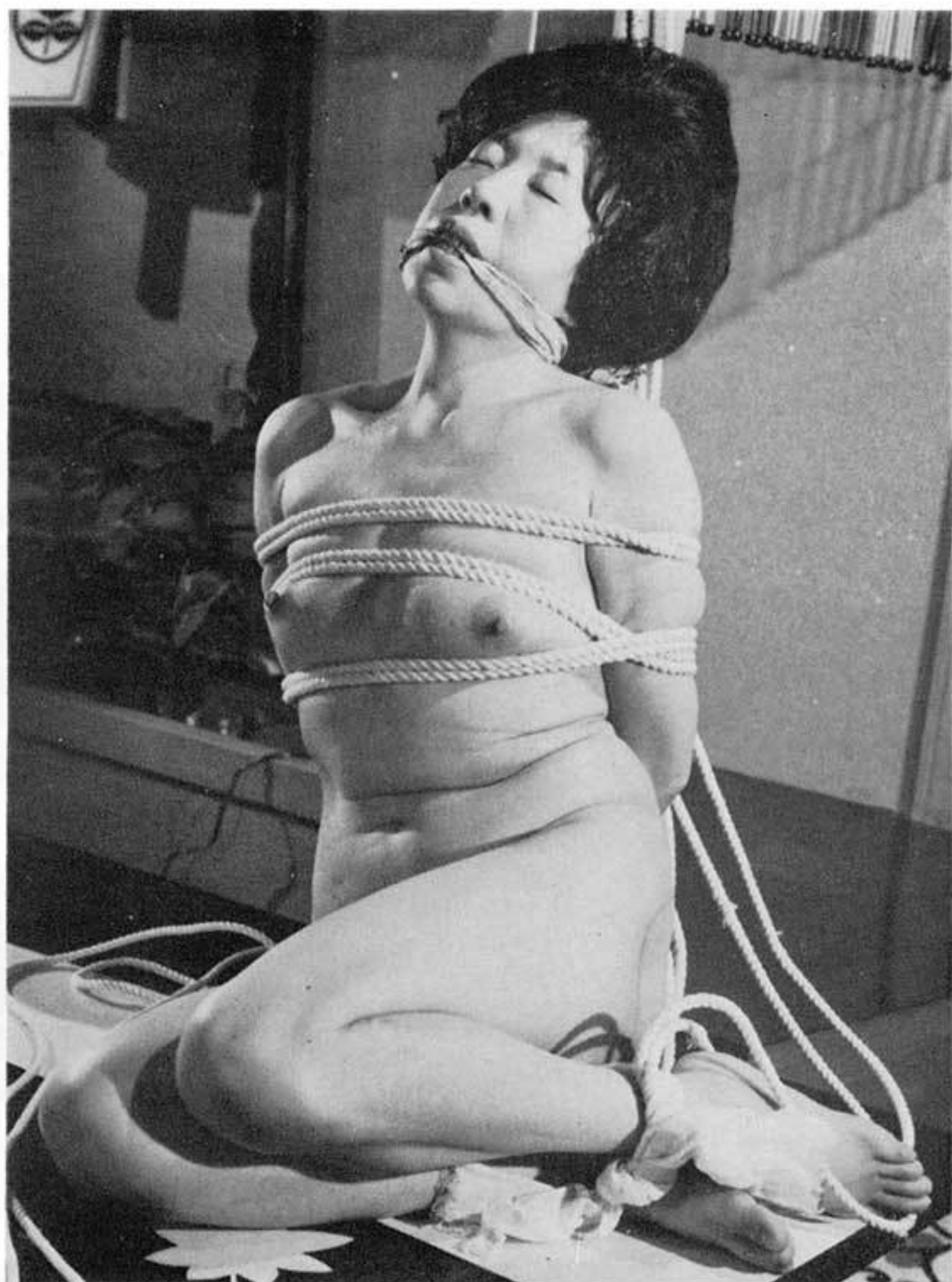


いたぶられる緊縛女体

〈前田真知子〉

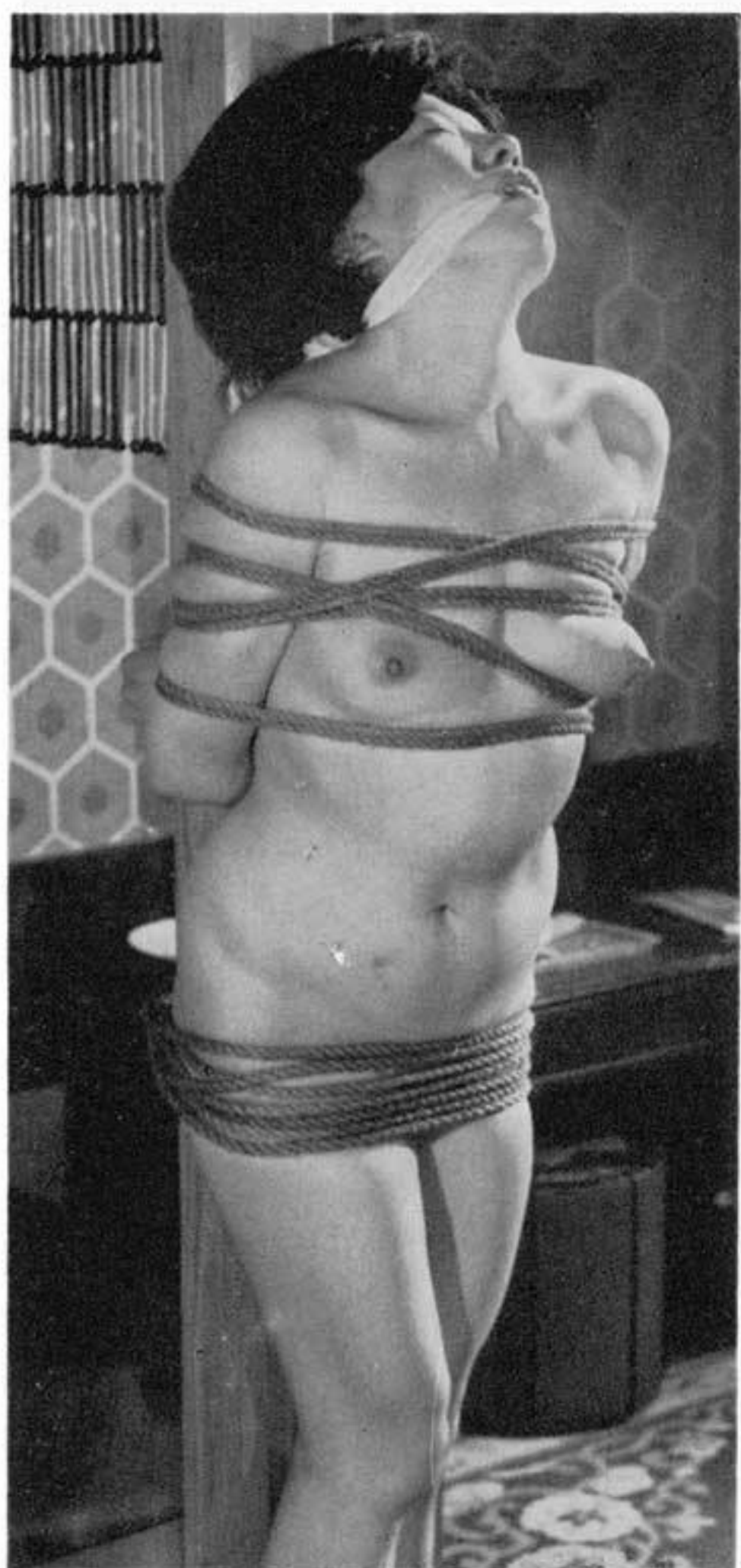


噛まされた猿ぐつわの表情

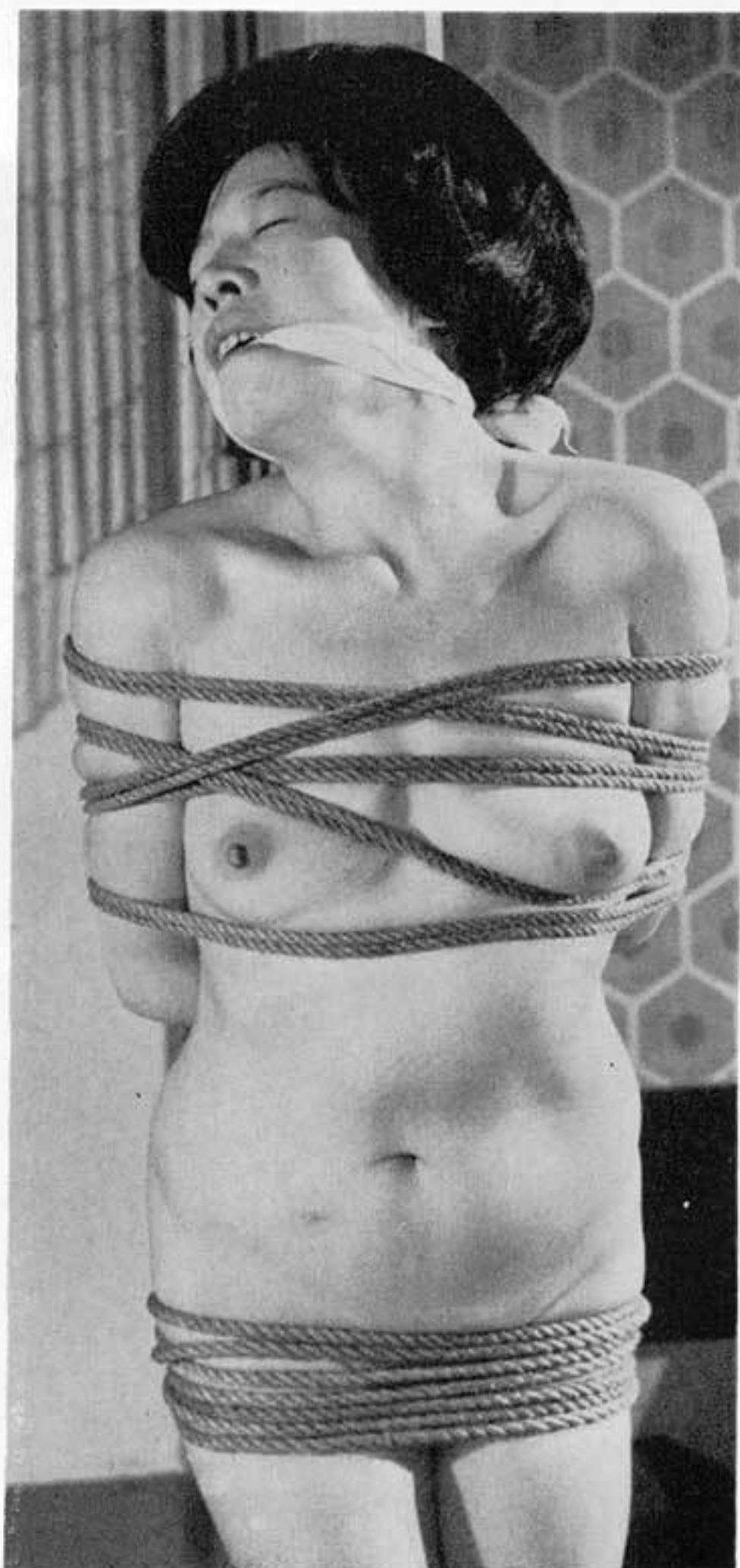


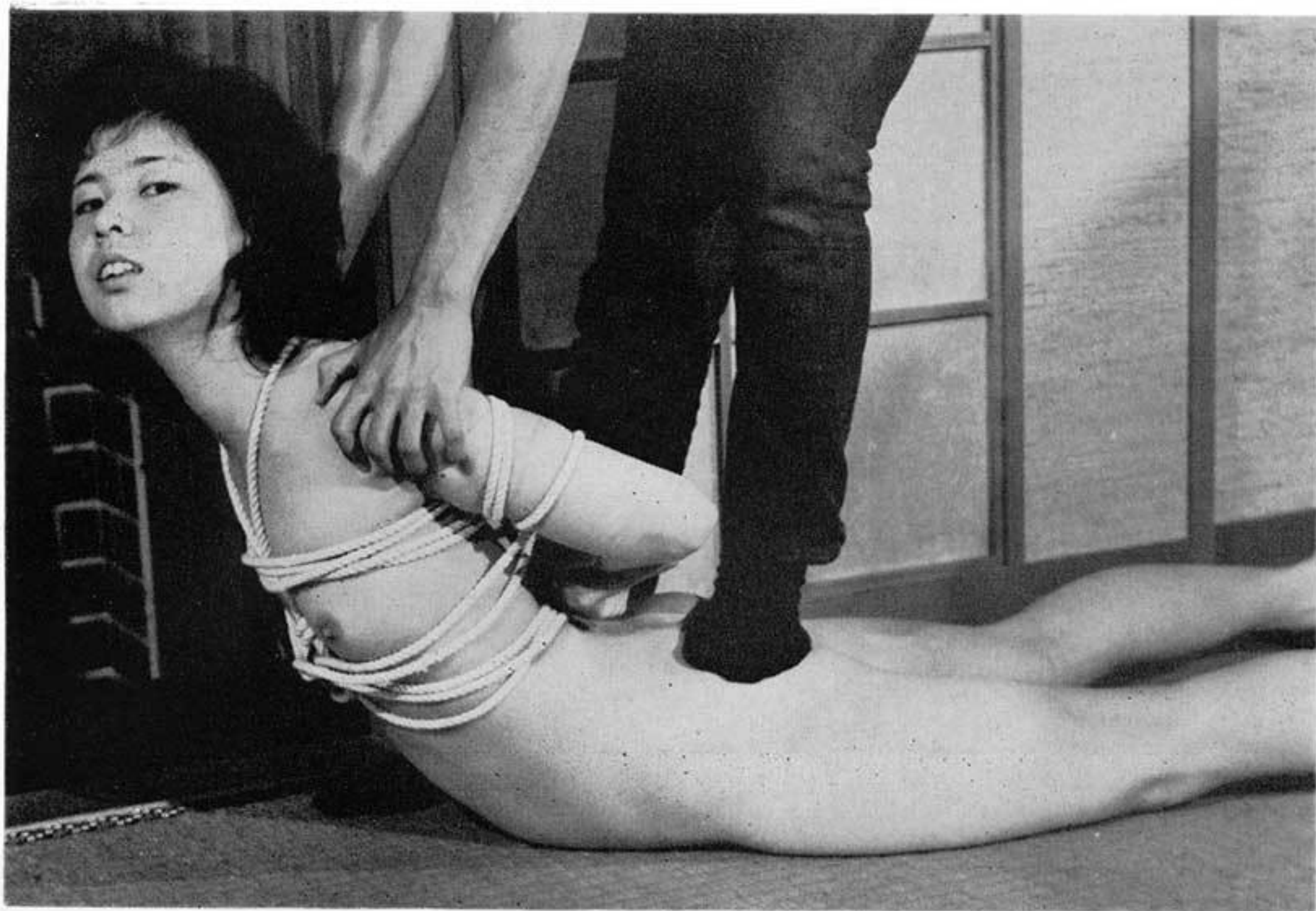
〈松本たえ〉





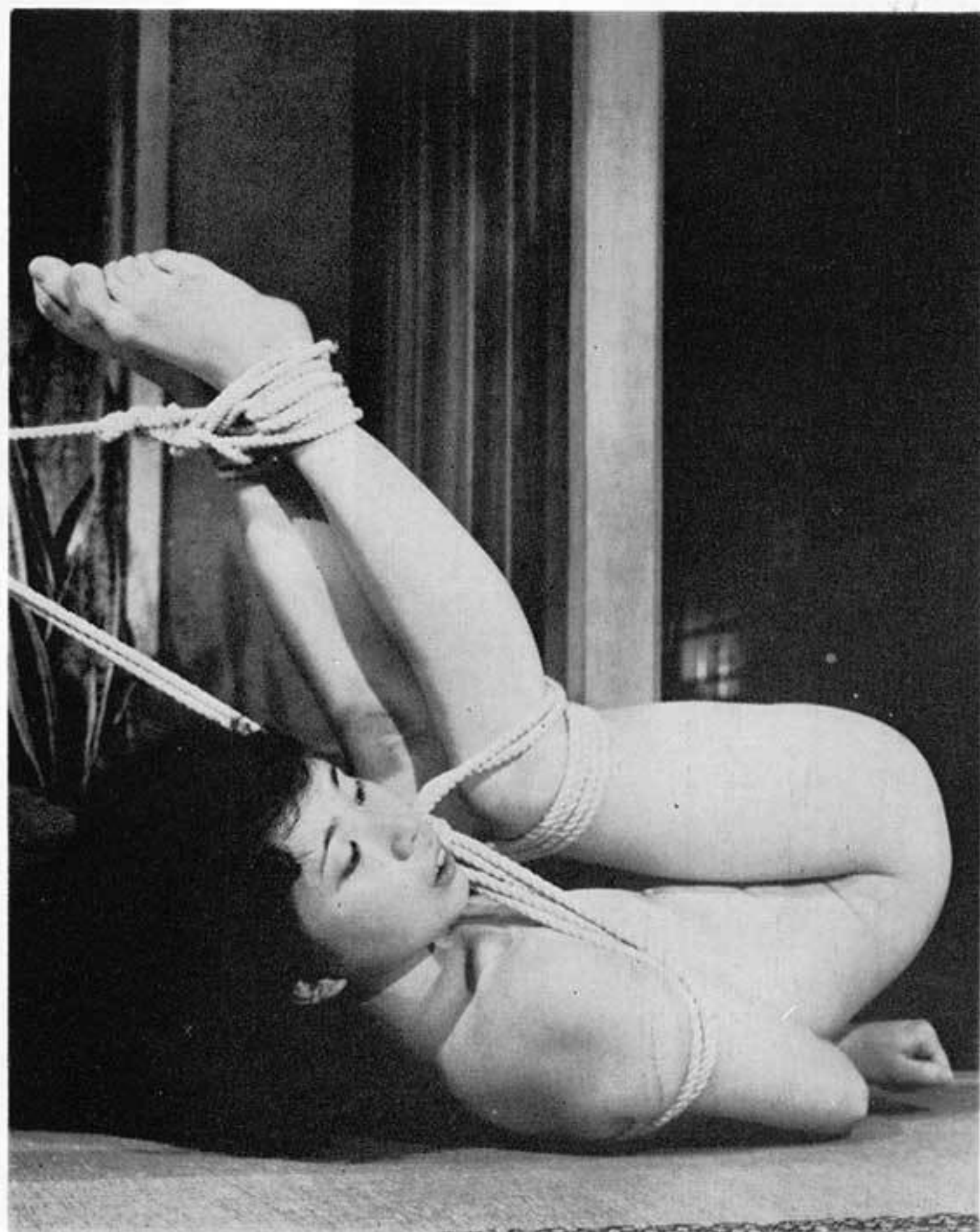
△松本たえ▽





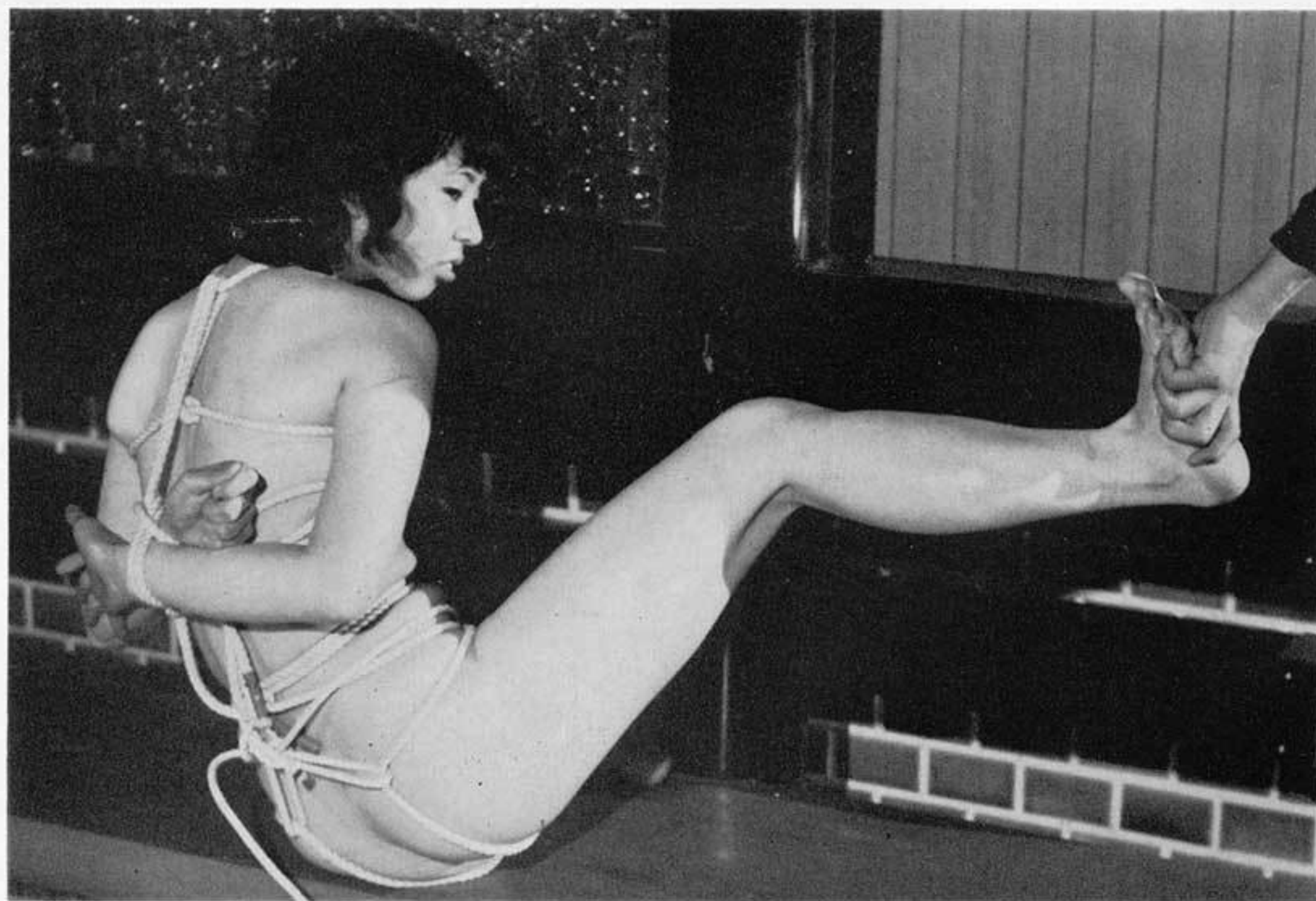
縛られた女体の哀歓

△前田真知子▽



“京都慕情”の佳人を縛る

△前田真知子▽

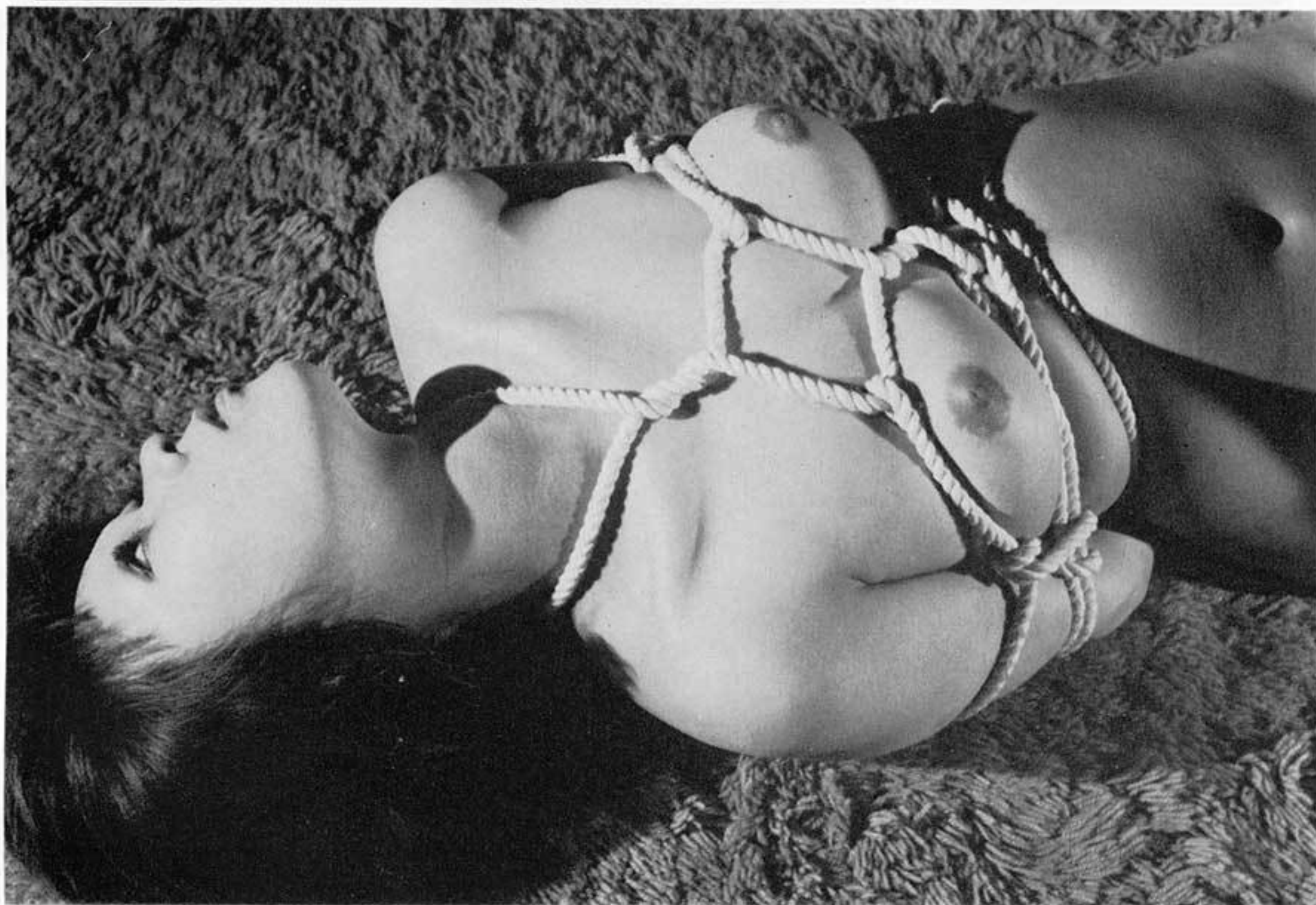
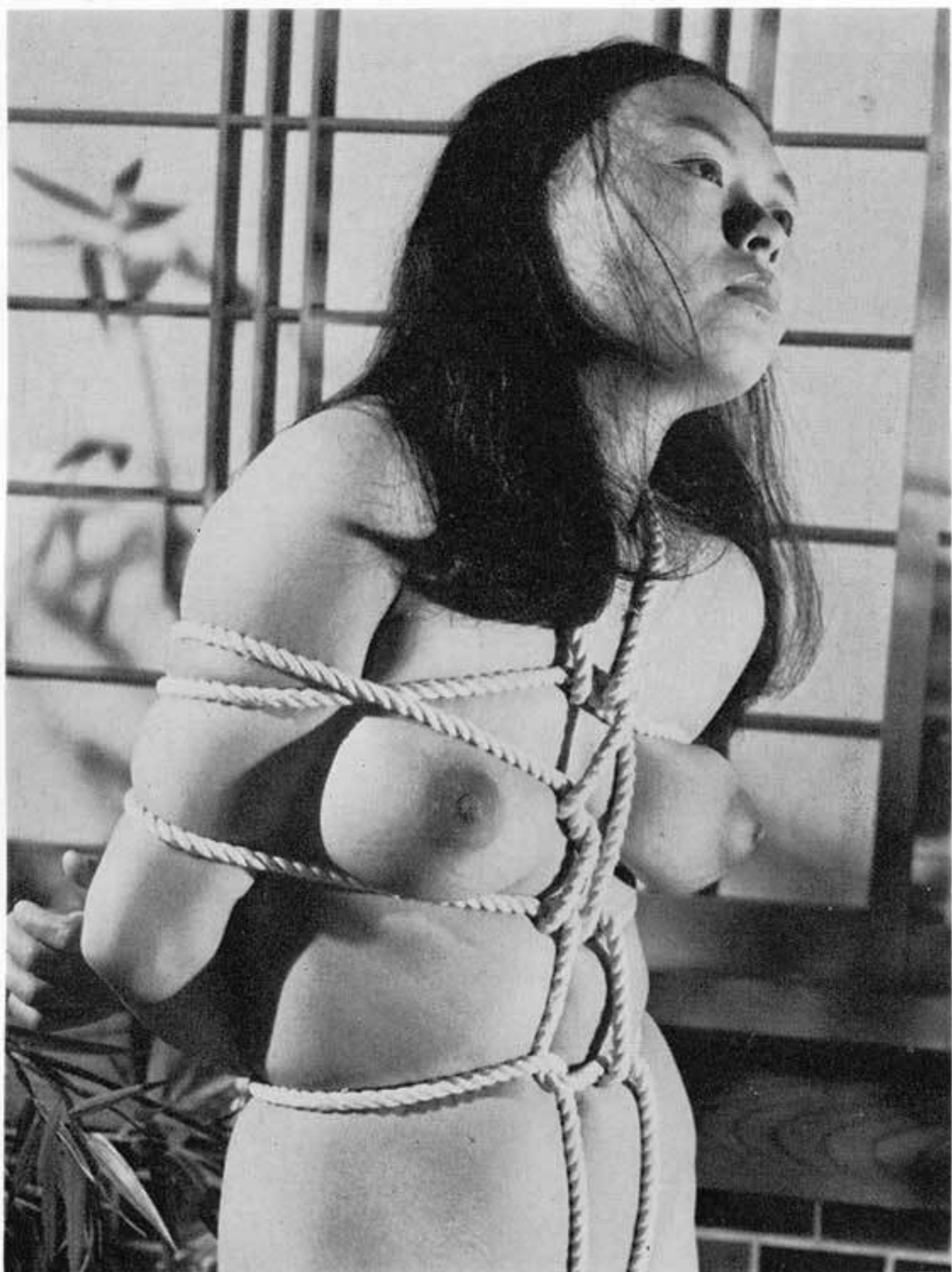


△深田菊子▽

菱縄で飛び出す乳房

見事な乳房の縛り

△高村浩子▽



奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年9月号

<第26巻第9号・通刊第295号>

やわらかくて白い純のような肌に、トゲトゲしい荒縄がじかにまといつくと考えただけで、私は犬歯のきしむようなサディスティックな気持ちにかりたてられる。もしアレルギー体質の女性であつたら、薬の縄が肌に触れただけでも全身にジンマシンが起こることだろう

と思う。

それが、ただ縄が触れるだけではなくて、ぎりぎりとした力いっぱい縛られるのであるから、その柔肌に対する刺激は、如何ばかりであらうかと私は、おののくばかりである。

(早川卓志・記)



荒縄と柔肌の

コントラスト

モデル・前田真知子

＜告白＞

縄と

ライトと

カメラと

中 河 恵 子



私をはじめ縄というものに関心を持ったのは高校三年のときでした。前にも書いたと思いますが、お友達に冗談まじりに縛られたとき、私は自分でも異常と思えるくらい激しいショックを受けたのです。丁度、思春期であつた私にとって、縄という何の変哲もないものが直接セックスにつながりを持つような大きな意義を持ったのです。

普通の人にとっては、物を荷造りしたりするだけの小道具に過ぎない縄が、私にとっては荒物屋の店頭に、ぶら下がっているのを見ただけでも、きゅっと身の引きしめるような感動を受けるのです。

そんな私ですから、裸で縛られた女の人の写真の載っている奇クが目に入らないわけはありません。恐ろしい期待で、胸をドキドキさせながら、それでいて、もうどんなことがあっても見ないではいられない、読まないでいられない強い吸引力が私を捉えて放しませんでした。そして当然の事ながら団鬼六先生の「花と蛇」に魅了されてしまったのです。

そして私にとって幸いなことは、編集部宛に出した手紙が縁となつて『緊縛モデル』として登場することが出来たのです。縄に異常なまでの執着を持つ私に、更にライトの輝き

とカメラのレンズが、凄い衝動を与えることを知ったのです。更に、同好のお友達を沢山知ることも出来ました。

結婚前のひととき、ドライブ、登山、ダイビング、更には栗拾いや松茸狩りとお転婆ぶりを発揮していたのですが、結婚、妊娠という現実を前にして、さすがの私も飛びまわってばかりもおれず、ここ二年ばかりは育児に専念しておりました。

祖父母が健在なので幼児の面倒を見てもらえますし経済的には安定しておりますところから、またまた未婚時代の奔放な心が蘇ってきました。妊娠がきまってから車は売ってしまったのですが、乳放れした頃から、またぼつぼつ乗りたくなって故郷から大津まで、時折、ドライブするためという名目で祖父に新車一台を買ってもらいました。

もうこの頃では以前のように水泳とか登山とかはやれませんが今年のは専ら車によるドライブを楽しみました。『天と地』の古戦場を訪ねて塩尻峠から諏訪湖畔まで長駆して松本平から美が原の山麓を通過したこともあります。名古屋へ出て名神高速道路を走れば大津まで行くのも、すぐです。東名が開通してからは、伊豆の東海岸を走って下田まで

足を伸ばしたこともあります。

祖父は私を手元に置いておきたいらしく、結婚してから、屋敷内に一軒、家を建ててくれて、都会へ行きたいときは遊びに行ったらよいと言ってくれるのです。

そんな祖父の言葉に甘えて、主人と子供の三人で久方ぶりに懐かしい神戸までドライブしました。名神高速道路の西宮インターチェンジのあたりから、三宮へかけての第二阪神国道は目下、工事中で、以前の美しいイメージは窺うことは出来ませんでした。特に三宮

へ入るまでの道路は、道路の中央を掘り起こして、ひどい交通麻痺で弱りました。

今度の神戸行きは、主人の仕事の休みを待って計画を樹てましたので大分、以前からわかっていました。それで二年ぶりにモデルになりたいと思って編集部へ連絡しておいたのです。主人は子供と一緒に先にホテルへ行っているから、ゆっくりしておいでと言ってくれましたので、私は迎えの車に乗って二人と別れました。

昭和四十一年の秋、私は奇クに連載されて



いる「花と蛇」を読んで余りの感激に矢も盾もたまず、意を決してモデルの志願をしてしまったのです。その頃、まだ独身だった私は、モデルとなった体験を告白に書いて本誌にも発表しました。翌昭和四十二年になっても私は度々告白文を書いて、自分の心を慰めてまいりましたが、彼が出来てから妊娠し、大きなお腹の緊縛ポーズも本誌に晒してまいりました。その当時のことは、本誌の文章にも書きましたが、自分としても只なつかしさが、いっぱいという気持ちです。

「暑さ寒さも彼岸まで」という秋のお彼岸を迎えると、私は二年前あの大きな妊婦腹で縛られ写真を

撮られたときのことが、まるで昨年のことのように思えてくるのです。月日の経つのは早いもので、あれから、もうマル二年も経ってしまっているのです。

そんな事を考えている中、車は神戸駅から加納町を通り熊内町の高台にあるホテルへ着きました。秋の日は、つるべ落としに沈んで



ネオンが一つ二つと、つきはじめています。

地下へ車を納めるとエレベーターで部屋へ上がります。

部屋へ落ち着くのも待ちきれないように、私の胸は縛られるということに対して、妖しく打ちふるえるのでした。主人以外の男性に対して、この身体を開いて思いのままに縛ら

せるということは、本当に何年ぶりのことでしょうか。

「私、浮気するの、結婚してから今日が始めてなのよ」

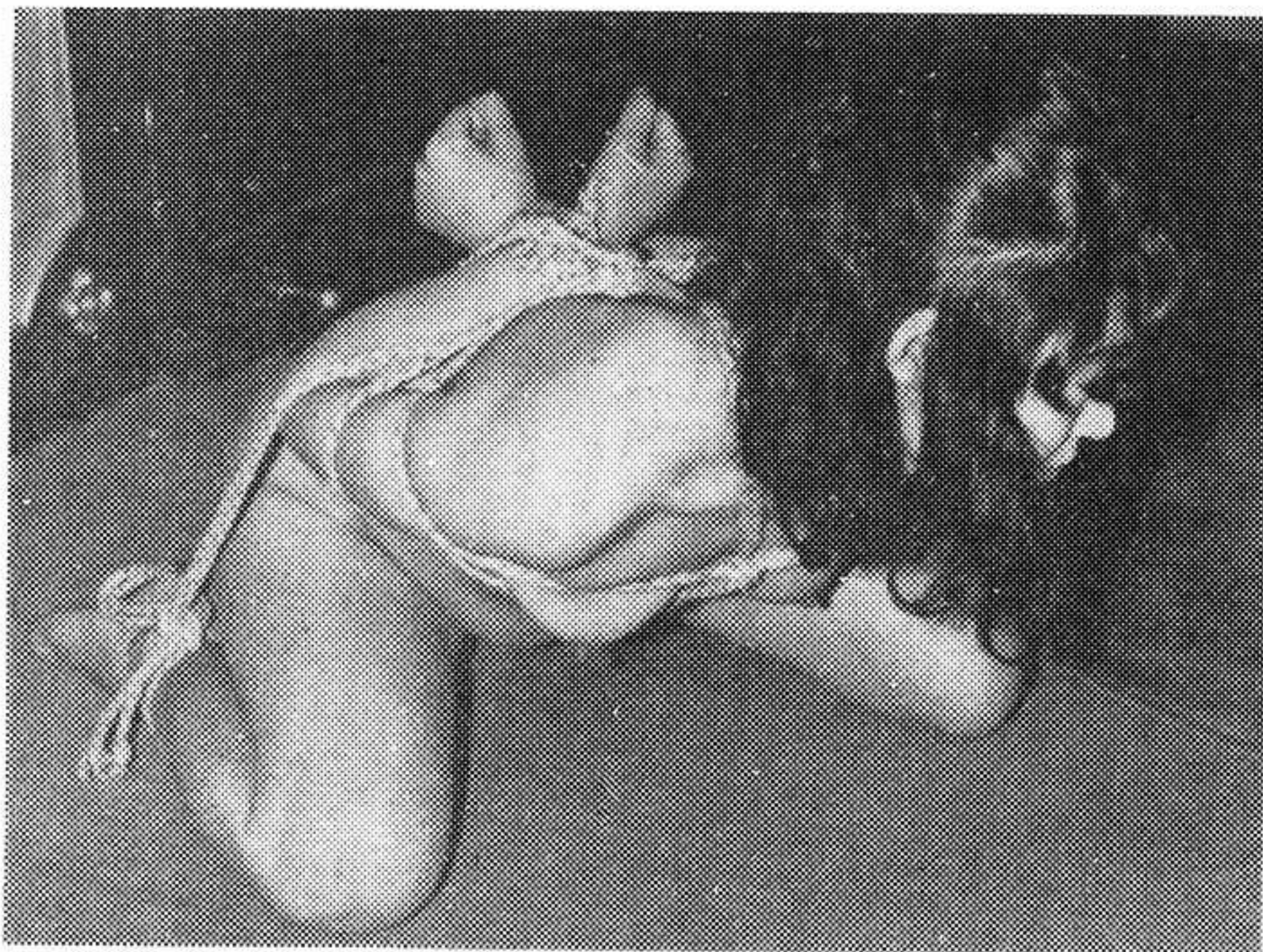
いよいよ着ているものを全部脱ぎすてて、これから縛られようとするとき、私は思わず知らず、こんな言葉を口走っていました。もうすでに若くはない自分の身体を彼の目の前にさらす羞恥心を、必死になってかくすための、はかない抵抗だったのかもしれませんが。

娘時代に男性の前に、何のおおうものもない自分の体をあらわに晒す恥かしさと、人妻となり、二人の子供の母親となった身を晒す羞恥心とは、自ら違っているのです。

○

塚本鉄三さま

この原稿をござらん下さったら、おわかりと存じますが、二年前の初夏の夕方、貴方様と二年ぶりに、お逢いして、本当に久しぶりにしびれるようなSMプレイを楽しんだときの思い出を、原稿にして書きました。



せめて、二、三十枚にまとめて、奇ク編集部へお送りしようと思ったのですが、どうし

ても、このあとが書けず、そのまま机の抽出しの奥の方へ、しまっておいたのです。

私もこんな原稿を書きさしておいて、すっかり忘れてしまっていたのですが、はからずも今日、抽出しの中を整理して、見つけたのです。

読み返してみても、あの頃のことと本になつかしく、涙が目頭に、にじんでくるのをどうすることも出来ませんでした。

書きさしにしていたことさえ、自分でも忘れ去っていたのが、どうして丁度二年目になる今日、みつかったのでしょうか。破りすてようかとも思いましたが、どうしても惜しくて、書き足してお送りしますから、御一読の上、お焼き下さるなり、もし掲載の価値がありますものなら、奇ク編集部へお送り下さるなり、御自由にして下さいませ。お別れした日の翌日、私が

いよいよ神戸の街を離れようとした時、お電話を差し上げたのを、よもやお忘れにはなりませんでしょうか。私が貴方様と、これを機会に、もう当分お逢い出来ないと思って、わざわざお電話したのに、貴方様は至って平静でいらっしやいましたわね。いや、むしろ冷淡とさえ、私には感じられました。

お別れするのが淋しく、悲しくて、私は思わず電話口で泣いてしまいました。

私の責められた時の泣き声をテープに沢山とられた貴方様ですが、あの時は、私が思いのたけを、あれほど熱心に泣きながら、かきくどきましたのに、貴方様は至って平気で、むしろ迷惑そうでした。

夫や子供を先に家に帰して、学友と逢うという口実で、もう一泊ぐらいでしたら、貴方様の積極的なお誘いさえあれば、なんともなりましたのに、貴方様と電話でお話しているうちに、私のふくらんだ胸は次第次第に、しぼんでしまいました。

私一人で大阪や神戸まで、来るということとは、もう二度と機会はないだろうと思うと、せめて、あと一回は、あの激しいSMプレイをやって写真に撮られてみたいと考えていたのに、ほんとうに口惜しい思いでした。

娘時代の私と、すっかり変わっていたのでさぞ驚かれたことと思います。でも、気持だけは少しも変わっていないつもりでした。

時々、私が告白を書いた頃の奇クをとり出しては、なつかしく読み返しています。

今頃になって、こんな告白とも原稿とも、或は貴方様に対するお手紙ともつかないものをお送りして、さぞびっくりされたことだろうと思います。

現在の私の生活は、平凡なものです。普通一般の家庭の主婦の暮しと少しも変わりはありません。時には、胸の中に、ぽつと火のつくように、過去の楽しかった思い出が、浮かんでくることありますが、それも長続きはせず消え去ってしまいます。

この原稿の書きさしが抽出しの下の方から出てきましたとき、私の身体中に、今までにない熱い血汐が、さわぎだしたのです。

もう一度でもよいから、大阪か神戸へ行きたい、と、そう強く願う私ですが、今の境遇では、とても無理なのです。それで、せめてもの慰めのために、この書きさしの原稿のあとを書き足してみます。

それから、あの最後の激しいSMプレイに我を忘れたとき、何枚かの写真をとられまし

たけれど、あの写真は、その後の奇ク誌上にも載っておりませんし、私も一枚も頂いておりません。もしお差支えなければ、二枚でも三枚でもお送り下されば、ほんとうに有難いと思います。

私は、あの時の写真を眺めながらあの時のことを、いつまでも思い出として胸の中におさめておきたいと願っているのです。

突然、とりとめもないお便りを差し上げますことを、お許し下さい。

昭和47年5月28日

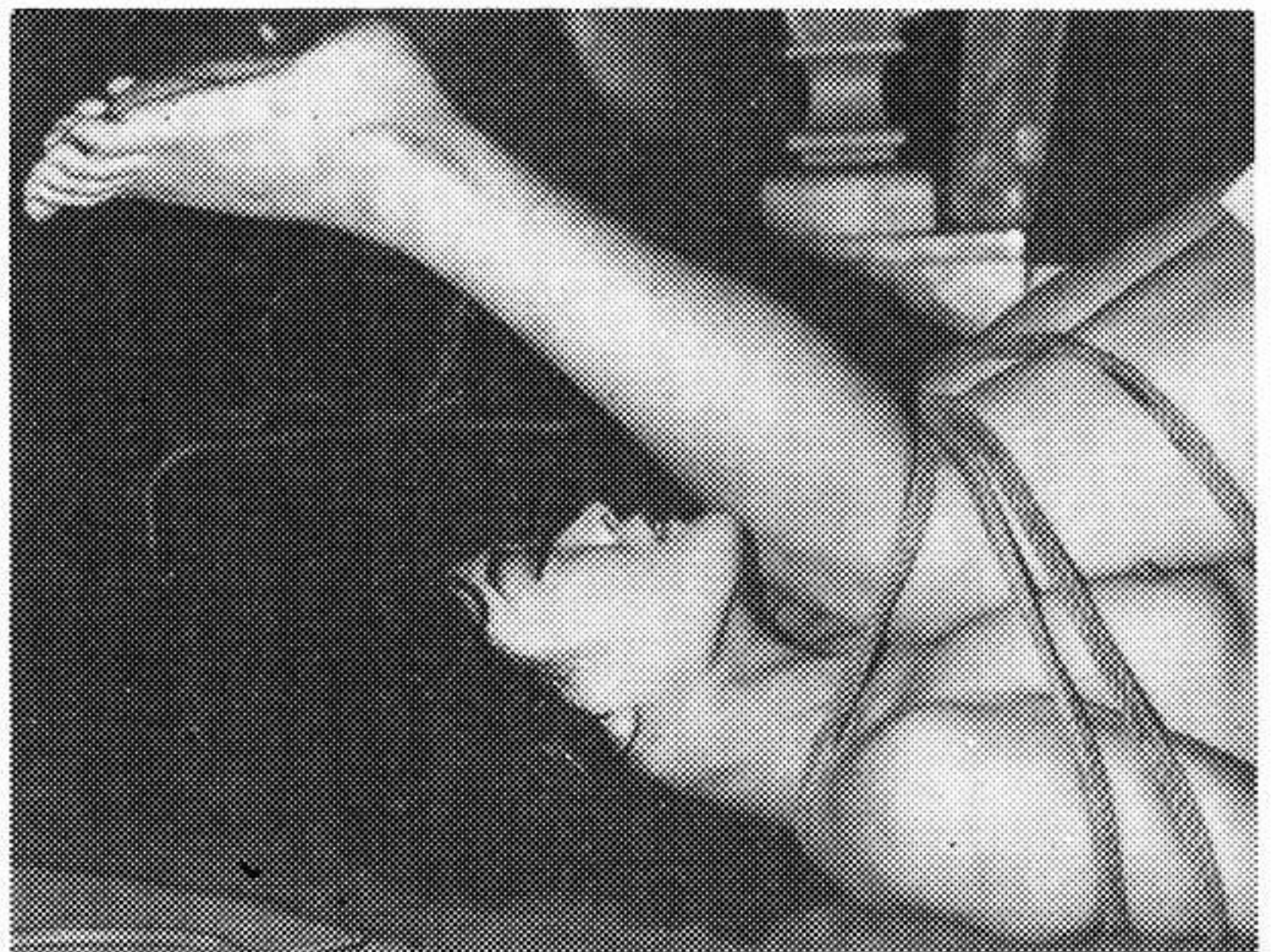
中河 恵子

塚本鉄三様

○

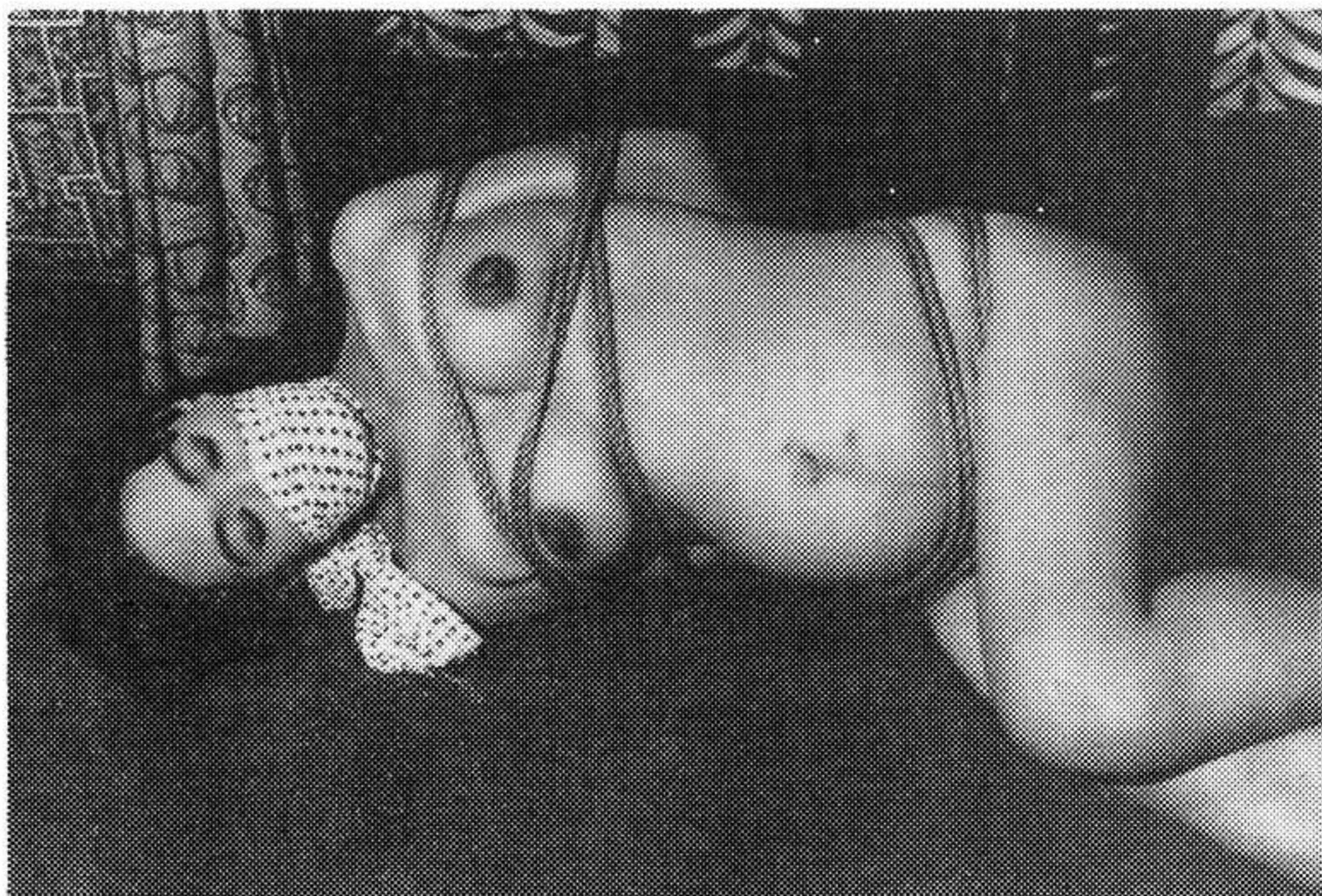
神戸の街の灯が、目の下にきらきらと輝いているのが、ほんとうにロマンチックに思えました。丁度、満二年の月日がたっているのに私にはまるで昨日のことのように、はっきりと瞼の中に残っています。

湯上がりのほてった肌に、開け放ったベランダから吹き込んでくる海の風が、ほんとうに快く感じられました。



縛られる——ということが、なぜ、このように私の心を浮々とさせるのでしょうか。

私はそのときの自分の気持を、今までも、はっきりと自分で掴みとることが出来ます。これからプレイが行なわれる部屋が、私に



としては、どんな立派な御殿よりも素晴らしい褥しとねに思えたのです。固い畳の上でしたが、その場所は、私にとっては何にも替え難い、快樂のベッドだったのです。

貴方様は私に対する責めについて、もうすべてのツボを心にくいまでに心得えておられました。最初の頃、私が「お上手なのね」と言いましたら、貴方様は、はにかむような笑みを浮かべて、「そうでもないよ」とおっしゃいましたわね。

でも、言葉とはうらはらに貴方様は私に対して自信を以て、お責めになられました。もう私の身体の骨と肉とが、バラバラになってしまいそうになるまで、徹底して、責められました。貴方様の一挙手一投足が、すべて、私の琴線に触れ、弱点といますか、急所といますか、それらが

すべて共鳴して私は身も心も悶えぬいたのでした。

私は生まれてはじめて、こんな気持ちになったのだという恐ろしい気持を味わいました。そのときどきのことは、私は偽りのない告白として、文章に書き、そして奇クの誌上に載せていただきました。

私は貴方様に最後に逢った日のことも、今あざやかに思い出すことが出来ます。

さすがに、長い間、ご無沙汰していましたが、お互いに初めのうちは、ぎこちないようでした。私が貴方様の耳元で悪魔の囁きを告げた、あの言葉が、お気にさわりましたかしら。

「私、結婚してから初めて浮気するのよ」という言葉は、これから行なうSMプレイに対して私の並々ならぬ決心を述べたつもりでした。だけれど、貴方様は私の囁きに対して一瞬ドキリとなさって、私の身体に手を触れられることを、ためられました。

これから、身も心も一つになって溶けてしまいうような激しいプレイに没入しようと思っていた私には、貴方様の心の動きは、ピンと敏感に感じられました。

全身全霊を投げうって、貴方様の前に、こ

の女体を捧げようと覚悟していた私のことですから、貴方様のためらいの心を打ち破るように、すぐ行動に移ったのでした。

ベランダ側のドアを全部、開け放ち、涼しい風の吹くにまかせて、私は自分の身体を思いきり開陳していったのです。

ライトが照らされ、カメラが向けられて、シャッターが切られる間、それが一つの間となって、私の快感を一層あふりたてるのでした。窓という窓を開け放って、明々とライトをつけるということは、その中に責められる私にとって、今考えても、ゾクゾクとするような、よろこびでした。

一気に私の身体を、もみくちゃにしてしまわないで、まるで猫がネズミを弄ぶように、長い長い時間をかけて、幾度となく絶頂感を味あわせて下さいましたわね。

その長い階段は、登っても登っても、つきない階段でした。私は思いつき泣き喚き、そして、今思い出しても恥かしいくらいの大きな声で、いろんな繰り言を、くり返し、くり返し、喋りました。

そんな私の声をテープにとったのを、五本もためられ、これを全部、聞こうと思ったら何時間もかかる——と言われ、その一部を私



に聞かせて下さったことがありましたわね。

あのとき、恥かしいからやめて、やめてと私が言いましたけれど、ほんとうは、もっと聞きたかったのです。夢中で発する自分の発声がどんなものか。でも、すぐプレイに入ってしまったって、途中で切られてしまいました。ほんとうに、あの頃は楽しかったです。

首すじから、足の先にかけて、じっとりとしじむように汗がふき、やがて玉となって、ころりころりと畳の上に落ちてゆくのが、自分でも、よくわかりました。

今日のプレイが、貴方様と最後のプレイになるかもしれないという思いつめた気持が、私を激しく燃え立たせましたが、心ばかりは

やりたっているのに、やはり二年、三年のブランクは、なんとなく、ぴったりにないものがありました。やはり娘時代の頃と違って、人妻であるという心の抵抗が、知らず知らずのうちに影響したのでしょうか。

私は別にそうは思いませんでした。夫の眼を盗んで浮気をするということに、むしろ激しいスリルをさえ感じていたのです。

ようやく黄昏の迫ってくる神戸駅の前で、貴方様のお車を待っていた私。運転の経験のある私は、車の停め易い場所は直感的によくわかりましたので、中央をはずれた歩道沿いに立って待っていました。

私は少し早い目に来ていました。貴方様の白い車が約束の時間きっちりにつきり込むようにして、私の立っている前に停まったときは、私は思わず、すがりつきたいような懐かしさに身体中が打ちふるえておりま

した。

二年前に、書きさしておいてあった原稿とは、まるで違った文体で、まるでお便りのような書きぶりになってしまいましたけど、今の私としましては、もうこう書くより仕方がないのでございます。

私は自分の毎日の生活のことや、自分の気

持を洗いざらい、車の中で喋りました。今まで貴方様にさえ、かくしていたことも、正直に話したつもりです。

それなのに、貴方様は、ただ、フンフンとうなずいているだけで、何もおっしゃいませませんでしたわね。ひょっとしたら、あるとき喋ったことを、写真と一緒に記事にされるのではないかと、ずっと奇クを見ていたのですけど、とうとう、何も、お書きにはなられませんでした。

ようやく暮れかかろうとする神戸の街のたそがれを、車で疾走した、あのとときの泣きたいようなロマンチックな気持が、私をして、あんなになにもかも、喋らしてしまったのでしよう。

貴方様は、私と夫との生活に、なんか一向に興味がないというふりをなさっておられましたわね。そして私が今まで一度も言わなかった祖父の実名まで、遂に喋ってしまったのです。新聞紙上をごらんになっている方なら、その名前は、殆どの方が知っていられるくらい、著名でしたから。



政界の大物と言われ、幾度となく大臣の椅子も経験し、いつの選挙でも不敗を誇っていた祖父の名を口にしたとき、私は貴方様の反応を知りたかったのです。でも、貴方様は至って平静でした。恵子とプレイするのが、楽しみなんだ——という顔つきで、私の告白を聞いていられるばかりでした。

それからホテルに着いてからのことは、くどくどと書く気は致しません。先刻、貴方様がよく御存じのことですから。

でも、でも、なんとしても、私の気持だけは伝えたいものだ、プレイのことを少しでも詳しく書きたいと思いました。

貴方様は以前と少しもお変わりになっていませんでしたが、プレイの最中、パイプをお出しになったことが、変わったといえは変わったことでした。以前でしたら、決して、そんな小道具はお使いになりませんでしたもの。

私を責めて責めて責め抜いて、まるで放心したように、ボロ屑のようにしてしまわれて



も、貴方様はまだまだお元気で、遅くいらっしやいました。私の敏感な女心は、やはり以前とは違う何物かを、貴方様から鋭く感じとっていたのです。

私の今住んでおります街は、山に囲まれて空気のきれいな地方都市です。都会のようなスモッグもなく、澄みきった空からは明るい

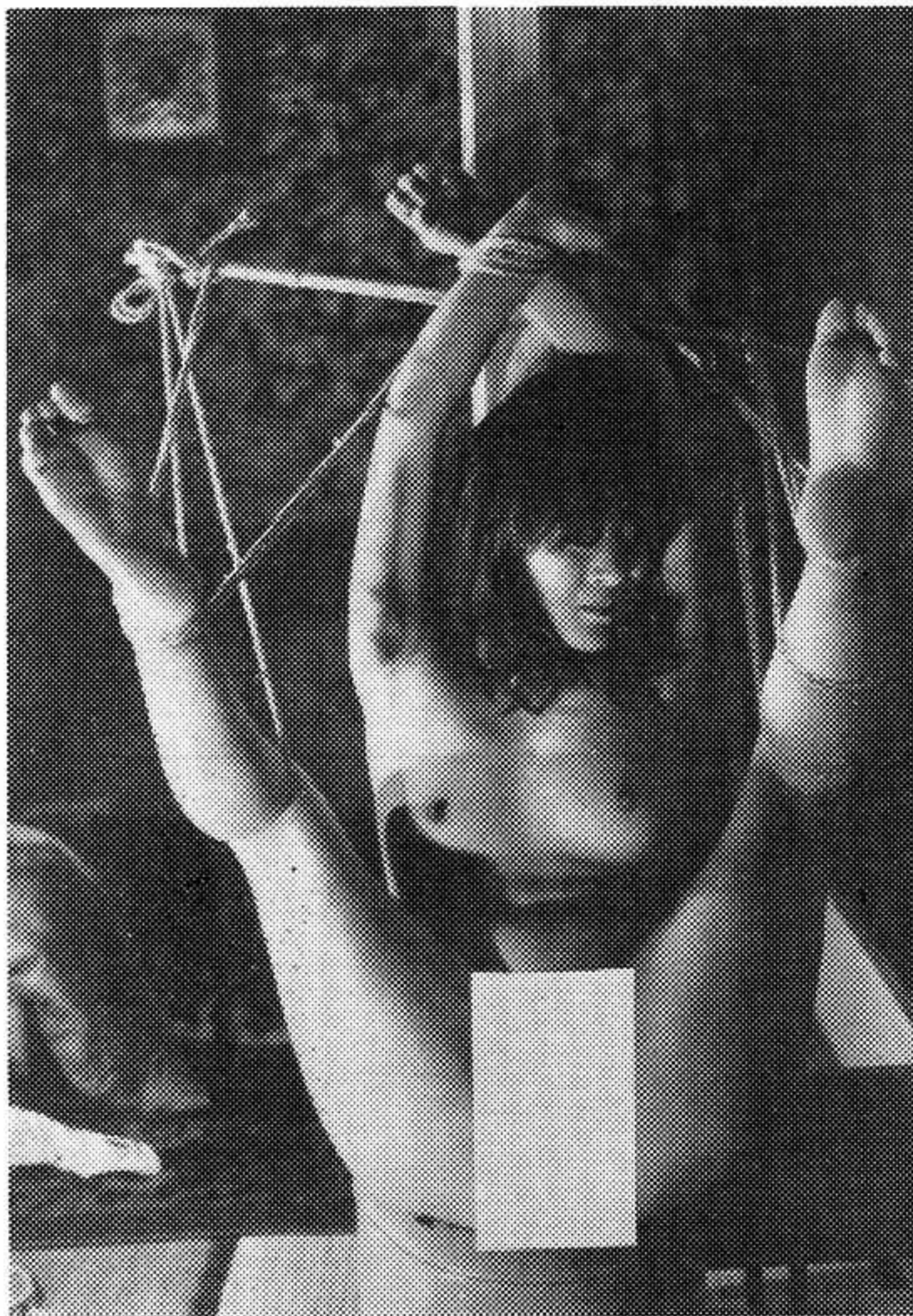
太陽が、さんさんと降りそそいでいます。人情も、こまやかで、暮しよいところです。生活には何不自由もなく、夫も私を大切にしてくれ、私も一応は満足しております。

でも、私は時折、西宮インターチェンジ附近から眺めるあの都会の明るい風景を、忘れることが出来ません。

貴方様に始めてお逢いしたときは、たしか私は二十三才だったと思います。それが今では、もう三十に手の届く年になってしまいました。自分では、まだまだ若いつもりでおりますが、赤いウェット・スーツを着込んで琵琶湖で泳いだ頃の元気はなく、あの頃のことを思えばずっと落着きました。なんといっても、もう二児の母親ですものね。

上の子供をお腹に孕んでいました頃、臨月間ぎわまで、SMプレイに興じておりましたのも、今から思えば夢のようです。

貴方様が私を責められるテクニックという、



ものは、誰も真似の出来ないものだ、私はこの頃、つくづくと感じました。いくら、私が、そのことを口や手ぶりで教えたところで私の気持に、ぴったりの責め方は、誰も私に施しては、くれないのです。

ましてマゾ女というものは、自分から、こうして欲しいということは、あからさまに、

言わないものです。そんなことをしたら、責められるという気分が、いっぺんにこわれてしまいます。その点、貴方様は、私のそんな気持を心憎いまで心得ておられて、火に油をそそぐように、燃え上がらせてしまわれるのです。

あの日も、部屋の中で一段高くなったところ

ろに全裸の私を縛り上げて正面向けてころがされました。ライトに照らし出されて、私はまるで舞台の上で、さらしものになっているような晴れがましい気持でした。

真正面から私に対して狙いをつけている三脚の上の三台のカメラが、私には、まるで見物人のように思われて、一層、被虐心が、あふりたてられました。

あのときの写真が、あのときの私のすべてを如実に物語っています。それに、何故、あのときの写真を発表されなかったのでしょうか。余りにも生々しいものだったからなのでしょう。

私は自分の原稿の書きさしを、二年ぶりに机の抽出しから見つけだして、はからずも、あのとき写していただいた、かずかずのプレイフォトのことを思い出しました。

書きさしの原稿の続きを書きつこうという気持でペンを持ちましたのに、とりとめもない手紙のようになってしまって、申し訳ありませんでした。

もう二度とお逢いする機会もないかとも思いますが、もし御迷惑でなければお便りだけは、これから、まだ出させていたただきたく思っております。

カット・須坂 旭



(一)

「ね——もう、これっきりよ」
「これっきりか。よかろう。それも、また、よかろう」

「指切りして」

「少女趣味だな。確かに約束したぜ」

「ありがとう」

「お礼を言うのは、まだ早いぜ。君は確かにオレを好いているんだろ。君が思うように果たして別れきれるかな」

「別れきれなくても、別れなければならない

……三部作・縄のある人生模様……

不

毛

の

愛

——「第一部」きりぎしの花——

久留木 栄

のよ。そう思ったの」

「そうかな。最初から、ぼくは君を幸福にはできないと言っただろ。それを承知の愛だった。今になって泣きごとというのは、よそう。別れるの、別れないのというのは時の成り行きにまかせるより仕方ないんだぜ」

「そうよ。それはよくわかってるワ。だが今は、これっきりで別れたいと思うの」

「そうか、じゃ、そうしよう。そして、きょうが最後なら、派手にやろうよ。君が別れると言いだしたのだから、きょうの主導権は、ぼくが、にぎるよ」

「いいわ」

「念を押しておくが、いつもとは違うぜ。優しい池田さんでなく、みにくい池田君でいこうと思う。きらわれた方が、別れやすいだろう。覚悟しておけよ」

「……」

「ま、一生の記念には、なるよ。さ、握手」
則子は細い手を出した。池田は、その手をつかると、にぎった。褐色の節くれだった腕だったが、指先は細くて、長くて、しなやかだった。「この指にダマサレタのだわ」と則子と思う。記者という職業の、にじみ出た

手だった。

池田大介は、そのまま則子をはきよせた。ミニチュアのイスが二つ向かいあい、その間に小さな机があった。その机の上のお茶を、こぼさないように左回りに体をかわして、迎

熱いキス。

則子の胸が高鳴るのが大介には、よくわかった。

これが五回目の逢う瀬である。仕事柄いろんなパターンはあっても、隔離された部屋に入ってから最初のシーンは、いつもキスで始まった。それにしても人間の愛の姿は変わらないものだ——と大介は思う。それに変化をつけようと思っていた。その矢先、則子からの電話で「会いたい」と、いつてきた。

「会いたい」は、いまや「愛したい」に変わっていた。ただ何となく電話の具合から緊張が感じられた。それが二人になったとたん、別れの宣言である。その瞬間、大介に、ある考えが、ひらめいた。則子が別れたいと考えているのは、何も、いま初まったことではない。最初から——逢ってはいけない異質の間だったのだ。それが結ばれる。そこに不

理があった。家庭といい、育った環境といい現在の仕事ぶりからして、水と油なのだ。だから、則子が大介にひかれたのはわかるとしても、交わってはいけない平行線だった。それが結ばれてしまった。この結び目が、とけるかどうか——そう考えたとき大介は、女を縛ってみたいと思った。絶対、解けないように縛りあげる。それを、どうして女が解くかこの謎を解明したいと思った。

一方、則子は、まるで泥沼のような愛の迷路に踏み込むのが、こわかった。逢うたびに大介が巨大なバケモノに見えてきた。考え方にしろ、愛情にしろ、則子の尺度では測れない人が大介だった。則子は、教育一家の末っ子に生まれ、兄や姉たちは皆、一本立ちして家庭を持ち、幸せな生活を送っていた。則子も、それを夢見ていた。だが、ひよんな機会から大介を知った。その日から則子の苦悩は始まったのである。

則子は小学校の国語の先生をしていた。県の図書館コンクールがあつて、則子の学校は入賞した。その取材に来たのが、地元紙の記者、池田大介だった。

「どうも、場ちがいな取材ですみませんけど

……」

と、てれかくしに頭をかきながら、大介は破顔一笑した。黒い顔に歯が白かった。ボウボウにのびた髪、広い額、太い鼻。そんな造作の中だけが生きていた。

「あら、新聞にのせるの。主任さんが、いないの。困っちゃったな」

則子が、そういうと、

「あら、あなたも代理ですか。実は、ぼくも代理です。遊軍の人がいなかったもんで。こんなブライトサイドの取材なんか一年に一度くらいしかないんですよ。『サツ回りの休日』というわけですか、ね。だから、簡単に説明して下さい」

と大介は、おがむようにして言った。その態度に、すっかり魅了されたのである。

則子の不幸は、そこから始まったといつてよい。

つぎに則子が大介に逢ったのは、受け持ちの子供が学校帰りに交通事故死したときだった。教え子の死に動てんしている則子に目をくれず、大介の姿は目を見張るほど行動的だった。両親の話、むざんにちらばったランドセルの写真、死んだ子の顔写真と、まるで八

面六臂の活躍である。警察官との激しい意見の交換。それは、もの言わぬ死者の代弁者ともとれる言葉だった。それから相手の運転手の話を聞きながら、現場の状況を問いつめて行く気迫。全く則子には異質の人のように見えた。大介は、それでいて、細心の心遣いはしていたのだ。最後に則子の前に来た。

「迎さん。担任は、あなただったのですか」
「はい、そうです」

「びっくりしたでしょう。でも、いまは泣いてはいけませんよ。ここに横断歩道があれば事故は防げたかもしれませんね。歩道橋ならなお、いいでしょう。貴女には、まだ事故の内容が全部わかっていないかもしれません。ただ言えることは、一刻も早く自宅に帰ってお母ちゃんの顔をみたいという子供の気持。それが無理に県道を横切らせたんでしょうね。帰路は学校の責任ではありませんが、こうした事故をなくすには、やはり環境を改善していくより、ほかありません。迎さん、貴女はそう思いませんか」

「それはもう、そう思いますけど、そんなことが実際できるものでしょうか」
「そう弱気になつては、いけません。幼い生命が犠牲になったのですよ。皆が力を合わせ

声を大にして訴えれば、事故を防ぐ安全施設は、とりつけられるでしょう」

と。大介の目は、図書館コンクール入賞のときよりも、澄んでおり、その澄んだ目の奥で、赤い焰が燃えていた。

その日は、そのまま別れたが、翌日の記事を読んで思わず則子は、うなつた。事故で子を亡くした父母の悲しみを中心に安全施設の不備を訴える内容は、競争日刊紙と比べても抜群のできばえで、学校でも評判になった。

「あのときの記者さんよ」

「そうよ、迎先生の気持が、よく出ているワネ」

「これなら校長先生もホツとしたろう」

という声を聞くと則子は胸の奥がキューンと、ひきしまるのを覚えた。そして、その日の午後、思わず大介の社に電話を入れてしまった。大介は社にはいず、警察の記者クラブにいた。

「いや、おほめにあずかってありがとう。どうです。酒のみにつきあいませんか。珍しく暇なんです」

「酒のみ、コーヒーなら、つきあいますワ」
「コーヒー、まあいいでしょう。じゃ、いまから三十分後、喫茶、シャ・ノワールで」

と大介の電話は切れた。

これが逢いぞめだった。そしてコーヒーから酒になり、幸い事件もなかったので、大介を送って、大介の下宿に回っていったのが運のつきとなった。

「なぜボクらが酒をのむか——貴女に説明する要もないと思いますよ。きのうのことを考えるといいでしょう。ぼくらは生身の人間です。原稿かくまでは必死ですが、それがすんだあとの空しさ、寂しさは、言葉では現わしません。ぼくの下宿に、来て下さい。新聞に公表できなかった、きのうの事故の写真ができてます」

「未公表の事故写真？」

「そうです」

その魅力に則子は抗しかねた。そして大介の下宿で見せられた教え子の無残な写真は、則子には刺戟が強すぎた。そして、すすめられるまま酒を過ぎ、気づいたときには大介に抱かれていた。

大介は、いきなり抱きよせてキスをした。そして強引に組みしいた。そこには理屈も何もなかった。炎があった。澄んだ大介の目の奥にあった赤い炎が、ぼうぼうと音をたてて燃えあがり、則子を焼きつくすのを知った。

事が終わったあとで大介は、まるで別人のようにクールな人間に生まれ変わっていた。一方、則子は放心状態となっていた。何か叫びたかった。だが何も言えなかった。

そして二度目は、それから二週間後、今度も電話をかけて、せがんだのは則子だった。あの時は偶然だったのだ。愛を確かめたいと則子は念じていた。それにたいし大介は、ぼくは、とても君を幸福にできる人間ではないだから、諦めろと冷たく突き放した。それでもいいとせがんで、やっと燃えだした愛だったが、愛する事が、かくも苦しく、かくも激しいものと則子に自覚させるだけで、大介は案外、冷静そのものようであった。こうして二人のつきあいは三回になり四回になりついに五回目を迎えたのだ。これ以上あったら、もう收拾がつかなくなる。則子は、ぎりぎりの線で五回目にかけたのだった。

(二)

まっ白なブラウスに地味な褐色のタイトスカート。則子の服装は最初、逢った時と同じ目立たない清潔さを基調としていた。しかしブラウスに大幅なフリルがついているのがイキで、大介の目に、まぶしかった。一方、大

介は、ツイードのグレイがかったウグイス色のラフな背広を着こなし、シャツはワイシャツでなく、同色系統の化繊のトックリシャツで、いかにもスポーティだった。

大介の手先が、しなやかに動いて、則子のブラウスの背中のホックをはずしスカートのカギホックをとり、小さなチャックを、ずり下げると、則子は幾分からだを固くした。大介は、その感触を確かめるように、背中をさすりながらブラウスをぬがせ、タイトスカートをとった。それからスリッパ、ウエストニッパと、はずしにかかる。『待って、私にとるワ』と言ったのは、確か三回目だったかしら、四回目だったかしら、と則子と思う。その回想を暖めながら、大介の手は進む。『きょうはボクがいいというまで、ボクのするようにまかせときなさい』

と大介は着物をぬがせながら、小声で則子の耳に、ささやく。それが愛のささやきなのだ、と、則子は自分自身に言いかけせる。それでも裸にされるのは恥しかった。ブラジャーが胸と肩からはずされ、ふんわりと赤いじゅうたんの上に落ちる。その白さが自分の裸身のようにみえる。

まっ白な胸に、わずかにもりあがって、淡

いピンク色に、いきづいた乳首が、大介の目の前に現われた。大介は、それにわずかに口をつけたが、すぐ顔をはなし、じっと則子の上半身を眺めた。

「きれいだな。いままで、どうして気づかなかったんだろう」

そういえば、これまで、逢う瀬を楽しむ余裕など全くない二人だった。大介は二十七歳、則子は二十四歳。かけ出し記者とヒヨコの先生である。だから、愛し合うにしても経験には乏しいハズである。だが、それは則子の場合には、あてはまったが、大介の方は必ずしもそうではなかった。彼自身、波乱万丈の生活だったので女は、たくさん知っていた。だが則子みたいなケースは初めてであった。たいていはバー、キャバレーの女であり、愛し合うにしても羞恥心は、あまりなかった。それだけに則子を美しいと思った。美しいと思ったがために、無理なことでもできかねた。半面、無残に踏みつぶしてやれという気持と、この女で何とか自分も、まっとうになれるのでは——と考えた大介であったが——もうこれきりといわれると男は残酷にならざるをえない。それが、いつもの、いきりたつ心を抑えた。女はその残酷さを優しさと誤解する。

大介が「どうして気づかなかったのか」とつぶやいたのは、女の美しさに気づかなかったのか、男の残酷さに気づかなかったのだろうか、大介の言葉は意味深長であった。だが則子は、それをひたすら、よいように解釈し幸せが胸中に、ふくらんだ。

その幸せの瞬間を巧みにについて、大介は最後の布を、はぎとった。そして、ゆっくりと則子をベッドの方に運んだ。

ベッドは豪華なダブルベッドだった。都心から余り離れていない閑静な丘に建てられたホテルに來たのは、これが二度目である。この前のときとちがって部屋は落ちついたムードがあった。王朝式という家具がそろっていて、夢の饗宴にふさわしい場所だった。

「そんなに固くなっちゃ、ダメじゃないか」急に、突き離すように大介はいうと、ベッドの上に則子をほうりなげ、上着をぬぎすすると、いきなり則子にとびかかって、抱きしめた。

「だって、恥かしいもの」

「もう五回目だぜ。隅から隅まで知ってもいいハズじゃないか」
「だって、だって」

「甘えるな」

大介と則子は、三、四度、けものようにまつわりつき、激しくキスを交わした。

「だいぶ、固さがとれたかな。肩をもんでやろうか。背中を見せろよ」

「いや」

「じゃ、あおむけになり、じっとしてろよ」

「いや」

「じゃ、どうするのだ」

「勝手にoshi」

そういいながら則子は、ひざをかかえるようにして、まるまってしまった。

「困った人だネ」

大介は木綿にピンクの花模様をあしらったホテルのユカタをとりあげ、ノリの音もさわやかに拡げて、則子の背中にかけてやった。「さあ手足を伸ばして、ゆっくりするんだ。着るのは、まだ早いよ」

いわれるまま、則子は安心して手足を伸ばした。その背中の上に坐るようにしながら大介はユカタの上から、ゆっくりと則子の肩をもみだした。

「ホラ、体が、こちこちといったろう。こんなに、こっている」

「うそ、あんなに、いって……。あっ、くす

ぐったい」

大介の手が思わず則子の首すじにふれたらしい。

「そら、そら」

それが呼び水となったのか——大介は、わざと脇腹を、くすぐりだした。

「あっ、やめて、やめて」

則子は楽しそうな嬌声をあげ、手を背中に回して大介の手を、にぎろうとした。大介は脇腹の手をはずすと、巧みに則子の両手首をにぎった。

「この手が邪魔だな。ユカタのヒモで縛ってやろう」

「いやーん。バカ」

「バカで幸い」

と大介は、そのまま軽く縛った。それから別の男物のユカタのヒモをとりよせると、足首も、さっと縛り合わせ、くるりと則子をおおむけにした。

「どうだ、降参か！」

「降参」

「降参なら、ほどこいてやろう。その前にオナカにキスだ」

「バ、バカーッ」

大介は、ゆっくりと則子の体を楽しみたか

「だったが、そうせず、ヘソのそばに軽くタッチしただけで離れた。」

「自分で、ほどけるかな」

「ほどけるワ」

「じゃ、ほどこいてユカタを、着ていらっしやい。ここらで俗塵を払うためフロに入ろう。先に入ってるぞ」

「あら、ずるいワ」

則子は素晴らしいながら、手首をぐるぐる回していたが、ヒモはすぐに、とけたらしい。大介がそのように縛ったせいもあって、大介がシャツ類をぬいでいるスキに則子はフロに消えていた。

(三)

「何だ！ 君が先に入っていたのか」

フロに一步、足を踏み入れたとたん、大介は熱いお湯の一せいの攻撃を受けた。

「ずるいぞ。いたずらをする、シリをたたくぞ」

「いーだ」

則子は先ほどの出来事で幾分、調子にのっているらしい。

「よし、そんなことをすると、本格的に縛るぞ」

「縛ってもいい」

「ほどこないように縛るぞ」

「縛っていい」

と則子は湯舟に肩までつかって指で水鉄砲をつくり、大介に向けていた。

「降参だ。降参、降参」

と言いながら大介は湯舟に入り、則子をヒザの上に抱いた。

「どうだ、気分は」

「最高よ！」

則子は、素晴らしいながら大介の鼻の頭を小さなヒトサシユビでついた。

「こいつ、つけあがって」

「さあ、どうじゃ」

大介はその手をつかみ、後ろ手に曲げた。

「降参、降参」

則子は、すぐそういった。大介は、その手を離し、ぐると周囲を見渡すと、フロの片隅にビニールの洗濯干し用のロープが張ってあるのが見つかった。

「あれで縛ったら、どうする」

大介は真顔で聞いた。

「きょうは、とにかく、縛りたいんだ」

「本当？ じゃあ、縛っても、かまわないワよ」

「痛いぜ。今度は、さっきのように、ほどこるようには、してやらないから」

「いいワ！ また自分で、ほどこから」

「ほどこないように縛るんだ」

「ほどこいて見せる」

「じゃ、縛ってやろう。だが、あのビニールロープでは、いやだ。本格的に則子を縛るのだから、新品を使いたい。きょうは、そのつもりで買ってきていたのだ。どうだ、それでもいいか」

「いいワ。好きなようにして」

「じゃ、縛ろう」

大介はフロから出ると、カバンの中から買いたてのビニールロープ三本を持ってきた。

「がん字がらめにするんだ。まずロープをあたたためよう。そうでないと柔らかくならないから」

大介は、わざと偽悪的にロープを則子の前に並べ、湯舟につけた。それから自分も湯舟に入り、ひとしきり則子を抱いて、ヒタイにキスしたあと、則子をうしろ向きにし、両手を背中に回した。白い則子の手首に濃いピンクのロープが、きっちり巻きついた。左手首と右手首をかさね、一番細いところに二巻き三巻きして締めると、手首と手首の間に口

ロープをとおし、十字型に縛り上げた。そのあとで左右の紐を男結びにしてしめあげると、手首縛りは完結した。

「これから面白くなるんだ」

と大介は則子を前向きにさせ、首の後ろで結び玉をつくった手首のロープを左右にわけ、首の前に回して、そこに結び玉を、また作った。それから五センチほど、ずらして、また結び玉をつくり、さらに前に垂らし、乳の下あたりで、また一つ、結び玉をつくったそれからヘソの上で結び玉をつくり、余りを背中にして、背中で男結びに仕上げた。

一本で、これが縦縛りのなわである。

「まるで八百屋お七のようにするのネ」

「一世一代の縛りだからネ」

大介は別の、今度はグリーンの縄を二本とすると、それぞれ二つに折り、胸の中央の部分の赤いロープに、そのグリーンのロープの中央部を結びつけた。その左側二本を、まずと、左側の乳房の上と下を回して腕の下をくぐらせ、背中の左側のロープに回し、ぐいと締めあげると、前のロープは、わずかに左にかたより、乳房の上下にくいこんだ。二本の線のロープは、背中のロープを激しくぐくの字に曲げ、その反動で手首が、ぐっと背中

に、もりあがってきた。そのくの字の先端をワキの下あたりまで、もってくると、線のロープを今度は二の腕に回して、一応きっちりとした。同じやり方で右側のロープをしめ終わると、左右対照の変型菱型ができた。

大介は警察の鑑識課で女の縛り写真を見てそのファンにもなっていた。それだけに縛り方は、ずいぶん知っているつもりだったが、実際にするのは始めてだった。だから写真と現実とは、ずいぶん違うと思った。

余った緑のナワの一方を再び胸から首に回して止め、さらに手首にまわすと、ちょうどそこでナワの端がきた。残りの一方は腹部のロープにひっかけて締め、背中に回して止め余りを手首のナワにかけて緊縛した。

「さあ、どうだ。これでも解けるか」

「とけるワよ。いずれ……いまは、とけるわけじゃないの。それに痛いワ」

「痛い？ それは結構。とけないなら、なお楽しいや。まだまだロープは、たくさん買っているんだ。だがフロの中で使えるビニールは、この三本だけだ。さあ、今から君の体の洗濯だ。君のからだを洗うんだ！ 湯舟から出るんだ」

大介は則子を追いたてた。

縛ってよいといった手前、則子は、すなおにしていたが、やはり心配そうに、しかも、悲しそうに、本当に痛そうにしていた。しかし緊縛に同情は禁物。風俗雑誌に、そう書いてあったと、気をとり直し、大介は則子を床の上に腰を下ろさせた。そしてタオルに石けんをつけると、

「目を、つぶれ」

言いながら、いきなり顔にこすりつけた。

「あっ！ 乱暴は、よして。もっと、やさしくしてえー」

「よし、よし」

言いながらも大介は、何となく優位にある自分が、うれしかった。体中に石けんをつけて、こすると則子の膚は、じっとりとして弾力があり、つるつると、よくすべった。

「苦しいワ、苦しい。とにかく顔の石けんをおとして。目に、しむの」

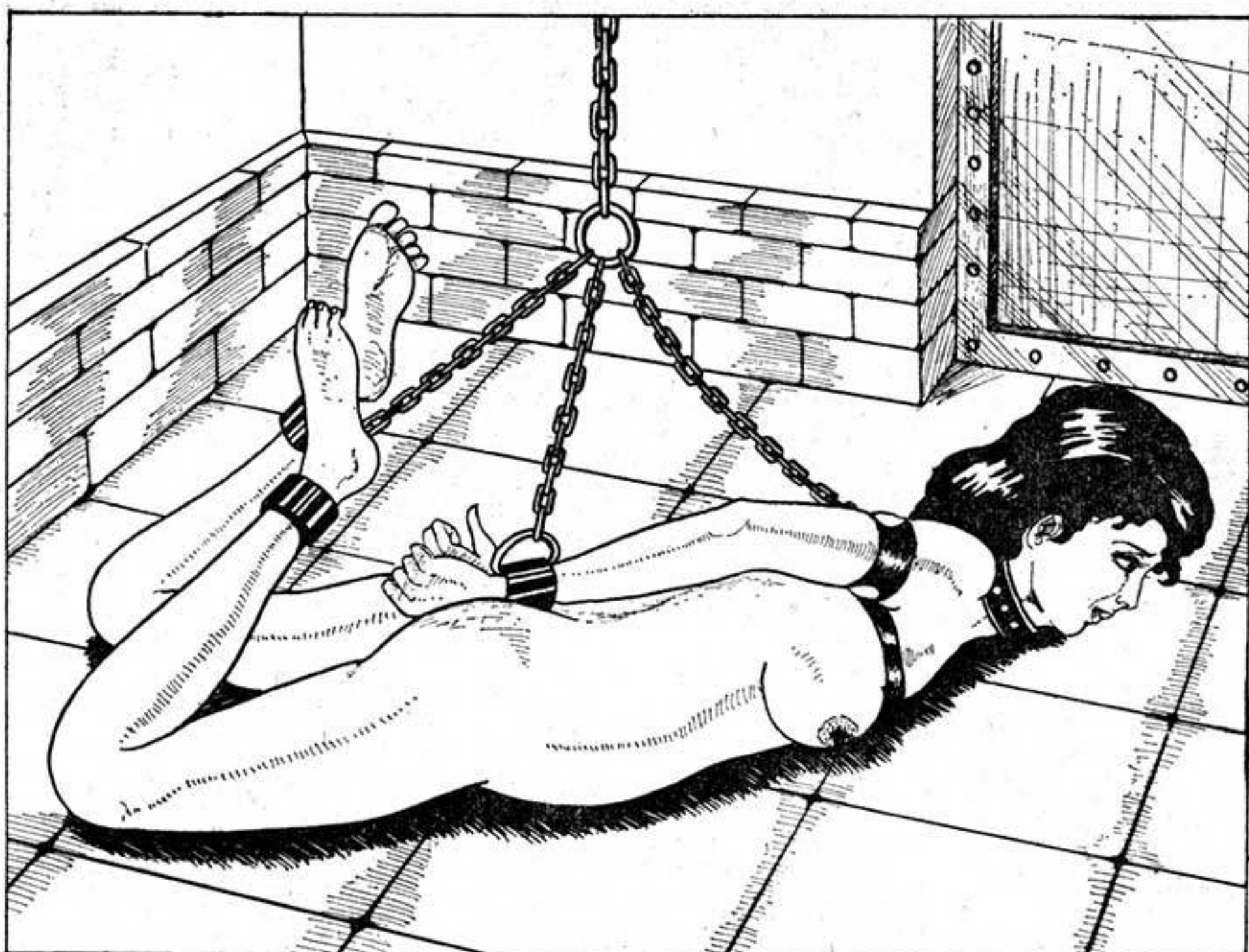
「よし、よし」

と別のタオルを湯にひたし、顔の石けんをとってやると、それといっしょに化粧もはげまったく別人の則子が現われた。

「まるで、別人じゃないか。これが恋人の素顔か」

「いやな人。まるで、暴君ね」

イメージギャラリー『冷ややかな新居』飯田ひろくに



「暴君！ いや、ついでに、レスリングでもするか」

と大介は則子を床の上に押し倒した。自分のからだじゅうにも石けんをぬたくり、則子の上ののつた。則子の体が、つるつるして大介には、つかまえておろのないナマコのように思えたが、ありがたいことに体のところどころに手がかりがあった。則子のからだじゅうを締めつけた縄が、ほどよく大介のからだを摩擦し、大介のすべり落ちるのを支えてくれたのだ。左手を床につき、右手で則子の乳房を、ゆっくりと、もみあげた。

「いやーん、いやーん。こんな恰好で」

といていた則子の甘い声が、やがて切ない悲

鳴に変わってきた。大介は力が体中に充満してくるのを知った。

(四)

「まだ、ほどこいてくれないの」
あれから、どのくらいたっただろうか。三分、五分、十五分。さもなくば永遠。そんな感じのする、ひとときだった。

「ああ、まだだ。君が解くまでダメだ」

「もう降参。心から降参といっているのよ」

「ダメだ」

「ひどい人」

「何といってもダメだ」

大介は天井をみていた。天井は鏡張りであった。その鏡の中に則子がいた。豪華なベッドの上に大介の方を向いて寝ていた。フロから、かかえあげられたのだ。くの字なりになって窮屈そうに寝ていた。フロから上げられたとき、最初あお向けに寝ていた。しかし手が痛い、そんなポーズになったのだった。その則子の前で、大介は天井を向いて寝ていた。腰から下は白いカバーのかかった毛布を二人とも着ていた。

「縛られて愛されるなんて二度とないぜ」
「二度とされて、たまるものですか」

「どうかな。君は愛の本質を知らないんじゃないか。もっと真剣に愛というものを考えた方が、いいんじゃないか。君は恐らく、ボクが愛した最初の人間が君だと思っているかもしれない。しかしボクは、そんなことは、どうだってよい。最初だろうと最後だろうと、愛は不変だと思っている。君は、まだ愛は美しいもの、きれいなもの、優しいもの、素晴らしいもの、とっているかもしれない。だがぼくにいわせれば、愛は苦しいもの、呪わしいもの、わずらわしいものだ。イギリスの詩人キーツはザ・シング・オブ・ビューティ・イズ・ア・ジョイ・ホーエバーといった。

The thing of beauty is a joy foreverだ。

「美しいものは永遠なり」という意味だ。これは彼の初めての詩エンディミオンの冒頭の句だ。しかも、それはふえることはあってもへることはないというのだ。いまの君には、よくわかるだろう。君の愛というものは、いままさに、そんな段階にあると思う。ところで同じキーツでもオード・オン・ギリシアン・アーンになると、ビューティ・イズ・ツルース。ツルース・イズ・ビューティといっている。日本語でいうとギリシャのカメの頌歌の中で美は真実なり、真実は美なりといってい

る。真実とは何か。古ぼけたカメの現実が、そこにあるだけではないのか。わかる人には美しいかもしれないが、わからない人には美ではない。真実というものは決して美しいものではない。むしろ、みにくく苦しいものだ。それが真実なのだ。そこに美があるというわけだ。君がボクから逃げたいといった。それは真実だ。ボクも君を逃がしたい。だが縛られている今、君は逃げられるか？ オレの愛は君を破壊するかもしれない。愛とは、そのナワのように、しつようなものなのだ。いままで君には、いっさい、ぼくの過去について語らなかった。だが君はボクの家で、交通事故で死んだ無残な教え子の写真を見た。あの残酷な現実。それに対応する処し方に愛はないというのか。そこに愛を見いだすための生活、そんな生活があるのか。異常な世界の中で暮らしているボクには平凡な愛より異常な愛がいい。いままで愛した女は平凡な女ではなかった。商売女だ。それでいいと思っていた。だが、いまは違う。ちがっても、もうボクの愛の本質は変わらない。清純なものに憧れもしないし、また、それを求めるため、後戻する気もない。新聞記者になったその日からもう子供はいらない。地獄を友としようと誓

ったボクに、そしてそのように精神や体をつくりかえたボクにとって、君の出現は、むしろ地獄の愛そのもの。ボクの方が逃げたいと願ったくらいだ。君が、わかってもらえなくても、いい。ボクは、そう思っている。だから断乎、ボクは君を苦しめる。そのためにヒドク縛った。それでも、まだ不満足だ。君が泣くまで、まだまだ縛りあげたい」

大介は一気に言った。

自分の言葉に、自分で激しているようだった。則子は、だまっていた。涙が一筋、その頬を伝わっていた。だが、大介の振り向く気配を感じると、則子は顔を下に向け、シートで顔をふいて素知らぬ顔をした。

確かに大介のいうとおりだ、と思う。だがとても則子のついて行ける範囲ではない。縛られることは、今の自分にとって何であるのか——考えることは何もなかった。大介は考えよというが、考えなくても愛していることに変わりがなかった。優しく愛してもらえれば、それだけ離れ難くなる自分。そして、こんなにひどい目に合わされても、きらうことのできぬ自分が、みじめだった。

「ねえ、もうほどいて。本当に降参よ。ねえこんなに頼んでも、なお、いじめるの」

「ああ、いじめるよ。ほどこないといっただろう」

「じゃ、どうしても、ほどこないの」

「そうだ」

「口惜しいワ。口惜しいけど、もう則子は我慢ができないの。これ以上すれば、泣き出してしまふワよ。ね、泣かないように口も縛って。体中をメチャメチャに縛って。目も縛って。そして、殺して！」

「殺してか。よし、殺してやろう。口を縛って、足を縛って、それからイキをとめて」

「本当に殺して。ヘビの生殺しは、いやよ」

「わかった」

といって大介には殺す気は毛頭なかった。どこまでこの女は耐えうるか。それを知りたかった。それ以上に残酷に、この女のみじめな姿を記録したかった。それは新聞記者のゴウかもしれないかった。

「殺す前に、したいことがある。君のその姿を写真に、とっておこう」

「写真に。やめて！ そればかりは……」

「バカ、泣いても、さわいでも、どうなるものじゃないんだぜ。死ぬのなら平気だろう」

「でも……ね、そればかりは」

則子は、むっくりベッドの上に起き上がり

必死で哀願した。そうされれば逆に写したくなるのが記者根性である。

「うるさいな。ま、ねてろよ」

大介は強く押し倒し、取材用バッグから綿ロープを、とり出した。

「これで、どうするか知っているか」

「また、縛るのでしょ。もう縛るところないじゃないの」

「それが大ありさ。まず、足さ。それから頭だよ」

「ひどい人。ほんとに泣き出すから」

「泣き出したら、テープレコーダーを、もってくるかな！」

「まあ、いまいましい」

則子は、そういうと強く歯ぎしりをした。

そしてあきらめたのか、全身から力がぬけていくのがわかった。大介は綿ロープの一端をベッドの足にくくり、則子の足を大の字に広げて縛った。それから、その綿ロープの余りを別のベッドの足に縛って固定したあと、別の綿ロープをとり出し、背中中のビニールヒモにとおして、それをベッドに固定した。それから取材用のカメラをとり出し、三脚に固定ストロボをセットした。

「さあ、とるぞ」

その声とともに忽ちパツ、パツとストロボが点滅した。

則子の目の中に太陽がきらめき、まっくらな暗黒がきた。その一瞬が過ぎるとカメラは上体を、ねらっていた。

「元気がないな」

という大介の声がした。

「元気がない！ それ行け！」

という声と同時に、足のうらに激しく、くすぐったさを覚え、則子は思わず体をひきしめ、身ぶるいした。その途端、フラッシュが光った。この一撃で則子は完全に観念した。それから、五、六発、矢つぎばやに大介は撮影した。そのあとで、大介はベッドに縛りつけたナワをとき、ヒザの上に抱きあげ、やさしくキスしてくれた。

則子は、そのキスに、どういうわけか激しくこたえた。そんなことは絶対にすまい。もう絶望したのだ。と思っても、優しくされるのと、つい、こたえる。その新発見に新たな恐怖と自己嫌悪にかられながら則子は、にらむようにして大介を凝視していた。

(五)

「さあ、いよいよ殺しにかかるか」

大介は、ゆっくりと脅かすようにいった。

「できるだけ苦しくネ。一生、貴方を呪い殺せるようにネ」

則子は、恨むような、まなざしで言った。

「有難いことだネ。じゃあ、まず、サルグツワから」

そういうと、大介はどこで用意していたのか子供用の真紅の絹帯を持ち出してきた。その帯を左手に持ち、右手には何か白いものを持っていた。

「さあ、こわくない、こわくない。目を、とじ、口を大きくあけて」

と、まるで催眠術師のように低く、つぶやいた。その言葉どおり、則子は口を大きくあけ、目をつぶった。その口の中に柔らかい布が、ぎゅっと押し込まれ、その上から真紅な絹帯が束になって唇の間に割り込むようにかけられた。その帯が首のうしろで締められると、イキが、つまようだった。首の後ろで男結びにされた絹帯は、こんどは幅広く広げられると、鼻の上からアゴまでを、すっぽりとおおって顔を二巻きした。それで、いっばいとなり、再び首のうしろで、くびられた。「どうだ。泣いても、わめいても、よいよ」そういって大介がワキの下をくすぐった。

「あーっ、あっ」

サルグツをされ、急に気がゆるんだせいか則子は思いきり叫んでみた。しかし、耳に達した声は、くぐもり声で、

「ムーツ、ムツ」

という、うめきにすぎなかった。

ああ！ 声も奪われた。愛は惜しみなく与え惜しみなく奪うものというが、身体を投げ出し、すべての自由を奪われてしまえば、もうそこには生命のいきづきはなくなる。苦しみの中で則子は、そう思った。

覚悟は、とうに決まっていた、といえはウソであろう。だが殺されようとも、自分にはもう自由がない。その現実だけが骨身に、しみたのだ。

だが、そう思ったのは、まだまだ則子の判断が甘かった。ということをも則子は、まだ自覚していなかった。だから、そんなにもされて無抵抗だった。その無抵抗を、よいことに大介は則子を寝台から赤いジュウタンの上に引き下ろし、そこであぐらを組ませ、足首に綿ロープを、きっちり結びつけた。それから、そのロープを首のうしろの結び目にとおすと、則子の体を頭が足につくように曲げさせ、力いっぱい締めあげて固定した。いわゆる

るエビ責めという奴である。則子の体が若くて柔らかだったこと、体操で鍛えた柔軟な筋骨を持っていたことから、エビ縛りは始めとは思えないように恰好よく決まった。太いロープを首から手首に、手首から尻に回して再び足首にかけて、とめた。また左右の足のヒザには、それぞれ別のロープをかけ、これを背中の手首や、首と足首をつないだロープにかけて、ひきしぼった。そうすることによって、エビ縛りは、さらに足首と頭の間隔を、ちぢめて完成した。

「どうだ、まいったか」

大介は則子の耳に口をつけるように言った。則子は、せいっぱい頭をふって、まいるものかというゼスチュアをした。心もからだも完全にグロッキーになっていながら、そういう条件反射をする。それも、これも愛の一面なのだろうか。

「しぶとい奴め」

とはいっても大介は、このポーズが長く放置できないということを知っていた。則子のカタツムリのような肉体を、あちらに転がしこちらに転がしながら、写真をとった。普通に横からとれば激しい拷問の写真になるが、シリを天井に向けると、すべてをさらけ出し

た赤裸々なシーンとなる。その姿を見ながら大介は顔をこわばらし、目をぎらつかせて、カメラを構えた。フィルムを一本、また一本と遠くから近くから、横から縦から前から後ろからと、とりまくった。そして、かれこれ五、六本とり終えると、ホッとしたように、その則子の傍に腰を下ろし、その体を寝台の上に抱きあげた。それから毛布をかぶせ、ふとん蒸しにしながら、手さぐりで開かれた体を静かに閉じてやり、心を体の中にぬり込めるようにして愛撫した。則子のウメキ声が心なしか聞こえるようであった。

こうした放心の一瞬が過ぎると大介は素速く、エビ縛りのナワだけは、といった。そのあとで、こんどは逆エビに固めると背中を下にして則子をおおむけ、寝台の上に寝かせた。

「このまま、朝まで寝ようか」

「話ができないのは、かわいそうだから、サルグツワだけは、とこうか」

と大介は、からかった。

大介には、それだけの余力が残っていたがもう則子は、そんな余力はなくなりかけていた。大介が脇腹を、くすぐっても反応が小さく、いきもたえだえであった。それを知ると大介は、急いでナワをといた。手首のナワも

……全部といって人工呼吸をし、ウイスキーを口うつしに、のませた。ゴクリとノドが鳴り生命を吹き込まれた則子は小声で

「お母さん！」

と叫んだ。

その声は大介には大きなショックだった。

大介は父を知らない。母だけに連れられて育った。母は芸者だった。男が、つぎつぎに変わった。そのことを知ると、母を呪って成長した。母を呪ってというより女を呪ったのかもしれない。その母も大介が中学生の頃、家出し、いらい大介は、ひとりぼっちだった。生きていることを呪い、社会を呪った。しかも生活は苦しかった。労働者となり、そのみじめな生活に、いたたまれなくなり、大介は奮起し、検定試験を受けて大学入試の資格をとると、電気会社の守衛をしながら大学を出た。

女は労働者時代、板金工時代に知った。女が大介を喜ばしてくるたびに、大介は女を憎んだ。冷めたい奴、いけすかない奴と女から、さげすまれながらも、それでも一度だけ心から飲み屋の娘に惚れた。

その娘から捨てられ、その母から笑われ、それでも生きなければならなかった。その体

験が大介を逞しい男に育てた。非常でニヒルな男に育てた。社会に復讐したい一心で新聞記者になった。そしてダークサイドで事件をあばくことに、生き甲斐を感じるようになった。女を憎み社会を憎むことが、逆に社会に灯をともし、女心に炎をもやさせることになろうとは！

則子の無意識に叫んだ、お母さんの言葉は一気に、大介のこうした過去を、呼びさませた。

「この人とオレとは、やはり無縁の人」

と大介は言いたかった。

だが、それにひかれるとは。非情の男は案外、涙もろい男だったのかもしれない。

やがて則子は、完全に意識を回復した。

「ああ！ 貴方」

思わず大介の首に手を回し、則子は、しがみついていた。

「則子！」

「殺して、殺して！ なぜ、殺さないの」

則子は、そう言いながら激しく体を大介の体に、ぶっつけていった。

＜M 男 通 信＞

青山かおり様の

奴隷として

青山 土 玲

(あおやまどれい)



—— カット ——
岡 た か し

奇ク七月号の読者通信において、堂々の牡犬募集をなされた青山かおり女王様。私は生来の牡犬であります、やっとな貴女様のように美貌で、男などは顎でこき使う牛馬に過ぎないと見なしておられる理想的な女王様を、眼前にする機会を得ることができました。感激、これに過ぎたるはございません。

奇クの内容などに目をふれてみますと、やはり世間には、S男、M女の数が圧倒的に多くて、私などのように、強度一〇〇%のM男は、いつも何らかの欲求不満にさいなまされております。いやいや、M男の数自体は、かなりのものかもしれませんが、それに対する女王様の存在が稀薄なのでしょう。つけ加うるに、女性に対して、この長い歴史の中、常に絶対的優位を保持し続けてきた男どもが、

女性の前に虫けら同然の扱いをうけ、いたぶられるという事実が、未だ甚しい恥と見なされ、奇譚として、うしろ指の対象となっていないことも考え合わせねばなりません。

そうなのです。生来のM男（たとえば私は別として、牡犬の大勢は、かなりの高令者層にあると言われます。これは、すなわち、相当な社会的地位と、世間的体裁を気にせざるを得ない人種だと言わねばなりません。そして、またM男の求めてやまないとところの女王様は、若い世代（十代か二十代、せいぜい三十代まで）の方々、そう、教員にしてみれば、教え子くらいの、親にしてみれば我が娘くらい、の女王様に仕え、殴られ、蹴られ、拳句のはては、その排泄物まで無上の美味として、甘受しなければならぬのです。

自分より、一まわりも、二まわりも、お若い女王様。或は二分の一、三分の一の年令しか、あられない女王様。経済的にも、社会的にも、未だ何の力も持たれない女王様方。その女王様方の若さのみに、我々M男の何十年もの間、積み上げてきた年輪、すなわち社会的地位などというものは、何の苦もなく一朝にして、跡形なきまで、崩壊されてしまうのです。

そして、哀れな奴隷犬は、女王様の玉肌に一触れすることさえも禁じられ、そのお召しになっておられたスリッパの裏を、お嘗めすることの中に、至上の快楽を味覚しているのです。ああ、およその灰色の地上に、これに勝る快楽がありませんか！ 青山かおり様にお仕え出来る日を、この土玲、気も狂わん思いで待ち続けているのでございます。しかし私の如き醜い牡犬は、貴女様にとりましては一瞥の対象にもならないのでしょね。私は、自分のことを一生、救われない野良犬だと嘆息するのみです。いやいや、野良犬は幾百人の女王様の足下にひれ伏し、ときにはその汚物などを得ることが出来ますだけ、私などよりは、どれ程、幸福であるかしれません。ああ、私は野良犬になりたい。

現在の私には、美樹という名の女王様がございます。美樹女王様は、一応、私の妹君ということになっております。勿論、実の妹君ではあられるのですが、とても勿体なくて兄妹だなどと言えたものではありません。私は現在二十四才の大学生ですが、美樹様のご年令は、私よりも六つ少ない高校生であられます。二人兄妹ではありません、美樹様は、スポーツをしておられ、容姿は端麗で、とて

も気がお強くあられますが、それにひきかえ私は不恰好で、内向的であります。学校の成績も美樹様の方が数段、優り、その上、背丈も一六五センチの私に比して、美樹様は一七二センチあられます。正に抜群のプロポーションで、ヒールを履かれると、私などは、はるか下方に見下ろされる有様です。

それでも私は、美樹様が悉く私に優越され私などを兄貴はおろか、兄弟とさえ考えておられないことについて、一度たりとも、つく思ったことはありません。むしろ、それが、この哀れな奴隷の生きる前提であり、何ものにも、かえ難い喜びなのです。

ですが、私は、まだ一度として美樹様の御前に跪き、女王様の了承のもとで、奴隷としての奉仕をさせて頂いたことがなく、家族の目、世間の目を気にして、そのような勇氣を持ち得ない自分を、犬ころの身でありながら何度、うらんだことでありましょう。

青山かおり女王様。貴女様は、このように腰抜けの、身の程知らずの奴隷を御覧になって、必ずや、便所を這いまわる、あのうじ虫と同様、永久に無視なさることでしょう。それは私のような牡犬にとりましても、誠に悲しむべきことです。でも、今は私、それもこ

れも皆、諦めています。私などは、貴女様のように高貴な女王様に、お目通り致す事すらかなわぬ、愚かな捨て犬なのですから……。

私が恥を忍んで、今こうしてペンをとっておりますのは、実際に貴女様に、お仕えさせて頂こうなどという、大それた魂胆からでは決してなく、いかに貴女様のような、お美しく若い女王様が、我々数多くの奴隷達にとって高貴な存在であり、女王様御使用中の御パンティーに顔を埋めんがために、いかに我々M男の多くが命を賭け、そして、かなわぬ夢に嘆いているか、その厳然たる事実を知って頂き、もし、一片の憐憫の情を持たれましたら、せめて誌上でなりとも貴女様の、牡犬に対する罵倒の御言葉を頂きたく願うものなのです。

私のM性は、これは生まれつきのものだと思います。そしてそれを助長させ、疼かせ、更に開花させたのは、明らかに美樹様の存在でした。

物心ついたところから、お美しく勝気な美樹様に対する私の献身の欲求は、強烈なものがありません。なにしろ二人きりの兄妹でありました上に、美樹様は美しく気が強くあられます。私は醜く気弱な性格であったせいか、両親と

も妹の美樹様の方を一方的に可愛がり、私などは常に忘れ去られた存在でした。幼少のころは、そういった両親の態度に、私もぼんやりとした反発を感じていたようですが、物心ついたころには、子供ながらに自らの醜さを認め、お美しい美樹様に跪くために自分は生まれてきたんだという、呪うべきM性が台頭してきたのでした。

それからの私は、いつも美樹様を女王様としてあがめたてまつってまいりました。学校帰りに、命令に従っておぶってさしあげたり自分の小遣いを、のこらず献上したり、或はハイドードーの馬として、クタクタになるまで歩きまわったことも、何度となくありました。しかし、その頃は、なにしろ兄妹ということで、女王様と奴隷という関係に没頭することはなく、臆弱なマゾヒストである私は、一人秘やかな空想の中で、美樹様の下男としての奉仕を、楽しんでいたに過ぎなかったのです。しかも、まだその頃には、妹に対する兄の思い遣りという感覚が、わずかながらも存在していて、めったに誉められたことのない両親からも兄さんらしくなったなどと言って、たびたび誉められたりしたものでした。それでも、美樹様は、おとなしくて献身的な

私を、お侮りになる仕種^{しぐさ}をお見せになり、六つも年長の私に、どしどし命令されたものです。そのようなときの私の嬉しさは例えようもなく、一年ごとにお美しく大きくなられる美樹様に跪き、なぶりものにされたいという欲求は、徐々に抑え難いものとなってきたのでした。

高校に入学した年、私はまだ小学生であられた美樹様の入浴中に、そのパンティーを盗んだことがあります。そのパンティーに残る汗と汚れと排泄物の湿りは、私の舌に、ゾクゾクするような快感を与え、はからずも私は、生まれて初めての射精を経験してしまったのです。

私の高校卒業と同時に、美樹様は中学生となられましたが、おとなっぽい、そのお美しさのせいか、下校の際など、よく男に追いまわされておられたものでした。

私のM性は、それにつれて疼くばかりに助長され、最早、意見はおろか、何の口応えも美樹様にできなくなり、美樹様もまた、私などはすっかり無視なされた御様子で、常に傲慢な態度をお示しになり、ビシビシと命令なされて家事のいろいろな事をやらされたものでございますが、両親とも、これには、やや

あきれ顔で「土玲も、だらしないけど、美樹は末恐ろしいね」などと話しておりました。

そのためか、美樹様も、両親の前では何か御遠慮されて、不在のときにこそ厳しく、つらくあたって下さるのでしたが、私には、そのようなときが一番幸福であり、美樹様が私の失敗を「こら！ 何やってんのよ」「ボサー」として！ しっかりなさい」「それでも男なの！」などと叱責される時など、何度、めくるめく幸福感を味わったか判りません。

高三のときでした。私がふき掃除をやっている、バケツの水をひっくり返し、その水がはねて美樹様の御服にかかったときなど、美樹様は、にわかに激昂されてか私を強くお蹴りつけになられ「馬鹿、なにすんのよ！」と怒鳴りつけられたことでした。「あっ、申し訳ございません、美樹様……」そう思わず口にしてしまい、私はアツと思いました。美樹様「などと口にしたのは、後にも前にも、その時ばかりだったのですから……。私をお蹴りになられたのは、その前にも一、二度ありました。その日は特に痛かったため最早、すっかり抑え難いまでに成長していた私のM性が、一挙に、ほとばしり出たのでしよう。

美樹様は一瞬、顔面をひきつらせて、妙な表情をされると、今度は一変して、みだらな軽蔑の笑みをもらされたものでした。あまりの感激に、私の全身は固くこわばり、一瞬の後は、何度も何度もヒクヒクと痙攣して、思わずその場に、うずくまってしまったのでした。

三年の浪人生活を経て、私がようやく大学に入学致しましたとき、美樹様は高校生になりました。何度も申しますが、美樹様は日に日にお美しく、艶っぽくなられ、男の友達も、かなりいたようでした。

美樹様は、バレエ部には入れられ、そのためか、長身の肢体は一層、伸び伸びとなられ、それはそれは素晴らしい魅力でしたが、ある日バレエ大会の練習の帰り道、家の近くの暗がり二人組の痴漢が美樹様を襲い、泣きながら帰ってこられたことがございました。

真新しいセーラーはボロボロに破かれ、ただでさえセクシーな美樹様は、ますます悩ましげになっておられ、脚と手の甲から、かすかに血が流れておりましたので私が大急ぎでタオルを湯にひたしてお拭い申しあげると、「あっ、痛い！ 痛いじゃないのよ！ マヌケ！」と怒鳴られて、私をお蹴りつけになり

ました。

母は、そのときはもうこの世になく、父もまだ帰宅していなかったせいもあって美樹様は、うつぶんのはらし所を私に求められてか「あんたなんかちっとも役に立ちやしない」とか、「もっときれいなタオルを持ってきてよ」などとあたり散らしては、私をお蹴りになります。私は、それでもいそいそと水をかえてきては美樹様の長い脚をささげ持ち、きれいに拭きたり破れて泥のついたセーラーやスカートを脱がせてさし上げたのです。美樹様は、いつも私の指が、玉肌に触れることをお嫌いになり、そのような行為を常に禁じられておりましたのですが、その日は、余程興奮しておられたとみえ、何のおとがめもありませんでした。

セーラーの下の美樹様の若々しい肢体は、まことに素晴らしく、思わず知らず、うっとりとして眺めておりました私は「こら、なにボサッと突っ立ってんのよ。もういいから、さっさとむこうへ行きなさい」という美樹様のおとがめがあるまで、そのスリップの中で芳香を放つ肉体から目を離すことができませんでした。

M犬の身分でありながら、生意気にも、女

王様の玉体に欲求を感じましたのは、まさにそのときでした。元来、SMといえどもセックスの一ジャンルに過ぎません。互いの肉体に惹かれるというのは、ある意味では、当然なのかもしれません。

そして、大学三年の夏。私は、長年抱き続けてきた夢の一つを、ものの見事に手中にすることができたのです。

その日、私は、父が常用している睡眠薬を数錠盗み出して粉末にしてしまい、美樹様が毎晩九時頃、飲んでおられた瓶入りの健康飲料の中に溶かし込んでおいたのです。瓶は冷蔵庫の中に五つ程並んでいましたが、私はその一番端、手前のヤツに、しこんでおいたのです。甚しい緊張の中で、もし気付かれたらとの危惧におかされ、消え入りそうな心持で夜を迎えました。

果たして美樹様は九時になると台所の方へ行かれました。それをお飲みになってから、また十二時過ぎまで机にむかわれるのが日課でした。美樹様の部屋は、私の部屋の隣ですが、気配に全神経を集中している私には、美樹様の挙動は手に取るように判ります。父は母屋の方で早く就寝するため、気取られるおそれは、まずありません。計画は万全だった

ナミオM画廊 『ホラ、そこもッ!』 春川 ナミオ



のです。
さて、美樹様がお部屋に戻られるのを待つて、私は台所へ行き冷蔵庫を開けて狂喜しました。例のあの瓶がなくなっているのです。私は、躍り上がりたい気持を押えて、すぐに

自分の部屋に戻り、壁に耳をつけたり、窓ごとに隣室の灯をうかがったりしました。汗がじっとりと浮き、動悸は激しくなり、気は動転しました。何しろ、何年もの間、抱き続けてきた夢。そして、ひょっとしたら永久に実

現できそうもない夢。その夢を実現せんがために、憶病な私がやっとの思いで踏み切り、今そのかいあって、実際にこの手中におさまろうとしているのです。

私は興奮の中で、美樹様の、あのすらりとして肉づきのよい肉体を思い浮かべました。バレエをやっておられるその長い御足。むっちりとした力強く引き締まった太腿。形よく豊満な乳房。ああ、どの様にして美樹様は、あのベッドに横たわり、そして、あの素晴らしい肉体を包んだ花柄のパンティーは、どのようなかぐわしさでしょう。私の頭は、早くも、みだらな欲情絵図で一杯となっておりまして。

待ちに待った十時になりました。注意深く慎重にと念じながら、私は自分の部屋の窓から外に出ました。隣室の灯は、すでに九時半頃には消えていたのです。効果は明らかでした。突然の眠気に襲われた美樹様は、三十分後の今、グッスリと寝込まれているに相違ありません。廊下からのドアは常に中から鍵がされていて、とても這入ることはできませんが、夏の間は窓を開けっ放しにしておられることがございまして、それをねらっていたのです。そのために、ひどく蒸し暑い日を選んだのでした。

私は、あらかじめ用意しておいた、ゴムのぞうりを履き、足音をたてぬようにして隣室に近づきました。窓は思った通り、大きく開け放たれております。私は、心の中で「シメタ！」と思いながらも、緊張のため顔をほころばせることすらできず、そのまま、懸命に美樹様のお部屋をのぞき込みました。月の光で、六畳の部屋の中は大体の見渡しが利きます。そして、私は、確かにベッドの上で眠りこけておられる美樹様を発見して、勇躍したものでした。ですが、窓から室内に侵入する瞬間には、やはり、かなりの決断が必要でありました。

今思うに、このいくじなしの私が、どうしてあんな大それたことをやれたのかと、不思議でなりません。やはり二十余年の間、秘め続けてきたM性が、一ときに爆発したものとみえます。逆を言えば、美樹様が、それ程魅力的女王様であったということでしょう。

音もなく部屋の中に入り込むと、私は呆気なくも、美樹様のすぐそばに佇立しておりました。最早、頭の中には、眼前の美樹様の肉体だけしかなく、その他の総ての思考を喪失した(否、放棄した)Mアニマルとしての私がそこにいたのです。長い私のM生活の中

でも、M犬として、私がその中に埋没できたのは、それが初めてであり、その意味において、美樹様と私の間に、両者の諒解ではないにしろ、明白な主従関係が成立したと私はみております。

美樹様はやはり、かなり急激な睡魔に襲われたらしく、ネグリジェもお召しにならず、スリッパのまま、ベッドの上にうつぶせになっておられました。急いでお脱ぎになったであろうシャツやミニのスカートは、椅子の上に乱暴なまでに投げかけられており、スリッパもバラバラにぬがれてあります。

月光に、ややぼんやりと美樹様の玉体は浮かび上がっておりました。ベッドの上に無雑作に、ほおり出された、その純白の肉体を前にして、当然のことながら、私の歓喜は、強烈なものがありました。しかし、そのとき、思考は冷静になり、Mアニマルの私は、次の動作へ敢然として移行していたのです。

それでも、私が美樹様の玉肌を手をかけましたときの、電気が走るような緊張は、筆舌に尽し難い醍醐味がございました。かなり深く眠り込んでおられることは判ってはおりましたが、一片の危惧は、やはり消し難いものがあったのです。

太腿に手をかけると、私はスリッパを脱がせにかかりました。美樹様の太腿は、まさにちきれんばかりに若々しく、およそこの世の中に、これ程素晴らしいものが存在するのだろうかと思ったのは、私のM性によるものばかりとは言えないでしょう。

スリッパをお剥ぎするには、美樹様の玉体を持ち上げねばなりません。もう、決死の覚悟でおりました私は、思い切って、やんわりと美樹様をかかえあげ、そして、スリッパをゆっくりと首のあたりまで、まくりあげました。それは、やはり、かなりの重労働には違ひありませんでしたが、私は汗だくになり、ただ美樹様がお気付きにならないようにと念ずるのみでした。

しかし、今思うに、私の牡犬としての心のどこかに、美樹様が突如目を覚まされ、この卑しい奴隷犬の無礼をお気付きになって、メチャクチャに凌辱して頂けないものかという願望が、なかった訳ではありません。否、半ばは、それを願っていたと申しまして、過言ではありませんまい。

とにかく、想像してみてください。豊かな重量を有する美樹様の玉体を、奴隷である私の卑しい手がかかえあげ、その玉肌に吸い付か

んばかりのスリッパを徐々に脱がしてゆくのです。勿論、その過程において、私の両手はそのセクシーな肉体はおろか、美樹様のパンティーを這うことをしましたし、ブラジャーのふくよかな、それでいて弾力に富んだ膨らみの感触も経験できたのです。まさに夢でした。その実現されるに難しい夢が、実現できたのです。

次に私は、美樹様の玉体から手を離し、あらためてその素晴らしい肉体美に翻弄されるのでした。美樹様は余程熟睡されてか、その間中、身じろぎ一つなさらず、スヤスヤとして寝息さえ、たてておられます。私の目も、そのころは、もうすっかり暗闇に慣れて、かなりの視界を有するに至っておりまして。一息つく余裕のできた目で見たパンティーは、やはり花柄のものでした。

実際、そうして眺めやる女王様の裸身は見事としか形容し難いもので、突如として激情した私は、それでも精一杯、落ち着いて、やおら美樹様の足許に跪くような恰好で身を屈すると、その長い御足をかかえあげ、光栄の口づけをしたのでしたが、そこまできると私の体は火がついたようになり、途端に、その足の裏に、むしゃぶりついていたのでした。

ああ、M男にとって、これ程まで以上に快楽甚だしい一時がありました。うか。あの、や塩味のある美樹様の足の裏をおなめしたときの恍惚！ 思えば私は世の奴隷犬どもの中でも、幸福なうちの一ぴきかもしれません。

暫しその足裏に酔ったあと、たて続けに私の舌は、美樹様の長い御脚の御清浄にかかったのです。油ぎって、ふくよかなふくらはぎ。むっちりとした、劣情を誘わずにはおかぬ太股。私の舌は、興奮のあまり半ばマヒしながらも、狂ったように美樹様の玉肌を這い続けました。美樹様のお目醒めへの気づかいはすでに私の頭の中にはなかった様なのです。

そして、何としても忘じ難い一ときは、あの薄い花柄のパンティーに手をかけ、それを一気にずり下げたときで、薄暗がりの中ではありましたものの、その見事な美しさに暫し瞠目を強いられたことでした。

狂った犬が、むさぼったあの塩からいものあれは何であったのでしょうか。美樹様の汗なのでしょうか。それとも或は他の何か……。

私は、再び美樹様の玉体をうつぶせにする、聖なる水を求め、芳香にむせたのでしたが、ふと気付くと、私のズボン、ずぶ濡れの有様になっていました。

至上の悦楽にむせた私は、美樹様の上半身を撫でまわし、その豊かな乳房を両の手で確かめ、そして、とうとう美樹様の花の唇を盗もうとしましたが、突然、美樹様が唸り声を発せられ、寝返りをうたれたので、びっくり仰天。一瞬、血の気がひくのを、覚えたのでありました。

美樹様は、それでも御気付きになられた御様子もなくスヤスヤと眠り続けられました。私は一安心して、最後の目的に移るべく、ズボンのポケットから、ライターと小さなハサミを取り出しました。これらを私がどう使ったのかは、くどくどと申し上げるまでもありますまい。勿論、玉肌を傷つけるような使い方をするはずはありません。

時刻は一時になんなんとしておりました。私は慌てて目的を果たしたライターとハサミそれに、出来た小さな紙包みを、しっかりとポケットにしまい込み名残りを惜しみながら美樹様が目醒められても気づかれないように処置をして、こっそりと自分の部屋に戻ったのでしたが、ぐったりと疲れきった私は、最早、夢のあとを追うこともなく、深い眠りへと落ちたのでございました。

その直後に父が死に、その遺産で私達は何

の不自由もなく生活しております。皮肉なことに、両親の死亡が私の奴隷奉仕にとっては都合のよいことになってしまいました。しかし、それでも桁はずれていくじのない私は、実際、美樹様の御前に跪くことが未だ、できずにおるのです。

勿論、精神的には、私は美樹女王様の完全な奴隷であり、直接そうして奴隷としてのお許しを頂くことも、時間の問題ではあります。が……

美樹様は、あの夜のことを、お気づきになられた御様子もなく、父の死後、私には一層つらく、あたられ、もう「兄さん」などとはお呼び下さいません。常に「あんた」とか、「おい」です。

私にとって、それは嬉しいことには違いありませんが、実の所「犬畜生」とか「うすのろ」などと罵倒して欲しいのです。あの夜の私が、不逞な振舞いで玉肌に酔い痴れ、ハサミを使って不法に頂戴した幾本かの宝物を手にしているとしても、やはりM性というものは、女王様から、おん自らのご意志で与えられる精神的辱かしめがなくては成立するものではありません。

私が奴隷としての申し出を致せば、それは

かなうことかも知れませんが、万一、美樹様に見捨てられる結果を招くことになりはしないかと思うと、とても願ひ出る勇気が出ないのです。

今、美樹様の下着の洗濯以外の家事は、総て私がやっております。美樹様は頻繁に友人の方を連れてこられますが、その中の一人の学校での友人らしい女の方は、どうやら美樹様と同性愛の關係にあられるらしく、応接間のソファや絨毯じゅうたんの上で抱き合っておられる所に、私がお茶などを運んでいたりして、仰天することも、たびたびです。そんな時「こら、あっちへ行け！」と、女王様は、よだれを流しながら佇立している私にスリッパを投げつけられるぐらいのもので、何のひるむこともなく続けられます。目の前に見せつけられる私の屈辱感……これこそが、マゾヒズムの精髓なのでしょう。

そんなときこそ、美樹様に奴隷としてのお許しを頂く日の近いことを感じ、美樹様の御神水を頂戴し、人間トイレ、人間たんつぼ、人間便器としての御奉仕がかなうことを、心から、願ったりするのです。

青山かおり女王様。M犬がどのようにあわれで、あさましいものか、これで少しは判っ

て頂けたと思います。私は奇ク誌のあらゆるM記事をむさぼり読み、その度に天にも昇る快楽を感じております。六月号九十四ページのナオミM画廊「野外トイレ」を拝見致しましたときの、あのしびれるようなショック。あれが写真であつたら、どれ程、素晴らしいでしょうに……。

でも、どうかお許し下さい。私は貴女様に直接御奉仕できる身分ではございません。このように、悲しむべき奴隷は、まことに多いのです。

でも、どうか我々牡犬どもが貴女様の御手洗いで丸めこまれ、投げ捨てられるトイレットペーパーを夢みて、日夜どのように悶々としているかを、そして、貴女様が一番汚い物と思われているであろう排泄物を、我々牡犬が、どれほどダイヤモンドにも勝る雲の上の宝物と感じているかを、お知り頂き、どうか奇クを通じて、全国の奴隷犬どもに罵言の限りをお浴びせ賜りたいと切に願うのみであります。

甚だ勝手な申し出ばかり致しましたことをお許し下さい。

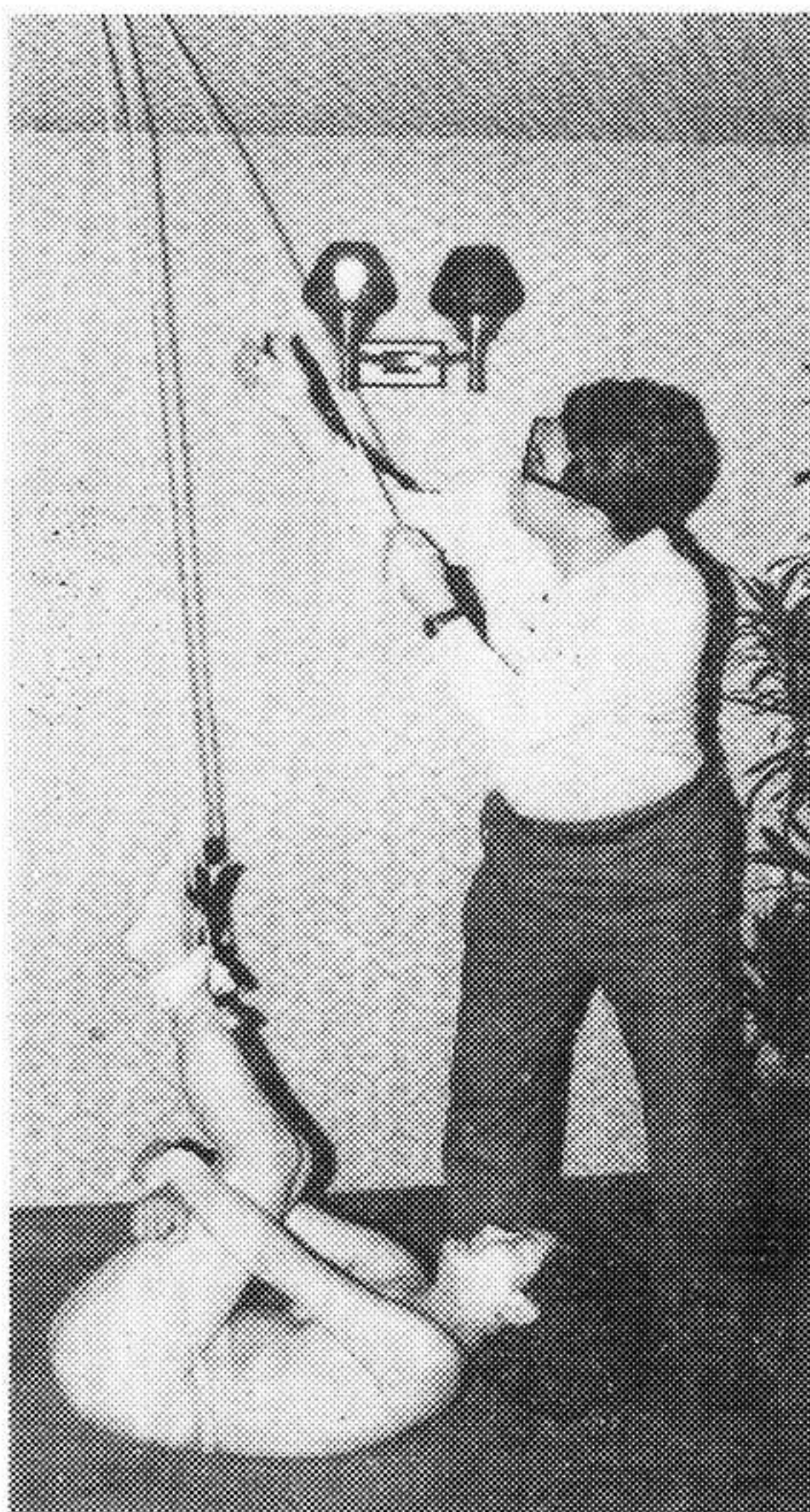
S Mカメラ・ハント——渡部好美の巻

『吊りの醐醍味』

辻

村

隆



眠っていた休火山が、思い出したように、
時として火を噴くことがあるように、敬愛す
べき同好のドクター氏（小児科）の、嗜虐の
ほむらが、俄に激しく燃え上がり始めたので
あった。その炎に火をつけたのは、外でもな
い、私のカメラ・ハント『Mアニマルの華麗
なる対決』を読んだからだというが、思えば
吊り好きの人にとっては、罪な一文ではあっ
た。

以前にも紹介したように、ドクター氏と私
で谷山久美子を徹底的に吊り、マゾヒスチッ
クアニマルの名を冠して、彼女を有名にさせ
たのであるが、その後、ドクター氏は嗜虐趣
味の方は休火山の状態で、専ら金魚の飼育と

競馬うま二頭の成長に寧日もなかった。

彼が、「華麗なる対決」を読んで、渡部好美夫人に、吊りの意欲を燃やし始め、そうなる、穏やかな電話の口吻りの中にも、求道精神は熾烈に燃えて、請い願わくば、何とか渡部夫人を口説いてくれと、せがんで止まないものであった。

谷山久美子との、華麗なる吊り責めの対決では、渡部好美は確かに一歩、ひけをとった感じであった。しかし、映画以来、急速に飼育された吊り責めに、高所恐怖症的な彼女も大分、馴れてきつつあった。

もともと、忍従と被虐性は抜群の彼女である。加えて、どこか痛々しげな、ほっそりとした感じは、世の嗜虐趣味の男共にとっては虐めたくて堪まらぬようなタイプにうつるものである。

しかし渡部好美は、歴つきとした渡部光雄の妻で、琴瑟相和して、SMの嗜好ピタリ一致して、至極、仲のよい夫婦である。

如何に、嗜虐の輩が、凄まじい紅蓮の炎を燃やそうとも、夫の許可がなくては、どうにもならない。

一旦、許されて、SMプレイの激浪の中に叩き込まれると、好美夫人は、ドキッとする

くらいに奔放に振舞うくせに、どこまでも、愛する夫の、広大無辺の許容の限界の中で、彼女は、自己の被虐欲を最大限に満たしているといった状態であった。

渡部好美とのプレイが、一対一であっても複数プレイであっても、例えセックスの行きつくところまで行きついたにしても、そのSMプレイの状況は、細大洩らさず彼女の口から、夫の耳へ報告されているのであった。

夫はそれによって、爾後のプレイ判断をする。

——あいつは、好美を一人でやって任しても紳士的だ。又、行かせよう——とか、

——あいつは、どうも危険だ。俺に内緒で、会ってくれと妻を口説いているが、ルール違反だ。もうこの次からは断わろう——とか、

その彼の、私に対する判断は、今の処、誠に好意的であった。

彼等夫婦の在り方を悉く皆、知っているから、好美夫人に対しては、好意を抱いていても、抜けがけに口説いたことはない。だから比較的、安全な仲だと彼は、みている。

更に彼は、私に対しては、この道の大先輩だと、尻擦った敬意を払っていてくれた。だから、他の同好者達とのSMプレイも、彼

は忌憚なく私に打ち明け、喋ってくれた。

謂わば、私と彼とは、信頼出来る同好の仲間だったわけである。

それだけに、私の依頼は、無理なことでも万難を排して引き受けてくれた。何しろ好美夫人をプレイの場にやる時、彼は二人の子供の面倒をみ、留守を引き受けて、食事の仕度まで整えてやる、気のくばりようである。

こんな理解のある夫は一寸、世間にもそうザラにはいない。それだけに、鴛鴦の妻は、夫のこの好意を裏切る行為が出来なかったであろう。

ドクター氏の熱心さに負けて、渡部光雄にかくかく、しかじかと電話する。

「そうですか、よく分かりました。好美は吊りには余り強くない方ですが、何とか協力させましょう。例の谷山さんの吊り責めと一緒にやったドクター氏なら構わないでしょう。

この間の、谷山さんとの対決では、影が薄かったけど、妻も、かなり慣れてきていますからね。しかし、私が行かないとなると、子供をみてやらなくちゃなりませんから、日曜日でない……」

「ええ、その方がいいんです。ドクター氏も日曜は休診で、都合いいそうです。彼は、あ

なたに何もお返し出来ないから、病気の方なら、健康保険で、充分に配慮するといつてましたよ。ベテランのドクターだから、糖尿病に何かと便宜を計ってくれるでしょう。あなたの家からも近いですよ、病院は——」

「そりゃ有難いです。国立の方へいつているのですが、待たされるし事務的なので弱っていたのです。是非お世話になりたいですよ。子供もついでに見てもらえたら嬉しいのですが……気管支が弱くて」

と、彼は大乘り気で、真剣に喜んでいいる。一寸したコネのあるのと、ないのでは、医師のクランケに対する熱心さ、親切さは相当、違ってくる。病身だけに渡部光雄は、その方が嬉しいらしかった。

六月第一日曜ときめて、ドクター氏に折り返し連絡したら、健康保険の基金局への請求で、これは無理であった。今やオール健保の時代。医師にとって、健保の請求は、死活問題で、医術を算術にかえて、真剣に取り組む数日である。しからばと一週くり上げて、五月最後の日曜日にきめる。

ドクター氏は、早速、意に叶って大張り切りで喜んでいいる。

病める子供達には、慈父のように優しい態

度で接して、小児科の名声かくかくとし、金魚を愛し、馬を人間の様に愛する、心根優しい彼にして、尚、ハイド氏めいた嗜虐癖が、どこかに潜んでいて、しかも強烈な、吊り責めオンリーの、かなり高度成長のサド性を有しているのであった。

だから人間は、外見だけでは、心の中までは分からないものだ、つくづく思う。

その日は、もう初夏のような燦々たる暑さを感じる日曜日——。

約束の正午、新幹線の京都八条口にて、期せずして出会う。

私は車——。二人をのせて、*「華やかな対決」*を撮った琵琶湖畔のあのモーター*「K」*に向かうことになっていた。

吊りの場合、今の処、このモーター以外、恰好の場所は見当たらなかった。根よく探せば外にもあるのであろうが、片っ端から当たるわけにもゆかず、つい、吊り責めということを利用することになる。

途中、山科辺りのドライブレストランで昼食を摂る。

渡部好美に敬意を表して、ドクター氏は、メニュー最高の料理を注文してくれる。

柔らかな人当たりに、彼女は初対面で、か

なり好意を抱いたらしかった。

全裸を曝し、すべてを露呈してのSMプレイで、その相手に対する感情の好悪如何でプレイの様相も随分、違ってくるのは、人間、感情の動物である以上、当然の事であった。いかに従順な彼女といえども、嫌悪を催す相手とでは、協力の仕方も変わってくるし、情操的にも没我のプレイの境地には、なれないであろう。

食事をし乍ら私は、いい目が出るか、悪い目が出るか、二人の会話のやりとりを、冷静に観察していたが、もうこれは問題もないくらい急速に親しみをましてゆくのをみて、よかったと思った。

ドクター氏の場合、常に相手に対する思いやりが先行しているので、彼から受ける第一印象は、誰もがよかったようである。謂わば彼は、円満なる福徳人でもあった。

専門柄、話がどうしても医学上の方に進んでゆく。私や奇クを通じて、彼は渡部好美については既に相当の知識を有していた。今更改めてきくこともなかったであろうし、こうした高級レストランで食事する時間は自己の専門知識を披瀝した方が賢明でもあった。

夫の糖尿の治療と養生、子供の気管支疾患

の診断など、好美にとっては他人事でない関心事を、専門の医師が、熱心に話すのだから真剣にならざるを得ない。ゆきがかり上、私は、つい傍観の第三者的存在になっていた。

ドクター氏は職掌柄、相手の心を掴むのがうまい。好美は、しらずしらず彼の自家薬籠中のものにされて行く。これから始まるSMのプレイの前提として、これは誠に巧みであった。全然プレイに関係のない話をして、プレイをスムーズに遂行する手段とする。

私と好美の仲は、今更云々するまでもないとすれば、今日、初対面のドクター氏と好美が、柔らかく心融け合わすところ、今日のSMプレイの必須条件でもあった。

食事を終わって、私達は一路、琵琶湖畔へ走る。日曜日の臨時ドライバーの車が多くて初夏めいた湖畔のルートは、渋滞して混雑を呈していた。

モーター「K」へ辿りつき、シャッターの上があった一室に、やれやれと潜り込む。

階下はジュタンを敷きつめた洋風の間で階段を昇ったところに踊り場があり、ここから下へ吊り下げるのに恰好である。

バス、トイレ、和室の間は、すべて階上である。

型通り、渡部好美に入浴を奨め、彼女が階上へ消えたあと、私とドクター氏は、今日の吊り責めについて、種々検討し、打ち合わせを始めた。

「もう、心わくわくなんですよ。彼女は、ほっそりとして軽そうだし、何より容貌、スタイルなど、典型的な被虐タイプですねえ。我侘いって申し訳けないけど、今日は私に免じて、ひとつ吊り責めオンリーで、お願い出来ないでしょうか」

「いいですとも。私はもう、彼女とは度々プレイしていますので、センセイのいいように運んで下さい。私も吊りは好きな方ですが、何しろ、軽いといっても、私一人じゃ吊りは大変な重労働ですからね。今日は二人だからおあつらえ向きですよ。その気で、滑車も二個、準備してきました。唯、彼女は幾分、高所恐怖症的なところがありますので、緊縛の苦痛自体よりも、怖がるかと思ういますので、充分安心させて、いたわってプレイすることですよ」

「その方は、辻村さんにお任せしますよ。何しろ、久し振りのプレイで、胸ワクワクなんだから」

プレイせぬうちから、ひたいにベツトリと

汗をかいて、ドクター氏は、既に満ち潮のよう、体内に溢れくる、嗜虐の興奮に酔っている。

「いやあ、兎も角、人間、これで満足ってことはありませんねえ。谷山さんに、吊り責めの限界を求めて、徹頭徹尾やった時は、正直いって、もうこれ以上のものを望んでも不可能と、満足しきったのですが、辻村さんの先月のハントを読みまして、対決した渡部さんに、すぐく関心を抱いて、こうして御無理だったのですから、よくよく、好き者に出来ているんですねあ」

と、感慨深げである。

「谷山さんとは、その後どうなんですか？」と水を向けると、ドクター氏は苦笑して、「気だてのいい女性なんです、余り積極的に出てこられると、どうもこちらの方が尻込みしてしまつて……。少し悪乗りしてるんですかなあ。何しろ解放的で、相手構わず、だれかれなしにプレイしてるんだと、自慢げにいうもんだから、どうも私には、ついてゆけそうもないんですよ」

私と同感。彼も又、谷山久美子が、被虐願望の激しさの余り、奇クのみではなく、風奇や、その他の雑誌の通信欄にまで、自ら求め

て、嗜虐の対象を求めていることを知って、敬遠している様子であった。

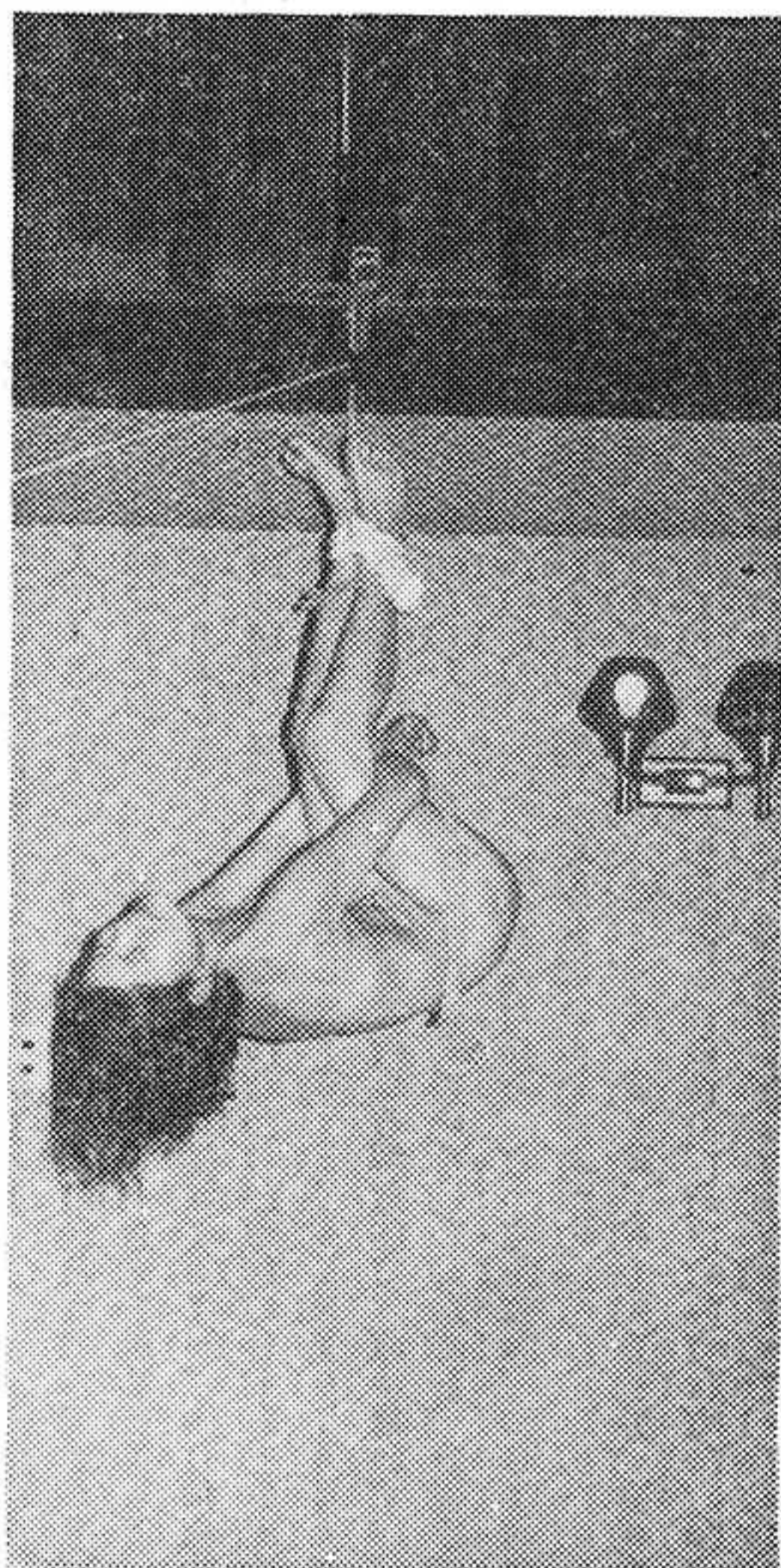
たしかに、「過ぎたるは及ばざるが如し」である。その点、渡部好美は、夫によって相手を選び、適当にコントロールしていた。

のべつまくなしのプレイは、感受性を麻痺させてしまう。

S M的なプレイという非日常的な行為は、日常生活の刺激剤として偶に行なってこそ、いつまでも新鮮なのである。

谷山久美子の、超人的な被虐願望は、相手を求めて、とことんまで追求し、その相手が飽和状態に達して、顧みなくなったら、又、次の新たな対象を求めて、東西に狂奔しているようであった。真性のマゾ女性の悲劇を私は谷山久美子に感じ、時には、その性に哀れすら催すのであった。

かつて、非道い眼に逢い、週刊誌の特ネタにまでなった、悪性の同好者Mとも、その後又、甘言に誘われて、つき合っているという噂をきく。我々同好者仲間では、S Mプレイを金で売ったMに対し、最早、一顧だにしないのに、散々煮湯をのまされた彼に、依然として会って、プレイしている彼女は、歯搔ゆいばかりの、お人好しさであった。



Mの悪名は、私達の仲間では誰知らぬ者はいない。仲間から見離された彼は、このお人好しの善女、超被虐女性に、又ぞろ声をかけるしかなかったのであろう。

しかし、その反面、プレイ出来る相手なら最早、相手選ばぬモレツさが、むしろ良識ある嗜虐人士からは敬遠される結果になっていた。彼女をMに紹介したのは私である。

彼女の求道の激しさをムチ打つ前に、そうさせていった私にも、責任の一端はあることを反省している。

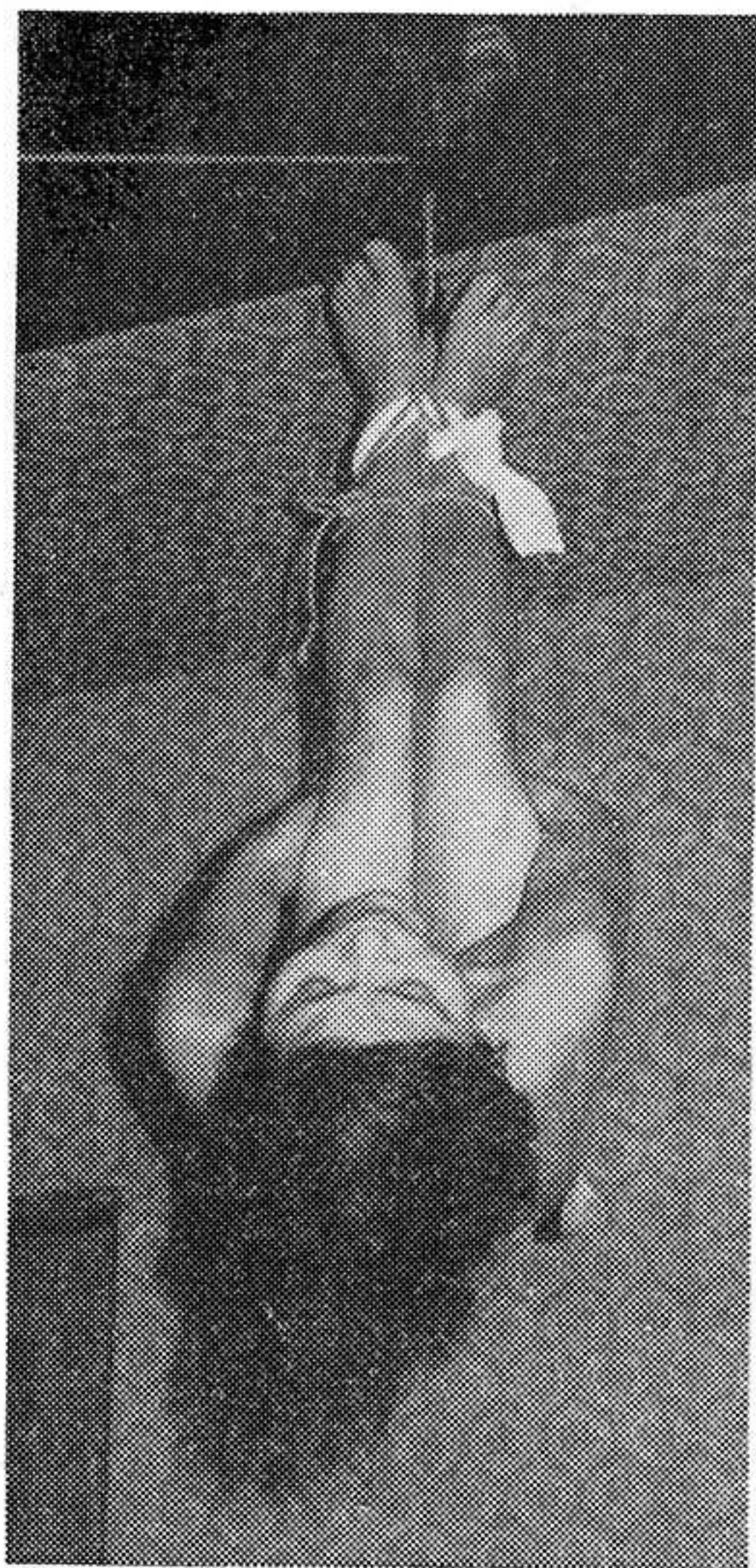
楚々とした風情で、柔和な微笑みを浮かべ

て、渡部好美が階段を降りてきた。

ドクター氏と期せずして顔を見合わせ、吊り責めにかかる前の、乾いた緊張が一瞬よぎった。既に彼の顔は、ビッシヨリの汗に光っている。

× × ×

「なるべく、お手柔らかく、お願いします」
渡部好美は、淑かに頭を下げて、いつも寂しげな、かげらいのある、ひとやかな笑みを浮かべた。唇の薄い、ほっそりとした彼女から、私は、いつも薄幸の翳を感じる。しかし現実の彼女は、激しい恋愛によって結ばれた



愛する夫と二人の子供のよき母として、理解ある彼によって、内向していた被虐性も存分に発揮出来、さして贅沢さえ望まなければ、結構、恵まれた家庭で過ごしていた。弱々しくみえる中に意志の強さもあり、それは彼女の顎の骨の、少し張ったところに、如実に現われていた。我慢強さも抜群で、プレイのあとで、夫には甘えて、綿々とその時の苦痛を訴えても、プレイの最中には、滅多に弱音を吐かず、苦悶の声すら押し殺し、歯を喰い縛って我慢しているのであった。そんな好美的内訌的な控えめの性格を知っているだけに、

私は、彼女と一对一のプレイの時、いつも手ぬるくしてしまう。好意をもっているだけにフェミニストになり果て、むしろ、彼女が夫に語るのをきけば、いつも私は手ぬるくて物足りないなど蔭でいわれている様である。なよやかで、弱々しげな彼女に、どうしても、激しく嗜虐の感情を、ぶつつけることが出来ず、つい思いやりめいたものが先行してしまうのであった。

たからである。

「さあ、センセイ、どうぞ——」

吊り向きの緊縛を彼に契めると、とんでもないという風に手を振って、

「いやいや、辻村さんからどうぞ。ベテランを前に置いて、とても、とても」と謙遜する。

「じゃあ、まあ一緒に考え乍ら、やりましようや」

逆らわず、私は吊りの第一発に、猪吊りを採用することにした。

彼女にフロアへ仰向きに寝てもらおうと、両脚を高く掲げさせ、膝うらで両手を揃えて縛り、余った縄を腰に回して結びとめる。縛り方は至極、簡単である。こうして両足首で吊り下げるのであるが、これは両足首に、全身の体重がかかるので、相当に足首が痛い。

いきなり苦痛を与えたら、爾後の吊りプレイに差し障りがあってもいけないと、持参した晒布で足首を、しっかり縛り、それに縄を巻いて滑車をとりつける。ついで階上の手摺木にも、もう一個、滑車をとりつける。

別に一本の縄を階上から下へ垂らし、足首の滑車に通して、階上の滑車に通す。力学の応用で、こうすれば、女体を一方が軽く持ち

上げるだけで、縄を引けば、軽々と浮上してゆく段取りであった。

渡部好美は、小柄で体重の軽い方であり、ほっそりしていて、如何にも嗜虐者好みのタイプである。

よくよくのことがない限り、プレイにクレームはつけず、余計な口は余りきかないし、自分に課せられた使命に対し、甚だ、忠実であった。

滑車を縄が走り、ドクター氏が好美を抱え上げ、私は縄を引いて、予想通り、好美の体は宙に浮く。これは比較的、吊りのうちでもラクなポーズであった。

ドクター氏が、好美の体を離れた時、彼女は、あっと小さく呻いて、激しく眉をしかめた。何処か痛むのだろうか――。

縄尻を握ったまま、

「どこか痛いのか？」

と、声をかける私。

「両足首の、ウメボシの骨が、すごく痛いんです。あーあ、い、いたい……」

好美が悲鳴をあげるなんて珍しい。私は慌てて、スルスルと降下させる。も一度、よくその痛む箇所を点検してみても分かった。両足首を縛った晒布を強くしめ過ぎて、両足のウ

メボシの骨が、ぐりぐりと接触し過ぎて、吊り下げと共に、それが激しく圧迫されて、耐えられなかったのである。

晒布を少しゆるめて、改めて、もう一度、試みる。好美はチラッと、眉根を顰めたが、今度は黙って、こらえていた。

いつもいうことであるが、吊りの場合は、地上一〇センチ離れても、高々と吊り下げても、被虐者に与える苦痛は同様であった。しかし、視覚、感覚的に訴える迫力は、月とスッポンほどの差があった。

吊りの場合、高さに比例して、迫力は増してゆく。

今、実に高々と、好美の両足が、階上の床すれすれにつくぐらいに吊り下げた、その景觀は、サジスチックな我々にとって、正に圧巻そのものであった。

「いいですねえ。実に素晴らしい」

久し振りに、ナマの吊り責めに接したドク

ター氏は、衷心から感嘆の声を洩らす。

高所恐怖症から、すっかり解放されていな

い好美は、かたく眼を閉じている。

滑車と滑車の距離が、十数センチもないままに引き上げたから、いつものように、体がぐるぐると回転せず、動揺も少なく、好美は

空中で静止していた。手を伸ばせば、好美の肩に触れる高さである。二人のカメラが、主人公に向かって、放列を敷いたことは、いうまでもない。私は吊り下がった好美の真下に行つて、

「どう、我慢出来そう？」

と、声をかける。うっすらと瞳を開き、

「ええ、もう少し、大丈夫です」

「どこも痛くない？」

「ハイ、今のところ……」

私は髪を掴んで、好美の体を少し捻つてみた。手を離すと振子のように揺れて、すぐ元の位置に戻る。縄をムチにして、揺れる好美の肉の薄い臀部を、数度、打ちのめす。

「あッ、ウーッ……」

くぐもり声に苦痛をこらえ、喘ぐ表情に、微かに淫靡な、悦虐のかげが、ただよう。

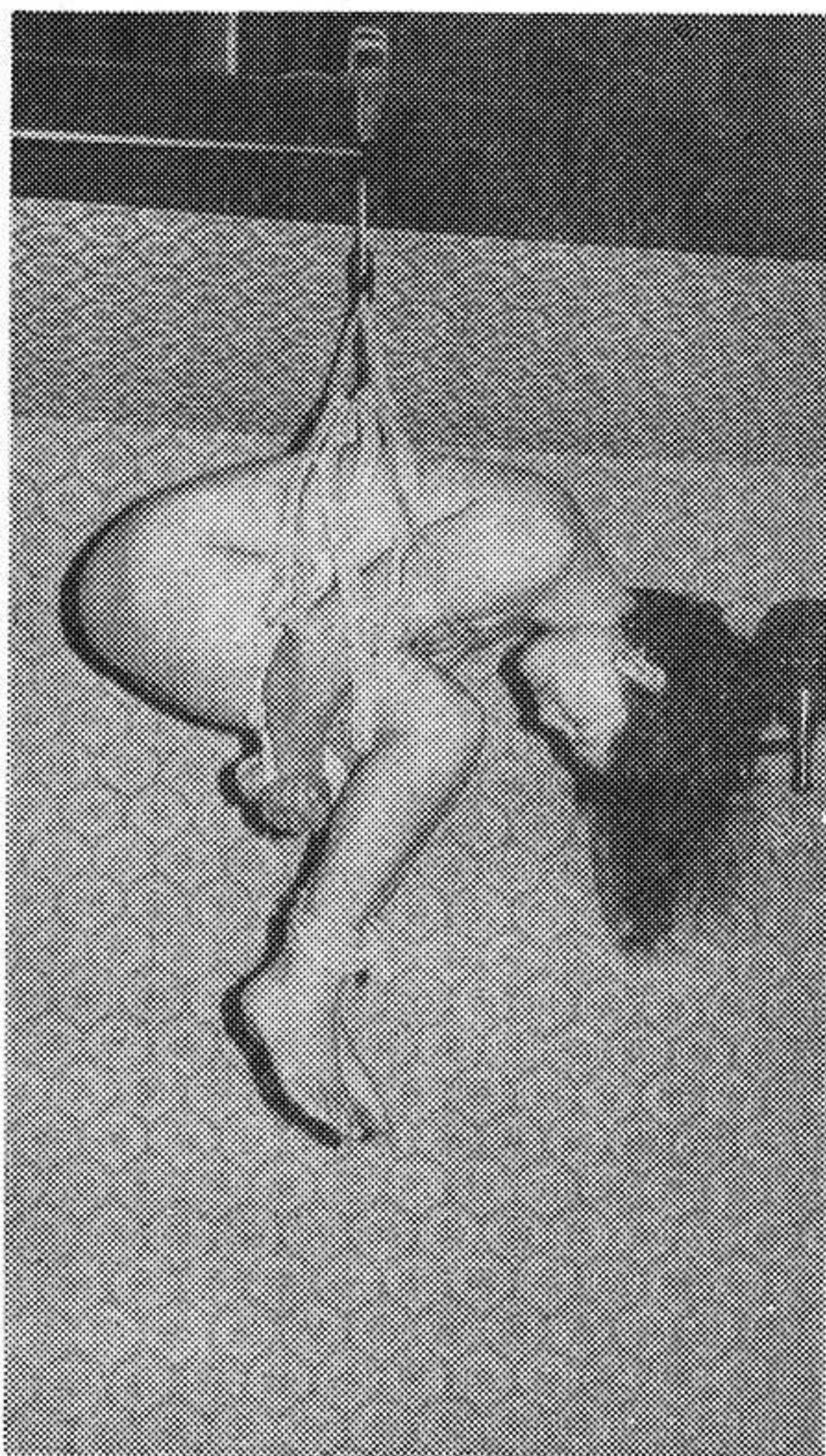
私の手が、悦楽を助長させるように、しめやかに這ってゆく。

渡部好美は、遠慮がちに、歓びの忍び音を洩らしていた。

× × ×

膝うらの、縛った両手が痛いかときくと、未だ我慢出来そうだと応える。

緊縛は、一連の連繫を保って続けられてい



った。

吊り縄は下がって、好美はヒソソリと、赤いカーペットの上に横たわっている。

「ああして膝うらで縛っておいて、背で吊り下げてみましょう」

「ええ、いいですね、いいですね。この人は全くだい」

ドクター氏は、唯ならぬ感激振りで、汗を拭くのも忘れて、私の周りをウロウロする。

結局、私が敢行する結果になる。

改めて好美の両脚を縛り、屈折した俥、ぐるぐる巻きに縛り、背に滑車を結びつける。

かなり強く締めつけたつもりであったが、キリキリと縄を引っ張ってゆくと、背に、かなり空白が出来る。縛った縄が伸びるのであ

ろう。体重は、腿と膝のうらにかかっている筈であった。

引き続き一休みする間もない、前につづく連繋作業である。

高々と吊り上がった女体は、見事というし

がなく、観念したように好美は、しっかりと眼を閉じている。

いつもの夫の責めとは、全く違う一つの形態であった。彼につきものの、針もローソクの責めも、ここにはない。

只単に、吊りの緊縛美を追求して、それに陶酔の眼をやる、純粹の緊縛プレイのみであった。

SM的なプレイを離れて、私は久し振りに緊縛自体に汲々としている。しかし、単なる緊縛は、もう過去、イヤというほど試みている。吊るすという行為自体に、女体に相当の苦痛を与える、責的要素が多分に含まれていた。

徐々に、好美の表情に苦痛の眉根が寄る。かなり長い吊るし時間を、必死にこらえている様子が、ありありと窺われる。

自身の体重で、縄目は一入、喰い込み、緊縛の苦悶は加重してゆく。

私はこの時、俄に好美に対し、激しい嗜虐の念を抱いた。従順に忍従すればする程、意地悪く、せめさいなみたい心理――。

彼女がヒイヒイって、降ろしてくれと見ても体裁もなく叫んだら、私は直ちに落下させていたであらう。懸命に我慢するから、尚



更、泣き喚かせてやろうと虐めたくなくなってくる。これは判つきり、サジストの心理に通じていた。

サジがかった亭主が、気に喰わぬと女房を殴りつける。怒りを転換させるか、逃げればいいものを、いつ迄もぶつぶつ対抗して文句をいっていると、憂憤の吐け口のように、亭主は更に威丈高になって、殴り続ける。殴られる女房は、それを甘受して、内証しているマゾ性をみだしているのなら、それもいいがそんな夫婦ばかりでもあるまい。

いつまでもメソメソしていると、余計殴りつけたくなる心理、それにどこか似通っている。

た。

じっとおとなしくしているものを、泣くまでいじめてみたい——。まるで、餓鬼大将のような、そんな思いで、私は手を高く振り上げ、小気味よい音を辺りに響かせて、好美の尻を、ぶち続け、果ては、女体をぐるぐると根よく廻して、滑車間の縄が、一杯によじれ切ったところで、さっと手を離れた。

激しい勢いと、はずみをつけて、女体が逆転し、独楽と舞う。よりを戻して逆廻りをゆるゆるして、漸くにして静かに揺れつづけていた。

「こわい……こわい……ああ、こわいわ」

好美は、きれぎれに、ヒソと呟いている。空中での回転が、苦痛より、恐怖に繋がっていた。

華麗なる対決で吊るした時に較べて、抜群の忍耐力である。あらかじめ、夫の渡部先雄に、吊り責めオンリーを伝えてあったから、今日の好美は、それ相当の覚悟で臨んだのであろうが、高所恐怖症は別ものであった。

「怖くないよ。絶対、落ちっこないからネ。さあさあ、いい子、いい子」

ドクター氏は、まるで子供をあやすように好美の恐怖に昂ぶった神経を鎮めている。その眼は、うっとりとして恍惚を湛えている。

「センセイ。私、目が廻っちゃって、何だか胸がムカつきます」

「そうかい。じゃあ、降ろして少し静かにしていようね。すぐ気分が治りますよ」

「ハイ……」

ドクター氏にいわれると、精神安定になるのだろう。しかめていた眉が、少し解けてゆく。愁眉を開くといったところであろう。

ドクター氏は、さもおしげに、好美のおしりから腿のあたりを撫でさすり、感にたえぬ風情で、

「ああ、よく頑張るね。えらいね」

と、しきりに讃美を贈っている。吊りに耐える彼女が、ドクター氏にとっては、何ものにも勝る欲びの対象のようであった。

「降ろしましょうか、そろそろ……」

ドクター氏へ、声をかける私。

「ああ、そうしましょう、そうしましょう」

彼は下から支える様に好美の両脚を、しっかりと握り、ずり下がってくる女体を、大きな牀で、すっぽり抱え込むようにして、そっとフロアへ降ろした。その受け入れ態勢に、好美へ対する、いたわりが一杯に、こもっていた。

「ああ、暑い——こう暑くちゃ、やり切れない」

独り呟いて、彼は匆々にカッターを脱ぎ、ズボンを脱いで、薄いシャツとズボン下の姿になった。ズボン下のすぐ下は愛用の禪一本である。流石にそこまではなれず、彼は、しきりに汗を拭いていた。

吊りの連続が、激しい興奮を喚起して、緊張が汗となって、噴き出しているかのようなのである。

私も彼にならってシャツとズボン下一枚。御同様に、その下は禪一本。期せずして、同様のスタイルである。もうここ二年以上、夏

冬、禪で通してきたが、敬愛するドクター氏は、軍隊より帰還以来というから、彼の禪愛好は徹底していた。

滑車を外しただけで、私は縄を、解こうとしない。小憩後、更に連繋の吊りを実施する予定だったからである。

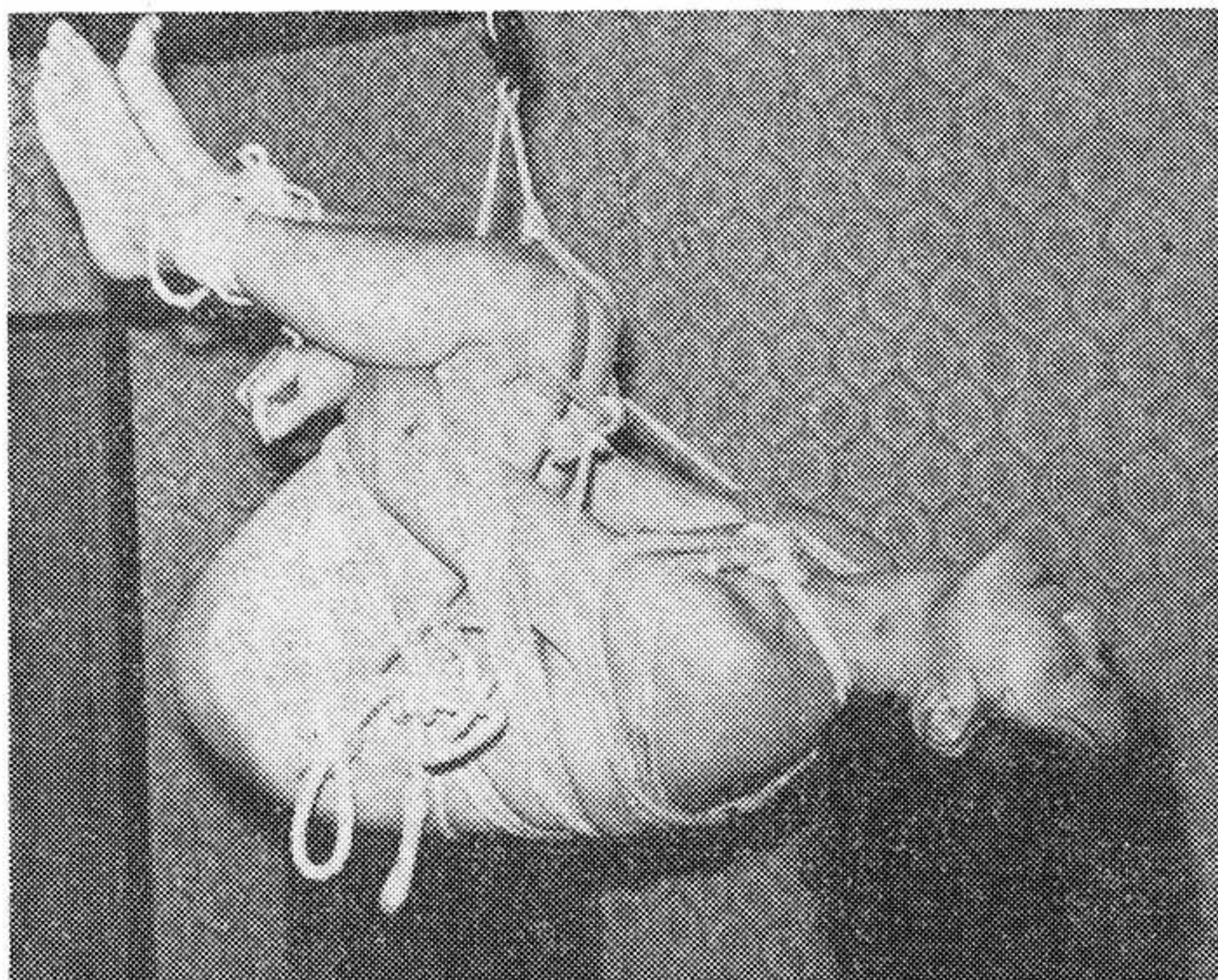
× × ×

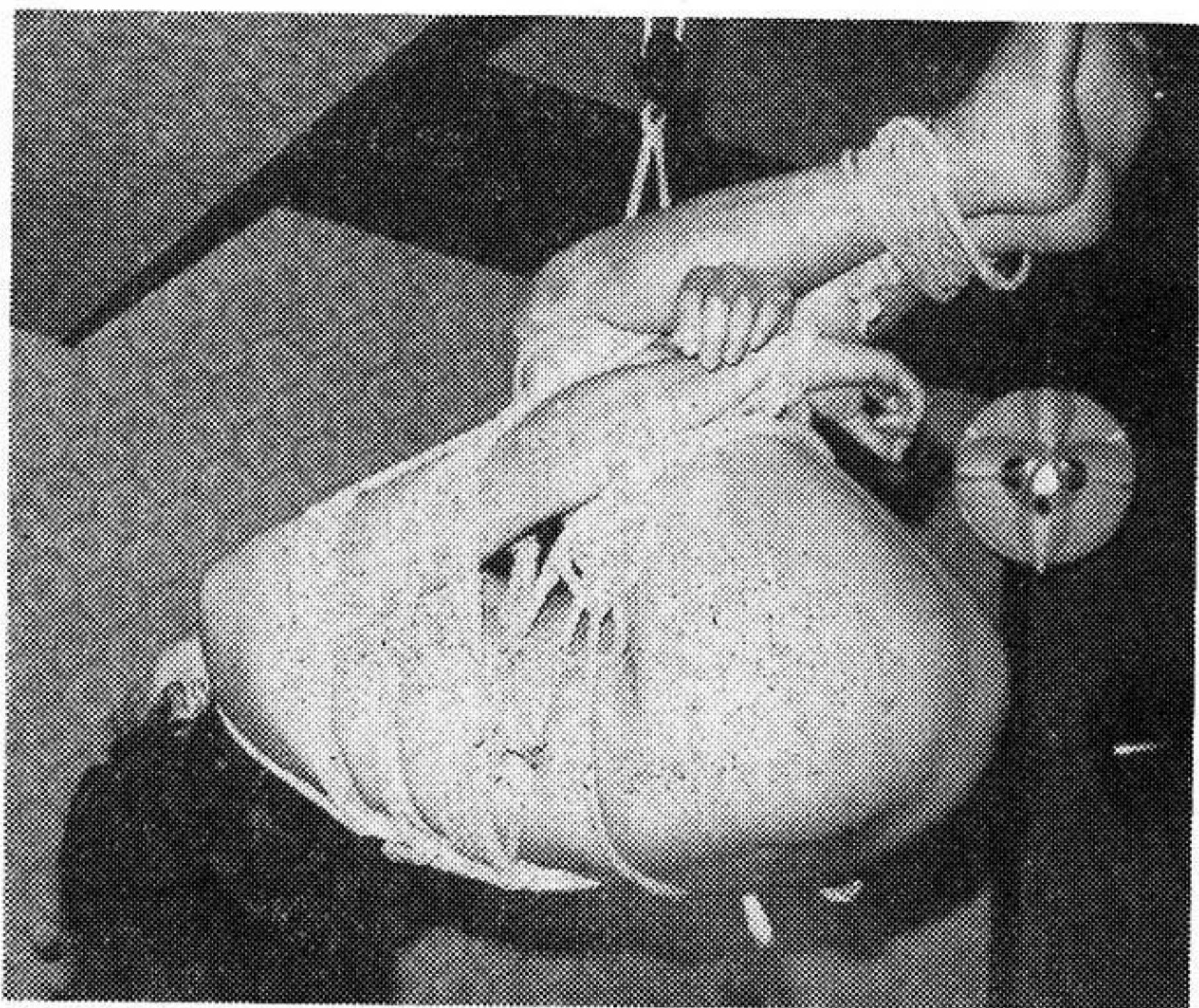
もうドクター氏は遠慮をしていなかった。私がソファに凭れて煙草を吸い、のどの渴きをファンタで癒している時、彼は優しく好美をいたわり乍ら、更に太縄を彼女の肌に、ふやしていった。縄をとくどころか、刻々と緊縛は、縄の量を弥増してゆくばかりである。

首縄かけ、胸でしめつけて、両膝につなぎ減多矢鱈に、縛ってゆくのを私は微笑ましく見守っていた。そろそろ、ドクタ

ー氏の、吊りに対する本領発揮である。

膝うらから背にかけて、ぐるぐる巻きにし





た縄に滑車を結び、その縄を念入りに膝にかけわたしている。
流石に好美は、ぐったりしていた。

「ましよう。大丈夫のはずですから」
ドクター氏は、私に縄の引き手を促して、
ヨイショと、好美夫人を両手で抱えた。

緊縛プレイを始めてから、まだ一度も自由を与えられていない女体は、かなり、へたっていた。正に肉体の酷使である。膝うらで縛られた両手は既に蒼白に交じ、そつと触れると、氷のように冷たかった。血液の循環が、細々としか通っていないのであろう。

にもかかわらず好美はやめてくれとは、いわなかった。

恐るべきこの忍耐力。Mアニマルでも、谷山久美子なら、派手にギアギア騒ぐところを、好美はシーンと、ひそまりかえって、ぐっと唇を閉じて苦痛を忍んでいる。「さあ、これで一丁ゆき

スルスルと女体は苦もなく上昇してゆく。高々と吊り下げて、引き縄を階段の手摺に確かりと、つなぐ。

ドクター氏は、そろそろ手を離していった。もうあらがう気力も失せたのか、ぐったりとした女体が空中に微かに揺らいでいた。

両膝の間から滑車の縄がピンと、はりつめ女体は水平に、見事に吊り下がっている。

息を弾ませてドクター氏は、右往左往して懸命にカメラに納める。それは私も同じことであつた。

遠く離れ、近々と寄り、階上から、真下からと、大の男二人、入れ換わり立ち換わり、絶え間なく閃光を走らせていた。

連続して、既に三種の吊りが展開されていた。不死身の彼女にしても、忍耐の限界があるから、何となく心慌しい。私達の脳裡は、その刹那、すべてを忘却して、吊りの醜味を満喫していたようである。

緊縛自体が、責めを伴うものは、吊りがその最たるものであろう。

打擲も、ローソクも、針も、何一つ必要とはしない。こうして、吊るしているだけで、刻々と苦しみは増し、苛酷な責苦の様相を呈してくるのであつた。

フォトを撮るために、私達は交替で、好美の体を、右に左に回転させた。

何をされても、齒を喰い縛って黙した俚、彼女から、終焉を請う言葉は吐き出されなかった。

手が走り、指が戯れの動きを始めた時、好美は微かに呻きを挙げた。

既に朦朧と混濁のないまざった脳裡に、おそらく、その戯れは、快しとは感じていなかったに違いない。

諦観の念を苦渋の頬に泛かべて、必死に耐える好美の心衷は、只管、吊りの終焉を願っていたのではなかったろうか。

この間、約六、七分足らずであったが、連続、吊りに続く吊り責めに、くたくたになっていた彼女にとっては、懼らく、無限に長く感じたことであろう。

フロアに体がついても身じろぎもせず、精根共に使い果たしたように彼女は、ぐったりとしていた。

甲斐々々しく、ドクター氏は縄を解く手ももどかしげに女体を解放してゆく。私も、じっとしていない。手伝って、二人で全身の縄を解き放ち、プレイ開始以来、やっと好美に自由を与えたのであった。

流石に医師である。素早く手首を掴むと、じっと脈搏を数え、胸に手を当てて、心臓の鼓動を確かめるのであった。

ウン、ウンと独りうなずき、そっと好美を抱き起こしてやると、暖かく、自分のかいなの中へかかえ込み、

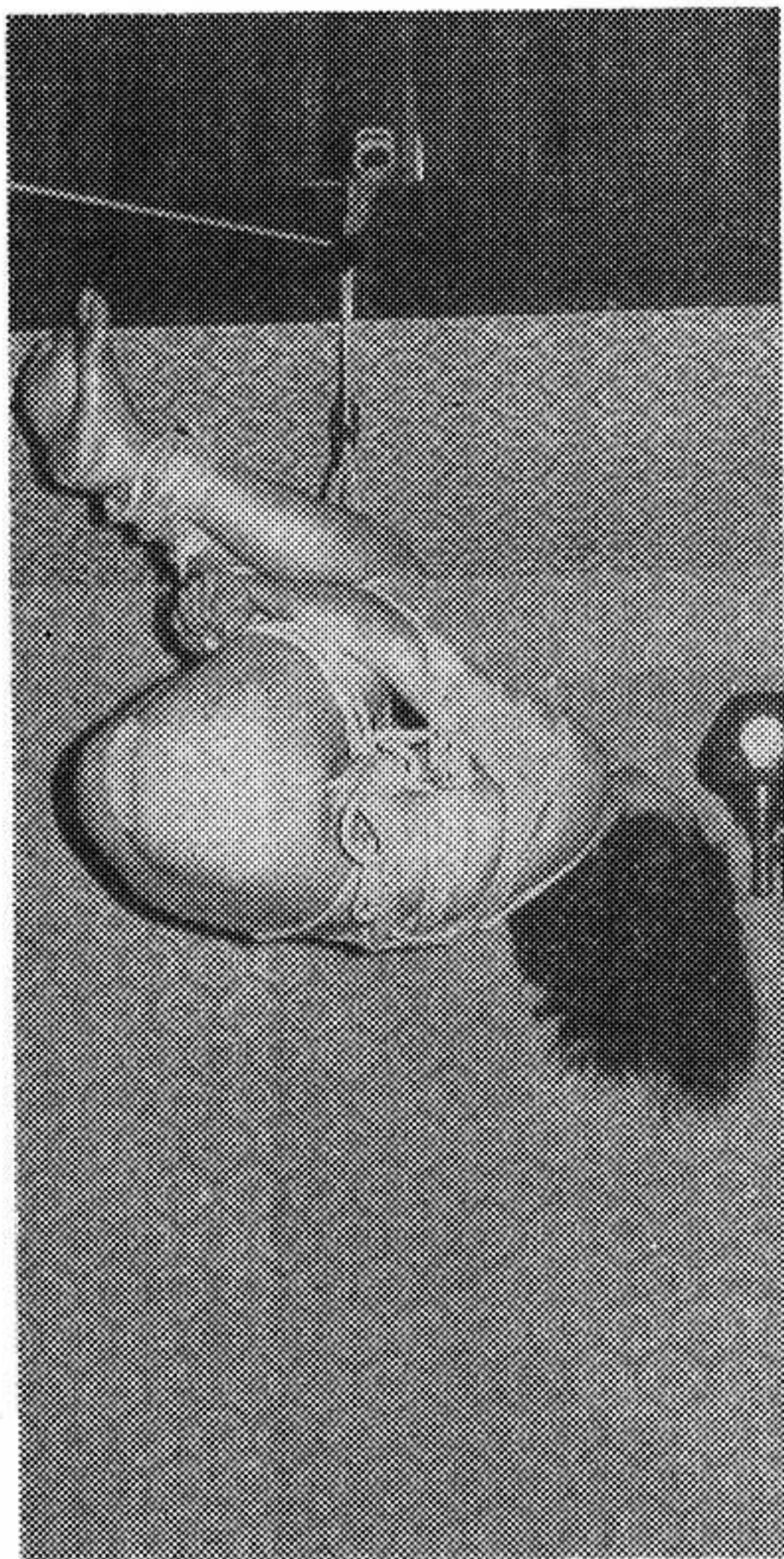
「大丈夫、大丈夫。すぐ気分が治るよ。本当に、よく辛抱したねえ。有難う、有難う」と、頬ずりせんばかりに、いたわるのであった。

強烈な苦痛を強要して、果たし終われば甘美に優しく、いたわってやる。それはSMP

レイにおける、不可欠のルールであった。ドクター氏は、自らの要請を心得ているから、私に代わって、しきりに好美夫人に最善を尽していたのであった。

優しさに甘えるかの様に、彼女はドクター氏の胸の中に、深々と顔を埋め、たおやげな裸身を、心なしか押しつけていった。

全身、くっきりとした縄痕だらけの肌を、静かに撫でさすり乍ら、彼の視線がチラッと私に流れ、照れたように眼許を細めると、いいだろう？ という風に、眼が私に問いかけて、愛撫の許容を求めている。



うなずき返して、私は手持ち無沙汰になりソファに腰をおろし、煙草を啜えた。

感激、感激雨あられのドクター氏と、連続吊り責めに、遂にたえ忍んだ好美との間には淡い愛情に似た、涙ぐましい感傷の渦が巻いていた。

耐えに耐え抜いた苦しさを、好美はドクター氏に知って貰いたかった。そんな我がさが、いとおしく、無言の抱擁の中で、静かに優しく、裸身を撫でさする、ドクター氏の柔らかな手が、千万言に勝る、慰労の声なき、しるしとして、好美を甘美な陶醉に、誘い込んでゆくようであった。

彼は好美を抱きよせて、何か耳許で囁いている。ウンウンというように、彼女は微かにうなづく。

そっと、裸身を我が胸から離れた彼は、縫れた縄を、静かに一本一本、解きほぐして丸めていたが、いたわるように好美の肩を抱くと、両膝を揃えて立てさせ、その上に体を蔽いかぶさるようなポーズをとらせていた。

(おやっ、センセイ、やる気にいるんだな)

私は彼の巧みな誘導を、微笑ましくみつめていた。優しくいたわり、愛撫し乍らも、初志を貫徹してゆく、緊縛へのあくなき欲求は

見上げたものである。

私は、黙って煙草をふかせ、委細を彼に任せて見守っていた。

彼は浮々した様子で、ヒタと蔽いかぶさるようにして、太縄をしきりに捌いている。立膝した、膝うらから体にかけてぐるぐる巻きに何重にも縄を掛け廻して、膝と乳房をしっかりと押しつけ、締め上げていた。

ついで、膝うらから首筋へかけて、別の縄で根よく巻きつけてゆき、好美は膝へ顎をのせた恰好になって、ドクター氏の縛るが尽に身を任せていた。

私の存在が気になったのか、チラリと振り返って彼は、私に視線を送ってきた。応援でも求める気であったのかも知れないが、いいから、いいからという風に、片手をあげて制止し、私はうなずいて笑いかける。

安心したように彼は作業を続けていった。

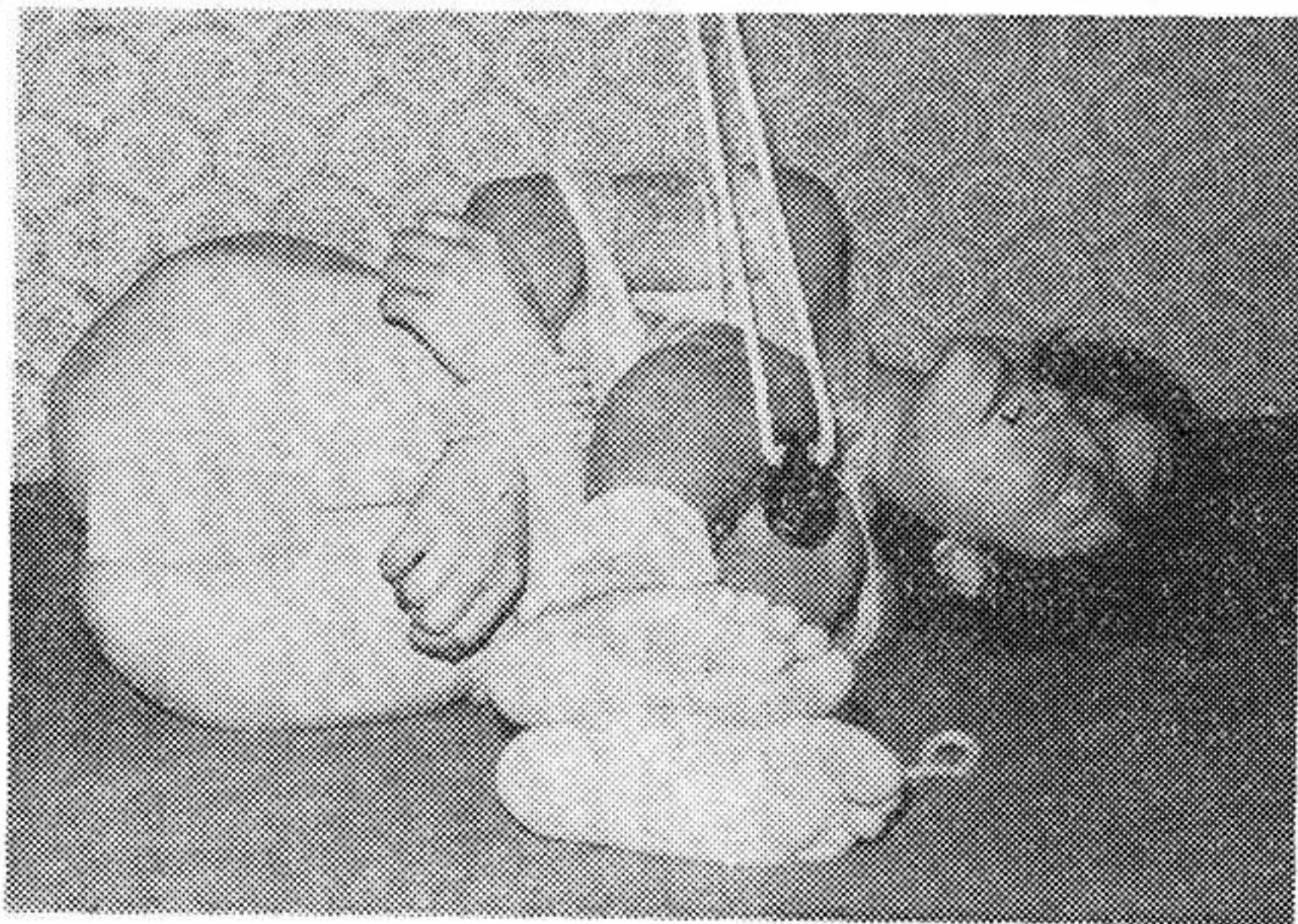
両手首を、それこそ何重にも、縄束になる程、巻いて縛りとめ、両肩を通して、足首につながる。

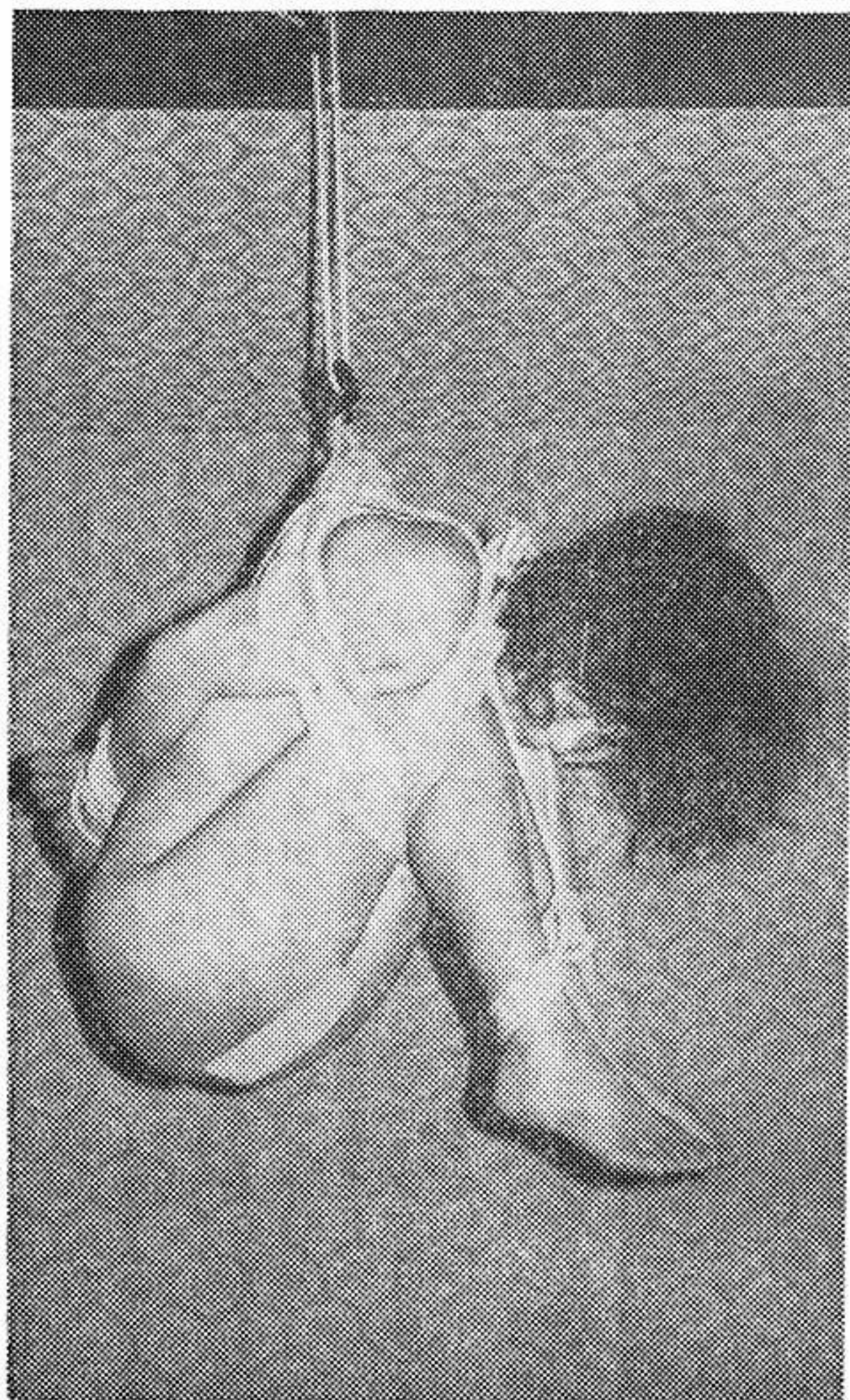
縛り終わって彼は、したたかの汗を

拭い、やれやれといった表情で、背に滑車を結びつけた。

大股に彼は近よってくると、

「では、縄を引いていただけますか——。ど





うも不細工な縛り方になりましたけど、どうでしょうか」

と、意見をきく。

「面白いですよ。しかし、回復しているのですか——」

「大丈夫——。かぼそく見えて相当、強靱です。相当、日頃鍛えられているのですねえ。(どう、吊っていい?) ってきたら、ハイと、はっきり、うなずきましたよ」

「そうですか——じゃあ」

私は立ち上がって、引き繩に手をかける。ウントコシヨと掛け声をかけて、彼は女体を持ち上げる。カラカラカラと、乾いた滑車の音と共に繩を引く私。

苦もなく好美の体は宙に浮いた。

重量は、膝うらにかかっているが、太繩の層が厚いので、吊りに対する苦痛は、比較的小さいようであった。唯、膝で胸元を圧迫さ

れているので、余り長い吊りは、呼吸を困難にさせるかも知れない。

私は、Uの字につき出た双臀に手をかけてゆらゆらと、ゆさぶる。

ゆさぶられると、恐怖にかられるのか、好美は、怖そうな悲鳴を小さく挙げつづけた。

ドクター氏は、吊り責めには、モーレッツにハッスルしても、女体の探究には、さして関心を持たなかった。いや、男性である以上、関心がないといえバウソになるかも知れないが、どこまでも紳士らしいプレイを続けて、努めて探究には無関心を粧おっていたのかも知れない。

その点、私はどうも好色精神、旺盛であった。

揺れる女体の、叩き頃合に眼前をよぎる臀部に、つい、愛撫の平手打ちが走る。

パシリ、パシリと、程よい力で、双臀を薄桃色に染めあげてゆく。

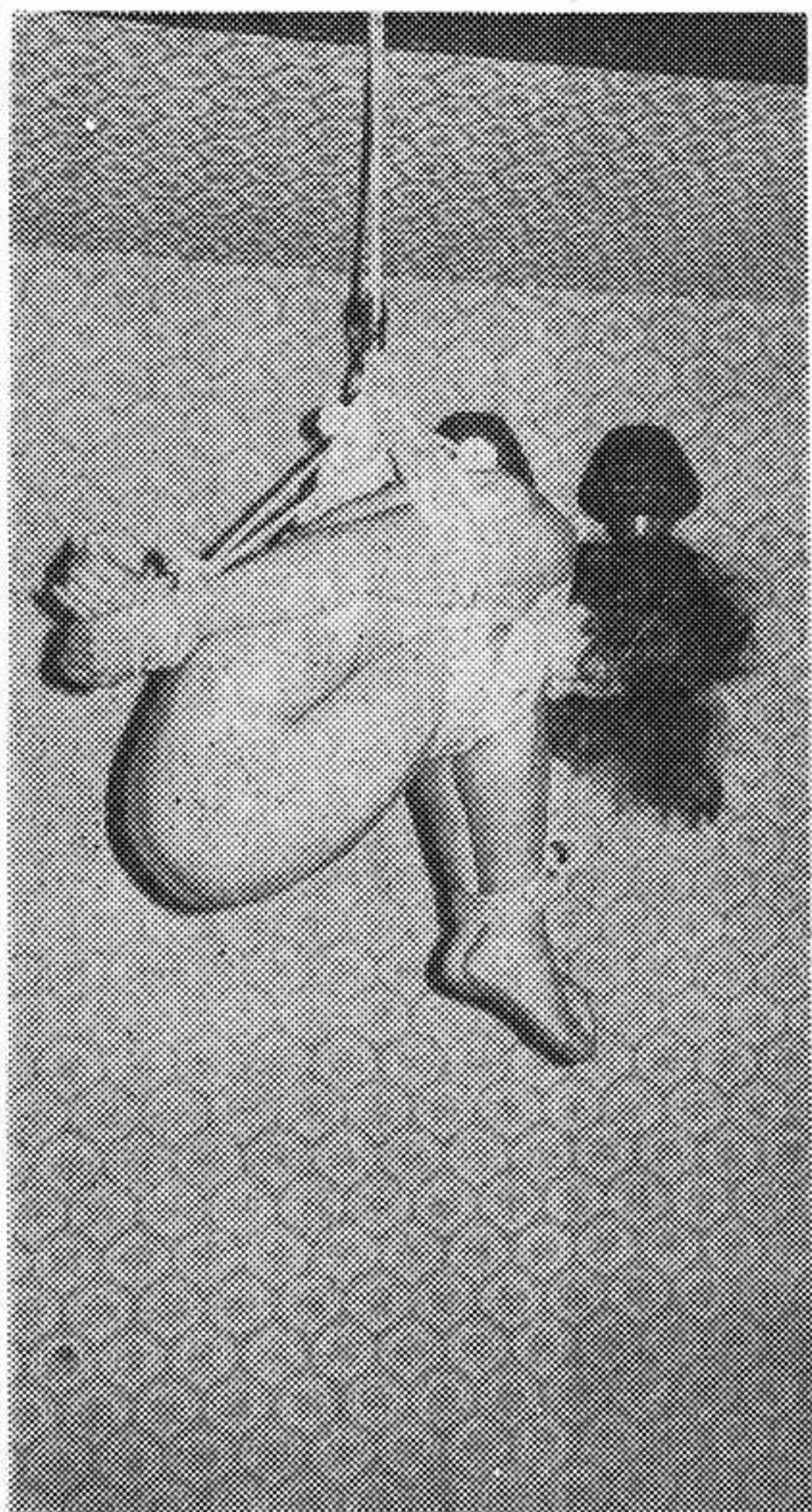
果ては、尻こぶたに両手をかけて、ぐいと持ちあげ、割り裂くようにして、これみよがしに、ドクター氏に向かって、あざとく曝したりするのであった。

好美の快楽と陶醉の反応は、いつも控えめであった。女のしとやかさ、つつましさから

男性の眼前で、激しく悶え、歓楽の疼きの喜びを、ありの尽、披瀝することは余りなかった。声を忍ばせ、歓びをこらえることが、美德のように思っているかのようである。

近隣も憚らず、思いのたけ、歓喜の叫声を挙げたことは、私とのプレイでは、一度もない。懸命に息をこらし、抑制して、哀れな美德を守りつづけているのであった。

それは、近隣、軒を接する薄っぺらなアパート暮しからくる、悲しむべき永年の習性であるかも知れなかった。



辺りに気がねするくらいに、遠慮会釈もなく、思いつきり喚き叫ぶ女性もチト困るが、さりとて、余りに抑制し、息を殺されても張り応えがない。

私は試しに、小型のバイブをとり出すと、吊り下がった美德の主に手を伸ばした。

羽虫に似た響きが微かに耳を打つ。

私はドクター氏と並んで、彼女の悦虐に変化する過程を、じっと見守っていた。

押し殺した、ごく微かな喘ぎが、やがて静かな、むせびなくような悦楽の呻きに成長した。

てゆく。

それが、好美の、精一杯の表現であった。如何にも私達の存在を憚った、つつましきである。

彼女は、大らかに、快感を謳歌するすべを知らないのだろうか――。

反面、歓びを押し殺して、いつ如何なる時でも、たしなみ深く振舞う美德が、考えようによっては、好美夫人の大いなる魅力にもなっているようであった。

(泣かぬなら、泣かしてみしよう、ほととぎす)

太閤さんは、数ある愛妾の中で、好美のように、つつしみを美德として、歓喜にも泣き喚かぬ女がいたら、イイ声を立てるまで、トコトン女体を責め抜いて、泣かせるまで秘術を尽したのであろう。やはり泣かぬホトトギスは張りがないということであらう。

女をホトトギスにかけたところがニクイ句である。

信長なら、女美風に泣き喚かなかったら、殺したかも知れないし、家康なら、更に飼育に飼育を重ねて、根よく女体が泣き喚くまで待ったであらう。家康は、かなりフェミニストらしい。冗言失礼――。

パイプは私の手に戻った。反響の薄さは、やや、私の期待外れであったが、それだけに自我を殺した美徳は、彼女の被虐性と相俟って、緊縛のプレイには最高であった。

自己を主張せず、どこまでも私達の行為に追隨しているからであった。

喜悦のささやかな呻きは、いつしか消えてゆき、縄目による、苦悶の喘ぎだけが、ヒソと私達の耳を、うつのであった。

ドクター氏は双臀を、しっかり抱える。私は縄をゆるめる。フロアに横たわった彼女は雨に打たれた海棠の花に似て、眼許に心労の影を宿している。

不安と恐怖が心身を奔り抜け、かなりのショックで、憔悴しているかにみえる。ドクター氏は子供をあやすように、いたわりの言葉をかけながら、縄を解いていた。

緊張のほぐれた時、軽い疲労が、のしかかってくる。

「一風呂、浴びてきますよ」

「ああ、どうぞどうぞ——」

私は二人を、その場に残して、階上の浴室へ昇っていった。

吊り責めにつぐ吊り責めで、やはり何となく疲れている。矢継早やの緊張のせいかも知れない。

れない。

今頃ドクター氏は、懸命に好美を介抱し、慇懃な口調で慰めていることである。

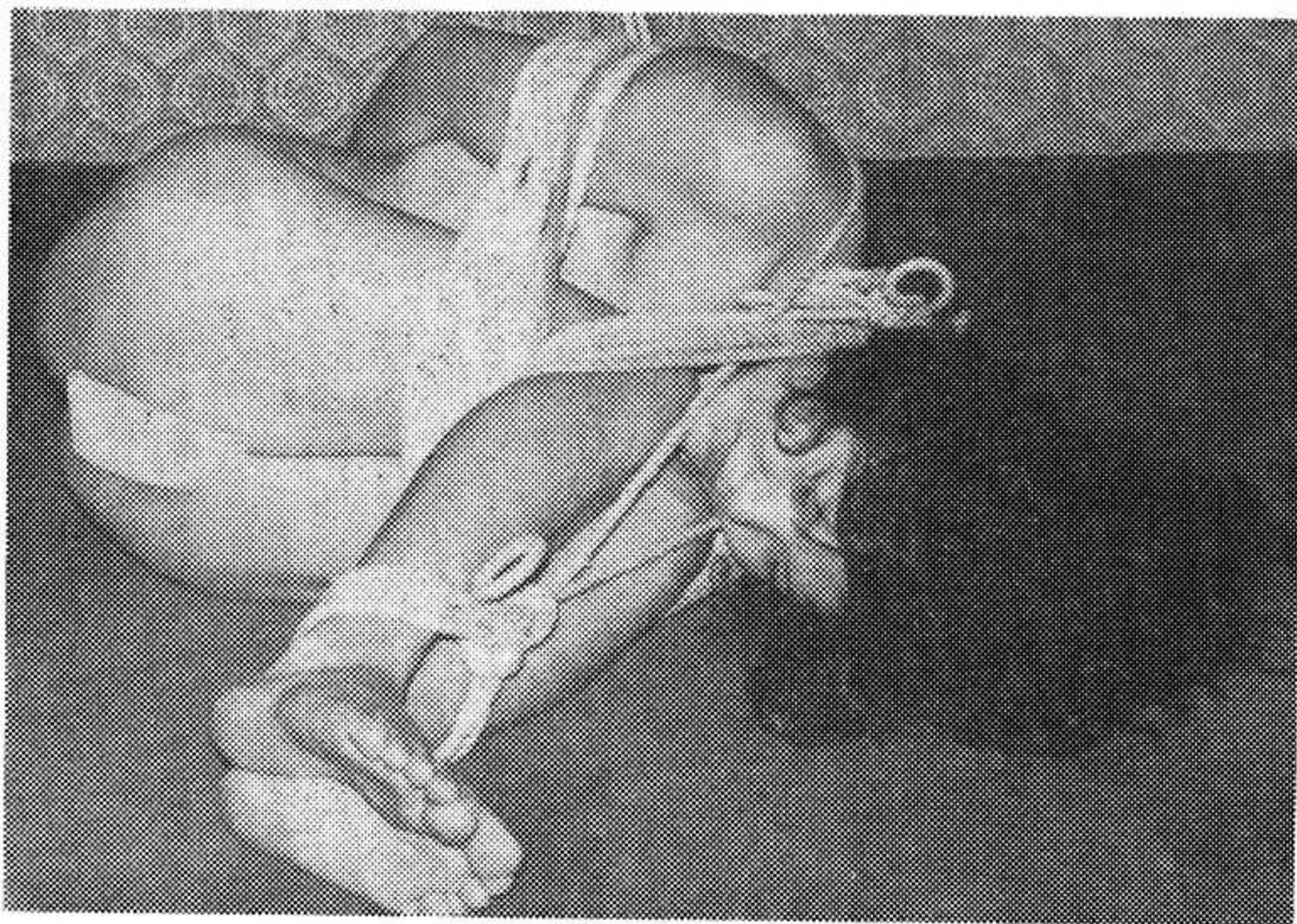
既に幾度となくプレイした好美に対し、今更、胸を昂ぶらせる程のことはなくとも、彼にとっては始めてだけに、おのずから私と感興は、格段に異なるはずであった。

× × ×

一汗流して、階段口に出てくると、階下のソファに並んで坐って、ドクター氏はビールをのみ、好美は、つつましくかにファンタを口にしていた。

理解し合った、なごやかな雰囲気は二人を包んでいた。私の姿を見かけると、ドクター氏は、やあという風に手を上げた。

彼は私にもビールを奨め



しみじみした調子で、

「何て、いい奥さんなんでしょう。実に素晴らしい人だ。こんな奥さんを持たれた御主人が、実に羨ましい」

と、最大の讃辞を贈るのであった。

「数日中に、子供さんを連れて、私んとこへ診察にこられるんですよ。今、約束しましたが、診察の日が、こんなに待ち遠しいのは始めてですよ」

と、この人にとっては、子供の病気すらも今は好美夫人との繋がりのように思えて、嬉しいらしい口吻であった。

「よろしく、願いますよ」

私は、まるで主人の渡部光雄になり変わったような口調になってしまった。

確かに、渡部好美夫人は、被虐性抜群で、しかも、優雅、従順の、申し分なきM性の妻である。しかし、羨望するドクター氏の夫人が、私の眼からみれば、好美夫人に勝るとも劣らぬ、いい奥さんであった。

公職では夫を助けて、看護婦の面倒見がよく、人手不足の折柄というのに、居心地がいいのか誰も辞めず長続きしているのは、ひとえにドクター夫人の内助の功であった。時々訪れる私が、この道の同好者であることを百

も承知で愛想よく、いつも笑顔をやさ

し、ドクター氏が、嗜虐性の吊り好きを知っていて、たまのこうしたプレイには、イヤな顔を絶対に見せず、快く送り出していた。だから彼は、SMプレイは、いつも奥さん承知の公認であった。彼等の愛の交換の寝室をみせていただいたが、ちゃんとプレイ向きに出来ていて、緊縛も甘受して、夫の好きな道に協力している様子で、彼もいつか、話の折にそのことを洩らしていた。

如何せん、美しき夫人は、ボリューム豊かな大柄の人で、センセイの好きな、吊りには不向きなようである。

夫人にしてみれば、自分では賄いきれぬ、吊りという苦役に、その協力の足らざるところを、他の女性に補ってもらっているといった、心豊かな寛容さが感じられる。

「主人がいつも、辻村さんに連れていただいで、本当に喜んでおります」

と、お礼をいわれて恐縮したことがある。

かほどに立派で、SMに充分、理解のある奥さんを持っていたても、やはり他人の花は赤く見える類なのであろうか――。

ドクター氏の奥さんと、万一にもプレイする機会があれば、私は万難を排してでも、飛

んで行くに違いないのに――。

「私も一風呂、浴びてこようかな。えらい汗をかきましたよ」

と、私と入れ換わりにドクター氏が立ち上がる。

「奥さん、よかったら一緒に、どうぞ――。センセイの背中、流してあげたら？」

意を汲んで好美に告げると、彼女は、ためらいもなく、うなずいて立ち上がる。今日の主役は、いつしかドクター氏に移行したようである。食事、ホテル代、プレイの報酬一切彼が負担する今日、謂わば、プレイのスポンサーでもあるドクター氏に、私は、ある程度の譲歩と敬意を表した。

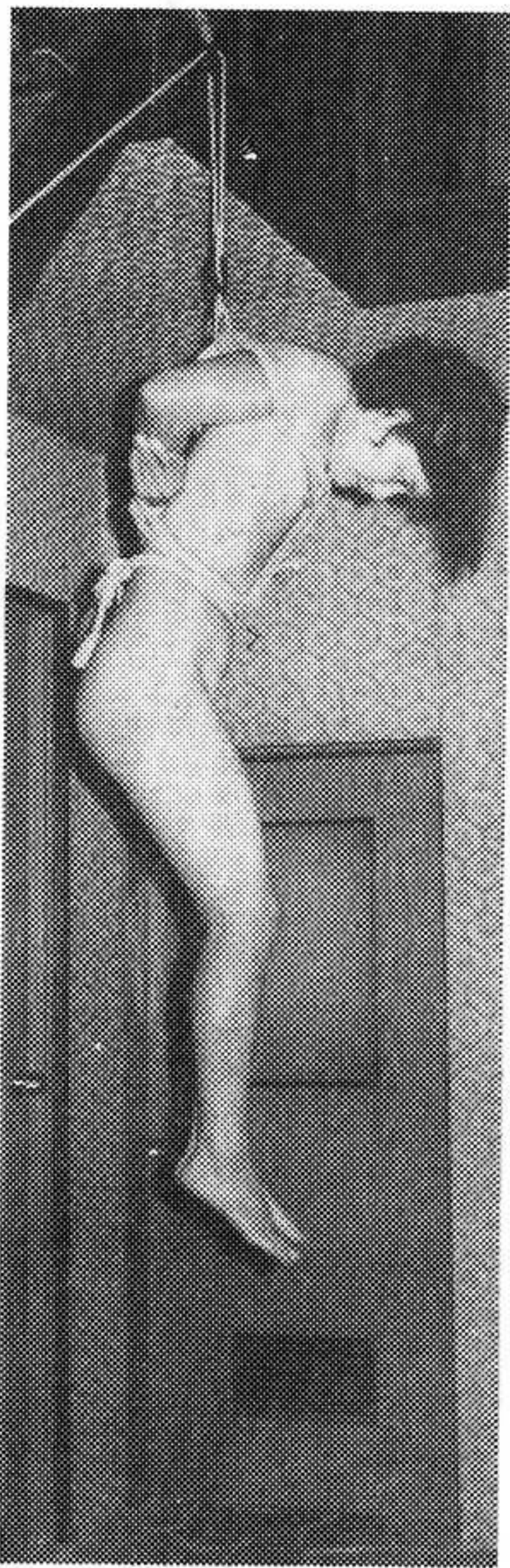
ガツガツせず、至って応場な彼は、又、私に対しても、ルールを守って、紳士である。紳士であるだけに、私は彼を喜ばせてやりたかった。

ビールをのみ乍ら、私は待つ。

浴室の二人のこと――、次のプレイの構想が、脳裡で交錯する。

紳士と淑女の風呂は予想以上に早かった。戯れもなく、額面通り背を流してもらって、あっさり出てきた様である。

独りにして私を待たしては悪いという、仄



かな心づかい——そんな態度の彼に、私は好意を感じるのであった。

一人の女性を挟んで、お互いに相手を牽制する必要のない仲。腹を探り合いせず、すむ同好者は、一緒にプレイしていても、気分がラクである。

私達は、いよいよ次の吊り責めに、とりかかった。

ドクター氏が好美の上体を縛り始めた。

胸縄で吊るす場合、心臓部を避けないと、全身の体重で圧迫され、呼吸困難になって、危険な場合もあるので、乳房から上に縄をかけ、その縄が抜けないように、腋の下に通して、しっかり締め上げ、両手を縛った縄で、胴をしめつける。吊り下げは、背にあたる部

分に滑車をとりつける。上搏部が、かなり圧迫されそうだが、耐え得るかどうか、とも角試してみることにした。吊り下げる位置を変えて、階段の昇り口に移す。同じ場所許りだと変化がないので、気分を転換したに過ぎない。

好美の体を抱き上げるのは、いつもドクター氏で、縄を引くのが私の役目である。私はラクな方へ廻ったつもりでいたが、彼女の裸身を抱きかかえるドクター氏は、結構、愉しそうであった。

縄を引いてゆくに連れて、体を押しあげてゆくから、吊り下げの作業は比較的、容易であった。

女体から彼の手が離れると、数センチ縄が

ね」

軽く狼狽して、ドクター氏と私はカメラに走りよる。

必死にこらえ、努めて平静を装っているが、堅く締めつけた縄が、背で若干の空白が出来ただけで、胸や腕の付け根が、しまっている証拠であった。

数枚とって、ドクター氏は、慌しく好美にかけより、すらりと伸びた両脚を抱えて、体を浮かせるようにする。

私は引き縄を解く。時間にして、二、三分ぐらいの短い時間であった。

ホッとしたように、大きな吐息が彼女の口から洩れた。

「どう、大丈夫？」

伸びて下降し、好美は美しい眉を強く、しかめた。

「何処か痛いのか？」

下から覗き込んで彼は優しく聞いている。

「腕の付け根が、すごく締まって……ああ早く撮って下さい」

苦痛の声を振りしぼって、好美は協力的に小さく叫んだ。

「ああ、よしよし、早く、早く



ドクター氏は、嬉しげな、えびす顔で、優しく、いたわっている。

「ハイ、時間が短かったので、我慢出来ました」

「この縛り方で、どうかね。もう少し、保たないだろうかね」

「長い時間でなかったら、我慢します」

好美は、かげらいのある愧らいをチラと頬に浮かべ、健気に、いききった。

「有難う。じゃあ——」

ドクター氏は縄を握ると、その上から尚、重ねて膝上まで縛っていった。

一つの緊縛を基本にして、縄のバラエティをつけ、異なった吊り責めを続ける意向で、先刻と規を一にしている。でないと、一つの

吊りの度毎に、解いたり、縛ったりを繰り返しては、時間の冗費が多く、吊り責めという、本来の目的からいっても、そうそう縛り方を変える必要はなかった。目先の異なるバラエティを持たせれば、それでコト足りるわけであった。

足首も別の縄で、かたく縛り終わり、彼は背と胴に吊縄を結んで、私に階上へ昇って、手摺に結びつけてくれるよう依頼した。心得て踊り場にしゃがむと、下から投げた彼の縄尻を掴み、手摺へ、好美の立ったポーズのまま、しっかり結びつける。

こうしておいて、足首に滑車をつけて引き上げると、頭と足が逆さになって、宙吊りになる寸法である。

うまくゆくかどうか、やってみないと分からない。

ドクター氏が好美の前に回り傾倒してゆく体を支える位置についた。

私は縄を引く——。

上体が前に傾斜し、彼は抱き上げるように支える。両足がフロアを離れ、ぐんぐん上昇してゆく。

階上の床に足がつく位まで引き上げて、しっかりと結ぶ。ドクター氏が支えていた手を離す。

両足首と、背の縄で、好美の全身が、ほぼ逆さになって固定する。

この吊り方は、一人の場合に利用すれば、最も行ない易い逆吊りの方法であった。

背の縄を解き放すと、真逆さまに、逆吊りの体が垂直になる。若し一人で行なうのであれば、引き縄を解く時に、ズルズルと一挙に落下しない様、注意する必要があった。

完全にMアニマル化した好美の裸身が、空間で静止して、鮮かに吊り下がっている。

足首の方に、より以上の重心がかかっていて、その縄の締め方が適当であったのか、さ

して苦痛の色もみせず、彼女は、ウーン、ウーンと逆さの息苦しい呼吸を吐き乍ら、じっと我慢しつづけていた。

吊りにつぐ吊りの連続で、忍耐の極限に追いつめられながら、好美は、一言もやめてくれといわず、無言で頑張りつづけている。

凄まじいまでの気魄で、じっとこらえる。

部屋に厳粛な静けさが流れ、私達の発するストロボの点滅のみが、まるで生きもののように刹那の光を、白々とした女体に投げかけているのみであった。

「降ろしましょう」

私は、ドクター氏に合図を送る。心得て、彼は裸身を抱く。

スル、スル、スル——引き縄がゆるみ、彼に支えられて好美は元の位置に足をつける。

「水平吊りに変えてみましょうか」と私。

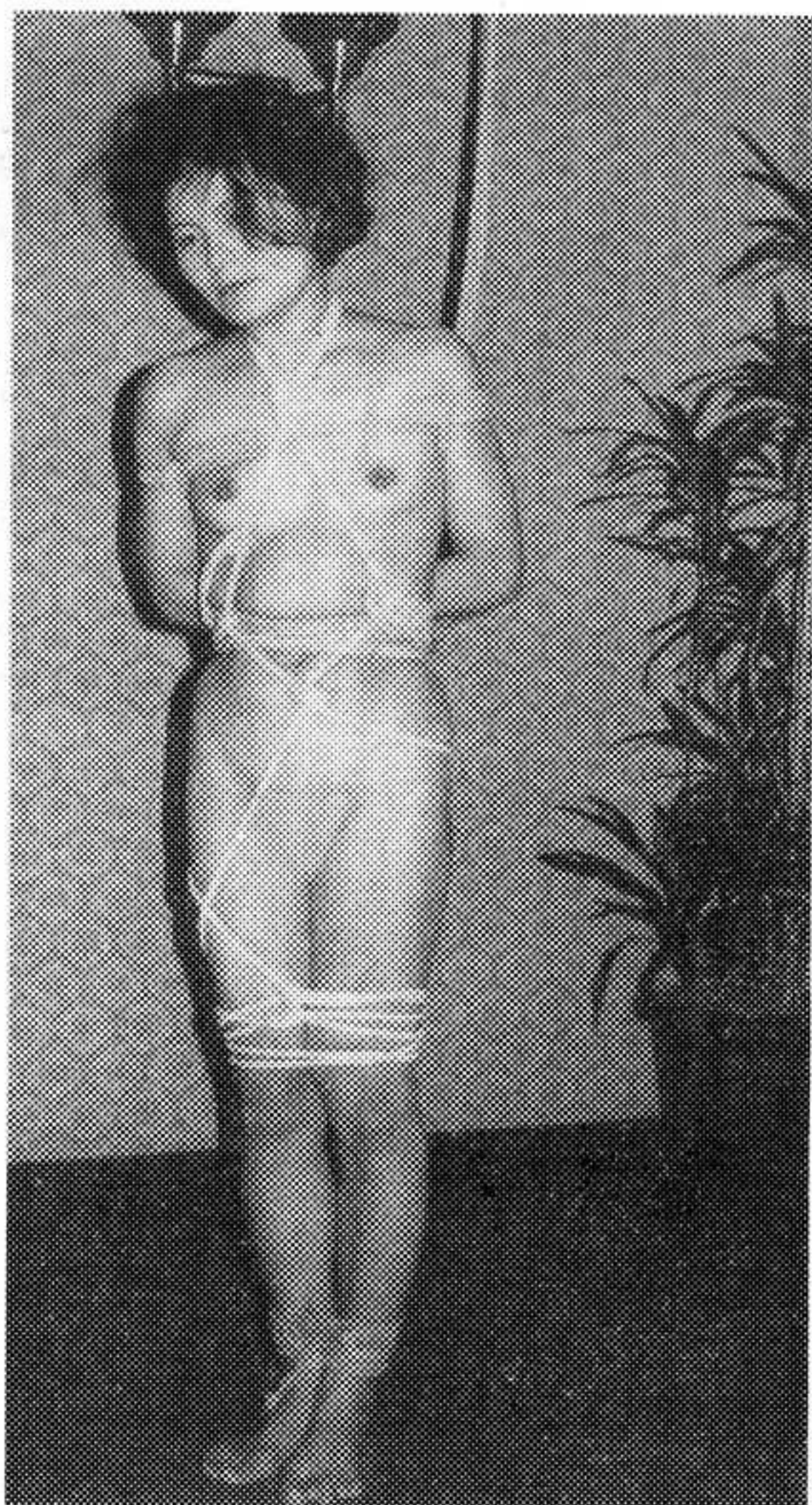
「そうしましょう、そうしましょう」

こと、吊りとなれば、どんなことでも彼は喜々として協力する。

足首の縄を解いて、膝のあたりを縛り、滑車を装着する。

再び、同じ繰り返し——。

頭の方が幾分、下降しているものの、見事な水平縛りが出来上がった。



背と膝で支えられた女体が、今、咫尺を隔てて、宙に定着している。

ハンモックを、ゆさぶるようにして押すと手摺が微かにきしみ、振子のように左右に律動的に揺れて、好美は声にならぬ悲鳴を挙げて、苦渋にみちた眉根を、しかめた。

さし当たって、ハンモック吊りとも名づくべき吊り方であろうか。

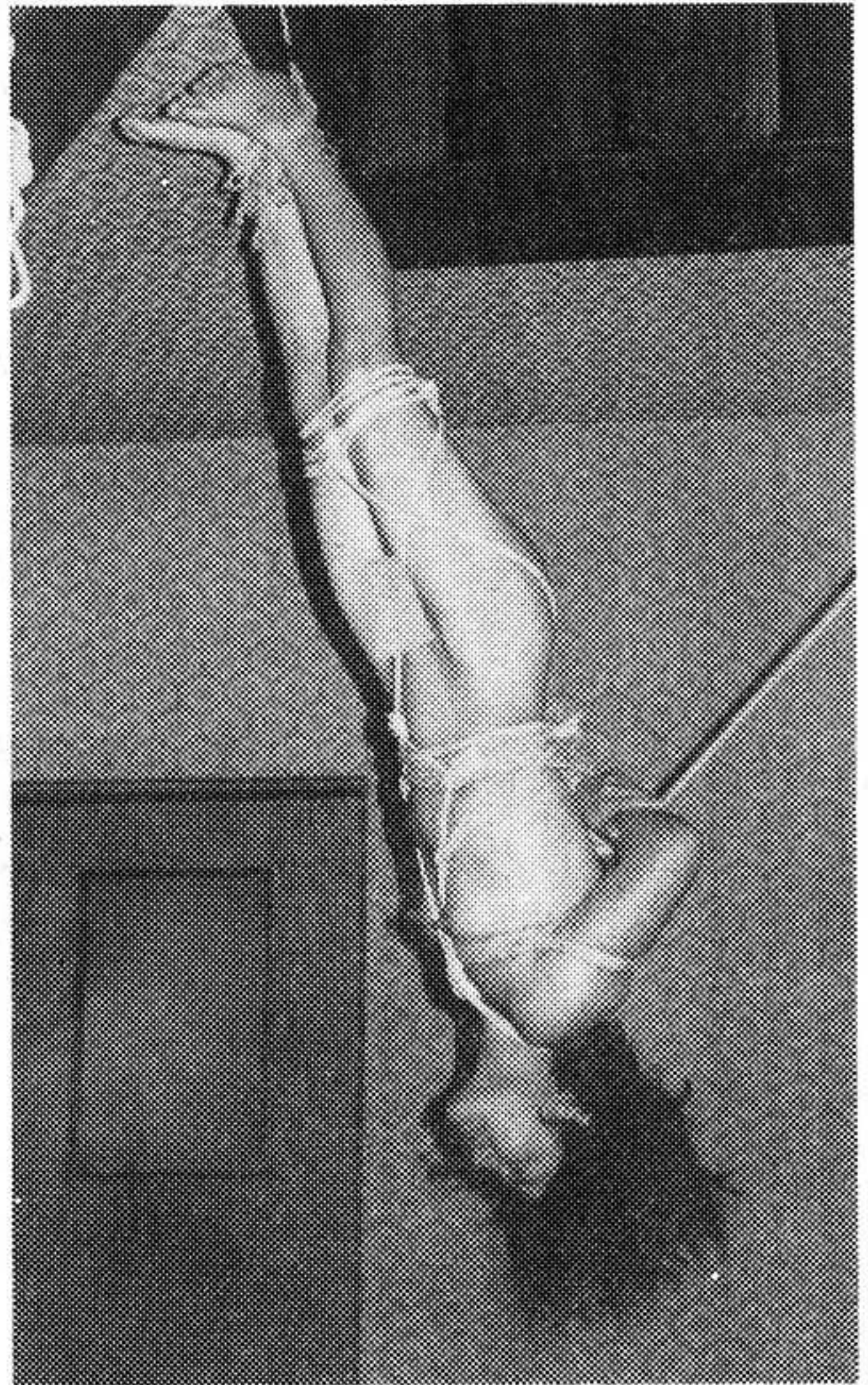
私もドクター氏も、次々と変貌する吊り責めに酔ったようになっていた。

一個の女体が、私達の思うが儘に、逆さに

なり、水平になり、あるいは垂直になって、意の尽になることに、つい彼女に与えている強烈な緊縛の苦痛すら、忘れ勝ちになっていた。上膊部を犇と、しめつける縄目のきつさに、既に好美の両腕の感覚は半ば失われて、苦痛を超越して、麻痺していたのである。

にもかかわらず、私達は、更にもう一度、宙吊りを敢行したのである。

ハンモックにした好美を降ろすと、間髪を入れず、吊り縄を外し、再び、背に滑車をつけ、晒布で深々と猿轡を嵌めて、吊り下



げていった。今度は、縛り上げた手首にも滑車がかかっているから、二つの腕が痛々しく捻じり上がる。

猿轡の奥から、ウン、ウンと、苦悶に呻く苦しげな声が洩れる。くぐもった声が、遠慮がちに、

「く、くるしい。あ、あ、やめて……」
と、遂に始めて、やめてくれといった。
それは忍耐の塊のような好美にとっても、

もう苦悩の限界の叫びであったのであろう。

ドクター氏と目と目が合って、うなずき合うと、私は、さっと彼女の足許に走りよるなり、握っていた縄をムチにして、力をこめて数度、発止、発止と双臀を打った。

この吊り責めに、最後のとどめを刺す、打擲であった。

二つの腕をしめあげた後手縛りの俤、私達は四種の吊り型を変え、鞭打ちで最後のとど

めを刺したのであった。

息もたえだえに、ぐったりとした好美の裸身が、キリキリキリと、乾いた滑車の音と共に、フロアに崩折れていった。

× × ×

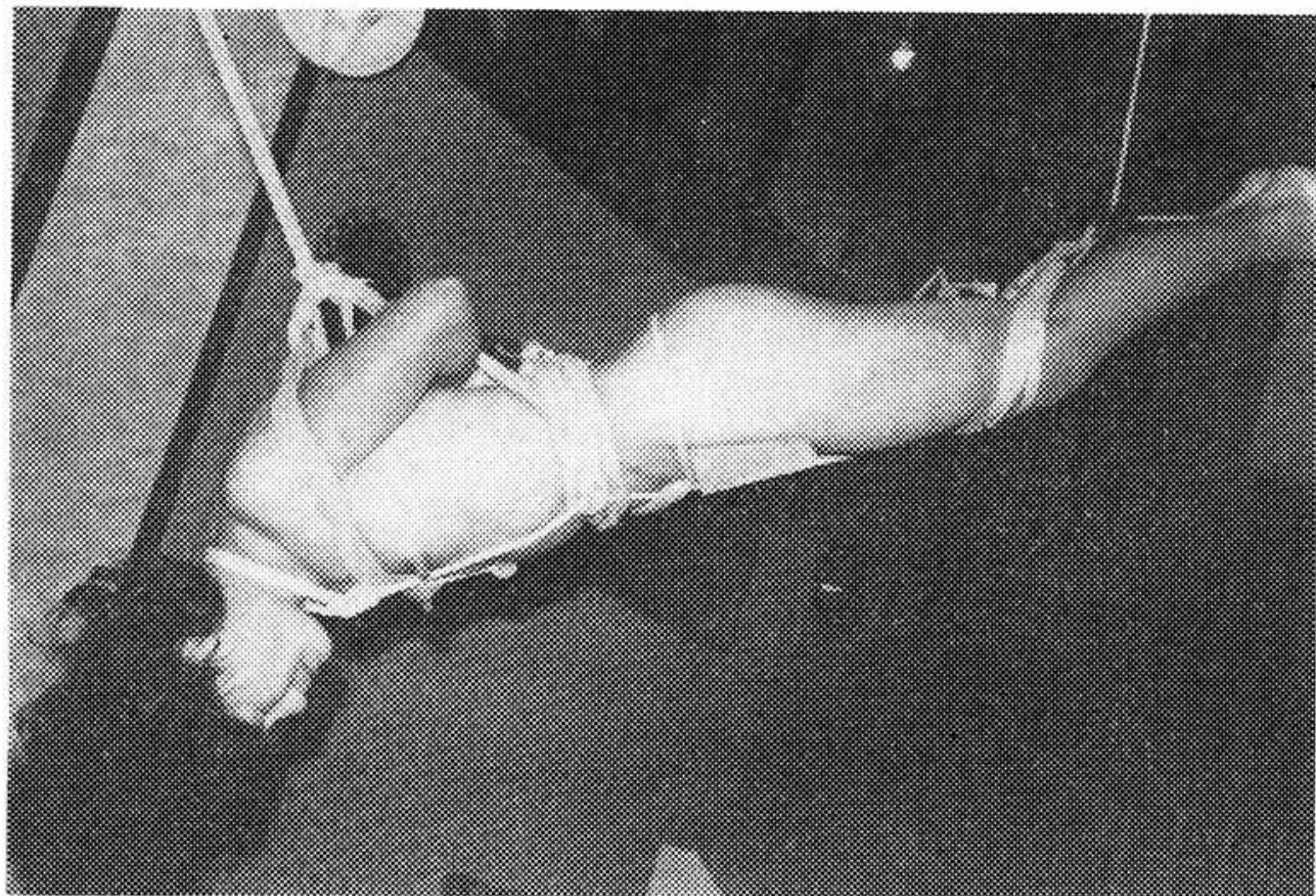
胸から二つの腕にかけての縄痕が、無惨な傷となって血の色を滲ませている。吊りによる縄目の肉迫が、如何に強烈なものであったかを、まざまざと物語っていた。沢山の縄を巻きつけていても、好美の全体重を支えていたのは、ドクター氏が最初に縛った、この縄一本にかかっていた。

最初に吊った時から、既に苦痛に耐えなかったものを、無言の忍容に任せて、次々と変型をつづけ、最後に又、後手吊りにしたものだから、流石の好美も、もうこれ以上は我慢しきれなかったのであろう。

口を利くのすら煩わしげに、顔色蒼褪めて好美は、ソファに深々と腰を落としていた。

斟酌なく、勢いのおもむく俤に、吊り責めに酔い痴れていた私は、儼然として反省していた。

従順と忍耐をよいことにして、まるで一個の物体の様に扱いはしなかったであろうか。余りにも協力的な態度に甘えて、彼女の意



志や、人間性を無視してはいなかったか——。しかし反面彼女が谷山久美子と、吊り責めの競艶をした時は、こらえ切れなくなると、

(もうダメです。おろして下さい——)

と叫び、私も彼女の請いを要れて、すぐ吊り縄を解いていた。

今日も、この間のように、苦しくなれば、自分の限界を知って、私達にプレイの中止を請うものと思っていたのだった。

彼女は今始めて、息もたえだえに中止を請うた。それまでの吊り責めに対しては、こちらがやめるまで、いつ迄も忍耐強くこらえ、私も又、内心、甘く考えて、これならまだ続けられるぞ、と考えていたことは確かである。

豈はからんや、昨日の好美は今日の好美ではなかった。

華麗な対決にくらべ、今日は徹頭徹尾、吊りオンリーにもかかわらず、まるで、うって変わった別人の様に、谷山久美子を遥かに凌いで、被虐の耐久力を養っていたのである。私達の為に献身的なまでに協力してくれているのだ。悲愴なまでに、一心不乱に苦しみ、じっと耐える彼女に、私は激しい、いとおしさと愛情を蘇らせていった。

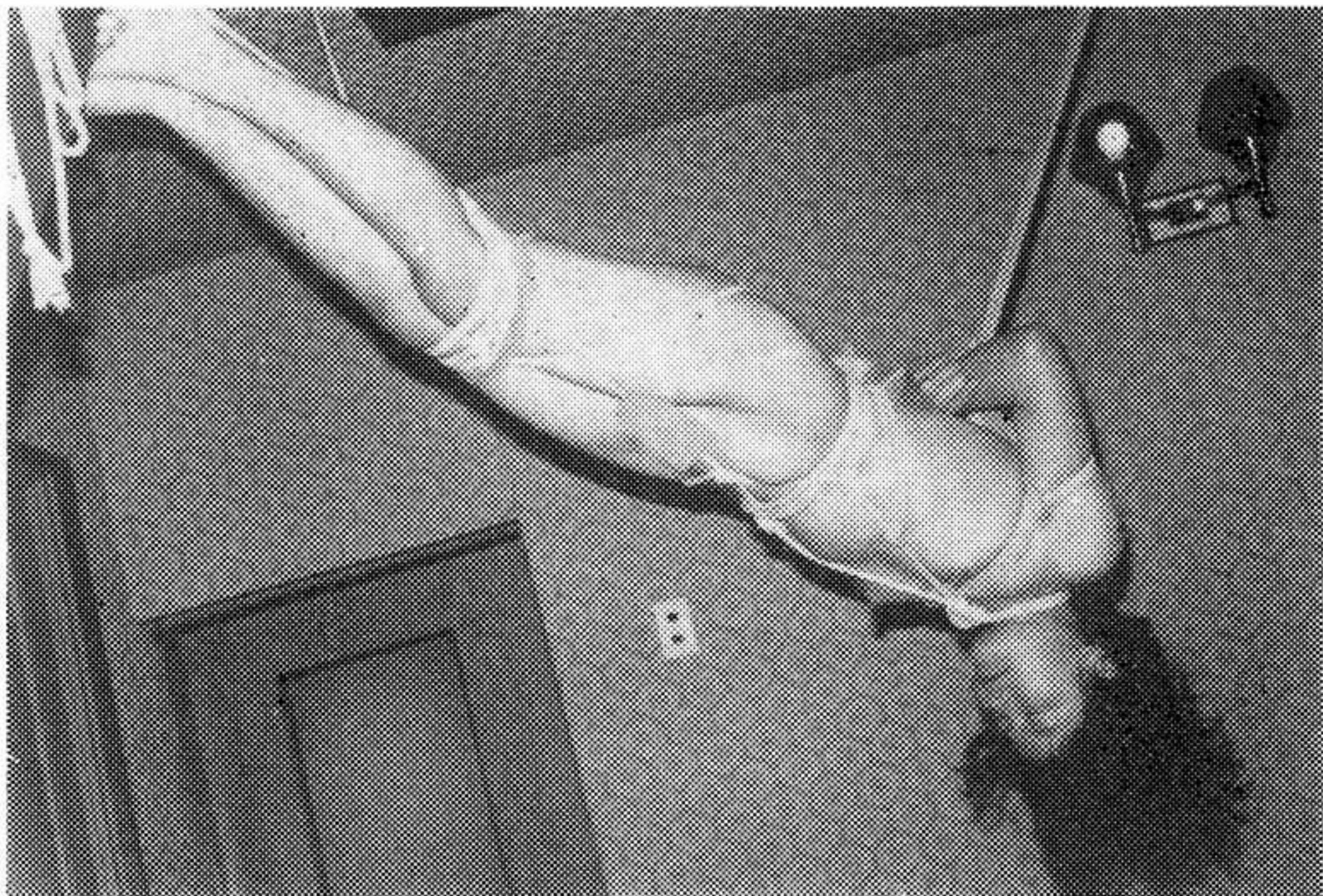
多分にドクター氏の吊り好きに、阿諛迎合していた、きらいがある。いつしか私の自主性が失われていたことに、私自身、迂かつにも気づいてはいなかった。

彼女に対し、私が冷静に振舞っているのを彼女は内心、淋しく悲しく思っていたのではなからうか——。

渡部夫妻が、私という人間を信じてドクター氏の頼みを快く受け入れたのだとすれば、まるで傍観者のようにしている私の態度が、好美に内心の反撥を感じさせていたのかも知れなかった。

「疲れたようだね。二階の部屋で少し横にならない？」

私が掛けた始めての、いたわりの言葉であった。チラッと好美の視線が私に走り、ドクター氏に眼が流れた。彼の存在を慮んばかり



ているようである。

「ああ、それがいい。そうしなさい——」

彼は気さくな態度で、フランクに奨める。邪心も野望もないのは分かっている。

「じゃあ、ちょっと……」

私は好美の手をとって、立ち上がらせると、彼に眼くばせして、彼女の肩を抱いた。

うん、うんと、諒解した彼の眼が頷く。慰撫しようとする私の内心を、彼は目敏く看取っていた。

微かに顔を綻ばせ、好美は私に凭れかかって、階段を上る。昇り切った右手に閨の間がある。

「あのう、おトイレへゆきたくなりました」

「そう、じゃあ、部屋で待ってるよ」

部屋の引き戸を隔てて、向かい側のトイレに裸身が消える。

私は洋布団を、まくり上げると、純白のシートに長々と寝そべった。

階下にドクター氏を放った俥であるが、暫くは、時間を貸して戴くより仕方がない。

裸身をすくめ、気愧しさを甦らせて、好美が戸惑いがちに部屋に入ってきた。

「ここへおいで——」

私は仰向けに寝そべった俥、手招く。

頃は五月末の、生憎、冷暖房のない季節であった。プレイに集中の時は、あれ程、汗をかいたのに、今こうして、冷たい感触のシートに横たわっていると、少し肌寒かった。先刻、浴室から戻って以来、不躰けにも私は、越中褌一本きりの、全裸に近い姿の俥であった。

そっと、華奢な体を私に添わせて横になると、彼女は気掛かりな風に、

「先生を、あの俥、放っておいても、よろしいのでしょうか」

「少しならね。分かっているよ」

「とてもいい先生ですわ。親切で優しくて」

「そう、安心出来る人だよ。何なら、ここへ一緒に呼んでもいいけど、暫くは二人きりでいたいのだよ。虐めすぎたもの、御免ね」

甘い言葉の言い終わらぬうち、私の唇が好

美の薄い唇に重なっていった。れっきとした夫ある好美夫人に、チラリと不倫めいた後めたさを感じるのは、彼女との一對一のプレイの時、いつも感じる自責の念であった。いっそ、渡部光雄が何も知らないのなら、反ってその気になり易かったが、私達の愛情の交換は、すべて逐一、彼女の口から夫に報告されているのを知っているだけに、妙なことは口走れない。

夫公認の秘戯は、それだけに内心、拘泥たるものを感じる。

彼女は、体のあらゆる部分を私に許している。そして控えめにつつましく燃えもする。子供の世話をし乍ら、夫は、妻が情事のひとときから戻ってくるのを、首を長くして、内心、瞋恚の炎を燃やして待ち兼ねていた。

一挙手、一投足、細微に亘って、委細洩らさず、彼はその日のSMプレイ、情事の模様を妻に告白させる。妻に対する嗜虐の炎が、メラメラと燃え上がる。

夫婦ならでは行ない得ない、強烈きわまるSMの極致が展開され、妻は蠟涙にまみれ、全身に針をうけ、のたうち廻って、第三者に敵として許さぬ真の恍惚と陶醉の境地に深々と埋没してゆくのであった。



倦きることなき、夫婦の激しい、いとなみがそこにあった。

彼の糖尿病は、疲労と困憊を重ねて、ちつとも、よくならぬし、妻は、より以上の夫の激しい嗜虐の愛撫を求めて、第三者に、いそいそと身をまかせ、夫の氣力を振り立たせるのであった。

いつかはプレイに対し「緩々」の時期もこようが、今の処、彼等夫婦の求道精神は、尚且、旺盛で、同好の第三者を次々と求めてや

まない「急々」の状態にあった。

関東、利根の住人、阪東太郎が、夫婦を訪れてくるのも近いときいている。

謂わば、好美夫人は典型的な、体は許しても、心は許さぬ、蠱惑の佳人であった。

プレイにつぐプレイの連続で、しみじみと話せるのは今のこのひとときだけであった。私は谷山とのWプレイのあと、独り先に帰ったが、あの夜の結末は、未だ聞いていなかった。

糖尿ゆえに振い立たぬ渡部光雄が、両手にMアニメルを抱えて、どう過ごしたかも知いていなかった。

「あれから、どうなったの。恰度、この部屋じゃなかったかな」

「同じモーター“K”の、同じづくりの部屋が並ぶ一室である。」

フトあの日の、激しいSMプレイが蘇る。

「私と谷山さんを両側へ縛って並べて、その気になっていたのですけど、疲れてもいたのでしょうね。焦るから尚更どうにもなりませんでした。あの日、お泊まりになればよかったのに——」

欲求不満を思い出したのか、媚を含んだ怨めしげな眼が、好き心をそそのかすように、私にそそがれる。

「いや、私だって糖尿だし、それに疲れていた。貴女一人なら泊まっただろうが、どちらとプレイしても恨まれるしネ。城崎へ、川路むら子と一緒にいって、こりごりしているんだよ」

「夫は、私が虐められるのを見ている方が、ハッスルするのです。淋しかったですわ」

「御免、御免。それで、結局どうしたの？」

「谷山さんが私のを、私があの人に残された

半分ずつを、剃りっこしました。（華麗なる

対決で、半分ずつの剃毛儀式をしたことを思い出されたい）谷山さんは、かなり激しく夫に挑んでいましたが、どうにもならぬと知ると諦めて、私に抱きついてきました。あの人巧みに、いつしか恍惚となりながらも、どうしても気分がのらず、拒んだのです」

「なんとなく白けた雰囲気だったのだね」

「ええ、夫は、辻村さんが気を利かせて帰られたと知っているようです。結局どうにもならないことを知って、ガッカリしていたようです」

「その尽、朝まで？」

「ええ、私と谷山さんの手と手、足と足を結んで、いろいろ試みるんですけど、私達を縛った尽、泥のように眠りこけてしまいましたわ。よくよく疲れたのでしょね。翌日のお昼頃、あの方を京都駅まで送って、別れました。近頃になって、あの夜、ああもしたかった、こうもしたらと思ひ出して繰り返すのですけど、いざとなれば、どうってこともないでしょう」

好美は思いがけず、よく喋り、二人きりという、解放された空気に、何となく、なまめかしい媚態を示すのであった。

無言のうちに、彼女は私を求めていた。ドクター氏が階下で待っていなかったら、懼らく私は、ひたぶるな欲情にかられて、彼女の肉体を、ふみしだいていたことであろう。ぐっと強く抱きしめたら、体ごと融け込んでしまいそうな楚々たる人妻に、刹那、私は熱い思いを、ぶちまけていった。

薄い唇からチラリと覗く舌を強く吸うと、短いのか、好美は痛そうに、舌端をすくめようと、もがく。口一杯に、ほおばれる舌もあれば、彼女の如く、ちよっぴり吸っただけで舌の根がチ切れそうに、あわてる女人もあって、接吻の味も、さまざまであった。

「もう懲りたのじゃない？」

「わたし、吊られるの弱いんです。痛さより怖さが先に立って——」

「経験に乏しいからだろう。でも映画を含めて、もうかなり、吊られたんじゃないのかなあ」

「辻村さんが仰有るから、しょうことなしに我慢してるんですよ。本当は好きじゃないんです」

「好きなのは？」

「うちの人の針、あの刺激が一番ですわ。とても、うまいんです。外の方にされたら、痛

いんです」

「私も、あの真似は出来ない。まるで鍼灸師みたいな手つきだものね」

「愧かしいわ。こんなこと、自分から喋った
りして……」

「だから、あなたは夫婦でプレイしている時
が、やはり最高ってわけだね。彼は、あなた
のツボを心得ているから……」

好美は大きく、うなずいた。

「愛しているんでしょう、彼を——」

「ハイ、口でうまくいい現わせない、深い愛
情です。私のために、献身的な人なんです。
あんないい人は、何処にもいないのじゃない
でしょうか」

「それでいて、私とこうしている……」

「信頼し切った深い愛情があるからですわ。」

自分が不治の病だもんですから、愛情の足り
ない分を、補ってこいって言うのです」

「虐められることに、快感を覚えるんだね」

「ええ、その方が……セックスには、むしろ
淡泊なんです。勿論、結果として伴いますけ
れど……」

不思議な対話が続く。日常性の夫婦ならと
ても考えられそうもない私達の奇妙な間柄で
あった。私も好美も、今こうして、全裸で抱

き合い乍ら、話題は真剣な夫婦の在り方につ
いて話していた。

好美は、微かな反応をしめす肌を、熱く疼
かせて、夫婦の深い契りを誇り、私はそれを
微笑ましく聞いている。

これは浮気と呼べる、そんな単純なもので
はなかった。時には交わり時には城崎の一夜
の様に添寝で語り明しても、互いの家に戻れ
ば、彼女はよき妻、よき母であり、私も又、
いつもいうように、妻をこよなく愛し、日常
性の私は、愛妻家に通っていた。ドクター氏
又、然りである。

「もう、吊りは、いや？——」

「辻村さんや、先生がしたければ、私、我慢
します」

「気分は、どうもない？」

「ええ、落着きました。先程の縄が強くしま
って、胸や腕が痺れていましたけど、どうや
ら、人心地がつかしました」

「じゃあ、もう体は縛らずに、足首だけ縛っ
て最後のとどめの逆吊りをしよう。いい？」

「逆さに吊られると、くらくらっと、眩暈を
覚えるのです。でも、いいですわ。辛抱しま
すから——」

「先生が下で待ってるから、そろそろ降りよ

うか——」

「ハイ、お気の毒しました」

心なし未練気に起き直って、好美はチラリ
と、媚を含んだ眸で私をみつめた。口にする
のを憚る「愛情のきざし」を私に抱いてい
ることは確かであった。

人妻である以上、それは告白出来ない。

私も又——。

期せずして、抱擁し、犇と抱きしめる。

好美は反射的に足を開いた。

僅かの間と思ったが、忽ち十五分近く経過
していた。狼狽して、私は好美の手を引いて
階段をかけ降りていった。

ビールに顔をほてらせたドクター氏が、さ
して待ち兼ねた風もなく、この十五分の経過
が当然のように、にこやかな笑みを湛えて、
私達を待っていた。

× × ×

「こんなものを持ってきたのですが、一度、
使ってみませんか——」

ドクター氏が、バッグからとり出したのは
革製の、締め金が沢山ついた、頭からかぶる
嵌口帯であった。唇に当たるところが三セン
チばかりの円形にくりぬかれていて、取り外
しの自由な凸起帯が、円形に押し込まれるよ

うになっている。

「どうしたんです？」

「先日、東京にいった時、二、三、こうした革具を買ってきたのですよ」

「マルゴでしょう」

「よく御存知ですね」

ドクター氏はニヤニヤ笑った。

この外に、貞操帯。ファスナーで一部が開く、鍵つきパンティ。鎖連結の手枷、足枷など、あちこち廻って買い求めたという。

こうした奇抜な器具類のアイデアは面白くても、二、三度、使用すれば、女体責めの同じ視覚に、すぐ飽いてしまう。そればかり使ってプレイしては、新鮮味に乏しくなりプレイのマンネリズムに陥ってしまう。そし

て珍奇を求め、又、新しく変わったのを購入することになる。こうした、しなじなは、稀少だけに結構、いい値がつけられていた。

去年の秋上京した時、増田喜代司から、この種のを、かなり頂戴して帰ったが、よく間に合い、私の嗜虐心を刺激するものは、長短二つの凸起のついた、革のT字帯ぐらいで、これを早速ノンコに使ってみたが、誰にもというわけにはゆかない。

眼、鼻、口だけを出した布製の、まるで怪盗X団が、かぶりそうな黒衣は、まだ手つかずで放ってある。これは両手を背後にして、袋にはめこんで、自由を拘束するプレイ服である。

ドクター氏も一度は誰かに使用してみたか

ったのであろう。尾錠を伸展させて好美に被せ、嵌口の、小茄子に似た革ぐるみの凸起帯を、彼女の口腔に押し込んだりしていた。

この嵌口具をつけた後、彼は逆吊りにしようとして計画している。

「緊縛の方は簡単におきましょう」

私のフェミニズムが、チラリと顔を覗かせる。縛ったら又縛ったで、連続プレイになリかねないからであった。

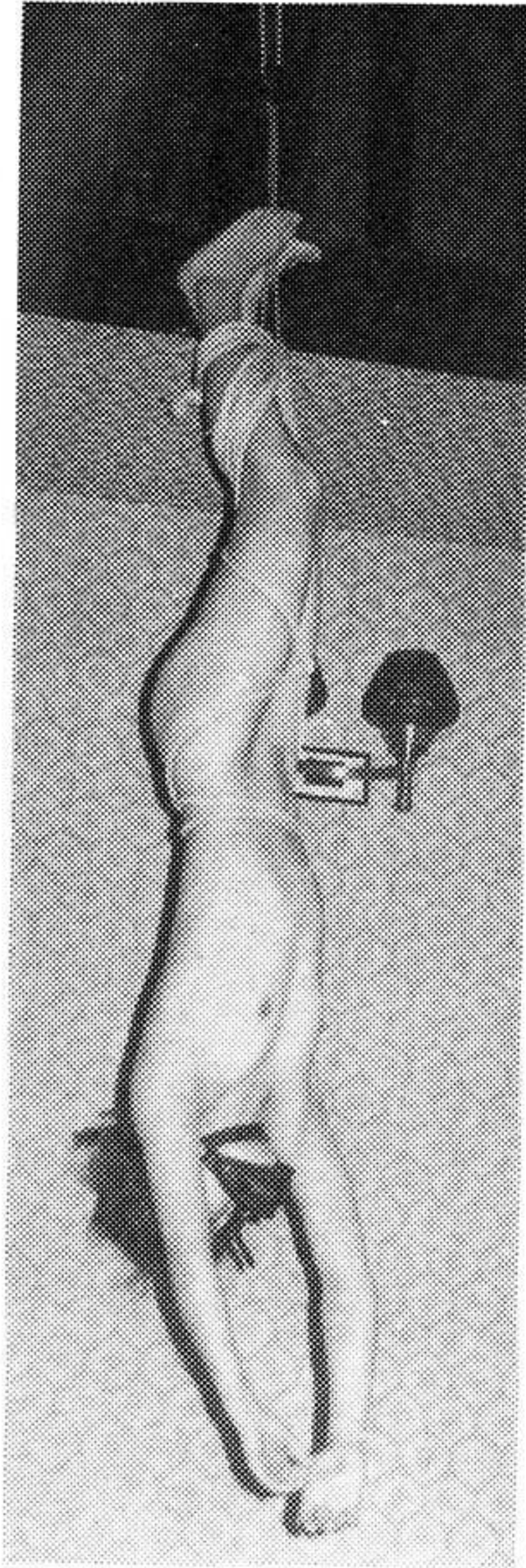
「ええ、そうしましょう」

一向にドクター氏は逆らわない。任された私は、腰で縄を結ぶと、足許の方へ纏わりつけてゆき、縄のかかる両足首に、ぐるぐる巻きに巻いてみた。上半身は、全く自由にしてある。

足首の縄に滑車をとりつけて私は合図する。心得たドクター氏が、好美の体を、よいしょとかつぎ上げる。

スルスルと苦もなく足許から上昇し、彼は好美の上半身を、そっと離そうとする。

彼女の自由の両手は、必死にドクター氏の腕を掴んで離さない。



両手が自由なるが故に、反って何かに縋ろうと、恐怖の反射神経が働くのだろうか。

小茄子の固体によって、舌を圧迫され、嵌口された好美は、哀願の色を眸に浮かべて、何か訴えようとしていた。

背後に回った私が無理矢理に、彼女の体をドクター氏から、もぎとるように切離した。

ゆらゆら揺れる逆吊りの両手が、何かを求めて、あえなく空を掴んで、もがいていた。

手摺の滑車を、上の棧にとりつけて引き揚げたから、二階の踊り場の床を超えて、手摺に両足が届いている。

両手は、むなしく空を切り、嵌口具の奥で好美は声にならぬ呻きを挙げていた。

尾錠を外して、茄子型の固体を口腔よりとり出すと、上下の唇をヒタと革具に押えつけられた唇、自由になった円形より、浅い息遣いを吐いて、

「あ、あしくびが痛い……押えられて、すごく痛むんです」

と、きれぎれに訴える。兎も角、私はスルスルと落下させた。

「両手が自由ですと、縛られてるより怖いですわ。何かに縋りたくなって」

そうだろう。遊ばせておく手は、本能的に

何かに縋りたくなるものであった。

階上の滑車を急扱、元通りの位置につけ替えて、私は、さして面白くもない嵌口マスクを外してやった。同感らしく彼も、

「高いゼニを出して買ったのですが、一向に面白くも何ともありませんね。猿轡するなら晒布で十分なんですね。まあ、プレイ用に使った場合、その口に開いた、円形は、何か意味ありげですかね」

と苦笑する。確かに彼のいう通り、唇を押える革具に、茄子型固体を嵌めるため、ポツカリあいた、直径四センチばかりの円型は、煽情的に何かを示唆していた。唇の革具を強くしめつけ、茄子型固体を一旦、入れて引き抜くと、唇は、ポカッと開ききりになっていた。

「笛羅痴雄」には、誠に都合いいかも知れない。しかし、私にとって、そんなものは必要でない。その気になれば、いつでも好美は快く応じてくれた。

改めて吊り下げる。好美の足の指が、はり出した天井を押さえるようにし、引き縄は止まる。

先の逆吊りに較べて、十数センチ低いが、彼女の前に立つと、越中禪の折返しが、恰度

好美の顔を塞ぐ位置にあった。

好美の両手が俄破と私の脛を抱え込み、懸命に体を浮かして少しでも両足にかかる体重を減らそうと努めているらしく離さない。怯えと駭きが一杯の表情である。

顔が、すっぱりと禪の前垂れで隠れてみえない。私は、その邪魔つけなものを、何の斟酌もなく、取り払った。

私は彼女に、容赦なく命じた。命じられた通り、好美は、じりじりと持ち上げた手で私の両腿を、しっかりと抱えた。

背後にドクター氏の、燃えるような視線を感じる、と同時に、頻繁に私達に向かってストロボが光った。

「両手を離すんだ。離せといったら離すんだよ」

怖そうに、じりじりと好美は両手を放してゆく。

眼眩むような嗜虐の快感、甘美な疼きが、唐突に、私の全身を激しく貫いていった。

私の眼前一杯に、味わいを湛えたものがクローズアップされていた。

すべて世の中、ギブ・アンド・テイク。労に酬いるに労をもってしなければならぬ。私も又、与えるべく、胸を昂ぶらせた。

立体的“VAT-69”

欲望の虜となった私の視野に、既にドク

ー氏は、曖昧模糊として、霞んでいた。

× × ×

渡部好美は、第三者の目前で、被虐の態度をとって、羞恥責めにされることに、激しい欲びを覚えている。

これも、その一つであつたらうか――。

遅ればせながら彼女は燃え上がっていた。

プレイのうたげ果てて、三人で浴室に向かい、ドクター氏は、ザブリとつかって、ゴシゴシと顔をこすりおわると、私にチラリと目配せして、さっさと出ていってしまった。

吊り責めオンリーに徹して、彼は、いたく感激し、充分に満足しているようであった。

好美の慰撫は、私に任したといわんばかりである。

彼女と相知って、もう丸二年有余の歳月が流れていた。好美を始めてカメラ・ハントの誌上に登場させて以来、この二年間で、市井の一主婦は、名だたる嗜虐願望女性として、SM同好者の間に、随分と名を売ったようである。しかし、私が書かず、あの俣そつとしておいたとしても嗜虐に意馬心猿の渡部光雄は、何らかの手段で、夫婦プレイヤーとして名乗り出たことであろう。

私のカメラ・ハントのうちで、最多登場は彼女をおいて外にはない。

初の登場の、単独のカメラ・ハント。ついで、川路むら子との、両手に花のプレ

イ旅行。

更に、ドキュメント映画“性倒錯の世界”のルポに――。

更に又、その延長ともいふべき、Mアニメル、谷山久美子との、華麗なるMの対決。

今、吊りに徹した、被虐本領を遺憾なく発揮した、この吊りの醍醐味。

その一つ、一つに、強烈な記憶の烙印が灼きつけられていた。

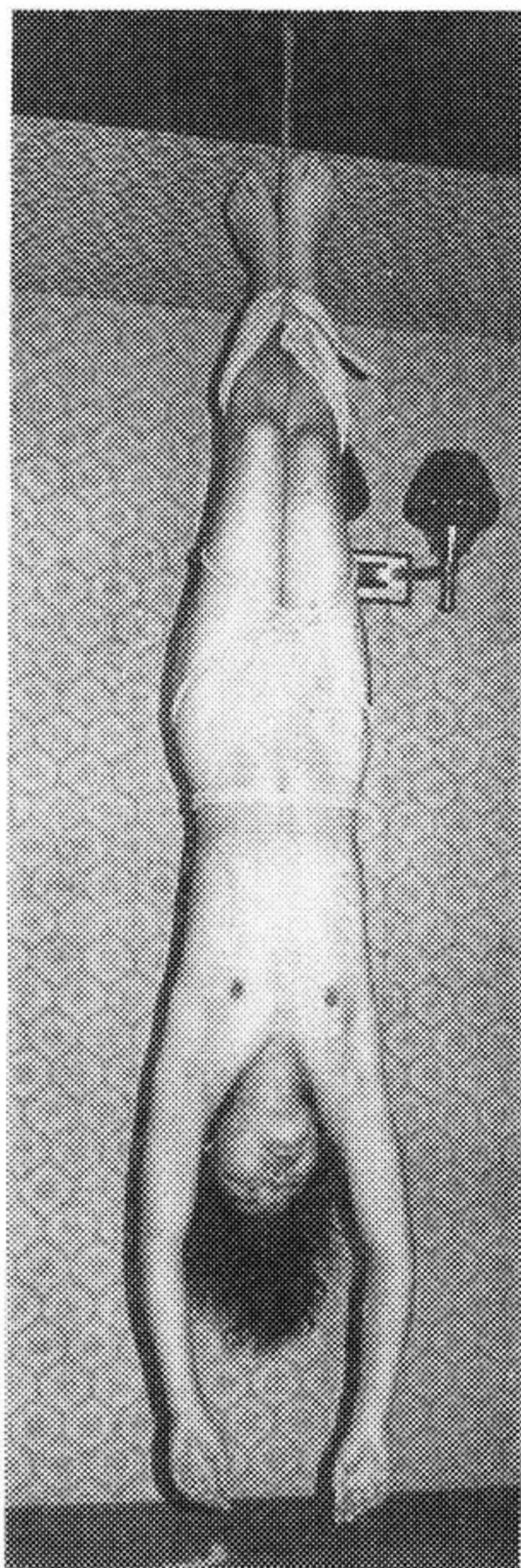
この華奢にして従順な、愛すべき女性は、吾人の嗜虐の激しい願望をみたす為に、この世に生を享けたのではないかとすら、思われるのであった。

快い湯が、密着した二つの肉体を、仄々と温めてくれる。

「よく協力してくれたね。有難う」

「もっと、心行くまで御満足していただきたかったのに、我俣ばかりいってすみません」

何が我俣なものか――。これ程、忍苦、従順の女性は、M族の中でも一寸、稀有の存在であろう。セックスに淡泊なのは珠に瑕瑾でも天は二物を与えずと



か、その抜群の被虐性が補って余りあった。

彼女は決して性に不感でも冷感でもない。

謂わば平均的な、極くノーマルな性感であったが、近頃、私とプレイする女性が、揃いも揃って、敏感極まりなく、その反応が大きいものだから、影が薄くみえるに過ぎないのであった。控えめと辺りへの気を使って憚るため何となく物足りなく感じるに過ぎない。

現に今こうして、私と二人、ヒタと寄り添って湯につかる、好美の五感、ひめやかに期待に弾んでいるようであった。

二人きりであれば、必然的に、想いは遂げられていたに違いない。

温厚、円満、紳士的なドクター氏の存在が辛うじて私達を制御し、理性を保たせていたのであった。

湯から出て、絡み合うように階下に戻ってくると、乱れに乱れていたフロアが、あらかた片づけられてあった。

私たちが、浴室で戯れている間に、ドクター氏は、せつせと整理してくれていたのである。

「やあ、やあ、終わりましたか——」
奇妙な言葉をかけて彼は、にこやかに笑った。

何が終わったというのであろうか。

どうにでもとれる言葉に苦笑して、私はドクター氏に、厚い犒いの言葉を送った。

見上げる窓の外は、いつしか暗く垂れこめ耳をすますと、風に交じって、沛然と降りしきる雨音が耳をうった。時を忘れ、嗜虐のプレイに熱中の余り、私達は戸外の天候の変化に、今の今まで気づかなかった。

慌しく仕度を整えて受話器をとりあげる。

シャッターが開くと、表は吹きすさぶ春の嵐で、視界も定かでなかった。湖岸から吹きつけてくる強風がうなり、雨しぶきを激しく車のフロントガラスに叩きつける。

ワイパーを高速にさせても、前面が、さだかに見分け得ぬ夕立ちの真っ直中は私は京都へ向かって、真剣の眸をこらして、走り抜けてゆく。往きは、助手席に坐ったドクター氏だったが、心細げな好美の姿に見兼ね、戻りは後部のシートに並んで坐り、しきりに、優しい、いたわりの言葉を投げかけていた。

数々の吊り責めのプレイには、苛責なく振舞っても、一旦、日常性に復元したドクター氏は、この上もなく頼もしい、頼り甲斐のある温厚なる紳士であった。

バックミラーにうつる好美は、遠慮深く控

えめに、そっと彼の胸に凭れ、そっと手をとり合って、豪雨も強風も、どこ吹く風の、まるで大船にでも乗ったかのような、安心しきった表情であった。

私達は、こもこも彼女に夕食をすすめたがこの春の嵐に見舞われて、夫や子供達が、佯しく帰りを待ち兼ねているに違いないと、好美は婉曲に辞退した。

「遅くなりましたから、京阪三条からでも、タクシーを拾って、この人を家まで送ってゆきますよ。でないと、この雨の中、大変でしょうし……」

と、ドクター氏は最後まで親切であった。

「そりゃ助かるでしょう。じゃあ、そうお願いしましうか」

油膜に蔽われて、判然とせぬ前方に懸命に眼を凝らした俛、答えて私は、やっこの思いで、京阪三条駅に辿りつく。

車を飛び出すと、逃げるように駅の構内に走り込んだ二人は、互いに手を挙げて、私に別れの意志表示を送っていた。

更にもう一走り、叩きつけるような雨の中を、家路へ辿らねばならない。雨に煙るネオンの街並を横眼に、空き腹かかえて帰心矢の如く私は混雑の中へ車を乗り入れていった。



浣腸体験告白

妖花の泉

(下)

上 条 直

— 七 —

高校に入学の際、Nの一家が東京に移り、私の前から去って行った。高校では新しい友人を幾人も得たが、皆健康的で、心底の悩みや病的な欲求を打開けることの出来る人、言い換えればNに替る友は見出せなかった。結局、私は独りプレイに閉じこもっていた。

浣腸プレイの初歩は、勿論、既製品のいちじく型であるが、一つや二つでは物足りなくなり、だんだん本数が増して来る。それを買

い入れるのが一苦勞。他の客がなく、店番の人が少ない薬局を探して歩き、そっと入るとやっと聞こえる程度の声で「いちじく浣腸、下さい」

この瞬間、全身は石の如く後より幾人もの視線に晒されていると錯覚してしまう。店の人が親切丁寧に使い方や便秘の療法等を説明して呉れると尚緊張して、穴でもあれば入りたい気持ちになる。やっと手に入れて振り返り誰一人、私などに注意を払う者のないことを知って、ほっとする。大体、中年以上の婦人

が応待してくれる時が最も買い易く、そんな店を選ぶのだが、同じ店に度々行くのも気が引けた。

いちじく型の次は、ガラスシリンダー型を重宝するようになった。これだと量の調節は勿論、導液の種類も自由に選べる。グリセリン五〇%液、石けん液、食塩水等を、交々使用した。家族が寝静まった後の私の勉強部屋は、しばしば秘密の楽しみに悪用されたわけだ。

私有家の三〇ccガラス浣腸器を破損し、買いにしかけたところ品切れで、店のおばさんが代りにゴム製エネマシリンジを奨めた。

「これは元来、鼻を洗う器具ですが、こちらの嘴管を取り付ければ浣腸器にも使えます。量は必要なだけ使えて、とても便利ですよ。こちらを液に入れて、この脹らみを……」

箱にハッキリ「ROMA」と書いてあるのに鼻洗いとは可笑しなことを云うと思ったが「ガラス製と云われて来ましたので、これでいいかどうか分かりませんが、一応もらって帰ります」

わざと困ったような顔をしてみせ、心の中では「占めた。よい物が手に入った」と、深夜を待ち遠しく感じた。

ゴムのエネマを愛用するようになって、量は、ぐんぐん増して来た。父母が家を留守にした夜、風呂場にエネマ、グリセリン、食塩それに温度計を持ち込んだ。

グリセリン約四〇%、食塩約一五%、液温四五〜七度を調製。全注入量約一〇〇〇cc。

元来刺戟の強い食塩に温度と量が加わり、あたかも灼熱の太いのが無数に襲い掛かって来るようで、私は、のた打ち廻らねばならなかった。

洗場に排泄する覚悟を決めかけた時、熱い怒濤が僅かながらスーッと引いて行くのを覚え、同時に風呂の排水が詰まった時、お手伝いのおばさんが詮索するのでは？ との危惧を感じ、トイレに駆け込むことに意を決して廊下に出たが、半分も行かないうちに、私の腸は再び更に激しく荒れ狂い、押さえた右手も何の役にも立たなかった。

やっとトイレに辿りついた時は、余りの激痛に、もはや身動きも出来ず、パジャマを下げることも便器を跨ぐこともままならず、床に崩折れた。が、腸の内容物は私の意志と関係なく、窮屈なトンネルから広い空間目ざして逃がれて行った。

目の前を飛び交っていた大小の青白い光が

やがて薄れ、頭の中の赤い奔流が緩やかとなり、ようやく我に返った時、私は下半身に受ける形容し難い甘美な感覚を意識していた。これは、グリセリン液を充分に吸い込んだパジャマとグリセリン液が、グショグショになって肌に纏り付いていたことによる。

私は再び、先刻とは異質の妖しく安らかな快感の陶酔に落ち込んで行った。

着替えを済ませて床に入ってから、腸の中では小さな波が断続していた。全身が熱に浮かされたように気だるく、反面、敏感となって刺戟を待ち受けているようでもあった。

うとうとしかけた時、小波が急に大きく成長し、急流となって上から下に駆け抜けた。

トイレに立とうとして体を動かしたとたん、波の先端は遠慮なく体外に飛び出してしまった。生温くぬるぬるとしたあの独特の感触の虜になった私は、トイレに行くのを止め、急いで包装紙を二、三枚取出し、その上にバスタオルを二つ折にし、更にその上にタオルを二枚重ね、お尻の下に敷いて仰臥してしまった。千ccのグリセリン食塩混合液の効果は大きなものらしい。残っていた薬液に腸粘液が加わって這い進み、私のアブノーマルな感情に微笑みかけたものとみえた。

私は又、禁断の木の実を一つ啄んでしまった。汚れたパンツは、翌日、持ち出して捨てることとし、タオルは洗って物干し場に掛けておいたが、パジャマだけは、洗たくしたのを自分の部屋の押入れに吊るし、こっそり乾かさねばならなかった。

いつも後始末の面倒さに、先刻のプレイをいたく後悔しながらも、幾日か経れば又、悪魔の囁きに負けてしまう私であった。

— 八 —

独りで過ごす悦楽にも、その後だんだん遠ざかるようになった。それは大学受験の勉強で忙しくなってきたからで、高校三年生の一年間は入試一本に打ち込んでいた。

奇クを知ったのは、その頃である。学習参考書を探して本屋を廻って歩いた店先で、何気なく手に取って、パラパラと頁を繰った私の指先と両眼は同時に硬直してしまった。その硬直は直ちに全身に伝わって行き、膝だけは小刻みに震える感じで、次の頁を開けるのには渾身の力を振り絞らねばならなかった。驚愕、歓喜、羞恥、安堵、私の心情は、よるめきながら、これらを順次さまよった。

奇クの存在は、劣等感と自己嫌悪に陥り勝

ちな私の心に、一条の命綱を投げかけて呉れた。罪深い私にも、狭いながら安住の一角は準備されていたものと感謝した。

九

首尾よく大学の経済学部合格出来たものの、追い込みの全力投球に疲れ果て、私の健康はガタガタに崩れてしまった。入学してからも全身がけだるく食欲はなく、下痢が続くようになり、その年の夏が終わる頃、私の体は極度に衰弱し、ひどい下痢で痩せ細る一方下腹部だけが膨らんで来た。ことここに至れば入院するより他はない。

「肺結核、腸結核、結核性腹膜炎、安静度一度……病院が私に押しつけた烙印である。安静度とは結核治療の専門語で一度は最も高い程度、即ち絶対安静である。衰弱のひどい時に咯血すれば生命にかかわるため、動くことを完全に禁止されたのである。結核特効薬のなかった頃は、こうなれば最早九十九%助かることのない容態なのだ。入学時のレントゲン検査で、肺に陰影のあることは指摘されていたが、肺のレントゲン写真でひっかかるのは子供の頃から、いつものことで慣れてしまい、一々気にしていなかったが急に悪化したわけ

である。

おへその少し下の辺に太い針を突っ込んで注射器で腹水を吸い上げる。筒が一杯になれば、針の根元のコックを閉じ、枝に連絡したゴム管の方のコックを開いて、液を押し出すこんな操作が何回か繰り返されて、水は洗面器に略々一杯出てきた。これで多少は楽になったが、下痢の方は一日に十数回と激しかった。動くことが禁じられているので差込み便器が使用されたが、間に合わないことが多々あり、下着を汚してしまう。結局おしめを着用させられる羽目となったが、大人用のおしめカバーというものが、れっきとした商品として存在することをこの時、初めて知った。「さ、大きな赤ちゃん、おしめ換えてキレイキレイしてあげるわよ」

看護婦さんは、つとめて明るく話し掛けた「ストマイは、とても良く効くので心配いらないわ。二、三週間もすれば、おなかの通るのは大体よくなるでしょ。今は、何もかも人委せの赤ん坊にかえったつもりで、くよくよしないこと」

いろいろ親切に慰め、励まして呉れる。私にとっては願ってもない、おしめ着用の絶好のチャンスであったのに……。

看護婦さん達には、一般の病人の場合とは違った意味で、まことに申訳ないと感じながらも、私は生温い圧力が両腿の内側を這う瞬間と、ぐしょぐしょに汚したおしめの感覚を心ゆくまで享受することが出来た。

ストマイの効果は期待通りあらたかで、私は徐々に回復に向かい、腹水を取ってもらった。一カ月後には安静度二度に昇格し、おしめも不要となって、周囲の人達は大変喜んで呉れたが、私は心中、おしめとの訣別を、この上なく心残りに感じたものだ。

おしめ着用もさることながら、私は自分の肉体がすべて他人の手に委ねられている状態にも又、深い悦楽を覚えていたのである。最初に感じた羞恥の念は日と共に薄れ、代って悦びの方が、だんだん成長していった。当時の私が自分ですることは口に入れられる食事や薬をのみ込むことと、ものを言うことくらいで、生まれたての赤ん坊同様、何の行動もなす事はなかった。体重は三〇キロ位に下っていたので、着替えやベッドの清掃などの時も、看護婦さん一人に、らくらくと抱えてもらうことが出来た。

入院六カ月、担当に体力も回復し、肺の病

巢も固まった時、肺切除の手術を受けることとなった。大きな結核空洞は手術が最適との事である。

手術は勿論、全身麻酔で、何も知らない間に終わったわけであるが、覚めてから数日間の疼痛は忘れられない。胸に穴が二つ、あけられてゴム管が差し込まれベッドの下に装置された吸引ポンプと肺が連絡されている。これで肺の気圧を調節すると共に、出血などを体外に引っ張り出す。四六時中、絶え間ないポンプのモーター音が頭の芯に突き刺さる。手術の成果は良好で私は順調に経過した。しかし一つ顕著な体調の変化を来したのは全身麻酔で腸が麻痺したのか、しばらく便通がなかったのが癖となり、ひどい便秘性に、いわば百八十度、転換してしまった。

手術後十日位には下腹部が入院当初程ではないにしろ、固く膨らんできた。心配された腹水はなく腸の膨満ということで、グリセリン浣腸を受けた。だが、これは何の効果もなかったたので、更に石けん水三〇〇ccが注入された。しかしこれも排泄の効果はなく、刺戟による腹痛だけが残ってしまった。

何としても腸の内容物を出してしまわねばということ、側面に幾つかの穴をあけた、

小指位の太さのゴム管が差し込まれた。私自身には見えないが、ゴム管を通して浣腸液とガスが出て来た模様である。ゴム管は除々に奥の方へ押込まれていった。これで注入された液の大部分とガスが出てしまつて、痛みは幾らか柔らいだが、次に看護婦さんはマスクをし、右手にゴム手袋を着けてやってきた。「少し痛いかな分らないけど、しばらく辛抱しなさいね。口を軽く開いて力を抜いて」ワセリンを、たっぷり塗られた指は、先ず一本が私のアームスに、しのびこんだ。次に二本目。看護婦さんは一生けんめいに直腸内の固形物を掻き出して呉れる。

「痛い？」

二、三度たずねて呉れたが、その都度、私は黙って頭を横に振った。三本目の指も一緒になった様子である。左手は上からおなかを抑え、トンネル内で活躍する右手に協力しているようであった。私は手首まで？ という錯覚に陥っていた。

「沢山、出たわよ。これで楽になるでしょ。よく我慢したわ」

この言葉に、私は多少のうしろめたさを感じた。私としては、特に頑張つて辛抱したわけでもなかったからである。

この経験は一回きりだった。その後は浣腸で何とか効くようになった。

十

手術後二カ月位で私は、めきめき元気が出てきた。気さくな可愛い学生ということで、若い医者や看護婦とも特に親しくなり、看護婦詰所へもよく遊びに出掛けた。看護婦さん達と文学論や映画の話等を賑やかにやったものだ。年配の婦長さんは、そんな私に「陽気で元気なのは結構だけど、咯血には、くれぐれも気を付けなさいよ。あと三カ月位順調に行けば、そう心配もなくなるけど……」と忠告し、経験の一つを話してくれた。

◆ ◆ ◆
長い間、病院に勤めていると、いろいろな患者さんに接するのは当然の事。未だに忘れられないのは、私の腰にしがみついた俥で息絶えた人のことなの。その人は突然、咯血して入院して来たのだけれど、病気はそんなに重くはなかったのに、運悪く病巣の位置が太い血管や気管支に近かったのでしょう。入院してから血痰を出していたわ。

私が当直の夜、又、咯血したのよ。咳きこむ度に真赤な血液が飛び散ったわ。当直の先

生のお手伝いをして、必死で手当てしたのだけど、出血量が多く、血液が気管を塞いで凝固してしまつてどうにもならず、お気の毒に窒息死したのね。その人は、息のつまる苦しさに私の腰にしがみついて、渾身の力を振りしぼって気管の中の血液を咳き出そうとしたわけだけど、遂に力尽きたの。私の腰は文字通り砕けそうで、白衣は一面、真赤に染まっていたわ。お亡くなりになってから、私に巻きついた腕を離そうとしたら、びくとも動かないのよ。先生と附添いの遺族の方が、二人がかりで苦勞して離して呉れたわ。

遺体の手当てをして、きれいに上げてるのは当直看護婦の役目。血で汚れた浴衣を脱がしていた時、私の右手が遺体の手にしっかりと握られたの。背筋にゾーと氷の様なものが走り、その時の気持は、とても言葉では表現できないわ。指を半ば曲げた状態の遺体の右手に偶然、私の右手がスッポリはいり、握手の形になったわけね。遺族の方と先生は打ち合せのため出られたあとで、深夜の病室には他に誰も居なかったのよ。窓の外で、こおろぎが澄んだ音色で鳴いていたわ。

◆ ◆ ◆
詰所には数名の看護婦が勤務していたが、

そのうちのD看護婦の姿が、しばらく見えなかったところ、同僚の話では腸チブスに罹りこの病院の伝染病棟に入院中で、大したことではなく二、三日中に面会も許される筈だから一度、見舞って上げたら、との事だった。数日後、見舞品を持ってDさんの病室を訪ねた。

「まあ、お見舞、有難う」

Dさんは少しはやつれて見えたが、予想より元気そうで、平素と変わらぬ愛想のよい笑顔を向けた。

「大変だったんだね」

「おかげで軽く済んで、もう平熱よ」

「あなたには、何度もおしめの厄介を掛けたので、お返しに今日は、おしめの取替えをさせてもらうよ」

「チブスうつるよ！ と言いたところだけど、残念ながら、おしめの世話にはなっていないわ」

「正に残念……」

「菌が検出されたのは一回きり。熱も下痢も三日ほどでおさまって、すっかり元気よ。何処でもらって来たのか分からないし、或は間違いでなかったのかしら」

「本当によかったね」

「今のところ、お薬飲んで寝ているのと、毎日、検便されるだけ。検便のサンプル取る度に驚くんだけれど、食べた物、さっぱり消化されてないのよ。あなたや他の重病人のお世話をした時、このクランケは衰弱が激しいので消化力が殆どないと思っていたのに私も同じく素通りなの。ひどい血みたいだからハツとしてよく見ると、缶詰のサクランボ。ミカンもパイナップルもその俣の姿。ただ噛んだあとがあるだけなのよ」

「グリーンピース、キュウリ、苺」

「本当に、よく煮た白菜だってよ」

「洗って、も一度、使いたいね」

「まさか！ いやらしい人！ ハハハ……」

大笑いの口を覆ったDさんの繊細な、白く滑らかな皮膚に包まれた右手を私は真近からじっと、見詰めていた。脳裡の印画紙に鮮明にプリントしておくために。二カ月前、私のトンネルの中で大活躍して呉れた指である。

十一

病気のため、大学は他人より二年間おくれたが、その後は、健康も定まり、何とか無事卒業した私は、大阪の商社に就職して、一年間の経理部勤務の後、国内営業部門の方に廻

されることとなった。地方の業者相手の取引の仕事であったので出張が多くなった。

単身出張時の夜は、私の秘密の楽しみには絶好のチャンスを与えて呉れる。営業マンとして新米の私には、朝から晩まで忙しく気苦労の連続であったが、夜、旅館の一室で独りプレイに没頭することで、一日のストレスは一気に吹き飛んだ。

プレイを十分に満喫出来るよう、若造には多少贅沢でも、ホテル協会加入のホテルや旅館でもバス・トイレ付の部屋を予約した。次にどのようなプレイを行なうか頭の中であれこれ思い巡らし、プランを立てるのが先ず楽しい。これを実行する喜び。次は又、変化を求めて計画を練る。

このようにして私の行なった独りプレイの内容を整理してみれば、次の如くである。

(1) 使用器具

イルリガートルは出張等に持ち運ぶのは不便で、ガラス製とゴム製エネマ、それにゴムスポイド式を愛用。婦人用洗滌器も使用して見た。嵩ばらないものをと、いろいろ考えた末、次の如きゴム管の利用を考案した。

化学実験器具の売場で、ゴム管（イルリ用と同じもの）二メートルを求め、カテーテル

の太いもの（十二・十四号）を連結。カテーテルは粘膜を傷つけることが少ないので、ゴムエネマの際も使っていた。ゴム管のカテーテルと反対側の端にガラス浣腸器の内筒を取去って連結。これを浣腸液の中に沈め、カテーテルの方から液を吸ってゴム管内に満たし液の容器を高い所に置けば、あとはサイフォンの原理でイルリと同じ働きをした。液の流れを止めるのは、ゴム管を折り曲げ輪ゴムか事務用クリップで押さえれば、こと足りる。ガラス浣腸器の持合せがない時でも、ゴム管を何らかの方法で容器の側面にとめて行なった。液の容器には、厚手のポリ袋か風呂場の洗面器を、よく洗って用いた。

(2) 薬液の種類

グリセリン五〇％、グリセリン一〇〇％、食塩一〇～一五％、グリセリン食塩混合、石けん水、硫酸マグネシウム一五～二〇％、牛乳、サイダー、砂糖液二〇～二五％、冷水（室温）、温湯（四〇～五〇度）

硫マ、牛乳、砂糖、サイダーは刺戟が少なく失望した。食塩は刺戟は強いが、濃すぎると粘膜をいため、出血することがあると知った。冬の冷水は刺戟が強いが、おなかを冷して調子を狂わせたことがある。以来、温湯で

量を増している。

(3) 液量

最初の頃、いちじく型か三〇ccガラス製で二～三本だったのが、だんだんエスカレートして、グリセリン五〇％で一〇〇cc位。更に大量を求めたくなったが、薬品では翌日への影響を恐れて温湯を使用。二五〇〇cc～三〇〇〇cc、即ち洗面器、ほぼ一杯。

(4) 液体以外の物

マヨネーズ、ケチャップ、バター、プリン生クリーム、アイスクリーム、豆腐、バナナソーセージ、棒型パイプ等は試用済み。

プリン、クリームは、ガラス浣腸器を使つて。マヨネーズ、ケチャップ、豆腐は、ポリ容器入りの場合、少し無理をして直接、容器より。バターは、柔らかいものを適当な形に延ばし、冷蔵庫で固くして。

(5) シャワーの利用

奇ク七月号に中沢完好氏がシャワーを利用したプレイについて書いておられるが、私も温湯を使用して量を上げて行くうち、これを利用することを思い付いた。シャワーの先端の水を分散さす器具は、普通、ネジ込み式で簡単に取り外すことが出来るので、湯の温度と圧力を適当に調節するだけで、水圧によつ

て簡単に腸内に注入する事が出来た。量を思う存分、用いるのに最適であり、薬液の如く影響があとに残らないので、おなかの具合も至極上々であった。欠点は、給湯設備が悪いのか、急に熱くなったり冷たくなったりしたことがあったのと、注入量が正確に分からない点である。

一度、ホテルの都合でダブルの部屋を割当てられたことがあって、その部屋にはビデが設備されていた。早速、浣腸に利用してみたが、これもまことに役に立つものである。

(6)おしめの使用

ガーゼのおしめ、紙おしめ、大人用おしめカバーを使用。

ガーゼや紙のおしめは購入が大へんであるし、大人用おしめカバーも仕舞っておくのに気を揉むため、捨ててしまった。

その後は、おしめの代りに厚手のブリーフを二、三枚、重ね、間にチリ紙を何枚かはさんで吸水性を良くして使うことにした。おしめカバーは着用せず、大きなビニールを敷くようにしている。これは園芸用の広巾のビニール・フィルムだが、ベッドや敷布団をすっぽりと覆いシーツを汚す心配はなく、のびのびとプレイを楽しめるので愛用している。

婦人パンティが手に入った時はブリーフ使用より素敵なことは勿論である。

おしめ着用の場合の薬液は、グリセリンの濃いめのもの一〇〇cc程度か、先ずプリン、ケチャップ等を注入しておいてグリセリン液を使った。

汚れものを捨てるのに困ったこともあったが、その頃の地方の国鉄駅のトイレは未だ汲み取り式が沢山、残っていて、恰好の捨て場所を提供して呉れた。

(7)排泄場所

トイレとおしめ以外に利用してみたのは洋式バス。バスはこの中で体を洗うものであるし、排水は横に並んだトイレのものと直ぐ下で合体している筈である。お湯の中に、むくむくと雲が拡がるときの感覚もまた、捨て難いと、しみじみ思った。

(8)下剤の使用

浣腸趣味を分析すれば、腸における感覚、即ちD感覚が大きな要素となっていることは前に申し述べた。D感覚を求めるには浣腸によらず、下剤でも間に合う理屈である。

市販の下剤を、手当り次第に試して見た結果、期待は裏切られなかった。勿論、薬剤の種類、使用量によっては、効かないものや腹

痛をもたらすものもあったが……。

最も満足出来たのはヒマシ油。次いでセンナであった。いずれも現在では、もはや古臭いと思われられているものである。センナは元来煎じ薬であるが、粉末を使った。ヒマシ油は一回三〇〜四〇グラムを空腹時に服用し、飲み物を多い目に摂って、二時間余で素晴らしい効果を得た。数時間後には全部、体外に排出されるのか、あとに影響を残すことが殆どないので、ヒマシ油に魅了された私は、ますますエスカレートし、下剤、浣腸併用へ進んでいった。即ち、ヒマシ油を服用して大半、排泄した後、温湯二〇〇ccの浣腸を二・三回繰り返すと消化管の中は殆ど空っぽになってしまい、気分は至って爽快である。こうしておいてケチャップ、マヨネーズ、バター等の人工便を注入し、刺戟の強い浣腸液を用いるというわけである。

十二

私と同種の趣味の持主で今までに知り合った人の中、男性では前にNのことを書いた。女性は数名になるが、その内プレーを行なったのは四人で、あとは、お喋りだけの付き合いであった。その一人のM子は相当強烈なマ

ニアだったようであるが、それにも拘らずプレーに至らなかったのは、その頃お互いに年が若かったのと同じ病院の入院患者としての付き合いだったせいである。二人だけで顔を合わすと話は極く自然とその方面に発展していった。彼女はその種の人間特有の鋭い直感によって、初対面時に私の内面に秘めたものを見破ったらしい。何液何cc、その時の姿勢耐えたのは何分、その間の体内の状況の変化排泄物の量、形、色、下着を汚した模様等、

微に入り細に亘った。腸のレントゲン造影検査、直腸鏡による診察の際の動作や心理、或は他の患者が浣腸された時の表情や、トイレへ走るさまにも及んだ。M子は、両手で腹を押えながら目を輝かして、お喋りを楽しんでいる様子であった。

プレーの相手で最も気の合ったE子は、体質も私と実によく似ており、趣味の領域は全く同一と言ってよかった。私達は今まで心の奥に画いてきたロマンを総て現実化したい欲

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するたと「告白懸賞」とお書き下さい。

望に駆られ、お互いに相手の前に自己のアップノーマルを赤裸々に曝け出すことにより醸される特異な雰囲気浸りつつ、天にも昇る思いでプレイを重ねたものであるが、男女間のプレイの内容については、文章にするには差障りが多く、ここにありのままを報告するとは断念せざるを得ない。多少デフォルメして、他日フィクションの中に組み入れて発表したいと思う。

こうしたプレイ以外にも、他人に無理矢理浣腸した経験は何度もある。責め的手段ではなく、相手にその傾向があるかどうか確かめるのが目的であった。

私のアップノーマルな性癖の基底には、D感覚（腸における性感、Dは腸のドイツ語ダルの頭）が最大の要素として存在するものと自分で信じている。切腹趣味の基礎はM感情とD感覚の組み合わせであろうと考えているが、これに関してはまた改めて論じたい。浣腸はDとAの感覚に基づくと言う見解は、奇ク二月号に掲載してもらった「D感覚」を考える「浣腸愛好の感覚」で、説明した通りである。五月号の「妖花の泉」と、その続きである本稿も、いわば私のD遍歴の告白である。

新連載・奴隷妻小説

命

預

け

ま

す

△巻の章▽

カット・岩波大介



柴

利 好

1 魅惑の残酷ショー

その頃、雑文屋として、ようやく一部に認められだした野口浩介ではあるが、四十路を越えるまで気尽な独り暮らしを続けていたの

を見逃がす事は出来ない。いや、この牧山なる人物と、その妻との営む奇矯な生活にこそ彼が、独身生活を続けている真因を求められると、いい直した方が適切であるかも知れない。

桜には未だ少し間のある早春の午後であっ

は恐らく若い時分から放蕩の情性に違いない。しかも彼が、その後も、なお引き続き今日に至るまで、こうした放埒な生活を棄て切れずにいる理由の一つとして、ふとした縁で知り合っ

た。その日、浩介の懷中は淋しかったが、さりとて差し迫った仕事もなく、所在ないままそうした折のいつもの慣わしで、彼は浅草に出掛けて行った。それは下町育ちの彼にとって、この土地と住民の人情とが、他所では味わえない安らぎを与えてくれるからである。

参詣を済ませてから、いつも足の赴くのは六区であった。週なかのせいか比較的、閑散とした街のはずれまで来なかった浩介は、何の気もなく、そこにあったSという小さな劇場に入ってしまった。ホンの退屈凌ぎの心算だったので、ろくろく看板も見ないで通ったその舞台では丁度ストリップ・ティーズが一段落して大切りのショーが始まったばかりの所だ

った。狭い館内は案に相違して満員に近く、そこには一種の熱気さえ感じられた。

折柄、舞台では自身番風景と覚しい書割の前で、二人の下役人によって、数名の女が吟味を受けている場面である。

女達は何れも町人風の粗衣の上から捕縄で後ろ手に高手小手に縛られて、平土間に引き据えられていた。しかし、その縛られ方が胸囲りに二巻きほど形ばかり回した縄尻を自分で握っている態の、全くおどろきの仕方であったのは、これに類する演し物の毎度の例に洩れなかった。

処が、ただ一人の女優だけは例外で、全く別扱いの緊縛を受けているのが彼の目に一目で分かった。他の女優達より多少、年嵩のように見えるこの女優は、整った目鼻立ちではあるが、他の女達が如何にもショー・ガール然とした厚化粧であるのに較べて、一見して異質の存在であった。つまり、このレビュー小屋の座付きの女優とは思われない特異な風情を持った女であった。

彼女は、高手小手の後ろ手縛りという言葉そのままに、着物の上から上体を幾重にも縄掛けされている。その縄目は着衣の上からとはいえ、一筋一筋が実に緊しく締め上げられ

ていて、小緩みもしないように思われるその縛り目の間から、衣裳を弾くように、胸元や乳房のムッチリした肉体の隆起が見られるのであった。特に女が後ろ向きになった時に、背中で高々と交叉された彼女の両の手首が、十文字に縛り上げられていることが、はっきり認められた。

宗門改めをテーマとしたこの舞台は、取り交される台詞や、彼女を除いた他の女優達の存在は単なるアクセサリーに過ぎず、このショーの真の意図は、実はこの一人の女優に対する、縛りと責めの凄まじさを売り物にしていることが演技の進行に連れて、ようやく浩介にも理解されて来た。彼がこの小屋に入るやいなや咄嗟に感じた一種異様な熱気の実体も、そこにあったのであった。

背景の書割が何回か変わり、その間に女達の粗衣が囚衣も脱がされて、湯文字一つに剥がれての責め舞台になる頃には、既にアンサンブルの他の女優達は舞台から姿を消していた。それは文字通り、ただ一人、主役である『牧はるか』と呼ばれる女優の独壇上であった。女優や菱縄の本格的緊縛。強烈な鞭打ちの連続。そして、それに続く最後の折檻は、逆さ吊るしであった。

彼女は両腕を背中に回し。手首を十文字に組んだ後ろ手姿で、素裸に剥がれた上体を幾段にも縛られ、その縄目の交叉の一つ一つまでも固く締め上げた雁字搦めにされていた。丸やかな肉体をピッチリと包んだ緋色の湯文字の上には、ウエストから下腹、高腿、膝頭の上下、ふくらはぎにかけて入念に縄掛けされた形態は、まるで笹の葉で巻かれた上からギリギリ巻きに括り上げられた『ちまき』そのままに見えた。足首まで湯文字は届かず、素肌のままの両足首を無雑作に幾巻きか縛り上げた縄尻が天井から降りた鉤に高々と掛けられた。その時の彼女の黒髪と床との距たりは、優に二メートル近かった。

上体を縛った縄目の間から、はみ出した肌白い肉柵の一段一段の有様が、側面から当てられる青色を帯びた照明の具合で、深々と喰い込んでいる縄目と対照的な凸凹をクッキリと際立たせ、一層、残酷な見せ場になっていた。なのであった。緋色の湯文字が、こうした責め場で用いられているのは多分、白い細引とのコントラストを考えての視覚的效果を高めるのが狙いなのであろう。

数分にも及ぶ逆さ吊るしのまま、なおも幾つかの鞭打ちを受けてグルグルと緩やかに転

回した彼女の口から、やがて一条の赤い液体が流れ落ちた。

この事が、この責められた女の死を暗示して、このショーは閉幕したのであったが、観客の全では、まるでこの舞台に酔っているように思われた。彼、浩介とても、もちろん例外ではなかった。今日までも何度かこうした種類の舞台に接した経験のある彼ではあったけれども、その日の舞台程、真に迫った見ものは一度もなかったからである。その夜、近郊のアパートの一室に帰り着いてからでも、この舞台から受けた陶醉が、なおしばらくは脱け切れない彼女なのであった。

その翌日から浩介は年甲斐もなく、この小屋に通い続ける身となった。彼は自由業の有り難さを、しみじみと感じながら初回から終演まで最前列の席に陣どって売店のパンやカステラの類を頬張りながら、飽かず入り浸った。この中年男の一途な姿が、ショーの最終日まで見られたのは、実にこの舞台での『牧はるか』一人の演技が、如何に激しく彼の心を捉えたかを物語っている。

2 S M 夫婦

やがて、それ程までに浩介を熱狂させたその舞台も、遂に最終日が、やって来た。

「今日で、あの女優とも、お別れだなあ！」幕間を、冷たい廊下の長椅子に腰掛け、合コートの襟を深々と合わせながら、独りポツネンと煙草をくゆらした時、浩介は流石に寂しかった。

彼は何故この女優にこのように魅せられたのか、改めて考えて見た。彼女は他の女達に較べれば、左程の美人とも思われない。目がパツチリと大きい他は、むしろ平凡な容貌の女だった。それなのに、舞台の上で縛られ責められて、のた打ち回る時のその姿の奥底から、全く得体の知れない妖しい魅力が生まれて来て、彼の五体を、五感を押し包んで金縛りにしてしまうのが不思議であった。彼自身にして見れば、それまでS M的性格についての自覚は正直、持ってはいなかった。それにも拘らず、何故そんなにまで興奮し、感激したのであるのか。

「俺が、このショーに、これ程、魅せられたのは、あの女優に惚れてしまったからなのだろうか。それとも、ただ女が縛られたり、責められたりすること自体に、ひきつけられたからなのだろうか？」

と我と我が心に問い掛けながら啞然として天井を仰いだ、その時であった。一人の男、それは小柄だが顔付きの鋭い、いなせな青年だったが、彼に近づく、親しみのある口調で話し掛けて来たのである。

「失礼ですが……旦那は毎日、随分、熱心にお通いですねえ。余程、このショーがお気に入られた様子ですが……それも、おおぎりの切支丹図絵ばかりを昼夜、欠かさずですもの。全く驚きましたよ」

突然のことで、いささか面喰った浩介は、流石に自分のここ数日の行状を見すかされた気恥かしさも手伝って、

「これはどうも……だが、貴方は、よくぼくを、ご存知なんですですね。毎日、ぼくが、ここに通っていることを……」

と訝るのを受けて、

「それなんですがねえ。私は、ここの舞台装置を手伝っている牧山という者ですが、旦那が余りご熱心な様子だもんで、若しよろしければ一度、舞台のソデの方から、ご覧になったら、どうかと思ひまして声を掛けて見ました。この次の回で、今度の演し物が替りになりますので、一つ如何ですか」

といい、微笑を浮かべて語を継いだ。

「実は四、五日前から、上下のソデから見るともなしに見るカブリツキに、いつも旦那がいらっしやるのを見て私も、ありがたいことと喜んでおりますんで、別段の意味合いがある訳じゃありません。どうですか？ いらっしやいませんか」

口振りは割に伝法だが、一応、礼儀を心得た青年の言葉に、つい引き込まれた浩介は、「それは願ってもない、ありがたい事です。では好意に甘えましょうか。いや、ぜひともそうさせて下さい」

と喜びを隠さず答えたのであった。

廊下の突き当たりをはいると、もうそこは薄暗い舞台のソデであった。そこから直ぐ舞台裏に出て、狭い階段を上がった処に楽屋がある。

二人が、その楽屋にはいったのは、最終回開幕のベルが鳴って、ストリップ・ショーの踊り子達が数名ステージに向かって駆け出して行った処であった。狭い部屋の周りに掛けられた薄汚れた舞台衣裳や鏡台その他の雑然と置かれた光景は妙に、うら寂しさを感じさせる。

その時、楽屋に残っていた数名の男女から少し離れて部屋の片隅に蹲るようにして坐っ

ていたのが、責めのヒロインである『牧はるか』その人であった。

浩介を伴って部屋に上がった件の青年は、浩介を差し招きながら女に呼び掛けた。

「おい、お客様をお連れしたよ。こちらはお前の大ファンでなあ。それ、昨日も話したろう。例のカブリツキの旦那だよ」

呼び掛けられた女は、髪下のままで、短い半纏様の物を羽織った姿を、横向きにして坐っていた。物寂しい横顔を見せたまま、心持ち頭を下げたなり、何故か浩介の方を見向くともせず、身体を固くしている様子が、浩介には何となく不自然に思われた。

「何でい何でい！ 今更どうって事もあるまいじゃないか。折角のご来客だぜ！ こっちへ来て、ご挨拶しなよ」

男は女に近寄りざま、彼女の半纏の裾に手を掛けて引っ張った。肩から羽織っただけの半纏は苦もなく彼女の身体から、ずり落ちて男の手に引き寄せられた。と何という事だろう。彼女は舞台上の姿をそのままに、湯文字一つで上体は素裸のまま、細引で厳重に縛り上げられていたではないか。ただ違っていたのは、両の手足に縄が掛かっていない点だけであった。

「ああっ……」

小さく口元から洩れた叫びと同時に、女の顔から全身にまで一瞬、紅が差したようであった。横向きに蹲った姿勢を尚一層、屈めて深々と垂れた女の頸にも無残に首縄が掛けられている。それは丁度、あの逆さ吊るしの光景で見たと同じ型の縄目が、上体から腰部を経て、高腿の辺りまで固く厳しく喰い込んでいたのであった。

「お驚きなすったでしょう。こんな処で、こんな姿を、お目に掛けたりして。無理ありませんやねえ。……実はこれは私の家内なんです」

ギョツとした浩介の様子を察して、彼は話し続ける。

「一回のステージの中で、四度も縛り責めのシーンがあつて、それが一日、三回なんですからねえ。こうして本式に縛り上げる作業も仲々容易じゃありません。他の人には出来る相談じゃないんです。私一人がこれにつき切りで、縛ったり解いたり、いやもう忙しいのなんの。この縄目は、ご承知の通りショーの最後の吊るしの場面で作る縛りなんです。ご覧下さい。こうして縄目の交わる一つ一つにまで縛り玉を拵えながら、縛り上げて行く

んですから、短い時間じゃあ忙しくて、とても満足に縛り切れるもんじゃありません。それで二人して考えまして、この縛りだけはハナから縄を掛けっ放しにして置く事に決めたいんです。腕や手首は待ち時間の間は自由にしています、必要な時に、この基礎縄に別の縄を掛け足して縛れば、直ぐに高手小手でも何でも出来上がるんです。この基礎縄の上から衣裳を着せてやって、その場面場面に応じた縄目を、その上から掛けてやるという寸法なんです。こんな事にも結構これでも苦労があるもんですよ」

説明を聞いた浩介は、それが、いかに勤めとはいえ余りの事のように思われたので、話の一区切りを待って

「それにしても、貴方の苦労は、とにかくとして奥さんが堪まったもんじゃないでしょうに。それじゃあ午後の昼日中から夜まで何時間かを、裸の上から縛られ通しじゃありませんか。良くも長い間、辛抱が出来るもんですねえ。こういっては失礼かも知れませんが、いくら夫婦仲とはいえ、少し、やり過ぎのようない感じがしますよ。ご覧なさい。肌に深く喰い入っている縄目の厳しさを！これじゃあ奥さんが可哀想じゃありませんか」

と痛々しい縄付き姿を晒して、うなだれている彼女を指し、感に耐えず詰問したのであった。

「ごもっともです。これが普通の女ならば、もちろん辛抱できる訳はありません。辛抱出来ないのが当然の事でしょう。まあ、その辺の処は、いずれ又、旦那さえお望みでしたらその時にでもお話ししましょう。実は、この切支丹女の役は、初めは別の女優さんの役だったんです。処が台本通りの本稽古で散々痛めつけられたんで、その人は堪まり兼ねたんですねえ。そのまま逃げちゃったんですよ。それで家内が、その代役を買って出たという訳でして。私も時々手下の一人に扮して熱演するという仕儀なんですさあ。家内は本当は臨時の代役なのに、これが全くお客様に大受けでして、お蔭様で連日こうして大入りを取っておりますんです。『牧はるか』という芸名はこれは本名、牧山春子から取ったもんです」

両人のこうした会話を、この時、楽屋に残っていた数名の俳優達が、どのような思いで耳にしていたものか。誰一人、口を挟む者もなく、無関心の様子に見えたのは、恐らく彼等がこの夫婦への思い遣りから、態とそう振舞っていたに相違ない。

刻々と時間は過ぎ、ステージは順調に進行して、愈々切支丹図絵、打ちどめの舞台となった。もうその頃には、それまで散っていた俳優達も持ち場に結集して、万全の準備怠りなく、開幕前の緊張感が楽屋一帯に漲っていた。演出家の合図と同時に舞台上がって行く面々に伍して、彼女『牧はるか』も縄付きの上に衣裳を着せられた姿で席を立った。

浩介は今までは違って、まるで恐ろしいものでも見るような気持で彼女の後を追いながら、ステージのソデに隠れて、責め場遅しと固唾を呑むのであった。

3

哀れ奴隷妻

半月程して浩介は、牧山新吉から一通の手紙を受け取った。先に別れ際に交換した名刺によって、住所を知り合っていたのである。その手紙は至極簡単で、是非、遊びに来て欲しい。ただし、時間は指定を厳守して貰いたいという内容であった。定められた日、浩介は弾む心を抑えるのに随分、苦勞しなければならぬ程、興奮していた。

目指す牧山夫妻の住居は、常磐線K駅から程遠くない地点にあった。同じ沿線でも、既

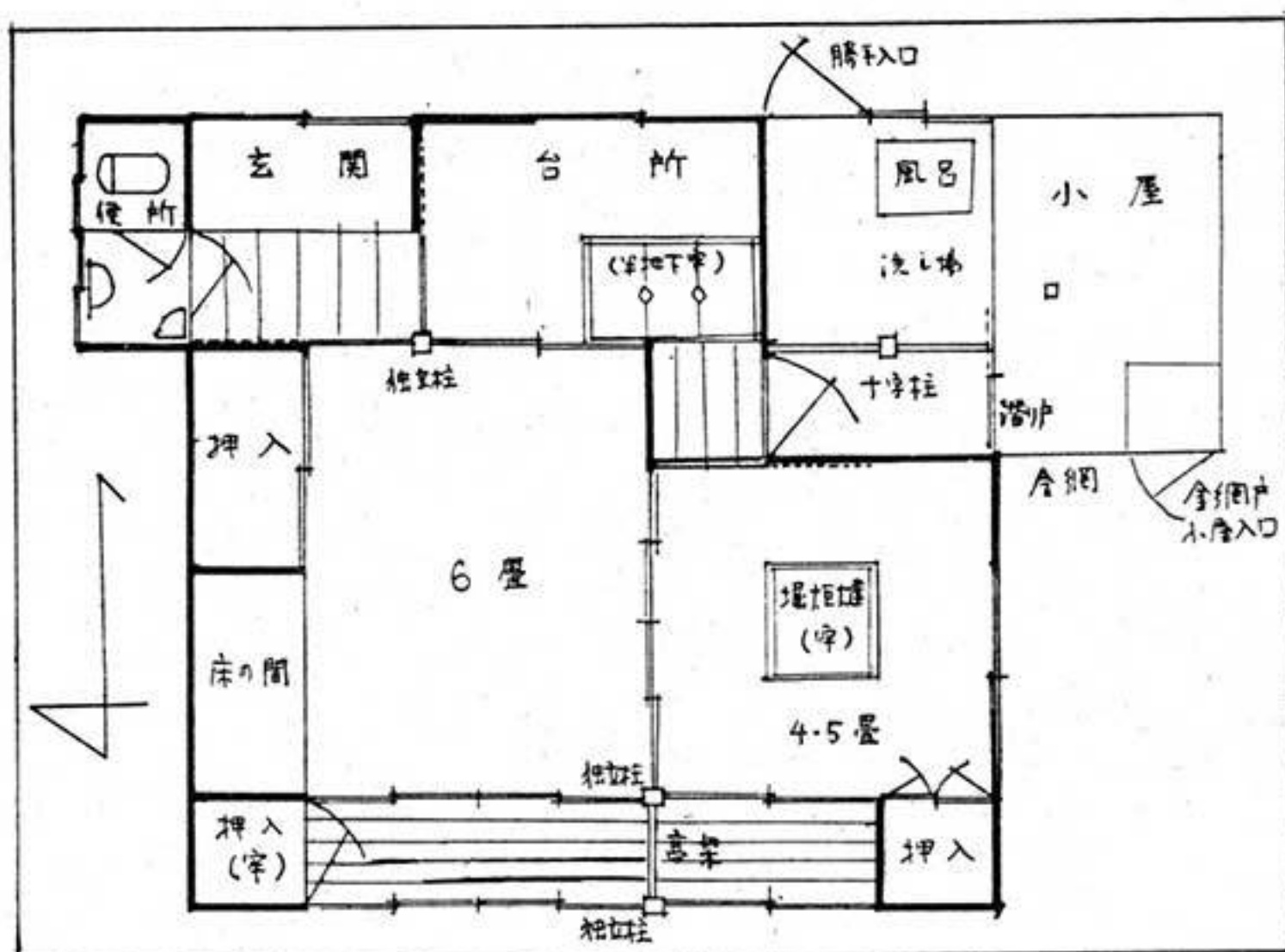
に東京のベッド・タウンと化している浩介の住むMに較べると、この辺りの風景は一変し、まだまだ田畑が広々と連なって人家は駅周辺に数えられる位。その、わずかな家並の先は土地開発会社の分譲予定地を経て遠く緑濃い緑地帯へと拡がっていた。澄み切った空気を胸一杯、吸い込んで揚げ雲雀の声を快く聞いた時、浩介はようやく平静を取り戻す事が出来たのであった。

駅前のお定まりの小規模な商店街を抜けると、小さな溝川が流れていて、その流れに沿った桜並木を二百米ばかり進んだ所にある農業用水池のほとりに、彼等の家があった。瓦葺きの小さな平屋で、月並の造作ではあったが、用水池を背後に三方が繁み豊かな雑木に囲まれた一軒家である。

浩介が、表のガラスの嵌まった格子戸を開けるや否や、牧山新吉が待ち兼ねた様子で玄関に現われた。

「どうぞ、こちらへ。先日は大変、失礼しました。お忙しい中を、わざわざおいで願って相済みませんです」

浩介が招じ入れられた一間は、^{ひとま}床の間、押入れなど一通り整った昔風の部屋であった。新吉自身も一家の主人らしく小ざっぱりした



スポーツシャツに替ズボンという風采であったのは、一応、来客をもてなす誠意が窺えて浩介には卒直に嬉しく感じられた。

「隣の部屋に掘り炬燵が用意してありますから、くつろいで戴きましようか。こちらです……この辺はまだまだ寒うござんしてねえ」新吉は、こういって部屋境の唐紙を開け、

隣室を指すと、自分は別の戸口から奥に消えて行った。

なるほど、その部屋の中程に三尺の炬燵があった。早速なんの躊躇もなく、その炬燵に一足、足を踏み入れるやいなや、彼はギョッ！として足を引っ込めた。何か軟らかい物体が彼の足先に触ったからである。

「ハテナ？」

咄嗟の思いで、炬燵に掛けてある毛布をハネ上げてみた彼が、息を呑んだのも無理はなかった。炬燵の中の軟かい物体は、まぎれもない一人の女。その女こそ新吉の妻、牧山春子その人だったのだから。

掘り炬燵の中の彼女は裸に剥がれていた。なおも良く見ると、両手は後ろ手錠で繋がれており、両足首にも足錠が掛けられているらしかった。その上、太目の首輪が彼女の、か細い頸根に巻かれて、その首輪に繋いだ細い鉄鎖が、炬燵櫓の足の一本に嚴重に繋ぎ止めであるのであった。

「いやあ、お待たせしました。戸締まりして来ましたので……」

こういって戻って来た新吉の声に慌てた浩介が、見てはいけないう物を見てしまったかのように、急いで毛布を掛けて取り澄ますのを

新吉は当然、予期していた事といたげに、微笑を浮かべて、

「よろしいんですよ、分かってますから。どうぞ良く見てやって下さい。今日、旦那をお招きしたのも、家内の奴隷妻振りをトックリとお目に掛けたかったからなんです。奴隷もその事は良く心得ているんです。時間について特に申し添えておいたのも、奴隷時間中に是非、間に合って欲しかったからでして」

と、櫓の足に繋いである鉄鎖をグイグイ引っ張ったのだ。

「さあさあ、出て来て、ご挨拶しないか」

中の彼女は

「ウウウ、ウウッ！」

と呻いて、ようやく顔だけ外に出したのだが、眩しいのか一瞬、目を瞬いてから、浩介の姿を認めるとサッと面を伏せて、又もや炬燵の中に潜り込もうとする。それを新吉が恐ろしく邪慳に鎖を引っ張り上げる。だが、手錠、足錠で繋がれた身体は、狭い櫓の間から仲々脱け出る事が出来ないのだ。

「さあさあ、早くしなよ！ お客様がお待ち兼ねなんだから」

と尚も激しく鎖を引き絞ったので、彼女の頸に嵌めた首輪が、無残にも頸の辺に引っ掛かって、その苦痛に顔が歪む。

いも虫にも似た蠢きを繰り返して、やっと畳の上に這い出して来た女の裸身一面には脂汗が滲み出ていた。

「中に火が、はいつているんですか？」

つい心配になって、浩介が尋ねると

「まさか！ 入っちゃいませんよ。それでもねえ、長いこと、この中にこうして入れて置いて足やなんかで蹴ってやると、こんなに汗まみれになるんです。実は旦那が見えるまでこの中で一責め責めてやっていたんです。結構、面白いんですよ」

と、さも楽しそうに、うそぶくのである。

ようやく炬燵牢から解放された春子は、直ぐ後ろ手錠の両手を固く握り締め、案の定、両足首にも嵌められていた足錠の痛みも意に介せぬ風で、その場に正座するなり、鎖に繋がれている頸を胸元に沈めるようにして、さも諦め切った風情に見えた。それは、そうするうちに飼い慣らされた奴隷としての習性を早くも取り戻したからなのだろう。

その時、浩介の目に、初めて又、一つの事実が、目についた。彼女の細腰が一つのベル

トのような物で、それが肌に深く喰い込む程厳しく締め上げられているのである。そのベルト様の物は、真鍮の細い鎖で編んだ胴鎖である事は、後で分かった事柄である。

「ご挨拶しろといっても、奴隷時間中だから無理な話だなあ。それじゃあ、早速おもてなしをするとうか。さあ、立つんだ。いつものように酒の支度をしろ！ もちろん、そのままでだ。さっさとしないか。何を愚図ついているんだ。いつものお前らしくないじゃないか。それとも、鞭が欲しいとでもいうのかい？」

わざと声を荒立て、先程から握り締めていた鎖をグイグイ引き絞った新吉は、無理矢理に彼女を立たせはしたが、両足首を短い鎖で繋いだ足錠の悲しさ。彼女は自由に身動きがとれない。たった二十センチ位しかない鎖の長さ一杯に両足を踏みしめて、鎖で夫に引かれた首を前方に突き出し、それと反対に腰を後ろに残した不ざまな恰好で、よろめきながら部屋境のカーテンを潜って奥に引かれて行った女の姿は、痛ましくも哀れであった。

直ぐさま部屋に取って返した新吉は、
「世話を焼かせやがる。いつもは、こんなじゃないんですがねえ。奴隷の奴、旦那の前だ

もんで、少し変な気を起こしてるんですよ」という苦っぽい口調とは裏腹に、内実は上機嫌な様子で話し続ける。

「ええと、奴隷時間の事を話してしまいましたっけねえ。つまり、こうなんです。私達は、普段は当たり前の夫婦として暮していますが、一定の時間を限って、家内を奴隷に仕立てて

いるんです。一匹の牝奴といっても良いでしょう。もちろん世間には全くの内緒事でしてこんな有様をお話したり、お見せしたりしたのは旦那、貴方が初めてなんですよ」

「それはそれは。大層なご接待で恐れ入ります。そうでしたか。私が、あのショーに熱中したので、そのお蔭で呼んで下さったんです



イメージギャラリー

『仕置場』

岡

たかし

ねえ。やっと意味が分かって来ましたよ。それにしても、奥さんがこんな風にして過ごされる奴隷時間というのは、どの位なんです？ それから、どんなキツカケで、どんな理由で奴隷姿にされるんですか？ それには何か一定の基準でもあるんでしょうか？」

と浩介が昂奮気味に、あれやこれやと急ぎ込んで尋ねるのを、新吉は平然と受けて、

「いや別段どうって事はありませんよ。色々口実はつけるようでした万幸、私が決めるんです。ですから奴隷時間も、至って気尽にその時々二人の気持、気の入り方次第で決まります。始めから二時間とか三時間とか時間を定めて掛かる事もあるし、行き当たりばったりでする時もあります」

「奴隷というと、如何にも悲惨な感じを受けますけれども、奥さんに本当の奴隷の様な重労働をさせたりなさるんですか？」

「いいえ、それは違います。全然、働かさない訳ではありませんが、本当の意味での奴隷的重労働ではありません。もっとも、身体的自由をある程度にしろ奪われて強制される作業は、些細な事でも重労働の一つといえるかも知れませんが。まあ、奴隷といいますが、つまりは夫婦生活の中の一つの遊戯に過ぎま

せん。昔の奴隷と呼ばれた人達、特に白人の女奴隷達が、実際に、どんな生活をしていたか知りませんが、とにかくあれに奴隷らしい身なりをさせ、奴隷らしい折檻をしてやる事が、私達のプレイの目的なんです」

「プレイといわれましたが、奴隷になる奥さんは、矢張り随分、苦しい目に遭われる事になります。万事ご承知の上でなんですよ。ねえ」

「当然ですとも。正直に申しまして、家内ときたら、そんな風に扱われる事に、心からの生き甲斐を感じている女なんですから」

「驚きましたね。しかし段々分かって来たような気がします。奥さんが、あの残酷ショーの代役を引き受けられたのも、奥さんにそうした、被虐嗜好があったからこそなんですね」

「その通りです。最初、話を切り出したのは私からですが、二つ返事で乗ってきてくれたんです。今では感謝しています」

こうした男二人の会話の合間にも、炊事場とらしい隣室から、しきりにガタゴト音が聞こえていて、それに混じって微かに、ジャラジャラと引き摺る鉄鎖の響きが、し続けている。

「一生懸命やっているんですよ。可愛いヤツです。こんなに良く出来た女は、鐘や太鼓で探したって、そうざらには見当たりっこありません。それを縁あって妻として迎え、その上、何の因果か、こんな風にして犬畜生みたいななりをさせては虐め続けている不思議さを、つくづく思うこともありますよ」

「奥さんが、奴隷として受ける折檻というのは、どんなものでしょうか？」

「それは時によりけりですが、普通でしたら縄で縛ったり、鞭で叩いたりというところですよ。たまには色々と趣向を変えて、責め折檻してやることもあります。よくも身体が続くものだと感心する、というよりも呆れてしまいます。それくらい、私達のプレイは、もう何年も続いているんですよ。とはいっても、これは家内だけに責任がある訳じゃありませんがね。私にだって女を虐めて楽しむ性向が多分にあればこそ、こうした暮らしを続けていられるんですから。一つ、如何ですか？」

ああして見せてくれとか、こうして欲しい事がありましたら、何なりと試して、お目に掛けますよ。まあ何ですね。それは追々に、という事にしましょうか。……それにしても奴隷の奴は一体、何をしてるんだらうねえ」

新吉が呼び声を掛ける気配を見せた時、部屋境のカーテンが揺れて春子が現われた。後ろ手錠の不自由な両手に、ビール壺を二本持ち、口に栓抜きを咬えて来て、それらを炬燵の上の台に乗せる。こうした作業には慣らされていくらしく、歩行の不自由さに較べると楽々と、し終せた。

二度目に現われた時には、鐘筒二個と小さな受け皿を。三度目には小型の鉢に季節の漬物を入れて、それを後ろ手錠のままで、実に器用な身のこなしで運んできた。

やがて、その不自由な身体のままの彼女によって鐘の口が開かれ、銘々の皿にピーナツと品川巻とが取り分けられた時、習慣とは恐ろしいものだ、と、浩介は熟々、感じ入るのであった。

4 縄目のヴィーナス

「さあ、どうにか揃ったようです。先ず一杯お注ぎして、乾杯と行きましょう」

新吉はビールをコップに注ぎながら、「奴隷時間中は、奴隷が口をきいてはいけないう事にしますんで、黙ったまま失礼させて戴きます。その代りといっただけですが、ご

納得の行くまで、牝奴の身体を見てやって下さい。オイ、ボンヤリしてないで、こっちへ来るんだ！ いちいち鎖を引かれなければ動けないのかい？」

新吉の言葉に、一旦、隣室に下がりがけた春子は、又しても浩介の面前に引き戻され、直立の姿勢をとらせられた。

全裸の姿を晒した彼女がモジモジする気配に、早くも合点した新吉は、

「どうです。トックリと、ご覧になって下さい」

とコップで指し示した女の肌は、見事に手入れが行き届いていて、あたかも上野の森に飾られた彫像の肌をそのままに、艶やかな柔肌の他は、何一つ見当たらないのであった。

小さくて形の良い顎を突き出すように、上向き加減にした春子の顔は、彫りの深い二重瞼の目が大きい外は万事、小作りな、可愛いくまとまった造作である。それは竹久夢二の描く女の容貌に似ていた。パーマネントを掛けない自然のままの髪を稍、長めにして、後頭部で無雑作にポニー・テールに、まとめ上げ、項を完全に露出するようにしているのは首輪の取り扱いに便利のためだろう。

頸部に嵌められている首輪は畜犬用の物ら

しいが、日頃、充分、使い込んでいると見えて、その三センチ巾の革の表面に脂肪の光沢が見られた。細頸に連なる両肩は、女らしい撫肩で、両腕は後ろに、しっかりと回されている。

胸元から両乳房に掛けては、実に立派な肉付きで、鎖骨が見えない位、皮下脂肪が豊かに充実している。しかも、その下に続く胴中といえ、その中央部がまるで瓢箪のように極端に細くくびれているのは、そこに厳しく嵌め込まれている銀色の胴鎖のせいなのだ。こうしてウエストを胴鎖で余りに厳しく締めつけているので、これに連なる上下の肉体が反対にプックリと張り出している。その胴の状態が丁度ゴムマリを二つ、縦に重ねた風に見えるが、胴鎖そのものは深い体のくびれに陥没して、殆ど見る事が出来ない。

骨盤の張り具合は、さして広くはないからヒップ・サイズは、むしろ小さ目に見える。しかし、この臀部から下腹部全体には実に形良く引き締まった肉付きが丸やかな造形的曲線を形作って下股へと続いている。

真直ぐに成長した脚線の素晴しさは、体操の女子選手のそれに匹敵するだろう。殊に両の太腿は一分の隙間もなくピッタリと密着し

て、内腿まで充実した肉付きの美しさを見せている。太腿部の断面は完全な正隋円形が得られるに違いない。そして、スラリと伸びた長い脛の下に連なる細く締まった足首には、正確にサイズを合わせたらしい三センチ巾の革の足輪が喰い込んでいる。その二つの足輪の夫々に取り付けられた丸環を二十センチ程の短い真鍮の鎖が連結しているのであった。

まるで奴隷市場の女体改めのような、この綿密な観察によって浩介は、彼女が既に三十に手の届く年令で、それも主人の新吉より若干、年上のように感じた。その容貌から受ける印象では幾分、面婁れを思わせたのは、この年令的なものよりも或は彼女の日常生活の不自然さからではあるまいかと推量された。しかも彼女の女性としての肉体的諸条件については、ウエストが奇形に近く異常なまでに絞られている外は、常識的尺度では満点を与えても異存はなかった。

しかしながら、この素晴らしい彼女の体の諸々方々に、常人には恐らく見られない、これこそ奴隷妻のみが与えられるであろう折檻の証^{あかし}が、幾重にも柔肌に刻み込まれているのを浩介は否応なく見せつけられた。

その折檻の証は縄目の跡なのであった。両

イメージギャラリー 『S M 部新設』 須坂 旭



腕から両乳房の上下、下腹部、太腿などの要所所の皮膚には、何度も何度も、同じ部位に強烈な緊縛を受け続けているために出来た縄目の跡が、緊縛から解放されている間でさえも消える事のない条痕を形作っていて、しかも濃淡とりどりの色彩に染まっているので

あった。

上から下まで、幾度となく、ゆっくり目を走らせながら、浩介が我を忘れて、その美しさに見惚れていると、

「よし。次は後ろを向きな！」

と新吉が促す。その声に応えて、易々とし

て背を浩介の方へ向き直って、尚も佇み続ける奴隷妻の素直さであった。

二米にも余る細い鎖。多分、これも市販の畜犬用の物らしい真鍮の鎖が、首輪と結合している尾錠から長々と垂れて、足元の畳に届いていた。背中に回された丸やかな両腕は、手首の処で嚴重に手錠で繋がれ、両手は固く握り締められていた。

この手錠は足錠と同型で、同じ物質で作られているらしいが、それを繋いだ鎖は、もつと短くて、両手首が殆ど密着しているように見えた。ふくよかな両腕を含めたその背面の全身に亘って、奴隷妻の証としての緊縛の跡が、前面部同様、クッキリと印されている事は、いうまでもない。

「ああ！ 何と素晴らしい！」

心から感に堪えない賞讃の叫びが、浩介の口から思わず洩れたのを機に、新吉は

「如何です？ お気に召しましたでしょう。」

街のストリップじゃありませんから、どうだって構いませんよ。遠慮なさらずに、どうぞ奴隷は決して逆らったりはしませんから、何処でもお好きなように、お手に取って、お改め下さい」

といいながら今度は春子に向かっていう。

「なあ、お前。お呼びして良かっただろう。こんなにも旦那に喜んで戴けるなんて、全く奴隷冥利に尽きようってもんじゃないか。そうは思わないかい？」

後ろ向きで、項垂れて立ち尽していた彼女は、この時、一瞬、小さく頷いた様子だったが、やはり声にはならなかったのは、飼育が徹底している証拠である。

「この通り奴隷も喜んでます。まだ奴隷時間が大分、残っていますから、今一責めしたい処なんです。今日はこのまま、時間まで牢屋に繋いで置いてやりましょうや」

新吉は、そう独り合点すると、畳から鎖尻を手繰り寄せ乍ら

「さあ！ 特別のお思召しだぜ。折檻は中止にして、このまま牢繋ぎの恩恵を与えてやることにするぞ！」

と春子を引き立てる。

浩介は、これからどうなる事かと興味深々で新吉の後に続く。よちよち歩きで鎖を引かれながら春子が辿り着いたのは、部屋に南面した短い廊下の突き当たりであった。

そこに半間の板戸つきの押入れがあつて、片開きの板戸を開けると、内部は上、下段に別れている。そこまでは普通なのだが、違っ

ていたのは、下段の入口に十字に組んだ木製の格子が嵌められていることであつた。良く見ると、これは炬燵の櫓の上に当たる部分を脚部を外して蝶番で取り付けたものに過ぎなかった。が確かに、その形状は日本古来の牢屋その物である。

新吉は左手に鎖尻を持ち、右手を巧みに使って、その牢の格子戸を開くと、

「入るんだ！ 後一時間もしたら、許してやるからな」

というや否や、押入牢の前に、しゃがみ込んだ春子の弱腰をポンと蹴飛ばしたから堪まらない。彼女にとって、それは予期された事だったかも知れないが、急にバランスを失った女の体は、ドサリと大きく、もんどり打って牢内に蹴込まれたのであつた。

新吉は、すかさず鎖を牢の内側から格子に差し入れて外部に繰り出し、格子の一本に、しっかりと縛りつける。それから牢の戸口を閉じて、取り付けである南京錠で鍵を掛けてしまった。その時、首輪に繋いだ鎖を、出来るだけ一杯に引き絞って繋いだので、奴隷妻の頸が格子の内側に殆ど密着するまで引き寄せられた。従つて春子は、楽な姿勢すら保てない不自然な坐り方を余儀なくされる結果に

なつたのであつた。それも後ろ手錠、足錠、胴鎖付きという苦しい条件の下で、少なくとも奴隷時間終了まで、この辛い責め苦に堪え続けなければならないのであつた。

元の炬燵の席に戻ると、新吉は

「さ、これで一段落と！」

といいつつ、浩介のコップにビールを注ぎ足してから、語を継いで、

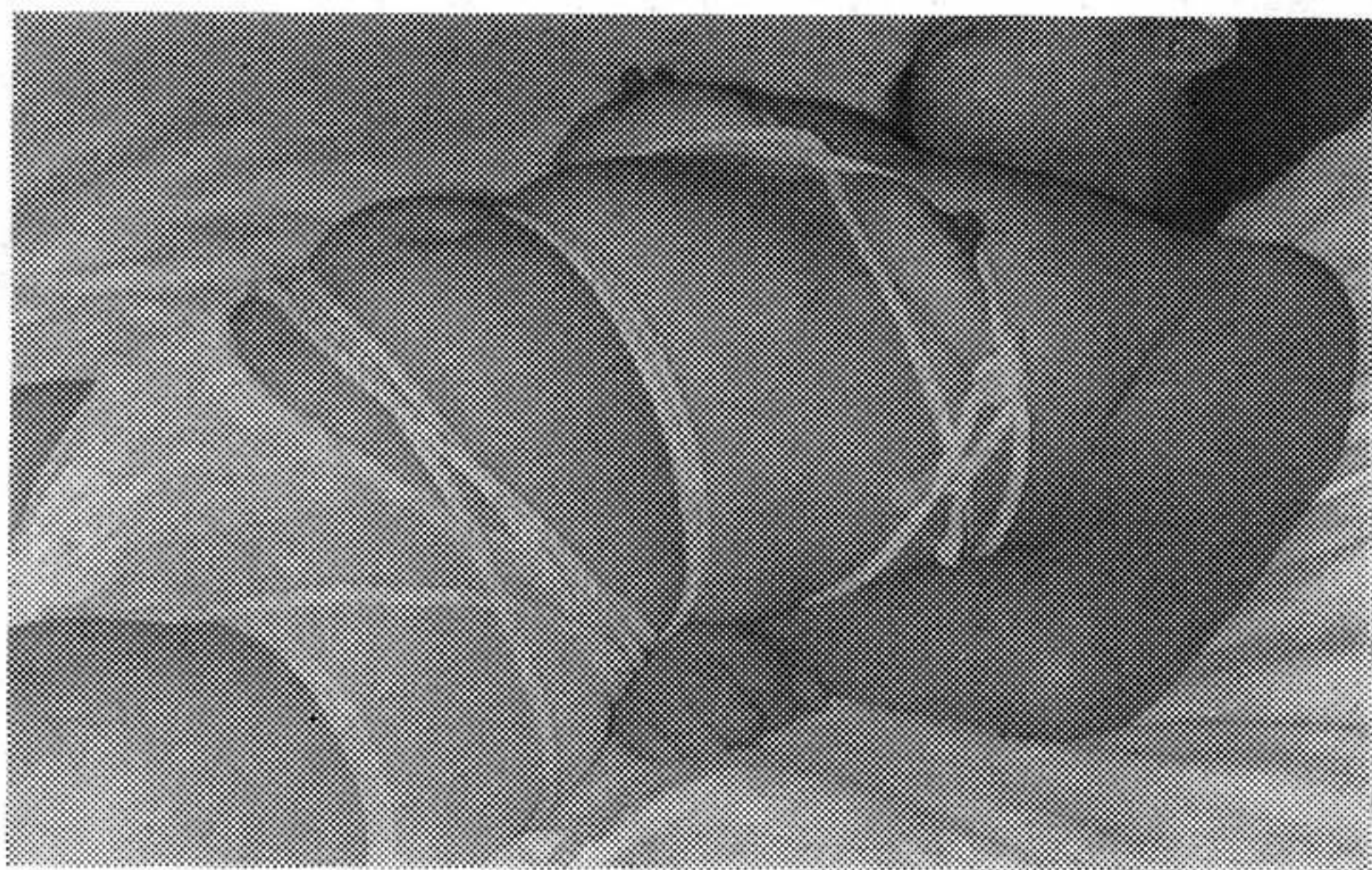
「旦那。われわれの、こんな暮らし方を、どうお考えですか？ 端目から見れば全く氣狂い沙汰と思われても仕方ありますまい。けれども、本人同志は、これで結構、楽しんでるんですよ。これは本当の事なんです。旦那」

「分かりますよ、分かりますとも。……それは、とにかく、その旦那、旦那っていうのは止めて下さいよ。どうも聞き慣れないせいか私には変な具合ですから」

「そうですか？ それじゃあ旦那は止めて、これからはお名前と呼ばせて戴きましょう」

そういうつつ新吉は、グッとコップを空けると、急に改まった様子で坐り直し、現在の愛する妻である春子と、どうして結ばれたのか。そして、どうして、こんな奇妙な生活に足を踏み入れるようになったのか、一部始終を事細かに話し出したのであつた。

——最近、あるモデルによる緊縛と切腹擬態の撮影をするチャンスに恵まれた。モデルの



緊縛・切腹フオトの幻想

M 子 受 難

泉 一郎

女性の名前はM子といった。若い人ではなかったが、実に豊満な肢体であった。そして、素直に私の希望するポーズに応じてくれたが、初めてのことであ

て果てる有様が髣髴として臉の裏に灼きついてきた。M子の血潮で、彩られた白昼夢である。

× ×

あって、全裸になることと、顔を誌上に出されることは、頑として受け入れてくれなかった。そして緊縛は、あまり好まないようであったが、切腹擬態のポーズは仲々真に迫っており、もと

豊満な乳房と肢体の持主であるM子は、夫の同僚の間でもグラマーで知られていた。しかしM子は決して淫らな女ではなかった。むしろ今の時節には珍しく貞淑な妻であった。夫が営業マンとして勤める商事会社に、M子は庶務課の女子事務員として勤務し、その社内結婚は、上司からは祝福され同僚には囑望されたが、ただ一人、人事課長のTは快く思っていなかった。彼は無類の女好きであり、

来上がった写直を眺めているうちに、本当にM子が縛られ、犯され、それを恥じて切腹し

あわよくばM子を、ものにしようと思ひそかに、その豊満な肉体を、狙っていたからである。

幸せな新婚の数カ月が過ぎた頃、M子は体の変調に気付いた。彼女は、その胎内に愛する夫との結晶を宿したのであった。三カ月の妊娠腹は、着衣では殆ど目立たないが、全裸ともなると、もともと豊かに脂肪を貯えた下腹部は、ふっくらと盛り上がっていた。M子の夫は、そんなM子を見ると一そう、いとおしいのか、毎日のようにM子を全裸にしてその下腹部を眺め、ある時は下腹部に頬をすりよせ、ある時は下腹部に口づけをして、いくしむのだった。まことにM子にとっては、幸福と希望に満ちあふれた日々であった。

受難前奏

ある日のこと、人事課長のTからM子に呼び出しがあった。

「実は、君のご主人に転勤の内示がある予定なのだが、転勤先の支店には女子社員は定員一ぱいで、君にも一しよに転勤というわけにはいかないので困っているのだ。君の家庭は新婚間もないことであるし別居を強制するわ

けにもいかん。家庭の事情もいろいろあることだろうから、何とか口実をみつけて、今回の転勤を一時、保留という形にできないこともない。そのことで相談したいので会社が終わってから一寸、つき合ってくれ給え。このことは、まだご主人には伏せてあるから、そのつもりで。彼は仕事熱心だから君のことは構わずに転勤をOKするかもしれないからね」

いかにも、もっともらしい口振りでT課長は語るのだった。

それから数時間後、これがTのわなとも知らずM子は、都心にもこんな静かな場所があったかと思うような立派なお座敷で、Tと向き合って坐っていた。

「お忙しい奥さんを引きとめてしまって、すまないね。まあ、ゆっくりくつろいで、君の方の事情をきかせて呉れ給え」

T課長の話しかけは、いかにも部下思いという様子に見えた。出産をあと数カ月後にひかえたM子にとっ

ては、夫の転勤は、いかにも重大事件であった。子供ができれば共稼ぎは難かしい。もう少し、できる間に貯金をしておきたかった。





た。

— 汚辱 —

肌寒さを覚えて、

M子が意識を取り戻

したのは、それから

何時間位、経ってか

らだろうか。体を動

かそうとしても手足

が自由にならない。

M子の脳裡を暗い不

安がかすめた。M子

は自分が一糸まとわ

ぬ全裸にされた上、

がんじがらめに縛ら

れてベッドに転がさ

れていのに気がつくのに数秒とかからなかつ

た。(写真①)

もちろんTの姿は見える筈もなかった。声

を出して助けを呼ぼうにも、のどは、からか

らになり、声にならなかった。その上、こん

なところで助けを呼んで、かえって誰かにこ

の恥かしい姿を見られるのは、もっと嫌であ

った。何とかして縄を解こうと、右に左に転

げまわって見たが股間にかけられた縄が体を刺激して、その苦しみは、いいようもなかった。何十分、経ったであろうか。やっと両手の縄が、ゆるんできた。手の甲が、すりむける痛さをこらえて、どうやら縄をとったM子は、しばらくの間は起き上がることすらできなかった。

しばらく横になって落着きを、とり戻した時、M子は下腹部の異様な感じに気づいた。はっと不吉な予感に襲われ立ち上がったM子の股間に、たらたらと流れる異様な液体。思わず下腹部に手をあてると、そこは、いつの間にか、すっかり剃毛されていた。何という凌辱！ M子は、お茶に、ひそかにいれてあった睡眠薬で深い眠りにある間、Tによってさんざん弄ばれたのだった。卑劣なるTは、おのれの慾望を満足させるために、ありもせぬM子の夫の転勤命令をでっちあげて、それを餌にM子を誘い出し、何も知らない、うぶなM子をホテルに連れ込んで睡眠薬を飲ませ眠りこけたM子の下腹部を剃毛した上、慾望をとげるや、M子を、がんじがらめに縛って一人、ホテルを抜け出したのであった。

事の重大さが、時間の経つにつれて、ひしひしとM子に、せまってきた。ともかく、身

どんな風に話して夫の転勤を保留にして貰おうかと、頭の中で、あれこれ整理をしているが仲々まとまらない。緊張のあまり、のどの乾きを、うるおそうと、M子は卓上のお茶を一息に飲み干した。共稼ぎの家庭では味わったことのないような上等のお茶であろうか、渋みと苦みが強かった。苦みが胃の中におちて行くところまではM子は覚えていたのだっ

づくろいをと思ったがM子の衣服は、そこらあたりに見当たらなかった。M子がホテルを出るのを少しでも遅らせようとのTの計画であらうか、どこかに隠されてしまっていた。やっとホテル備えつけの浴衣をみつけ、それを身にまとうと、どうやら少し、落着いてきた。ベッドに坐ったM子は思わず、はらはらと涙を流した。

“あなた、私が油断したばかりに、こんなことになってしまって申し訳ございません。あなたにしか見せたことのない裸の身を他人に見られた上に、大切なものを奪われ、そのみか、お腹の中の赤ちゃんも、けがされてしまいました。悪いのは、あのT課長とはいえ、私の油断から出たこと。もう、あなたに生きて、お目にかかろうとは思いません。最後に一言、お詫びをしたいのですが、こんなところに裸の身で残されては、どうすることもできません。お腹の子供がかわいそうではございますが、Tに汚されてしまった今は、あなたにささげることができません。どうぞ先立つことを、お許し下さい。”

ここでM子の生い立ちについて、少し説明しておかねばならない。

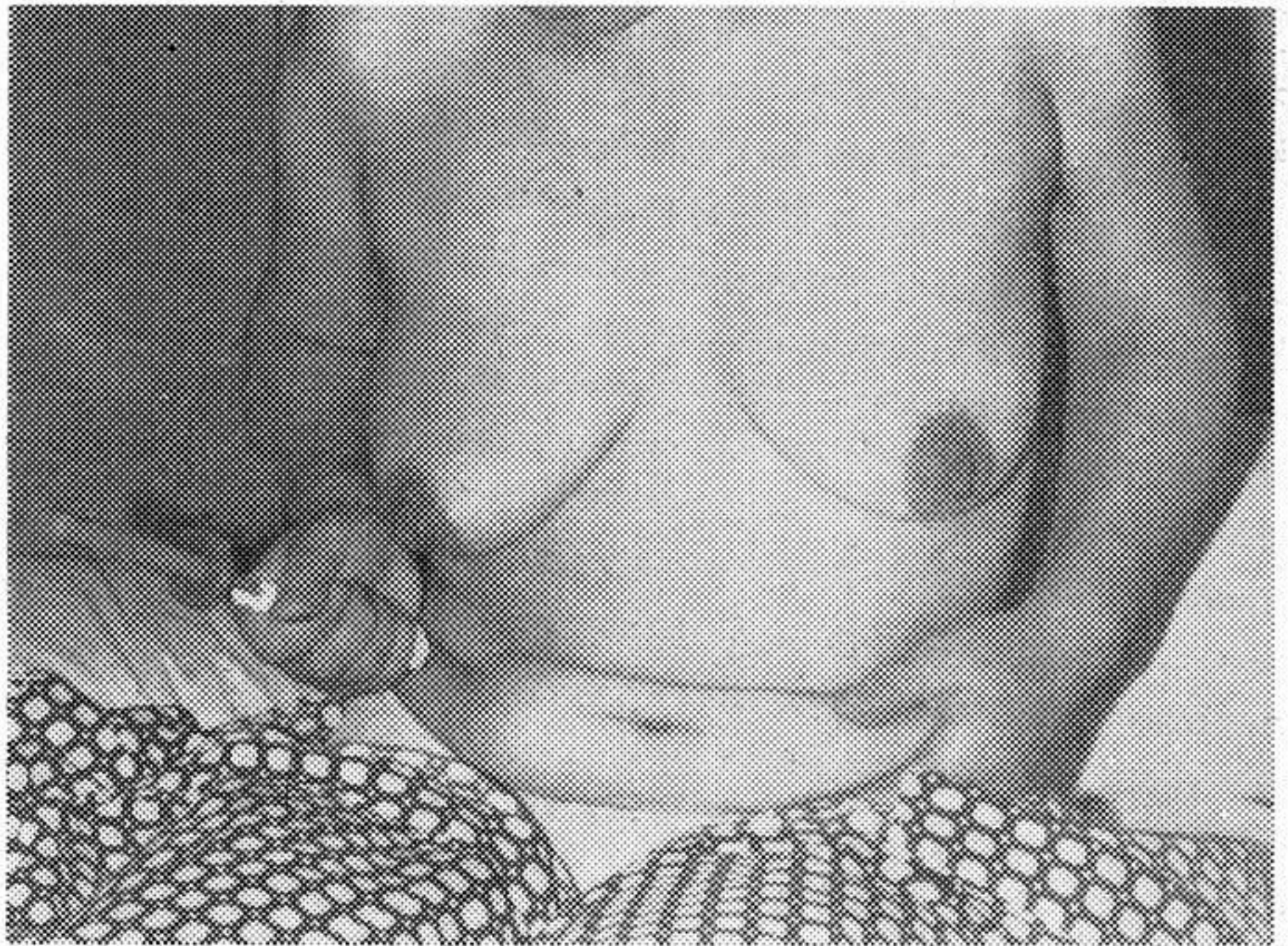
M子の家柄は、もともと葉隠武士の筋を引くものであった。子供の頃の、ほのかな記憶では、代々伝わってきた武士の物持の二、三点を見せられたこともある。しかし、M子の父が若くしてこの世を去り、母もその後を追うようにして亡くなってから、M子は祖父の手で育てられたのであった。

そして祖父からは、口ぐせのように“武士道とは死することと覚えたり”ということを教えられていた。生きてこの世に恥をさらすよりは、死することには武士の面目を保たねばならぬのは、武士のみならず、その血を引くもの、たとえ婦女子であっても当然のことであると信じていた。そして、そのためには、婦人の自害の作法までも厳しく教えこまれた。

―― 自刃の書 ――

祖父から教えこまれた自害の作法書には、およそ次のように書きしるされている。





一、自害には幾多の法あれど武士たるものにありては、割腹をもて、最も面目あるものとする。苦しみより逃れむとて死す

割腹の衣裳、坐につきては格別の定めなし。およそ、戦場にありては、ととのふること難ければなり。

るものはいざ知らず、辱めより逃れ、あるいは、自らおのれの潔白を証せんがためには苦しみを逃れむとすべからず。

一、婦にありても、かくの如きときは、割腹の上、心の臓を刺し貫き絶命するを可しとすべし。

一、妊みたる婦にありては、その胎に苦しみを与えざるため腹横一文字に切りたる上、臍より下にむかいて縦一文字に、ことさら深く切り下げるをよしとすべし。

一、割腹の手順、およそ次の如し割腹の前夜よりは、何ものも飲み食いたさざること。別れの盃、一献に止むべし。

割腹の日、まづ齋戒沐浴、心も身も潔むべし。婦にありては下のあたり、ことさら入念に潔むべし、これ検屍にあたり、恥なきためなり。

坐につきたれば居ずまい正し、抜きはなちたる刀を両手にて捧げ、一礼をなす。刃先およそ三寸を残し、懐紙四枚にて刀身を巻くべし。右手にて懐紙巻きたるところをにぎり、左わき腹、臍より下およそ一寸、臍より左およそ五寸のところに左たなごころを当て、おや指と、ひとさし指の間に切尖を当てること。ここにてしばらく瞑目し、心を静めるべし。腹に突き立て、引きまわすにあたりては、ためらいは恥となすべし。

心定まりたれば、ためらいなく突き立て巻紙より先の刃は、すべて腹中に没するまでにすべし。この時、気合こむるためかけ声をなすもよしとするも、以後の引きまわしにあたりては声を発するは見苦しきものとす。いかなる苦痛ありとも、ただ歯食いしばりて堪ゆるべし。

突きたてたる刃、そのまま右に引き切り臍下に一時止むべし。これにて再び気合をこめて突き立つること肝要なり。刃引きまわすにつれ、次第に浅くなりたるためなり。臍下より右に引きまわすことおよそ五寸、右わき腹に至りて、三度突き立てるを、よしとす。

ここにて刃を腹より抜き去り、心の臓を突き貫して命を絶つべし。心の臓は左乳より、あばら一枚下なり。両手にて刃を持ち、刃先定めたる所に当て、気合と共に渾身の力にて突き立てるをよしとす。この時すでに気力おとろえ、突き立てるあたはざれば、刃先当てたるまま、床にうつぶせ、おのれの体にて刺し通すことあり。

妊みたる婦にては、右脇腹より抜き去りたる刃を持ちかえ、その峯にたなごころを当て、刃を下にむけて臍下一寸に突き立つるべし。下に向いて切り下げること二寸にて子宮に達するなれば、一段と力をこめこれを切り割くべし。更に進みて骨に当りたれば（註―恥骨）つかを下に向け、刃先を腹の中深くえぐるべし。これにて胎の命絶ゆるなり。これよりあとは他のものに同じく心の臓を突くべし。

姦通の疑かけられて身の証せんとするとき、あだし男に操奪われんとするより守るために自害せんとするときは、腹割きたるのち、かくしどころを剔るをよしと

す。かくしどころ剔るには、はじめより腰のものをまとわずに坐に着くべし。腹割きて抜きたる刃を持ちかえ、股開きて膝にて立ち、かくしどころに刃先を当てて、そのまま坐すれば刃は深くかくしどころに突き入るべし。刃先の向きかえつつ、両三度これを繰返せば、すなわち、かくしどころ剔らるるべし。

白い刃

祖父の、教えに従い、M子の決意は、見事な割腹。それも横一文字に切り開き、さらに縦一文字、すなわちT字型に切つて、その上T課長によって汚された部分を剔った上、心臓を一突きという男でも最後まで気力がもつであろうかという壮烈なものであった。それにしても、いつも短刀をいれているハンドバッグは何処へ行ってしまったろうか。これがないければ切腹どころではない。しかし、幸いなことに、切腹の用意にと排泄のために入ったトイレの片隅に隠されてあるのを見つけることができた。念のためにと白鞘より抜いて見ると、神々しいばかりの静かな輝きを放っていた。万一に備えて一週に一度の手入れを

するようにと、祖父の遺言が今ここで役に立つとは。そして、月に一度は切腹の予行演習を怠らなかつた甲斐があった。いつものようにすればよいのだという安心感がM子を落着かせた。

やがて浴槽に少し熱いめの湯を一杯にたたえたM子は、一糸まとわずその中に身を沈めた。熱い湯は皮膚を柔らかくして刀が刺さり易く切れ味をそこなわず、出血も多くなるので、自刃の準備には、ふさわしいのである。熱い湯から出ると、M子は神経質と思われる程でしどしと体を洗った。Tは、きっと私の体を抱き、なめ廻したに違いない、Tの汚れを落とさねば、そして、もっと大切なことは、M子の体内に入ってしまったTのものを一滴残らず洗い流すことであった。M子はシャワーの下に仰向けに横たわり、熱い湯をかけながら、大きく開股した。

剃毛されたあとの、しみるような痛みをこらえながら、思う存分、洗いながした。やがてバスタオルで拭き終わった美しい桜色の体に下着をもつけず、浴衣のみの姿で浴室から出たM子は、しずしずと切腹の座に進んだ。身も心も、きりっと、引きしまる一瞬であった。

数分後には、血潮に染まって横たわるであろうこの体に、今一度、別れをつけようと、ベッドの横のカーテンを開き、鏡の前に立つて浴衣を、はらりと落としてみた。そして、これから切り割こうとする体を、じっと見つめるのであった。ここに突き立て、ここを通ってここまで引き回す。

次に、ここに突き立て、下の方をここまでそして、ここを剔ると、もう一度、予習を、してみた。じっと見つめていると、鏡に写った桜色の腹部から血潮が噴き出てくるような幻覚をさえ、さそうのだった。

血 潮

脱ぎ落とした浴衣を拾い上げ、再び身につけようかとも思ったが、考え直して、それをきちんと畳んでベッドの端においた。裾や、袖が邪魔になって切腹を妨げてはと思ったからである。静かに白いシーツの中央に、鏡の方に向いて坐った。膝の前に短刀を置いて静かに瞑想すること、しばし。やおら、右手をのばして短刀を取り上げ、これに左手を添え押し戴いた。(写真)

“あなた、お先にまいります。

おじいさま。M子は、おじいさまに教えられた通り立派にお腹を切ります。最後まで首尾よくまいりますよう、お護り下さい。

短刀よ。見事に私の腹を切りさいておくれ。私の心臓を十分に深く刺し通しておくれ。”

さらりと鞘を払うと、刀身は先刻にも増して静かに光り輝き女主人の血を存分に吸おうとしているかのようだった。二巻き、三巻き懐紙を巻き終えると、左手を臍の横五寸に当て、右手に持った短刀の切先を、拇指と人差指の間に当てた。いよいよ始まるのだ。大きく息を吸い込み下腹部をふくらませたかと思うと一言。

“あなた！ えいっ！”

愛する夫への呼びかけを最後に、右手に渾身の力をこめて、ぐっと突き立てた。

ぶつり！ という皮膚を破る不気味な音と共に激しい痛みが下腹部を走った。短刀は業物。そして思いきり突き立てたせいもあって懐紙の中程まで腹に突き立っている。一呼吸右へまわす。もはや痛みは感じなかった。切り割かれたところから次々に血が噴き出て、忽ち膝からシーツを赤く染めてゆく。臍の下

まで切り開き、再び気合と共に深く刺す。

“うーむっ！ むうっ！”

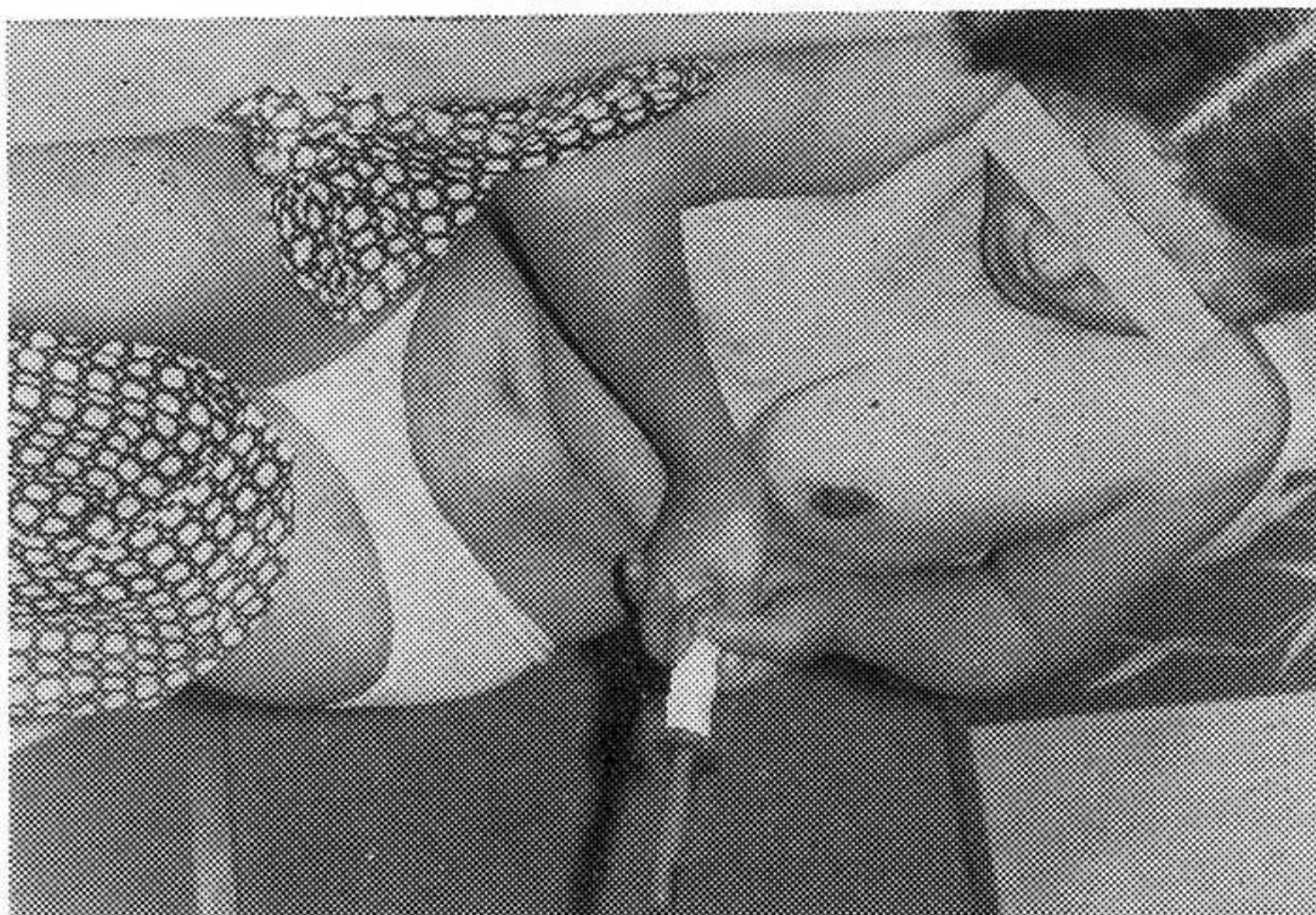
そのまま右脇腹へ。そして三度。

“うううっ！ ぐうっ！”

と突き立てた短刀を抜き去る。作法通りである。この程度の深さでは、大動脈は切れないのであろう。始めは噴き出るようだった出血も、反射的な血管の収縮で、それ程でもないようである。

出血と痛みと戦いながら、次に短刀を両手で握りしめ臍下、約五糎に切先を、あてた。さあ、今から胎児もろとも、一思いに切りさくのだ。残された渾身の力を両の手にいれるや、少し腰を浮かし気味にして思いきり突き立てる。そして刀の背に掌をあて、ぐぐっと下へ押し下げた。鮮血が、さっと噴き出た。短刀は恥骨に、ずしっと当たって止まった。血潮はシーツからベッドの下へ、ポタポタと流れている。教えによれば、これからかくし処を剔らねばならないのである。今宵、不幸にもTによって汚されたその場所を、今みずからの手で剔り捨てるのである。

痛みと出血をこらえながら、M子は教えの通り、膝を開いて立った。切り開かれた下腹部からは、再び、どっと出血してきた。うつ



むき加減になって、股間に短刀を、その切先を上に向けて、しっかりと、両手で握りしめる。

一呼吸の後、

「うむっ！」

と気合をかけて思い切りよく、腰を床に届くばかりにおとした。あわれ、短刀の刃は、ずばりとM子の体を貫ぬいた。脳天まで焼火箸が刺し貫ぬいたような衝撃であった。それを、ぐっところえて、そのまま腰を上下、左右、前後に、こじるように数回まわす。激しい出血である。このままでもM子は出血多量で恐らく数分後には息絶えるであろうが、教えに従って、いよいよ最後の段階に入らねばならない。腰を浮かして、短刀を引き抜いたM子は、左手を床につき、かろうじて体をささえているのであった。

いよいよ最後だ、これで苦しみも終わりになるのだと、気をとりなおし、再び両手で短刀を握りしめ、姿勢を正し、切先を正しく左乳房の下の方にあてる。

一呼吸、

「えいっ！」

裂帛の気合。両手で刺し通すと同時に、体

を短刀にぶつけるように突き出す。しかし、もはや短刀を心臓に貫ぬく力はなかった。これでは駄目だ、短刀は胸壁を刺しただけである。M子は、そのまま短刀を固定して、うつぶせに体を倒した。何でたまろう。M子の体重をまともにうけた切先は、ものの見事に心臓を貫ぬき、その先端は背中に二センチ程、出た。

「うーむ、むっ、むっ。あなた、お先に」

最後の方は、ききとれないような、うめきであったが、これがM子が、この世に残した最後の声であつたろう。

M子は胸に刺さった短刀を両手で握りしめたまま、どたりと横倒しとなった。出血のために、やや青ざめた豊満な体は足先が二、三回ピクピクと動いたが、そのまま静かになった。胸から下を殆ど血で染めたM子の最後であった。

——註—— フォト撮影にあたっては、モデルのM子については、どうしても、全裸の承諾を得られず、止むを得ずパンティだけの撮影に終わったのは残念であった。次回は、何とかして、全裸、そして血紅、真刀使用のフォトを、ものしたいと思っている。

連載・時代S小説

紫 蘭 の 門

(13)

カット・岡 たかし



淫らな螢火

羞恥は官能の喜びを昂める、ひとつのきら

さん、許して！ もう許してえ！ そ、そんなにくすぐっちゃあ、だ、だめですったら！
む、む、鞭兵衛さん」

尿意を催しているときに、くすぐられると

びやかな衣裳にすぎない。

雅子の優雅な顔にうかんでいる羞恥の悶えは、きたるべき官能の嵐への恍惚とした媚態であった。「利、利倉屋さま。雅子は、雅子はもうほんに、ダ、だめでございます。昭吉

紫蘭門前、群衆蜩集す
その美に惹かれるが故なり
もし門前閑散とならば
花の命をと欲しても及ばじ

風 流 極 道 軒

いう苦痛は、女にとって他のなにものにもまさる快楽であるという。

高嶺の雪を思わせる二の腕のつけねを昭吉和吉にくすぐられ、M字型におしひらかれた下半身を真正面に坐りこんだ葉室の筆の穂先に愛（め）でられているうちに、雅子は、この世で自分が持っている総てのものと、きたるべき次の一瞬とを交換しても後悔しないと思うほどの「凌辱される法悦」のなかに、女体を投げこんで行くのであった。

「利、利倉屋さん。雅子が、ワ、ワルウございました。こ、これからは、なにごとでもいいつけには、サ、サカラいませぬウ！」

端麗な雅子の顔が、篝火の明りをうけて妖しく輝き、沈丁花の花の匂いが奥庭の夜気の

なかに、ただよう。

「よい香りですこと」

和吉が鼻を蠢かせた。

沈丁花の香りは、雅子のアレキサンドル石のように燦めく太腿を這う。

「和、和吉さん。ほ、ほんとに、おいたは、おいたはもう、おやめになって！」

奥歯をかみ鳴らし、全身をギョッと花の蕾のように押しちぢめた雅子は、

「葉、葉室さまア！ 見、見ないでえ！ アッ、アワアッ！」

大きくのけぞる雅子の裸身――。

青竹を台にしたブランコが、グラリと前後に揺れ、緋毛氈の上におかれた黒塗りの角盥を打つ水の音が、一瞬、静寂を取りもどした夜気のなかに、ながくながく尾をひいた。

「や、やったあ！」

ドォッと歓声をあげる八人の男たちの灼け

前号まで――天正大判千五百枚でつくられた大分銅金三千箇の埋蔵場所の謎を秘める豊太閤五夜のロザリオのうち、すでに三つを手中におさめた元禄屋は、それをめぐる貴子、雅子、豊香、千登世たちをも屈服させ、残る二つをもとめて、怪盗徳夜叉に挑戦する。

つくような視線を受けて、寛（かけい）から洩れる春雨のような滴の音を、我が胸に撃ち込まれる銃声の如くに聞く雅子であった。

縁（へり）に沿って泡立っている角盥の中心から、いくらか雅子よりの水面に、ポツンポツンと、小さな波紋がうまれ、やがて、それも消えるころ、天女のすすりなきにも似た鳴咽が、雅子の唇から洩れてくるのを、利倉屋たちは、しばらくの間、手出しひとつせず黙って見つめるだけ。穴沢流鞆の秘術で縛られている雅子には、もちろん、その視線を避ける術とはなかった。

「フッフッフ、姫。よいさまであったわ。どれどれ、拭って進ぜよう」

雅子に道ならぬ恋文をつきつけること十度にあまり、そのたびにフ・ラ・レ・つづけてきた葉室邦行は、これで、やっと溜飲をさげることができたと、満面に、淫らな笑いをうかべ、まあたらしい大筆を数本、手にとった。

雅子の身動きできぬのをよいことに、柔らかな穂先が這い廻る。

「雅子さま。ご気分は、いかが」

懐紙をとり出した和吉が、葉室に呼応するように、額ににじむ脂汗を拭き、水蜜桃のような双つの乳房の谷を伝わる汗の滴を、指先

きでうけとめて、さも当然というふうには舐めてみる。

「さあ、雅子。もう一度、葉室さまの思いのままになるですよ。こんなに後始末までして頂いたのだから、イヤとはいわせないよ」利倉屋が、夏ぐみのような乳首を、揉んで諭すようにいうと、

「旦那さま。葉室さまのあと、私も、ねえ、いいでしょう、ねえ」

和吉が、しなをつくって利倉屋にねだる。

「僕も、僕も。旦那。前大蔵大輔柳原さまの奥方さまを、この機会に是非とも……。ねえいいでしょう、旦那」

七尺近い巨体から精気をムンムンまき散らしながら鞭兵衛までが催促する。

「親分、ヘッヘッヘッ、あっしたちも、おこぼれにあずかりてえもんで。なあ、白豚」

青蛇、黒馬、赤狐、斑猿、それに白豚と、鞭兵衛の子分五人衆が申し出ると、番頭の昭吉とて、だまっているはずはなかった。

「旦那さま。私のほうが先約でありまして」

「先約だって、いつ、そのような」

「ヘッヘッヘ……ともかく先約でして」

こうなっては、利倉屋を含めて十人。はたして、雅子の高貴な肉体が、これら、荒くれ

男たちの攻撃をまともにうけて、耐え忍ぶことが出来るかどうか――。

「姫。おききのとおりだ。ここにいる野郎ども全部がお望みじゃ。どうなされる。おきき届けくださるか」

無茶な問いと云えた。訊ねる方がどうかしていると思われるこの質問も、この場では、もう、さほど異常なことではなかった。

一言も発しないで葉室は、まだ、大筆をとりかえ取りかえ、雅子の太腿と戯れている。その一本の大筆の、しっぽりと濡れた穂先を雅子の鼻さきにつきつけた利倉屋は、

「姫、どうなんだ。黙っているところをみると、かまわないんだな」

しっかりと閉ざされていた血筋正しい気品に溢れる雅子の瞳が、うっすらと開かれた。

そして、その唇から洩れ出たあでやかな声は、十人の男たちの心をとろかすのに十分であった。

「もう、どうなりと、なさって下さりませ。」

雅、雅子は、利倉屋さまはじめ、皆さまがたのもの、いかようにも、お気のすむように、なさって下さりませ……」

この言葉のおわらぬうちに、鞭兵衛たちの歓声が、ふたたび、部屋中に高くあがった。

「姫。こ、このあっしが、抱いてもいいんですかい」

白豚の問いに、

「どうぞ」

と雅子が答える。

「あっしもですか」

黒馬が聞く。

「どうぞ、黒馬さん」

「姫、私も、私も抱かせて頂きます」

「昭吉さん、妾のような女でおよろしければどうか、お気のすむまで」

ふと、鞭兵衛の燃えるような視線に気づいた雅子は、

「鞭兵衛さま。ご遠慮はいりません。皆さまがたのまえで、はしたないところをお見せしてしまった妾のような女でおよろしければ、鞭兵衛さま。どうか、ご存分に、責め、な、な、なぶってくださいませ……」

凄艶な、流し目とも思われる瞳をおくられた鞭兵衛のほうが、むしろ、てれくさそうに頭をかくと、

「イヤ、な、なんでもないですよ、姫。ただ、ちょっとね。悪い虫がおきてしまったもんで」

「鞭兵衛。するとなにか、お前さんは、悪い

虫をおしころして、姫を抱くのは願ひ下げにするというのかい」

利倉屋の言葉に鞭兵衛が、あわてて、

「と、とんでもねえ、旦那。僕は、一番に、いま、すぐに、とびついていきたいんで」

「フッフッフ……。さて、では、姫のお許しもでたことだし、順番は、先ず、葉室さま。

次が、わし。そのあとは、くじにでも」

そこまで利倉屋が云ったときであった。

「利倉屋さま……」

蚊のなくような雅子の声。

「もう、こ、こうなりました上は、雅子は、逃げることもかくれることもできません。せめて、せめて、妾のほうからその順番を」

「これは、おもしろい。姫のほうから順番をきめるといふのかい」

「……ハ、ハイ……」

一瞬、あきれたように利倉屋は、口をあけたが、

「おもしろかろう、利倉屋。姫にきめさせてみい。磨をさける魂胆じゃろうて。のう、そうであろうが」

アレキサンドル石のように、こはく、色に燦めく太腿を撫でていた筆の穂先が、ピタッととまる。

凶星であった。

こんな地獄のさなかにあっても雅子は、葉室をまだ意識していたのである。江戸にきてから知ることになった鞭兵衛たちはともかく京都にいたときから自分をつけ狙い、いまでも徹底した執念ぶかさに迫ってくる葉室にだけは、虫酸の走るような嫌悪の情をどうしても抑えることができないでいる。

「鞭、鞭兵衛さま……あ、あなたが、いちばんさきに！ お願いします、鞭兵衛さま」顔をまっかに染めて、絶叫にちかい指名の言葉であったが、それをきいた鞭兵衛が、おどろあがる。

「姫！ ま、まことですかい！」

ふかくうなづく雅子を、よこから抱きしめた鞭兵衛の藍微塵の襟もとに、顔を埋めた雅子は、

「鞭兵衛さまが一番。次は、つぎは……」

「次は、あつしで、あつしで」

と、とび出した黒馬をみて、その他の男たちも、いきり立つ。

そのなかで、雅子は、鞭兵衛の襟もとを噛みしめながら、

「昭吉さん。そして白豚さん、斑猿さん、黒馬さん、赤狐さん、和吉さん。それに、青蛇

さま……」

とび上がるもの、がっかりするもの——それぞれの叫びのなかで、

「それみる、利倉屋。そなたと鷹とは仲間外れじゃわ！」

大きな筆を砂利の上に投げすてた葉室は、青い額に、血管を二筋うかばせると、

「みななもの、よおくきけ。鷹は、今宵の正客じゃ。先ず、鷹が抱く。あとは、利倉屋、そしてそのあとは、いま、この女が示した順番の逆！ あいわかったか！」

「そ、そんな……。葉室さま。姫が、ちゃあんと、順番を決めてくれましたのに」

昭吉の声に、

「なぬならぬ！ 鷹が、はじめじゃ！ 鞭兵衛、そこをどけ。そして、この女の縛めを解き、ここへ、磔（は）りつけえ！」

いいだしたらきかないのが、上流公卿の性格——ブツブツいう白豚たちを尻目に、

「鞭兵衛。鷹は、勅使なるぞよ。はよう、命ずるとおりに、この台へ、のせえ！」

威丈高に、勅使だと、ひらき直られては、いままでも雅子を責めつけつけてきたこの奥庭にみちみちていた快楽の雰囲気、一度にしらけてしまふ感じであった。

しかし、従わないわけにはいかぬ。

軒端からおける五本の縄をゆるめ、青竹の台から雅子を抱えおろした青蛇たちは、あらためて、雅子を緋毛氈の上の白木の台上に横たえる。

いっさいの抵抗は無駄だと覚悟をきめた雅子は、男たちのするがままに、「大」の字に裸身をさらけ出しはしたものの、その瞳の底には、葉室に対する一条の憎悪が、キラキラと、きらめく。

「フッフッフ、その顔が美しいのよ。すすんで抱きついてくる女には興味はないわ。いやがり暴れまわるのを犯すところに云うに云われぬ味があるもの。しかも、人前でな」

「な、なんという廉恥心のないことを仰せられます、葉室さま！」

はげしく、なじる雅子に、

「破廉恥は、どちらのほうかの、姫。こんなに多勢の男たちのまんなかで、赤裸にされている身に廉恥心もなにもなからうものを」

葉室は、並べられている大皿からわさびを指先でつまみあげると、

「クッククック、クックク……」

奇妙な笑いをあげる。

「な、なにをなされます。ヒイッ！」

みずみずしい五体が、大きくのけぞった。
「なに、すこしは刺戟を与えておくほうが磨も楽しくなろうと思うてな。どうじゃ、ヒリヒリいたすか……」

みどり色のわさびの塊りが、雅子の魂切るような絶叫のなかで溶けこんでいくのを、満足気に見やった葉室は、指貫の括緒をとき放ち、

「では、参るぞ、姫！」

「ヒ、ヒッ！」

すさまじいばかりの悲鳴。しっかりと歯を喰いしばって疼痛に耐える雅子の丈長い黒髪に、舞いあがった篝火の火の粉が、螢火のように、とびかう。

ものの小半刻、葉室が柔らかく豊かな女体を玩弄しおわると、つぎは利倉屋が、襲いかかる。

眼のまえで、肉体のおくから絞りだすような涕泣を洩らし、こぼれるような媚態をしめし始めた雅子を眺めて、鞭兵衛たちの情欲の炎が、いやがうえにも燃えあがる。

「いいか、磨のいったように、逆順だぞ、逆順。つまり、鞭兵衛は、いちばんあとじゃ」
自分を犯そうという男たちの順番を指名するという、ささやかな雅子の自慰すら、こう

して無残にうち砕いた葉室は、青蛇、和吉、赤狐、黒馬……と、殺到していく男たちを、片手に盃を持って小気味よげに見つめるのであった。

夜も八つを過ぎ七つから七つ半になると、夏とは云え、さすがに肌寒くなってくる。

黒馬がニヤニヤして座に戻ると、利倉屋の提案で、座敷へと、白木の台ごとに、雅子の裸身が、うつされる。

待ってましたとばかり斑猿が、両手に唾して、とびかかっていき、縛りつけられた両手を、もどかしそうに動かす雅子。

白豚、昭吉とこれにつづき、縛られたままの雅子が、十人の男、全部の騷りものとなつたところには、もう、しらじらと夜は、あけそめ、明けの明星が、山の端に、ただひとつ、ほのかな光を、うかべていた。

× ×

二日後——江戸は日本橋を出発した旅人がはじめて草鞋をぬぐ東海道最初の宿駅、品川宿の本陣——。

勅使の役目を無事、果たしたのに、中納言押小路高明の顔は、どすぐろく澱んでいた。別離してのちも愛しつづけていた貴子が、あのような痴態を老中領田をはじめとする十

数人の男たちのまえに見せようとは！

（妾は、もう、元禄屋さまのものになってしまっておりまする……）

と、喘ぎのなかで洩らそうとは！

それが貴子の心の底からの叫びであったのかどうか、悪夢から、さめやらぬ男のように高明は、ひとり考えこむのであった。

「高明殿。さては、元禄屋の饗応がお気に召さなかったと見えまするな」

一方、葉室の方は、意気すこぶる、高い。

「葉室殿は、また大層のご気嫌でござるな」

「フッフッフ、多年の溜飲、一挙にさげ申した。狙った女は必ず自分のものにすると思しあげたでござろうかの」

「すると、あの雅子姫を」

「いかにも！」

葉室は、身ぶり手ぶりを混ぜながら、小梅の利倉屋での模様を語り、

「女など、いずれも同じでござるよ高明殿、はよう新しい奥方を迎えられることじゃ。貴子姫のことなど、さらりと忘れさられるがよろしかろうて」

冷えた盃の酒をグイッと、のみほす高明の顔には自嘲の笑いが、やどる。

女など、いずれも同じもの、という葉室の

言葉には賛成しかねる。なぜなら高明にとつて貴子は、二人とない女と思われるから。

が、そのかけがえのない貴子は、いま、日本有数の豪商元禄屋の妻――。

子なきがゆえに去るという理由で離縁してしまつたことが、つくづくと悔まれる。

いくら飲んでも酔わぬ酒であつた。

葉室がさきに高いびきをかいて眠ってしまったあととも高明は、庭先を無心にとぶ螢を、いつまでも眺めつづけていた。

その身を灼きこがす螢火を、日本橋四丁目の元禄屋の本邸で、夢うつつのうちに貴子もまた見ていた。

あけはなたれた座敷の縁側。

足をひらき両手を上に、あのバンザイの恰好でさらされて、元禄屋の視線をどこかくすところもなく浴びながら――。

肉おきゆたかな肩、なめらかでいくらか上に反った乳房、そのいただきの紅真珠のように燦めく乳首……すべてはもう、元禄屋のものであつた。黒漆のような腋毛の一筋一筋も七尺ちかい黒髪も、そして腰から太股へかけての男心をそそらずにはおかぬ曲線も元禄屋の思いのままであつた。

「姫。いや、もう、貴子と、よぼうかの」

グツと美酒をあおつた元禄屋は、

「貴子。前夫の高明殿に逢うことができて、これでふんぎりもついたはずじゃ。京都での生活も、公卿の女であることも忘れて、儂の命ずるとおり、なんでも、おとなしう、きくがよい。のう、貴子」

ふらふらとたち上がった元禄屋が、幽かに艶めく内股に顔を寄せたが、貴子はかすかにアツと忍びねを洩らしただけで、あとは、もうなされるがままになり、裸身をくねらせるだけであつた。

（高、高明さま……貴子は、いつまでも高明清さまを……たとえ、躰は、奪われましようとも、こ、この心だけは……高明さま！）
一匹の螢が、スウーッと、貴子の眼のまえをよこぎり、黒髪にとまる。

それに、ふと気づいた元禄屋は、庭におり立つと数羽を捕え、それを、いままで自分が賞味していた花園に、放つのであつた。

キラ、キラと、螢が、ひかる。なかには飛びたつものもあつたが、大部分は、甘い水を求めて、貴子の蘭麝の匂いにひかれる如く、いつまでも妖しくひかり続けるのであつた。

虹の陣兵

秋の七草と云えば――。

萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、そして朝顔。その朝顔の花を這わせた細竹が、町々の軒下から、とりはられようとするころ青梅街道を南にそれた八王子にある怪盗徳夜叉の隠れ家に一組の男女が草鞋をぬいだ。

徳夜叉とは云わずもがな、時の將軍家齊の落胤と、江戸の町で噂の高い神出鬼没の謎の人物である。

出迎えた小紫のお景に、

「大坂の大塩先生からの使いで参りましたもの。名は、虹の陣兵。こちらに控えおりまするは手前の女房、洗い髪のお妻と申すケチな女で。以後、お見知りおきを」

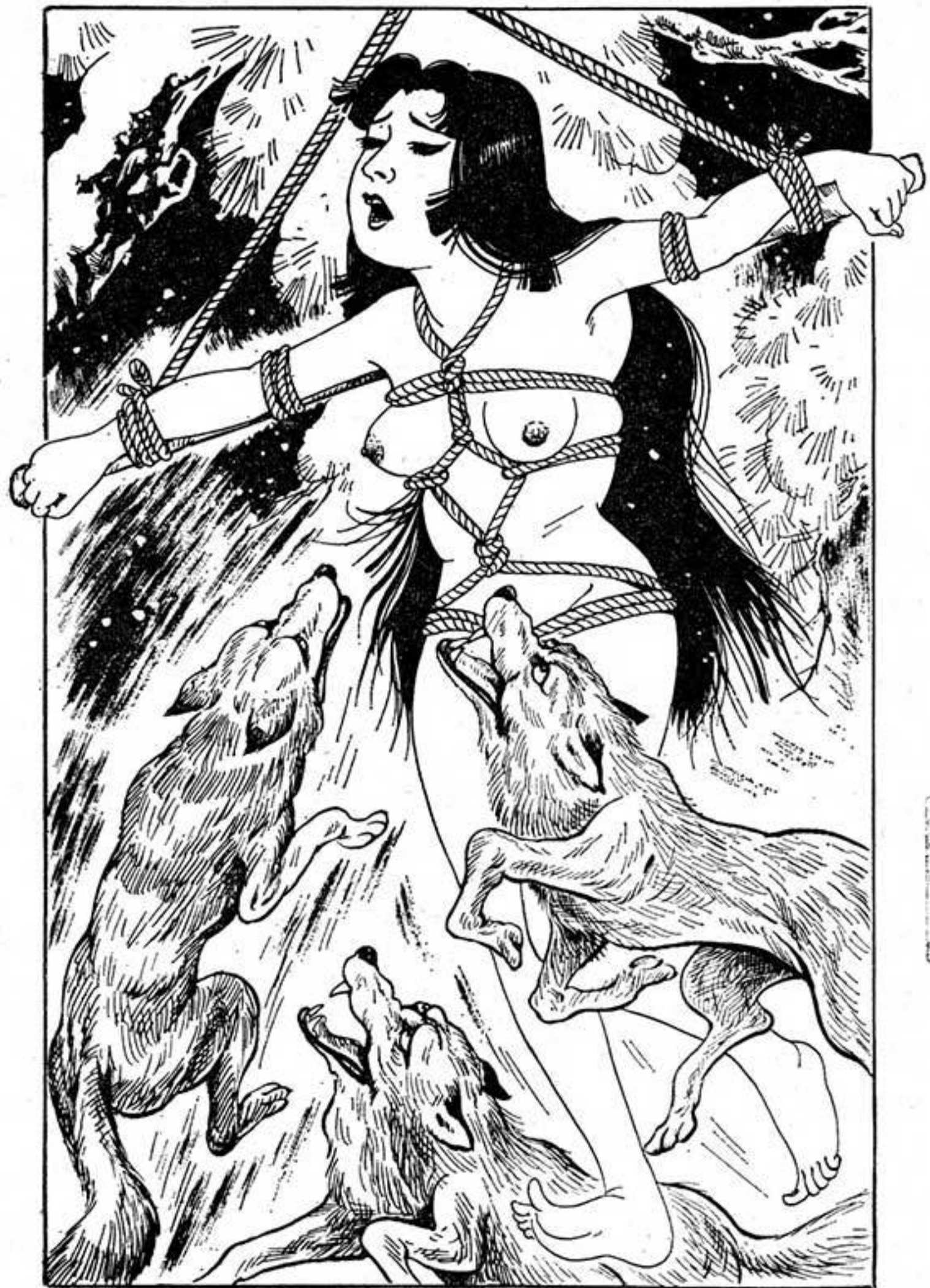
と礼儀正しく仁義をきつてのち、ニコッと邪気のない笑いをうかべる。

年の頃、四十前後か、あるいはもっと若いかも知れない。八重垣流小太刀の名手であるお景には、その身のこなし、恰好から、この男が尋常一様の男でないことがよみとれた。

「誰か居ないかい」

さわやかなお景の声に、ニユッと首を出し

……イメージギャラリー……『群狼の賛』……岡 たかし……



た大蔵の越中松に、すすぎを汲んでこさせると、そこはやはり女、かたわらの洗い髪のお妻と紹介された若い女を観察する。

その名のとおり烏の濡羽色のように黒い豊かな髪を無造作に束ねて洗い髪に垂らし、亀

甲縞の上田八丈に紅縞の帯、紺の手甲脚絆に三味線と、一見、変哲もない烏追い女のようなが、キリリツときれあがった小股といい、涼しげな眉、凜々しいばかりの瞳……これまた、なみの女ではなさそうである。

そのとき、裏山につづく広い庭の雑木林でヒヨドリが鳴いた。

「ありゃあ、ホトトギスじゃあござんせんかのう、若姐御」

「若、若姐御って、妾のことかえ」

お景は、虚をつかれたように、足をのんびりと拭いている陣兵をみやった。

（ホトトギスがなんで秋に鳴かなくちゃあならないの。この人、どうかしてるのかしら）

と思ったものの、若姐御とよばれて、満更わるい気持はしない。その心を察したように越中松が、土間からお景を見上げて、何か口をきこうとしたとき、

「おバカさんだよ、お前さん。あれは、ヤマバトだよ、ヤマバト」

一足さきに足をあらいおえたお妻が、くったくもなさそうにいうと、そうですわねというふうに、お景に同意を求める。

その美しい笑顔に、お景は、つりこまれるようにうなずいた。

この世のなかに、ヒヨドリとホトトギスの鳴声を取りちがえる亭主も亭主なら、それをヤマバトだという女房も女房。この二人、なみの夫婦じゃあないと思ったけど、やっぱりどこか、いかれているのだわとお景が思う。

そんなお景の思惑も知らぬげに、

「そうかも知れねえなあ、ヤマバトかも知れねえし、ホトトギスかも、ツグミかも、スズメかも、そしてヒヨドリかも知からねえ。ともかく鳥だよなあ」

「そうですともねえ。お前さん。鳥ですよ。え。江戸の鳥も、オロシャ、エゲレスの鳥も鳥は鳥に交りはありませんものねえ」

あきれかえったお景は二の句のつげぬままこの仲の好い奇妙な夫婦を、奥座敷へと案内する。

「大塩殿も御健在の様子にて何より」

座につくや否や、白綸子着流しの白面の貴公子に、さきに口をきられて陣兵、ちょっと驚いた顔をしたが、

「さすがは徳夜叉さま。こりゃあ一本、参りましたな」

ポンと頭をたたいて笑って見せる。

徳夜叉が、御健在の様子——といったのは当時、京・大坂で、五摂家・法華や、大坂城代・京都町奉行まで巻きこんでの米の投機的買占めをやり、莫大な利潤を貪っていた大坂堂島の豪商天満屋利右衛門一味を、大塩が、さる七月、一網打尽にしたことをさす。それをすでにこの若者が知っているのである。

(やはり大塩さまが心の友になさっているだけのことはある)と陣兵は、

「はるばる江戸に下って参りましたのは、豊太閤五夜のロザリオのうち」

ときり出して、徳夜叉のそばの四人の男たちの顔をみる。事は極秘中の極秘、お人払いを——というとしたのである。「瞬早く、

「ハッハッハハ……苦しくない。ここにいるは、余の腹心、いや、余の躰の一部じゃ」

微笑んだ徳夜叉は、図書の六孫王、杖舎の茶々丸、飛香の小式部、それにさきほどの越中松をあらためてひき寄せたのだが、まさしく頭領徳夜叉の言うとおり、小紫のお景を合わせてこの六人、六面十二臂の観音仏とも夜叉ともなろう一心同体の風情が、ありありと、ただよっている。

「お羨ましい。大塩先生は、つねづね、知友三千、門弟三千、されど真の知己となすは数えるのみ。徳夜叉殿はよい御家来衆をお持ちじゃというておられました、これほどまでとは、のう、お妻」

お妻を振り返った陣兵は、あらためて、徳夜叉に向かい、居ずまいを正すと、

「されば、申し上げます。五夜のロザリオのうち、豊太閤が、前田利家侯に与えられた

乙夜のロザリオは、安房東条十萬石領田下野守信季家中衣笠内記の家に伝えられておるとの大塩先生の御伝言。しかと、以上、お伝え申します」

「なんと！」

六孫王のすがめがひかった。

「領田下野……老中ではないか。それに、加賀の前田家にあるべきものがなぜ安房に！」

「しかとはわかりませぬが」

と前置して陣兵の語る所では——、

一子秀頼のことをたのむと、乙夜のロザリオを与えられた前田利家は、秀吉が死んでわずか一年後の慶長四年閏三月、後を追うようにこの世を去ってしまった。そのとき利家は後継ぎの利長が凡庸であり、やがては、政敵徳川家康の軍門に下るであろうことを予想、天正大判千五百枚でつくった大分銅金三千個という、莫大な埋蔵金の隠し場所をとく秘鍵のひとつであるロザリオについて、なにひとつ伝えなかったという。

「それが、前田さまの狸爺徳川家康公に対するせめてもの意趣ばらしでもあったのでしよう。そして、その後のことは、どこをどのような経路をたどったものやら、ともかくも、現在は、衣笠家に秘蔵されております。聞く

ところによりますと、衣笠内記という若侍は、領田家の譜代の臣ではなく三代前に召し抱えられたとか。多分、祖先が、加賀藩に關係があったやも知れませぬ」

「首領、では、さっそく」

小式部と茶々丸が、たち上がる。

乙夜のロザリオの所在が、わかった以上、一刻の猶予も、許されまい。しかも持主は、こともあろうに元禄屋とともに目の色変えて五夜のロザリオを探し求めている老中領田の家臣ともなれば寸刻を争う。

徳夜叉のうなずきに、軽く会釈した二人はつむじ風のように秋風の吹く青梅街道を、東へと駆け抜けて行った。

「それにしても、これまで気付かなかったとは、領田め！ ハッハッハ……灯台もと暗しとは、このことじゃな」

越中松が巨体をゆすって笑うのを、

「笑うのは早かろうぞ、越中松。領田は、黒鯨のものをつこうておる。なかでも間宮林蔵という男、なかなかの腕じゃという」

兄貴分の六孫王が、たしなめた。

「間宮林蔵……蝦夷地の探険をやった男ではないか」

「それだけではない。五年前、シーボルト事

件を摘発したのも彼なら、薩摩へ経師屋に化けて潜入したのも、石見浜田藩の密貿易を探し松平五万石を改易にまで追いつめたのもやつ。老中領田下野からロザリオのこと、ひそかに下命されておるやも知れぬて」

間宮林蔵——樺太が、半島ではなく島であることを世界で始めて確認して、二十世紀の現在にまで「間宮海峡」の名を地図にとどめる、この男。裏をかえせば隠密、老中お抱えの黒鯨者であり、名うての、変装術の達者であった。

それはともあれ、夕方ちかく——、

小式部と茶々丸がもたらした報せは、虹の陣兵たちを口惜しがらせるに十分であった。

小石川の領田の中屋敷に出入りする魚屋の云うところでは、衣笠さまは確かに御家中にいらっしゃる。だが、昨日、急な用事がおありとかで国元にお帰りになった、というのである。

「江戸詰の侍が、急に国元に帰る……くさいな」

「まこと、匂うな。プンプン匂う……」

越中松が大きな鼻を豚のように蠢かせた。

「こうなったらあとへは引けませんや。あつしも男、乙夜のロザリオを見つけ出し、徳夜

叉さまの目のまえにさし出すまでは手伝わせていただきます」

虹の陣兵、自分の到着が遅れたせいだと云わんばかりの恐縮しきった表情をうかべ、

「お妻、出かけるぜ」

「あいよ、お前さん」

一步、ことへ踏み出すと夕映えの武蔵野。

咲き乱れている、なでしこの花のなかから一輪を摘みとり黒髪にさしたお妻は、徳夜叉たちに、ふかぶかと一礼すると、もう十町あまりさきをいく虹の陣兵のあとを、小走りに追いかけて行った。

「いい夫婦だこと……」

小紫のお景は、あてられたように、徳夜叉の肩に、白い手をかけた。

「首領。われわれも」

六孫王たち四天王も、決意を眉に秘めて、この若き首領夫妻を仰ぎみる。

ヒョドリが、二声、けたたましく哭くと、

裏山から青灰色の羽をひろげて暮れなずむ小仏峠の山脈へと飛びたっていった。

美和に迫る魔手

「衣笠。殿に早う申しあげるのじゃ。乙夜の

ロザリオとか申すもの、たしかに所持しておろうが」

用人の樺山九郎太夫が焦れつたように云うのも当然。家臣というものは、主君の命とあらば水火をも辞さないのが義務というもの。それを衣笠のように強情をはるのも珍しい。

麻生六本木にある元禄屋の別邸――

今宵は、老中領田下野の中屋敷の拷問倉をそのまま移した観があった。

それというのも藩主領田下野を始め用人の樺山、御弓組々頭石川常次郎、牢奉行鈴木四郎兵衛という主君お気に入り重役が並び、輕輩ではあったが、こと拷問にかけては藩中で彼の右にでるものがないと云われる下林六平までが、ここまでお供してきていた。

「恐れいまするが、それがしには何のことやら、まったく」

「わからぬと申すのか」

うなづく衣笠に、鈴木のかげがとんだ。

「嘘を申すもほどほどにいたせ！ 加州前田家に伝わる乙夜のロザリオ、そこもとの家に秘蔵されていること証拠があがっておるわ」

「証拠と申されますと……」

顔面はすでに蒼白であったが、衣笠とて御弓組で百石をはむ武士である。血走った眼で

鈴木を見上げる。自分で云いだしたことであるが、証拠と云われて鈴木は、虚をつかれたようにあわてた素振りをみせた。そのとき助け舟を出したのは衣笠の直接の上司の石川であった。

「衣笠。はよう申し上げるがよいぞ。さもないと美和殿が」

「美和が？……」けげんに顔をくもらせた衣笠は、「ま、まさか、美、美和を！」と呟くと、次の瞬間、作法どおりにうたれた腰縄もきれよとばかりに身をよじってたちあがり、「まさか美和を、このような場所に！ 御無法！ 御無体でござりまするぞ、殿！」

激しい怒声を、正面で、しかめっ面をしている領田に、あびせかけた。

「察しがはいのう、衣笠。凶星じゃ、もしそこもとが白状せぬ場合は」

ニンマリと笑った樺山に合図された下林が合いの襖をサアッと開く。

「……………」

次の部屋を一目ながめた、衣笠は、まるで石像になったかのように、たちつくした。

そこには、愛する妻、美和がいた。

たしかに、そこにいた。

が、それは、あまりにも無残な姿！

淡紅色の芙蓉の花を偲ばせる長襦袢ひとつで、作法正しい菱縄をうけ、女囚のように、ひっそりと坐っているではないか。

愛する妻が見も知らぬ男に縄尻をとられてひきすえられているのを見る夫の気持は、経験したものでなければ判らないであろう。

鈴木春信の錦絵から抜け出たようなと東条藩中でもてはやされる妻が、むくつけきやぐざ風の男たちにひきすえられている！

屈辱と怒りに、声をのんでたちつくす内記に、用人の樺山が、

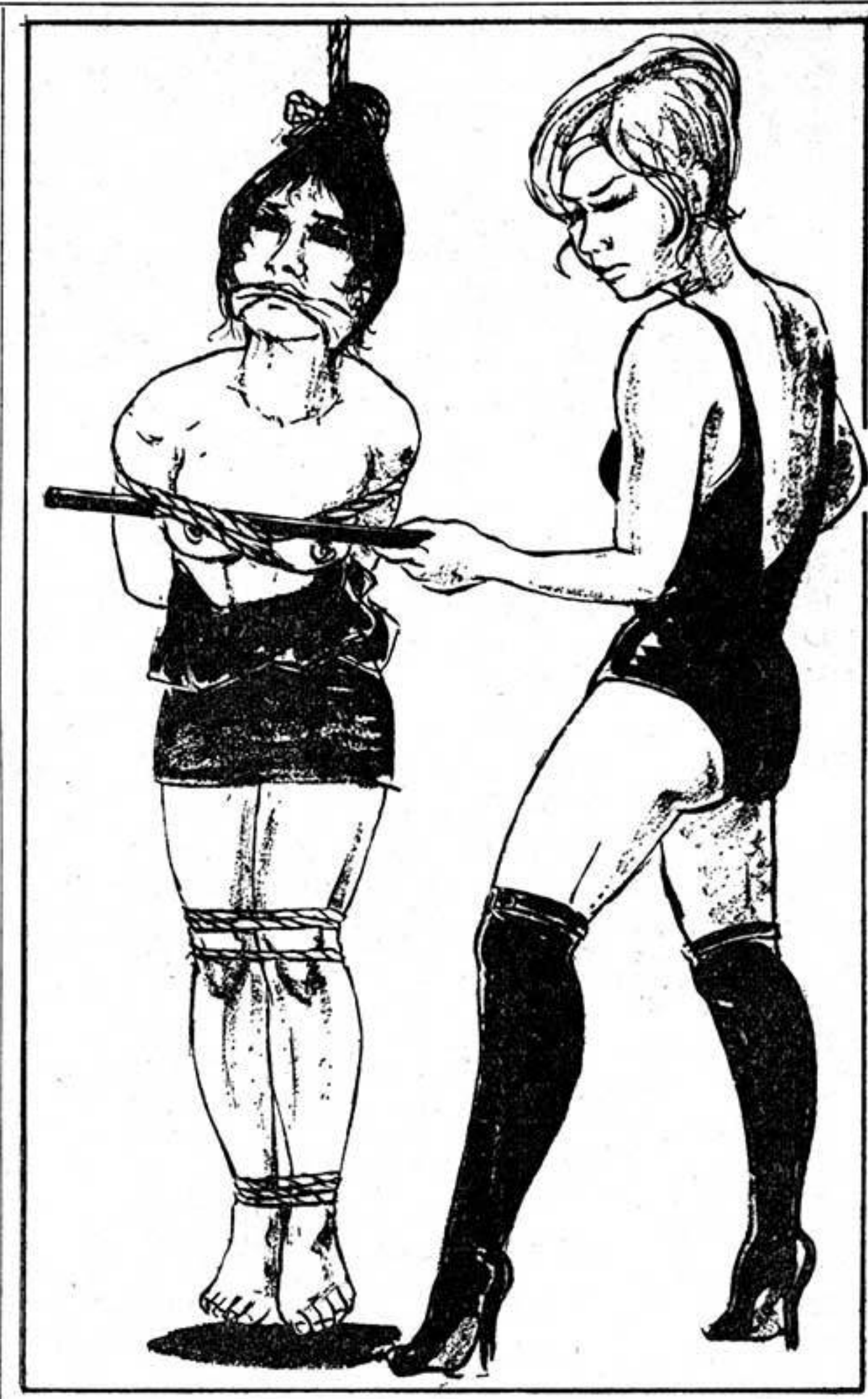
「白状せぬとあらば美和殿の身にきくほかはないぞ。内記、いかがじゃ」

唇をただわななかせるだけの内記を眺めた樺山が、顎をしゃくる。

美和のまわりを取りかこんだ男たちのなかで、ひとときわ油ぎった大男が、長襦袢の田之助襟に手をかけると、ものをもいわず、ベリツと縦にひきさいた。長襦袢の襟をひき裂くという大男――羅卒の鞭兵衛の腕力も驚くべきものであったが、双つに裂けた布地のあわいからあらわれた美和の肌は、それ以上の驚嘆に値する美しさに溢れていた。

燭台のひかりをうけたその肌は、統ぬめのような光沢をおびて滑らかに輝き、はじけるよう

……イメージギャラリー……『苦悦開眼』……志羽利也……



な弾力は、異国のまだ見ぬ宝珠のような艶麗さを秘めているとでもいおうか。

「美、美和！」

「あ、あなた！」

この夫婦の呼応は、悪鬼羅刹に囲まれた純粹無垢の一組の男女の万感を胸にこめた短いやりとりであった。

もしものことであるが――、

あなたの奥さまが、このような状態になった場合、あなたは、はたしてどうなさる！

人生、誰しも明日のことはわからない。かない生命であり、突如、暴力の魔手があなたたち夫婦を襲わないとは断言できない。いま、お勝手で、食事の後片付けをなさっ

ているあなたの奥さま――その名は、美智子でも正子でも節子でも純子でも、よし子でも美代でも、ともかくあなたの愛する奥さまがなんらかの事情で、五人もの男に半裸体にされて縛りあげられているとしたら……。縛られているだけでなく、やがては、ホットパンツもはぎとられて罵りものにされることになったとしたならば。あなた以外の男を知らない奥さまの香ぐわしい素肌に、情容赦のない無頼漢どもの手がのびたとしたならば。あなたは、いったい――どうなされますか。

さて、――

我を忘れてたちつくしている衣笠内記の顔が、懊悩に歪むのをみた樺山は、

「殿。必ずや白状いたしまするぞ」と領田にささやいて、「鞭兵衛殿。長襦袢をむしりとってください！」と次の攻撃を命令する。

鬚面に笑いをうかべた鞭兵衛が、美和の悲鳴には耳をかさず、燦めく背中であつたつに裂けている長襦袢を、青蛇、黒馬と協力しながら、縄目のあいだをとおして抜きとっていき。

ピリ、ピリッと、絹地がちいさくひきさかれる音が、「アッ！ アッ！」という美和のせつない喘ぎとともに妖しい気配をかもし出

す。夫の見てゐるまえで数人の男たちに裸にむかれていく人妻の羞恥——。

「衣笠さま。早く白状なされませぬと、乳房が、ホレ、ホレ。もう少しで、まる見えになりましようぞ、衣笠さま」

輕輩の下林が、いまは囚人にすぎない上役の内記をからかうように云ったが、衣笠内記は、のどもとまでこみあげてくる乙夜のロザリオの所在を、かろうじて押しこらした。

夫婦は一世、親子は二世、主従は三世という。それほど重い主従の誓いに背いて衣笠が沈黙を守りつづけるのは、父、祖父、曾祖父そしてその祖先と、衣笠家十代にわたって守りつづけられた家訓のせいであった。

（たとえ君命といえども秘密を洩らすな。徳川將軍家じきじきの御沙汰あるまでは）

たかだか珊瑚四十七箇をちりばめた長さ五寸余の金の十字架——父から譲られたとき内記はそう思っていた。が——將軍じきじきの御沙汰あるまでは他言無用という祖先代々の遺訓が、いま、ひしひしと身に迫る。

（美……美和、許せ。許してくれい！）

心を鬼にして衣笠は、沈黙を守りつづけるのであった。

愛する妻の周囲にむらがっていた男たちが

いっせいに離れた。ホットしたのも束の間、

「よく見るがよいぞ、衣笠」

組頭の石川が、こともあろうに、美和のむき出しになった乳房を驚づかみにする。

この石川は、ふだんは話のわかる酒好きの組頭であり、内記の家にも何度となく足を運び、ともに烏鷺をたたかわす間柄であった。

「石、石川さまア！」

「組、組頭！」

期せずして夫婦の叫びが同時に迸る。

「ご、ご、ごむたいな！ 石、石川さま、おやめくださりませ！ アッ、アッ、アレッ！ アッ、あ、あなた！」

「組頭！ や、やめられませい！ 美和には何の罪咎もございませぬものを！」

若い夫婦の訴えの合奏に、耳を傾けるほどの人間味を石川は持ち合わせてはいない。ふだんはともかく今は、主君の意にさからっている不忠の家来ではないか——。石川は、

「衣笠。美和殿の身をまとう最後の、この湯文字を剥ぎとられても、白状いたさぬと申すのか！」

紅色の布に無情にも石川の手がかかる。

美和の美しい顔が、恐怖と屈辱に歪む。青蛇たちが、あたりに散らばっている友鶴散ら

しの江戸小紋やつづれ織りの名古屋帯を踏みつけて、わらわらと、つめよっていく。

美和の淡く白い胸もとに喰いこんでいる縄と縄のあいだからとびだした、夏実莢のように可憐な乳房が、燭台の光をあびてふるえ、内記は、噛みしめていた唇のはしがきれたのであろう、左顎へと一筋の血がながれる。

と、その時であった。

いままで黙ってことの成りゆきを見守っていた元禄屋が、鞭兵衛になにごとか目配せをした。どやどやと部屋を出ていく鞭兵衛たちを見送った元禄屋は、ゆったりとした声で、呼びかける。

「領田様、それに御用人さま。一寸の虫にも五分の魂とやら。衣笠といわるる、そこな、お武家も、なかなかのかたとお見受けいたします。そこで、あとは私が……」

グエツ、グエツ！ 屋根の上であらう、夜鷹が二声哭くのが、きこえてくる。

領田が、軽いしわぶきをあげると、冷えた酒盃をとりあげた。

屈服した女

「旦那。よござんすかい」

襖の向うで鞭兵衛の胴間声がひびく。

「フッフッフ、ちよっとおまち」と、いった元禄屋は、荒い息を吐いている衣笠をみやると、「衣笠さまとやら、もしどこまでも、しををおきになりますと、奥さまが、このような目にお逢いなされますぞ」

ぐったりと青畳に、うつぶせている美和の裸身を、ゆっくりと眺め、

「よかろう、鞭兵衛。始めるがよい」

その声を合図に、四君子の花を描いた襖がス、スウツと、ひらいた。

（おおっ！）と息をのんだのは、用人の樺山たちだけではなかった。そのあまりの妖しい華麗さに、領田下野までが鉤鼻から、おもわず息を吸いこんだ。

女は二人——男たちは七、八人。

中央、格天井から吊るされた滑車からのびる太縄に、四肢をつられて「大」の字なりに空中にういているまだ二十前らしい女。もう一人は、年増、今をさかりの爛熟した女体を壁にななめにたてかけられた梯子にこれまた「大」の字に磔られている。

もちろん、二人とも一糸をも、許されてはいなかった。

「老中の領田さまじゃ。早く御挨拶申しあげ

なさい」

梯子の女に、浮世絵師の鳥尾芳年が囁きかけるよりはやく、

「豊香に千登世じゃな。久しぶりじゃ」

領田のほうから声がかかる。

この二人の女は、丁夜のロザリオをめぐつて元禄屋に捕われの身となっている春田和泉の妻・豊香と養女の千登世であった。

二カ月ほど前になろうか。領田は、この二人を、たつぷりと鑑賞したことを、まだ忘れてはいなかった。そのおりの必死の抵抗ぶりが、ありありと臉に、のこっている。

ところが——豊香の濡れた唇から洩れる言葉は、領田に意外の感を抱かせた。

「ご老中さま。春日和泉の妻、豊香にござりまする。もう三十才も、なかばをすぎた女でござりまするが、どうか御存分にお廻りなされて下さりませ。豊香の、この、あ、あ、あ裸の軀を思う存分になさってくださいませ」

梯子に女体を開かれきった豊香が、たしかにそう云ったのである。

虚をつかれた領田を、元禄がニヤツと笑って振り返る。

子と雅子だけかと思うておったに」

嫉ましげな領田の声に、

「女だけではござりませぬぞ。ほれ、千登世のそばの新五郎という若者。かつては千登世と親も許した恋仲でござったが、今では、ほれ、あのよう」

元禄屋の指が、ブラブラと揺れている千登世のかたわらで青竹をもってひかえている染分けの組帯をしめた男を、さす。

「新五郎、なぶってやりなされ、存分に」

「ヘイッ」

ペエツと左手に唾をはきかけて、青竹を握りなおした新五郎は、

「お嬢さま。お客さまの前だ。はでに哭いてくださいよ」

青竹のさきが、八の字にひらかれた千登世の太腿を、まさぐっていく。

「な、なにをするの！ お、おやめよ新五、新五郎さん！」

父和泉の一番弟子であり、二世を契った仲の新五郎に、千登世は、ほかの誰のまえよりも羞恥をおぼえて、カアツと血があたまにのぼる。豊香と同じように、もう何十回となく男たちに、肌を汚された身ではあったが、この裏切者のまえでだけは、誰が、誰が、自由

になどなるものか！

他の男には屈服した振舞いをみせる千登世が新五郎のまえではあくまで反抗しつづけるのを知っている元禄屋は、ことさら、彼に千登世の責め役を買って出させたのであった。

「フッフッフ。お嬢さん、意地をはるのもいい加減にしてくださいよ。ねえ」

千登世の裸身が大きく揺れる。手首足首が折れるのを防ぐために、ぐるぐると巻きつけられている晒木綿が、掛燭の光のなかに、しらじらと輝く。

青竹と柔らかい女の肉が、ぶつかる、鈍くやるせないひびきが、静まりかえった部屋にながれ、やがて、千登世の朱唇から、

「アッ、アッ。やめてったら！ おやめ、やめてよう、新、新五郎……アッ」

苦悶とも官能の疼きとも、わからぬ悲鳴がほとばしりはじめる。

「やめねえよ、お嬢さん。いつまでもこうして楽しませてさしあげますよ」

青畳から二尺ほど上、丁度、眼の下で、のたうつ生絹（すずし）のような肌を見下ろしながら新五郎は、青竹の微妙な操作をやめようともしない。

「豊香。ぼんやりしてないで、お前もはやく

お願いをしないか」

養女の無惨な姿をみるに忍びず、しっかりと臉をとざしていた豊香は、桜桃のように大きな乳首を芳年の指でつまみあげられると、ハッと我に返ったように眉をあげ、

「鞭兵衛さま。娘の代りに、妾をお責め下さいませ」

「どんなにして責められたいか云ってみな」
鞭兵衛が意地の悪い声をかえす。

「鞭兵衛さまの、思うがままに」
「思うがままだと！」

鞭兵衛は、豊香の真正面にかがみこむと、むっちりとした脂肪ののった腹に指を、そおと這わせる。

「アウ！ ひどい、おかた！ 最初から、そのようになさっては豊香は、もう……」

「もう……どうだってんだい！」
「知、知りません。アウッ、アッ！」

鞭兵衛の毛深くて大きな手が、百足のようにはいつまでもつれて、豊香のおおきな乳房が、ブルンブルンと激しく揺れて、甘ずっぱい年増女の体臭が、ムウーンと男たちの鼻に、ただよってくる。

「さあ、いいな。いったい、どうしてもらいてえんだ」

「豊、豊香は、舐めていただきたいのです。」

鞭兵衛さまに。お、お乳を、芳年さまと黒馬さまに……早くう、早く、な、賜ってくださいまし！」

何という変わりようだと領田は、あらためて元禄屋という男の腕前に感心する。

主人の和泉の生命とひきかえに、豊香をあやつっているのか、それとも、女を飼いならす特殊な媚薬でもあるのだろうか。いつか訊ねてみずばなるまい。赤狐のはこんできた血のように赤い南蛮酒をチビチビと口にしながら領田は、しばし、衣笠夫妻への責めを忘れたように豊香の妖艶きわまりない裸身を眺めやる。

豊香の希望どおり、まず黒馬が左側から襲いかかり、右脇腹に沿って芳年がすりよる。

「アッ、アッ！」

豊香が白い咽喉をのけぞらせて喘ぐ。広い胸元が二人の男の頭に隠れて、豊香の肩が、ピク、ピクッと脈打つ。

「俺にも賜らせろよ、豊香」

背後に廻った青蛇が、梯子の踏板のあいだからムンズと両手を入れると盛りあがった双臀を責めたて始める。

「アレェッ！ 青蛇さん。おいたは、だめ！

だめですよ」

思いがけぬ攻撃に、つい艶めかしい叫びをあげて豊香が身をよじる。

黒髪が白い肩に乱れて、ゾクゾクとするほどの官能美、それにそのかされたのか赤狐が、ふっくらした、あごから咽喉もとに、むしゃぶりついていった。

自分たちに上半身をまかせて、鞭兵衛は、むっちりと凝脂ののった太腿の前に陣どる。

阿修羅の如き責め場の中に、やがて絹を裂くが如き恍惚の叫びがおこり、それは、やがて狂ったような絶叫へと昂まっていった。

「豊香、どうじゃ」

芳年がよびかけたが、この芳年、豊香にむかしから執心していた男であった。人妻であるかぎり、手にとどかぬものとあきらめていたところが、丁夜のロザリオのおかげでこのように一糸まとわぬ豊満な裸身を思うがままに責め罵ることができる……男冥利につきる快楽を満喫しながら、

「フッフッフ……亭主の和泉にかわいがるよりも、ずうーっと、夢中になれるじゃろうが。のう豊香」

鞭兵衛の腕のうごきにつれて、梯子に縛りつけられたままの裸身を悶えさせる豊香の、

玉のような汗の、にじんだ顔をみやって、なぶりつづける。

「芳、芳年さま。お、おっしゃらないで。主人のことは、ど、どうか、アウウー！ お、おっしゃらないでくださいまし……」

赤狐の唇を、右へ左へ顔を振って避けながら、とぎれとぎれに豊香が呻く。

「存分に哭くことよ。なんならどうじゃ、こへ和泉をつれてきてやってもよいぞ。そのほうが、お前さんも張り合いがあらうというもの……」

「アッ！ またそのような。昨夜も、昨夜も主人の前で、妾をお責めになられたくせに」
「フッフッフ、スッ裸でな。あのときの和泉の顔は忘れられんな。絵になるよ、絵に」

「お、お描きになりますの」

「かくともさ。夫婦凌辱——それとも夫の見ているまえで、八人の男にアカ裸にされて罵られる人妻……フッフッフ、どれがいいかな錦絵の題は。版元がよろこぶぜ、飛ぶように売れようじゃあないか」

「売れますわ、うれますとも。アレッ！ どうか、もっと、もっと責めて、罵って、はやく！」

恥も外聞もなく豊香は、その言葉に酔いき

ったように痴態をくりひろげるのであった。こうなればもう、梯子に縛りつけておく必要はないと思ったのであらう。黒馬が、両腕の縄をとき、芳年が両足を自由にすると、

「芳、芳年さまあ……」

ひろげられた芳年の腕のなかに、ぐったりと重心をあずけた豊香。

「よし、よし……」

留め伽羅と汗の匂いのまじった甘ずっぱい裸身を抱いた芳年は、元禄屋に催促するような視線をおくった。

答えは「諾」。元禄屋のあごが、縦に振られるやいなや、芳年が豊香をつきとばす。

悲鳴をあげて仰向けにころがった裸身は、ただちに四人の男の手で大の字に押えつけられ、客である領田たちに軽く会釈した芳年がまず、大島紬の裾をさばく。

そのとなりでは、「大」の字からかかえおろされた千登世が、白豚と斑猿に、痺れてしまった手足を押えこまれて、新五郎の膝の下で朱唇から白い歯をこぼれさせて、悲しい呻きを洩らしていた。

「女を飼いならすには、少なくとも五人の男が必要ですよ」

掛燭や短檠のひかりを浴びて、妖しくくねる女体を見おろしながら元禄屋が、領田にともなく呟いた。

「余もこの手で行くか……」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

「誰かお心あたりの女でも」

「フッフッフ、朱房のお銀と申してな。縛られ屋と自称している女よ。二度ばかり呼んでみたが、なかなか屈服いたさぬわ」

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「縛られ屋・朱房のお銀。これはまた奇妙な商売でござりまするな」

「世も末になるとな、いろいろと面白いことがあるて。いつも招待されてばかりいるのも何じゃ、つぎには余が呼んでつかわそう」

「これは嬉しうござりまするな。——ときに老中さま」

元禄屋の鷲のように鋭い眼が、衣笠内記をとらえる。

眼前に展開される、地獄のような光景を、呆然とみつめていた衣笠が、ハッと、我に帰る。

大きく肩で息をした用人の樺山が、「衣笠。妻の美和殿が、あぁなってもよいと申すのかな」

牢奉行の鈴本、弓組々頭石川、下林たちがこれまた夢からさめたように、樺山といっしよに、紅色の湯文字ひとつで高手小手に縛りあげられて俯伏せている美和の、芙蓉の花のような裸身に、いっせいに淫らな視線を注ぐのであった。

——(つづく)——

× × × × ×

カット・あらいかず



美^びと醜^{しゅう}の谷間^{たにま}にあつて

田^た 宮^{みや} 雅^{まさ} 夫^お

私は生まれて初めて、このような告白の文章を書いてみました。偽りのない自分の生活を、ありのままに書いたといつても、それが直ちに編集部の方の目にとまるものとは思いませんが、とにかく、書かないでは居れない気持ちに駆りたてられてペンを持ってしまうました。私は文章を書くのは好きですが、懸賞に応募しようとか、誌上に掲載して貰おうとかいった、そんな大それたことは、毛頭考えておりません。只、読んで頂き、若し批評でも頂けるようでしたら、これに過ぎる幸せはありません。

私が奇ク誌を眼にしましたのは、確か高校生頃だったと思います。私は性に関するおては、比較的晩手の方でしたので自慰ですらも高三の半ば過ぎまで知らずにおりました。ところが、それにも拘らず精神的には、かなり早熟で、幼稚園に通っている頃から、既に好きでたまらない女の子がいたことを、はっきり記憶しているのです。

このようなアンバランスな過程の中で、私が奇ク誌を手にしました時、私は生まれて初めて、自分の心の中に潜在する精神的作用の介入を許さない（肉欲）というものを——純

然たる性欲というものを、知らされた気がしました。

題名は忘れましたが、それは種々様々な残酷な行為を女体に対して施すというシーンを連ねた物語でした。私はこのストーリーを読むにつつ、自分の予測とはうらはらに、異常なまでに興奮している自分に気付きました。

そして、そのシーンが浣腸プレイに及んだ時、私は自分の隠されている本能が、今や自分の目の前に、ひきずり出されたような強い衝撃を受けました。

それから以後というものの、現実の人の世で

の女との関係は別に「浣腸」Vという文字「アヌス」Vに関する文字を見るにつけ、私の性的欲望はハツとするような思いで、激しく首をもたげるのでした。

然し現実上に於いて、私のセックスライフは通常のノーマルなセックスに終始してきました。私には、そうせざるを得ない種々の理由が私の内部に強く根ざしていたためだったのです。

私の名前は田宮雅夫。年令22才、昭和23年3月、長野県の岡谷市に生まれました。

現在、東京のT大法学部在籍しております。——四年生です。

私は、ここに自分の過去に於ける、『性の変歴』を、何一つ隠すことなく、内面から分析しながら、書いてみたいと思います。

◇

私の生まれたのは信州のある小さな町。

父は弁護士をし、母は生来派手好きで現在は隣の町でバーを経営しています。

私は父を尊敬していましたが、母の存在は幼少の頃から、あってなきようなもので、私が始めて自分の弱さを知った時から、私は母を憎みはじめていたのです。

私は田舎の高校を出ると、すぐ東京のT大

に入学し法学部に籍を置きました。入学に際して法学部を選んだのは、父の職業との関係が強く影響していました。更に私自身、法律が如何にこの社会に於いて強力な権威を持っているかということ、莫然とした状態でしたが父から教えられていました。

その法律というものの、強力な「権威」に私が惚れていたのかもしれませんが。

私は自分で言うのもおかしいですが、美少年に属するほどの秀麗なフェイスを持っていました。そして、かなりのナルシストでもありました。「自己の存在を、自己の理想に近づけること」Vが、私の一つの生き甲斐でもありました。然し、そのナルシズムに何の根拠もないかという、そうでもありません。

頭脳、容姿、センス、運動能力、肉体など確かに十人並みに近い自分です。然し、私の頭脳には記憶力の欠陥があり、又、理論構成が得意な反面、常識的な判断に、時として誤ることがありました。

このような欠陥は、他のすべての能力などに共通していました。然し、私はやはり自分は素晴らしい存在であると信じていました。

私は事もあるうに、大学に入学して数日すると空手部に入部しました。即ち自分が強い

という事、苦しみに耐え得るという事は、自分の理想像を包含する一つの条件であったからです。一言でいえば、カッコイイと思って入部したのです。——「カッコイイ」は私の好みでもありました。

一年次、二年次と過ぎ、三年次になって、やっと初段を取り、準幹部になった年の六月——、私にとって、二十一才の春、一つの「アキシデント」がありました。それは、その年の一月の末から私が、ある会社のOLと同棲しているということが、四年生の幹部の一人の耳に入ったからです。結局、私は、六月の末夏の合宿を目前にして退部しました。

然し、この事態は、私にとっては結果的には、『吉』に転じました。何故なら、それは私が運命的に背負う司法試験へと、精神力を傾けさせるのに役立ったからです。

それと、もう一つ私にとって大きな波紋を生じる結果を巻き起こす事にもなりました。

先にも書きましたように、高校生の時、奇ク誌を読んで自分の異常な（その頃から大分長い期間、私は自分が「アヌスへの責め」に魅力を感じるのを異常と思って、『自己の存在の美』に反するとして、これを排斥しようと抑圧していた）肉欲を自覚しながらも、実

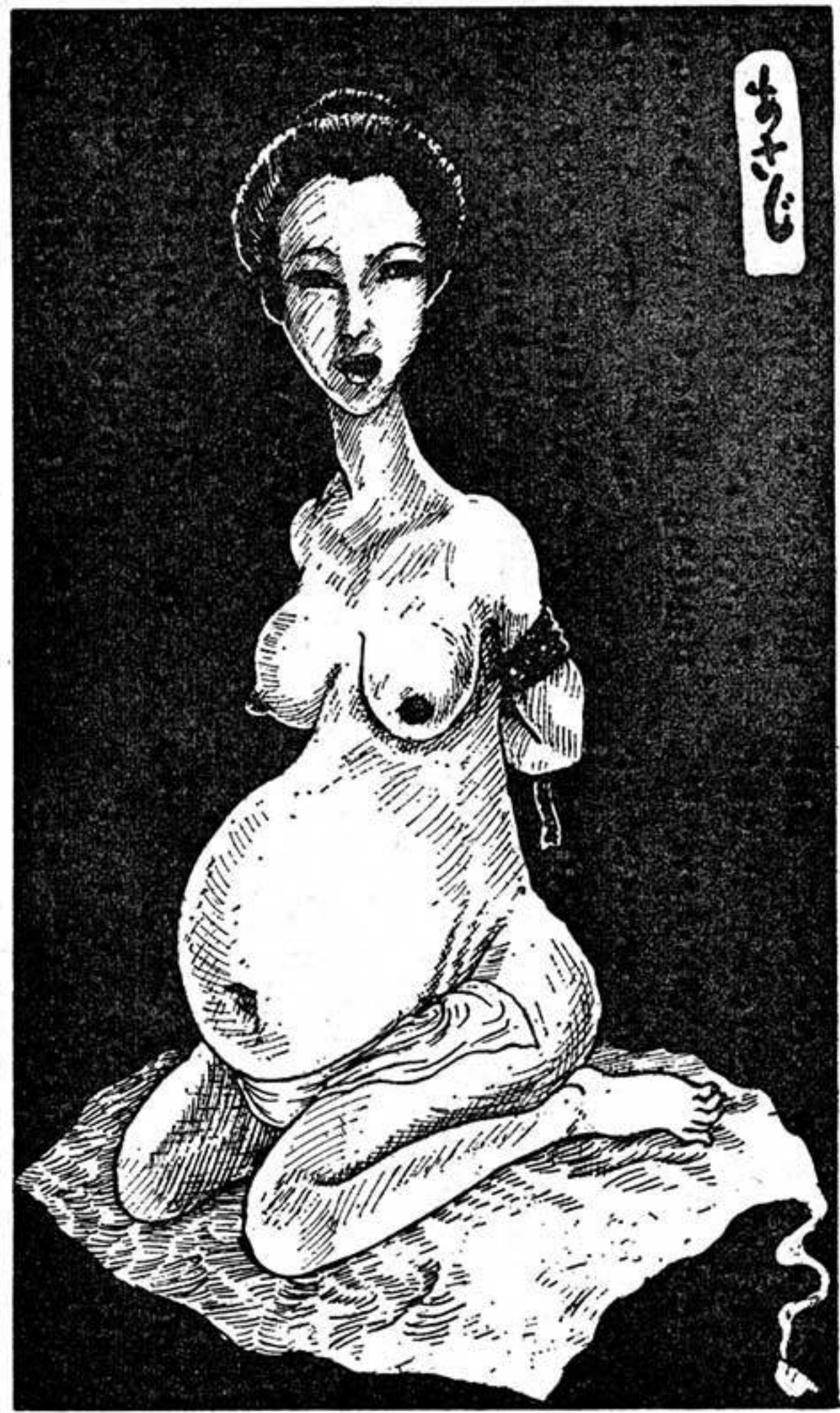
僕のイメージ画集

『胎

動』

室井 亜砂路

あやじ



實際上の女性とのセックスはノーマルに恋愛という美しいものの基盤の上にあるものとして行なっていたのでした。時としては恋愛の過程のない場合でもノーマルに行ないました。そして、もう一つ重大な要素は私の心の奥底にある或種の「母性愛への渇き」でした。私は女を求める事は、終局的には母性愛を求める事であったのかもしれませんが。そう確か

に私は女に対して異性としてセックスを求めながらも、それだけでは私の心は満足せず、いつも空しさを残すのでした。

私は長い事、「女が体を自由にさせるのは自分のことが好きだからだ——。そうだ、自分に惚れているからだ」と信じていました。幼少の頃からの「愛の渇え」が、私をして異常なほど、女を求めさせていました。それ

はセックスそのものとしての女体ではなくして、「女の情」^{なさけ}を求愛の対象としていたのです。そして私にとってセックスは、女の情の確認行為として意識が、その大部分を占めていたといっても過言ではありません。

私は女を手に入れた時から、失う事を常に恐れるのでした。自分に情^{じやう}を注いでくれた女がいなくなる事は、私にとって渇水状態に等しかったからです。私は、女を自分につなぎ止めるために、かなりの精神力を費やしました。そしてセックスが「女の情」を確認する一つの手だてでもありました。

私にとって、セックスの「確認性」は、それが同一の女と度重なるに従って増加してゆき、セックスの「セックス性」は、その度毎に減少していったのです。

このように、私にとって、「女の情」こそが、セックスを通じて保障される大事なものでした。従って、「情を注いでくれる女」に対し、自分の本来の性欲を満足せしめるべくアヌス責めや、その他の残虐な行為をする事など私にとっては思いもよらぬ事でした。現に情を通じた女に対し、そうした欲望は影すら現わさなかったのです。

私に、このような事態を生ぜしめた理由の

もう一つは、私は自惚れ意識が強く、ナルシストであり、見栄張りの性格があった為、高校に入り、いわゆる性に目ざめる頃から、自己に対する評価基準を専ら自分の容姿、風貌に置くに至ったからです。然し、物の外形が美しいか否か、或は、どの程度、美しいかは専ら他人の審美感に依るものです。

女——女体とのセックスについて、その純然たる肉欲は、浣腸、アヌス責め、その他プラス——ノーマルセックスと、かなりサディスティックな要素を有しながら、現実の女との関係は、通常のノーマルなセックスで、しかも其のセックスは、女との関係の実体ではなく、かなり本質を失った補充的手段的なもので、実質の欠けた空虚なものです。

私の「自己の存在、若くは行動の美学」というべきものに反するサド・セックスを自己から排斥しようという考えが、私が初めて女を知った高三の頃より数年来、私を支配していたのですが、空手部を退部した21才の頃から次第に変化をきたしたのです。

それまで私の心の奥底で、時としては首をもたげ息づいていたサド・セックスへの期待が、この頃から徐々に、その姿を現わしてきていたのです。そして、それが遂に私の性の

意識の全面を掩ってしまったのは、あの有名な、マルキ・ド・サドの「悪徳の栄」の下巻を、演劇科専攻の友人から借りて読んだ時からです。

あれは、今年の夏休みの事でした。私は初めての司法試験を、予備的試験として受けた後、田舎へ帰りました。

予め蓼科のバンガローを予約すると、車でラブハントに出かけました。私は東京に二人のガールフレンドを残して来ていましたが、日頃しようと思っただけ出来なかったサド・セックスを、ここで実行しようと思っていたのでした。かねて、バンガローには、細縄、グリセリン、洗鼻器、洗面器、ナイフ、猿ぐつわ用の布、エーテルなどを置いておいて、カギをかけてきました。

私の心は動揺していました。

生まれて初めての体験の可能性を前提に、不安と期待で胸は、いっぱいでした。

其の夕刻、隣の町である上諏訪は花火大会で賑わっていました。東京、大阪からの見物人も沢山、来ていて町中は、ごったがえしていました。

私はこんな時に、花火を見に行かず、町で一人ぶらぶらしている女こそが、其の対象に

なり得るのではないかと考えました。ところが、私は一方、その時既に、サド・セックスの事をいつしか忘れ、普段のラブハントの時と同じ気持ちでいたのです。

藤色のTシャツの上に、白のシースルーのレースの長袖のシャツを重ねて、同じように藤色の少しダークがかったパンタロンに、巾広のベルトを、しめた私の姿は、私自身にもしゃれたものと思え、他人の視線を注がれる自信を持っていました。

上諏訪の駅前に来た時です。

人待ち顔で立っている一人の女に気付いた私は、意識的に知らん顔で、其の女の前を通り過ぎました。そして、わざと其の女の目に触れる位置に立つと、タバコに火をつけながら其の女の様子を窺いました。

——年は19か20か、ちょっと小肥りのところが可愛い——と、品定めした上で、すかさず、女のそばに歩み寄って、自信ありげに話しかけました。

こういう時の私は、実にユーモラスなムードを持っているのです。

「どうしたの、花火大会に行かないの？」

「下らないもの」

驚いたふりもなく、すんなりと答えるところ

……イメージギャラリー……『叫声タイム』……飯田ひろくに……



ろを見ると、私は、『この女は予測していたな』と思いました。

「誰か待ってるの？」

「まあーネ、ウフフフ」

「嘘だろ、ちゃんと顔に書いてあるぜ」

「ほんととはネ、電車に乗りおくれちゃったのよ」

「ああ、それで時間を待っているの」

私は話を合わせました。

「そういうこと——」

女の眼が羞らいにうるみながらも、懸命に虚勢を張っているのが伺えます。私は、さてこれからだ——と意気込みました。

「実はネ、ホテル〇〇山荘って、知ってるだろう？」

「……」

「ほら、あの山の中腹あたりに、最近出来たヤツだよ」

「ああ、知ってる、知ってる」

「うん、あそこにネ、すぐく展望の良いテラスがあってネ、今夜の花火大会のために思ってた予約席をとってあるんだ。もし、君さえよかったら、車で来てるから、案内してもいいよ。どう、行かない？」

「そうネ、いいわ」

女は思案するように少し間をおいてから、気取って答えるのでした。

私は心の中で「いいに決まっている。今更“いいわ”でもなからう。とにかく初めから答は、きまっていたのに、勿体ぶりやがって——」と思いました。予約席なんて当然ありもしないのです。

◇

車は駐車場に置いてあるので、そこまで歩いて行きました。私は実に下らない事ばかり

を話して女の笑い声を楽しんでいました。

こういう場合、女は実に誇らしげに語り笑うのです。然し、私の心は、女の声が誇らしげに響けば響くほど——美しい蝶が蜘蛛の巣に向かつて羽ばたいているという陰險な喜びを味わうのでした。

駐車場へは五百米ほどありました。花火は相変わらず激しい音を立てて大地をゆさぶり華やかに大空に咲いては散ってゆきます。

ところが駐車場に着いて驚いたのは、私の車に密着して品川ナンバーの乗用車が置いてあって出口をふさいでいるのでした。私は管理人を呼んで怒りました。ちゃんと駐車料を払って駐車してあるのだから、私が怒るのも当然のことです。しかし、管理人は、花火見物が終わるまでは帰らないと思って、すぐあとへ、ぴったりと車を、つけさせてしまったらしいのです。

今更、怒っても仕方がないと思った私は、すぐ他の方法を考えはじめました。口では管理人に抗議しながらも、頭の中では他の方法を考えていたのです。

『この女をうまく口説くことが出来れば、車や予約席のことはどうでもよいのである。彼女が自分で自分に言いわけ出来る口実さえ作

ってやればよいのである。それは何か。そうだ、今夜の最終に遅れさせればよいわけだ。よし、とにかく、ここを出よう』

私は女を連れて外へ出ました。

「最終は何時だい？」

「えーとネ」女は時計を見て「九時半よ」

「そうすると、まだ五十分はあるんだな」

「ええ」

「それじゃ公園へ行こうか」

「公園？ 公園へ行ってどうするの」

「あれ、知らないのか。今度、公園に城が再建されたんだよ。昨日の午後、行ってみたんだが、実に綺麗だったよ。だから行こう」

私は、かなり強引になっていました。

「公園へ行っても、つまらないんじゃない。

一体、何するのよ」

女はそんなことを言いながらも、どんどん先にたって歩く私のあとをついてきます。

公園に着きますと、花火が天守閣の右上に見える位置のベンチに腰を下ろしました。

「いい所だろう」

「そうネ」

女は気のりのしない返事をします。それがまた私には小気味がよく愉快でした。

女は19才、名前は言いませんが、何でもこ

の近くのある町（富士見町）で生まれ、そこ

の高校を出ると、すぐ東京の洋裁学校に通うため上京したのだそうです。

目が大きくて色が白く、むちむちとした肌の持主、小肥りのムードが可愛いと思えました。

然し、この時の私の頭の中には、もう全くサド・セックスの事はなく、とにかく時間の経つまで女の体を、その気にさせてやろうという考えで、いっぱいでした。

女というものは妙なもので、其の気がない場合でも、戯れながら触れていると、其の気になるし、また、心が其の気でも、体に触れられると、逆にそれを拒もうとするという事を——私は今までの数多くの経験から、実感として知っていました。

私は、女の19才という年を考えると、先ずはリラックスムードをかきたてるため、甘い言葉をかけなければと思うのでした。

◇ 「もう帰らなければ……」

時間を気にして女が腰を上げました。私は時間かせぎに、ゆっくり立ち上がって歩きはじめました。ちょうど花火が終わりを告げ、見物の人達が帰途についたところで、その人

の波と逆になって当惑しました。

これら平凡な人波を眺めながら、私は何か自分とは、全く無縁のものを見るような感じがしました。

女は結局、私によって格好の口実を作ってもらったような結果になりました。再び駐車場に戻ったとき、車は十分に出られる状態になっていました。

私はドアを開けて女を乗せ、ハンドルを握ってキーを挿し込んだ時、これでこの女は、自分のものだ——と思いました。美しい蝶は物の見事に蜘蛛の巣にかかったのです。

車は国道20号線を走り、蓼科有料道路に入りました。その頃から大粒の雨がフロントガラスを叩きはじめました。

さっきは、あれほど小鳥のように囀っていた女が、今では全く黙ってしまっています。可愛いものだ——と、私は思いました。

私は一方に於いて既に自己の存在に陶醉していました。その瞬間から、私は美しい一つの幻影に酔い始め、今更、醜惡な態度や行動を取る事が一切、出来なくなっていました。

私は考えました。頭で考えました。

へどうしたんだろう。俺は自分の肉欲を満足せしめる為に、すべての計画を予定通り遂行

したのに、今では、例えば、この女を浣腸してやろうなどと考えても、一向に、その気になれない。その欲求の片鱗さえ生じてこないのは、何故だろうV

私は、自分で自分を、恋のヒーローに仕立てあげてしまっているのです。己の存在の美に酔いしれ、もう抜けだすことが出来ないのです。私にとって、私自身、この女にとって最高の存在でなくてはならなくなってしまっているのです。

私は、既に、この女に対して『イイ子』になってしまっているのです。私にとってみれば、この時ほど、自己に甘く陶醉出来る時はない——いつてみれば、私が最も精神的に喜びに満たされるのは、この瞬間であったでしょう。

私にとってみれば、陶醉状態の時に、ノーマルなセックスをするならば、セックスが動物的衝動である事を本質とする限り、ノーマルセックスは、私の本当のセックスではないと言えるでしょう。現に私は『しらふ』のとき、『浣腸』という語、『アヌス責め』という語を目にした時、最も性的衝動を覚えるのです。『しらふ』の状態に於いて私が空想する女は、必ず四つん這いにして、大きな浣腸

器で強制的に浣腸する場面です。

私は、今までに通算二十四人の女を知り、そして十七人目の女とは、一年半程、同棲したこともありましたが。同棲した女の名前は小夜子と言いました。東京の新宿でハントした女でした。然し私が大学の三年の後半頃から司法試験の準備に熱中し出して、この女の存在が鼻につきはじめました。結婚を迫られたことも嫌気に拍車をかけ、四年生の夏休みに入ると同時に、この女とも別れました。

然し、このような私ではありますが、私には精神的作用の介入を、ある程度、許さないところのセックスの思い出として、二つの場合があります。

その一つは田舎での思い出です。

私が大学二年の時に田舎で知り合った女にA子というのがありました。

私が田舎の実家でダンスパーティーを催したことがあります。そのパーティーは男女各々四人、計八人で私の岡谷の自宅で行いました。

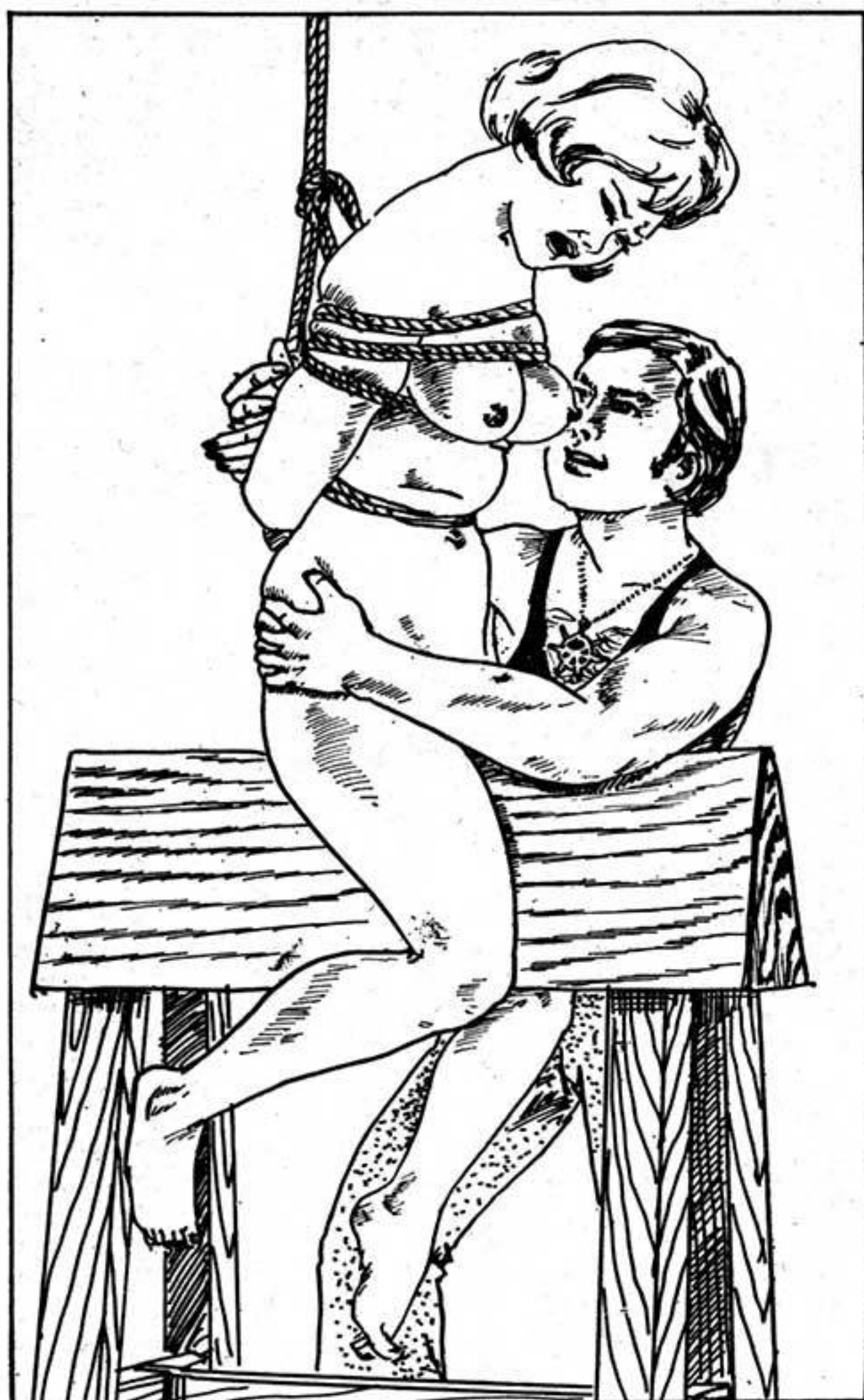
四人の女は皆OLで、年は18才か19才でした。私がA子を強く意識するようになったのは、ふとしたことからA子の胫がケイレンを起こし私がA子の足をさすってやったことからです。数日後、同じメンバーが集まってゴ

ーゴーに行った時、私はすかさずA子一人にアプローチしました。A子はこの日に私との個人的交際を承諾しました。

翌日、私はA子と逢うと、寿司屋の二階に誘って初めて接吻を交しました。そしてその時、A子に真珠のネックレスをプレゼントし次の週末に逢う約束をして別れました。

私はアパートに一人で住んでいる友人を前もって買収すると、週末に約束通りA子に逢いました。A子は眼のくりくりとした小柄な女で、どちらかというと痩せ気味で、私の好みのタイプではありませんでしたが、顔が可愛いらしくて、この女を選んだのでした。

二人はサテンで待ち合わせると、パブ・バ



……イメージギャラリー……

『乗馬練習?』

須坂

旭

ーに行きました。そのパブ・バーは、この地方に初めての試みとして建てられたコンパ風の洋酒喫茶で、二日前に開店したばかりでしたので、こういう所は、女心をそそるには、もってこいと私は思ったわけです。

その店を出ると、もう八時近くでした。私はA子を誘って馴染みのスナックへ入って、夕食を共にしながら、A子を口説きはじめました。A子はまだ19才ですが、もうそろそろ20才に手のとどく年頃だけに、女の匂いを色濃く発散させていました。

A子は、私の誘いに対して、「誘惑ネ」とあどけない言葉を口にして、私を何となく笑わせました。

その頃の私は、実の所、かなり女に飢えていました。夏休みになって空手部から解放されると、当時、東京に恋人という人種のいなかった私は、すぐ田舎に帰ってきてしまったからです。私が初めて東京で女と関係を持ったのは、一年の九月、下宿の近くの食堂の女でした。その後、二人の女との交際と関係を持ちましたが、未だに東京の盛り場は、私には、なじめないものがありましたし、田舎の純朴さが、なつかしいものでした。

私はA子にタバコを勧めてみました。A子

は少し吸う真似ごとをしました、すぐ返して寄こしました。時間は五分、過ぎて十時半になろうとしています。私は急に立ち上がるカウンターの電話をしました。予め買収しておいた友人のところへです。

これから行くから、よろしく頼む——と電話しておいて席に戻った私は、今から行くと言ったものの、A子はどう誘おうかと、なかなか切り出しにくくて、迷いました。

「どうかしたの？」

当惑顔の私はA子に不意に言葉をかけられて、その瞬間、頭の中に、ふと、ひらめいたものがありました。

「ああ、いや、実は今夜、こんなに遅くなるつもりがなくて、友人のところへ遊びに行く約束をしてあったんだが、今、電話してみたら、遅いぞ、早く来いよ」なんて言われちゃって、どうしようかと思っていたんだが、もしよかったら、少しでいいんだ、君もつきあってくれないかなア」

その時の私の顔は、実にすまなそうに演技することが出来ました。

「少しだったら、いいわ」

私はホッとしました。これで成功したと思いました。何故なら、私は友人達が話すよう

に、少々強引でも、やってしまおうと思ったからです。

私はA子と連れ立って友人の中本という男の室に入りましたが、電気がついたままでカギもかかっていません。中本という友人も当然おりません。

「妙だなあ、タバコでも買いに行ったのかなあ」

A子は黙って部屋の中を、あちこち見回しています。私は、その何かおぼつかないA子の表情を見て、なだめるように言いました。

「まあ、坐って待とう。すぐ来るから」

坐ってみましたものの、私の心は内心、実は、おだやかではありませんでした。何故なら強引にするという事も知らないし、また友人達がよく言う「女をなぐる」という事も、私の主義に合わないし、実際に一度も、その経験のない私でした。

十分間が実に長く感じられました。さっきまで、口をついてポンポンと出ていた言葉が全く口から出なくなっていました。

私はハラをきめると、立ち上がってドアを半開きにして、「妙だな」というふりをしてからドアを閉めてカギをかけました。

A子はそれに気づくと、急におびえるよう

なコワバツタ表情になりました。私は、こういう場合には、常に逆に普段より一層、態度物腰をやわらかくして女に接することにしていきますので、A子の身体にも、至ってやさしく触れてゆきました。

私はA子をやさしく抱きながら、唇を触れました。A子は、その時、初めて私の身体を自分から抱きました——。いや、しがみついたといった方がよいでしょう。

私は次の段階に移るべくA子の下半身に手を触れていったとき、そこで意外なことが起こりました。A子が強い力で私を突きとばして拒んだのです。

この瞬間——A子の力づくでの反抗を受けて私の心は冷やかに、ある決意をしました。

『よし、殴ってやれ』

バシッという音と共に、私の一撃はA子の頬で鳴り、A子の抵抗力をなくしたかに見えました。私は今更ゴメンネでもないと思うと強い態度をとりました。

「静かにしろ。どんなにお前が騒いだって、結果に於いて同じなんだ。俺はやると思ったから必ずやるからな。だから静かにしろ。黙って言う事を聞いてれば、痛い思いは絶対にさせない。わかったな」

私のその時の声は、自分ながら、押し迫った説得力を持っていると思いました。A子は黙ったままで、うなずいています。

私はA子のガーター、ストッキングを先ず取り、そしてパンティに手をかけようとしたとき、泣きじゃくりをしていたA子が、再びそれを取らせまいとして必死に強い抵抗を示しました。その態度が如何にもぎこちなくて妙なのです。私にはピンとききました。

『この女、まだ処女だな。しかも処女という事に対して古い観念を植えつけられている』
 そう思うと、私はパンティにかけた手を放して、やさしく問いかけました。

「お前、まだ、男を知らないのか」

A子は目を赤くして、うなずきました。

「そうか、よしわかった。いいか、俺の言う事をよく聞くんた。俺は絶対にお前の大事に

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成です。重版刊行は致しませんが、今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めにお申し込みください。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 曙出版株式会社へ。
 略号「花」 定価五〇〇円(送共)

しているものを奪おうとは思わない。そのかわり、俺の言う事は静かに聞くんだな」

私は本当にA子を処女のままでおこうと思いましたが。私は静かになったA子のパンティをゆっくりと脱がせました。私の心は自分でもよくわかるくらい高鳴りました。今まで八人の女と同じような事をやってきたのに、これ程の刺激を受けたのは初めてでした。

それは女の数は経験しながらも、女から、強制的にそれをとらした事が一度もなかったせいです。女の、そのような精神状態でなければ見る事の出来ない『恥かしさ』『嘆き』というものが、そこにはあったからです。

同じ物を食べるにしても、当然のなりゆきで食べるというよりも、そのなりゆきに困難や努力がついてまわった場合の方が、当然、いざ口にする時は、一層の感激を伴うものです。そして更には強制力を受けることによって生じた『羞恥』と『嘆き』という美味が、それに加味されるわけです。

今や私はA子とのセックスプレイに於ける唯一の主体でした。この事も今までの場合と異なっていました。今までの私の経験したセックスは常に相互作用的なもの、相対的な調和的なものでした。然し今や私の地位は一つ

の肉体を客体とし、それを自由に出来る唯一の一方的主体者たる地位を獲得したのです。

これに対し、A子は単に恥かしさと恐怖と嘆きに包まれた肉体に過ぎないのです。

A子はグリーンのワンピースを身につけていますが、既にその下半身には何の下着もつけていません。私はそんなA子を四つん這いにしました。よく言い含めてあるためA子は抵抗もなく言う通りにしました。私は荒々しくA子のスカートを、まくりあげました。

そこには私が今まで見た事もなかった可愛い肉づきの臀部があり、その中心には、私に果てしない幻想を抱かしめる美しいアヌスがありました。それに直接触れたとき、その感触は私に、めくるめく衝撃を与えました。

事が終わると、私は急にやさしくなってA子を抱きしめてやりました。私の心にやるせなく甘い感傷が湧き出てくるのでした。

私はその年の暮近く、東京での一人の女との出来事や、それから幼児時代のことなど、まだまだ書きたい事があるのですが、もし、この前篇ともいえるべき告白原稿が、幸いにし編集部の方々の目にとまり、何分の応答が得られますならば、書き継いでゆきたいと思っています。



「緊縛花電車」と性本能

佐野みさ子

みさ子のS Mプレイ

奇クファンの方なら、『花電車』という言葉
葉を聞けば「ああ、お座敷ショーの事か」と
思いになる事と思います。

それには違いないのですが、私がこれから
申し上げるのは、お座敷ストリップではなし
に、女性の一番、恥かしい部分の筋肉をフル
に使って珍芸を見せるという、本当の意味で
の『花電車』の事なのです。

一般に「花電車ショー」は場末のバーの二
階か連れ込みホテルの一室で実演するものと
相場が、きまっております。珍芸の主なもの
を二、三、申し上げますと、ソノ部分でビー
ルビンをくわえてみたり、客が千円札を畳の
上に置いたのを引きずってみせたり、ビン
の上に卵をのせ、それをスッポリかくして見せ
たりするのが主なようです。

その他、バナナ切りやウナギくわえ等いろ
いろとありますが、みさ子もホステス時代
にお客さんに誘われて何度も見た事がありま
す。見にくる人の多くは、女をおもちゃ乃至
は性欲の充足のためにのみ見学しているよう
な感じでした。お客の中には、かなり社会的
地位の高い方もいたようですが「英雄色を好
む」とか「メカケを持つのは男の甲斐性」と
か申しますので、その方にしてみれば、あた

り前の事かもわかりません。

女は昔から男の性の暴力を受け入れるのがエロチシズムだとも思っているので、時と場合によっては、M女性にかぎらず男の性の暴力を待っています。M女の私などは常にそれを待っており、人妻の身であるにもかかわらず、夫以外の男性とのSMプラスSEXを楽しんでいる次第です。

男には浮気が許されるのですから女が浮気をしてはいけないという理由は、あてはまりません。私は家庭がこわれなにかぎり、夫以外の男性とのSMセックスを今後も楽しむつもりでおります。浮気を楽しんでいる人妻は何も私ばかりではありません。3月5日号の『週刊朝日』に、こんな記事が出ておりました。

——ある年のこと、高校受験の男の子と母親が泊まりました。見るからに豊かそうな中年の夫人でしたが「ねえ、今晚もう一つ、お部屋をとれないかしら」と、きくのです。子供さんが勉強しているために寝ることが出来ず早くやすむために、もう一部屋ほしいのでしようか。「これから電話をして、ある人を呼びたいの。これだけは約束して下さい。子供にも誰にも絶対にわからないようにしてほし

いのです」夜おそく、電話で呼んだ人がやってきました。男性でした。その夜は私の宿直日でした。懐中電灯を持って出かけると、ドアの開く音がしました。あの中年の夫人がドアを半開きにして、あたりを見、誰もいない事を確認して廊下に出ました。——

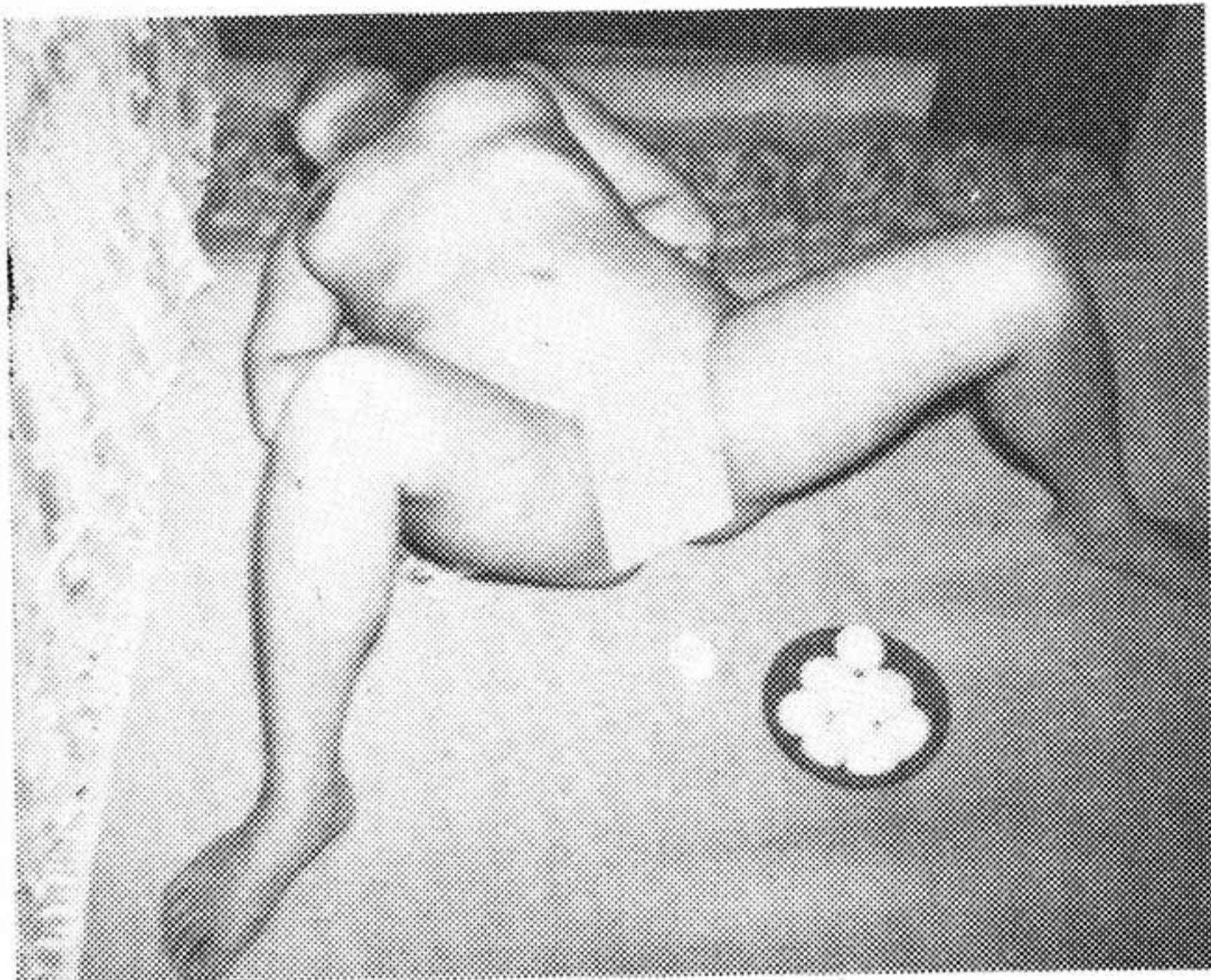
と、まあ、このような記事です。

みさ子に言わせれば、日頃教育ママと言われて子供には厳しい筈の中年の母親が受験をダシにして好きな男とセックスを楽しんでいるのです。ウーマンリブもここまでくれば大したものだと思います。ですから、みさ子も好きな男性とSMセックスプレイを毎月に一度、楽しむ事については少しも気にかけてはいません。また夫に悪いと思ったらプレイをしても快感は味わえます。プレイ中は一匹の牝犬^{めすいぬ}となったつもりで、相手の男性の命令通りに動き珍

芸をお見せします。

話が少し横道にそれたようですから、また花電車の話に、もどります。

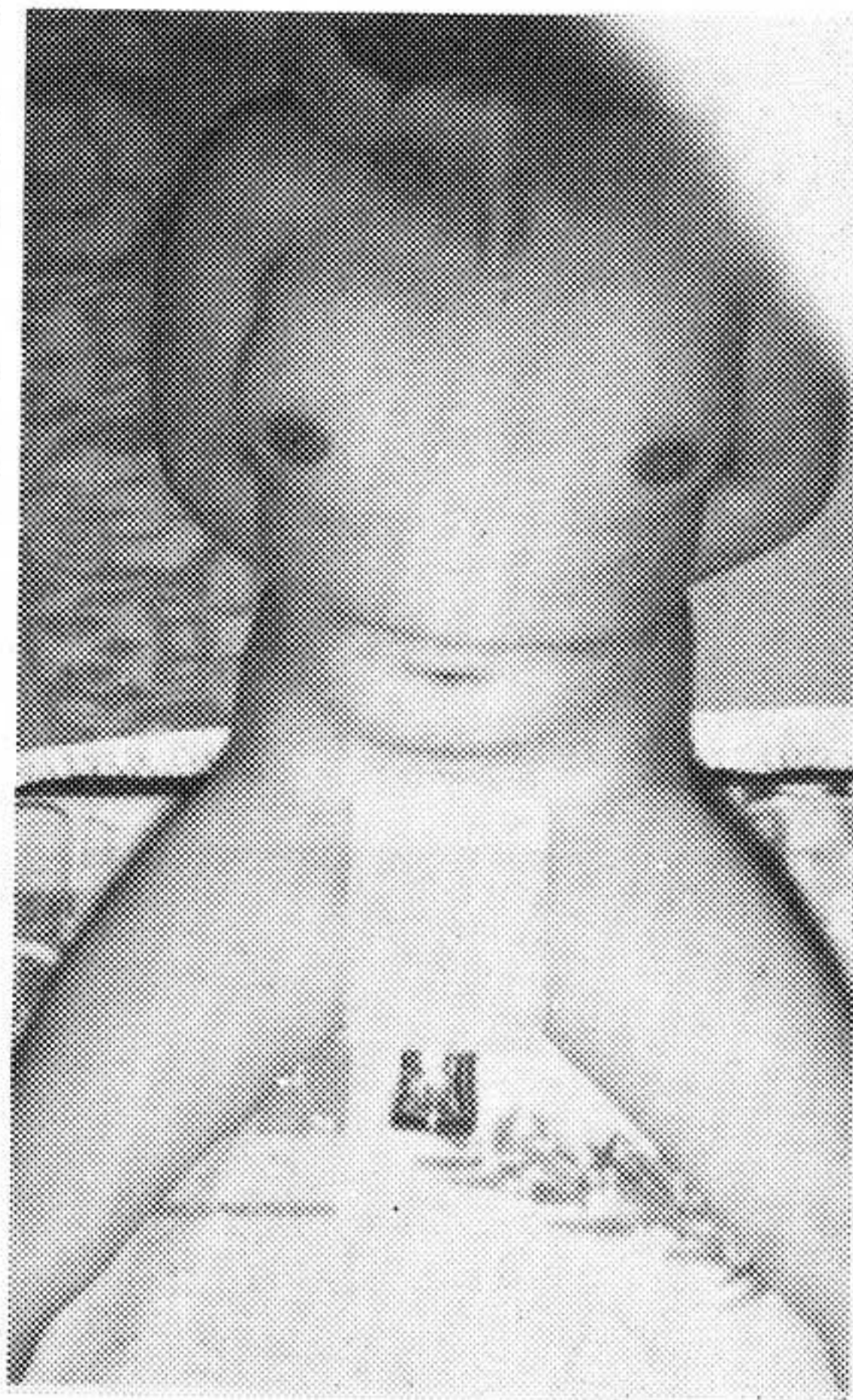
さて、その珍芸を演ずる女性ですが、その



多くは二十五才から三十二、三才ぐらいまでです。それも男性経験ゆたかな、みさ子のような女性です。なぜ年増が多いかと申しますと男遍歴の浅い十代の娘では、あそこの筋肉が完全に発達していないので無理なのです。しかし、十代娘でも出産の経験のある金原奈加子さんのような方なら特訓しだいでは、すばらしいスターになれるでしょう。

お座敷ショー（花電車）では、女性にしかない谷間の筋肉をフルに活用して珍芸を披露するので、どうしても膣筋の伸び縮みをコントロール出来なければなりません。ですからどうしても男性経験ゆたかな女性か、出産を体験した女性がいいのです。そのような女性なら、訓練しだいでも、かなり大きなものでも許容できるようになるものです。

男性自身の勃起時の平均値で長さは日本人で12・7センチ、米国人（黒人）のは16・5センチだそうです。私も横浜でホステスをしていた頃、店のマスターに頼まれて二度ばか



り黒人を相手にセックスをしましたので、よく知っておりますが、それはそれは見事なものでした。少し苦痛を感じ出血しましたが、M女の私にとっては、その苦痛も快感に変わってまいりました。

たくましくて真黒い肉体の下でセックスの苦痛とMの快感にもだえるみさ子の白い女体の姿を思いうかべて下さい。たとえば縛りVがなくとも、格好のSM画になるのではないかと思います。そのときの姿をカラーでも写真にとられていたら、と思います。

幽閉され、性の奴隷として、飼育された上で珍芸の特訓を受けている自分を想像する時があります。

そんな時には、むしろS Mプレイをしなくなるのです。さて、これから、みさ子の珍芸プレイをやった日の事を、お話ししよう。あれは、三月二十日の土曜日の事です。

主人が会社の同僚たちと、休日を利用して一泊の旅行へ出かけましたので「主人が楽しみに行くのに、妻の私が楽しんでいけない法はない」と、自分自身に言いかけ、私もプ

黒人との強烈なセックスの味は、なかなか忘れる事は出来ませんが、もし黒い赤ちゃんでも出来ると大変ですので、その二回かぎりです。私はコンドームを使用する事がきらいなので、うっかり外人の相手は出来ないのです。女の肉体は本当に不便です。しかし、M的願望の特に強い私は、たくましい黒人の男性に山小屋かどこかに拐われていて

レイを楽しむために、いつものS男性に連絡をとりました。

赤チャンを置いてゆくわけにはいかないの
で、連れてゆくことにしましたが、彼も「そ
うするより仕方ないだろう。それに、その子
は、ひよっとすると私の子供かもしれんから
な」と言ってOKしてくれましたので、私も
ホッとしました。それに彼は私に「赤チャン
のミルク代にでもしなさい」と言って一万円
のミルク代をプレゼントしてくれました。

今の所、生活には何も困ってはいませんが、彼の、私と赤チャンを思ってくれる、やさしい気持には心から、うれしく思いました。

そんな男性ですから私は心から、その方のへ奴隷めすVに、なれるのです。プレイ中は強烈なS男性であっても、プレイがすんだら、やさしい紳士になるような方でなければ決して長つづきはしないでしょう。

横浜駅の西口でタクシーを



ひろい、私たちはプレイをするため借りているアパートへ向かいました。だれが見ても親子づれの夫婦にしか見えないだろうと私は思いました。

二間つづきのアパートですので、一部屋に子供をねかし、もう一部屋がみさ子の特訓場となります。ストーブをつけて部屋をあたため、インスタントの食事をすませると、いよいよプレイ開始です。

今日のは珍芸のへ花電車Vの特訓です。彼は私に全裸になるように命じました。一般の花電車ショーには縛りはありませんが、みさ子のは、へSM花電車Vですから、もちろん縛られます。全裸で縛られた上で、珍芸の披露を命令され、もし、それが出来なければ、ムチが待っているのですから、芸の上での失敗は許されません。

まず、第一番目に私のやる事は、『奴隷宣言』です。後手縛りのまま正座させられ彼の書いた宣言文を読まされました。

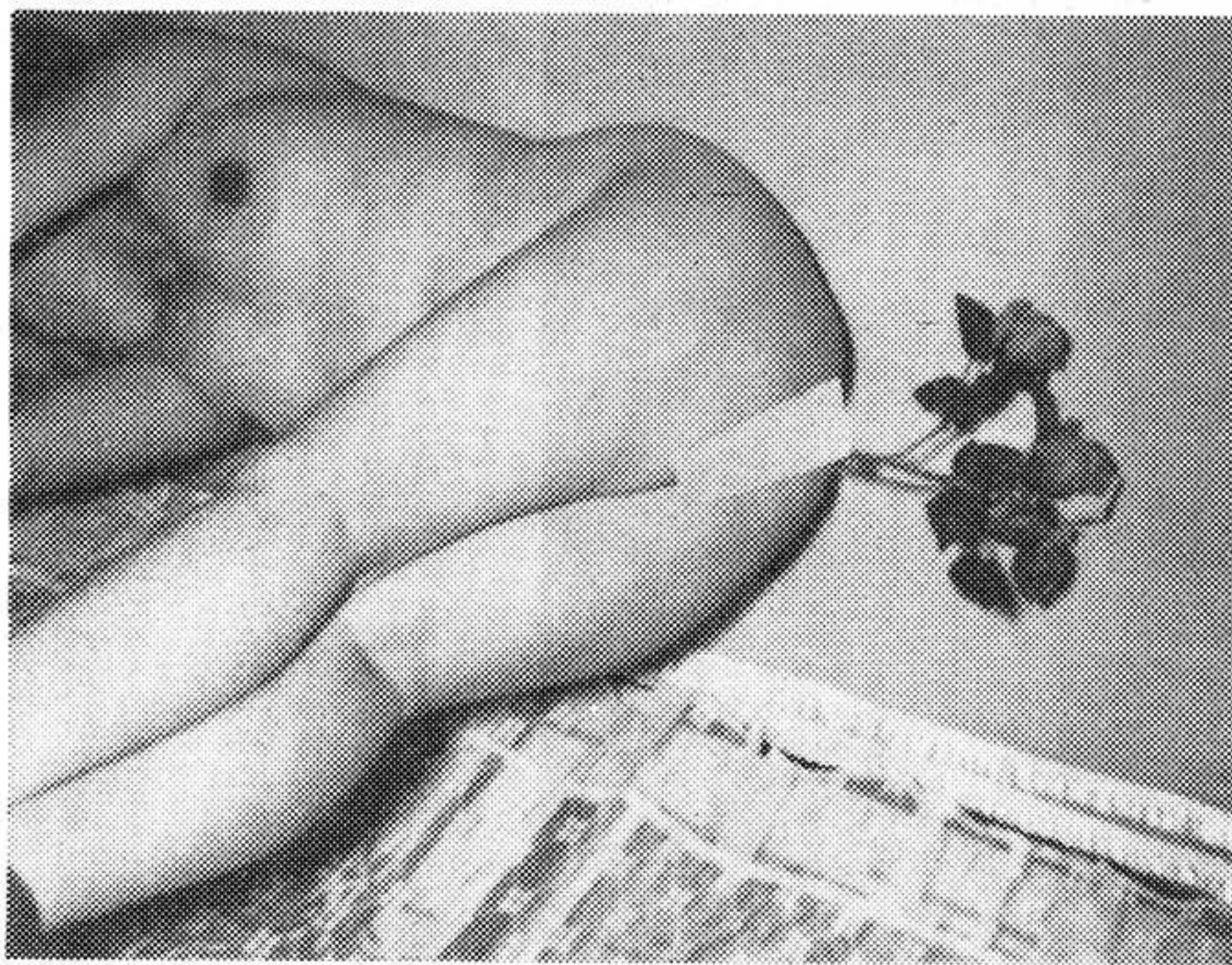
『みさ子は人妻ではありませんが、今日一日、御主人様の奴隷として、お仕えさせていただきます。その間は丸裸で御主人様のご命令にしたがいます。特に今日は子供を生んで少しゆるんだ膣筋の圧力を強めさせるためのトレーニングを実施して下さい。そのためならば、みさ子の御主人様はバナナ、玉子、コーラのビンなどで締めつける力のテストをして下さい。そして最後に

みさ子の体を人生花の台Vにして、たっぷり
と御主人様の気のすむまで、ご觀賞下さる様
お願いいたします。尚プレイ中に赤ちゃんが
おムツやミルクで泣きましたら、世話
をさせて下さるよう、お願いいたしま
す』

まあ、ざっとこんなような宣言文で
ありました。女の肉体には、いくつか
の穴がある事は奇クファンの方なら誰
もが知っていると思います。穴は割れ
目とも裂け目とも言いますが数ある穴
の中でも、今日の彼が狙うのは、耳孔
鼻腔、毛穴などではありません。専ら
縦に切れ目のある例の穴である事はい
うまでもありません。

さて、穴の話はこのくらいにして、
いよいよ珍芸の特訓が、始められまし
た。後手縛りのまま仰向けに寝かされ
ヒザを立てたままで両足を大きく開か
され、その上、腰を浮かした体位で玉
子割りを命ぜられました。彼は長時間
腰を浮かしているのは大変だろうと腰
の下にマクラを入れてくれましたので
時間をかけて玉子を割りました。
もちろん一つ一つ割った玉子のあと

始末は縛られているので私には出来ません。
彼がしまつしてくれたのですが、そのすばら
しい気分はSMプレイならではの味わえないも



のでした。まして夫以外の男性にすべてを晒
し、中の清掃までしてもらうのですから、み
さ子にとって玉子割りプレイは強烈なMの快
感をあたえてくれました。特に流れ出
る玉子のぬるりとした白味の快感は忘
れることが出来ません。

次のプレイはコカコーラのビンによ
る拡大責めであります。現実にはベトナ
ムでは政府軍に捕われた北ベトナム女
性兵士を拷問するのにコーラのビンを
使うそうです。これは両足を別々に縛
り、さらに、そのロープを左右大きく
別々に吊り上げ、丁度逆立ちをして開
股したようなポーズで、あの太いコー
ラのビンを半分位押し込むそうです。
みさ子もそれと同じような体位にされ
コーラのビンを押し入れられました。

奇クに登場したM女性の中で、おそ
らくコーラのビンを使ったのは、みさ
子一人ではないでしょうか。もちろん
ベトナムでの拷問とはちがいプレイで
すから三分の一ほどでしたが、私の方
は大した痛みは感じませんでした。丸
くて冷たいガラスの感触は決して悪く
はありません。みさ子が保証いたしま

すので、私と同じM女性の方、どうぞおためしになって下さい。みさ子と同様、すばらしい快感が肉体の中心をつきぬけることでしよう。

その次にバナナ切りをやらされました。両手を縛られたままテーパーの端に腰をおろし最大限に両股を開き、彼にバナナの皮をむいてもらいました。これは、つぶれるばかりで一つも切れなくて困りました。切れなかった罰として大事な毛を十本ほどぬかれ、やっと許してもらいました。

玉子、コーラのビン、バナナを使つての花電車プレイの最後は、それにふさわしい八人間生花Vの土台に、みさ子の大事なところを使われました。花の茎をそのままかと思つていたら、彼は試験管を用意して「茎で傷でもつけると、ご主人はじめ君にも迷惑をかける事になるから、花は試験管に入れた上で使う」と言つて、花の入った試験管を立てました。

そして「これが本当の女体花電車なのだ」と言つて、とても感激していたようでした。

これで私の八花電車プレイVは終わりましたが、私にとつても、すばらしいSMプレイでした。奇クファンのみなさまに実演をお見

せ出来ないのが少々残念でなりません。なぜなら、私の性本能としましては、一人の方に見てもらふより、多くの方々に見られる方がそれだけ恥かしいという気持ちが強くなり、SMプレイとしての実感が、わくからず。また、みさ子の大事な所を「一度、見たい」とお思ひの方もいられると思います。

男性の多くは、女性のおその事を古里と呼び、ストリップショーなどで「古里をよく見せてくれ」というヤジをとばしているのを見かけます。中河恵子さんが、「家庭の事情さえ許せばストリップの小屋で特出し専門の踊子になりたい」と言つたということが、奇ク臨時増刊号で塚本鉄三氏の「女体緊縛の醍醐味を語る」という文章の中にありましたがおそらく、中河恵子さんもみさ子と同じ気持ちではないでしょうか。

これは、すべてのM女性に共通する事とします。肉体を縛られ、一番恥かしい所を露出させられ、そこをバイブなどで責められる事は一般の人が考えると、たしかに異常のようですが、SMファンにとっては通常の事だと思ひます。

古代から女性は男性に支配されてまいりました。ハレムの女も、やくざの女となって春

を売らされている女も、マイホームの女(家庭の主婦)も共通しているのは、囲いの中に幽閉されている事です。文明の進んだ現代もなお女は男に支配されているのです。

妻は夫に、衣食住を保障されているかわりに、夜ともなれば夫の性的欲求を受け入れなければなりません。夫婦生活は、夫に肉体をあたえ、その代償として生活を保障してもらうのですから、法的に認められた売春と云えましょう。男と女との関係は、昔から犯す、犯されるの関係です。女にMが多いのは当然な事です。

私がM的衝動にかられ、性本能をむきだしにしてSMプレイに走る理由が、おわかりいただけたと思います。

私は男女平等の立場からフリーセックスを支持する女です。それも、ただのセックスでなく、『縛られた全裸の私を数人の男が犯す』といった、SM的フリーセックスの事です。

その時に始めてM女としての生甲斐を感じるのです。

指導者原理

「シルシをつけたところを、もう一度、読んでごらんさい」

一品親授の秘儀が終わってから、今は若紫の局となった佐瀬直美に対しては、部屋親の夕霧といえども、言葉を改めざるを得ない。一品上臈位の重さである。

「ハイ。この『指導者原理』の項でございませうね」

「そうです。そこからです」

佐瀬直美が綺麗な声で読みはじめた。



第四十八回

「マスターは如何なる場合にも正しい。たとえ、ある計画が汝にとって独断と感じられる場合でも、マスターは汝に、その計画に全身全霊を捧げることを要求する。」

組織の基礎はマスターの思想である。すべての指導者はマスターによって任命され、マスターに対して責任を持つものである。これら指導者達は各自の部署において、下位の者に絶対の権力を有する。そして、絶対者の無謬性から、マスターによって任命された、すべての上官への、絶対服従の必然性が結果される。

「結構です」

前号まで「独裁主有明は全世界から誘拐蒐集した数千の美女に畜従隷従を強制している。彼女等はその気質に応じて、五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。天位は貴和大后一人。地位は星とサラしか、いない。人位といっても一品となると、有明自ら親授する高官である。原則として、お手付きでなければならぬ。夕霧の局が推挙した中臈佐瀬直美も、厳粛に犠牲の裸女一人を屠って一品上臈位を親授された。これで、夕霧とは独立した一部屋を持つことを許され、多くの部屋子にかしずかれる身分となったのである。」

夕霧が満足そうに頷いた。そして、

「あ、そうそう。あなたは、いけにえを殺した罪障感に苦しんでいると、おっしゃいましたね。サア、このところを、お読みになってごらんさい」

と二、三頁、めくって見せる。佐瀬直美は夕霧の指さしたところから、読みつづけた。

「強い世代は弱者を抹殺する。躍動する生命力は、強者の利益のために弱者を犠牲にするという自然人間性を復活させることを目的として、個人を尊重する所謂『人間性』などという笑止な空論、また、それによる結合を粉碎してしまうであろう」

「アウ、ウ……」

何か、うったえるような、弱々しい呻き声で佐瀬の朗読が、フト中断した。

夕霧の局の居間、一ぱいに毛皮を敷きつめた上に、当の夕霧と新局の若紫は、その艶めいた裸身を惜しみもなく見せ合うようにして向かい合って坐っていた。

二人の間には、ナチスの指導者原理から影響を受けたといわれる、有明の指導書が置かれている。これをテキストにして、若紫は、目下、上臈としての特訓を受けつつあった。

「アウ、アウウ」

又も細い、くぐもり声が聞こえる。

「何よ。うるさいじゃあないの。勉強をしてるっていうのに」

入口の扉を、かくすようにして、夕霧が考案した裸女衝立が置かれてあった。(第三十九回、参照)股を横一文字に開き、丁度、相撲取りが仕切りに入る前のような姿勢で磔にされているのは先頃、表下使いになったばかりの元ミスユニバース、富田茂子だった。

ジャンヌなどと一緒に初お目見得を許され含頭礼の光栄に浴したのは、殆ど半月も前のことである。その間、夕霧の局が要求した躰というものは、厳しいなどという表現では、とても言い表わせないものだった。これならあの未決檻にいた方が、まだ楽だと思える位だった。含頭礼のとき、股の開き方が不充分だったというので、はじめて裸女衝立に磔にされてから、毎日、午後になると十時間を、ここに固定されて過ごしてきた。

幸いなことに人間というものは快楽に馴れるよりも、苦痛に馴れる方が早いのである。

特に、このような矯正器具は、肉体がそれに適合しさえすれば、苦痛を感じなくて済む

筈であった。富田茂子にしても三日目には、

もう腰が割れて、内ももをピタリ衝立に押しつけることが出来るようになったから、その限りで体を内側から、つられるという痛みは、どうやら免れたわけである。しかし、たとえスポンジをかぶせてあるとはいってもL型をした鉄棒の先でガッチリと引きつけられているのだから、痛みがなくなったとしても敏感な肌の感じる刺戟は、どうすることも出来ない。富田茂子の場合は、それが、いつも激しい尿意となって反応した。もちろん、羞恥心から必死になって、こらえるのだけれどこらえればこらえるほど、刺戟が強まって行く。そして、遂に限界を越えるときが来てしまふと、水しぶきは鉄棒にぶつかって、そのへんを濡らしてしまう。もちろん、床の上にビニールを敷き、金盥のようなものを真下に置いてあるから、高価な毛皮の敷物を汚す心配はないのであるが、意示が生理に抗し得ないということを告白するようなもので、何としても、みじめなものであった。そして、磔から解かれると、すぐ掃除をして片づけなければならぬのも口惜しい。

今も今とて、今日も又、我慢が限界に来て

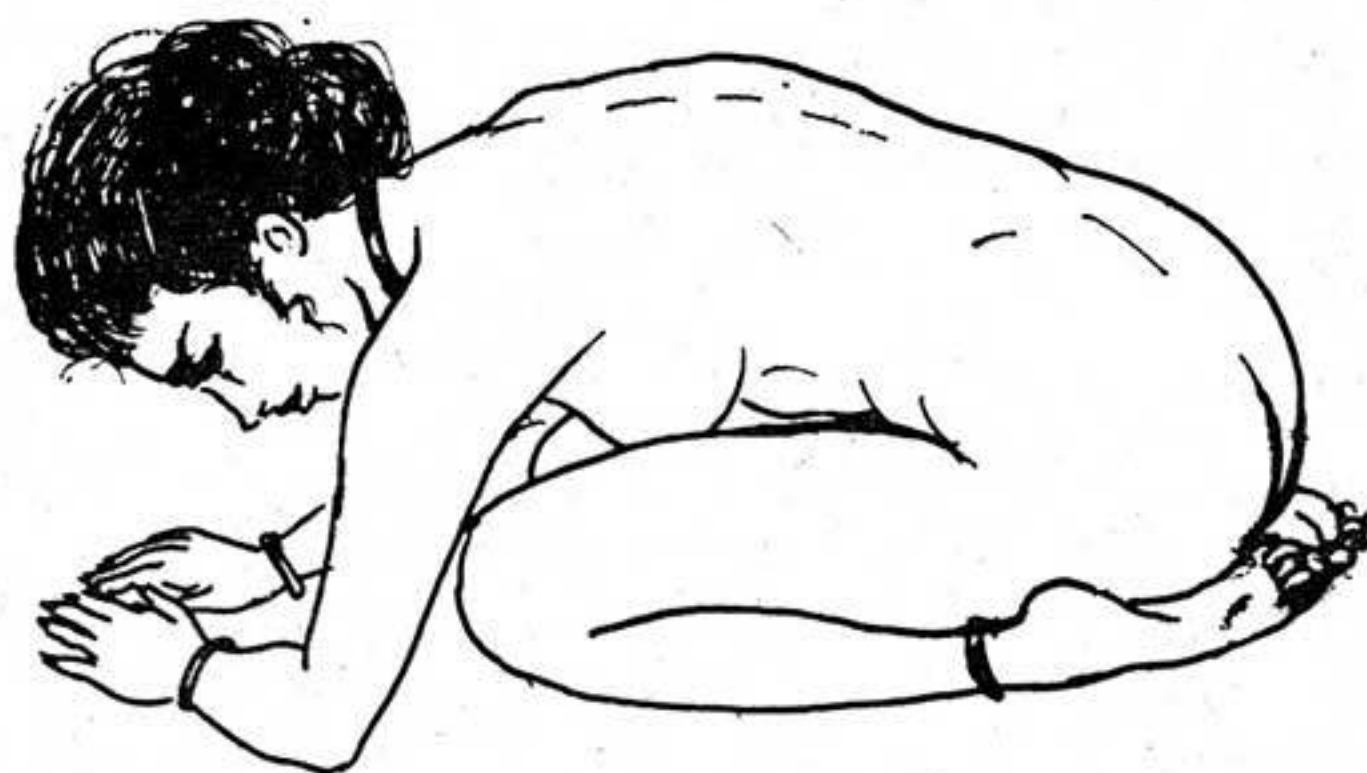
いた。そして、特に新局の若紫が、お客に見えている、その目の前である。こらえ切れなくなつて洩らしたといつても、必ず何かのお仕置きを免れることはできまい。それに、お客様の前で粗相をしたとすれば、きつと平素より酷い目に遭うに相違ないのだ。彼女が禁を破って、呻き声を出したからといって、決して無理からぬことだったのである。

夕霧の局にしても、そんなことは先刻、承知の上であつた。富田茂子はどうしても、そのオトシ穴から逃がれる、すべはなかつた。

ところが、助け舟が出されたのである。佐瀬直美が、

「お年寄さま。この者の肉体番号を拝見させていただいてよろしゅうございましょうか」

と言ひ出したからである。この国の習慣では、



肉体番号を見せてくれといわれれば拒むことは出来ないし、こうした場合に言い出すと、婉曲にその者を自分にくれと意思表示をしたことになる。

「え、なに？」

と夕霧が、びっくりしたのも当然である。

「これは、わたくしが、お預りしたばかりの婢（ハシタメ）で、まだ何も仕込んでおりませんわよ」

「ハイ、よく存じております。ですが……」

佐瀬直美は、いよいよ、へりくだって言う。

「この者は、わたくしがお枕として伽に伺候した夜、一晩中この衝立に貼りついたまま哭いておりました。そして、わたくしは同じ時刻にマスターのおなさを賜ったのでございます。これも何かの因縁でございます。しょう。そして、この者の苦痛の祈りが、わたくしに無上の歓び、この上もない

光栄を齎す助けになったのかも知れません」

この国には、ある者が精神を弄ばれ、肉体をさいなまれる痛苦を代償にして、他の者が歓楽を得られるのだという思想があつた。まことに苦しみは快樂のあかしである。最も苦しんだ者にして、はじめて最大の歓喜を受容する資格が、あたえられるのだ。それ故にこそ、苦痛をも歓ぶという哲学が生まれる。そして、それを「苦痛の祈り」と、この国では言いならしているのである。

苦痛の祈りを持ち出しただけで、この国では立派な理由づけになるのだった。

「でも……」

かつての部屋子だからといって、上臈に任せられた今はもう、競争相手、ライバルである。その若紫の言いなりになるのも、いささか癪にさわっていた夕霧は、

「この者は、わたくしがマスターからお預りしたのでマスターのお許しがなくては……」

と言ひかけると、無邪気な様子で、それをさえぎった若紫は、

「お局をいただいたからといって、わたくしは、お年寄さまの部屋子。ご監督を受ける身ではございませんか。そのわたくしが、この

者をお預りしたといっても、マスターの思召しに、かなわない筈はございません」

きわめて当然の理由だった。この上、反対をしいては、夕霧の個人的私意を疑われてしまう。そう思うと、そこは苦勞人で、思い切りのよい女だから、

「それもそうね。あなたには何かお祝いをさしあげようと思っていたところだから、丁度いいわ。ご希望の通り、これを差し上げましょう。早速、ご裁可をいただけるよう取り計らいます」

と、サッパリしたものであった。

佐瀬直美みずから刑枷をはずしてくれたのも異例だった。

富田茂子は思いもかけなかった新局の救援に感動しつつ、米つきバツタのように叩頭して、お礼を述べる。

「E—10二号。おまえは今から若紫さまにお仕えするんだよ。一生懸命、おつとめしなさい」

「ハ、ハイ」

という声も嬉しそうにハズンでいるのが、いっそう疎ましくなった夕霧は、佐瀬直美に向かつて、

「いいですか。このような未熟者には手加減をしちゃあ、いけませんよ。甘く育てるのは、決して当人のためにならないんだから。もっとも、そのことは、あなたも、よくお分かりでしょうが……」

と、自分のおかげで上臈になれたんだよという意味を言外にチラチラさせる。

そんな会話の遣り取りを元ミス・ユニバースは上の空で聞いていた。鉄棒を外されて、体の刺戟はなくなったものの、一旦ついつてきた尿意は、どうしようもなかった。

形のよい背中をふるわせながら、必死にこらえていたのが、再び、たまたまなくなって、

「あ、あ、う、お願いでございます」

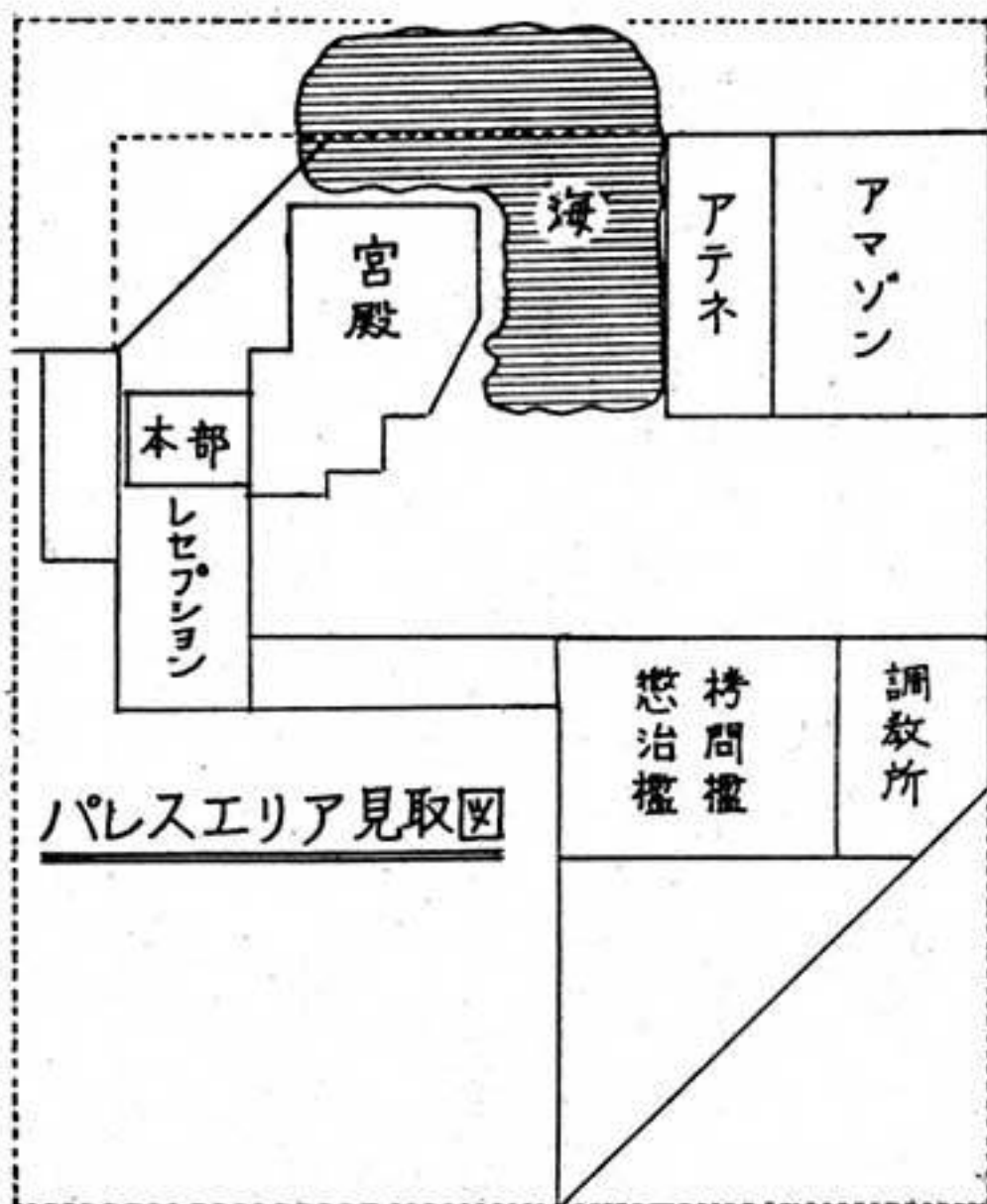
「なんですか」

ひどく、のんびりした佐瀬直美の返事が、ジリジリする程、うらめしかった。

「あのウ……」

と口ごもってしまう。勝手に便所へ行きたいといえば懲罰を覚悟しなければならぬし洩らしてしまえば又、償いを要求される。

「あの？ あ、何ですか」



「ハイ、ちょっと、ちょっと中座させていたいただきたいのですが」

もう顔を真赤にして、モジモジ臀を振りはじめているから、一目瞭然なのに、

「だめですよ、そんなに甘えては。わたくしは何も、おまえをチャホヤするために夕霧さまから頂戴したわけじゃあないんだから」

「……………」

目を白黒させて絶句する富田茂子と、平然として哀願を無視している佐瀬直美とを半々に見比べながら、夕霧お年寄は、わが意を得たというようにニンマリして、つけ加えた。

「つけあがるんじゃないよ。若紫さまは、わ

たくしが仕込んだお方。よくつとめたからマスターの思召しにかない、上臈にまで陞らせていただいたのよ。きつと、わたくしより、厳しくお仕込みになるでしょうから、しっかり性根を据えておくことだね」

「も、もう——アッ、アッ……」

腰をよじって悶えながら、それでも齒を喰いしばって決壊しようとする括約筋を張りつめる様子が、いじらしくも又、哀れだった。

「どうしたの。お行儀がわるいわねえ」

真面目な顔で若紫がいった。

いじわる。わかっていらっしゃるくせに。

と思っても、何といたら便所へ出して貰えるか、わからないのである。

「ハッキリ、おっしゃいッ」

夕霧が叱咤した。

「ご、ご不浄に……」

「はやく、それをいえば、いいのに」

と佐瀬直美がいつて、

「すぐに、させてあげるよ」

「ア、ありがとうございます」

「礼をいうのは、まだ早いよ。さあ、開股跪坐の姿勢になってごらん」

「ハ、ハイ」

一刻も待てなくなった富田茂子は、あわて、礫にされていた時と同じ姿勢をとった。さすがに、半月も矯正されてきているから、内股は左右まっすぐに開いた。

「よし、そのまま動かないで……」

といいながら、衝立の下にあった金盥をひき出した佐瀬直美は、それを体の真下に押しつけて、

「さあ、やっておしまい」

と言った。富田茂子は色を失って、

「うっ……」

と息を吞んだ。

コンピュータ・ラボ

宮殿をはさんで、この国で「海」と言いならわしている湖が鉤型に入り組んでいる。その海が、南側の正門前に作ってある堀割と合して、王宮を他の施設から独立させているわけである。

幅員百メートルに余る海の対岸に訓練連隊の屯所、兵営があるわけであるが、更に、その北隅に一区画があつて、アテネの園と俗称される。正式には大学校といつて、この国で必要とする学問、芸術を修得、乃至、研鑽す

る場所であつた。

いうまでもなく、美女たちが研修する目的は、すべてマスターの意思に副い、マスターを楽しませる以外の何ものでもなかったから自ら、その目的に適う学芸のみが、対象となつた。

アマゾンのような軍隊教育には比すべくもなかったけれども、ここにも厳しい集団生活と規律が、要求されている。

何よりも彼女たちは三つの誓いを満足させなければならなかったから、その身心を美しく健康に保つ義務がある。

音声が封止される午後八時から午前四時までの夜間八時間を除く十六時間のうち、食事、朝、昼三十分ずつ、夜一時間を差し引いて体育美容に五時間、必須課目に四時間を充てるので、専門的研修には残り五時間が使われることになる。

必須課目では憲法、指導者原理、礼式、歌舞、教養の五項目にしたがつてカリキュラムが組まれる。

専門的研修の分野は、文学部、理学部、芸術部に大別される。

成績は、すべて百点満点で評点され、年間単純平均八〇点以上をとらないと学園から追

放されてしまう。追放されれば階級が落ち、銀のクラス（人位）では銅のクラスにおとされ、アマゾン女兵に転籍されるし、銅のクラスであれば畜位物位に、おとされてしまう。ともに大変な境涯の変化を覚悟しなければならなかったから、美女たちもソレこそ目の色をかえて、勉学に励まざるを得ない。

前にも述べたように、この国の公用語は、日本語および英語だったから、銀のクラスに進むには、少なくともこの二国語を自由に聞き語り、読み書き出来ることを要求される。



アテネの園では銀、銅二クラスに属する美女が共存しているが、この二つの差別は、主として語学力の差となるわけである。

又、銅クラスは、あらゆる雑用をつとめて銀のクラスに仕えなければならない。だから何としても、早く二国語をマスターして試験に及第し、銀のクラスに昇進することを熱願するのである。

これら銅のクラス所属の女達が抱いているひたむきな願望に込めて、この国では最も熾烈な教授法を採用している。

それはコンピューター・ラボと称する設備

で、各人を個別に防音室に入れ、コンピューターの指示で発音を繰り返させ、覚えさせる方法である。特に目あたらしいとは言えない方法を、最も鮮烈なトレーニングに仕立てている点は、罰則の厳しさにあるといってよいであろう。

若し間違ったり、要求された返事をしないときは、電氣的にコンピューターにチェックされてしまう。勿論、声の高低、イントネーションなどの個人差については、一定限度のアロワンスが設けてあるけれども、会話のスピードについては厳格で、たとえ正しく言っても、ノロノロ発音したのでは、チェックから免れることができない。しかも、これらのチェック・ポイントは容易に他の制御機器と連動させ得るから、失点に対して懲罰を与えたり、更に違ったカリキュラムを、ひき出すことをも可能にしている。

ジャンヌと一緒に含頭礼を授かった六人のうち、学芸部に配属された画家の安藤敬子、ソプラノ歌手の月岡知子の二人は、先ず英会話のハンディを埋めなければならなかった。同じ立場でも橋本志保は津田塾で英文学を学んでいたとあって、コンピューター・ラボは

免除されていたのである。

ついでながら、新津謙介と一緒に糞尿詰めにされたホセ・アマビスカ（第十七回参照）の妻マーサも、このラボに配置されてスッカリ足踏みをしてしまっていた。何故なら、彼女は日本語ばかりか、英会話も殆ど出来なかったからである。

マーサが交通事故で「死んだ」ことになったのは一九六二年十一月のことだった。つまり、この国に拉致されてから、まる六年経った勘定である。責められ、調教される身分にとって、この一日は一カ月にも、一カ月は一年にも思われる程であった。

いまのマーサには、地上で美人歌手としてもてはやされた日々のことなどは、遠い遠い過去の思い出でしかなかった。そして、あれ程、熱烈に愛していた筈の夫、バンドマンのホセのことも、ともすれば忘れがちになってしまうのだった。あのレセプション以来、どうやら、未決檻から出されて含頭礼が授かるまでの、息をつく間もない程の凌辱や折檻が彼女を洗脳し、地上のアカを叩き出していたということの証左でもある。

そして、やっとのことでアテネの園の一員となることを許されたというのに、彼女には

特に、むずかしい会話力という関門が待っていたのである。

「アッ、ア、や、やめて……い、います」
けたたましく安藤敬子が叫んでいた。四肢を拘束した金具がガチャガチャと鳴る。

「アイ・ウィル・オベイ・マイセルフ・トゥ・ユウ・オウ・マスター！ アズ・ア・ロウエスト・スレイヴ……」

「ハツオン・ガ・ワルイ・モウイチド・クリカエシナサイ」

単調なコンピューターの声がハネ返ってきた。

「ど、どうして……」

と泣き声になっても、相手は機械のこと、何の役にもたたない。三十秒、待っても返事がないと自動的に懲罰器のスイッチが入る。再び、安藤敬子は膏汗を流して、もがきはじめる。

「い、いやっ、いやっ。もう、ああ、アッ、アッ。アウ……」

懲罰器といっても多種多様である。今日、ラボで用意したのはバイブレーション・マシンの一種だった。

床から垂直に立ったインチ・パイプの床上

六十センチばかりのところに、斜め上向きにパイプの横枝が出ていて、今、安藤敬子は、それを、またぐように中腰で固定されていた横枝パイプの、つけ根に取りつけられていたバイブレーション・マシンのヘッドを体に挿入されているのである。もちろん、両足首は一ぱいに開いて、パイプの横棒に留められているから、膝を合わせられるところの話ではない。

又、その横枝パイプは、一旦またがせてソッと差し込んだ上で、先端をギリギリと持ち上げ、上から吊りどめるから、マシンのヘッドは女体を内側から背中の中パイプに押しつける恰好になり、ム字状に喰い込んで腰を抜くことを不可能にしまうのである。さっきから、ずっと中腰のままだったのは、彼女が、そのように身体の中から拘束されていたからである。

安藤敬子の両耳は、スッポリとレシーバーで覆われ、鋼の輪が頭部を締めつけていた。その輪も後部でパイプに連結してあったから彼女には、わずかに頭部を左右に振る自由しか残されていなかった。その上、折角、解放された筈の両手も、後へまわされて、パイプ

を抱くようにロックされてしまっている。

こんな状況下にあつて、強制的に会話を覚えることなんか、とても耐えられることではなかった。すくなくとも、安藤敬子は自制心を失っていた。なまじっか自由になったと思つていたから、余計、辛抱が出来なくなったのかも知れない。そのような反抗心がマイクに送られてきた英会話の問題に対する彼女の反応を鈍らせてしまったのである。

彼女は、たちまち手ひどい、お灸をすえられてしまった。キッチリ三十秒が過ぎると、彼女の下腹部でマシンのヘッドが、振動し伸縮しはじめたのだ。それがもたらす刺戟は、蓋し強力だった。

こんな屈辱的なキカイにすら、反応してしまふ女の性というものを、彼女は口惜しいと思った。そして、齒噛みをして感情をおし殺そうとしたけれども、所詮は、はかないアガキでしかなかったのである。身体中がトロトロに融けてしまひそうだった。熱い血が全身をかけ廻った。みるみる全身の力が抜ける。それなのに、ああ、ガッチリと喰い込んだヘッドは非情な振動を止めようともしない。こうなつては、快楽というより苦痛であらう。「ウ、ウ……」

不自由な四肢を忘れて、反りかえりノタウチ廻ろうとする。中腰の膝が萎えたように感覚をなくしているのに気づく。彼女の両足には、もはや、体重を支える力が残っていないのである。パイプに、全身の重みがかかつている。

コンピューター・ラボに用意してある「お仕置き」には、苦痛と同時に、馴致を目的としているタイプが多い。

今、安藤敬子をいじめているバイブレーション・マシンにしても、それは彼女の体を鍛えるという副次的効果が期待できる。そしておそろしい程の効果は、彼女に英会話との間に、一種の条件反射を植えつけることに表わされていた。

こうやって、不得手な英会話をマスターした彼女は、死ぬまで条件反射を持ちつづけることになる。そして、体を刺戟される度毎に苦い記憶が、いくつものセンテンスが蘇ってくるであらう。彼女の性は、全然、無関係だった英会話と、切っても切れない癒着現象を呈するわけである。

「アイ・ウィル、アイ・ウィル……」
あえぎながら、彼女が言いはじめた。

グッシヨリと膏汗が肌を蔽い、余つて床の上に小さな水たまりを作っていた。

カリキュラムを忠実にこなしている間は、ヘッドの振動は、ピタリと動きを止めてしまふ。そして、これでもか、これでもかというように繰り返させられた言葉は、遂に血肉となるまでに至る。機械は倦むことを知らず、又、手加減もしないからである。

安藤敬子がパイプに括りつけられている周りには直径一メートル余の透明ガラスのパイプが天井から降りて、ピタリと音を遮断している。

言いかえれば、円筒型の電話ボックスに入っているようなものである。こうした、ボックスは、いくつも並んでいて、一人ずつ縛りつけられた美女たちが強制的に声を張りあげさせられている。

安藤敬子の隣には、マーサが泣き泣き日本の言葉を覚えていたし、さらに、その隣には月岡知子が美しい声で喋っていた。

——(未完)——

× × ×
× × ×
× × ×



はしがき

女相撲。その魅力が、われわれをとらえて離さない。けれども、過去に現実にあったそれは、グロテスクで醜悪な見世物であったものが多いために、そういう醜悪さに興味をひかれていたと思われやすく、理想化された美しい女相撲のすばらしさは、空想の産物になってしまふ。本誌にも諸家が繰り返し述べられているし、平井通、土俵四股平（粟津実）

文 献 渉 獵

女相撲書誌雑考

(上)

雄 松 比 良 彦 (カットも)

氏らも強調されているように、グロテスクで醜悪、野卑な見世物には、われわれは全く興味がない。むしろ、そういうものには嫌悪を感じるのだけれども、女相撲の魅力にとりつかれ、そのすべてを知りつくそうとすると、そういった過去の現実のさまの中にも、ありえたかもしれない美しさのかけらも探し求めねばならない。とにかく、この特異なもの、さまざまのすがたを知る事は、理想化されたイメージを育てる上にも必須の事であろう。

女相撲を扱った、実録、見聞記、小説、戯作、詩歌等々の数は相当にのぼる。江戸期の興行によって、ひろくもてはやされた頃のものは今日あまり残っていない。とくに、大空

襲による焼失は多くの古書を灰にしてしまった。さいわい、後述する朝倉亀三（無声）三田村鳶魚（えんぎょ）両氏の江戸文芸・風俗の大御所が、戦前それぞれ、まとめられた文章があり、これら博覧強記の泰斗は、ひろく各分野の文献に目を通して拾い出されているから、江戸期に関しては大体の様子は判るわけである。現存する茫大な資料の中には、まだ若干の新事実もあるかもしれぬ。その後、耽好洞人平井通（蒼太）氏の文章が諸処にあられ、これらも、概観に便利のものとなった。平井氏のものとは上記朝倉・三田村両氏の説を継承したものではあるが、若干の新指摘もあり、明治以後については貴重である。戦

前、女相撲独自をテーマとして考証を、ものされたのは平井氏くらいのものであろう。今日まで、いろいろの人びとが女相撲史をかいているが、その殆どは、全く朝倉・三田村及び平井説を、そのまま、引き写したものが多い。戦後になると、女相撲については本誌が中心であるが、はるか以前に増田志郎（トシロー）氏による「女体相撲艶色史」や、土岐相良氏の「見世物としての女相撲」があつて上記諸家の説のあらましは紹介されており、その後、雪崎京人氏の御文にも概観がある。氏の御文では、とくに大正・昭和の諸資料が紹介された。岡平吉夫氏にも一文があるし、最近、高島大井子氏が現代週刊誌、その他の資料を指摘された小文に接する。

諸家の資料にもある如く、素裸に褌のいでたちでの女相撲は、明治二十三年秋を最後にしている。その後も着衣姿（シャツ、猿又、又は肉ジュパンの上から褌をしめる）の女相撲は各地で興行されており、これらが時と場合により、裸になって褌一つの取組を披露したこともあることはあるが、今日では、まだ女相撲は廃絶しているといつてよく、すでに上記、平井氏の諸文には、その消滅が残念がられているけれども、今日、復活のきざし

もない。あるいは、江戸時代という、きわめて特殊な社会構造の、そのまた田沼時代前後という、きわめて限られた情勢の中でのみ生まれ、存在しえたものであるかもしれない。

数年前、キャバレー等のショーとして、ホステスたちが（もちろん、水着などを着て）やるのが流行り、又、日本TVのイレヴンPMに昨年から数回出た「女相撲日本一決定戦」は、それはそれとして面白いが、いでたちは当然、褌もつけないショーツパンツとシャツに柔道帯というもので「健全スポーツ」を銘打っていた。われわれのいう本来の女相撲の素裸に褌一本で力斗する魅力とは程遠いものである。わずかに石井輝男監督のメガホンで東映映画「徳川女系図」（昭和四十三年）のスクリーンに、紅白の褌で素肌を飾ったストリップやポルノ女優諸嬢の取組が登場して注目された。（この映画のシナリオに、後述する村松梢風氏作「仇討女角力」が参照されていたらしいのは愉快に思われる）。現代では、素肌に褌一本の凛々しい、いでたちの女相撲は、ただ空想と虚構の中にのみある、といつてよい。江戸時代の実物といえども、後述する上田秋成の言にもあるような、幻滅ものが大部分であったのか。フランソワ・ヴィ

ヨンではないが「去年（こぞ）の雪、今はいづこ」というところか。

わたくしも、この女相撲というものを、かなり長く調べて来た。以下は、諸家の資料をまとめ、わたくしの調査も少し加えたものである。未見の資料もあるのは申し訳ないが一応の段階と考えて、整備した。収録もれのもの、又、詳細不明のものについては識者の御教示を、わずらわしい。なお、戦後まもなく発刊以来（A5）本誌に掲載されて来た女斗美愛好家諸氏の文章、挿画は相当の分量にのぼり、過去になかった特異な一分野をなしているが、これらは、本誌としては衆知のものであるから、この雑考では、本誌発表のものは一さい省略した。

また、一般的な力女物語や女の格闘の実録女武勇ものとなると、古今東西で茫大なものとなるが、ここでは女相撲に限定し、とくにわたくし自身「女と女の」相撲にのみ関心をもつ者ではあるが、男女相撲も「女力士」が出るわけではあるから、あわせ取りあげた。関連する座頭相撲等は、そのみとしては取りあげてないし「女と獣の相撲」に至っては女斗美の本質と何のかかわりもないので資料には一切、ふれない。

ところで、女相撲愛好者には歴史好きの傾向があるのか、特殊風俗もので、これほど、その通史が繰り返し書かれているものはあるまい。しかし上述の如く朝倉・三田村氏の考証が、そのすべての基礎になっている。中には、そのまま両氏の説を引き写し、全く原典にあたっていないと思われる論説も少なくない。すでに所在不明が有名な古本を実見しているように引用したり、孫引きによる、いろいろの誤り、「(「空音本調子」と「女角力濫觴」の混同や又「空音」の挿画の女力士は湯文字姿であるなど)が流布して混乱する。川柳関係や「幽遠随筆」等は全く引用されないようである。(注、平井氏は新刊で川柳関係にも言及された——挿入)江戸期には片々たる黄表紙なども、今では古文書として大切に保管されているに対し、社会的には同範疇の現代週刊誌等に掲載されたものは、むしろ完全に廃棄されて、将来に残らないと考える。

作成にあたり参照させていただいた先人の御労作に謝意を表する。文中「原」は原本所在の知れているもの、「活」は活字本の流布したもの、「復」は原本体裁の復刻本の作られたものを示す。はじめの考えでは、これら原本の所蔵先、活字本の発行所年代、双書名等を

判明分は全部、傍記していたのだが一考の末削除した。この道に心ある方々については、それらを追跡する方法は御存知と考えたからである。また、多くの図版も入れたかったが印刷上、とりやめた。

附記。本稿を完成して手元においているうち、丁度、本年春、平井通氏の遺稿「おんなすもう」が刊行された。このため後述二項を附加して、この書について述べたが、他の部分は修正を要しないので、そのままとした。びづくしの美しい装丁で出版された有光書房に敬意を表したい。平井氏の戦前自家版を増補したものが、女相撲ものの単行本として古今独歩のもの。

一、上古—安土桃山

むしろ民俗学の研究分野にのぞむべきであろうが、和歌森太郎氏のお説のように、古来神事としての性格から、巫女による相撲があったということは考えられるが、記録、資料は全く知られていない。従って、この歴史区間では、著名の二書しか、あげられない。

○ 日本書紀第十四 雄略天皇十三年九月「相撲」の字は仏典には多いが、国書として

「すもう」に用いられたのは、この采女相撲の記事が始めてといわれる。それが女の相撲であることは、われわれにとって、大変おもしろい。岩波版「古典文学大系」頭注によると、こういう采女を裸にして犢鼻褌をさせて相撲をとらせるといふような事は、天皇としても感心しない行為であるから、本文のこの個所は敬語を用いてないのだとある。そうすれば、女の裸相撲は、この時代でも特異のことだったわけだが、上記ミコの神事相撲などを考えれば、いかななものか。第二に、相撲一般の変遷史のなかで、裸体に褌をしめて斗うという風俗は、いつごろからのものか。節会相撲では、そうなっているが、神話や宿禰蹴速の相撲は着衣の格闘といわれ、定説はない様であるが、わざわざ女であるから裸になったわけでもあるまいから、この記事により諸家の中には当時、相撲は裸形であったとする説もある。第三に、褌であるが、本文にいう「犢鼻」は短い股引のようなものであるというのが、史家の説であるけれども、最近になって、いわゆる、ふんどし姿のハニワが発見されて、古代にも用いられていた事が判明したという報道もあり、節会相撲の褌姿が突然、後世になって現われたとするのも不自然

であり、采女相撲は禪（まわし）をしめて取組んだと空想しても、さしつかえない事にしておく方がおもしろくてよい。さて、この場面を視覚化したイラストを、ずいぶん探してみるが、中々見あたらない。後述する伊藤晴雨氏のもの一枚だけである。日本書紀研究の諸文献には、かならず此処が出てくるわけで、そういうものを全部あげると大変なので、以下のリストには省いてある。

○ 義残後覚（ぎざんこうかく） 伝愚軒著
文禄五年（一五九六）（原、活）

京伏見勸進相撲で立石という強者を飛入りの二十才くらいの比丘尼が投げとばし、つぎつぎと挑んだ男たちも全部やられたという記事。諸家のいわれる如く中国少林寺拳法の伝奇等の影響であろう。本文は長く衆知ゆえ省く。「嬉遊笑覧」や「日本相撲史（横山）」でもみられる。この比丘尼は「かるさん」をつけて取組んだとあり、短い、たつつけ姿というわけで、残念ながら素肌に禪をしめて飛出したのではないようである。なお、本書の信頼性は、かならずしも高くないとされているので、念のため。

以上の二書しか、あげられない。時代設定

だけならば、いくらもある。山岡莊八「織田信長」は戦国時代、黄表紙「（鎌倉山）女角力濫觴」も「（太平記吾妻鏡）玉磨青砥銭」も鎌倉であるが、黄表紙の時代設定などは奇想天外のものである。この時代の実録的な研究で今後に期待したいのは、始めにも述べた各地の神事としてのミコや土地の娘たちによる雨乞いなどの、女相撲の記録の発見であろう。大御所柳田国男氏なども「大体、判って来た」といわれるのみで全くとりあげられていないのは残念である。茫大な「定本柳田国男集」の中にも、わずかに雨乞い風俗に一言ふれた項があるのみである。その年代は不明。節会相撲も長らく行なわれたもの故、その影響で生まれたような諸国の女相撲の話題はないものであろうか。上古以来、我が国では、いろいろの力持ちの女の事が諸文献にあらわれる。相撲が相撲らしく様式を確立してゆくのは、節会を通じてであろうから、それ以前、一般の格闘と区別なく考えられていたかもしれない時代には特に女の相撲としては残らなかったかもしれない。（節会）相撲と関連しては、例の「今昔物語集」の大井光遠の妹と、「古今著聞集」の高島大井子（おおいこ）がある。こういう大力の女たちは、いずれも大

女ではなく、一見きわめて女性的であって意外な力を出し、そこに驚かされるのは「義残後覚」の比丘尼などと同系列の発想である。時代が下ると巴、板額あたりをへて、江戸時代の女力持ちになるわけであるが、この辺になると、いわゆる大女と組み合わさってくる虚構としては、これらの力女たちによる相撲というのものもあるわけである。

二、江戸時代

始め西鶴らの浮世草子の中に女相撲が現われ、それが延享二年（以前？）の実際の興行になって行った事は衆知であるが、その浮世草子のころにも、実は実際、各地に興行や催しがあつて、それが西鶴や近松らに反映したものかどうかは、今日からは知る手段もない様子である。いわゆる江戸ツ子気質を始め、江戸個有文化の開花し始めるのは大体、宝暦以後であるから、こうした女相撲の興行なども始めは上方、京・大坂に生まれたであろうとは、諸家一致して推測されるところであるけれども、それを知る手がかりもない。京都関係の資料は特に少なく、大阪府の郷土資料なども、すでに調べつくされているのである

うし、今一度、根気よく探してみるのもよいかもしれぬが、朝倉・三田村、両泰斗によっても知られていない以上、無理と思われる。以下、原本は、いずれも貴重なものだが、最近の古書市でも稀に、その一部や残欠に出合うこともある。

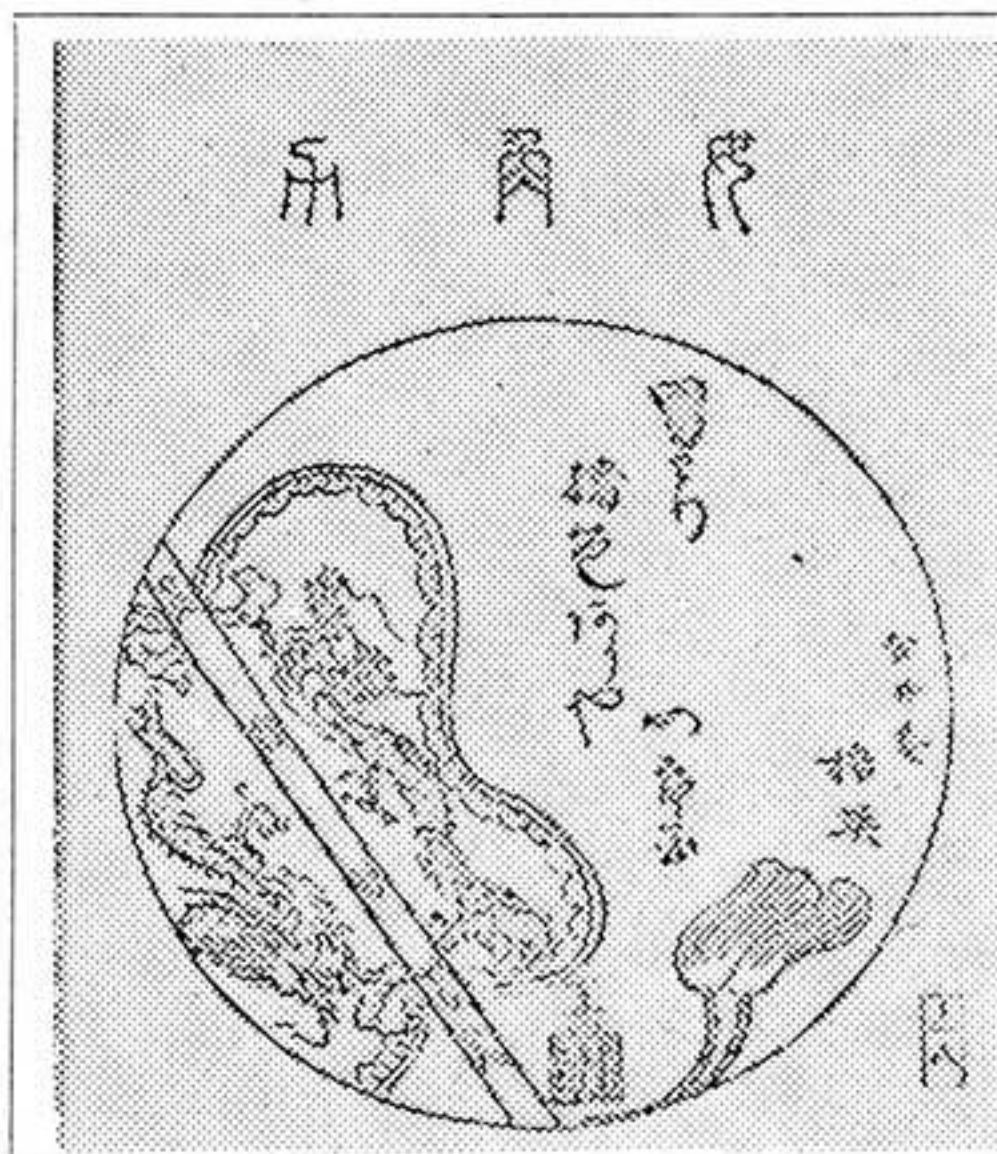
○ 好色一代男（こうしょくいちだいおとこ）井原井鶴作 浮世草子 天和二年（一六八二）（原、活、復）

卷三に楽阿弥という隠居、元若狭小浜の人が、楽しみに裸の女達に相撲をとらせたというので著名。これは、いわゆる湯文字姿であろうから、相撲といっても戯れのものである。次の「色里三所世帯」の描写や挿画とはいささか、ことなる。この作にも、おびただしい研究書があるが、いちいち省く。

○ 色里三所世帯（いろさとみところせたい）伝、井原西鶴作 元禄元年（貞享五年）（一六八八）（原、活）

西鶴作としての確証がないこと、写本でしか伝わっていない等、西鶴ものの中では書誌的に問題の多いものであるが、今日では、大体、西鶴作として国文学界では認められている由である。別名本「好色つは者揃」との関連、書誌的伝承のいきさつなどは中央公社論

「時津風」女角力



版「定本西鶴全集」第六巻の解題に、くわしい。それによると、尾崎紅葉の写本が伝わっていることや、永井荷風が本書を買った？

などというのは、おもしろい。京の巻第一に「恋に関有女すまひ」として女相撲の記述があり、面白い絵入りである。「一代男」とちがい、これは、はっきりと相撲らしい相撲で「男のすなる緞子二重まはりの」褌をしめ、広庭の土俵は砂を敷き、大いに力んで取っ組み合った事になっている。挿画にある女力士たちの姿も大体その同時代の相撲風俗をうつ

しているものであろうが、褌のしめ方は、いわゆる六尺式（節会相撲の犢鼻も同様）で、前下がりは、とっていない。平行する男の相撲の方で、この褌の形の変遷も、そう細部までは判らない。「二重まわり」というのも多分、横みつの事であるが、前袋のことかもしれない、判明しない様である。又、この図は、解題に「吉田半兵衛風」とされているように当然、後述する「すまふ祝言はんかく女ぐんはふゑじま姫」という浄瑠璃本の現存本にのっている相撲の図と、きわめて似ていて、力士が女であるため少し内輪にかかっているが褌のしめ方、蹲踞のかまえ、四本柱や水引幕など大体、同じである。なお最後の文「をしやわれになつてぞしまひける」の「われ」は「江戸時代文芸資料」本では「我」となっているが引き分けを意味する「割れ」に「我」の字をあてるものであろうか、如何。

三田村翁以来、宝永・正徳ごろ（一七〇四〜一七一六）の浮世草子には、素人の女の裸相撲を、かいたものが多くある、とされているが、これらについては明らかでない。識者の教示を、たまわりたい。戦前の目録では、約百四十種ある。

○ 関八州繫馬、(かんはつしうつなぎうま) 近松門左衛門作 浄瑠璃 享保九年(一七二四) (原、活)

近松最晩年の作。内容は衆知ゆえ省く。古河三樹氏の本には初演時(享保九年一月十五日)女相撲を「上演してみせた」とあるが詳細不明。大近松の研究識者の御教示を俟つ。

○ 流言記(りゆうげんき) 刊年著者は未詳 写本が現存 九卷八冊ものの随筆 実物未見(原)

これが興行と思われる女相撲にふれた史上最初の文献であることは、すでに朝倉無声氏により指摘された。従って延享二年(以前)に、すでに興行があった、という事になる。本文「両国でははめれど一円力がない」とあるから、やはり両国での興行として確説される。女相撲興行は「両国」「両国橋」「浅草」「浅草奥山」等で行なわれている、というのが江戸の場合である。原文「一向」でなく、「一円」。

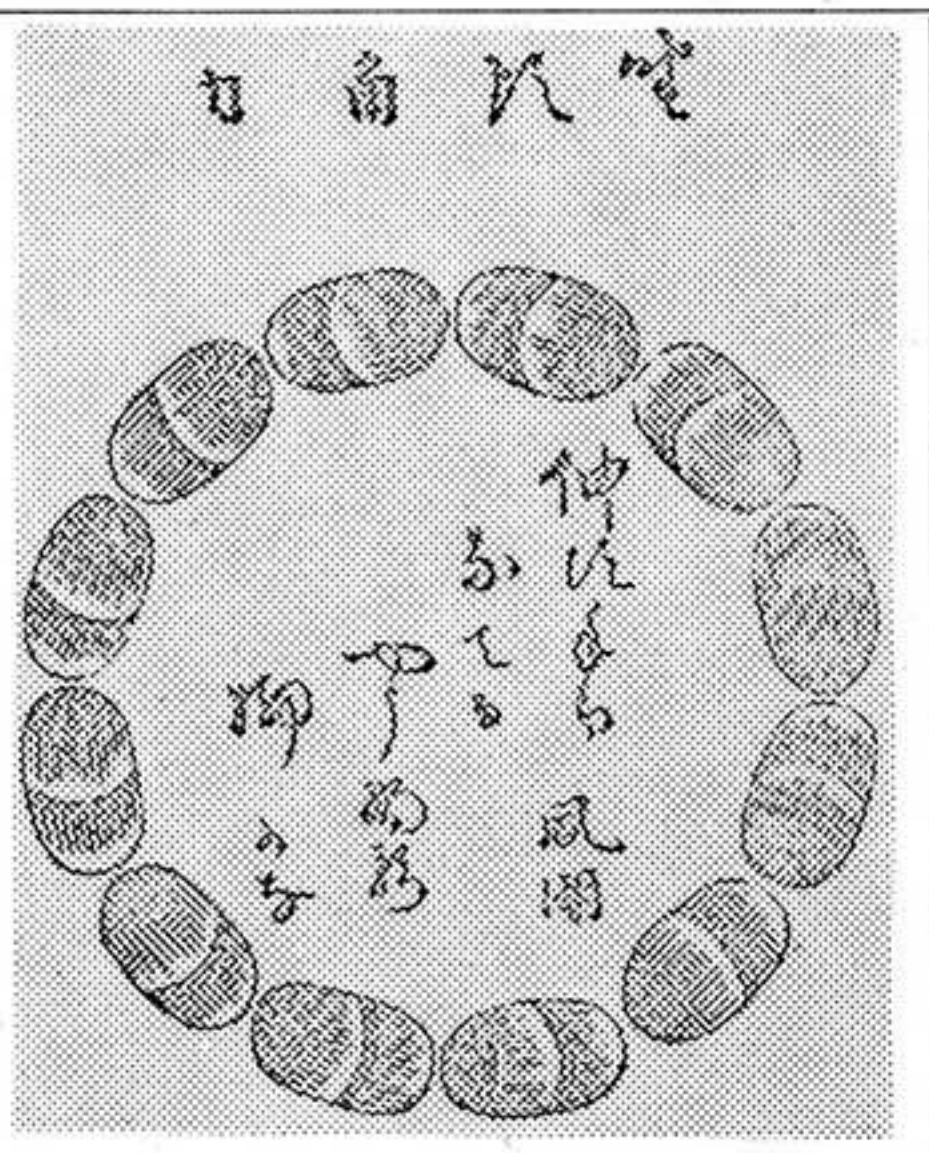
○ 俳諧時津風(ときつかぜ) 尾雨亭果然撰 延享三年(一七四六) (原、活、復)

改訂増補したものに「俳諧名物鑑」「江戸名物鑑」などがあり、当時の江戸名物をよみこんだ句集で、挿画をそえている。これも著

名で江戸期以後、諸家の引用するところ。本文中の「女角力」と、並びに参考までに増補分にある「座頭角力」のところを別図にのせておく。

○ 世間母親容気(せけんははおやかたぎ) 多田南嶺(南圭梅嶺)作 八文字屋本浮世草子 宝暦二年(一七五二) (原、活)

卷之三第一「継母の慈悲に羽を反す不孝」の、はじめのところに「忠臣二君に仕へず、貞女両夫に見えず、白晝にも刺されねば、豆腐蕪にて継ぎ難し。日月は天に位し、草木は地に生じて、今も昔も変った事はなき筈な



「時津風」座頭角力

れども、少し許り模様をつけて出せば見世物芝居に銭の山をなし、両国橋にての女相撲も相変らぬ孔雀ほどにはなし、世界の繁昌江戸に勝る地なく云々」

○ 俳諧東土産(あずまみやげ) 宝暦八年(一七五八) 刊 他未詳

絵入り俳書で当時の江戸名物をよんでいるといわれ、女相撲の絵と「柳より風に音なき瓢かな」という句をのせているといわれるが戦後の諸目録には記載がなく、不明である。

書名は朝倉氏の本にも三田村氏の文にも出ているが、上記の指摘は、鳶魚老による。前述「時津風」からすれば、瓢は女力士、柳は盲人で、男女相撲とも受けとられる。いずれにせよ、今日では知るよしもない資料であるが再発見がのぞまれる。なお「東土産」という俳書は他にもあり、文政十三年のものなど有名だが、もちろん別の本で、女相撲の句など全く出ていない。鳶魚老の旧蔵本は早大に入っているが、ここにもない様である。

○ 浪花見聞雑語 著者不明(原)

明和五年(一七六八)、夏のころ道頓堀に女の相撲の興行あり、大関に板額という女がいた。近所の素人女がこの相撲場へ飛入りに来て角力をとったが、天満大神の小山屋の下

女が、大関板額を投げ倒した、とある。この下女は二十二才、四斗俵を齒にくわえて振りまわし、肩へあげてかついで行ったという強力女である。当時大坂には、なかなか、いさましい素人の娘たちがいたものらしい。飛入りといっても裸になって素肌に禪をしめて取ったのであろうから。

○ 浅草寺開帳奥山見世物目録

「武江年表」その他によると明和六年（一七六九）三月～六月の開帳であらう。盲人と女の相撲、及び座頭相撲の出たものらしい。鳶魚老によれば盲人と女の相撲は、これが始めということである。

○ 摂陽奇観 浜松歌国著（六十冊）（原活）

卷三十五、明和六年（一七六九）の条、夏に坂町裏にて盲人と女の相撲興行の記事。盲人力士、女力士の珍シコ名が有名。「浪花叢書」一一四所収。

○ 浪華見世物年鑑

朝倉無声氏の著書にあり、明和六年、難波新地曲馬前にて盲人相撲、坂町裏にて盲人と女の相撲とあるが、これは「摂陽奇観」と同記述である。不明。江戸期のものかも不明。

○ 孝行娘袖日記（こうこうむすめそでに

つき）永井堂亀友作 浮世草子 明和七年

（一七七〇）（原）

「……近年女の相撲などさ（出来ましたる花の都……）」

○ 世間化物氣質（せけんばけものかた

ぎ）増谷大梁・半井金陵作 浮世草子 竹原春齋画 明和七年（一七七〇）（原、活）

酔いにからんだ、とんちんかな易占で女郎には力業をならわせろ、好かぬ客をやつつけたり、その他いろいろとあり、これが意外の事実となって「力業をならひし女郎も、同じ大坂難波新地に女子の角力興行の関に抱へられ、板額という関取、三十日百五十両にて先銀とれば云々」

○ 街談録 大田蜀山著（原）

明和五年—安永七年の間のことが記されているが、明和六年、浅草境内見世物の条に盲と女の相撲。盲の相撲（東の関琵琶ヶ嶽道引西の関琴ヶ崎遊曲）

○ 芸界きくままの記（活）

三田村翁編の「未刊随筆百種」の第十巻にあり、続稿、飛蝶筆記、とあって「いかがはしき芸道」の項に女相撲。原文は古河三樹氏の本にも引用がある。

○ 幽遠随筆 入江昌喜著 安永三年（一

七七四）（原、活）

「一とせ道頓堀に、女相撲という事有て、人こぞりて見物す。のちのちはここかしこに出て、盲者などまじへて、すまひとらせければ、宮より停止せられしとか聞へし。

雄略犯を見るに、乃喚集采女使脱衣裾（裙？）而著犢鼻露所相撲云々。女相撲ふるくも有けり」入江昌喜は浪速の人で、国学者である。この本文によると安永三年以前に大坂では禁令が出ている事になるが如何なものか。江戸では、三田村鳶魚氏によれば明和に大流行し、天明に至って禁止されたとなっている（「江戸生活事典」、その他）。大坂における女相撲興行の実態も、あまり明らかではなく、京都となると全く判らない。今後、何らかの資料の発見される事が、のぞまれる。現存するだけでも茫大な諸資料を探索読破する事は容易でない。郷土史、国文学を専門とする人人でなくては不可能である。

以下、黄表紙本の表題中（ ）に入れて記すのは、いわゆる角書（つのがき）で、小さく二行にすべきものである。

○（弾手余多）空音本調子（ひくてあまた・そらねのほんちようし）窪田春満作 地

尾門人三二郎画 黄表紙 安永九年（一七八

〇）（原）

黄表紙独特のおかしい話で、さみこくに伝わるこあふみのさみせんにからまる事件で、三味線をとりあげられたまひこ達が、不動尊にお百度まいりをして、お告げに「すまふをとるべし、その見物のなかに必ず曲者来たる也」とあって「女すまふをはじめければ大きに流行り、思ひよらざる金もうけ」となり、曲者をとりおさえて、皆々三味線もぶじ十二ウー十三オに見開きで出ている三二郎の画は有名で、このごろの女相撲解説の大ていの書には引用されている。魅力のある女力士だがこれは上記のように、まひこ達が俄角力で興行するもので、次出「青砥銭」の、かさかき女などではないし、しかも裸角力で曲者をおびきよせて惚れさせようというのだから「きたなく」では困るのである。

○（鎌倉山）女角力濫觴（かまくらやま・おんなすもうのはじまり） 杜芳門人吉田魯芳作 北尾政美画 黄表紙 天明五年（一七八五）（原）

黄表紙作者として著名な桜川（岸田）杜芳の門人であるが、この人の作は、あわせて二ツしかなく詳細は分からない。黄表紙は鎌倉

時代を出すのが好きだが、むろん風俗は江戸のものになっている。諸目録によれば、表題に「女角力」と入っている本は、国書多しといえども、これだけであるから、すぐ注目されるところである。もっとも、女相撲には少ししか、ふれていない。現存本は状態がよくなくて判読しにくいところもあり、よい校訂者を得て活字化してほしいもの。五折三巻ものである。なぜか本書の内容は従来の諸家によって全く紹介されていないので、以下、女相撲に関したところだけ、抄録してみよう。

（一オ）「鎌倉殿仰せ出ださるは、かく治まれる代に武を忘れざるは、大将たる者の心がけ也。これ迄数度の戦ひに、男の武勇は知れし御事なれば、女の力を心見んため、近日赤沢山に於いて女角力を見やうするほどに、その旨、鎌倉中の大小名へ触れ流すべしと仰せ渡さるる」（二オ）「イカニ方々、近日赤沢山に於いて女角力を上覧あるべき由、仰せ出だされし間、娘を持ちし人、その用意あるべし」（二ウ）「三郎すけやすは娘三人持ちたり。姉嬢おやすは器量万人に優れて力強ければ、なんでも今度の角力に出しておちを取らんと思ひて、その日の見栄にと小袖、帯など買ひに呉服屋へ行く」（三ウ）「既にその

前日になりければ、角力大鼓を打ち歩く」

「てんからてんからすてんてんすてんてん」

「あした雨が降りそうだから、今日中に打って歩かう」（注、この語は女相撲と雨乞いの

関係を作者が知ったことであろうか）（四オ）「フウ何だ？ 赤沢山に於いて女角力と

か。こいつは珍しいナア。鎌倉はじまって無い図だ」

「女角力と聞いちゃあ見ざあなるめへ」（四ウ）「かくてその日になりかば、赤

沢山にかり屋をしつらい、頼朝公の御機敷其の他、鎌倉中の大小名、今日を晴れと綺羅を

飾り、涎を流し見物する」

「びん差で目を突かぬやうに云々」（五オ）「負けたとって腹

を立ちなさんな、食ひつきこなしよ」

「東西の方屋には、今を盛りの娘盛り（？）雪の肌へをあらはして、四股踏み鳴らす土俵入、

御供の通人共、其の他見物の若者共、みな現つをぞぬかしける」（注、ここの四ウー五オ

の部分の見開きが、北尾政美の優雅な筆致で土俵上対峙する女力士、蹲踞する上下姿の女

行司、東西の方屋に二三人の女力士の絵になっ

ている）（五ウ）「おやすのこった、とんだ粋な所がある」

「あっちらの色白ながよい

か、こっちらの桃色ながよいか」

「インニヤ俺は肥ったのがいい」

「どれもくづはねへ、

云々」

さて山口剛氏によれば、こういった黄表紙でも好評のものは一万部以上、刷られているという事だが、この本はどれ位、出たものか今は非常に稀観になっている。今の週刊誌のようなものであろう。本書の刊行から推測されることは「濫觴」ものとして女相撲がとりあげられるほどに、当時以前には女相撲が普及していたという事。それと一時期にもせよ極端に下品なグロ見世物としてではなく、ある程度の風格と格式をもった興行物であった事もある、という好ましい状況もあったと思われることである。もっとも、現実のものが「きたないものぢゃあった」（秋成）ために戯作で美化したのかもしれないが。天明度の女相撲そのものについては実は明らかでなく、朝倉無声氏もこれら黄表紙の刊行について、じっさい興行されていたものか、又は明和の故事をとりあげて戯作したのかは判らないとされている。鳶魚老によれば、女相撲は江戸では、天明年間に風俗上、面白からずとして（一時）禁止されている。これが再開されたのは後述、嘉永元年である。上記女力士の挿画には膝下くらいまである中長の化粧まわしをつけていて、これで土俵に上っているから

このまま取組むのであろうが、じっさい、男の大相撲の方でくらべると、こういう風俗はないようである。例の陣幕久五郎の私作による歴代横綱の列記に、三代横綱とある丸山権太左衛門は、享保十八年に免許と書かれていて、丸山の別の図には、膝上位の短い化粧風のものをつけているが、これは取組と化粧（紀州）禪の未分の風俗であらう。天明度といえは谷風・小野川で、その取組の風は衆知であるし、化粧禪は、くるぶしのやや上までくる長いものである。「空音本調子」の挿画の方も「女角力濫觴」の禪と全く同じと考えてよく、これは、じっさいに取組んでいる。後述する諸考証では文化、文政―弘化年間の女力士は女鬘、正式の禪「その上に短い華美な化粧廻しをしめた」といわれているが、取組の上に更に化粧禪をしめたというのには疑問がある。これらの図は少し時代が早い、化粧まわしだけで取組んだものとすれば女相撲は、この頃は、そう勇壮な動きもなかったものであろうか。後項でも述べるが、女相撲のイメージに興味をもった場合、その演出される作法、技等に加えて、女力士の風俗がどんなものかということがある。もちろんパントンをはいたとか、そんな事は有難くないの

であって、素裸の女力士としては、唯二つ、髪形と、それから取組の様子、ということになる。取組の形の変遷は、男子の相撲の方では大体のところは判っている。細かい点で不明のところもあるが、これについては別項か又は稿を改めて述べる事にする。節会相撲以来、それぞれの時代風俗の相撲を移した女力士の、いでたちが、ありうるわけである。髪形の方は、皆島田になっていて、ずいぶん、おとなしい取組みだったものか。勇壮な相撲なら男鬘か根結びの垂髪以外はムリだろう。もっとも、現代週刊誌などを見ていると、女相撲のいでたちなど、相撲に理解のない画家やカメラマンが作るので目茶苦茶である。黄表紙の画にも、そういう面があって、風俗の信頼性はないともいえるが、北尾政美らのチャンとした絵師たちであるから、そういうことではないと思いたい。（附記。平井氏の新刑「おんなすもう」の口絵、及び表紙に本書のこの図が出た。もっとも、解説が「空音本調子」となっているのは何かの手ちがいであろう）

○（新発）幸大寺不実録（しんぱ・こうだいじふじつろく） 島田金谷作 滑稽本
天明七年（一七八七）（原）

朝倉氏によれば座頭と女の相撲を扱っているというが、わたくし実物に接していない。原本の所在は二―三、知られている。

さて、ここに番外を、ひとつ入れておく。

黄表紙の「文武二道万石通」（ぶんぶにどうまんどくどうし）（天明八年）の箱根七湯の「底倉」の躰のところの図（本書は黄表紙中では、ひろく活字化もされているので、かんとんにみられる）を、笹川臨風博士の解説本（大日本雄弁会講談社、評釈江戸文芸叢書第八巻）では、女芸者と大名のお座敷相撲としているが、これは他の諸本にも校訂されているように、若衆であって女ではない。「こんな色子もねへもんだ」という書入れからも明らかであろう。若衆の女装しているのは裸になっても髪形で女に見える。ただ、なぜ笹川博士が女としたかを想像すると、その少し前のところに「鎌倉の女芸者を七湯へまくばり置き」とある事もある。この辺の黄表紙は次の「青砥銭」などと共に、寛政二年十一月の、幕府の戯作についての出版規制の要因のひとつとなったものであろう。

○（太平記吾妻鏡）玉磨青砥銭（たいへい

きあずまかがみ・たまみがくあおとがぜに）
山東京伝作 喜多川歌麿画 黄表紙 寛政二年（一七九〇）（原、活）

この内容も衆知であるが、上述の如く寛政の改革を諷刺した一連の黄表紙のひとつで当然、時の施政者の忌否するところとなった。

その要旨は、無駄をはぶき家業に精を出すということをはひねって、いろいろおかし味を出している。京伝の前作にもある青砥左衛門藤綱という、白河楽翁のもじりと思われる人物は、これでは陽には出ていない。女郎もはたおりで働かせた方が無駄がない、代りに狐を女郎に化けさせて客をとらせる、しかしシツポがどうしても消せないでシツポ袋をかぶせる。赤沢山の本当のすもう取りは力もあり他の仕事をさせねばもったいない。幾十人分のお供に代用出来るから一人でカゴをかつがせ（谷風をもじった画）、代りに角力の興行の方は、他に使いみちのない盲人と、かさかき女でとらせる。というわけで当時流行の見世物と、ひきしめ政策とを、ひっかけた次第である。黄表紙等に盛んに鎌倉時代が出て、相撲となると、かならず赤沢山ということになるが、これは例の河津、俣野の相撲が赤沢山で行なわれた事になっていて、もちろん事

実とちがうが、地理的にもちがうけれども、江戸時代の様式化された、そういう地名化であらう。例の吾唯知足も、銅銭の角穴まで無駄にせず、四回も使うのだと、ひやかしている。盲人と女の相撲の画は六ウー七オにあるが、これは従来の諸本には本文に比して、あまり紹介されていない様である。座頭は禪をしめているが女の方は湯文字である。本文にあわせて歌麿も出来るだけ不美人をかいているので、滑稽は別として、あまりパツとしない。「濫觴」や「本調子」のそれとはストーリーがちがうから仕方がない。なお、続帝国文庫の活字本は、これと限らず黄表紙一切本文だけで絵をのせていないので、絵は原本で見るのみ。

○胆大小心録 上田秋成著 文化五年（一八〇八）（原、活）

本来、男の生業であるものを女がやることについてのべている中に「女ずまふはきたないものぢやあった」とある。上記しばしば、この語を引用したが、この一言のなかに秋成の女相撲への期待と、現実のそれを見ての幻滅がこめられている様に思えて興味深い。つまり、今日われわれの女斗美愛好のように、理想化した女相撲を考えて、じっさいのそれ

を見れば、その大部分は「きたないものぢやあった」にちがいない。事実、グロテスク趣味でなく、いま少し、すっきりとした高級なエロティシズムを秋成が期待していたと思つてよいであろう。

○ 忠臣蔵跡の祭 十返舎一九作 柳川重信画 合巻本 文化十一年 (一八一五)

(原)

女と盲人の相撲の思いつきのキツカケは、長屋夫婦が寒いので、あたたまるためにやっていたものだという話。

○ 江戸両国興行女角力一枚刷番附 文政

九年(一八二六)

朝倉氏による。好色的なシコ名の並んでい
るおかしいもの。

○ 豊年満作豆(ほうねんまんさくまめ)
(一名諸国満作豆) 十返舎一九作 歌川貞
秀画 合巻本 文政十年(一八二七)

これも朝倉氏による。盲人と女の相撲の口
絵があるとされており、戦前の文献目録には
あるが、戦後のものにはない。

○ 嬉遊笑覧 喜多村信節著 文政十三年
(一八三〇) (原、活)

近世風俗の重要文献として著名。本文四、

「江戸繁昌記」

女相撲の記事

江戸の繁昌記、女相撲の記事は、
「相撲」の項が初篇にあり、その終わりのと
ころに、別掲の如く「婦人相撲」の事をのべ
ている。後出「静軒痴談」参照。

武事の相撲のところに「座頭すまふ
女すまふ、観場にある」として「江
戸名物鑑」(俳諧時津風の増補版)
から前出の二句「男より勝色ありや
女郎花」と「のばす手はなでる様な
る柳かな」を引いている。前述の如
く「義残後覚」の比丘尼のことも出
ている。なお女相撲ではないが、西
行の「山家集」の歌を引いて「もの
のふのならすすまひはおひたたしあ
けとのしさりかもの入くひ」として
いるが、他の諸本では、この歌の第
二句は「ならすすまひは」とあるの

が本来であろう。本書の相撲一般の記事も必
見に値する他、他の一般風俗の考証も、きわ
めて冷静、客観的で私意を交えず、ひろく畏
敬されているものである。かの巨人、南方熊
楠翁も、その柳田国男氏あての書簡の中で、
「喜多村信節は、邦人としてはよほど得手勝
手の牽強すくなき人なり」と、ほめている。
本稿では、とりあげないが、相撲揮の変遷等
についても参考すべき個所が少なくない。江
戸期女相撲のイメージを育てるのに、本書全
体を熟読する事は有益な仕事だろうと思われ
る。

○ 江戸繁昌記 寺門静軒著 天保二年
(一八三一)

「相撲」の項が初篇にあり、その終わりのと
ころに、別掲の如く「婦人相撲」の事をのべ
ている。後出「静軒痴談」参照。

○ 大津絵節替へうた引札 嘉永年間
これも朝倉氏による。難波新地の有名な観
場、溝ノ側で名古屋から上って来た、女角力
一行の興行があったこと。「力女の花競べ」
とか「姿なまめく手踊にひきかへて、力争ふ
勢の烈しさと優しさは、裏と表の四十八手」
などという句は、案外女斗美の本質を衝いて
いて、おもしろく思われる。

○ 藤岡屋日記 須藤由蔵編 百四十四冊

(原)

嘉永二年(一八四九)四月十一日から六十五日、江戸回向院お竹大日如来開帳の節、女角力興行の記事。

○ 武江年表(正篇) 斎藤月岑著 嘉永

三年(一八五〇)

延享年間記事として「時津風」を引用。従って前出二句が、のせてある。

さて江戸期の最後に、雑俳、狂歌等から資料を拾わなければならないが、わたくしは、この方面に特に、うとくて資料を読破し得ていないため、友人の国文学者等の教示によってみる。有名なものだけで、細読すれば他にも発見されるかもしれないという事である。

○ 誹風柳多留^{やなぎだる} は後述「川柳評万句合」

からの抽抄本で、岩波文庫でも前後二回、出ているが、この中にある女角力の句として有名なものは「これからが女角力とそ引くなり」(十五篇、安永九年、子正月角力句合、四十折才、桜木五扇)。これは見立てか。

○ 誹風末摘花^{すえつむはな} も同様だが特に恋句であるから女角力はそのままでありえないと考

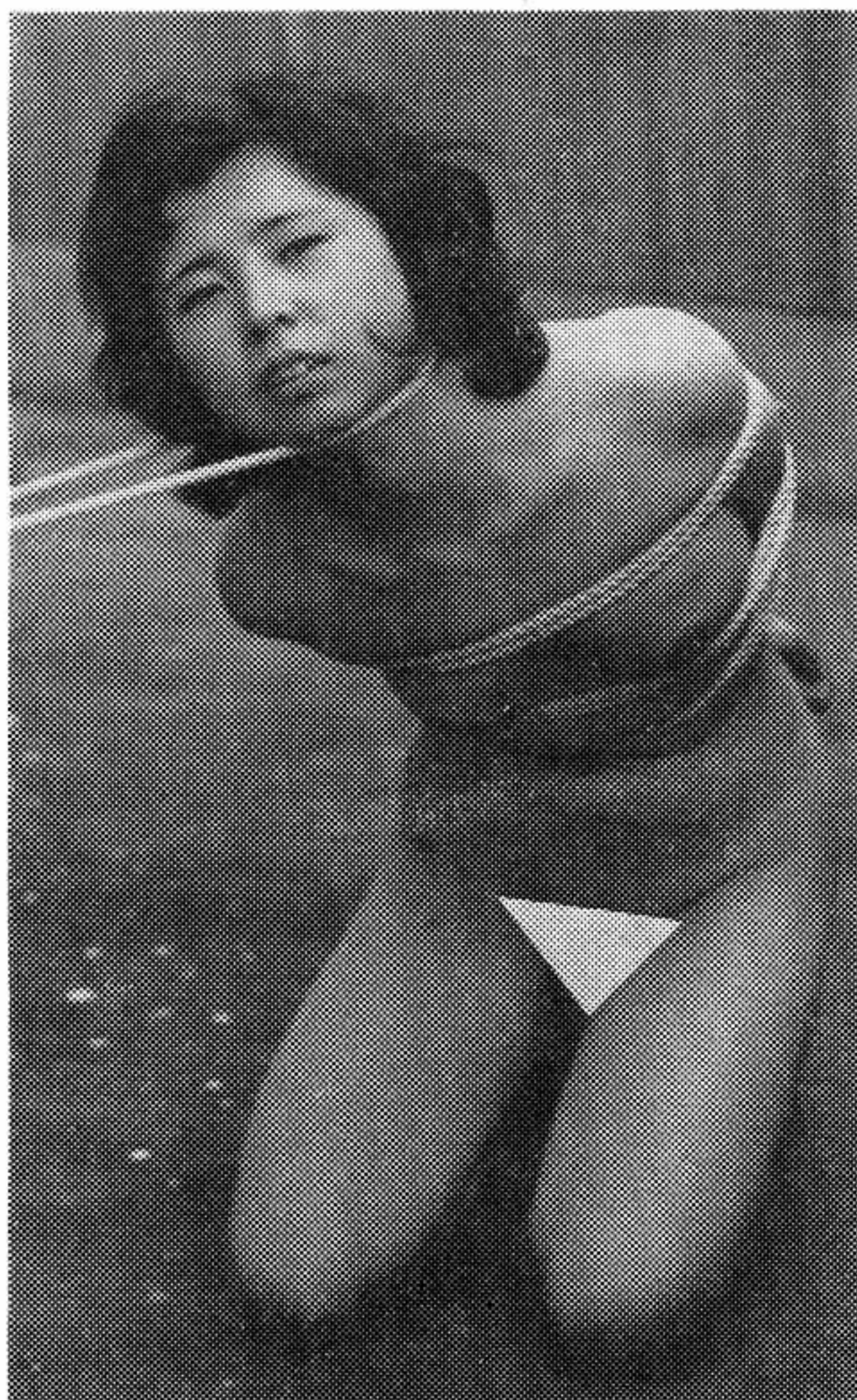
えうる。見立てものとして「角細工女角力の相手なり」(三篇、寛政三年、二十八折ウ)

○ 川柳評万句合^{まんくあわせ} が古川柳の原典であり

宝暦七年—寛政元年にわたって初代柄井川柳が各地の取次から集まったものを選句してとった約七万句があり、今日一般人はみられない。約四千五百ページに及ぶが印刷りの複製が出ていといわれるが、活字化してほしものである。友人の教示によると、有名な女角力の句は二句あり「ふんどしも女角力はむづかしい」(前句はればれとするする、宝暦十一年)、及び「ふんどしをくひ切りそふな女角力」(前句さかりなりけりけり、明和三年)が衆知とされている由。もっともこの二句は有名のものであって、この他にも女角力の入ったものはあるかもしれぬが、何分、茫大、かつ、閲覧困難のため、今後にまちた。他評古川柳、狂歌等については、まだ調べていない。それぞれの分野に御熟知の方々があれば教えていただきたい。この時代盛んに「女のふんどし」が出てくるが、上記二句は別として一般には湯文字のことであり、江戸期は男の下帯も女の湯文字も同じ。

実際の女相撲の興行という、いちじるしい事実を残した江戸時代にも、女相撲についてふれた文献は大体以上の如きものしかない。

いわゆる「草双紙」は、その変遷の過程でいろいろ出版されているし、又一方では浄瑠璃や芝居の台本、又いわゆる「艶本」など「相撲」とか「花角力」とかの題をふったものが数多くあるが、多くは男女情事のパロディや諸事の見立てとして「相撲」の語を用いたもので、これは今日まで引きつがれる傾向である。浄瑠璃本の「相撲祝言はんがく女ぐんはふゑじま姫」などは一見して女相撲でも現われそうに思えるが、これは男の相撲で、板額女、及びその娘(板額には史実上は娘はないと思うが)ゑじま姫の武勇の場面はあるが、かんじんの相撲のところは兩人は見物人である。武家相撲の絵は入っているが、これについては前にふれた。ただ「生捕妻」^{いけとりつま}ゑじま姫を妻にするものをきめるために武人たちが勝負に相撲をえらんだ、という趣向はおもしろい。又表題として、さらに女相撲的なのは、同じく浄瑠璃本に「こなた名取の井筒姫・かたや手取の生駒姫(以上、角書)花相撲棧敷賀嵩(はなずもうさじきがたけ)」というのがあるけれども、文政四年(一八二二)初演というのみで不明である。おそらく見立てごとであろう。



霖

りん

雨

う

餘

よ

情

じょう

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

塚 本 鉄 三

南国女性の情熱

沖縄在住の読者の方で、緊縛モデルになつてみたいという女性から便りを貰った。

箕田氏が前々から連絡をつけておいてくれて、その結果、三月に私に取材に行ってくれということだったのだが、三月は私の方の仕事が忙し過ぎて、残念ではあったが、直接、断わりの返事を出しておいたのだった。

その時、書いておいた私のアドレス宛に、今日、便りが来たのである。

消印は那覇東局で以前の沖縄切手と違って日本の20円切手が貼ってある。これは当然のことであるが、封筒の裏の住所に沖縄県としてあるところは、なにか新鮮な感じがする。今迄、航空便で特別地帯の南西諸島群島の地

域として10gまでで30円、20gまでで55円だったのが、今度は日本国内並みに速達で90円だから、実質の値上げになるのかなあ、と思ったのだが、消印が那覇東局6月7日で私の手元には8日の朝に着いている。しかも20円切手を貼って「航空郵便」の赤いスタンプが押してある。

航空機を利用しないと、こんなに早く着かない筈だが、復帰直後なので郵便局も大サービスをしているのだろうか。

9セントの琉球郵便の切手を貼ってNAHA—RYUKYUの消印だったものが、那覇東の消印で日本式になっているのも、向こうの人には非常に変わったという気分になるだろうが、私達にとっては、以前の方が、なんとなくエキゾチックな感じを受けるのであった。

○

その後、大へんど無沙汰しまして申し訳ありませんでした。奇クの編集部には、一月から数回のお便りの交換をした上で、やっと三月には、貴方様が渡島して下さるとのことで、心からお待ち申しておりました。

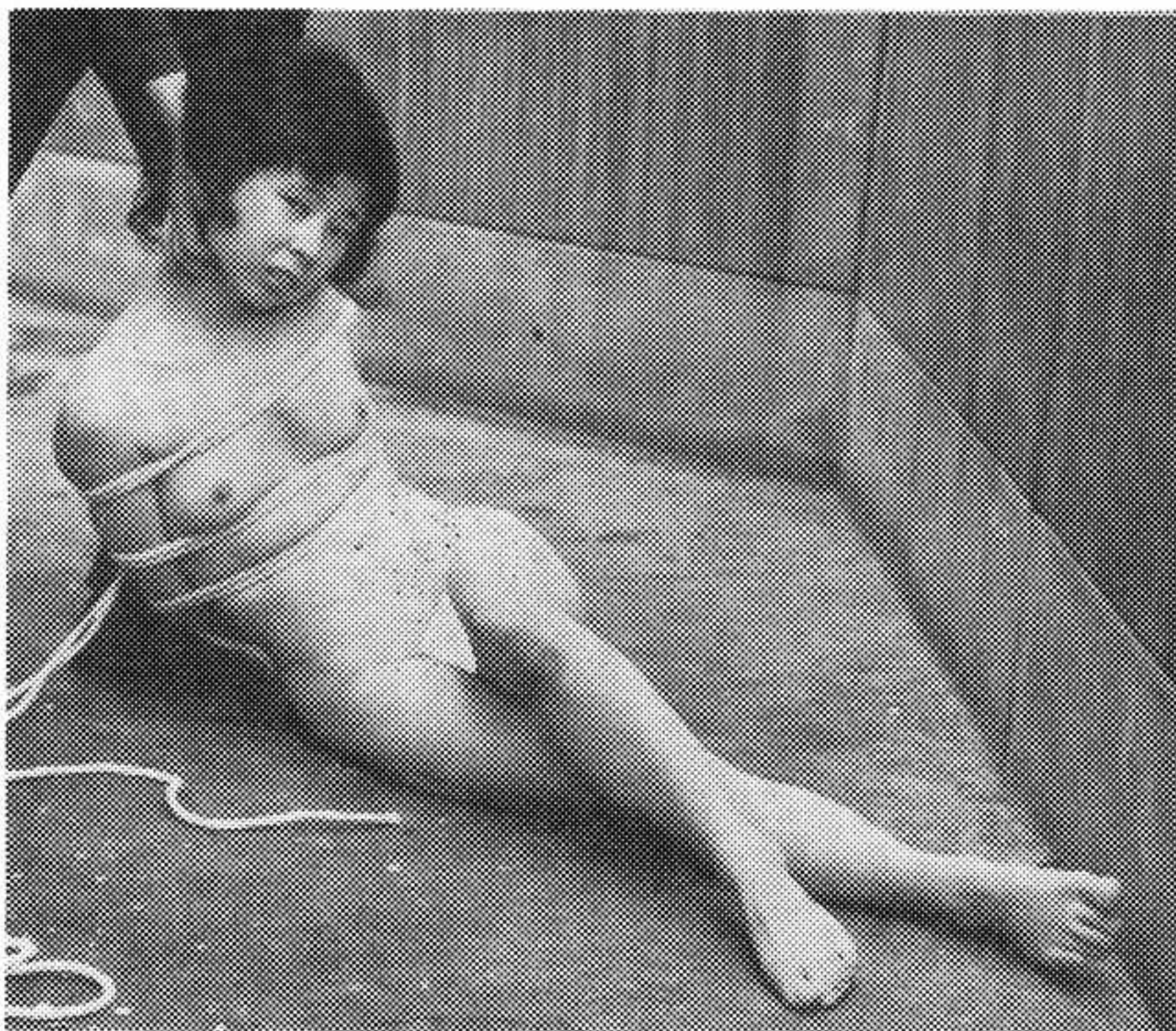
そして貴方様がおいでになられるということでしたので、どのような方かは存じ上げま

せんで、貴方様のお写真を一枚、お送りして下さるようお願いすると共に、日と時間をお知らせ下さるよう、お願いしました。

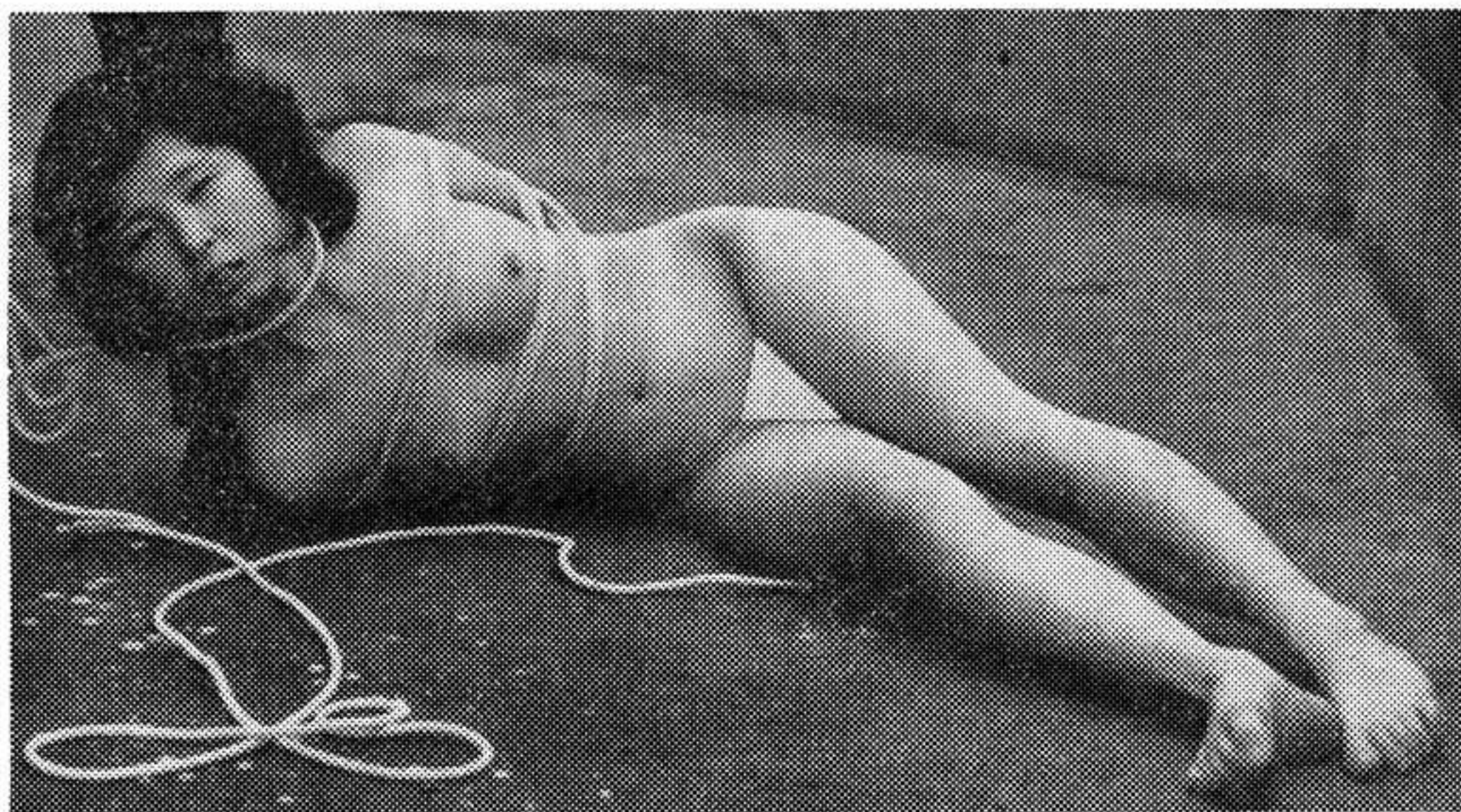
それが、三月は貴方様がおいそがしいとかで、とうとう、私が心待ちしていたにもかかわらず、おいでにならず残念でした。

五月十五日の沖縄の日本復帰も果たして、当地もやっと落ち着いてまいりましたが、私の気持は、それから、なかなか落ち着かず、一度は本土から人が来られるということになったため、どうしても、なんとか本土の方、特に奇クかかわりの方に責めていただきたく、しきりに心で思っております。

いつ、おいでになりますやら、ぜひ日と時間をお知らせ下さい。空港までお出迎えに行きます。



この前、編集部へは私の写真、送っておきましたが、貴方様にも別なのを、ここに同封しておきますから、那覇の空港では、この写真をたよりに私を探して下さいませ。



プレイをするホテルは、私の方で準備いたしますから、ご心配なく。

出来れば三日か四日ぐらい滞在されてその間、ずっと私を責めて下されば大へんうれしいです。沖縄を見物されるのでしたら、私が、ご案内いたします。

私は気持の上だけで奇譚クラブの内容に、驚くほど、ぴったりなのですが、まだ一度もそうした経験はございません。それで、ひどい責めや、きびしい縛りに耐え得るかどうかは自分でも心配しております。なにしろ、経験が一度もございませんものですから。

はっきり言えますことは、羞かしめを受けます責めには、十分耐えられるだろうという自信はあります。私の願望も、そんなところにあるかと思っています。

こんなことを考えます私って、本当に異常なんでしょうね。

自分でも、なんだか、ときどき私って変わっているわね——と考えることがあります。

考えるだけでは、もっともって、いやらしいことを考えているんです。なんで私ってこうなんでしょう。

筆にするのも、はばかれますので、よう書きませんが、自分でも自分の気持が不可解になります。一種の被害者意識というのでしょうか。力強い男性の手によっていじめられたい、責められたいという気持が強くて起ってきます。そして、只単に責められるというのではなくて、もっと陰湿なことも考えていますので、お恥かしい次第です。

なんだか、力強い男性の手で、もみくちゃにされている自分を思うと、物悲しいような凄い快感に襲われるのです。それで一度は、そんな目にあってみたくて、お恥かしいながら、つい思ってしまった次第です。お返事、心からお待ちしております。

六月七日

鳥屋部恒子

○

私はこの手紙を読んで、すぐ行くから、ホテルの手配など、よろしく頼む——という返事を出したかった。復帰前と違って、今だったら渡航証明書なんて面倒なものや税関での検査もいらぬのだから、大阪から東京へ行くのと同じ気安さで飛んでゆけるのだ。

この時ほど、私は時間がほしいと思ったことはなかった。スケジュール表を眺めてみる

と、予定の日程は、びっしりと詰まっていたとしても、三日も四日も日をさくことは、ここ一カ月ほどの間には出来そうになかった。

必ず返事をくれということだったので、私は渋々重いペンを持ったのであった。

『南国の情熱に燃える女性を、責めてみたい』という気持が、しきりに湧いて、行けないのが、かえすがえすも残念だった。

私が昭和45年の10月号に「沖縄美人の責め記録」で書いた座間明子の肉感的なポリュームのある女体と、挑みかかるような迫力のある体当たりのSMプレイに、私は南国的なパッションを多分に感じたものだ。

二の腕や脛に、割合濃く密生している体毛にも、なにかしら日本人ばなれのした女体というものを感じていたのであったが、いざSMプレイに興じてみると、なにものも、かなぐりすてて、その一点に没入してくる情の濃さ、深さには、さすがの私も、たじたじとなったものである。

私が座間明子の殊に女らしい部分を、責めて責めて、責め抜いた時、今まで示していた控え目の羞恥のベールを、玉葱をむくように一皮一皮、脱ぎ去ってゆき、やがて驚くべき狂態を演じた、あの光景は、今でも、まざま

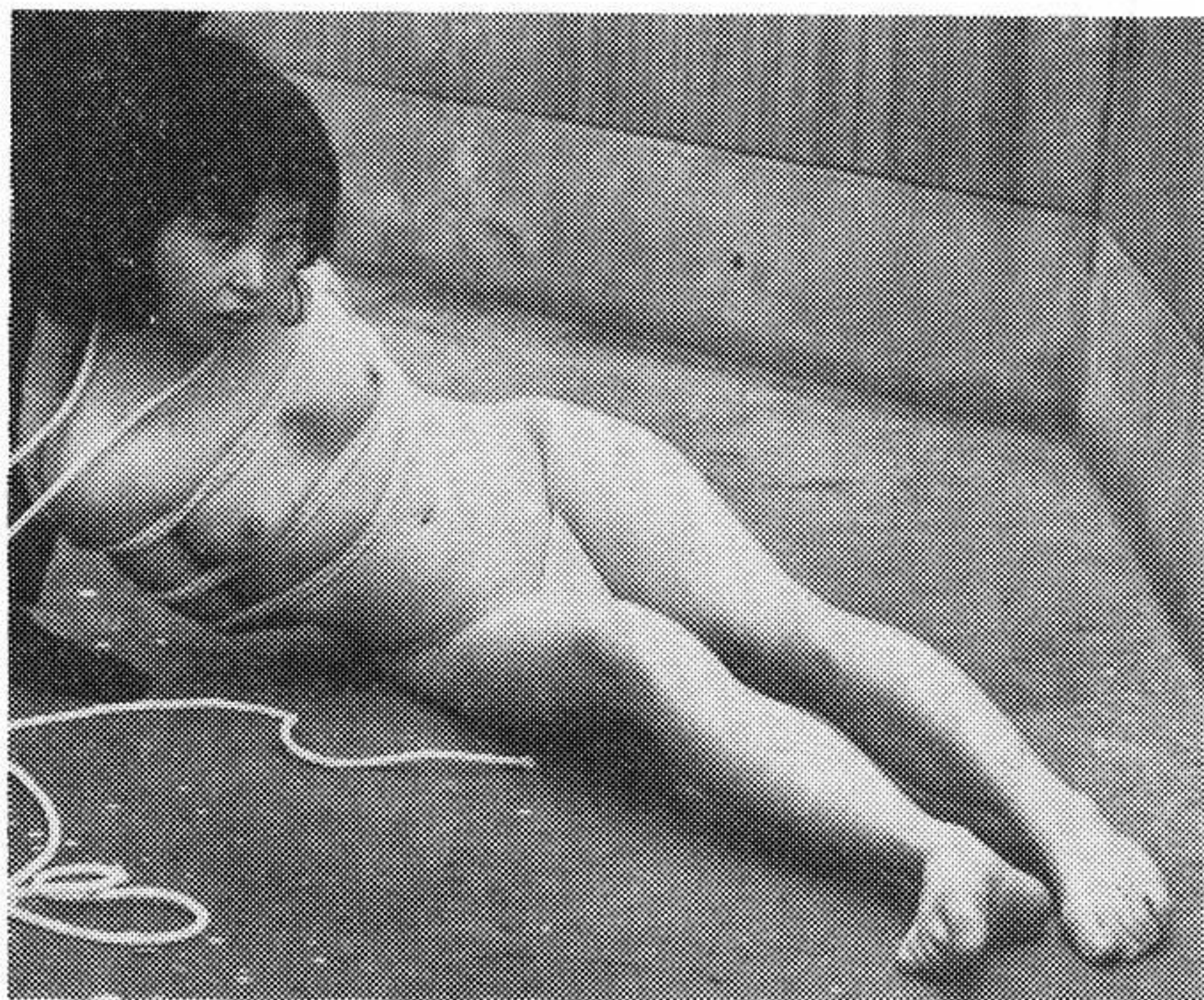
ざと目の前に浮かんで忘れられない。

今度、便りを呉れた沖縄の女性も、きっと座間明子に勝るとも劣らない情熱を心に秘めたM女性ではないかと、

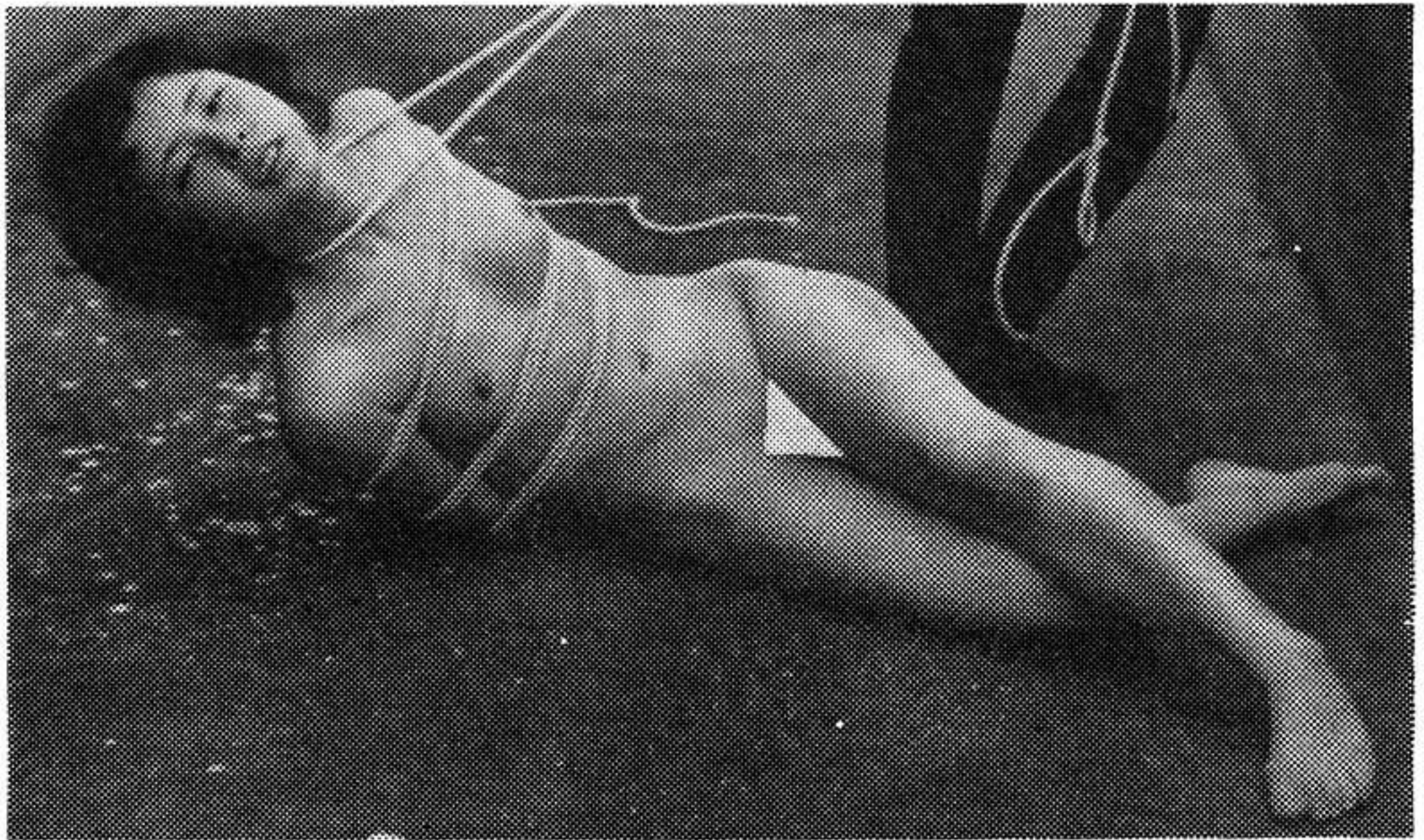
その手紙の文面からして想像出来るのであった。

だが私が、わざわざ沖縄まで飛んで行かなくても、梅雨の晴間を待ちきれないようにして、東京から前田真知子がやってくるし、仕事の合間を縫って、笠井奈保子や深田菊子の取材もやらなくてはならない。

この前、名古屋まで、仕事のことで来た折に連絡を受けた鈴木千鶴子からは、SMプレイに対する執念を私信に托して度々送って寄こしていた。六月の末には、仕事ではなしに責められるために大阪まで行くから、という予告をしてきていた。



「大阪で一泊するつもりですので、昼から翌日の昼まで、二十四時間ぶっ通しで一室にとじ込められて、ぶっ続けで責めて下さい。小



道具や貴具を使ったものでも、千鶴子は耐え抜く自信があります。……云々……」

「という便りがきていたので、なんとしてもこの遠来の客を十二分に、もてなさなくてはなるまいと考えている。」

さて、一足先に東京から前田真知子の方が京都へやってきた。

「もしもし、塚本さま、いらっしゃいますでしょうか？」

齒切れのよい前田真知子からの電話を受けとって、私はその上品な言葉遣いに、思わず酔ってしまった。

「いらっしゃいます」という敬語をなんの淀みもなく日常語として使うこの若い女性に、私は敬意を表したい。

時間や場所の打ち合わせのためにしばらく電話で話したのだが、前田真知子の身についた教養と上品な物腰が、敬語づくめの会話となって私の耳に快く響いた。こうした話し言葉は、一朝一夕の附け焼刃では急に出来るものではない。その点、荒尾

慶子も上品な言葉遣いをする麗わしの女性であった。

大体、今の若い女性は、相手が自分より年上の男性であろうが、教師であろうが、親であろうが、敬語を使うという習慣は持ち合わせていないようだ。同僚や友達と話すのと同じような気持で話しているとしかとれない。

若くて美しい女性が、余りにも親しげに友人のような口調、言葉遣いで話しかけてくるので、こちらの方が一瞬、ある種の誤解を抱く恐れがあるほどである。

それは、さておき、私は何カ月かぶりで、前田真知子を責めることになった。

「もし夫として仕えるのなら奇巧の読者のような方を……」と言っていた彼女。（今まさに結婚適令期を迎えて、花ならば蕾が開いて満開になろうとしている頃合である。）

わざわざ東京から関西まで来てくれた前田真知子を、私は読者を代表して取材するのであるから、その責任は重大である。

私は助手のA君を伴って約束の場所へ赴いた。私は、嘗て関谷富佐子を責める際の助手を募ったことがあるが、A君はその時、応募してくれた読者の一人である。時折、道具の運搬やライティングなどを手伝ってくれてい

たのだが、勿論、自分の仕事を持っているので、その合間に手伝ってくれるのだから、なかなか自由な時間はとれなかったのだが、今回の前田真知子の取材には、全面的に協力してくれることになった。

柔肌に縄のあと

六月号の『思う様の記』で、提崎昭人氏は前田真知子の取材について、

「願わくば、前田真知子嬢自身の告白ばかりではなく、撮影した人のルポも知りたいものである。なぜなら彼女の告白からでは、撮影

の様子が、どんなものであったのか全然、見当がつかない。彼女の態度やなんかでも、やはり撮る側からでは受け取り方が違う点もあるだろうし、ぜひ知りたい。撮影されたのがどなたか知らないが、あるいは、塚本鉄三氏ではないかと思われる。ルポを書いて撮影の雰囲気を克明に伝えて欲しいものである」と言っておられる。

私は前田真知子が、始めて京都を訪れたときから、緊縛フォトの撮影を担当していたしそれに彼女に接してみても、非常に好感の持てる女性だったので、是非ルポ記事を書いてみたいと考えてはいたが、彼女はM女性の中では、珍しく筆のたつ方で、素晴らしい告白文を投稿しておられるため、私は単に写真を提供するに止めていた。他に、体験をペンにすることの出来ないM女性の方々も沢山おられるから、私は主として、そういった方々のルポ記事に力を注ぐことにしていたのだ。

だが、今回、前田真知子が上洛されたことにつき、再び私が彼女の緊縛フォトを撮影することになったのを機会に彼女のことを一筆したいという気持になった。

それというのは、前田真知子が京都に滞在している間、二日にわたって全裸の彼女を縛



り、そして、その姿態のかずかずをカメラに納めるという作業をしたのであったが、彼女の性格の故か、極めてリラックスした愉快的な仕事をする事が出来たため、彼女のファンに捧げるためにも、一筆したいと思い立ったのであった。

私が前田真知子の裸身を見たとき、ハッと感じたのは、以前より幾らか痩せたナ、という事である。大体、長身の彼女であるが、ゼイ肉が一層、落ちて、すらりとした感じになっていた。洋服を着ているとスタイルは抜群といっただろう。

以前の学生時代は白のブラウスに紺のスーツという清楚な服装で、如何にも大学生といった感じだったが、今回は赤い模様のふんだんに入ったミニのワンピース姿で、なりたてのOLスタイルといったところだ。しかし、彼女の持前の清楚さと清潔さは今でも、いささかも失われてはいない。

頭がよくてカンの鋭い前田真知子は、私がポーズの指示を口で言っただけで、すぐさま私の意図を推し量って、まことに絶妙な姿態をとってくれるので、長時間にわたる密室でのSMプレイだったのにも拘らず、疲れることが極めて少なかった。



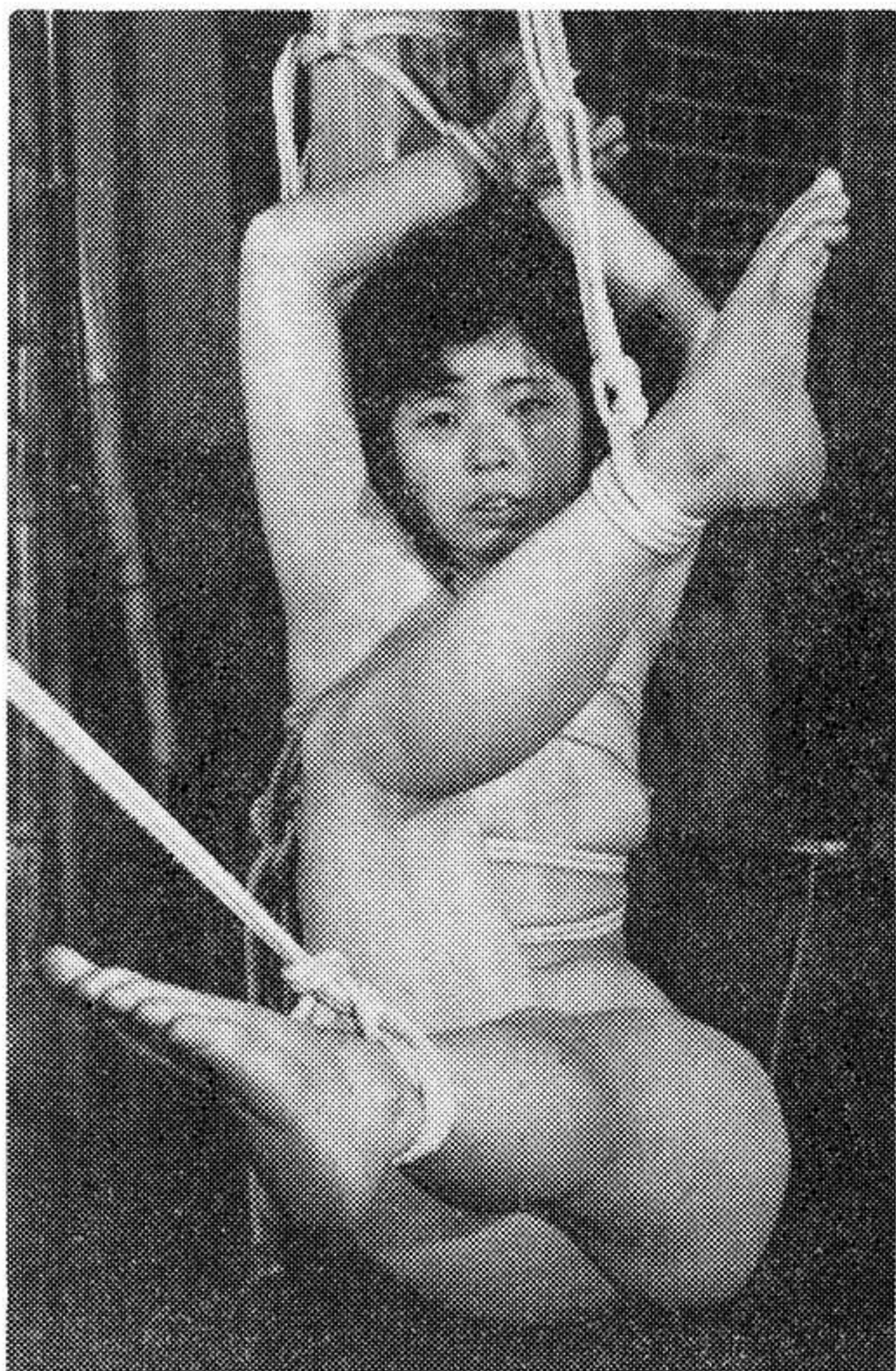
それと、もう一つ、私が驚いたことは、彼女は、自分の肌についた血のにじんだ縄のあとを、少しも気にしないことであった。

前田真知子は、もともと抜けるように色が白くて、肌も絹のように柔らかかった。

縛られることが好きだ——といって、全面的に体を投げだしてきた彼女に対して、調子

にのり過ぎた私が、最初から、麻縄や真新しい絹ロープを使って、思いっきり厳しく縛り上げた上で、極端なポーズばかりを求めてしまった。

その結果は、まことにむごたらしいもので二の腕、乳房の上下、背中などに、幾筋もの縄のあとが、白い肌を赤い絵具で彩るように



ついでしまったのだ。それも単に、縄のあとが窪むといった生やさしいものではなくて、明らかに、皮下溢血した血のにじみが、くっきりと白肌に印しているのだった。

縄を解いたとき、A君が、その血のにじんだあとを見て、

「こりゃヒドイ。皮下出血だ。どうしよう」

と、言ったので、私も始めて気がつき、背

中の方は彼女には見えないので、乳房の上下と二の腕の縄のあとを指さして言った。

「こんなにヒドイ縄のあとがついたけど、もう中止しましょうか」

それに対して彼女は、いともあっさりと

「いや、いいんです。すぐとれますから」

人ごとのように、なんでもないといった風に言ってくれたので、私はホッとした。

大体、純粹のM女性といえば、自分の肌を傷つけることには、余り意に介しない人が多いのだが、私の想像では、むしろ、傷つけられることに対して、一種の快感を覚えるような傾向さえ見受けられた。

前田真知子も階段を踏みはずした時に打ったといって、青黒く変色している膝頭をして、いたが、私なんかは、美しい脚を怪我して、これは惜しい——と思って、どうしたのだと心配して訊ねてみたが、本人は一向に、そんなことは気にしていない風で、「ころんで打ったのですわ」と言っていた。

中河恵子なんかに、私は綺麗な肌に傷をつけないように、よく注意したのだが、切り傷や火傷を、よく肌につけて、自分では余り気にしていないようだった。

こうしたM女性の心理は、研究すれば面白いと思うが、数え挙げれば、もっと、いろいろのデータが集まるかもしれない。

とにかく、私は前田真知子の一言によって救われ、勇躍して、次のアイデアに対して邁進していったのである。

密室でのSMムード

この部屋はホテルでの最上階で、ぽつんと

孤立したように一部屋だけ離れていた。エレベーターを降りた、すぐ傍に階段があつて、部屋へ通ずる扉を押すと廊下がある。

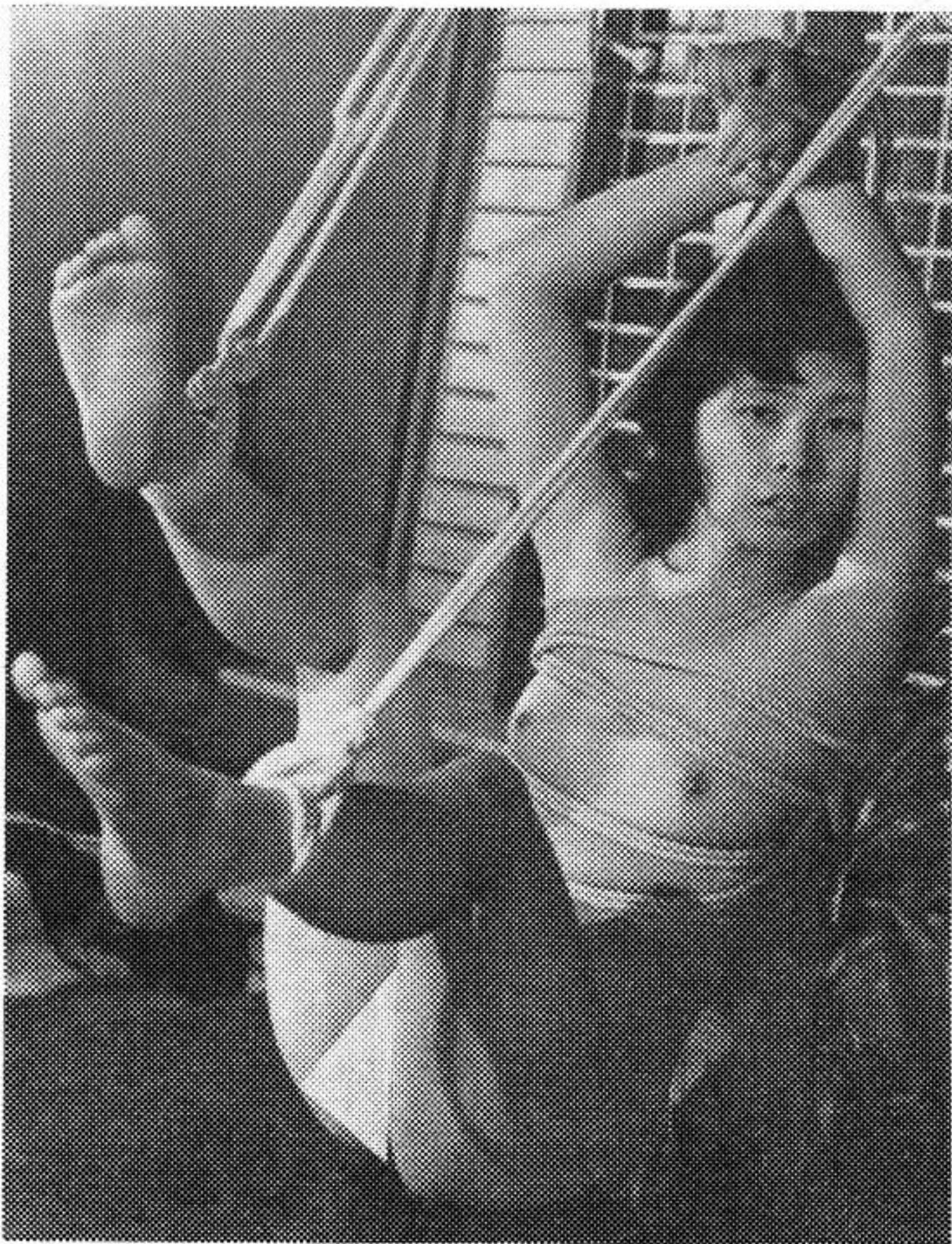
浴室やトイレは、その廊下から行けて、部屋は、その反対側の奥にあつた。いわば離室式^{はなれ}になつて独立した密室である。

「火事になつてエレベーターが止まり、階段が煙突のようになつたら怖いな」

と、話し合つて、廊下の中程についているドアを押してみたところ、屋上へ出ることが出来た。

「万一の時は、ここへ逃げ」
て、梯子車がくるのを待つより仕方がないなあ」と、二人で話し合つて、屋上から明るい空を見上げた。

周囲を壁でとり囲まれた密室から、青空の見える、この屋上へ出てみると如何にも、のびのびとしている。前田真知子も、バスタオルを腰に巻いた白い素足のまま、ザラザラし



たコンクリートへ降りてきたので、A君があわててスリッパを、とりに行く。

周囲から覗かれるような高いビルはないのだが、青空の下では、密室と違った開放感があつて、なんとなく落ち着かない。

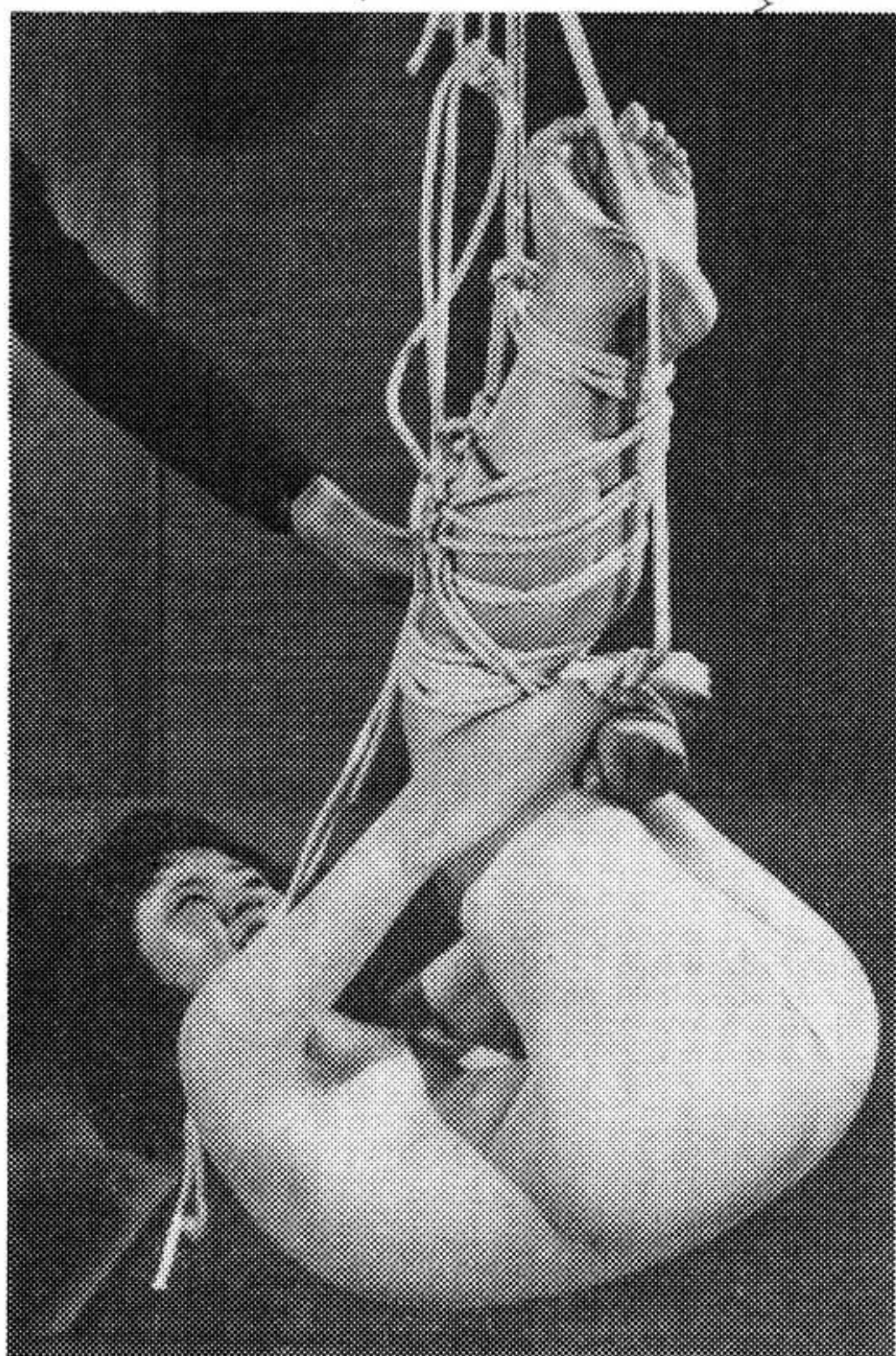
どこからか見られているのではないかと、という不安感が、絶えず襲ってくる。

「よし、ここで写してみよう」

私は、そう決心して、A君に縄の束をとりに行ってもらつた。私の手にしたのはゼンザブロニカ、レンズはニッコールの75ミリ。A君が前田真知子のバスタオルを剥いで縄がけしている間、私は露出計で光量を計つた。廊下から出た時は、非常に明るく感じたが、雲が案外、厚いのか、一二五分の一秒でF5.6の絞りになる。

全裸のまま、その真白い肌を素直に縛らせた前田真知子は、着衣の二人の男に挟まれるようにしてザラザラのコンクリートの上を歩かされている。今はスリッパも脱がされて素足のままである。まるで処刑場へ連行される女死刑囚そのままである。

ガラスの破片や錆びた釘などのちらばっている粗いコンクリートの肌の上を、形よく伸びた白い素足が異物を避けようともせず、歩



を運んでゆく。

私はカメラを首から提げたままで彼女から離れて、そんな、しおらしい姿に狙いをつけて二枚、三枚とシャッターを切ってから、A君にポーズを注文する。

コンクリートの上へ、じかに肌をつけさせても、前田真知子はイヤな顔一つしない。というより、何か、そうされることに、喜々と

して従うといった風さえ見える。

私がA君に対して、次々とポーズを変化するように指示するのだが、いち早く、私の意図を察して積極的に行動してくれるのは前田真知子であった。

白日の下、柔肌に喰い込んだ縄で縛られた裸身をさらして、彼女はあられもない緊縛ポーズを次々と、とらされていった。

引き起こしてみると、真白いお尻にコンク

リートのかけらが、種々と、いくつもついていて肘なんか擦れたように赤くなっている。

彼女は平気のようだったが、私は、いかにも痛々しくなって、この屋上での撮影を一応終えて、再び密室へ戻った。

縄を解かれた前田真知子に、休憩しようかと尋ねたが、「いいえ、このまま、休まずにやって下さい」という返事だったので、一旦解いた縄を、再び柔肌にかけてゆく。肌という肌は、縄のあとやコンクリートの擦り傷がいっぱいについている。

ノースリーブのワンピースを着ていたようだが、二の腕の縄あとや肘の擦り傷は、どうするのだろう——と私は心配しながら、縄をぎゅうぎゅう、締めつけていった。

縄を、ぐうーっと締めるたびに、細くなってゆく彼女のきゃしゃな身体の奥底から、しぼりだすような快感が、にじみ出てくるように私には思えた。

抱きしめてやりたい気持が起こってくるが責めの方は若いA君にまかして、私はカメラの方へ戻ってシャッター釦を握った。

伸びやかな脚を高々と掲げさせて、柔軟な肢体を二つ折りにさせると、ぐぐぐぐ——と



息のつまりそうな緊迫感が、責める人、責められる人、そして、目に見えない糸によって結ばれたカメラとの間に、火花と散って、絶妙のシャッターチャンスが訪れた。

責められることに陶醉しきった前田真知子の表情のすべてが、読者の方々の諸々の眼を代表してカメラのレンズが、ぱちちりと捉えていた。密室の中は熱気でムンムンとし、私は思わず額の汗を、ぬぐった。

前田真知子は責められているときまことに、うまく素足の表情を出す女性である。ぎゅっと責めたてたとき、その最高の歓喜を表わすように四本の足の指は内側へ曲がり、拇指だけが、反対側に反りかえるのだ。勿論、それと共に、全身の表情もたまらないような魅力をふりまく。その一瞬の媚態を、千分の一秒のシャッターチャンスで捉えようと私は狙いをつける。しかし、いつもそれは成功するとは限らない。いや、むしろ駄目なとき、失敗するときの方が、かえって多いのである。

縄で厳しく縛られた女体を、右に左に思いのままに翻弄して、その時々、かもし出す全裸の肢体の微妙な変化を、次々とキャッチしてゆくのは、言うは易くして、実際は仲々困難なことである。五〇〇ワットの電球に照らし出された緊縛女体の動きを、この生きた目で、じかに眺めている方が、その陰翳を、いかにもよく捉えることが出来る。だから、写真だけで説明出来ないところは、どうしても拙いペンに托するより外、仕方がない。

私はシャッターを切りながら、前田真知子に対して意地の悪い質問を浴びせる。

「私、存じあげませんわ」
彼女の上品な返事を聞いていると、私は途端に楽しくなってくる。東京の中流家庭の家に生まれたという前田真知子は、小さい時から家庭でそういった言葉を、きつと使っていたのであろう。全くイタについていて、彼女の口から飛び出すかぎり、そうした「ごさいます言葉」が、奇異には感じないのだ。

そして彼女は、私たちの冗談や悪ふざけを少しも悪意には、とっていないのだ。至極真面目に、懸命に答えようとしているのは、むしろ、いじらしいくらいである。

こんな純真で、汚れを知らぬ処女を、から

かつてはいけないと、私の心は反省する。だが、別の悪魔の心は、もっと悪どい、いたぶりをやれと、耳元で囁きかける。

天井の四隅から冷房のきいた空気が、たえ間なくスースーと吹き込んでくるが、まわりを壁で仕切られたこの密室には妖しい熱気がムンムンと満ち溢れている。前田真知子の裸身から発散する若い女体の匂いも、その中に、きっと混じっているに違いない。

縛り方を変えるために、時々縛り直しはするが、自分の口からは、決して縄を解いてくれとは言い出さない前田真知子——。

私は柱の前に連れて行って、彼女が最も羞恥にまみれ、悦虐にむせび泣く脚挙げ開股のポーズをとらすべく、左右の足首に縄を掛けて上へ引きあげていった。

畳の上へ縛ってところがしておいても、彼女の身体は決して、ドタリと長く伸びたような格好にはならなかった。必ず、身をくねらして、身体的一部分を畳から浮かし、イキのよ

い鯉のような姿態になった。

足首の縄を引きあげても、すらりと長い肢



が少しの抵抗もなく、するすると上がって、残った胴体や上半身が、それにつれて、如何にも羞恥に耐えきれない風情を見せる。

顔の表情、後手首や指先の変化、お臍を中心とした腹部の肌の微妙な動き、ぐっと力が入った太股の筋肉のケイレン。引き挙げられた足首に連なる足の指の力のこもり方——。

私はそういった女性の陰翳を、じっと注目して見ていた。カメラにとって、果たして私が今、じかに見ている、この感じが、そのままキャッチ出来るだろうか……と、私は、その効果を計りながらも、責められる女体の動きが、これほどまでに美しいものか——と、感心しながら、うっとり眺めていた。

私の心は、なんととはなしに楽しかった。

前田真知子が、自分の心で悦虐を感じているのか、どうか、それは私にも、わからないが、これほどまでに全面的に協力してくれるということは嬉しかった。

東京から、わざわざ京都まで出てきて、そして、このように縛られた裸身をカメラの前に晒すということは、よくよくのことであるに違いない。彼女は、京都の街が好きだから京都を訪ねたついでに、責められているのだと言うかもしれない。でも、それは賢明な彼女の口実ではないだろうか。

今日も、現に京都めぐりをする前に、こうして責めの祭壇に登っているではないか。

片方の脚ばかりか、残っている脚も、ぐぐぐと、引き上げておいて、意地悪く、真一文字に股裂きをかけてみた。A君に先ず手本を示しておいて、私はカメラに戻ってシャッターを切るといふ運びになっていたのだが、そうした責めの手本を繰り返しているうち、私はいつしか、そうした羞恥責めに熱中していった。

そうした私の心の奥底まで見通すように、前田真知子の澄んだ瞳は、じいっと——私のそんな行為を見守っていた。

何も言わないで、只じいっと見つめている清らかな目。私は、その目に射すくめられたように、一瞬たじろいだだが、思い直してA君に、きびしい声を掛けた。

「何をボヤボヤしてるんだ。早く、手伝わん



か」

手持ち無沙汰で、ぼんやり立っていたA君は、何を手伝うのか一向にわからないまま、

前田真知子の白い脛に、とりついていった。

白いイケニエは、今や目をあざむく明るい電光の中に浮かび上がって、女体の神秘のすべてを、さらけ出していた。

前田真知子の清らかに澄んだ瞳が、どのよ

うに変化するか、私はそこに大きな期待を持って責めたてた。これでもか、これでもかと責めに責めぬいた。

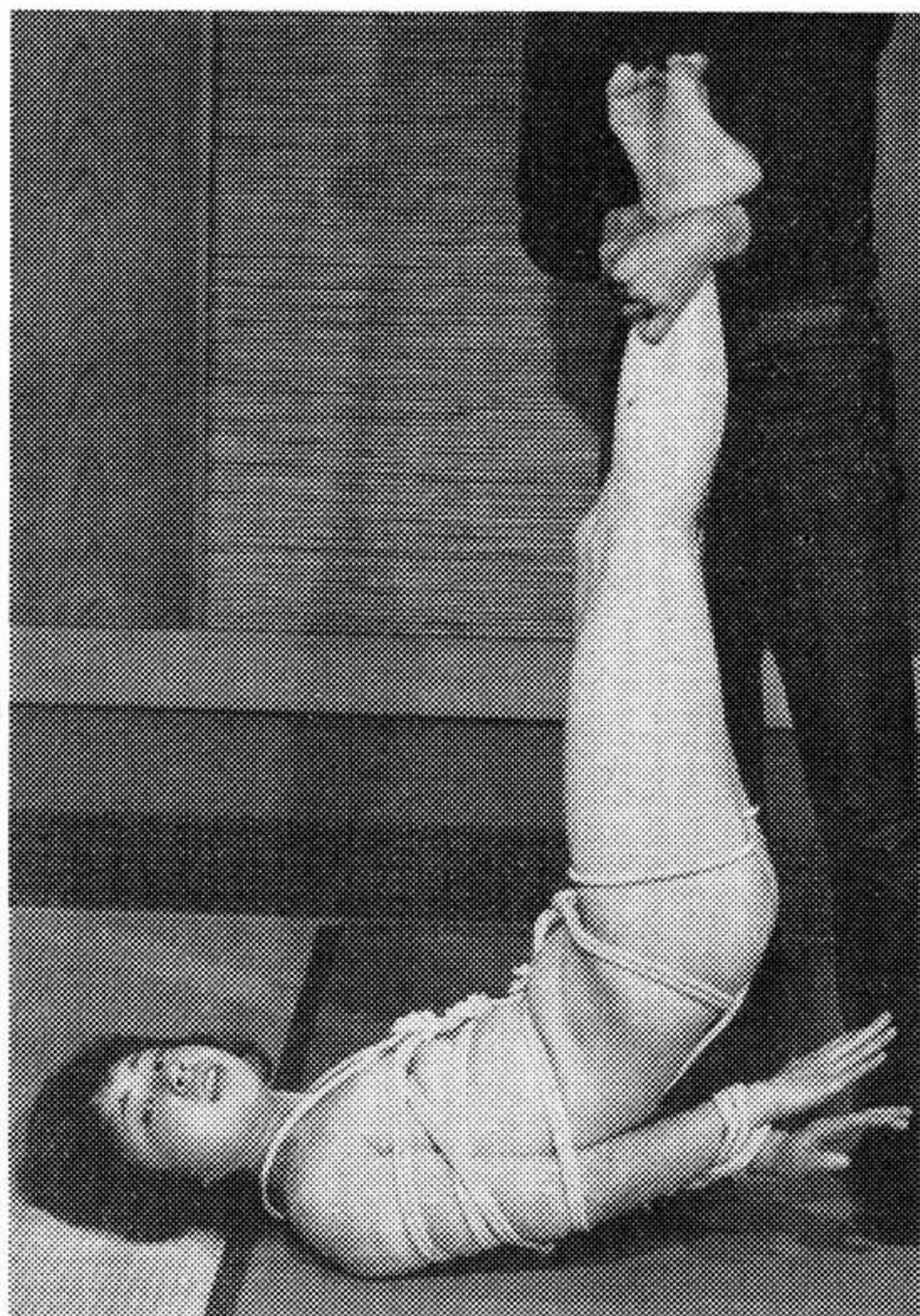
A君を促して、そんなシーンのかずかずをカメラに納めさせた。

長い時間のように思ったが、それは案外、短時間の出来事であったかもしれない。と言うのは、フィルムにして僅か数枚、消費した

ほどの間であつたから――。

吊られゆく女体

私はA君に前田真知子の縄を解いてもらつよう頼んでおいて、汗を流すべく浴室へ飛び込んだ。上がってきてみると、すでに、すっかり縄を解かれた前田真知子が浴衣をまとい



膝を揃えて、卓を前にして坐っている。

私は冷蔵庫からビールを出してA君へ、オレンジジュースを前田真知子へ渡してから、「これから少し休んで吊りをやろう。彼女は背が高いから、頭がつかえてしまって、逆さ吊りは、とても無理だろうから、手と足をこのように一緒に揃えておいて吊るんだ。手

首と足首が少し痛いかもしれないが、君だったら、きっと辛抱してくれるだろう」

私は二人を前にして手ぶりで格好を示してこれから行う吊り責めのポーズを説明した。「私だったら、休まなくなつたって、いいんです。このまま、やって下さったら……」

前田真知子は、そう言つてジュースを飲みさしたまま、あわてて浴衣を脱ぎかけた。その時、チラリと私の目に入った彼女の白い二の腕に、くっきりと皮下溢血した縄のあとが二筋、三筋、まるでミミズの這つたように残っている。それにも拘らず、一休みもしないで、更に吊り責めに、この女体を提供しようと言うのか。

私は、そのすさまじい気魄にうたれて、直ちに立ち上がった。

「それじゃ、これから、すぐやるか」

カメラを持って、位置をきめてからピントを合わせ、A君と協力して前田真知子の形のよい脚に白いロープをかけてゆく。

触れれば浮雪の溶けるような、やわやわしい胼である。縄をぐるぐると巻いてゆくのはなんとなく、むごい気がする。この縄に彼女の全体重がかかってくるのだから、ただ、巻いておくだけでは駄目である。肌に喰い込む

程、力をこめて締めつけておく必要がある。

このまま足首を吊れば、見事な逆さ吊りが完成するのだが、前田真知子は身長が一六三センチもあるから、この低い天井では、とても無理なのだ。頭が畳につかえてしまう。

窮余の一策として、両手首を膝頭のうしろで括っしておいて、足首を鴨居へ吊った。

ぐっと女体がしなって幾分、下降したが、それでも彼女の背中は畳の上五十センチのところで止まった。足首を縛った白いロープが緊張して縄目が石のように固くなっている。

△辛抱、出来るかな——▽

彼は案じて前田真知子の顔を窺った。

一言も言葉は洩らさず、じっと奥歯をかみしめて苦痛を耐えている風であった。

私は小走りに駆け寄ってカメラを手にすると、ファインダーをのぞくのも、もどかしく第一回のシャッターを切った。

吊られた女体は吊り縄を中心にして、ゆっくりと右回りを続けている。

お尻が来たとき、頭が来たとき……。私は同じアングルで五回、シャッターを切った。側面になったとき、A君に合図して回るのを手で支えて停めさせた。

前田真知子の女体は依然として足首を上

して吊り下がっている。密室の中で、

そこだけが、ぼーっと白く霞んだように、にじんできているのだ。私は白昼夢でも見ている様に、その白い物体が揺れているのを、ぼんやりと眺めていた。

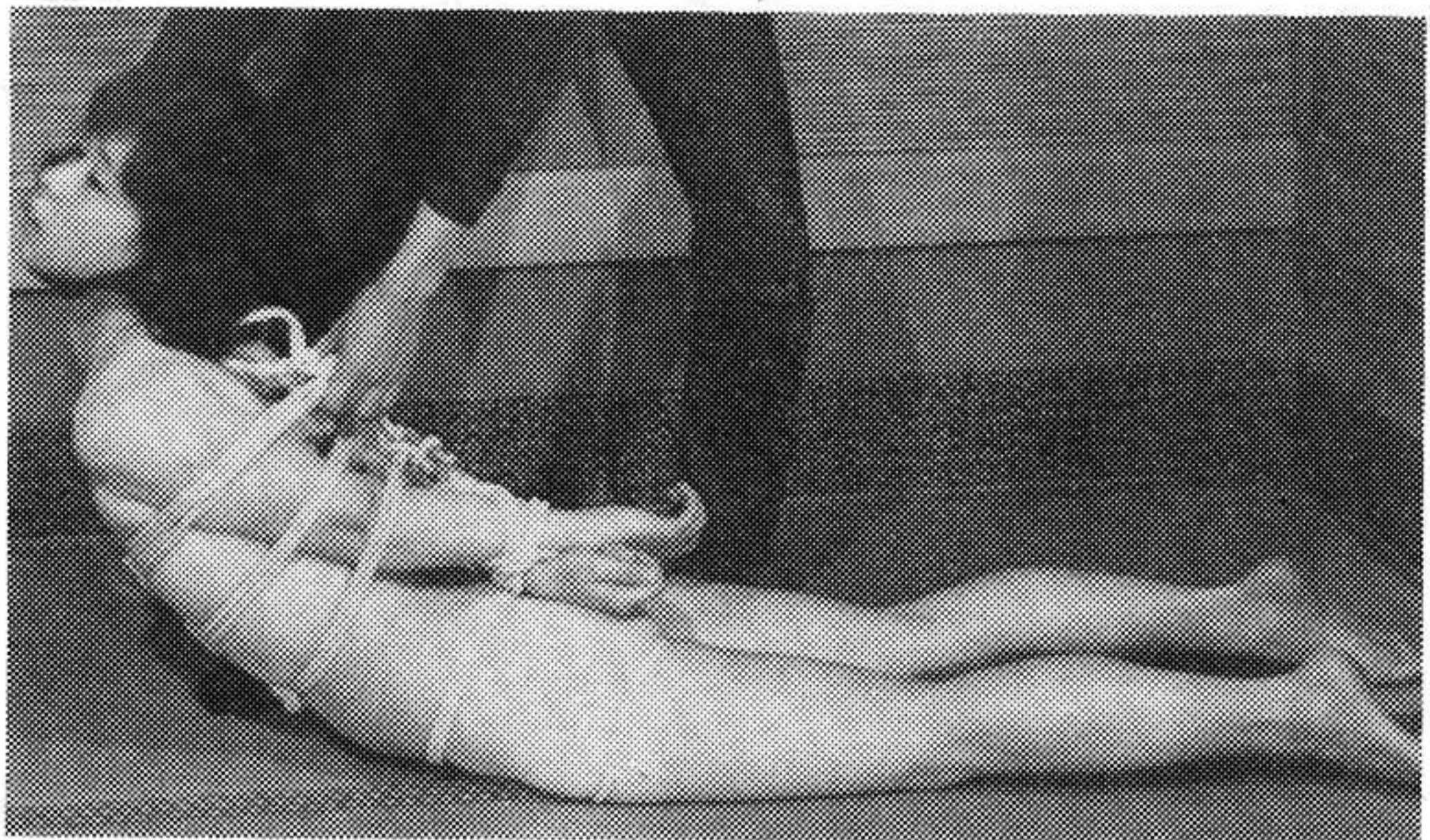
A君が故意に回転させているのか、或は自然に縄を中心に戻っているのか女体は、ゆっくりと吊られたまま、揺れつつ、頭を見せたり、お尻を見せたりしている。

昔、『駿河問い』という女に対する責めがあったそう。手足を一緒に括って、所謂、『猪吊り』という格好にしておいて、吊った女の身体を、ぐるぐる回して責めるのだ。

この責め方をされると、どんな強情な女でも、すべてを白状すると言われているが、どんな苦痛があるのだろうか。あの不死身といわれるプロレスラーでも、エヤー・スピン・ホールドをやられると、目がまわってしまったって、忽ちホールを奪われるようだから、まあ相当のダメージがあるのだろう。

「どうだ、もう降ろそうか」

写真を撮り終わった私は、吊り下が





っている女体に近寄って言葉をかけた。長い足の拇指がピンと反りかえって、彼女の苦痛を如実にあらわしている。脇腹から、にじみ出た汗が背中の方へ伝って、水晶のような玉を、いくつも作っている。

私は彼女の返事を待たずにA君に目で合図して、二人がかりで鴨居から引き下ろした。

縄目は汗を吸い込んで湿り、固く締まってなかなか解けそうにない。だが、前田真知子

の身体は畳の上で、ぐったりとのびるところか、ピンと張りきってイキのよいところを見せている。

三台のカメラで各四本宛、計十四本、フィルム枚数にして百六十八枚、撮ったことになるわけである。今日は、これで終わることにした。

洛北の光悦寺へ行きたいという前田真知子にはA君を案内につけてタクシー代を与え、

駅前のタクシー乗り場まで、送って行った。一緒に京都の旧蹟を案内してやればよかったのだが、私は夕刻から笠井奈保子と逢う約束があったので、二人と別れると、すぐとって返して大阪へ向かった。

明日一日、前田真知子は京都の郊外を回るという予定だそう。いわば、彼女にとって、八京都の休日Vになるわけである。そして明後日の午後は、再び私のカメラの前に立ってくれることになっているのだ。

奈保子のM性を探る

A君という格好のアシスタントがあったとはいえ、私は遠来の前田真知子を縛ってカメラに納めるという数時間の労働で、いささか疲れていた。その上、京都から、すぐ取って返して大阪へ戻らねばならない。

笠井奈保子から——今日は義母の家へも姉の家へも泊まらないでもよいので、夜通しでも責めてくれてもよい——と、以前から言われていて、私もOKしていた日である。

疲れているという理由だけで断わるというわけにはゆかない。

折角、その気になって、意気込んでいるのだから緊縛一番、奮起しなければなるまい、



といて、約束の時間まで、そう間もないので徹夜のSMプレイに備えて、ちょっと昼寝しておこうというわけにもまいらない。

大体、笠井奈保子というM女性は、今年になつてから、縛られた女性の写真を見せてほしいという通信を私に寄したことから文通するようになり、やっと三月になつて逢う機会が出来、そうして、最近になつて、どうに

か、緊縛フォトラしいものが撮れるようになったのであるが、彼女のM性については、私にしても、まだはっきりしたものを掴んでいけるわけではなかった。

太股からヒップへかけて、たっぷり肉のついた笠井奈保子の女体を見ていると、如何にもポリウムがあつて、脂の浮いていそうな肌は、淫らな感じさえ受けるのだが、本人

は至って恥かしがり屋で、色白の頬を、すぐにでも真赤にしてしまうのである。

約束の場所で落ち合つて一緒に夕食を摂りホテルの門を潜つたのが八時すぎであつた。こんな時間に來たのは初めてであつたが、驚いたことに部屋が満室だということなのだ。すぐ、掃除をさせますから、暫く応接室の方で待つて下さい——。と案内嬢がいうので、正面玄関の向かいにある、その狭い控え室で待つことにした。

ドアを少し開けて、私は玄関の方をのぞきながら、帰つてゆくアベックを、一組、二組と品定めしながら眺めていた。

笠井奈保子は、待ち切れないといった風で立ったり坐ったりしながら、盛んに私に対して、この前に写した写真のことなど話しかけてくる。六月号に載つた自分の写真のことをああだ、こうだと言っているのを、私は適当に聞き流して、アイツチを打ちながら、目は玄関の方へ向かっている。

そこへ、案内の若い女の子がやつてきた。二十才ぐらいか、小柄で痩せ型である。こんな子を縛つたら面白かろうに——と、洋服の上から裸身を想像して眺めていると、「お泊りだったら、もう少しお待ち下さった



ら、広いお部屋も空きますし、それに九時からでしたら、ずっとお安くなりますが……」

その案内嬢は親切そうな口ぶりで言う。どうせ明日の朝までいるのだから、三十分やそこらは、どちらでもいい。

広い部屋があくのだったら待とう——と返事をする。

玄関を出て行くアベックそして入れ替り立ち替り、玄関に立って案内を乞うアベックの姿が面白くて、私はドアの隙き間から、さまざまな服装、スタイルの二人連れの様子を楽しく眺めていた。

大きな靴二つと三脚を置いてあるので、脚を十分、伸ばすことも出来ず、笠井奈保子は不満そうに「晚いわね」とつぶやいて、窮屈そうに脚を曲げて膝の上に手を置いている。

やっと、さっきの案内嬢が、「お待ちせしました」と、迎えにきた。靴を持ち上げてカサの割に重いのでびっくりする。

「もう少し広い部屋があるのですが、その方は、まだ、ふさがってしまっていて……」

私が広い部屋だ——と盛んに言ったので、案内嬢は気の毒そうに、言いわけをする。二間つづきは二間つづきに違いないのだが、そう広い部屋というわけではない。案内嬢が帰ってしまうと、笠井奈保子は、洋服のまま、蒲団の上に仰向けにころがって、「ああ、ねむい——」と言って、大仰に伸びをする。

「今頃から眠いなんて言って、どうしたんだい？ 今日徹夜でプレイするって、言ってたんじゃないのかい」

「わたしね、姉さんと喧嘩したの。だから帰らないつもりなの」

私の皮肉めいた言葉を、はぐらかすように別なことを言いだした。私も流石に疲れを生じ、それに彼女の言葉じゃないが、正直なところ眠気さえ催してきた。

しかし、このまま寝込んでしまうわけにはいかない。尚も、私に対して物言いたげな笠井奈保子を、せき立てて浴室へ追いやり、撮影の準備に、とりかかる。

徹夜でプレイを展開するのだから、あわてることもなからう——と考えていたら、時計の指針は、すでに10時を示している。

そこで私は、入浴をすまして上がってきた笠井奈保子に対して、有無を言わず、準備運動もなしに縛りに入ってしまった。湯で濡れた首筋の髪の毛が、縄を捌いている私の手の甲に、べつとりと、まといついてくる。

笠井奈保子も、もう相当、縛りには慣れてきている、筈である。しかも、私という人間に対して最初の頃を思えば、むしろ馴々しくさえなってきた。

さっきのように蒲団の上へ仰向けに、ひっくり返ったままで私に話しかけているのなんかはその一つの証左であろう。

私はロープをしごいて、肉づきのよい腕、胸、手首を締めつけていった。ふっくらとした手首の感触、そして濡れたような指、脇腹の肌ざわりが妙に生々しく感じられる。皮下脂肪が、たっぷりについているような柔らかい膚は、縄目を喰い込ませながらも、私の手元に弾力性のあるタッチを伝えてくる。

縄が妖虫のように、しっかりと柔肌を捉え



てゆくと、さっきまで眠いと言っていた笠井奈保子ではあるが、俄然、水を得た魚のように、目がイキイキと蘇ってきた。

口に猿ぐつわを噛まして引き絞ると、ようやく顔面にも被虐の様相が色濃くあらわれてきた。もともと、表情を演技力で表現しようという能力は、持ち合わせていない女性であ

る。そのかわり、自分の心の内面の動きは、正直に外部へ出してくれる筈だ。

殊更、縛られた手首が痛くなるよう、身体を動かしてやると「う、ううう」とかすかな呻き声を、洩らして極端に顔を、しかめる。そうになると、もっともといじめてやりたいという気持ちにかられる。どちらかといえば、笠井奈保子は、肢体をはじめとして身体全体について、責められても無表情である。

縄目をきつくして肌を痛めつけて、表情を出させることも出来るが、最近の傾向として苦痛を与える——という責めよりも若い女性としての恥らいを求めるための羞恥責めの方が、より一層、効果的のようだ。

右足首に縄を掛けて、その縄尻を鴨居に通して引き上げた。立ったままの笠井奈保子は右脚を一直線に、水平になるまで挙げて、「イイイ、イ、痛いわ。もう、これ以上は挙

がらないわ。止めて……」

と弱音を、はいた。左足一本で支えて暫く

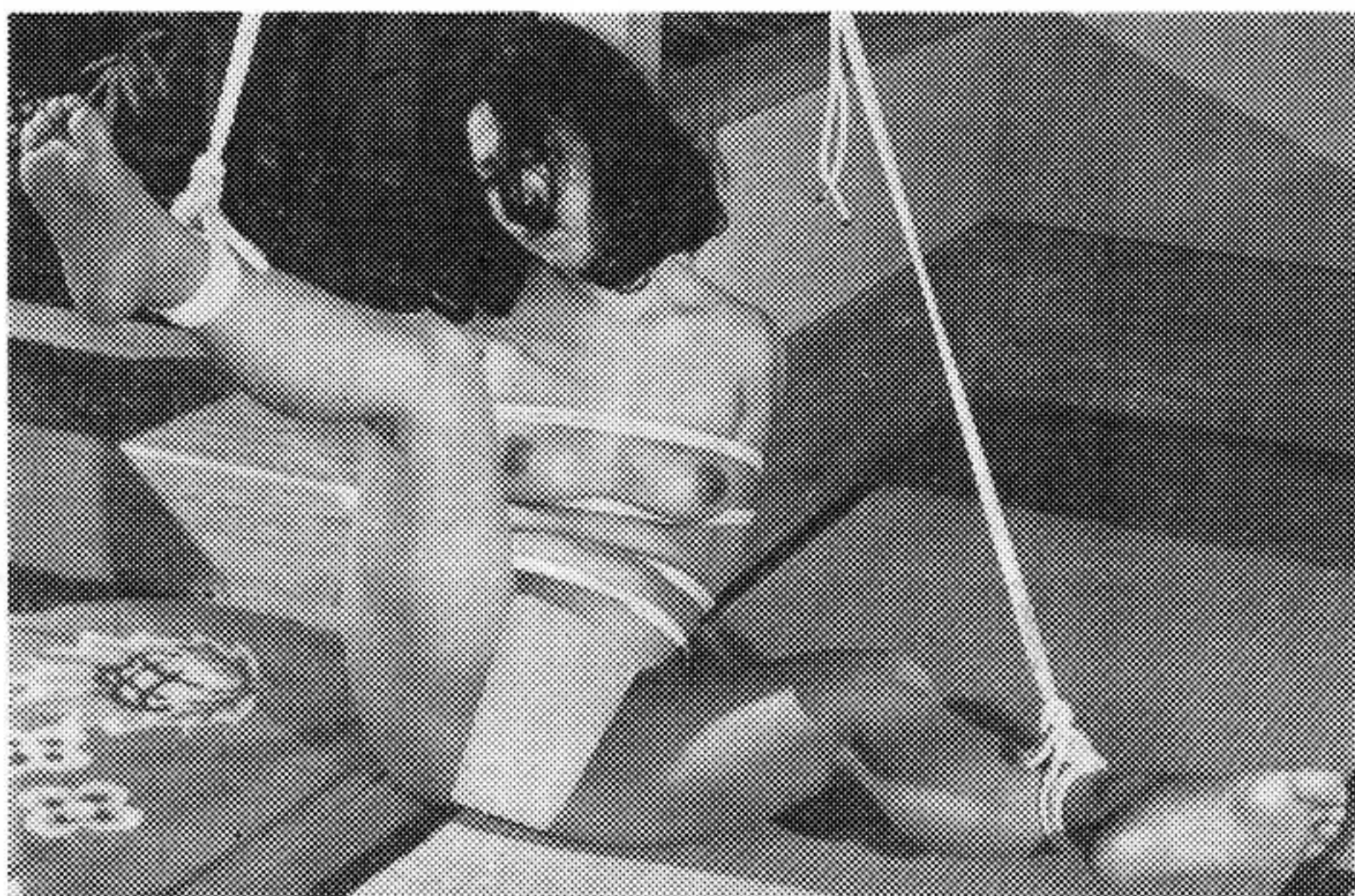
立っていたが、安定を失って、よろよろと、よろめいて、「ああ、ああ、倒れる！」と叫んで左の一本足を軸にして回りだしたので、私は、す早く上体を受けとめておいて、畳の上へころがす。上半身はころがっているが、右足首は依然として吊られたままなので股を極端にまで開いた、あられもない格好で、女体の神秘の泉が、まる見えである。

上半身の安定を保とうと、身体をよじっているところを、ローアングルで一発、ストロボの閃光を放つ。ロングで、アップで思うさまにシャッターを切ってから、奈保子の表情を、じっと見守る。

真白い太股のポリウムが素晴らしいこの見事な、股のツケ根と臀部の逞しいところを強調して、なんとか縛りによる女体美を写してみたいと思った。かなりの短焦点だから、75ミリと80ミリのレンズを装着したカメラで下半身の方から狙いをつけておいて、ピント

グラスをのぞく。

自然の色そのままの天然色で、ピントグラ



スの上には、笠井奈保子の縛られた美しい女体が、四角いカットの中に区切られて浮かび上がっている。AとVが、丁度トリミングされた一劃の中心にくるように置いて、そこにピントを合わせてシャッター釦を押した。奈保子は、今や、うっとりとした表情で、すべてをさらけだしてしまった爽快さのなかで陶酔感を身体の芯から味わっているようであった。

私は奈保子に対して、もっと強い羞恥感情を与えてやりたいくて、更に残っている足首にも縄を掛けておいて、両足が八の字になるよう反対側へ引いた。彼女の足は抵抗するどころか、むしろ協力するように縄の引かれるままに、もうこれ以上、開けないというところまで、思いきりよく、開いた。

私はカメラを操作することよりも、奈保子の女体に縄を掛けることに熱中していた。あれほど恥かしがり屋で、緊縛写真を見ただけで、忽ち顔を真赤にしていたのに、二月もしないうちに、この変身ぶりは、またどうしたことなのか。まことに女は魔性というが——その魔性ぶりを、こよなく発揮しているのが今夜の笠井奈保子であろう。

私は休むひまもなく、次は白いロープで菱

縄縛りに上半身を、きっちり縛り、余った縄尻で太股のツケ根を締めつけた。絹のように、やわらかくて白い、この太股を縄で絞り上げるということは、私にとっては、二つの目的があった。

その目的に従って、縄を肌に喰い込むように締めつけておいて、私はレンズをF16に絞って、おいてストロボを一米の距離に近づけ、手持ちでピントグラスをのぞいた。

手術台にのせられた奈保子は、すっかり観念の目を閉じて、じっと処刑の刻を待っているといった素直な態度であった。そこにはSとMの火花を散らす激しい一瞬があった。

心の中では、きつと燃え上がっているのに、違いないのだが、責めれば責めるほど、却ってそこに安住の地を求めて、無表情になってゆくのもかもしれない。時折、顔面には、巧まらずして苦痛の翳が走るが、それとても、何百分の一秒かのシャッター・スピードでも捕捉できない早さで変化していった。

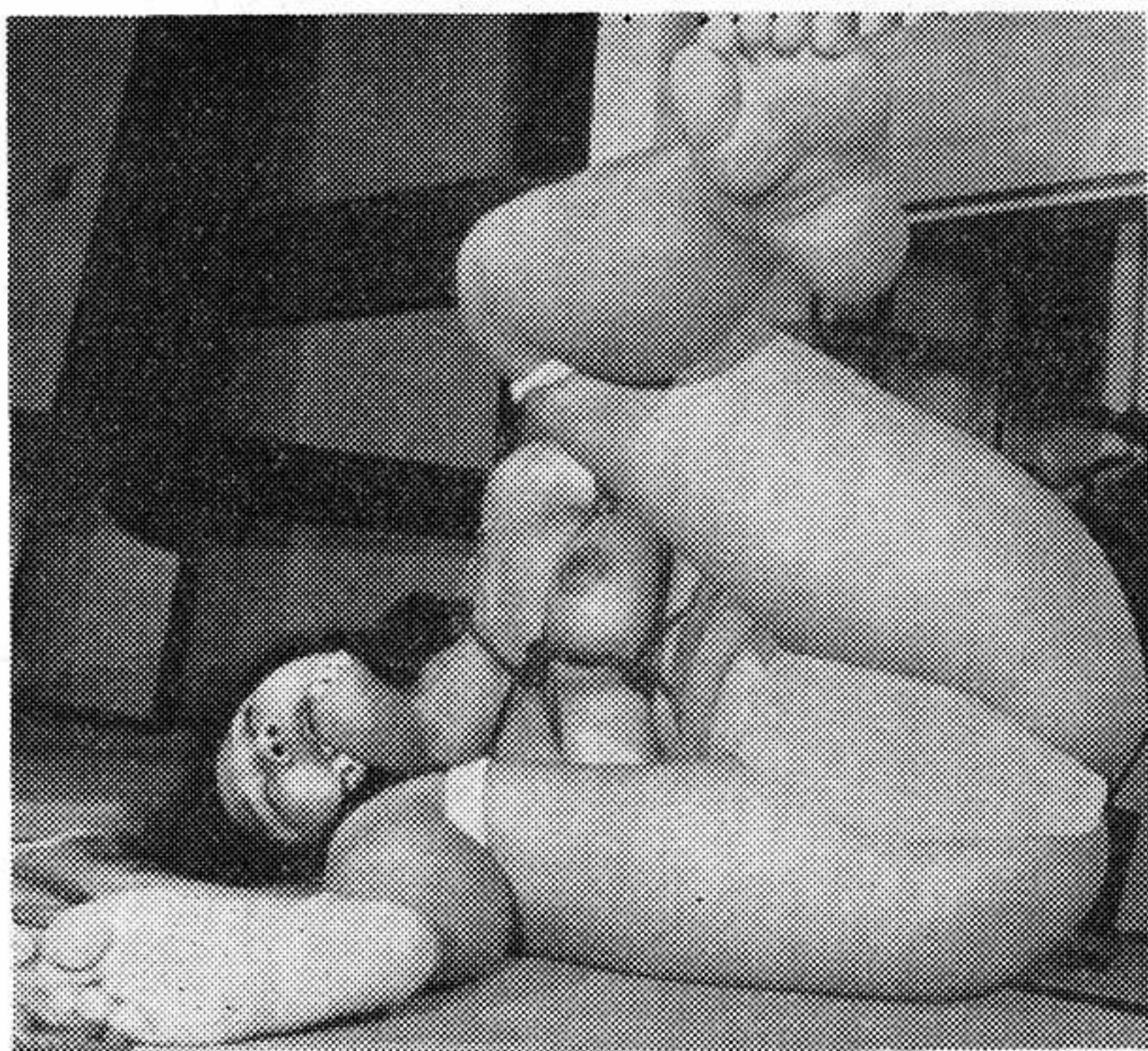
油がのっていると、私も疲れを忘れてSMプレイのなかに没入することが出来た。白いロープと麻縄を交互に用いて笠井奈保子の豊かな女体を、さまざまに縛り上げた上で女体の神秘が、縄で縛られることによって、果た

して、どのように変化するかを興味を以て具に観察しながら、操り人形のように思いのままになる女体を、粘土をこねまわすように、いたぶっていった。

笠井奈保子は、縛られた身体を、私のなすがままにまかせて、まるで、そうされることが当然のように、易々として従っていた。

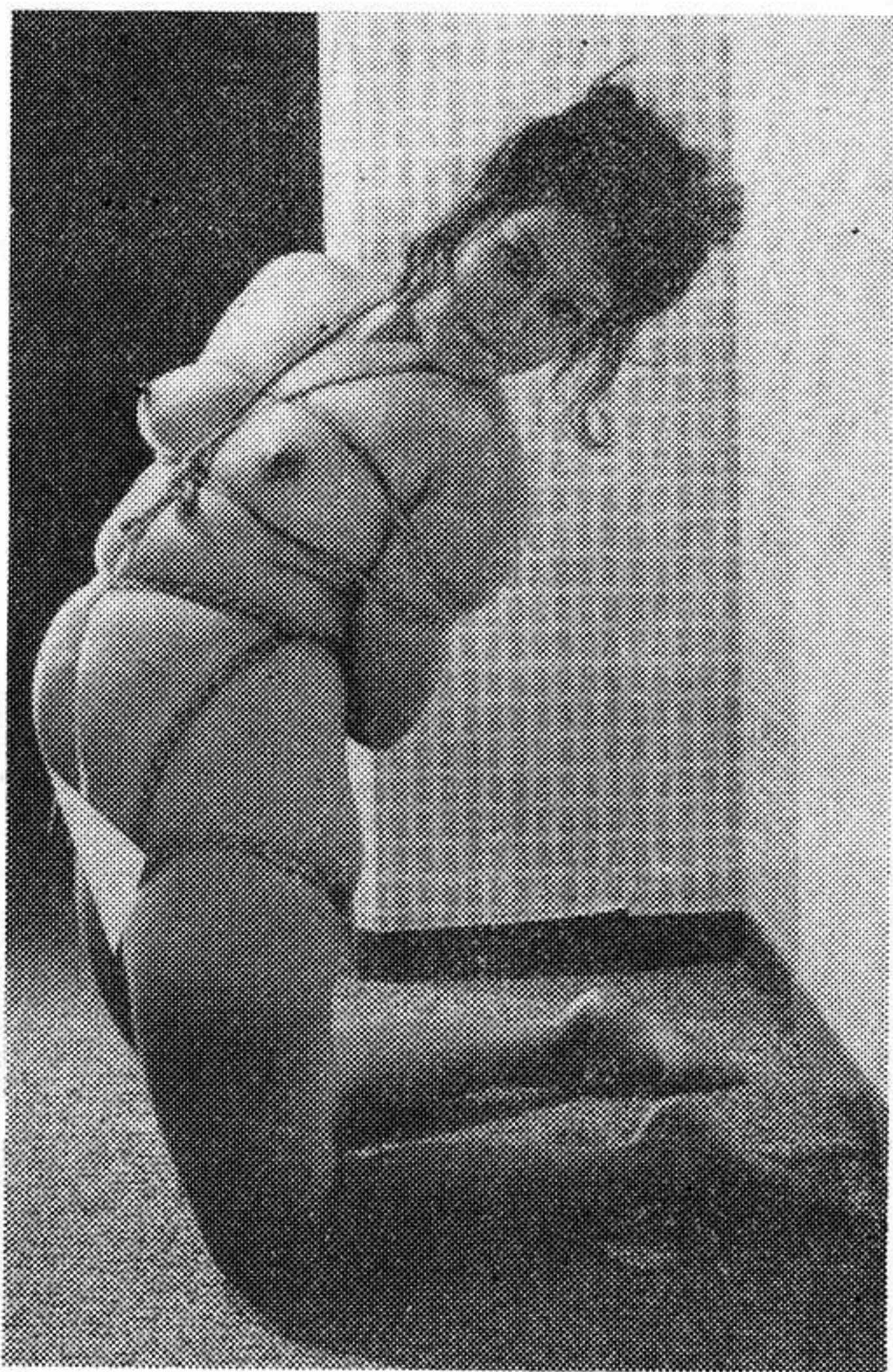
縛られた女性の写真を見るのが、好きだという——笠井奈保子のM性とは、果たして、どのようなものなのか。自分自身でも縛られることが好きなのか。私は、その謎をこの徹夜の責めで、きわめたいと思った。

情性で只、単に責めているだけではなくて彼女のM性を、ここにさらけだして、ぐうの音も立てさせない——という究極のところまで、見きわめたいと考えた。



二転——三転、縛り方を変え、ポーズを変えて、私は笠井奈保子を責めていった。

時折、彼女の秘密のベールが、どのような状態で変化しているかを目で打診しながら確かめ、そして、その都度、私のS的心情は妖



しく、おののくのであった。

「やっぱり、そうなのか——」

その次に起こるであろう爆発的な変化に大きな期待を胸に抱きながら、私はコブのようになつた堅い結び目を解いていた。

十二時は、とくに過ぎてゐる。

疲れもさることながら、疲労よりも睡魔の方が、目と脳を、じわじわと襲ってきた。

敷いたままになっている蒲団の上に、うつ

伏せになって休もうとしたことまでは、かすかに知っていたが、それから後は白河夜舟と寝込んでしまった。

足もとの方から、ひんやりと迫ってくる冷気に、ふと目を覚ましたが、自分では五分ぐらい眠っていたかと思つていたのに、時計を見ると、すでに四時半を過ぎてゐる。

「これは大変だ。徹夜でプレイをやらうと言つていたのに、寝過ぎてしまった」と思つて傍を見ると、笠井奈保子も、私の横で仲良く眠っている。いつの間に着たのか、ちゃんと浴衣をまとい、掛蒲団をお腹の上にダンゴのように丸めてのせ、スヤスヤと健康そうな寝息を立てている。

肉づきのよい脚が二本、掛蒲団から、はみ出て、にゅっと畳の方まで伸びている。私は自分が足の方から冷えて目が覚めたことを思ひだして彼女が抱くようにしている掛蒲団をのばして足の方へかけてやる。何をカン違ひしたのか、笠井奈保子は、

「うーん、ねむたい。もっと寝かせて——」

寝言を言つて抱いたままの掛蒲団を放すまいとする。可哀そうに、寝不足なんだな——と思つて、そのまま寝かせておいて一人で浴室へ向かう。

浴槽へ湯を出しておきながら洗面所で歯を磨いて顔を洗う。湯がいっぱいになったところで、飛び込んで洗い場へ、ざあざあ湯を溢れさす。窓を開けると今日も晴なのか、白々と明けそめた空は水色がかつてゐる。

目の下の高速道路では、時折、猛烈なスピードの乗用車が走っているのが見えるが、街

全体は、まだ静かな眠りの中にあった。

朝の冷気は、たえ間なく開け放った窓から吹き込んできて、湯にほてった私の身体を、快く、もみほぐしてくれる。

「今日は夜通し私を縛って責めるのネ……」

と言っていた笠井奈保子だが、正味二時間ばかり、写真の枚数で三十枚ほど撮っただけで、この徹夜のプレイは終わってしまった。

蒲団を一人で占領して、ぐっすりと熟睡している笠井奈保子の寝顔を見て、私はそっと音を立てないように、カメラや照明道具の後始末をするのであった。

一日おいて、私は再び前田真知子を縛って百枚近い写真を撮影したが、そのことは、いずれ、稿を改めて書きたいと思っている。

「貴方一人だったの？ 私は四、五人で来るのかと思ってたわ——」

と、先ず最初に顔を合わせたときから、私の度肝を抜くような発言をした鈴木千鶴子から、私のところに電話があって、大阪へ着く日と時間を知らせてきた。

この稿を書いている現在、まだ三日程あとのことなので、その時のことを今、書くことは出来ないが、写真の撮影が出来たら、出来るだけ早く編集部へ送って、口絵写真にでも



使ってもらえたら幸いだと思っている。

それにしても、前田真知子と笠井奈保子、それに引続いて鈴木千鶴子と、六月の梅雨の

晴れ間も忙しいことである。

深田菊子と高村浩子の二嬢は、気の合ったプレイメイトが出来たということなので、それについてのレポートは、相手の読者の方から寄せられることだろうと思う。私の撮影した未発表の手持ちの写真も、相当量あるので誌上に紹介されるような際は、快く提供したいと思っている。

SM雑記ABC

私は相当以前に緊縛フォトを撮影したことのある二人の女性から便りを貰った。

一人は一年間ほど、殆ど毎週のように責め写真を撮影し、その途中で妊娠したため、臨月間際まで責めに熱中したことのある中河恵子と、もう一人は、「片えくぼのマリア」で私が、はからずも同一女性を辻村隆氏のカメラハントと私のカメララルポで、競争する形となった川路むら子である。

中河恵子は二年程前だったか、所用で神戸まで彼女がきたとき、思いがけなくも、久しぶりにプレイをする機会を持った。その折、発表する気は、もともとなかったのだが、私にしては珍しくライカ判で二本ばかり中河恵子の緊縛姿態を撮ったのである。



フィルムの特像はしたもの、印画紙に焼付けすることもせず、そのまま机の抽出にしまい込んでいたのだが、彼女は忘れずによく覚えていて、今度の便りで、その写真を送ってほしいと言ってきた。

私にしても、焼付けてみるのは初めての写真なので、二年も前のことだが、なんだか新鮮な感じを受けるのは妙であった。早速、よさそうなのを選んで二十枚ばかり引き伸ばして、彼女に送っておいた。

今回、中河恵子から、思いがけない便りをもって、はからずも彼女の緊縛フォトのネ

ガを一枚一枚、当たってみる機会を持った。すると、まだ、一回も印画紙に焼付けたことのないネガが相当枚数、出てきたのである。

あの頃一週間か十日に一回の割で、ずっと写していたので、時によってはフィルムの現像をただけで忘れていたものも混じっているのだ。そうしたネガの一枚一枚をルーペで拡大して眺めていると、もう何年も前になるのか、忘却の彼方に失っていた、あの当時のことが一入、懐かしく思い出された。今になっても、忘れずに便りを呉れたことが大変、嬉しかった。

川路むら子は、人妻といっても、えくぼの可愛い、まだ娘時代の余韻を十分に残していて、それに人妻の良さを、たっぷり加味したという得難いM女であった。川路むら子がどのような過程を経てM傾向を持つようになったかは、私はその詳細は知らないけれど、三回ばかり逢ってSMプレイをやった経験からすれば、S男性に啓発されてM性向を抱くようになったというよりもむしろ、この佳人の本来の性格が、そういった複雑なニュアンスの中に、育まれてきたように思えた。

相変わらず奇クを愛読していて、私に便りを呉れるところを見ると、SMに対する関心は依然として少なくないように思える。私はこの八片えくぼの佳人Vに対して、今ひとたびの取材を試みたいと熱望している。もし、その望みが果たされるならば、以前にも増して、密度の濃い内容の緊縛フォトが制作出来るような気がする。その川路むら子がSM的に、どのように生長し進歩しているかを、この目で眺める事が出来るのは大いに楽しみである。しかし今のところ、彼女からの便りには、そうしたプレイへの期待を持たすような文面はなかった。八片えくぼのマリアVのお幸せとご健康を祈ること切なるものがある。



朝の女

千代の朝は遅い。

かつて遠山家の女中であつた頃から、主人一家よりも寝すごすことは度々で、見かねた女中頭から散々小言をいわれたものだ。

ねじくれた性格の千代は、当然それを静子夫人の指図によるものだと考え、高価な着物にインクのシミをつけたり、夫人の食事のスープの中に唾をはいたりして、陰質な意趣がえしをしたことさえある。

勿論それらは露見しなかったし、逆に静子

パロディ

花

と

蛇

連載・S 大河小説

山光

純

(九)

夫人は、女中頭から良く言われないこの不器量で陰気な感じの中年女が、朋輩たちから爪はじきされないようにしてやろうと、何くれとない気づかいを見せたものだ。

例えば、日本舞踊の発表会などにはお伴をさせ、完成された優雅な美に触れさせて女としての教養をつませるように、はからったりしたのだが千代には伝統の美などを理解しようという気はまったくなく、むしろこうした催しに加わっている華美な女達への憎しみをつのらせただけで、名流夫人達と笑いさんざめいている静子夫人のそばを、たびたび離れ表で待っている運転手の川田のところへ油を

売りにばかりいつていた。「何さ、あんな女たち。おていさいばかり作って——皮むけば……」と千代が毒づくくと、色好みの川田は相好をくずした。傭人たちの中で、この二人だけは、へんに気が合った。

千代の、これまでの、うす暗い人生を何度やり直したとしても、あの光り輝ける令夫人を超えることはできない様に思われた。千代は二人の間にある膨大な隔絶感に、みずからの目をおおいたくなる衝動に、しばしば駆られたものである。

遠山家の女中は千代だけではない。ただ千代だけが例外だった。他の女中が感謝と憧憬

の眼ざしで女主人をみあげるとき、千代だけは奥歯をつよく噛みしめて憎しみに息をはずませる始末だった。

千代は静子夫人の美貌を嫉んだ。教養と、慎ましい身のこなし、育った境遇、ハスキーな美声を嫉んだ。上流夫人のパーティーを嫉み、豪華な衣裳と豊かな黒髪を嫉んだ。段ちがいな美女と醜女——千代は狂わんばかりの嫉妬心にさいなまれ、そのよこしまな心を憎しみに、すりかえるのだ。

それから後の一連の出来事は、すでに知られている通りである。

しかし何ということだろう。元の令夫人の一夜の性戯の相手となった男たちは、例外なく、今にもヨダレを垂らさんばかりの顔付きで静子を、ほめたたえるのだ。

裸の女は涙をうかべ羞恥にわなないて、ただうつむくばかりだったが男たちの話題は彼女にのみ集中していた。それが如何に卑猥なものだったにせよ、つねに静子の一挙手一投足は聞くまいとしても、千代の耳に入った。

そのことは、この広大な邸に起居する大勢の男女のなかでの中心人物——女主人公は他ならない静子夫人であることを明瞭に示していた。その情況は以前、千代が女中であった頃

の遠山家と、すこしもちがっていないと千代には思われた。

静子の肌は、あくまでスベスベし、成熟しきった甘い女の香りにみちあふれている。思いきり張りだした胸の隆起は少しの形くずれもなく、ぎゅっとくびれ、下腹の方へ、あくまで、なだらかな曲線を、えがく。もっとも強烈な印象にあふれる臀部の丸みは、敏感さを、むきだしにしているようである。

千代はこの、こよない蠱惑にみちみちた元の主人の全裸体を凝視するとき、心の底からどうしようもなくこみあげてくる、嫉み心のほむらに灼かれるのだ。

千代は静子夫人の所有していた金品のありったけを奪いつくしたが、これからは文字通り裸一貫になったこの絶世の女の肉体と心の美しさを根こそぎ奪う仕事が続いている。この仕事は、鬼源のいう調教というものらしいが、美肉は調教が進むにつれて、さまざまの思いもかけない反応を示し、こよなく楽しい一刻を、すごさせてくれる。たっぷりと時間をかけ、手を変え品を変え、玩弄しつくしてやろうと思うのである。

ふりかえってみれば、絶え間なく男を取り替えて凌辱させてみても、これまで真底から

溜飲のさがる思いをしたことがないように思われる。静子の軀は、まだまだ抜群の美しさを保ちつづけている。その機会が、いつやってくるかは分からないが、いつか快哉の拍手をするチャンスを作ってやるのだ。千代は、いいようのない期待感に胸をふくらませ、この上もなく幸福だった。このしあわせは、どんなはずみで訪れてきたものなのだろうか？……それというのも、千代が朝寝癖を、もっていたからだ。もし勤勉な女中らしく早起きをしていれば、静子を憎むことは遂になく、したがって抜群のセックス奴隷を手に入れることもなかったにちがいないのである。

陽はすっかり昇り窓に明るい日射しが庭のヒマラヤ杉の影をくっきりと落としていく。

昼前には重要な客人が来ることになっている。千代は絹布団をはねのけ、邸内インタフオーンのダイヤルを廻す。

「静子を連れてきてちょうだい」

千代の着ている藤色のネグリジェは、静子夫人が舶来品専門店で購入してきて新品のまましまっていたものだ。ごく柔らかな絹の生地を、たっぷりと使って、くるぶしまで、とどく美しいものである。千代のくしゃくしゃ

に乱れた赤茶けた髪と、頬骨のつき出た下品な顔付きは、優雅な衣裳に、水と油のように釣合っていない。

待つほどもなく、三下の竹田と、もつれ合うようにして部屋に入ってきた静子は、畳の上に正座して平伏し、しっとりした声で、「お早うございます、千代奥さま。お召しになりました……静子まいりました」

「まあまあ、相変わらず気取ってるわね。素裸の奥さま——」

千代は上気嫌である。

いつ呼び出しがあるか分からないから、静子夫人は、どんなに疲れた朝でも、湯浴みと朝化粧は欠かせない。千代や、邸の中の男たちを不快にさせない美しさを常に保ちつづけておくよう仕込まれているのだ。

今朝の静子夫人は障子越しに洩れ入る朝日の照り返しの中で、とりわけ新鮮で、もぎ立ての果実のように瑞々しかった。

朱い唇、すらりと通った鼻筋、漆黒の髪はアップに見事にセットされている。

「お前って、なんて美人なんだろう。ちょっときくけど、お前、乳首の先にも頬紅を、さすのかい？ ずい分、いい色なこと」

いきなり切り込んでくる千代の質問に、た

ちまち静子夫人は、うろたえてしまう。

「……いえ、いいえ……そ、そんなこと、いたしませんわ」

ツンと上を向いた乳首は、乳量をふくめてごく美しい桜いろである。それは、こんもりと盛り上がった両の隆起の頂点で、見るものを激しく、そそのかす色づきである。

千代は刺すような目つきになり、ジロジロと純白にも見まほしい剃き身の女体を、ねめ廻しながら、

「そのカラダじゃ、男たちが、ほおっておくはずがないわ。……言いつけ通り、毎晩、誰かのお相手をしてるんだらうね。ええ？」

見事な曲線の女は後手に縛られているため耳をおおうすべもなく、朝っぱらからの赤らさまな質問に身悶えする。起伏に富んだ肉体がゆるやかにくねる様は男が劣情を行使するのを誘っている情景を思い起こさせるのだ。

「……え、ええ。千代さん、すっかりご存知でしょうけど。静子、おいつけの通り夫の捨太郎の他にも、おお勢の殿方と、浮気をいたしますのよ……」

諦めと憂愁に沈んだハスキーな声で答える静子夫人の切長の瞳は、虹のようにうるんでいる。千代奥さまの前での失言は絶対に許さ

れないのだ。

そして千代の顔をふりあおぎ、明らかに媚びを含んで、大胆なことを口にするのだ。そんな下品な話が、飼主を何よりも喜ばせることを性奴隷の静子は知っていた。

「おかげさまで、いろんなポーズと、お尻のまわし方を覚えてよ。ええ、お口でだって舌の使い方が何通りもできますわ。柔らかく歯を入れることがコツなの。……若い人たちは、お前は淫売の女ひと以上だってほめて下さいますわ。でも、鬼源先生が、お試しになると、いつも、まだまだ駄目だって……」

千代は上へは、ごく詰まらなさそうに聞いているが心の底ではへざまあみろ。今にこの女を本格的なマゾにしてやるVという快感に胸を躍らせているのだ。

実際のところ、鬼源がこの大きな臀部をもった抜群の女に、どんな無残な振舞いをさせているのか詳しくは知らない。調教に名を借り、静子が従順に言うがままになるのを利用して手を変え品を変え最下等の性戯をしかけているらしい。生れながらの慎ましさと純情さを保ちつづける静子夫人と、世間の最下層でセックス調教に励んできた鬼源とでは、まるで勝負にならない。二人の間の余人の知ら

ない閨房を時間をかけて、じつくりと聞いておかなくてはメンツが立たない。静子は彼女の支配下にある性奴隷なのだ。

「鬼源の言う通りよ。何さ、そんな綺麗な顔をしながらハレンチな自慢をしてさ。女の貞操という大切なものを、どう思ってるんだろう、この女。聞かされるこっちが、恥かしくって顔も上げられないよ。こんな女が、かりそめにも、あたしの主人だったことがあるなんて、アアいやだ——」

と千代は高飛車に、得意のまったく、めちやくちやな言い草を、はじめなのだ。

「……ち、ちがうわ。千代さん……あたくし……あなたのおっしゃる通り……」

「何がちがうのよ。はつきり言ってごらん、聞いてやるから！ さあ、お言いよ」

千代は金壺眼をカッとひらき、抗議の紅声をあげる静子夫人を睨みすえる。

千代の立場は、圧倒的なものだ。今の静子にどんな反抗ができれば。白を黒と、いいくるめられ、それを立ちどころに肯定する以外に何もできはしない。

「す、すみません、千代奥さま。あたくし、こうして奥さまと、ゆっくりお話できる機会があまりないものですから、シドロモドロに

なってしまうて……お許し下さいまし」

「ホホホ、そうなの。毎日、いやらしい男たちのご気嫌ばかりとっていると、そんなになっってしまうのね。でも、まあいいじゃないの、もともと前も好きでやってることだし。ホホ……で、さっきの話にもどるけれど、毎晩いろんな男に嬲^{なや}ってらったのね。一晩も欠かさずに？」

「……ええ、……ちか頃、一人で寝た記憶はありませんのよ」

千代は上気嫌になり、尋問をつづける。

「だって、昼間も、お客を慰めたり、春太郎たちとコンビで色々と実演を見せたりするじゃないの。調教もあるし、それに、写真の撮影という大切な、お仕事があるはずよ」

「……ええ、お仕事を全部すませてから、プライベートな夜のおつき合^{あひあひ}いを、しますの」

話すうちに哀感にとざされた静子夫人の高貴な美貌は、そぼふる霖雨が煙るように、しとど濡れる。障子にさす明るんだ日射しすら憂愁にみちた佳人が漂わす悲しみの霧のなかにかすんでゆくかとおもわれる。彼女の甘肉の乳いろと、茜さす唇と、みどりの黒髪は、そのまま悲しみの色である。その色は、またかぎりなく切ない。

しかし、このうつくしい三色のとりあわせの中に、たぎるような快楽をみつめて蝟集する一むれの蛮人たちがいることも、同じように確かなことである。悲しいのか、楽しいのかは、しばらく、おくことにしよう。まことに人の世のあらゆる、なりわいは、ちょうどこの佳人の肉体と同じように楯の両面を、もちあわせているらしい。

楯に表裏がありつづけるかぎり、拐われの佳人も濡れつづける。ではいったい、濡れることは悲しみなのか、快楽なのか……それはこの優美な女体に、くりかえし、たずねてみるしか手段はないのである。

「そうなの、静子奥さま。わたしが、ちょっと知らないプライベートなこともなさっているのね。これで又、楽しみがふえるわけね。いずれゆっくりと聞かせて貰うから……。でも、奥さま。やっぱり、あんたは立派だわ。そんな暮しをしていても軀にはタルミ一つもできていないし、わたしが女中だった頃よりずっとずっと美しくなったみたい。あの頃、オッパイだってそんなに張りきっていなかったわね。ことに、そのお尻の大きさと肉づきなんて……あんた、この邸の暮しが、よっぱ

ど性にあつてゐるのね……ハハハ……氣どり屋のエッチな奥さま」

千代は金齒をむきだした唇を、ひん曲げ、下品に笑いくずれる。

「もう、許して下さいまし、千代さん」

涙をこぼすまいとして必死にこらえる静子の表情には、ただ耐えぬこうとする純真な、一途なものが、あふれている。千代の気嫌を損ねないようにしようという、いじらしさが朝の光のなかで一層初々しく、にじみ出る。

この美貌とヴィーナスのような肉体をもつ女が、夜毎の魍魎と乳繰りあい、最下等の娼婦も及ばぬポーズで這いまわっているとは、金輪際、信じがたく思われる。千代自身からして時々、そんな錯覚におちいるのだから、ここへ静子を引き立ててきた竹田など、始終そうなのかも知れない。

千代は、たちまち姿勢を、たて直した。

「勘忍してって、いったい何を勘弁してほしいの？ さっぱり分からないね。何しろ、あたしには教養が、まるでないのですからね」とヘラヘラ笑いながら、くしゃくしゃになった縮れ毛をゴシゴシやる。大きなアクビを一つして、

「そうそう、静子奥さま。もう、朝の食事は

お済みになった？ 今朝は、どなたのスープだった？ どんな味だったか教えておくれ」

たちまち狼狽する静子夫人の口元に、羞恥の紅が、のぼる。例によつての難題であるにせよ、この清々しい朝の光の中で生臭い肉欲の告白を強いられる、つらさは格別である。

「……」

ふかぶかと顎を胸にうずめて、両肩をよじらせるようにする裸女を、ジロジロとみつめながら、

「奥さま——ねえ、お言いつたら。毎朝、男の人からスープをいただいて、お仕事に励むリキをつけるっていう約束ができてるじゃないの。今朝は誰から貰ったのかい？……お言いつたら、静子！」

底意地のわるい目を光らせて追求する千代は、終わりの一言を、まるでムチでもふるうような口調で言った。

静子夫人の反応は、とっさだった。

「ご、ごめんなさい。千代さん」

虹のような紅を、やどした優しい目元で、彼女は千代を仰ぎみるようにする。はずんでいる息づかいのため、なだらかな柔らかく温かい下腹部が微妙にうごめいている。ぴったりと合わさった太腿の交叉するあたりに春の

ひこばえのような、つつましさ、わずかにのぞいているのだ。かすかに浮いた静脈が美肌の白さを、ことさら強調し、果実のように張りだした乳房は、ただ淫蕩な、なまめかしい匂いを、はなつのである。

「……今朝はね、千代さん。あたくし、まだ殿方からお食事をいただいてませんのよ……だって、どなたも下さろうとしなかったのですもの……」

と切れ長の瞳の中まで赫くそまりながら、すぐ隣で、あぐらをかき面白がっている竹田に妖艶な流し目をくれる。

「ねえ、竹田さん、よろしければ、ただけないこと？ 千代さんにフレンチキスのマナーをお目にかけたいの……」

いいながら、モクモクと尻をよじって三下のほうに、しなだれかかってゆく。吐く息、吸う息に、自ら酔いしれようとするコケティッシュな熱気が、こもっている。

「だってよ、お前^{めえ}——まあ、俺はいいが」

「では、きまってよ。さあ竹田さん……」

竹田は柄にもなく照れたように、チラッと千代の方を盗み見て、

「ここですかい？ 場所を変えるほうがいいんじゃないねえのか」

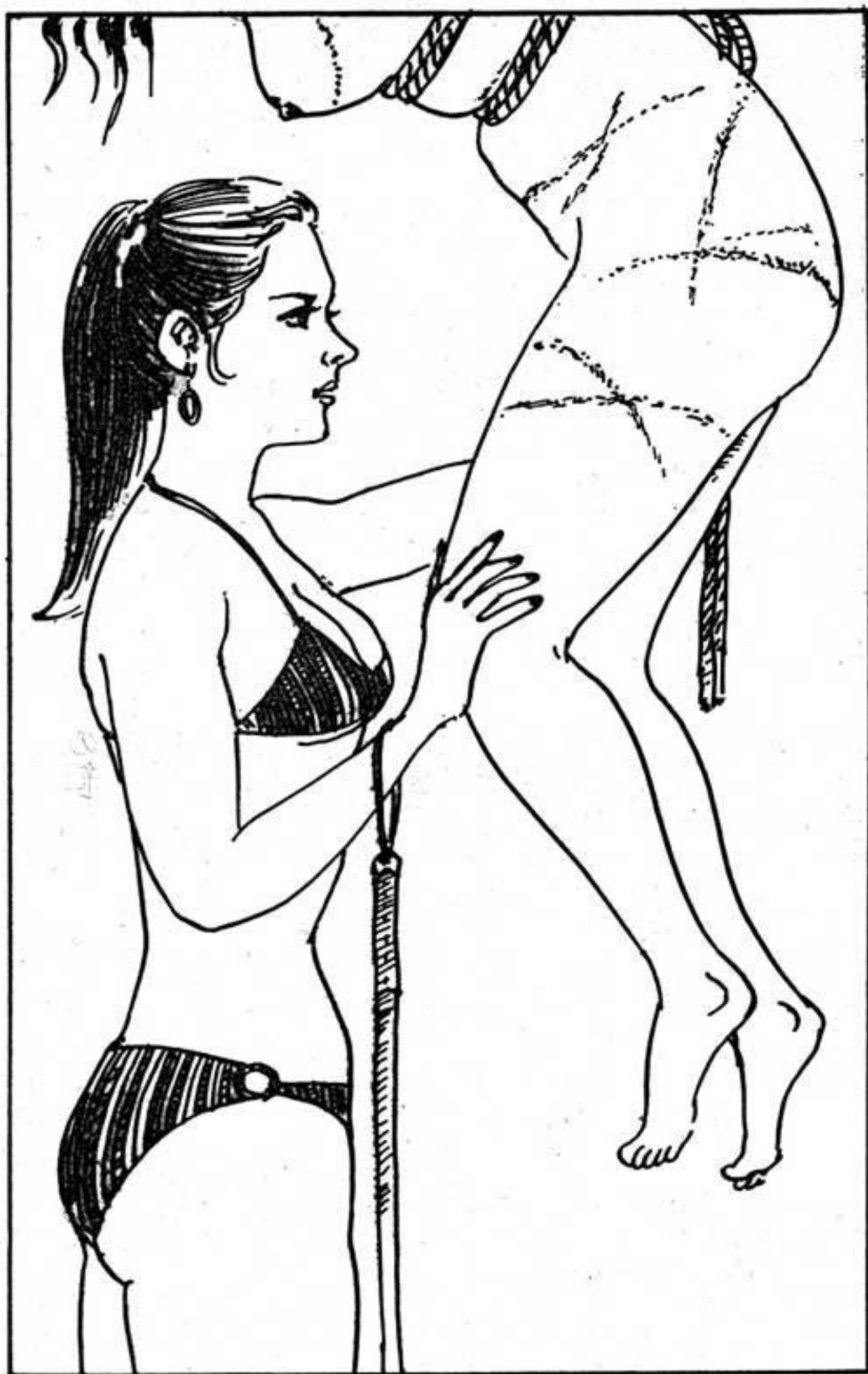
「あら純情なこと。ホホホ……静子、感激してしまいわ。どうしましょう。さあ、バンドをゆるめてちょうだい……千代さんの前だから、あたくしハッスルしましてよ」

懸命の媚態をつくって、すがりついてくる美女をふり切ることもならず、竹田は何クソというように、ふん切りをつけたらしく、し

かし嬉しそうに歯をむきだしながら、ベルトをゆるめそうにする。

そこへ千代が叩きつけるように、

「何をモソモソいつてるのよ。竹田さん、あなたも随分えらくなったのね。桂子をさんざん転がしておいて、今度はママかい？——でも、やっぱり悪いのは静子奥さまのようね。」



……イメージギャラリー……

『鞭跡検査』

……須坂

旭……

あたしの前で朝っぱらからケダモノみたいな振舞いを平気でしてみせようなんて——お前は奴隷女以下よ……そう、牝犬、さかりのついた牝犬だよ！」

と目をギラギラさせ、かん高い声で、
「もう竹田さんは、いいよ。二人きりにしておくれ。これから、メス犬をメス犬らしく扱ってやるんだから」

ではごめんなすって、と未練げな態度とはうらはらに、浅いおじぎで竹田が出てゆくと陽がいよいよ高くなった奥まった寝室に宿命の二人が向かいあったのである。

「さあて、奥さま。こうして水入らずの二人きりになるなんて、久し振りみたいね」

「千代さんは、すっかり貫録がついてしまっで、あなたの前にいると眩しいみたい。毎日身体をはっている静子は、みじめですわ」

「とんでもないワ、奥さま。あなたは押しも押されもしないエロ・スターなのよ。黒山のようなファンを持ちながら、気の弱いことをいっちゃダメ」

などといいながら、一糸もまとっていないその主人の肉体を、やおら批評しはじめるのであった。

千代は、できるかぎり静子夫人の優しい心

根にヤスリをあてようと考えているような言い草で、乳房に難癖をつける。

「奥さまのカラダは森田組の財産なんだからね、形くずれしないようにして、できるだけ長く使える様に、ご自分で心がけなくっちゃダメよ。そりゃ、ちっとばかり使い過ぎてるとは認めるけれど。フフフ……そのオッパ、少し大きくなり過ぎたみたいね。男たちに揉まれるのは仕方ないとしても、一人になったときもエッチな想像をしながらネチネチとやってるんでしょう。フフフ……」

などといいだし、泣き顔とも笑顔ともつかぬ表情で視線を下におとしている美貌の裸女をからかうのだ。あげくのはては、もっと近くに寄るように言いつけ、まるで家畜をリードするように「チチチ……」と舌を鳴らして豊かな女体を膝立ちにさせ、両脚をぐっと左右に広げさせる。腰で、ぎゅっとくびれた美体は、逞しく盛りあがった臀部が、ことさら強調され、胸がしめつけられるほど煽情的である。

千代は内股に掌を這わせ、ゆるゆると、こすりあげながら、わざと、しかめ面をつくって静子を、からかう。やがて、大げさに裸女の羞恥をあふりたてるように、

「お昼前には、お客さまがあるのよ。そのところ、また草が、はびこりだしたね——ご挨拶に出たとき、お客さまに綺麗にしていたくよう、おねだりするのよ。フフフ……」尻や腹部をピタピタと平手打ちにし、家畜の値ぶみそのままに、

「奥さま、すこし楽をしすぎてるようね。贅肉がついたみたい。もっと、けずってあげようね——」

霧雨に、しとど濡れたような抒情的な瞳をあてどなく宙に舞わせる妖美夫人は精緻な曲線のここかしこに触れてくる不遠慮な掌や指先のおどましさに懸命に耐える。しかし、もつととまましいのは、土足でズカズカと入りこんでくるような千代の侮蔑の囁きである。耳をふさぐ術もなく、静子は愁然として、どこまでつづくのかもわからない元の女中の蔑みに、ひれ伏しつづけるほかはないのだ。

一しきり難癖をつけ終わった千代は、いつしか自分の着ている藤色のネグリジェの、ご自慢を、はじめるのであった。

「どう？ この寝間着、なかなかいいでしょう？」

「……そ、そうね千代さん。ほんとにシックで素敵ですわ。ふんわりとした絹の着ごち

って、たまらない！ 見ていても、うっとりとしてしまつてよ……」

羨望をかくしきれない潤んだ声で、ひっそりと答える静子の美貌は、愁いのベールを、かむっている。

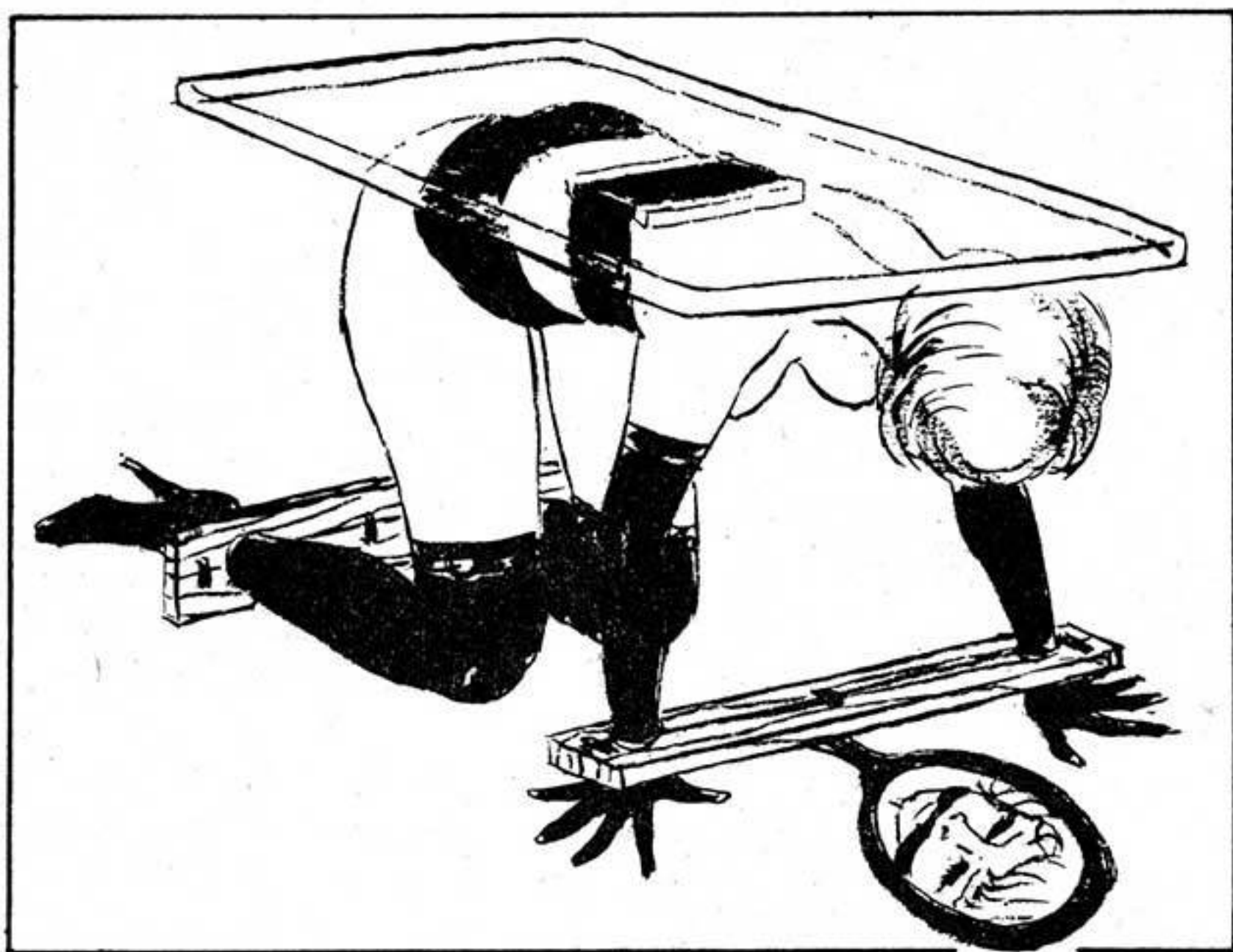
「ほんとうにきれいなネグリジェ！……それを求めたのは、たしかハル・ボワVだったと思いますわ。ほうら、いつか一緒にいったことがあったわね。ねえ、千代さん、あのお店美人のマダムを覚えていて？ いつもいつも、にこやかな、お見立ての上手な方だったわねえ……いちど園遊会で、ばったり、お目にかかったとき——」

まるで夢見る少女のように頬を紅潮させ、あの頃のショッピングの楽しさを語りはじめた静子夫人は、次から次へと思いの出のシーンを思い浮かべ、いつしか軽やかな笑い声さえあげるのだった。

身体には何一つもつけず、しかも両肢を割ったままの膝立ちポーズでいながら、熟れた女体のどこにも、醜いものをみつけることはまったくできなかった。そのなだらかな起伏の、そこかしこから、甘酸っぱい官能の虹が四方に放射している。

静子夫人の内腿に触れつづける千代は、は

イメージ画 『女体肌』 志羽利也



じめは調子をあわせていたが、

「もうその位でいいわよ。なにさ、そんな昔のことなんか何の役にも立ちやしないさ」

と、こめかみをピクピクさせる。明らかに

癇癇の発作を、おこしたらしい。

「こんなビラビラした寝間着、ほんとうは大きらい！」

と立ち上がったかと思うと、ゆるく開いて

いるレースの縁どりをしたスソに手をかけ、あっというまにヘソの上あたりまで、たくしあげた。

「ま、まって……千代奥さまお待ちになって……ごめんなさい」

仰天して、ご気嫌をとり結

ぼうとする静子夫人にかまわず、腰までネグリジェを引き上げたままの姿で、化粧台のスツールを下げてきて、ドカリと尻を、おろす。

——千代は、夜着の下に、なんにも着けていなかった。

もしこの場に立会うものがいたとすれば、二人の女の肉体のあまりにも極端な相違に造化のまぎれもないイタズラを見て大笑いすることである。はじめて近々とさらけだ

された千代の体のどこにも、ふくよかな白さを、みつけることは、できなかった。ぐっとくびれるべきところが出っぱり、豊かにうねっているはずの部分がたるんでいた。だが、怖れと愕きのあまり、オロオロする静子夫人は、ほんの一瞥をしたきりで、目のやり場を失ってしまったのである。

鏡台用のスツールはビロード張りの豪華なもので、膝立ちになっている裸女をみおろすのに、ちょうど、いい高さだ。

「ああ、せいせいするわ。何さ、こんな気味のわるい、寝間着」

といいながら、照れる様子もない。膝をひらいているため、静子夫人のすぐ前に千代の身体が、すっかり開かれていた。

「さあて、静子奥さま。今朝は男のものとはちよっとちがった味よ。さあ、遠慮なく召しあがれ……」

この時、静子夫人に千代を、まともに、ふり仰ぐことのできる勇気があったとすれば、どうだったろうか。急坂を弾みをつけて転がりおちる石のように、どこまでも転落しつづける令夫人は、この瞬間にその純な心を一気に差し貫ぬかれ、あるいは生きつづけてゆく張りのすべてを失ったかもしれない。

千代の、糸のように細くした金壺眼の底に燃えあがった焰。その焰は金のきらめきのように凄まじく、爬虫類——蛇の眸のように、よこしまだった。たとえていえる何ものでもなかった。女の怨念そのものであった。美女と醜女。

だが怨念の魔群は、眼ばたきする暇もなくたちまち通りすぎて現実に返事。責められることが、いまや本業となった奴隷美女には、乳房に刻印されるのと同じくらい明瞭に千代夫人の命じたことが理解されたのである。

「さあ、奥さま。お前の稼業じゃないの。ホラ、メス犬ならメス犬らしく、しっかり舐めるんだよ！」

官能美にあふれる絶佳の女性に最大級の侮辱をあたえる千代は、いやらしく唇を、ひんまげて嚙う。

「……それだけは……ゆるして」

あまりのおぞましさに、全身を慄わせ、思わず尻を振って、逡巡の仕草をみせる静子を見おろしながら、

「ホホホ……もっとも、ゆうべは酔っぱらったのでお風呂にも入っていないけれど、我慢遊ばせね。あら、そんなに羞かしがらなくなっただっていいじゃないの、知らない仲じゃあり

ませんのに。さあ、いやなのかい！」

「……千代さん……ひ、ひどい……かんにんして……」

何度も何度もイヤイヤをするように髪をふり、血管の浮きだした喉の奥で鳩のような含み鳴きをする静子夫人は、いまはもうこらえきれない啜り泣きもれないよう懸命の努力をするのだった。ノーブルな鼻がピクピクと震え、赤くいろどった唇の奥に桃いろの舌がわずかに覗いている。

静子は、ためらい、ためらい、胸をそらせて天に祈るように、

「ああ、静子、どうしよう……」

と途方に暮れたように、つぶやいたかと思うと、遂に、ぞっとするほど妖艶に濡れ光った双眸を千代に向けた。そして、あたかも身投げをする時のような決心をしたのだった。

その瞬間、千代は我にもあらず電流のショックのようなものを感じ、「うーっ」と唸るような声をだした。その電流は、戦慄をともなう一瞬に全身を走りぬけた。夢中の千代には分かつたはずはなかったが、それは復讐の快感ではなく、もっと別のもの、例えば怨みからの解放というようなものであったかもしれない。背筋が寒くなる昂まりは、しかし

すぐに去り、千代は、たちまち高潮し、いい知れぬ痒感が攻めのぼってくるのを知った。

静子夫人の美肌は、白い脂を、じっとり分泌させ、軽く縛された後手の掌は別の生き物の様に悲しげに開いたり閉じれたりしている。絶えず軽い、わななきが全身を通りすぎるこの美しい性奴隷は心の葛藤とは、まったく別に、徹底的に教えこまれたテクニックで彼女自身の自虐を、さらに押しすすめ、いっそうの深みのなかへ、みずから、のめりこんでゆくのだった。

「千代さん。もっと肢をお開きに、なって」

上眼づかいに、媚態をこめてハスキーに囁く静子夫人の顎に光るものが、したたっている。千代が応じてやると、哀感をこめた微笑をうかべ、息をはずませる美しい哀れな女。

その絶妙な征服感に上ずった千代は、静子夫人のみどりなす黒髪に、ぐっと指を絡ませさらに強く自分のほうに引きよせる。そして怪鳥のような、しわがれ声で、

「ホホホ……メス犬の奥さま。さあ……もっと、ご自慢のテクニックを、お使いいたら。あとで、お前が尻尾をふってよろこぶ、ご対面をさせてあげるから！」

と叫ぶのであった。

客人たち

けだるい体をもてあましながら、千代がようやく朝昼兼用の食事を終えた頃、待っていた来客があった。

三人の客人は森田組の鉄火場での常連で、

もとより、千代と面識もあり、邸の応接間にはたちまち下品な笑い声に充ちた。

森田や田代たちが旦那と敬称をつける彼らは、バクチ好きは勿論だとしても、申し合わせたように口が堅く、色好みで、しこたま金をもっているところは共通していた。

三人とも年令の違いこそあれ、修羅場をく



イメージギャラリー

『麗花受難』

岡

たかし

ぐり抜けてきた不逞な口のきき方をし、一癖も二癖もありげな成金紳士たちである。

来意は、はじめから知れていた。

客人たちの近ごろの浪費には、サイコロや酒席のほかに、いわゆる「鬼源モノ」フィルムの購入がある。賭場の慰みに上映したのがきっかけで、遊び事にかけては海千山千の彼らが、ただ数本をみただけでその虜になってしまったのだから、その出来ばえは想像できよう。享楽には貪欲な彼らは平気で大金を投じ、次々と飽くことなく8ミリ、テープ、写真を、もめてきた。しかも、その挙句は、お定まりの通り、どうあっても、あの何ともいえないエロ・スターどもの実演を見なくては承知しなくなってしまったのである。

客人たちの森田に対する強要は、ずっと以前から倦きることなくつづいていた。何といっても客人たちは賭博やフィルム類など、組の財源をささえる大スポンサーたちである。しかも、永年にわたっての義理と今後のことなどもあり、組の親分としてその申し出をこれ以上はねつけ続けるわけにはゆかなくなってしまったのは、仕方のないことであろう。

特に旦那の一人のS製菓の会長の主張にはけしからぬ説得力があった。彼は自社のTV

コマーシャルのタレントに有名な純情女優を使っているが、CMガールに起用するからには夜っぴて酒席にも侍らせるというし、又、電話一本で、日頃、報道の自由とか何とかを絶叫しているTV局の重役が、あたふた駆けつけるともいうのである。こんなことは、よく言われていることで、スポンサーあつての仕事であつてみれば当然のことといえる。

——森田組の場合、すべからず、あの素裸のスターたちに挨拶をさせよ。それが、スポンサーに対する礼儀というものではないか。

礼儀という言葉に弱いこともあつて、森田は田代などにも計つて今や別格のスポンサーである千代の意向をも、たずねてみた。驚いたことに、千代は双手をあげんばかりの賛意を示したのである。

いろいろと紆余曲折はあつたが、最後には千代の大賛成によつて「スターとファンの集い」が、開催される運びとなつた。今日の三人の客人達は、いわばファン代表として、いろいろと下打合せに訪ねてきたのであつた。「いいえ、買い被られるほどの女たちじゃありませんのよ。お育ちだけは上品だけれど、アレ以外には大した芸も出来ないし……ホホホ……皆さんがたの、お妾のほうか、よっぱ

ど美人で、いらっしやるはずよ。ご挨拶をさせるのは、いいんですけどねえ」

「何とかいって、ごまかそうとしたって引きさがらないよ。今日は三人して意気こんでやってきたんだ」

代表格のどっぷり肥え太った赫ら鼻の客人は、例のS製菓の会長である。戦後のサッカー、ズルチンから最近のチクロに至るまで劣悪な甘味料ばかりを使つて一山を当てた人物だけに、こうなつてはテコでも引かない強引さを言外にしめしていた。全体は猊猊を想像させ、そう思えば思うほど千代は、おかしかつた。とりわけ猛々しい容貌をしているわけではないのだが、そういう印象である。

「それにしてもねエ、皆さんの好きな処女とやらは、とつとなくなつてゐるし、第一ろくに着物も着ていませんのよ。まあ、稼業に精ださせるためには、そのほうが脱がせたりする手間がかからなくて、いいには、いいんですけれど……ホホホ……」

三人の客人たちは、思わず顔を見合せてニタニタする。

「だから、あたくし、スターとの交歓会なんて乗り気になつたのを、ちょっと後悔していますの。なあんだ、こんなパン助と言われた

りしないかと思つて……」

「まあ、それはそれとしておいても、玉を見てもなくては話にもならんじゃないか。そりゃ、売女だという位のことは聞いてゐるが、ワシらは実際にこの目で確かめんことには我慢ならないたちでな。なあ、みんな」

待つていたように残る二人も口々に喋りたては始める。食前酒に出されたワインにも手をつけようとはせず、日頃の退屈感を忘れてしまつたように熱心である。

千代が適当に、じらして、客人と談笑している頃合いをみはからつて、森田親分が応接に顔を出し、とりなすように、

「まあまあ、皆さんも、ああおっしゃつてゐんだ。女どもに一応ご挨拶をさせてから、後の段取りをきめようじゃないか」

「そうねえ、お見せするほどの女じゃないんですけれど、親分までそういうんでしたら、わたしの責任も軽くなるって訳ね。……じゃいいわ。ともかく色女共を見てやつて頂きましょうか。オホホ……」

千代の、朝からの上気嫌は、つづいてゐるようだ。

——(つづく)——

作六鬼団



決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 番号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円(送200円)●

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△ 内容主要見出し一覧▽

第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十一 第十二 第十三 第十四 第十五 第十六 第十七 第十八 第十九 第二十 第二十一 第二十二 第二十三 第二十四 第二十五 第二十六 第二十七 第二十八 第二十九 第三十 第三十一 第三十二 第三十三 第三十四 第三十五 第三十六 第三十七 第三十八 第三十九 第四十 第四十一 第四十二 第四十三 第四十四 第四十五 第四十六 第四十七 第四十八 第四十九 第五十 第五十一 第五十二 第五十三 第五十四 第五十五 第五十六 第五十七 第五十八 第五十九 第六十 第六十一 第六十二 第六十三 第六十四 第六十五 第六十六 第六十七 第六十八 第六十九 第七十 第七十一 第七十二 第七十三 第七十四 第七十五 第七十六 第七十七 第七十八 第七十九 第八十 第八十一 第八十二 第八十三 第八十四 第八十五 第八十六 第八十七 第八十八 第八十九 第九十 第九十一 第九十二 第九十三 第九十四 第九十五 第九十六 第九十七 第九十八 第九十九 第一百

身代金奪取の失敗
涙の宣誓
連命の逆転劇
奇妙な三々九度
飼育される白い動物
悪魔と悪女の悪業
屈辱の地獄図
逃走の恐怖と失敗の結末
悪鬼達の残忍な所業
落花無残の修羅場
淫らな美女の調教
すさまじいショーの展開
汚水にまみれた宝石
華々しき美女の屈伏
対峙する美女と美女
あくどい陥穽
羞恥図絵の展開
清純な令嬢の屈辱
人身御供の令夫人
深窓の美少女とズベ公
小夜子への執拗な調教
変性色事師の登場

第四十四 生れかわるスター京子
第四十五 激しいスターへの訓練
第四十六 低脳男と令夫人の結婚
第四十七 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九 悪魔たちの哄笑
第五十 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一 珍芸を開陳する令夫人
第五十二 淫靡な時代劇ショー
第五十三 華々しきショーの展開
第五十四 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五 ズベ公達の邪惡な責め
第五十六 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七 悪党の執拗ないたぶり
第五十八 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九 勝ち誇る悪党一味
第六十 中国伝来の秘法
第六十一 緊縛された美女の涕泣
第六十二 新しい餌食への触手
第六十三 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四 恐怖の責め続く
第六十五 結末なき責めの結末
第六十六 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七 新しい穢の到来と静子の狂態
第六十八 あくなき汚辱に泣く美女
第六十九 ニューフェイスに飼育開始
第七十 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一 熱気を帯びたマソの競演
第七十二 女盛りの妖美な肉体
第七十三 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

カット・岡 たちし



A

毛足の長い毛皮をあしらった、エナメルのパンタロンスーツの女が、忍び寄るように、杉本の側に立っていた。

「誰？」

ベッドに寝たまま、起きようとしなない杉本の目は、大きく胸を、えぐった大胆なプラポルテに奪われている。

黒い毛皮のパンタロンスーツから、豊満な乳房が盛りあがって白く輝いていた。小さな乳首さえ、見えそうな露出度であった。

「大学の授業には、でませんの？」

杉本の問いに返事をせず、毛皮の女は杉本を見下ろしていた。

「お父様が心配していらっしやいますわ」

杉本は黒づくめの女を、にらみつけた。

「社会活動には参加しませんの？」

杉本は無言であった。

「お友達は？……」

「ない」

面倒くさそうに杉本は答えたのは、黒づくめの毛皮の女が、杉本の口に唇を触れるばかりに、顔を近づけてきたからであった。

M 読切創作

不安症候群

芳野眉美

甘い香りが杉本の顔を包み、女は接近したまま、じっと杉本の目をみつめていた。

杉本は顔を、そむけた。

「毎日、お部屋で、ごろごろしているだけのようね」

「――」

「それも、たった一人で」

女の唇が軽く杉本の唇に触れて、離れた。

「かわいそうに」

「誰なんだ」

と杉本は呻いた。

「女医」

とエナメルのパンタロンスーツの女はハスキーな声でいった。

「医者だって？」

「日本神経衛生学会の帰りに、ちょっと寄ってみたの」

「親父にたのまれたのか？」

「そうらしいわね」

「俺は精神病患者じゃない」

「アパシー（無感動）グループの一人には間違いないようよ」

大学生の間には、最近、無気味なアパシーグループが、ふえているという。

過剰な情報環境、生活の失望、過保護からくる自主判断の欠除。いろいろと原因は考えられるが激しい受験競争を経て入学したとたん、目標を失うのが最大の原因らしい。

「無感動なんて許せないわ」

と黒い毛皮の女は杉本にいった。

「女も知らないくせに……」

「知っている」

と杉本は叫んだ。

「馬鹿にするな」

「おや、童貞ではなかったの？」

「帰れ」

エナメルのパンタロンスーツの女がベッド

に立ったかと思うと、あっという間に、杉本はロングブーツで床に蹴落とされていた。

「何をする」

「私の治療はちょっとばかり荒っぽいわよ」

「痛いじゃないか」

「ショック療法だからあたりまえでしょう」

女は杉本の顔を、またいだ。

「痛っ」

エナメルのロングブーツが、杉本の両腕を踏んでいたのである。

「動かないで」

足を、ばたばたさせて、もがく杉本に女はひややかに、いった。

「患者は、医者のいいなりになるものよ」

「俺は患者なんかじゃない」

「おだまり」

ブーツの底が、杉本の口を押し潰した。

「げっ」

ブーツの先が、杉本の口を、こじあけ、無理に押し込まれた。

「ブーツにキスすることを許してあげる」

傲慢な態度で女医は、いった。

杉本の手がブーツをつかみ、必死になって

口からブーツを、はなそうとしていた。

女医がブーツを、ひっこめた。杉本の唇が

切れて、ブーツに血が付着していた。

「きたならしい」

毛皮のパンタロンの女医が眉をひそめた。

「綺麗に舌でおふき」

杉本は唇を噛んで女医を見上げていた。

「おふきたら」

女医は、ブーツについた血を、杉本の髪になすりつけた。

「その汚いパジャマを脱いだらどうなの」

ロングブーツを杉本の首に突きつけて女医は、いった。

「よく診てあげるから、裸におなり」

「いやだ」

と杉本は顔を真っ赤にして叫んだ。

「おや、反抗するぐらいなら、まだ脈がありそうだわ」

女医は杉本を見下ろして、にやりとした。

何をされても無感動で、なんの反応も示さなかったら、精神病専門の女医とはいえ、治療は、むずかしいのに違いない。

大学に入学して一年とたっていない杉本は

まだそこまで進行はしていないのだろう。

「童貞だかどうだか、ためしてあげる」

身体をこめて杉本のパジャマの上衣に手をかけると、一息に引き裂いた。

「あっ」

日陰のもやしのような貧相な杉本の身体が露出された。

「その身体で、女が抱けるの」

「――」

「羞かしくて、裸になれないのところがうの」

女医の手が杉本の下半身も裸にした。

ロングブーツの底が、杉本の裸の腹を、やんわりと踏みつけてくるのを、杉本はつかんだ。

「まだ抵抗するつもり？」

杉本の首にロープが巻きついた。

「ブーツから手をはなしなさい」

と女医は命令した。

「手をはなさない、首を締めるわよ」

「うっ」

首を締められて杉本は呻き、手が放れた。

「そう、それでいいの」

黒づくめの女医は静かにうなずき、ロープを手綱がわりにして杉本をまたいで立った。

「パンタロンを脱がせて」

首のロープを引っばると杉本は、こわごわ上体を、もたげてきた。

さからえば、首が締まってしまふ。

女医の、すそ幅が波うつように広いエナメ

ルのパンタロンが、下に落ちた。

黒い薄いパンティが、まっ白な肌に喰い込むように、ぴったりと貼りついていていた。

飾りでもあるのか、つけられている楕円形のフレイヤーに杉本の目が釘づけになった。

「フフ」

と女医は、ロープをゆるめながら笑った。

「どうやら、見たことがなさそうね」

顔の方に少し足をずらせ、杉本の顔に向かって中腰になった。

「あっ」

と杉本が小さな叫び声を上げた。

女の黒い薄いパンティの、楕円形のフレイヤーで飾られた部分が、女が腰をかがめるにつれて、少しずつ割れてきたのである。

「顔を近づけて、よく見てもいいのよ」

杉本の目が異様に輝きだした。

「あなたの病名は、フューチュア・ショック

そう、未来衝撃病とでも、いうのかしら」

翳りを秘めたパンティを杉本に見せながら

黒い毛皮の女はいった。

フューチュア・ショックは、ふくじん副腎や内分泌

系統の異常から、さまざまな肉体的症状をひきおこし更に心の病気にまで拡がっていく。

アメリカでの麻薬のはんらん、神秘主義へ

の逃避、暴力や虚無主義の横行等、この症候群といえよう。

そして日本でも、フューチュア・ショックは、じわじわと、ふえつつあるのである。

救いようのないストレスと、短期間にあまりに多くの変化を受けて、どうしてよいかわからなくなった現代人の病的状態をいう。

「ショックには、ショックをあたえるのが最良の治療だということね」

杉本の顔に向かって女医は、ぐぐっと腰をかがめた。黒いパンティのフレイヤーが割れて

杉本の顔の、すぐ上にあった。

「お薬をあげますから、口を開けて」

とハスキーな声で女医は杉本にいった。

「こぼさないで。よくて？」

その瞬間、一条の白線が、弧を描いて杉本の口に向かって落下した。

「あっ」

薬の意味を知って、杉本は口を閉じようとした。ぐいと首のロープが締まった。

「口を開けて」

と女医が杉本に叫んだ。

杉本の顔に、太い一本の白線が、したたか浴びせられていた。

毛足の長い毛皮をあしらった、エナメル

パンタロンスーツの女は、ロープの首輪で杉本を、あやつった。

杉本の口からあふれた尿が、杉本の首に流れて首のロープを濡らし、肩から胸を汚していった。

顔一面に浴びせられているのと同じで、呼吸するのが、やっとの杉本は、息もたえだえに女のあたたかい薬を飲み下ろすより方法がなかった。息をすれば女の尿が、のどに入ってしまうのである。

「あう」

と杉本は、あえいだ。それは、やめてくれと叫んでいるかのように聞こえた。

ようやく白線が、とだえた。

びしょ濡れの杉本の顔をブーツで、はさみ「どうだった？」

と女医は、きいた。

「こんなお薬、飲んだのはじめてでしょう」杉本は阿呆のように、女を見上げていた。「フューチャ・ショックには、もってこいのお薬だと思わないこと？」

女医は、にんまりとし、

「さあ、よく拭いてちょうだい」と、目を細めた。

杉本の顔を包むように、女医の黒い薄いパ

ンティが迫った。

まるで夢遊病者のように、杉本は女医のいなりになったようであった。

卑猥なことを、女医は平気で、ハスキーな声でいっていたが、やがて立ち上がると、杉本の首のロープの手綱をにぎったまま、杉本の腰のあたりまで、あとずさりした。

「まだ、女を知らないのでしょうか？」

杉本は素直に、うなずいた。

「羞かしくて女と寝ることもできないから、ますます自閉症になってしまふのよ」

女医の、しなやかな手が、のびた。

「うむ」

と杉本が呻いた。

女医が、かがんできた。

黒いパンティのフレヤーが割れた。

「あっ」

と杉本の全身が慄えた。

首のロープを手綱にして、全裸の杉本にまたがった黒づくめの女は、ゆっくりと腰を落とした。

「ああ」

深い嘆息が杉本の口から洩れた。

大きく胸を、えぐった大胆なプレタポルテから豊満な乳房がとび出して、白く、わなな

いていた。

杉本の童貞喪失が、アパシーグループからの脱出になれば、黒づくめの女医の勝利であった。

女医が毛皮のパンタロンスーツを脱いだ。黒いエナメルロングブーツと、フレヤーが割れる黒い小さなパンティだけの女医は、勝敗を賭けて患者に襲いかかった。

B

毛足の長い毛皮をあしらった、エナメルのパンタロンスーツの女が、秋川の別荘に姿を現わしたとき、秋川は鎖で縛られて、壁の鉤に、くくりつけられていた。

「かなり重症のように見受けられますわね」と黒づくめの女医は、いった。

杉本のマンションから続いて廻った二人目の患者であった。

「どうしてよいやら……」

困ったように、秋川夫人は女医にいった。秋川の妻にしては、あまりにも若すぎる、美しい婦人であった。

黒づくめの精神科の医者が若い女性なので全裸で鎖で縛られている夫を見せるのが、どうしようもないほど羞かしいようであった。

ぐったりとして、壁にくくりつけられたまま眠っていると思っていた秋川が、頭をむっくりと、もたげて妻にいった。

「麻沙子、鞭で打ってくれ」

秋川夫人は、恐怖におびえた目で、女医を振り返った。

「鎖で縛れの、鞭で打てのと、わたくしに、たのむことが、残酷なことばかりでしょう」

と秋川夫人は、いった。

「こわくて」

「早く、打ってくれ、麻沙子」

とまた、秋川が叫んだ。

「はい、あなた」

着物姿も清楚な秋川夫人が、長くて細い皮鞭を、手に持った風情は、なんともいえないあでやかさが、にじみでていた。

秋川夫人が鞭を振り上げた。

「びしっ」

「おっ」

「びしっ」

「おっ」

「だめだわ」

と秋川夫人が鞭を投げ捨てた。

「とても、わたくしには、できない」

「奥様」

と女医が鞭をひろった。

全裸の夫の背につけられた無数の鞭のあとが秋川夫人の手によることは明白であった。

それは、夫の命令に従ったままの秋川夫人なのか、夫人の中にサディスティックな衝動が生まれたのか、よくわからない。

「いつ頃からですか？」

と黒いパンタロンスーツの女医がきいた。

「定年の三カ月ほど前でしたでしょうか」

と秋川夫人が答えた。

N銀行本店で調査部長まで勤めた秋川は、定年三カ月前、第二の職場へと紹介されていた、ある市中銀行へ見学をかねて、立ち寄ったのである。予定職場は、コンピューターのオン・ラインシステムの担当部門であった。

若い社員が専門用語でシステムの説明をするのを聞きながら、過去三十年の人生が水泡の様に、しぼんでいくのを感じたのである。

「何もできないくせにN銀行から来て、といわれるのが不安だ、と主人は……」

と秋川夫人は女医にいった。

「かといって、今さら紹介先を変えてくれとは、いえませんし……」

「それが原因で発病したのですね」

と黒づくめの女医がいった。

本人にも意識されていないストレス。職場

の中の人間関係のゆがみや、技術の変化に適応するために生じたストレスを、無意識下に抑圧していた結果であった。

「急に鎖を持ち出して縛ってくれと、いいだしまして……」

急激な夫の変化に、年の若い秋川夫人は困惑したのに違いない。

「身体を、鎖で縛られていないと、こわいというのです」

女医は、うなずいた。

「縛られてないと何を、しでかすか、分からないというのです。自殺するかもしれない」「自分が分からなくなったからでしょうね、きつと」

「そのうち、今度は、皮の鞭で打ってくれといいだしましたわ」

秋川夫人は、救いを求めるようにいった。

「生きているのか、死んでいるのか、わからない、というのです」

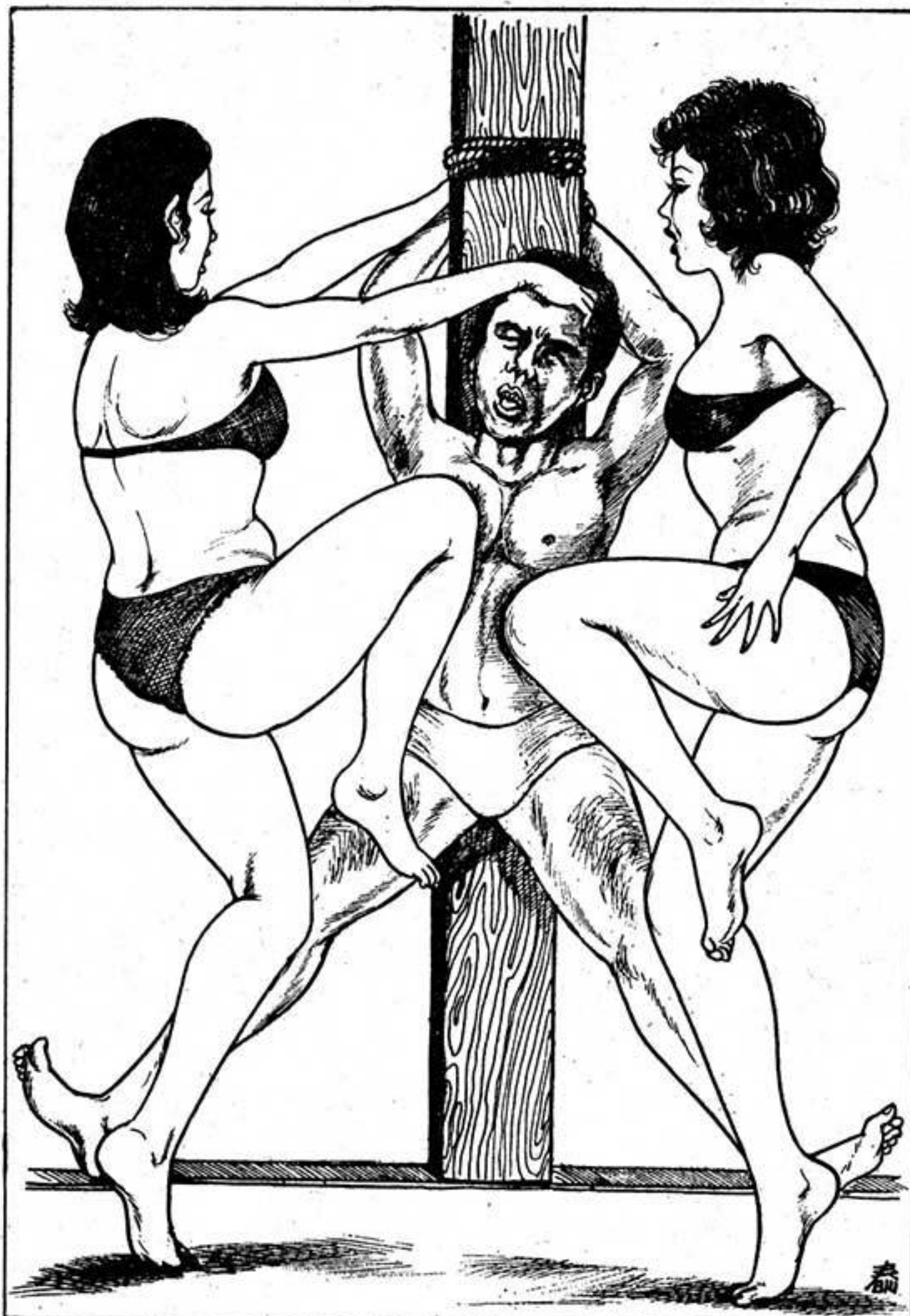
女医は秋川夫人を抱きかかえるようにして話を聞いていた。

「鞭で打たれれば、苦痛のために、生きていくことがわかると夫は、いうのです」

「わかりますわ」

と黒づくめの女医は、うなずいた。
妻の手で、鎖で縛られ、鞭打たれながら、
秋川は、無気味に広がる不安と斗ったのかも
しれない。そして、鎖と鞭で責められながら
マゾヒスティックなショックに、生を感じと

ったのかもしれない。
「麻沙子」
と秋川が叫んだ。
「鞭だ。鞭が欲しい」
「はい、あなた」



ナミオM画廊 『ヒザ鉄砲』 春川 ナミオ

「奥様、わたしが」

と黒づくめの女医がいった。

しなやかな長い細い皮鞭をしごき、鎖で壁
に、くくりつけられている秋川に近づいた。

「おお、女王様」

と、秋川が感嘆の声をあげた。

「鞭が欲しいだろ？」

と、黒いエナメルのパンタロンスーツの女
性はいった。

「奴隷のくせに生意気な」

女医は鞭を振りかぶった。

ひゅうと鞭が空を切り、

「ばしっ」

と秋川の背中に振り下ろされた。

「ひっ」

「ばしっ」

「あう」

「びしっ」

「女王様」

「これでもか」

「ああ、女王様」

がく々と秋川の膝がくずれて、秋川が壁か
ら半宙吊りになった。

「止めて」

と秋川夫人が叫んだ。

「静かに」

と女医が秋川夫人を制した。

「これは医者と患者の問題です。奥様は、しばらく別のお部屋で、やすんでいらして下さいませ」

不安そうな顔で秋川夫人は、サディスティンの女医を見た。

「大丈夫ですわ。決して御主人様を、こわしたりはしませんから」

「お願いします」

と秋川夫人は別室に、しりぞいた。

女医は、毛足の長い毛皮をあしらった、ゴージャスなエナメルのパンタロンスーツを脱いだ。

エナメルのロングブーツだけの全裸になり鞭をしごく、したたか秋川の尻を打った。

「あっ」

「眼をさませ、この白豚め」

「おお、女王様」

ロングブーツの女医は、壁の鉤から秋川をはなした。

秋川は、どっと床に倒れた。

「女王様」

と秋川は夢遊病者のように訴えた。

「顔にまたがって下さいませ」

「顔にまたがれだど？」

と女医はいった。

「はい。この白豚の顔にまたがって下さいませ」

「またがって、どうするつもりだ」

「女王様のあたたかい、ご神水を、白豚めの口に戴かせて下さいませ」

「お前の口に、放尿しろというのか」

とロングブーツの女王はいった。

「はい。お願いでございます。女王様」

エナメルのロングブーツだけの女王は、秋川の顔を、またいだ。

「またいでやったぞ、白豚」

「しゃがんで下さいませ」

女王は中腰になって、

「もっと大きく口をひらくんだ、白豚」

と女王は秋川にいった。

鎖で縛られた不自由な身体をもたげて、秋川は口をひらいた。

「口の中に放尿してやるぞ。いいか」

と、女王が秋川にいったかと思うと、太い見事な尿流が秋川めがけてとび出していた。

「あっ、あっ」

したたかに浴びた秋川は、とび上がった。

息がつまり、呼吸するのが、やっとの状態

のようであった。

大量の尿が、秋川の口からあふれて、秋川の首や胸を濡らしていた。

「こぼすな、馬鹿」

勢いよく、ぶちかましながら、女王は秋川を罵倒した。

「みんな飲んでしまえ」

女王の尿流が、とだえたとき、秋川が、しきりに口を動かして、更にねだっているのを女王は知って、呆然となった。

「女王様に、大便をしてほしいのかい」

と、あきれたように女医は、いった。

「ああ、女王様」

と秋川は、呻いた。

「お慈悲です。奴隷の願いを、かなえて下さいませ」

ロングブーツの女医は、ゆったりと足の踏み場を変え、秋川の顔の真上に、まっ白な臀部を、落ち着かせた。

秋川の望みとあらば、秋川の口の中に大便を排泄したとしても、別にさしつかえはないだろう。男の口に脱糞するなんて、そうチャンスがあるわけでもない。しかし、そう都合よくでるものでもない。

待ちかねるように、秋川が頭をもたげた。

「くすぐったい」

とロングブーツだけの女医は、秋川の顔の上で身体を、もじもじさせていた。

「お待ち、すぐ上げるから」

と叱りつけた女医の、白い頬に赤味がさした。

「あっ」

と秋川が叫んだ。

見事なものが、秋川の顔にゆったりと降りかかったのである。

高度成長の加速的な変化の中で、未来は期待の対象であり、変化は、むしろ進歩の象徴として受け入れられ、内なる不安の声を封じ込めようとした。

日本人が不安に出会ったときに、よくやる手口。不安を直視しようとせず、変化をうけいれ、むりやり適応することで、不安を帳消しに、しようとする。

この過剰な適応に、やがて破たんがやってくる。眠れない、イライラする、感情の起伏が激しく、食欲がおとろえる。いわば、ノイローゼとしてのウツ症状。

さらに症状が進むと、目前のことしか見えなくなり、未来は真暗となって、自殺もしかねない。

この種の病気をひきおこす誘因が、社会環境の急激な変化にあることは確かなようで、サラリーマンだと、転居や転勤、定年、昇進の際、学生の場合だと入学後に発病することが多いという。

同時に、患者に共通しているのは、きちょう面なマジメ人間であることである。

働くこと自体が善であり、勤労、節約を美德とする伝統的な日本の精神風土の中でつくり出された防衛的性格。それが近代の解体と共に価値観が多様化して、破たんを来たしたのである。

社会とのつながりをさけて、自分の世界に閉じこもる自閉症的な空間の中で、むしろ未来から眼をそむけようとする生き方。

それは、人間の活力が低下してきた現われではないか。あるいは、人間のいちばん奥深くにある自我の深層からの疎外を意味する無気味な症候群なのである。

エナメル製のロングブーツだけで、何も着ていない女医は、軽く息ばっていた。

待ちうける秋川は、この瞬間には人間であることを忘れ、女王の人間便器に変身しているのに違いなかった。

夫と女医のアブノーマルな行為が気になっ

たのか、秋川夫人が顔を見せ、女医の排泄行為を、ただ呆然と見守っていた。

「奥様」

秋川の顔に脱糞しながら、女医は秋川夫人にいった。

「奥様は、御主人の口に、したことがありますの？」

秋川夫人は首を振った。

「それは、いけませんわ」

と、サディスティンの女医は、秋川夫人をじっと見詰めて、いった。

「これから毎日、御主人の顔にまたがって、奥様の尿を飲ませたり、便をたべさせたりして下さい」

「そんな……」

「それが病気の御主人に対する、奥様のおつとめですわ」

「――」

「ね、奥様」

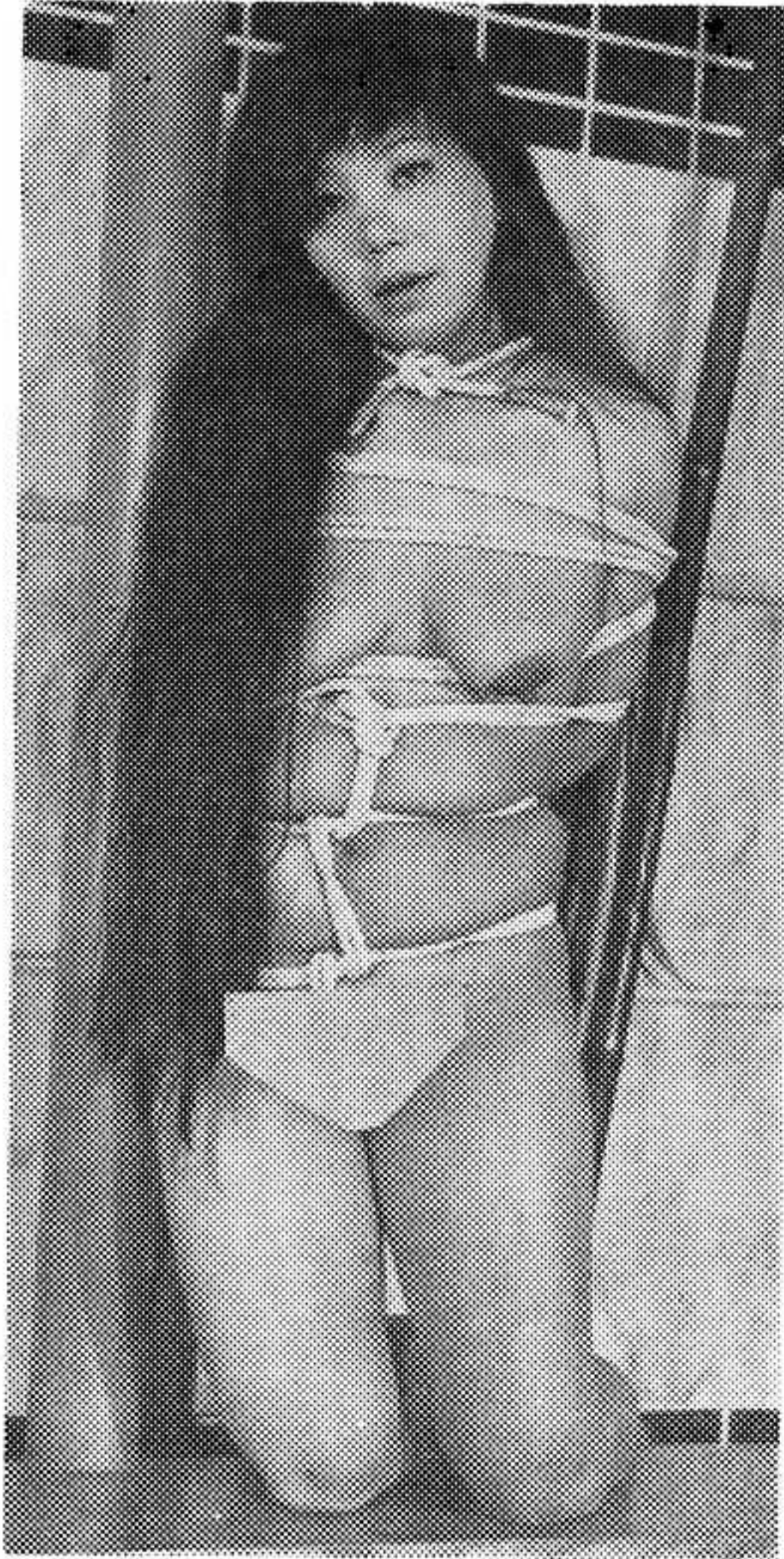
秋川夫人は、うなずいた。

秋川夫人が、夫を人間便器にすることによって、夫の未来が問い直されるかも知れないのである。

△マダム芙美代の饒舌▽

近日堂々開店

福井桃子



今晚は――。

お久しぶりネ。私って、夜になると頭が冴えてきて、こう、なんて言いますの、身体中に元気がモリモリしてきますのよ。

こんなのを夜型って言いますのかしら。日中はなんとなく、身体がだるくって、ねむいようなんですのに、街にネオンがともる頃になると、急に元気が出てくるんですのよ。

でもネ、この頃は昼でも忙しくって、そうもしておれないんですの。ソレ、この前に、お話したでしょ。お店を持つって――。

始めようと思ったら、なんでもかんでもやりたくなってしまうって、この間、周旋屋にかけあって話をきめ、手付金まで打ってきたってわけなんですのよ。

そりゃネ、今からだったら、時期が悪いから、秋まで待ってって、それから、ゆっくり考えても、遅くはない――って、言ってくれる友だちもいるんだけど、私って、やろうって考えだしたら、せっかちなのね。もう、お店が出来てしまったような気持になってしまうんですから、世話はありませんわ。

大分、ムシ暑くなってきましたけど、今年の梅雨って、男性的だと言ってた通り、夕チがいいようですわね。二日降ったら一日は

カラッと晴れて、割りと凌ぎよいですわ。

私ね、この間、ちょっと、イカス女の子を見つけたのよ。私がね、いつも行く化粧品店にいる女の子なんだけど、可愛い顔しててちょっとクズレタ感じの子なの。

ええ、身体はそう大きくはないの。小柄できゅっと締まってる感じで、全体に小作りなんだけど、バストやヒップはぐっと張っててプロポーションは、まあまあ、いいわよ。

私がね、化粧品を買いに行ったら、いつもべたべたと、身体を押しつけてきて、長いこと、お喋りするのよ。

「まあ、お姉さま。凄く、きれい。これなんかおつけになったら、私、いっぺんに、すがりつきたくなるわ。ねえ、お姉さま」

私の手に、その化粧品を渡すようなふりをして、私の肘に自分の腕をすり寄せてきて、身体をびったり密着してくるじゃないの。

それでいて、化粧品を売ることなんか、二の次、三の次で、私の指に自分の指をからませたりして、私の顔のことを、ほめたりなんかするのよ。

お世辞だとわかっていても、女って、自分の顔や身体のことをほめられると、弱いものなのネ。ついつい、余り使わない化粧品を

ったりして、彼女のお喋りの相手を、してしまふのよ。男の方が見てたら、あきれるくらい、つまらない世間話で、驚くほどの時間をつぶしてしまふってわけネ。

どんな話をするかって、ですか。そりゃあネ、女どうしですもの、流行歌手の噂話や、洋服や髪型の流行のこと、それにネ、女の身

体のことなど、いろいろと——。いっぺん、貴方の、そのテープレコーダーで、録音したら、面白いかもしれないワ。女性心理の研究に役立つかもね。

私ネ、ピンときているのよ。この子だったら口説いたら、ゆけるってね。そりゃ、私のカンなのよ。理由もへったくれもないんだけど





どもネ、私、これは断言できるわ。

私って、こんなに大柄で肉づきもよいでしょ。

私とは、全然違うタイプなの。トランジスタ・グラマーって感じネ。だから、話していても、こうぎゅっと抱きしめてみたって、いう気が起きる子なのよ。

目は、ぱっちりとして、商売柄、ツケマツ毛も割合、長いのをつけてんの。だから、お人形みたいな顔で可愛いいの。一度、貴方に紹介してあげたいと思ってるのよ。

S Mについて関心があるかって、ですか？ そこまでは、私にはわからないわ。でも、今度行ったとき、それとなく、S Mのことを話題にして、どの程度の知識を持って

るか、探ってあげてもいいわ。

お店番してるんだもん、見たけりゃ、いつでも見に行けるわよ。私の連れになって、冷やかしに行ってもいいし、貴方が恋人にプレゼントする資生堂の化粧品セットを買うふりをして偵察に行ってもいいじゃない——。

ううん、その店では若い女の子は、その子一人だから、すぐわかるわよ。なんだったら今から一緒に行って、私たちのお喋り、録音にとってみる？

スナックのお店を開いたらネ、私、こうしておれなくなるのよ。貴方のお相手を、ゆっくり出来るのも、それまでって、わけネ。

でも、私って、気まぐれなのね。お店がイヤになったら、なんでもかんでも、やめたいって思ってるネ。そう思い出したら、早くやめたくて仕方がなかったんだけど、反対に、やりたいって思い出したら、今度は、なんでもかんでも、早くやりたいのね。

せっかちって、いえ、せっかちなんだけど、これも生まれつきのタチなのね。

それはそうと、私、ここ二日ばかり、お風呂へ入ってないんだけど、ゆっくりにとお風呂へ入れて、冷蔵庫から冷えたビールを自由に出して飲めるようなところへ、連れてって、く

れない。喫茶店なんかより、私は、その方が有難いのよ。

SMプレイが出来るかって、ですか。そりゃ、モチOKよ。貴方にしちゃ、もう珍しい身体でも、ないでしょうけど、この身体を、まだまだ、見きわめていないんだったら、どのように、料理して下さっても、私しゃ、かまいませんのよ。

ええ、お腹はすいてませんの。朝ヒル兼用のを、さっき頂きましたので、次はプレイの後で、お夜食でも頂戴できたら結構ですわ。

今となっては、夜道に日は暮れない——って言いますから、もう日は暮れませんかものね送ってさえ下さるんだったら、明日の朝まで何時までも、お相手させて頂きますわ。

あら、今日は早くお帰りにならないと、いけませんの。そりゃ残念ですわね。寝物語まで、ぼっちテープにとって頂こうと思ってましたのに、なんだか損したみたい。これは冗談ですけど——。それじゃ無駄話は、これくらいにして、ぼつぼつ出かけましょうか。

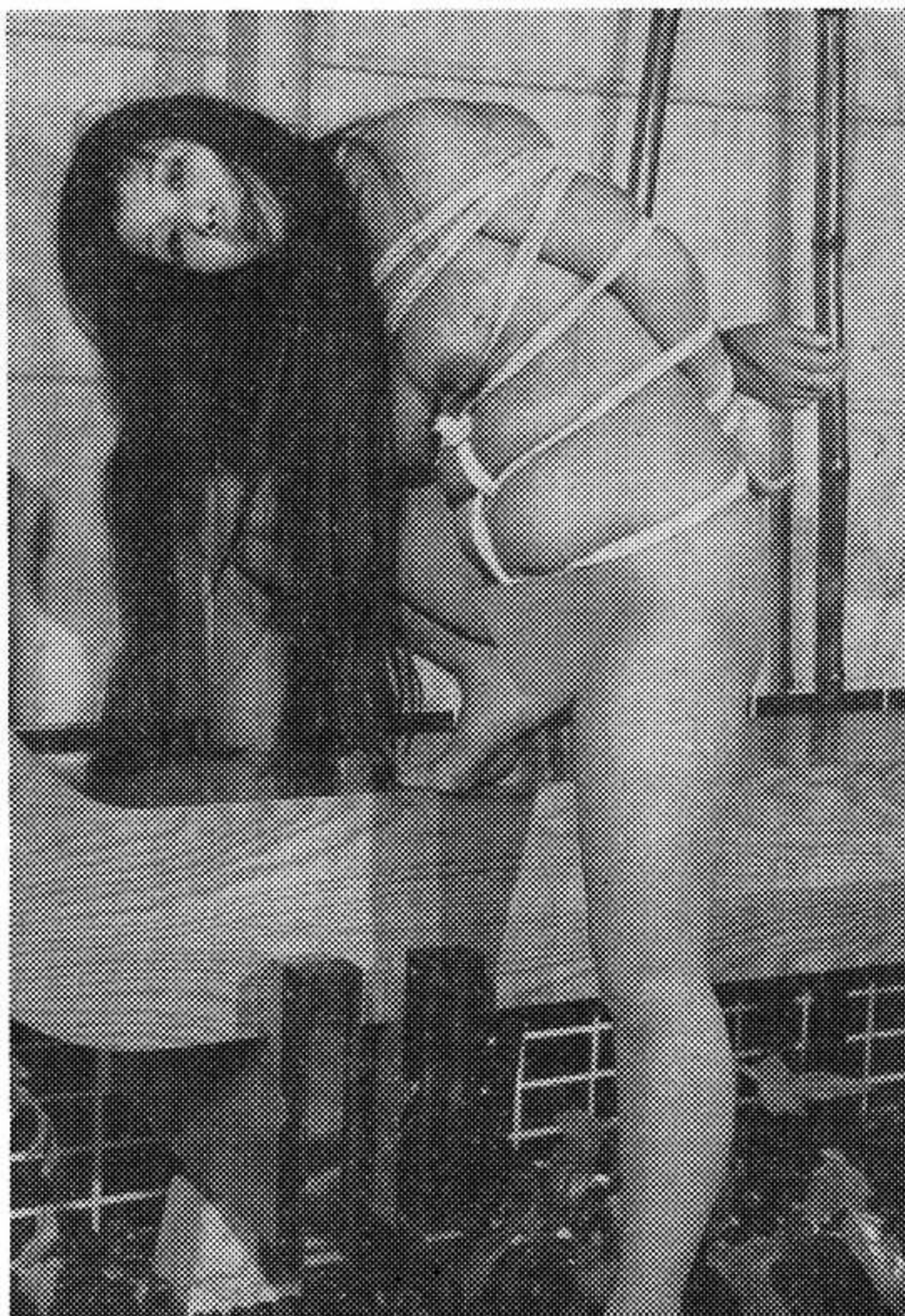
私ってネ、正直に言いますと、二、三日も一人でいたら、こう何て、言いますのか、身体中が熱くほてって、かゆくなくなってきますのよ。どこがって？ そんなこと、はっきり言

わせないで下さいましよ。縄でぎゅうぎゅう、思いきり身体中を縛り上げられて、ムチでお尻をぶたれたいって、そんな変なことを考えだしてしまいますのよ。

そんな経験が何度もあるからでしょうネ。そのあとではすぐにはネ、もう二度と、こんなことはしないでおう、——と思いますのよ。私でもね、やっぱり。それが、五日か一週間たって、その時のことを思い出しますと、もう身体中が、じりじりしてきて、とても、たまりませんわ。

もう、どんなに痛く縛られたって、いいって、思ったりしましてネ。一旦、そう思いたったら、次には、どんな素晴らしい責めが、新しく私を待ってるか——、いや、必ず待ってるって考えて、SMプレイをやりたくって、仕方ありませんのよ。





こんなのを欲求不満って、言うんでしょうかね。私には、むつかしいことは、わかりませんけど、とにかく、そんな時は、身体中がむずむずしてくることは確かですわ。

だから、今度も、わざわざ来て頂くよう、私の方から、恥を忍んで、お誘いの電話をしたって、わけですよ。この私の発作を止め

て下さるのは、今のところ、貴方だけでものね。私の身体の構造も、弱い所も強い所もみんな御存じなんだから。オホホホ、私、かないませんのよ。

はい、はい。どんな、お言いつけでも、おっしゃる通りお聞きますから、どうか、こんな私を思いっきり責めて下さいまし。少々

のことなら肌に傷がついたって、誰もとがめる人もありませんから、思う存分、荒縄で縛り上げて、いじめて下さいませ。

痛いことや、苦しいこと、それに恥かしいことだったら、私はいくらでも辛抱します。いや、辛抱しますなんてことより、その方が私の心も身体も、うれしいんですわ。

変でしょ。こんなことを思うなんて——。縛られたり、責められてるときがいっていうより、あとになって、思い出すときの方がいいんですもの。それも、三日か四日たってちょっと、油がきれかかってきた頃になって、むしように責められることが恋しくなってきた、もう身体中が、むずむずしてしまいたまらなくなってしまうの。

あら、だからといって、そんなに手荒に縛られたら、肌を縄と縄で挟んで、痛とうございますのよ。女って、不思議ですわね。いじめられたいって、考えているのに、やはり手荒なのは好まないんですの。いたわってほし

いって気持が心の奥底にありますのネ。
男に甘える気持が、そうさせるのかと思いますけど、女心って不思議なものですわね。だから、女心を掴もうと思ったら、ただ、ムヤミヤタラに縄で縛りまくったり、血が出



るまで痛めつけたりしたらダメなわけね。甘えたいっていう女の真の気持を、いたわってやらないひとは、SMプレイをやる資格はないと思うんだけど、どうかしら？

あらあら、大変なことを言ってしまったて、お気にさわったら、ごめんなさいネ。

私のお店が出来たら、また奇クの読者の方を誘って来て下さいませね。お待ちしてましてよ。どうせ、開店そうそうは、そんなに、

はやるわけありませんから、せいぜい、サービスさせていただきますわ。

SMについてのお話だったら、私、毎月、奇クは読ませてもらってますから、なんだかんだと、マニアの方々のお気に召す話題も提供出来ると思いますの。そうなんですよ、両刀使いって言いますの。私でしたら、Sの話でもMの話でも、どちらでも、同じように、お相手いたしますわ。

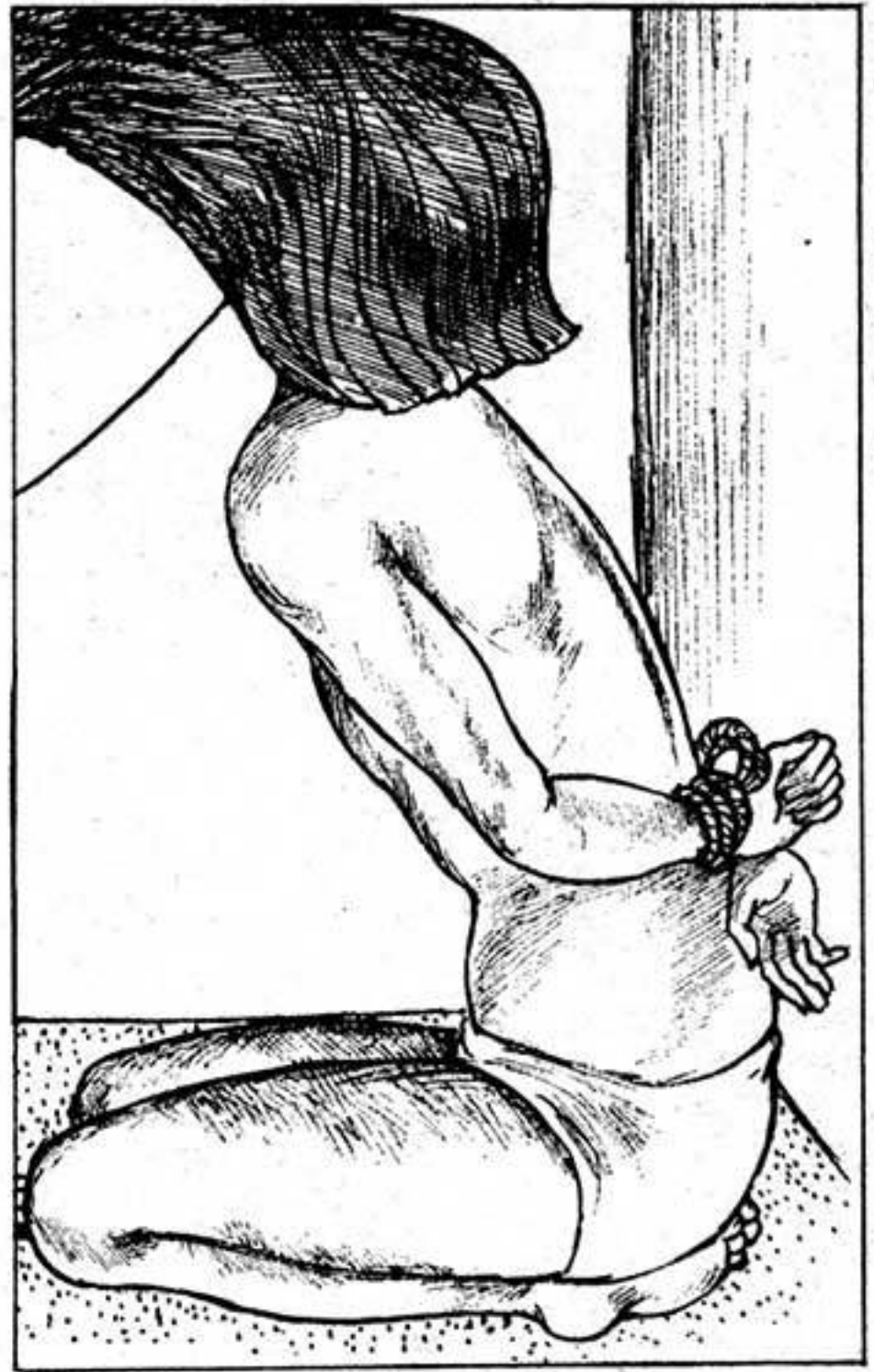
もちろん、Mのお客さまにだったら、たっぷり濃厚なマゾのムードを、ふりまいてあげしますけど、マダム美美代は体格がいいので、ちょっぴり怖いかもしれませんヨ。特に欲求不満の発作の時にめぐり合ったら、そりゃ、ヒドイことになるかもしれませんヨ。私の体験って、いうのも、次の機会に、またお喋り出来ると思いますわ。

Sの方ってですか？ この方は、昨年から奇クに私のことを載せてもらっていますからよく、御存じの通りですわ。私って、お喋りですから、言わなくてもいいことまで、あらざらい喋っちゃまって——。ほんとうに、今では恥かしくって、仕方ありませんの。

こんな私でよかったら、お店を開いたら、ちよいちよい、お遊びに来て下さいネ。そのとき、虫の居どころによったら、カンバンになってから、おつき合いしてもいいですわ。

お店の名前ってですか？ それは、まだ考えてませんの。いい名前があったら教えて下さいませんか。『美美代の店』っていうのも、どうかと思ってんですけど、なんだか平凡でしょ。もっと奇抜で、SMに関係した名前がほしいと思ってんですけど——。

カット・春川ナミオ



あたしのおつゆ

「かつ子という女に会った事ありませんか」
 「ああ、はなしは聞いてるけど、まだ会った
 こと、ないんですよ」

「凄い女ですね。なおみに劣らないSの女性
 ですよ」

馬場氏の目が、かがやく。

バー「プペ」のママのなおみが百軒店の暴
 力バーにいた頃の同僚で、当時は、なおみが
 かつ子と言ひ、かつ子が、なおみという名だ
 ったのを、二人がやめる時に、お互いの名前

を交換したのだということ聞いていた。

なおみも、かつ子も、その後、バー勤めを
 して、なおみは小さいながらも店を持つよう
 になったが、かつ子はキャバレーやらバーを
 転々として、いまだにホステスをやっている
 という。「プペ」には、よく遊びに来るとい
 うが、私は、まだ会ったことはない。

「凄いって、どう凄いんです？」

「いや、その、ちょっと口ではいえませんが
 ね。会ってみれば分かりますよ。今晚あたり
 来るんじゃないかな」

「じゃ、行ってみましょうか」

馬場氏も要領がいい。プペの新しい材料を

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(30)

(宮下秀世の巻Ⅱ 1)

鬼 山 絢 策

提供して私の気をひき、誘い出すのである。

梅雨が、しとしとと降って、何か人をイラ
 イラさせ、陰気くさい夜だった。

道玄坂の通りはネオンが雨に煙っていた。
 ところが、こういう日は誰しも一ぱいやっ
 て憂鬱を払いのけようと思うのか、坂の中途
 から恋文横丁に入ると、意外に人通りが激し
 く、どのバーも混んでいようだった。

「プペ」の扉は厚い木の一枚板で、外からは
 中の物音ひとつ聞こえないが、扉を開けると
 有線放送のレコードがウワーンと流れ、酒の
 香が全身に、かかってきた。此処も一ぱいだ

った。といっても客は四、五人だが、それほどぼーぱいになる。顔見知りの馴染み客が多かった。

詰めてもらって、やっと二人、坐れた。

タクシ一の運転手で松ちゃんという、この店では一番よい客で、なおみが百軒店にいた頃から知っている男が来ていた。丁度、隣へ坐ったので、

「かつ子という子を知ってますか」

と聞いてみた。

「ああ、あいつアだらしのねえ女でね。いまだに『姫』という大和田のバーでホステスやってますよ。ばくちと男に入れあげて、うだつが上がらねえんでさあ。そこへ行くと、このママは、りこうだよ」

「またまた——」

なおみが松ちゃんを、にらむ。

「そうねえ、百軒店にいた頃は、このママに劣らぬ腕ききだったね」

「ダメよッ。そんな話をする、もう御来店お断わりだからね。知らない人は、ほんとにするよ」

なおみは酒の肴に、ふろふきを出した。

「凝ったものが出るねえ」

なおみは荒っぽいカサカサした女の癖に、

料理を勉強していて、家で煮つけた野菜などを出す。昼間、これだけ手間をかけて仕込むのは骨が折れると思うが、それだけ店を大切にしているということである。

「こりゃうまい。一流の料理屋顔負けだよ」

「そうでしょう。アク抜きが、むずかしいのよ。それに、この味噌、おいしいでしょ」

「うん、味噌の味がいい」

「二種類のお味噌とお酒で味つけするのよ。それに、いいもの、入れるの」

「いいものって、何」

「あたしの、おつゆ。アッハハハ」

「ウーン、利いたな。それで、うまいんだ」

なおみは冗談にめかして存外ほんとのことという女である。あるいは、ほんとに入れているのかもしれない。

ガヤガヤと騒いでいるうちに、十二時を過ぎたが、かつ子という女は現われそうもないので、帰ろうと思った。

「いつも六時頃、来るのよ。かつ子に会いたいの。何で？」

「イヤ、鬼山さんがね、是非、会いたいわうもんだから」

馬場氏も、この頃は冗談がいえるようになり、少々、人が、わるくなった。

「アハハ、パパが会いたいでしょ」

なおみは、ちゃんと見抜いていた。

電話がかかってきた。なおみが出る。

「ええ？　しょうがないわねえ、あの子。そんな具合じゃ、今日はダメよ。約束が違うって、あたしにいったって困るわよ。ダメよ。お店、お客さん大勢、来てるもん。抜け出せないわよ。こっちへ来なさいよ。とにかく、かつ子も連れて来なよ。あたしが、よくいつてきかせるからさ。ネ、ふん、何いってんのよ。話つけてあげるから、連れておいでよ」

電話を切ると、

「お待ち兼ねの、かつ子が来るわよ」

それを聞いて、腰を浮かしかけた馬場氏がまた、落ちつけてしまった。

「だって今、かつ子からじゃないんだろ」

「うん、社長さん。ホラ、例の」

「ああ、建材会社の、宮下とかいったな」

私のポケットには、まだ宮下氏の名刺が入っている。あの薄はげの、小肥りに肥ってチヨビひげを、はやした顔が浮かんだ。

「あの社長さんも方々で飲んだな」

「そうじゃないのよ。あたしが、かつ子を紹介してやったのよ」

「へエ、そりゃまた、友情が厚いね」

「フフ、わけがあるのよ。あとで話すわ」
 だが、なかなか来なかった。そのうち十二時になり、かんばんになった。他のお客も皆帰った。そこへ又、電話が掛かってきた。

「しょうがないねえ。よしよし、じゃ、こっちから行ってあげるわ。もう、かんばんだから。ただし、お客を二人、連れてくからね。何さ、あんたの知ってる人だよ」

電話を切ると、なおみはサッサと片づけはじめた。

「サ、行こ。たまにゃ違った所で飲むのもいいでしょ。あたしが、おごるわ」

手ぎわよくグラスや、びんを洗って棚にしまうと、ダスターを、きちんとスタンドにのばして乾した。

明るい女・暗い女

雨はまだ降っていた。道玄坂の店はネオンも消えて淋しかった。通りを渡ってガード下のすし屋で、ちょっと腹ごしらえをした。なおみは、この時間になると腹が、すくらしい。

大和田のバー街は、私はあまり行ったことがないので地理に暗いが、ロシア料理のロゴ

スキーの先を曲がったところに五、六軒、かたまっている。みな灯を消していたが「姫」という看板の出ている店の扉を、なおみは押した。

ここは五軒ぐらいの、このあたりでは大きい方の店だった。

「いらっしやいませ」

四十ぐらいのママが丁寧に頭を下げた。

「かんばん過ぎで悪いわね。こちら、うちの一番のお客さま」

スタンドにはバーテンが一人、いて、ボックスに宮下氏と、かつ子がいた。

私達はスタンドに腰かけた。

「ホステスさん、何人ぐらいいるんですか」

「五人、おります。もう、かんばんだもので帰しましたが。どうぞ、ごひいきに……」

上品なママである。

「どうしたんだよ」

なおみはボックスの方に行き、かつ子に声をかけた。

「どうもこうもないよ。今日はダメだっていうのに、しつこいんだよ」

「だって、約束したじゃないか」

宮下氏は機嫌が悪い。

「こんなに酔わせちゃっちゃ、しょうがない

じゃないの。今夜は無理ね」

「だって、ちゃんと準備をすませてあるんだよ。ホラ、あすこさ。あすこに荷物も運んであるんだから」

宮下氏は私達の方を気にしながら、小声でなおみにいっている。

「きいさん、パパこっちへ来て飲まない？」

「じゃあ、あたくし失礼させて頂きます」

ママが丁寧に、頭を下げた。

「いいわよ、ママ。悪いわね、遅く来て。浩ちゃんも帰っていいわよ。あとは、かつ子とあたしでやるから」

ではと、私と馬場氏は手に手に徳利と盃を持ってボックスへ移動する。バーテンの浩ちゃんがおつまみを運んでくれて、「では、お先に。あとは御願います」

ママとバーテンは帰った。

宮下氏をはさんで、なおみとかつ子が坐り向かいの椅子に私と馬場氏が坐った。

「どうも……」

「いや、どうも……」

宮下氏はテレくさそうに挨拶を返した。かつ子という女は頭を金髪に染め、かなりどぎついメイクアップをしていた。二十七、八ぐらいだろうか。やせぎすで、きつい目を

した女で、私は直ぐ芳村真理を想い出した。スカートで捲くり高々と足を組んでいた。細くて恰好のいい足だったが、私には魅力がなかった。

馬場氏がニッコリ笑って黙礼したが、かつ子は挨拶を返さなかった。座が白けた。

「どうしたのさ。みんな一つ穴の、むじななんだからさ。気取ることはいないんだよ」

なおみが徳利をとって私達に酌をする。

「イヤ、もう遅いし、わしは帰るよ。おい、かつ子。送ってってやるよ」

「うるせえな、この変態爺い！」

かつ子は宮下氏の禿頭に手をかけてグイとおじぎさせるように前へ倒した。

「これだからな、どうしようもないよ」

宮下氏は、なおみの耳元で何か、ささやいた。

「ええ？ あたしに乗り換えようっての。フフ、そりゃ無理だよ」

と大きな声で、すっぱ抜いた。

「この爺い、あたしと約束しておきながら、裏切ろうてのか！」

また、かつ子の手がのびて、宮下氏の頭を下げさせると、その首根っ子に太股をデント乗せて、おさえつけた。

「おい、何するんだ。乱暴は、よしてくれ」
「乱暴だって。フフ、お体裁のいいこと言わなかったって、いいんだよ」

かつ子は煙草を横ぐわえする。前に坐った馬場氏がマッチをする。火をつけさせながらかつ子は私を、じっと見ている。切れながで鋭い目だった。強烈なサジスチックな電波のようなものが、私を刺してきた。

「これだな。馬場氏はこの目に参ったのだ」

ホモの人々は、パッと目を合わせただけで自分の好みにマッチするかどうかを見抜くというが、SMも同じだ。Mの女性は、Sの男性から、ひと睨みされると、身体がすぐんでしまつて、宿命的な束縛を、すでに受けてしまふといわれる。Mの男性も、このたぐいの女の目のひかりに弱い。

しかし実際は、どうだろう。

かつ子が、じっと私を見たのは、私を観察していることは間違いないが「この男はMだろうか」ということではなく「この男からはどのくらい金が絞れるだろうか」ということを観察していたのではあるまいか。

暴力バーにいと、まずその目を養うのが先決だという。

どうもSMのムードが、もり上がりかけた

ところで、それをぶちこわしてしまふようなことを書くのが私の悪い癖であるが、事実しかたがない。その時、私は私で、そういう風に彼女を観察していたのだから。

ひとつは、かつ子という女が私の好みのタイプではなかった（目だけは別だが）比較的、冷静に判断し観察できたのだと思う。

馬場氏は、こういうタイプの女性に弱いのだろう。

かつ子からは、何か荒んだ、なげやりなものが感ぜられる。かつては同じ職場で同じようなことをしていた、なおみが、かつ子と同じように振舞っても、この荒んだ感じが受けとれなかった。

昔は知らず、いまは、なおみは底抜けに明るく、かつ子は暗い、よどみを感じられるのだ。

「おい、ちょ、ちょっと、どかしてくれよ。トイレだよ」

宮下氏は、かつ子の足を両手に持って、そつと、どかすと、トイレに立った。

変性マゾ

「あの年で、おさかななことだね」

私がいうと、なおみはドシツと身体を、ぶっつけながら、

「違うんだよ。あの人、ちょっと変わってるのよ」

かつ子と目を見合わせて笑った。

「何だい。要するに、マゾなんだろう」

私は無難作にいつてのけた。

「うん、マゾの男なんて、一ぱい、いるよ。ここにも、いるじゃないか」

なおみは馬場氏を横目で見る。馬場氏はニヤリと笑う。かなり、場馴れてきた。

「それが、もうひとつ、変わってるのよ」

「どう変わってるんだい。飲むのが、好きなのか」

「そんなの当たり前じゃないの。あいつはね女になるのよ」

「エエ？」

「自分が女になるの。女の気持になるの。そして、女の方に男になってもらうの。分かった？ ふふふ」

なおみが説明している間、かつ子は私と馬場氏の表情を、じっと見ている。私には、いやらしい感じがした。

「あの禿頭が、女の言葉を使うんだからね。」

それで、あたし達には男の言葉を使ってくれ

と頼むのよ。それも、うんと乱暴な、やくざのような言葉で悪態をついてくれっていうのさ。はじめは、そうやってたのが、だんだん凝り出してきちゃって、この頃は女の着物を着て、かつらをかむって……」

その時、宮下氏がトイレから出てきた。

改めて宮下氏の顔を見る。

頭は「すだれ型」というやつで、毛が三筋ぐらい禿頭を横切っている。丸くて頭よりも頬の方が大きく、極端な表現をすると、だるまを平べったくしたような形である。額に太い、しわが刻まれ、目は三角で、まあ醜男の部類に入るだろう。第一、色が黒くて男っぽい顔で、おまけにチョビひげと来ては、この顔は、どう化粧してみたところで、とても女の顔にはならない。

男としてみれば、一応貫禄もあり、風采も堂々としているのだが、この人に、こんな性癖があるとは思えなかった。

宮下氏は、立ったまま坐ろうとせず、

「わし、帰るよ。今夜は帰らせてもらうよ」

「だめだよ。帰さねえよ」

かつ子がジロリと、にらみつける。

「そんなこと言っただって、お前。じゃな、先へ、あそこへ行ってるからな。待ってるよ。」

きつと来てくれよな」

「だめだよ。行かねえよ」

かつ子は煙草を輪に吹いて、あざ笑う。

「あした、朝が早いんだ。大切な用件があるんだよ。だから、早くに言ったのに……」

「フン、そんなもん知るかい。てめえの都合ばかりいいようにしようと思ったって、そうは行かねえんだよ。つべこべ言ってねえで帰りたいさサツサと、てめえ一人で帰れ」
「そんなこといったって、今日と約束してくれたんじゃないか。プペのママだって、今日の約束のこと、知ってるよね」

宮下氏は又、かつ子の隣へ坐りこんだ。

「かつ子、行ってやんなよ」

なおみが、とりなした。

「なにもやらないっていつてるんじゃないんだよ。面倒くせえ。やるなら、ここでやってやらあ」

かつ子はパツと立ち上がると、宮下氏の頭へ足をかけて、顔をテーブルへ押しつけ、パツとスカートを捲くって、顔の上へドカンと跨がった。

スカートを頭からかぶせると、グリグリと尻を振った。

「あ、痛てッ。やめてえー……」

宮下氏が、とんでもない高い、女の悲鳴の
ような声を出した。

「何いってやんでえ。てめえから頼んどきや

がって。こん畜生ッ！」

両手を腰に当てて、尻に重味をつけながら
かつ子は私や馬場氏の顔を見る。かつ子に見



イメージギャラリー

『女郎蜘蛛』

岡

たかし

つめられると、馬場氏は目をおとした。

なおみも、こういうことは得意である。

だが、なおみのやり方を見た時は、凄い女
だと思ったが、今こうして、かつ子のやっ
てるところを見ると、なおみの方が女っぽく感ぜ
られた。なおみのは「女がやっている」とい
う色っぽさがあったが、かつ子のは姿かたち
は女でも、言葉つきや振舞いが男っぽく、ギ
スギスした感じで、丸味がなかった。

「お、おい、やめてくれ。だめだ」

宮下氏は、今度は男の声でスカートの中で
うめいた。

「この黒ブタめッ」

かつ子は乱暴にスカートを捲くって、その
中を我々に見せた。

細い足も根元は太く、平べったく宮下氏の
顔を、はさんでいた。

宮下氏は、かつ子の両足を抱えて、スツと
首を股の下から抜きとった。

「乱暴するのは、よせよ」

宮下氏の顔は羞恥で、あかぐろかった。

「何いってやんでえ、この野郎。恥かしいが
柄かよ、いい年して」

かつ子はソファに腰を下ろして足を組み、
「大体お前はね、勝手すぎるよ。恥かしい目

にあいたくて、あたしに頼んだんだろ。だったら、人前でやられるのが効果が上がっていいじゃないか。あたしだって恥かしいよ。人前で、こうして大切なところで、さらけ出さ。男みたいな声、出してさ。それも、お前のためを思ってこそ、やってやるんだよ。それに何だい。てめえだけのことで考えて、あたしのサービスのことまで頭がまわらないのかい。この馬鹿野郎！」

このかつ子という女は、どうかすると凄いほど、きれいに見える時がある。金髪で顔の化粧も外国の女のようなメイクアップなのでソフィア・ローレンみたいな冷たい感じだが鋭い美しさ、といったような凄艶さが、にじみ出ることがある。

「てめえは、ほんとにエゴだよ。こうやってお姐やお客さんが来てくれたのに、顔見るそうそう帰るなんて、失礼だとは思わないのかい！」

これは道理だった。酔ってるようでも、かつ子は存外しっかりしている。

「いや、これはわしが悪かった。あやまる」

「当たり前だよ、馬鹿！」

「いいのよ、社長さん。お客さん達は、あたしが勝手に連れて来たんだから、放っというた

っていいのよ。あたし達で飲むから。かつ子が凄い美人だから、ひと目、見せてあげようと思って、お連れしたのよ。いいから、かつ子。もういい加減に社長さんの望みを叶えさせておあげよ」

「ほんとに勝手な野郎だよ。どうしても、あたしにやってもらいたいのか」

「だって約束したろ。部屋も、ちゃんとつてあるし……」

「じゃ、そこへ両手をついて頭を下げたオレにお願いしろ」

「そんなこといったってお前、何も……」

「何が何でえ、土下座しろ。床に額をすりつけて、オレ様をお願いしますと言え！」

かつ子は隣に坐っている宮下氏を突きとばした。目がすわって、ちょっと気狂いじみた顔になっている。

今度は、こっちが気をきかす番である。

かつ子の荒れようを見物したいのは、やまやまだが、どうやら我々二人が邪魔者であることは確かだ。

「さてと、我々も帰りましょう」

と馬場氏を促した。私にいわれて馬場氏もようやく気がついたようだった。

「あら、いいのよ。もっと飲んでらっしゃい

よ」

「イヤ、もう、だいぶ遅いから。かつ子さんという、すばらしい美人の顔も拝めまし」

「あら、フッフ、それほどありませんわよ。アッハハ」

「今度は此処へも寄らせてもらいますから。なあ、ママ。いいだろ」

「どうぞ、ひいきにしてあげてね」

「じゃ、勘定」

「いいのよ、今夜は。あたしの、おごりよ。社長のサービスだよ。ねえ、社長さん」

宮下氏は機嫌よくなっていた。

「ま、もう少し、お飲みになったら、いかがですか」

心とは、うらはらな、おせじさえ出た。

「いやもう、じゃ今日は御馳走になります」

「じゃ、あたしも帰るわ。かつ子、行ってあげなよ」

「分かってるわよ。心配しなくて」

「どうも失礼しました」

「いや、どうも——」

なおみが、かつ子に何か耳打ちしている。

私はトイレに立ち、それから「姫」を出た。

馬場氏が、あとに続いた。なおみも追ってきて、

「帰るの？」

私を見、チラと馬場氏を見た。

こうして見ると、やはり、なおみは、かつ子より数段きれいだし、魅力的である。馬場氏さえいなければ、なおみを誘うのだが、馬場氏は、ほんとに気がきかない。

青柳のお勝

その後、プペへ何度か行っているうちに、ある夜、かんばん近くなって突然、かつ子がボタンと扉を開けて、自分の店のようにして入ってきた。

「おねえ、すまないけど一枚、貸してよ」

店には私とムーさんがいたが、客の方へは目もくれず、なおみのところへ一直線に行って話しかけた。

「また、麻雀だろう。だめだよ、負けるんだから。いくらやったって敵わないよ」

「いいから、いいから。あたしの道楽だもんしょうがないじゃないの。またアレで返すからさ」

「こないだ、社長さん怒ってたよ」

「あら、何で怒るのよ。喜んでたよ。こないだは、思いきりやってやったんだから」

「もっと早くやれば、いいんだよ。翌日、眠くて疲れちゃって仕事に、さわったといってたよ」

「だって、お店は、ちゃんと、かんばんまで勤めなきゃ、信用にかかわるもん。それに給料も引かれるし」

「その分は、ちゃんと社長さんが出してるじゃないか。何が信用だよ。時々勝手に休んでるじゃないか。ママが、こぼしてたよ」

「分かった分かった。ねえ、貸してよ。ちゃんと返すんだから、いいじゃないか」

「貸してあげるけどね、少し遊んでゆきな」

「うん、よかった」

貸してもらえると分かったと、ようやく腰をおちつけ、私達の方へ目を向けた。ムーさんは何か気にさわったらしく、プイと帰ってしまった。

「こないだは、どうも」

「あら、あん時の、お客さんね。今夜は、も一人の人、どしたの」

「いつも一緒とは限らないよ。ホモじゃないからね」

「あの、も一人の人。あの人も、ちょっと変わってんじゃない？」

さすがに、かつ子の目は鋭かった。

「うん、まあね、社長さんほどじゃないがねあんたのきれいにさに見とれていたよ」

「あれ、ママのパトロン？」

「そうじゃないよ。どうして？」

「だってパパ、パパっていつてるじゃん」

「あの人、馬場っていうんだよ。ババをパパに変えただけだよ」

「何だ、そんなのか。でも、他のお客さんがほんとのパパだと思うよ」

「まさか。ほんとのパトロンを店でパパ扱いするバカじゃないよ」

「でも若い人は、そこまで気が廻らないよ」

「そんならそれでいいんだよ。虫よけになるもん。思う奴には思わしとくのさ。ほんとのパパは別にいるよ」

なおみは私を見つめて笑う。何だか私がパトロンだというように、私は受けとったのだが、これはうぬぼれもいいとこで、私はパトロンらしいことは何一つしてないから、まあパトロン候補ぐらいに、うぬぼれておこう。

かつ子はチラと私を見て、

「ああそうかそうか。そんならいいんだよ」

早呑みこみもいとこで、ひとり合点している。だがパトロン気取りで、こうして鼻の下をのばしている気分は悪くない。

「あの社長さん、恥かしがり屋だね」

私は、かつ子と宮下氏が、どんなプレイをしたか知りたいが、どんなことをしたとも聞けないので、話題を、そっちへ切り替えた。

「うん、とても対面を重んじるのよ。だからこの店へ来た時は、あの方の話はタブーなのよ。社長さん社長さんって言ってやってりゃいいのよ。かつ子、家へ連れてきた時は、あんなことするんじゃないよ。あの人、絶対、秘密にしてるんだから」

「フン、何が社長だい、車掌みたいなツラしてやがって」

「いない時や、いいけどさ。やっぱり立てるところは立てなきゃダメだよ」

「社長なら社長らしく、切れるところは切れなきゃ、ダメじゃないか。ケチケチしやがって。こんだ、値上げだ」

「いくら、出してんの」

私は、なおみに聞いた。

「七千円」

「えらく、はんばだな」

「でしょう。もうこんだ、一枚だ」

かつ子は私に相づちを打つようにいった。

「でも、本番やらないんだろ」

「当たり前よ。誰が、あんな豚野郎にさせる

もんか。ケツ舐めさせてやるのが身分相応だよ」

「それじゃ楽じゃないか。悪くないヨルバイトだろう」

「そうでもないわよ。本番の方が楽よ。仰向いて寝てりゃ、いいんだもん。あれは結構、重労働だよ」

「でも先方の方が、もっと重労働だろ」

「そりゃ、好きでやってるんだもん、当たり前じゃないの」

「あんただって好きだろう。男、虐めるの」

「好きじゃないよ。そりゃ、もう少しマシな野郎なら、こっちもハッスルして責めてやるけどさ。あんな豚野郎じゃ。それに、しつこいんだから」

「しつこいって、どういう風に」

「色んなサインがあるのよ。例えばね、もう勘弁してくれといった時は絶対、許さないでもっと、やってくれてことなのよ。だからこっちが一服していると膝に顔をこすりつけてきて、ねえ、もう勘弁して。ね、もう勘弁してって催促するのさ」

「なるほど、そいつあ傑作だ」

「それがさ、女の声でいうんだからね。島田のまげのかつらだよ。口紅まで、あのガマ蛙

みたいな口へ塗りたくるんだよ。チョビひげはやしてて、口をまっかにするんだからね。この変態野郎、いい加減にしがれ。っていいなくなるわよ」

「野郎っていうと、あの人、怒るだろう」

なおみが私の盃で飲んで返してきた。

「うん、プレイしてる時は野郎は禁物なんだよ。女になってんだから。こっちは男さ。だからオレっていうのよ。コラッ、オレのせがれ、舐めろっ。なんてね」

「せがれ、ないじゃないか」

「あらいやだ、はずかしい。へんなことまで聞かないで」

かつ子は腕で私を押してきた。こんな時だけ、女らしくなる。

「恥かしいってガラじゃないだろ」

と、なおみが笑いながら、いう。

「おねえだって相当なもんだよ。ねえパパ。相当、絞られてんでしょ」

「うん、まあね」

「あら、いつ、あたしが、あなたを絞った」

なおみが私に文句をつけてきた。

「大体ねえ、あの豚野郎だって、おねえが仕込んだんだよ。そのお古を、こっちへ廻してよこしたんだから」

「コラ、かつ子。お前、そんな風に思ってるのかい。お前が金に困って、小遣いが稼がたいというから、廻してやったんじゃないか。そんな風に思ってるなら、もう廻してやらないよ」

「だって、あいつは、もうあたしに参ってるんだよ。おねえが取次がなくても、じかに交渉するわよ」
「おや、それで仁義が立つと、思ってるのかい。もうお金なんか、貸してやらないよ」



ナミオM画廊

『強奪の代償』

春川 ナミオ

「ああ、ゴメンゴメン。おねえにあっちゃ、さすがのあつしも、かなわねえよ」
かつ子は巻き舌で男の口調で言うのとニヤリと笑って私にウィンクした。
「何だよ。きいさんにモーションかけたら承知しないよ」

なおみはチャンと見ていた。かつ子の男の声は丸山明宏の声に似ている。

「いまの調子で社長さんにやるのかい」

「ふふふ、あんたは、どうなの？」

「またまた、ヘンなこと聞くんじゃないよ」

「私は男っぽい女は、きらいだよ」

「だったら、おねえだって男っぽいじゃないの」

「いや、そんなことはない。なおみは女らしい女だよ」

「そうかねえ。じゃ、猫かぶってるんだ」

「ヘエ、そうかい。なおみも凄いかい」

「凄いの何のって、怒ったら、あたしなんかより、もっともっと凄いのよ」

「ヘエ、おどろいたなあ、そうかねえ」

「アハハ、なに空とぼけてんのよう」

なおみは、いきなり私に抱きついてキスしてきた。

「ウワ、こりゃ凄いの。なるほど、お前さんよ」

り凄えや。ところで百軒店の頃は、お前さんとコンビだったんだろ。その頃は凄かったんだろ。お客がゴネたら、どうするの」

「おねえがドスをきるのよ。たんかをきるのさ。それでも文句を言う奴ア、ひっぱたいちまうのさ。お客が恐れをなしたところで、あたしが出るのさ」

「で、お前さんは、どんなことするんだい」
今度は、なおみが傍から口を、はさんだ。

「足で踏んずけたり、あすこを出して舐めさしたり。ね、おかつ」

「おかつは、おねえじゃねえか。あおやぎのお勝と言やあ、泣く子も黙る、おあねえさんだったもんねえ」

糞喰わせてやる

「とにかくねえ、この子は相手が抵抗力がないと見ると強くなるんだからね。おしっこを顔へひっかけたりね。サツへたれこまれた時に、そいつをしゃべるのは恥かしいでしょ。女が強姦されても、なかなかサツへ行かないアレと同じ気持よ」

「でも、そういうことは君達のボスと言うか経営者が、そうしろと言うんだろう」

「ウン、まあね。男が暴力振るうと、サツへたれこまれた時、面倒でしょ。女なら男の方で女に暴力を振るわれたとは言いにくいからお前達でやれと言うのよ」

「おしっこ、顔へひっかけてやれ、なんて言うの」

「そりゃ、あたし達が、その場の成り行きでいろんなことをやるのよ」

「だってさ、おしっこひっかけてやるの気持ちいいじゃない。子供の頃、よくやったわ」

「へエ、子供の頃から、やったの」

「ホラ、よくやるじゃない。あたしの田舎の方じゃ、男の子達が塀の上に上って下を通るおとなに、上からオシッコひっかけるのよ。」

だから、あたしも男の子達と塀の上に上ってよくひっかけてやったわ。ひっかけといてサツと塀の内側へ、とびおりちゃうのよ。背中へひっかけてやると、よく気がつかないで行っちゃうわ。あたしは、わざと気がつくように頭から、ひっかけてやるのさ。オヤ雨かなんて上向いた顔へ、また、ひっかけてやって、ワイーと言ってとびおりて逃げちゃうのさ。まあ、そう言った、いたずらっ気が、おとなになっても抜けなかったのね。アハハハ」

「まあ金を、ふんだくらなきや、子供っぽいいたずらかもしれないが、不当な金を取るのはうまく行かないよ。善悪は別としてもね」

「悪いわよ。ああいうことは」

「だって、おねえだってやったじゃないか」

「悪いと思ったから、やめたんじゃないか。」

いまは改心して、おとなしいもんだよ」

「でも、あの豚野郎を昔のように、いじめて金とったじゃないか」

「人聞きの悪いこと、お言いでないよ。あれは向こうから頼んできたからやったまです。金だって向こうがくれたから受け取ったまです。昔とは意味が違うよ。ねえ、きいさん」

「そうだな。相手の喜ぶことをしてやったんだから、むしろ善根をほどこしたんだな」

「じゃ昔の罪ほろぼしに大いにやってやろうかな。アッハハハ」

「昔の、その百軒店時代にさ、あんた方に殴られて喜ぶ、お客は居なかった？ もっと殴ってくれとか」

「居ないねえ、居なかったわよ」

「そうかなあ。居そうなものだがな。だってあんた方の暴力を黙って受けてる客が多いんだろう。殴り返してくる客も居るの」

「居るわよ。そんな奴は徹底的にやっつけて

やるわよ。血は出さないけど。あとへ残るような傷はつけないようにしてるの。サツへ行った時、証拠になるからね」

「そんなに、あんた強いの」

「二人がかりだからね。それに暴れるような奴には、バーテンが二人も三人も顔を出してくるもん」

「ハハア、後にちゃんと男が控えているからそれでお客はおとなしくなっちゃうんだな」

「だからさ、マゾってわけじゃないでしょ」

ただね、舐めろって言うとおとなしく舐めてくる野郎は相当、居るわね。でも、あたしは、いやがる奴を無理矢理、舐めさせてやる方が気持が、いいけど。素直な野郎は、これでもか、これでもか、って怒らせるように仕向けてやるのよ」

かつ子は、たしかにサジスチンだ。

「でもね、あの商売は、つまらないよね。あたし達が身体を張って、それだけやったって

いくらもくれないんだから。時には殴られて頬べたが、はれ上がったこともあるし、頭へコブこさえたことも始終だからね」

「いつかさ、頬っぺた、ぶん殴られて顔が、ひん曲がるほど、はれちゃったこと、あったじゃない。膝を靴で蹴られてアザになった時さ。あの時のおねえ、凄かったよ。一世一代の熱演だったよ。ウフフフ」

「もういいよ。ホラ、一万円やるから帰んなよ」

なおみは、お札を出した。ここで逃げられては、かなわない。

「そりゃ、ぜひ聞きたいな」

「あの野郎にゃ、さすがのおねえも、かなわなかったもんね。サブちゃんと辰ちゃんが出てきて、やっとおさえつけたのよ。そこを、おねえがビールびんで頭をゴンとやったからあれがきいたね。あとはベルトで、滅多打ちさ。顔へやったから、あちこち切れて血だら

けになったわ。あん時は血を流したって、かわまない。こっちだって、やられてるんだからってね。おねえばかりかサブも辰も、あたしも怒っちゃったからね。血だらけの顔のまん中へ靴を乗せて踏んだ片足で立ったわ」

「おい、もうお前、お帰りしたら」

「いいじゃんか。パパが聞きたいってんだもん。ねえ」

「うん、なおみの武勇伝は、ぜひ聞いておきたいね。ますます好きになるよ」

「ホラ。おねえのためになるんだよ。そいでもってね、ええと、どこまで話したっけ。あそうそう。靴で頭を何度も蹴って、穴があいたんじゃないかな。ギャーッ、ギャーッって泣きやがるのさ。そろそろ、あたしの出番だと思ったけど、あたしを、おねえが寄せつけねえのさ」

「チョッ、しょうがないねえ、まったく。勝手にしろいッ」

なおみは舌打ちして店から出て行った。

「じゃ、あたしも行こうかな」

「まあ、待てよ。話の続きを終わるまで聞かせてくれよ」

「あんたもマゾなの」

「うん、まあな」

天星社刊

《限定版グラビア写真集》

在庫案内

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

「それで、おねえに気に入られてるんだね。今度、あたしが、やったげようか」

「私は太った女でないとダメなんだ。いいから話の続きをしてくれよ。ホラ」

私は千円札を一枚、出した。

「そんなに聞きたいの。おかつたらね、何だか、あたしみたいだな。その頃は、おねえが、おかつだからね。その野郎の顔へ跨がってジャージャー小便、ひっかいたんだよ」

かつ子はグイと水割りを飲んで、

「野郎、怒ってとび起きて向かって来たよ。」

それをサブと辰とに両手をおさえつけさせといて、一ぺんとめたおしっこをジャーとやると、小便で顔の血が洗われて消毒さ。アハハハ。血が小便に流されて行くのは、きれいなもんだよ。見たことある？」

「ウーン、そりゃないな」

「口を開けると脅かして口の中へ注ぎこんでさ。辰に言いつけて野郎のツラを洗ってこさせてさ。おねえ、野郎に糞喰わせてやる。と言ってさ、いきんだんだけど出ねえのさ。おかしかったよ。あの時のおねえの顔」

かつ子は私の表情をジッと観察するように覗きこむ。私の反応を見ているようだ。

「この野郎、ウンのいい野郎だってね。こっ

ちがウンがねえんだから仕方がねえ。せめてケツでも舐めやがれてさ、舐めさせたよ」

「それで、かんじんの方は？」

「そんな汚ねえ野郎にゃ、もったいないってさ。小便を吸った舌で舐められちゃ、こっちの方が汚れるもん。それから、また靴で散々蹴倒してさ。あとは、あたしに、やれってえから、あたしはロン中へ、おしっこ注ぎこんでやっただけだけどさ。荒れたねえ、あの時のおねえは。あんた、おねえの荒れたの見たことないの？」

そこへ、なおみが戻って来た。

「もういい加減にしなよ。出てかないと、ぶん殴るよ」

「そら来た。そいじゃ、またね。どうもね」

かつ子はドタドタと逃げ出すように出て行った。

「あん畜生、いつまでたっても、あんな風で困ったもんだわよ」

「すさんでるね」

「すさみも、いいところよ。ところでね、あの社長さんから、ちょっと、へんな話、頼まれてるんだけどねえ」

「何だい」

「あなたも一枚、加わってくれないかって言

うのよ」

「えっ、私が？」

「いままでは一対一だったけど、今度は一対二でやって見たいと言うのよ」

「一対二というと、どういうことになるの」

「もちろん、男二人に女一人よ」

そのところが、よく分からない。で念のために聞いてみた。

「女一人というの？」

「女は社長さんよ。あと二人は、おとこよ」それで分かった。

「すると私は男のまんまでいいわけだな」

「もちろんよ。男は、あんたと、かつ子よ」

「ウーン。だが私は、どうもあの、かつ子と言う子は何となく気に入らないんだな。あんなが、やってくれれば、いいんだが……」

「いいわよ。あたしが、やっても」

なおみの目が妖しく光って私を見つめた。しかし一体どういう責めのスタイルになるのだろう。

「おとこ」が、男と「おんな」を、責めるのか――。

おとこと男が二人がかりで、おんなを責めるのか――。

――(続く)――



笠井奈保子

紫陽花の咲く朝

／奈保子の自由日記帳／

／笠井奈保子の自由日記抜粋／

五月××日

今日は約束の日。

ゆうべから、そわそわとして落ちつかなかったのだけど、朝になってみると、いっそう胸がドキドキしてくる。

下着をみんな新しいのと、取りかえて洗濯をする。どんよりと曇っていて、余りよい日和ではないが、姉の家族の洗濯物がたまってるので、私がここにいるときは、朝のうちに洗濯するのが日課になっている。

人がいないかと、のぞいてから裏へ出て、洗濯物を干す。休けい時間だったりしたら、男の人たちが私の近くへ寄ってきて、いろんな悪ふざけをするので困ってしまう。一人や二人のときは、そんなことがないのに、五人以上も集まっているときは必ず私をからかって、いろんなイヤらしいことを言ったり、返事をしないで黙っていたりすると、時には小石を私の足に当てたりする。

私の心のなかで描いている男性に対するイメージとは、およそかけはなれた人たちに、とりかこまれていると、夢というものが、だんだん消えてゆくように思えて悲しい。

前の家の軒下に、五鉢ばかり、アジサイが植えてあって、白と水色と紺の入りまじった美しい花を咲かせている。余りにも花が大きいので、植木鉢の外側まで、たれようとしてゐるのが、まるでお辞儀をしているようでおかしかった。

出かけようと思って鏡に向かって、お化粧をしていたら、姉が入ってきて、

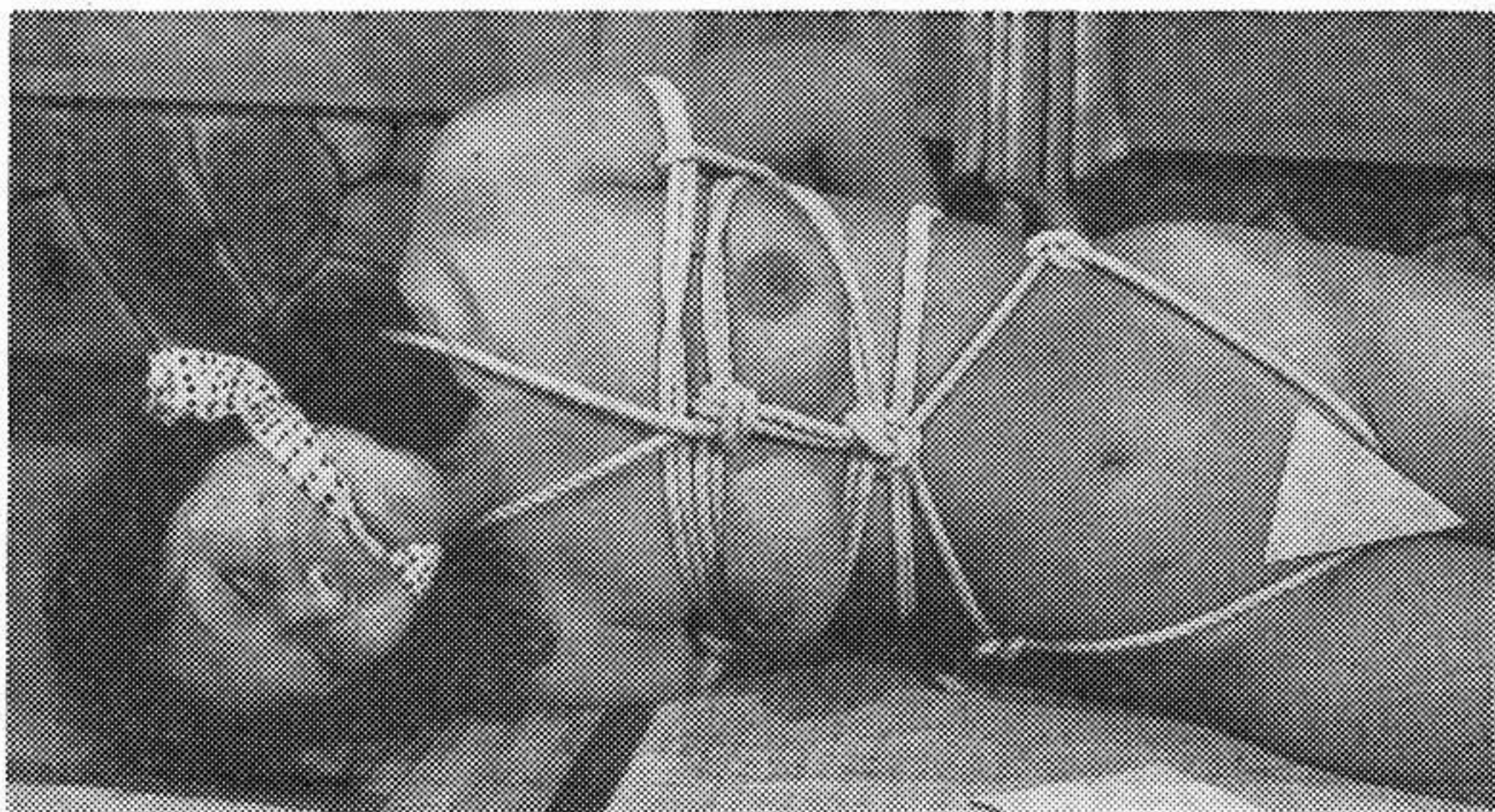
「あら、また出かけるの？」

と、とがった声を出す。また——という言葉が、なんとなく気にさわった。タマにエイコから電話がかかってきたとき、一時間か二時間、話しに出かけることはあるけど、私はほとんど、外出なんてしたことはない。それなのに、いつも外を出歩いているみたいに、また——なんて言われると気にさわる。

ふくれっ面^{つら}をしてるって——言われる頬をいっそう、ふくらましていたことと思う。

姉妹で口喧嘩みたいなことをしていて、約束の時間には、少しおくれてしまったけど、待っていて下さったので、ホッとする。

ただ、若さだけが、とりえの自分のからだ……。それでも素裸にされて、すみずみまで眺められるのは、消えいのように恥かしい。その——身体がとけてしまいそうになる恥



かしさを味わいたいために、今日も私は、胸をわくわくさせて、やってきたのだ。

カメラやライトが、自分の方へ、いくつもの目を集中させているのが、まるで、沢山の見物人にかこまれているようで、顔ばかりか裸の肌までが真赤になっているのが、自分でもよくわかる。一旦、赤くなってしまうと、普通に帰ってほしい——と、いくら心のなかで思っても、思っただけでは、どうにもならない。かえって、一そう赤くなってしまうのだから、本当に消え入りたい思い。

掌が、もうじつとりと汗ばんで、手首に縄をかけられると、その皮膚のところから、ジンと電気がかかったみたいで、腕のうしろをつたわって、背中、それから腰、太股へとしびれるような快感が伝わってゆく。

縛られるって——こんなに気持ちいいものなのかしら。シャシンを初めて見たときの、あの身体中が燃えあがるような感じとは違って、何か、ジワジワと身体のシンに、しみ入ってくるような感じ……。

手首から、二の腕と胸へ、縄が蛇のまといつくように、私の肌に密着すると、私の感激は、一そう高まり、縛られた手首が下がらないように肩ごしに首に吊られてしまうと、全

く、手の自由がきかずに、膝小僧から乳房まで、すっかり前をむきだしに、さらしてしまっているのに、胸があつくなる。

私って、縛られることが大好き——。思わず、大声で、そう叫び声をあげたくなる。好き、好き、本当に大好き。

今までは、自分でも、はっきりと、よくはわからなかった気持が、今日は、自分の身体で思い知らされたようだ。

畳の上に、ころがされて、腕にくいこんだ縄が、ううう……と、呻き声を、思わず知らず、もらす程痛かったけどその痛さが、背中と太股にまで、ジーンと快感をつたえ自然と足の指に力をこめてこらえた。

お臍のまわりについた肉が恥かしいので、太股でかくそうとするけど、両腕が自由にならないので、わずかに、うつ伏せ気味になるだけ——。それも、シャッターが切られてしまうと、上になった脚を

持って、くるりと仰向けにころがされてしまう。

ああ、ツ……と、縛られた手首を背中の下にして、出してはならない声を出してしまふ。痛さと恥かしさがミックスして、それが、今まで経験したことのない快さに変わっていつてしまふ。

もう、こうなってしまうと、目の前に虹のような七色の、いろとりどりの色彩が、ちらついて、私は自分の身体が、今、どうなっているのかさえ、わからなくなってしまう。

心の奥底では、ときどき、こんなことでは恥かしいわ——と、余りの快感に対する反省が起こってくるけど、それがまた、更に気持ちの高まりに役立つのだから恐ろしい。

縄を解かれてからも、私は手首の縄目をさすりながら、身体をまるめるようにして、ホカホカと心底から湧き出てくる快感を逃がさないように、抱きしめていた。

言葉かずの少ない今日の私を不思議に、思われたかもしれない。でも今日は、今までにない縛りの快感を味わった私。

特別に変わった縛り方とか変わった責めをされたわけでもないのに、その時の気分で、このようなことになるのだろうか。それとも、今までの経験のつみかさねが今日の快感をもたらした



たのだろうか。

五月××日

あの日から姉の家へは帰っていない。

奇ク七月号を送ってもらう。

封を切るのが恐ろしいような気持ち——。午後まで机の上に置いておいて、お掃除を先にすませてから、おそろおそろ取り出す。

やっぱり載っていた『私の玉手箱』。

自分の縛られたハダカのシャシンを見て、思わず本をパタンと、とじてしまった。

よう見ない——。早く見たい見たい——。

その二つの相反した気持ちが、本を開く私の指をチュウチュウさせたが、でも、やっぱり、見たい——という気持ちには勝てなかった。

胸をドキドキさせながら、チラチラ見る。

それもシャシンだけ。

文章をゆっくり読んだのは、夜に入ってからだった。大学ノートにエンピツで書いた文章が、活字になると、こんなにも立派になるのかと、自分の目を、うたがう。

間違った字や知らなかった字なんかも、ちゃんと正しく直されているので、なんだか、自分の書いた日記ではないような感じを受けて、少しは気を落着けて読めた。

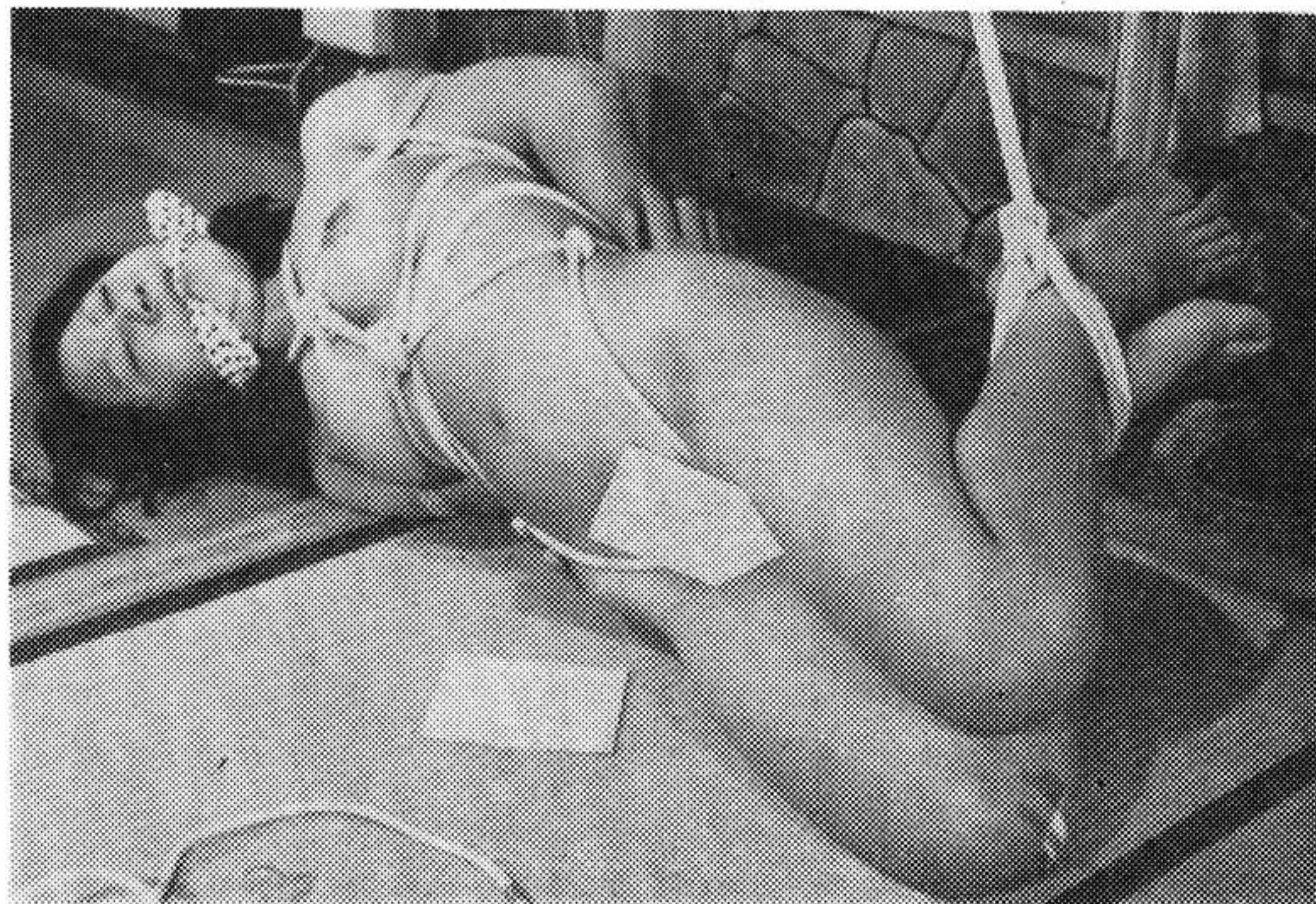
口絵にも、前田真知子さんや深田菊子さん

の美しい方と一緒に載せてもらっているのが嬉しい。とても、他の方とは太刀打ちできないけど、それでも、一枚でも、沢山載せてほしいと思うのも女心の一つかしら。

高村浩子さん。今まで頂いたシャシンのなかにも、よくあって、なつかしい方——。

私の△玉手箱▽のなかのシャシンも大分たくさん集まってきた。もっと変わったのが欲しい。ポーズの参考に——。言っていたかどうかしら——。この頃は、私のシャシン以外は余りいただけないのは一寸淋しい。

他の方のシャシンを、ただ見せてもらっているだけだった時と、自分も縛られてシャシンをとられて今とではシャシンを見る目が大分、変わってきた様に思う。それだけ目がこえてきたっていいのかしら？ そのかわり、あの





身体中が燃えるような感激性は薄らいできたことも確かだ。

玉手箱にしまっているシャシンのなか味はだんだん、私のものが多くなってきた。アルバムに別にして貼ってあるのだけど、自分のシャシンを見るのは、自分のカラダの欠点が自分でよくわかっていただけに、なんとなく

うとましく感じられる。それでいて、ひとり秘かに、こっそりと眺めるときの気持も、たまらないという——複雑な気持。

文章のなかのシャシンでは、松本たえさんのポーズと、縛られて、うっとりとしたような表情が、すばらしいと思った。あんなに、柔らかな身のこなし方が出来たら、いいなあ

と思った。特に一六九頁のシャシンなんか、大好き——。ちょっと、ねたましい感じがするくらい。

五月××日

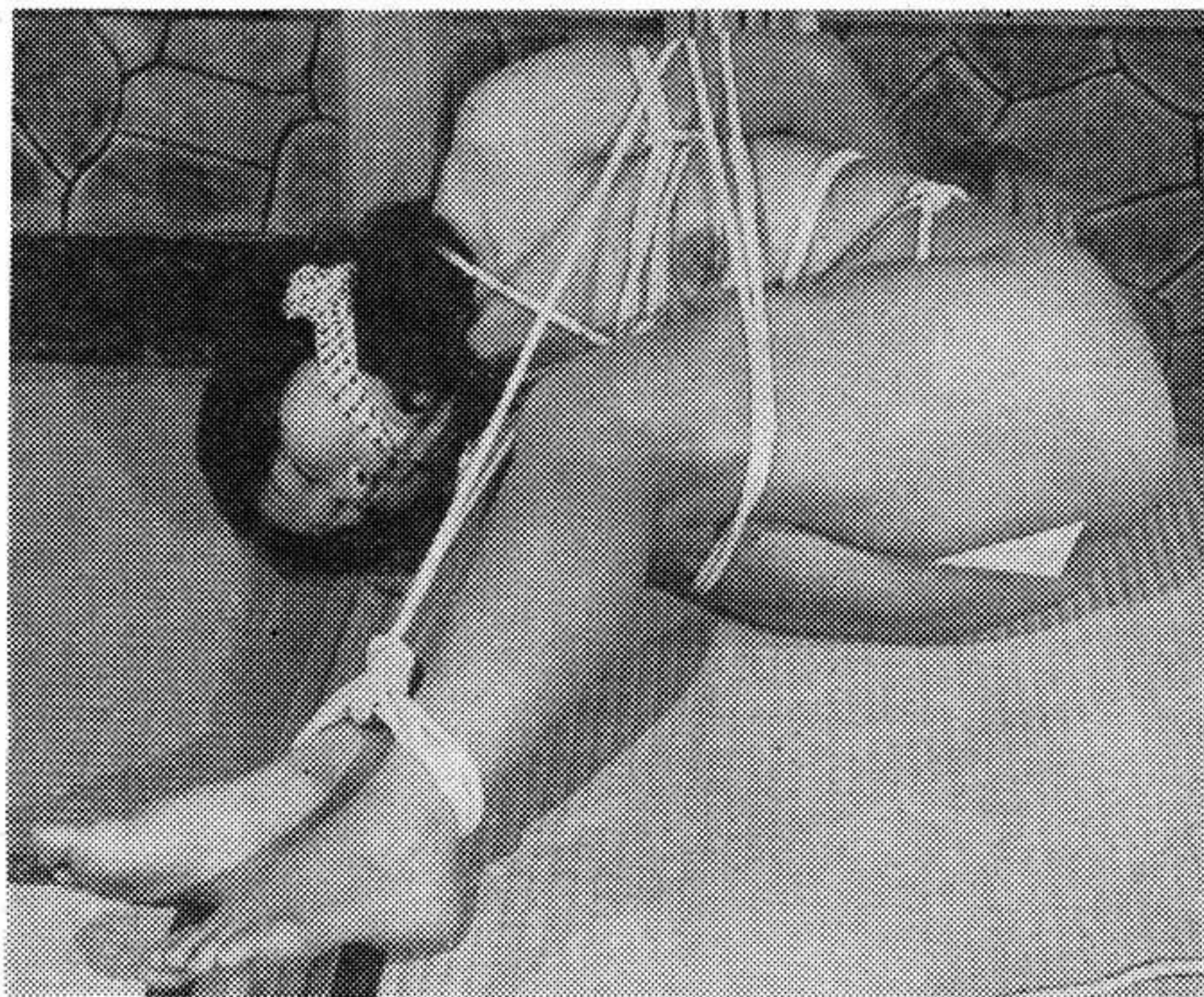
三日おきぐらいに、あれほど、しげしげと手紙を下さったり、写真を届けて下さった塚本さまからは、この頃、余り便りがないのでなんとなく淋しい。

もうこれで、縛られてシャシンをとられたのも、四回になるかしら。それとも五回ほどになるかしら。

姉の家へ帰らなくなってから、ずっと義母のところまで忙しく働いてるんだけど、仕事が終わって夜、ひとりになると、むしように縛られてみたいなあ——という気持になる。

気候がよくなったので、風呂上がりのままハダカになっていても少しも寒くない。

やせたい、やせたい……と思っているのにちっとも、そんな気配はない。鏡にうつしてみて、殊にウエストの部分に肉がつきすぎているのが気になる。減食と美容体操を、ずっとしているんだけど、こればかりは、余り効果がないようだ。これでも二年ほど前は、もっともっと肥っていたのだから、今はその頃のことを思ったら、まだマシかもよ。



手紙、三通、書く。

封筒の表書きだけ書いておいて、ほったらかしにしてあった父のところへ、久しぶりに

その日は、出来たら夜通しでもいいから、長い時間、責めつづけてほしいと、塚本さまに手紙を書く。

時候見舞をしたためる。父の手がけている錦鯉はどうなっているか——とふと思う。

チリヂリバラバラになっっている家族のなかで、父が一番、淋しいんじゃないかと思う。

私はいずれ、ここ一、二年のうちに、お嫁にくつもりだけど、そうになったら、父はほんとうに一人ぼっちになってしまいかも知れない。早く、この寿亭の方へ帰ってきたら私も安心なんだけど——。そんなこと、思ったりしたけれど、手紙では、うまく書けない。

今度、お店の改造で、二日ばかり、お休みになる。日がきまったので、

今までのように、駒切れの短い時間では、この頃の私って、なんだか物足りなくなったみたい。私の身体が痩せ細ってしまうくらい責めぬいてくれないかしら。

そして——、なんとなく、力強いものにすがりつきたいような気持。どんなに、すげなくされても、ひたすら、その方の腕にすがりついてゆけるような人がほしいと思う。

私を思いのままに、縛ったり責めたりしてくれる人。我ままで気ままな、この私の性質を直すために、お仕置やセツカンを、愛情をこめてやって下さる方って、いないかしら。

そんな方が、もし私の前にあらわれたら、私は、どんな無理なことでも、素直にきく、よい娘になれると思う。今のままの私だったら、だんだんと、ひねくれてゆくんじゃないのかと、考えたりする。

手紙を書いてから、自由日記を書いていると、窓がしらじらと明るくなってきたので、ペンをおいてフトンに入る。

六月×日

エイコから長い間、電話がなかったので、ヒル休みに会社へ電話する。

長いこと待たされて、やっと出たと思ったら、探してもいないとのことでした。ガッカリ。身

体まで許した結婚相手の男が、この頃、冷たくなったって言ってたけど、その後、どうしているのだろうか？ 同じ職場のなかなので、余り親しくしていると、まわりから変に思われるから、言葉をかけないでくれ——なんていうのは、単に逃げ口上じゃないかしら。そうでなかったら、いいんだけど。

私のように、ボーイフレンドの一人もいないっていうのも淋しいけど、不誠実な相手だったら、苦勞させられるわね。

誰か私の前に、すばらしい男性が、あらわれなにかしら。私もすでに二十一才、この通りの健康——。結婚適令期って、いっていいのじゃないだろうか。話はあったけど、お見合いは、まだ一回もしたことなし。

今日は朝からカラリと、よく晴れた気持ちのよいお天気。姉の家に行ったら、早くから、お洗濯だのにと、ふと、そんなことを思う。

ここでは、殆どクリーニング屋に出すことにしている。毎日のように注文をとりに行くクリーニング屋の男の子、私に気があるらしく、ミニからむきだしに出ている私の脚を、まぶしそうに見ながら、いろんなことを話してゆく。

「ボク、近々店を持って独立するんだけど、

一緒にやってくれるような、しっかりした女の人、知らないか」なんて、言ってた。

「さあ、心当たり、ないけど……」って、答えておいたけど、彼って、ちょっとハンサムだが、クリーニング屋なんてイカサないわ。

それに、私って、大女でもないのに、私より少し背が低いみたい。

激しい失恋をして、やせてみたい——。

六月×日

塚本さまから返事をもらう。

私の頼んでおいた日は都合がよいそうなのでホッとす。でも、夕方からでないとダメとのこと。私はおヒル頃からでもよかったのだけれど仕方がない。



義母は父のところへ泊りがけで行くといっていたので、寿亭の方は棟梁にまかせっきりにしておくらしい。下をカウンターのようにして手軽に一杯飲めるように改造するらしいのだけど、二日ぐらいで出来るのかしら。ついでに私の部屋も作ってもらうよう頼んでいた。姉のところへは、もう当分、帰らないつもりなので、昨日、荷物は運んでおいた。東京の姉から、私にと——ブラウスが送られてきていた。

六月×日

夕方、スーパーマーケットへ買物に行った帰り、両手に買物を持ったまま、サンダルを石にひっかけて、ころぶ。買物籠の中のグレイプフルーツが三つも、ころがり出て、恥かしかった。側にいた新聞配達の青年が起こしてくれたが、顔が真赤になってしまって、礼も、よう言わないで、あわてて果物を拾う。

家へ帰ってきてみたら、右の膝小僧を、すりむいていて血が、にじんでいた。ころんだ時には気がつかなかったんだけど、血が出ているのを見て、急に痛くなり赤チンをぬる。

今日は少しも、よいことなし。

釣銭を間違えて義母に叱られる。

きつと頬ぺたが、フグのように、ふくれて



いたかもしれない。

六月××日

おヒル御飯を食べてから、すぐ家を出る。

約束の時間まで、大分、間があるので近鉄で

ナンバへ出て高島屋へ寄る。

一階から七階まで、売場を順に見てゆくと

時間つぶしになる。買いたいものは沢山ある

んだけど、財布のなかに使ってもよいお金は僅かしかない。一階の化粧品売場の前を通ったら、欲しい化粧品が、ずらりと並んでいて思わず手が出そうになる。でも、お化粧品をしてもらったら買わなければいけないので足早やに通り返した。

最初の頃は、待合わせていても、逢ってか



ら、もうどうなるのかと、胸がドキドキした
ものだけれど、この頃では、間違いなく来て

り責めてくれたら——と思うのだけど、あっ
という間に私の身体は、ぎゅうぎゅうと縄で

くれるかしら——と、そんな心配をするようになってきた。そして、逢えた時はホッとした嬉しさが顔にまで出てくる。

今までと違って、部屋へ入るなり、すぐ縛られるのが当然のようになってきた。

怪我をした右膝にガーゼを貼ってテープでとめてあるので、「膝がこんななんだけど、かまわないかしら」と言ったら、「よくはないが今更仕方がないだろう」って返事——。「今日は夜通し、私を責めるの？」って聞いたたら、「手紙では、そんな希望を書いてあったね」と、聞き流しておいてさっさと私の身体を事務的に縛りあげてゆく。

昼とは違って、落ち着いた気持なので、もっとゆっく

締めつけられていた。

やはり厳しく縛りあげられてみると、胸のあたりから、お臍のあたりへかけて、かっとな熱くなってきた、人もっと、もっと、きつく縛って——Vと、思わず叫び声を出したくなってくる。

私って、ほんとうに、縛られることが大好きなのかしら……。じっと、目をつぶって、されるがままにポーズをとらされていると、空気にふれている肌の部分に、鋭い刺すような視線を感じて、ゾクゾク……としてしまう。腕の内側や太股の内側に、トリ肌が立っているのが自分でも、よくわかる。

私が嬉しい目にあったとき、いつも、このところにトリ肌が立つのだ。小さな子供のときからだけど、十七、八になってからは、この傾向が、きつくなってきたようだ。

目を固くつむっていたので、自分が今、どのようなポーズをとらされているのか、よくはわからない。それでいて、心のなかには春の花園を、さまよっているような、うっとりとした気分が満ち満ちていた。それが長い時間ではないと思うのに、私の頭からは、時間の経過が完全に失われていて、ただ快感のみが痺れるように残っていた。

奇クサロン

△浣腸通信△
神田の古書店で

竹 迫 誠 也

小生、先般、何気なしに神田の古書店街を、ぶらつき、本通りから少し入り込んだ間口、二間半位の古書店をのぞき込んで感心させられたのは、昭和二十年代の奇譚クラブが単価二千円乃至三千円強で売られていたことである。

単なる、のぞき見のつもりが、余りのなつかしさにツイ一時間程ここで時間をつぶした。二三千円の昭和二十年代の奇譚クラブはいずれも大事にセロハンで包まれて中を見る事は出来なかったが、昭和三十五年頃の奇クは、店頭にさらしてあったので手にとり一頁、中をひもとく事が出来た。

しかも、その頃の奇クでは浣腸写真の分譲を大きく扱い、その限りにおいては、今日の奇クより遥かに浣腸分野に力を入れていたのではないかと思われる位の編集内容であった。

小生は、今でこそ三度のメシより浣腸好きの愛好者を自負しているものの、当時は浣腸なんて全く無関心であった。したがって、恐らく当時の浣腸愛好者は、社会の裏で秘かに、うごめく陰の輩であったろう。今日のように公然と女性を伴ってモーターで或はホテルにて浣腸プレイに打ち興ずる事など夢にもできなかった筈であるにも拘らず、奇クでは当時から、すでに今日の浣腸ブームを予測して大胆にも浣腸モノを大きく扱った先見には敬服すると共に感心させられた。

最近の、SM誌の多くは、ここ一二年に発行されたもので、浣腸という現代の風潮をとらえた、



イメージ画 「さらしもの」 小川 茂正

にわかづくりのものが殆どであるが、その点、奇クは、すでに十数年間にわたって浣腸を讃美し、浣腸プレイの極致をうたい続けてきたのである。こういった深味のあつた浣腸PRを続けただけに奇クが他誌と違った深奥さを歴史に持っていることを痛感するのである。

今や浣腸ブームは現実の問題として更に愛好者を多くつくり、かつ、関心ある者を底辺として拡大させ、SMの主流は浣腸である事を格づけするに至った。この事は過去十数年間、今日あるを期してコツコツと地味にして忍耐づよい浣腸活動が続けてきた奇クの貢献する処、極めて大と信ずる。いわ

ば奇クは浣腸分野の開拓者、パイオニアでもあるのだ。

こういった事を知る事によって小生自体、奇クを長年に亘って愛読して来た事を喜びとするものであると同時に、奇クに浣腸愛好を叫び続けて来た事が矢張り正しかったと益々自信を深めた次第である。小生の持論であるアヌス責めの到来、ひいてはアナルセックスの黄金時代が来るのも時間の問題ではあるまいか。男と女のアナルセックスこそ、正にSMとセックスを組み合わせた二十世紀後半を飾るにふさわしい性風俗と思うのだが――、如何なものであろうか。

六月二十三日 竹迫誠也 27才



飽き得ぬ和装緊縛

花嫁無残美

山本五郎

奇クを手にするたびに投稿者のたくましい実行力、執筆者の豊かな想像力に、ただただ感嘆の他はありません。SMが、帰するところはセックスであることはいうまでもないことですが、その性欲と同様の本能であるところの食欲の如く、いかにして見た目に美しくおいし調理をするかというところに苦心があるのでしようが、私の場合は、西洋料理より日本料理が口に合うようで、極端な程の和服フェチを自認しております。

近頃の女性は着物に関して「三はない」とか云われているようで、

「選べない、縫えない、着られない」というのは私には、まことに残念なことです。日頃はミニスカートの活発なお嬢さんも、振袖を着ると不思議に、しとやかに見えしおらしくなり、女の魅力が増すものですのに……。

着物の場合、見える素肌というと、世界的に定評のある衿足から上と、しなやかな手首から先だけというわけですから、私などは、その手首を捉えて思いきり背中へネジ上げてやりたくりますが、人間の共通心理として、隠されたものほど見たくなり、興味をそそ

られるのだと思います。

観念した女性が自ら帯を解く風情。悲鳴を挙げて逃げまわるのにつれて翻る袖や裾……。という情景は、私、和装フェチマンと致しましては、その小物一つ一つにも艶かしい色彩感覚と幻惑を覚え、妄想の世界に引きこまれてしまいます。闘牛場の牛じゃあるまいし赤い物をみて昂奮するとは……とテレる時もあります。これがかりは仕様がなさそうです。

同封の写真、あまり変わりばえ

もしませんが、相変わらぬ私の好みによるプレイですので御容赦願います。撮影場所は居間に続く蔵の二階を使用していますが、さしずめ、わが家の「責め蔵」というところですよ。

後手に縛り上げた縄尻を取り、追い立てて引き廻しをするのが楽しみです。高島田の重さによるうなだれて、長く曳いた裾によるめき三尺の大振袖をゆらゆらさせながら、しおしおと歩を進める妻の姿に、私はいつも見惚れます。





振られ男の弁
浩子よ、苦しめ！
責 苦 与 之 助

私は高村浩子に振られました。おやっ、君も同類かい。分かる。分かるよ君の気持は。本当に手に取るように分かるさ。君が振られたから、私にも我慢せよと言いたいのだろうか？ だって、私は、そういうわけには行きません。『袖摺り合うも、他生の

縁』とやら。奇クを通じて、やっと呼びかけが出来たのですから、そう簡単には諦められません。

今の心境ですか？ ええ私は何もかも、ぶちまけてしまいたいくらいです。本当です。私だって男です。もう浩子なんて、どうなっただっていいんです。お金持のマゾ

女として飼育される方が、浩子には、お似合いなんです。そう。浩子は夢を追いかけて酔い、夢と共に生きている女なのです。

奇クのM女通信などと、いかにマゾ女性を代表するような大きな顔をして、のさばっている浩子の事なんか、ちっとも気にしませぬ。浩子には、本当の悩みというもの、少しも分かつちゃいないのです。現実的生活の厳しさから逃避して、夢を食って生きているのですから……。

「悩み」……そう、私なんか、ずいぶん悩んだもんだよ。罪悪感や嫌悪感に何度、襲われたか数え切れない程なんだ。奇クを知って十年近くもなるが、買っては捨て、捨てては買った、あの気持が、浩子なんかに分かるものか。自分がまともではないと思いつつ、ただいたずらに悩み、苦しんだなんてものではない。その時点、その時期では真剣だったのだ。

浩子なんて、もっと悩めばいい……もっと苦しめばいい。そう思うよ。真剣な愛に打ち込んで悩むがいい。そこで初めて分かってくるさ。相手が正常なら正常な程、悩みが深いものなのだ。最初から安易な同好の友を選ぶのは青春にふ

さわしくない。「青春の安全株を買ってはならない」

やっ、浩子が憎らしくなって来た。浩子をロープでギリギリに縛って、ビシビシと鞭打ってやりたい位だ。甘い夢ではない。現実には頬を引っぱたいて……泣こうがわめこうが容赦なく、ぶちのめしてくれ。マゾで肥大化した性根を叩き直してやる。つべこべと文句や反論なんて屁にもならない。反論や言訳をする暇があったら、汗を流し、血を流し、そして涙を流す青春を味わうがいい。

なまじ告白的M女通信を読んだばかりに、現実的可能性を感じた私が馬鹿だったかも知れない。でもね、それ故にこそ腹が立つてくるとはいないか。「浩子を苛める会」でも結成して、浩子を徹底的に苛めてしまおう。君だって、そう思うだろう？ 浩子を羞恥責めにつけて、浣腸して縛りつけて、やつつけてやりたいよ、全く。

本当の、真の苦痛とは、どんなものであるか、分からせてやる。甘くすれば浩子のためになるものか。浩子に対して理論なんか必要ないってば。理論や納得づくでしただって駄目だ。実践だよ。うむを言わずに実行してしまうのだ。

日本人の悪い癖は、万事考えてから行動する点なんだよ。いいではないか、突っ走って、走った後から考えたって。それが真実なものと思ったら、どんな行動してしまう、それが青春ってものだろうよ。変な屁理屈や納得や自己満



菱縄をかけ終わると、もう女囚とお役人さまの関係である。

「女囚」と呼び「ハイ、お役人さま」と答えるさまなんて、他人目から見れば、ずい分、おかしいことだろうが、他人さんがそう思うだろうと思うと、一そうご当人ははり切ってくる。

初めの頃は、さすがに、ちょっと照れくさくて、意識的に努める風もあったが、この頃はもう慣れたもの。一糸まとわぬ全裸に菱縄股間縛りをうけた彼女の「お役人さま」と呼びかける言葉には何のためらいもなく、お白州に引き出され、責め問いをうける女囚の

足しているより、よっぽどスカッとしている。思慮深いのも結構だが、あまり合理的すぎて人生の楽しみを薄くするなんて、もったいない。

菱縄マニアの 生きがい

早木夢二

風情を余す所なく見せてくれる。

全裸菱縄股間縛り—お白州—お取り調べ—拷問—自白—お処刑の申し渡し—裸引き廻し—お処刑これが二十年かかって築き上げた私たちのコースだ。一回に、たっぷり二時間は、かかる。

「お役人さま。ありがとうございます。とて、いいお拷問でございました」

お処刑の末に果てた彼女が、汗ばんだ縄がけの裸身を私にもたせて、そういう。私は、かけ縄を、なぞりながら、その手を段々ずらし、どっぴり濡れた縄にあてる。「あ、もう、もう、お役人さま」

やたらと考え込んでみたり、第一若々しさが無いよ。はつらつさが欠けてるよ。もっと胸を張って！エエッ、じれったい！分かったのか分からないのか、はっきりしろ！うじうじとしているのが女性の本能だなんて古いよ。もっと

彼女は、のけぞらした顔を私の肩にあて、ぐっと胸をそらし、股をひらいたまま、尻をゆする。後手高手小手に縛られた両手が、私の肌をさぐっている。

こんな時、
「女囚、もう一責め、どうだい？」
といっても、後にひく彼女ではない。

「嬉しい！今度は、どんなお拷問でございますの、お役人さま」と、くる。

「今度は石抱きと行くか」

「海老縛りに石抱き。お役人さま女囚は、とっても嬉しうございます。それがすんだら、お願い」

菱縄は私の一生の夢であった。全裸の女に菱縄をかけて責めることに、私の少年期も青年期も、そして現在も生きがいを感じているといっても過言ではない。

慶子と、めぐり合うことがなかったら、と時々私は、そう思っ

泣くがいい。もっと悩むがいい。そして、もっと汗を流すがいい。これだけ言って、分からないのなら、今すぐ来い。身体でもって教えてやる。

では、あばよ。

ふられた男代表。

は、本当に幸せであったと、しみじみ、そんな感慨にうたれる。「本当に、そう思ってくれる？」
「思うとも。あと何年ぐらい、こんなこと出来るかしら」

「どちらかが死ぬまでさ。オレが死んだら菱縄をかけて、棺の中に入れてくれよ」

あるほどの縄、投げ入れよ……私は、ある時、こう書いたことがあった。

これという友達もなく、親類づき合いも好まず、ひたすら慶子との緊縛生活に生きてきた男にとつて無上の贈物というべきだろう。

「私が先に死んだら？」

「キレイに化粧して、素っ裸で菱縄をかけてやるよ」

しかし、もうこんな会話が出てくるようになっていた。

菱縄に生き、菱縄に死す。なんてカッコよいことばかり、いつてはいられない。

秘めたる悦楽

青 山 三 門 樹

S Mの世界にひとりの陶醉者として溺れた日もあり、また、酒盃片手に同好の士が演ずるプレイを凝視する傍観者として、その倒錯の席に身を置いた日もあり、ここ青山に近いセカンドハウスは、さながらコレクターのアジトのごとく、数々の官能的美女の等身大ヌードフォトにかこまれる耽美の生活を重ねているうち、いつしか外界は白昼公然、TVや、ヤングの週刊誌にまでS Mが登場する浮世となっておりました。

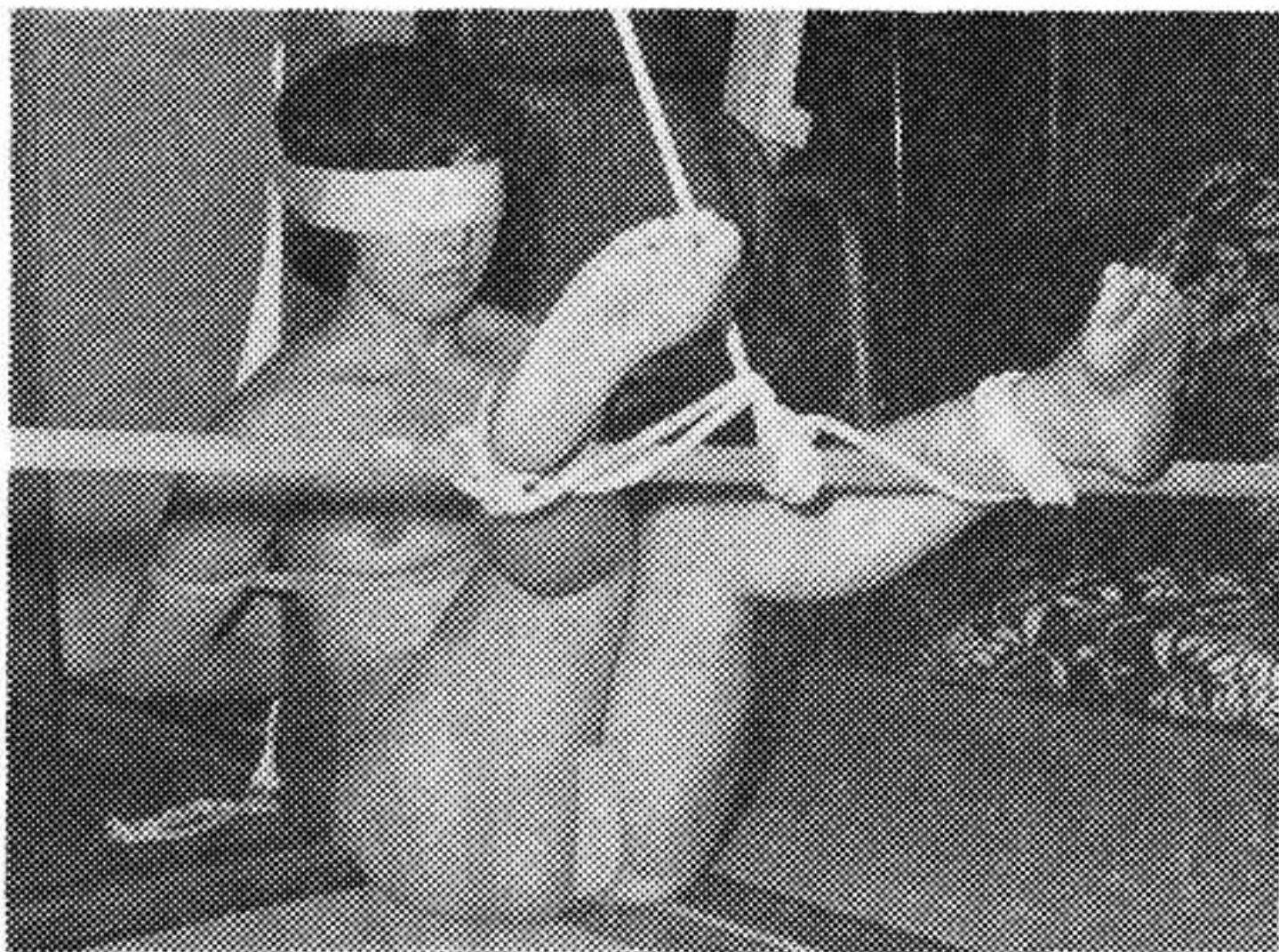
「秘めたる悦楽」としてこそそのS

M、闇にうごめく隠花植物のごとき、妖しい色彩と息吹きを持つS Mをこそ好ましく、追い求めてきた一読者子のためらいも、今や薄れがちとなるのも、無理からぬ、ご時世なのでございましょうか。しかし変わらざるは、類書群書数ある中で、かたくなに一つのスタイルを固守する奇クの執念。変わることも多き我が身にひきかえ、その変わらざる執念に敬意を表しペンを執った次第です。

○ 東京のプレイゾーンとしてジーンズに、はちきれんばかりの下半身をつつんで闊歩するヤングの街

青山。ミニ・ミモレに艶を競う若奥様方のシヨッピングの街。夜の開花を前に、しばし茶店で時を過ごすパンタロンのホステスの街。明るく健康的であると共に、夜の猥雑感を何となく昼日中に感知させるような、この街か

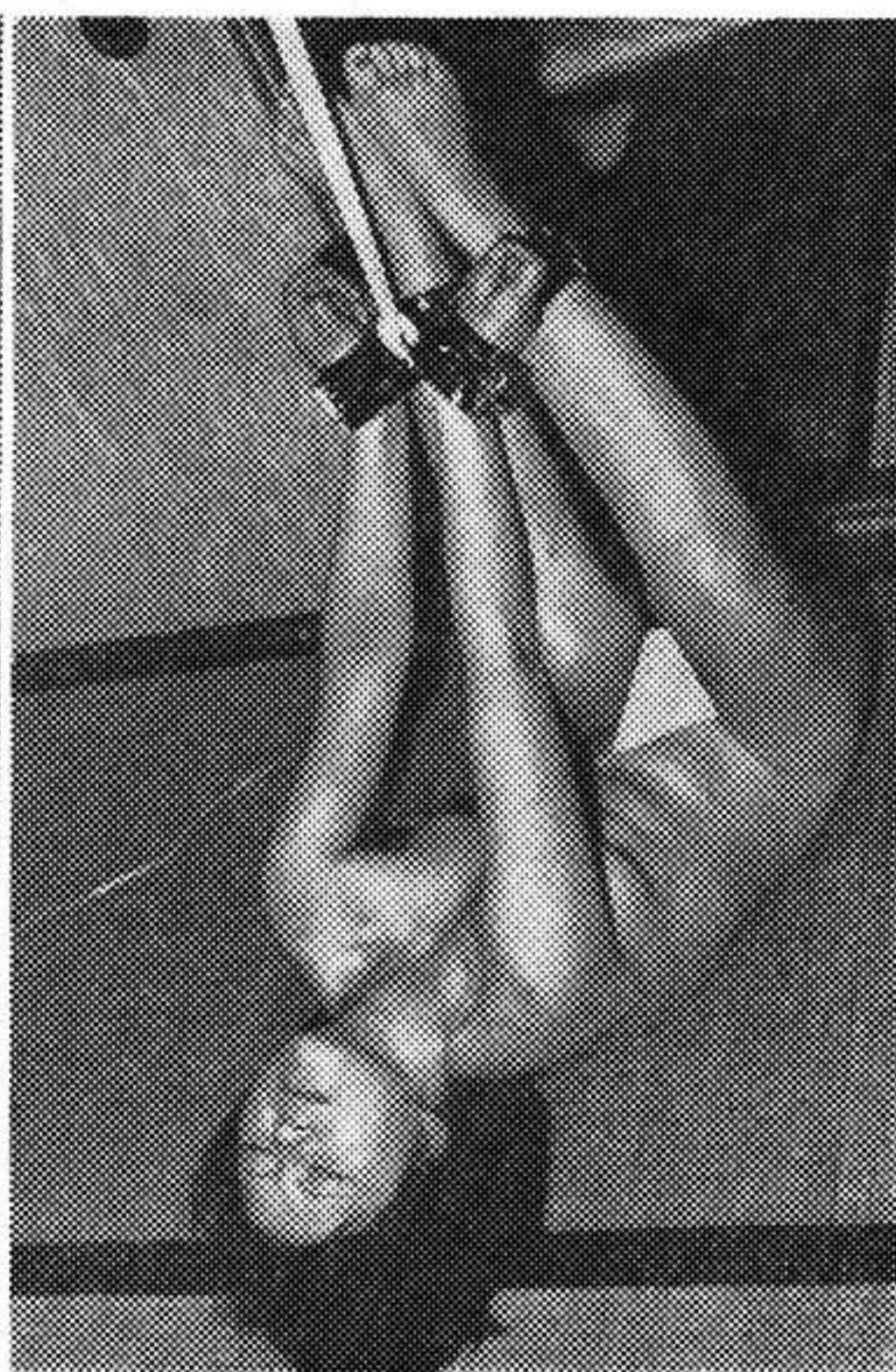
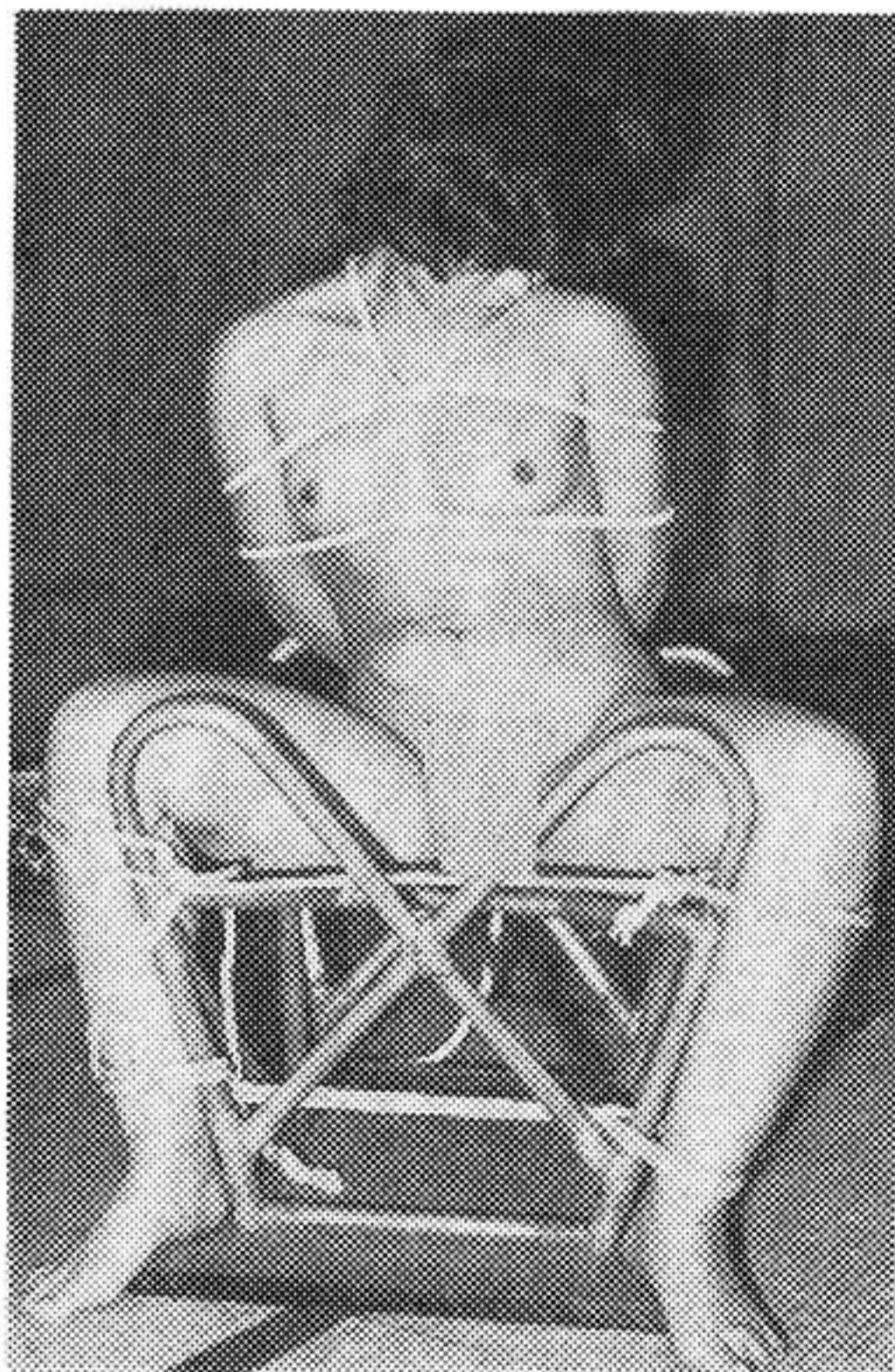


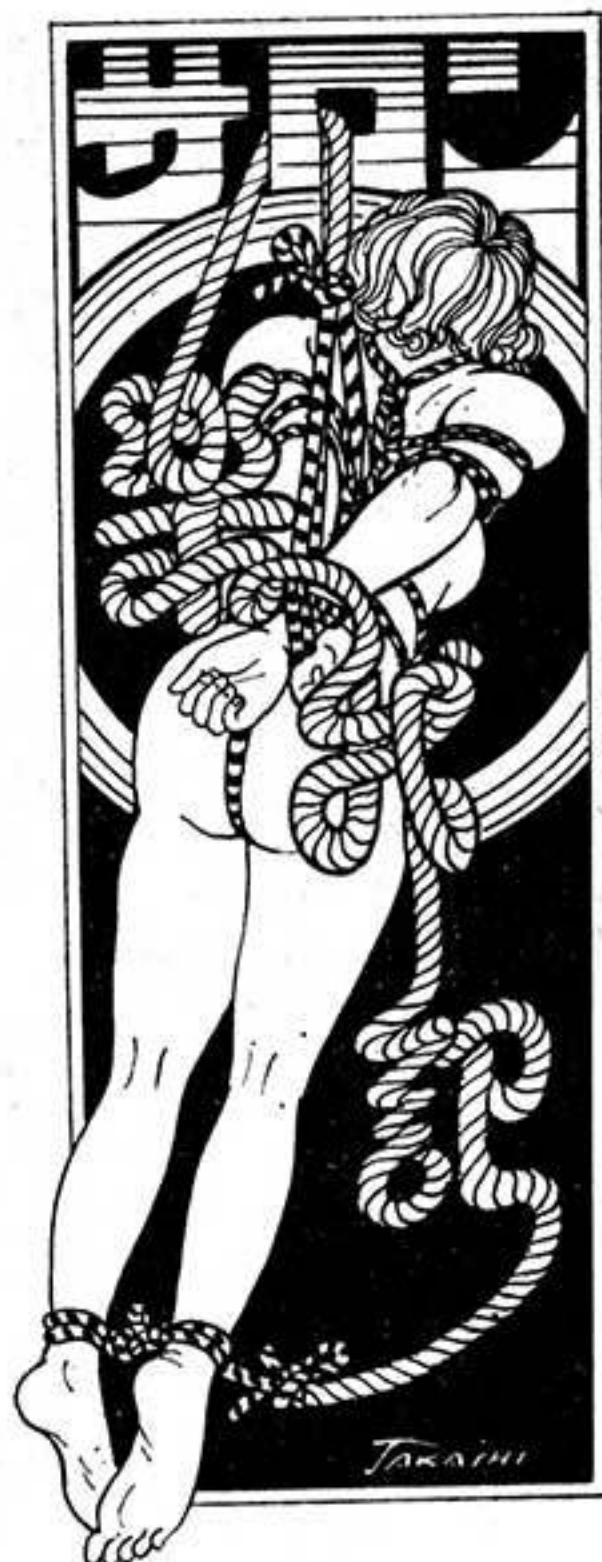


ら、ハンターの猟場、トイレの中から透視ガラス越しにダンスフロアが、うかがえた、ゴーゴークラブ「サド侯爵」が、姿を消してから、はや一年以上にもなりましようか。

年令19才。単なるセックスプレイに、いま一つの趣向をと、なだめたりすかしたり。「そんなのイヤーよ。このひと、すっごく、へんたいい。痛いよ、痛ッ！ もう止めよオ。ねえ、お願い。いっやよッ！」と騒ぎ、逃げ腰の彼女に「プロポーションが、いいよ。ふたりだけの秘密だろ。えッ、これ？ これは、ただの小道具。心配ない、心配ない」とか何とか撮り上げましたのが、この緊縛写真。とても恍惚というには、ほど遠い諦めと、ふてくされ気味の表情姿態とあいなりました。

われながら不本意な出来ばえにまたまた数日間、迷いつづけましたが、お仲間入りを願うのに、まったくの手ぶらではと意を決し、同封いたしました。先輩諸友のお引き立てと、ご指導を待ちましよう。





〓第九十九回〓

辻 村 隆

昭和三十九年十一月、池田首相が倒れて、次期内閣を、佐藤さんがバトンタッチしたが、遂に、六月十七日引退を声明した。七年数カ月に亘る長期政権であるが、私は感慨無量であった。といって、佐藤内閣がどうなろうと、私如き一野人の知ったことではない。奇しくも、昭和三十九年十一月号に私のSMカメラ・ハントが本誌に登場して、佐藤長期内閣の間、ずっととうまず、倦きもせず続いて、今日に至っているからで、私ももう、そろそろ、この辺りで引退した方がよいのではなからうかと、そんな思いにフト、かられたからである。

ボツボツ入れ歯の心配をするようになり、二人の孫から「おじいちゃん」と呼ばれるようになった。今、もうSMの探究でもあるまいなどと思う半面、否々こうしてSMのカメラ・ハントに憂身をやつしているからこそ初老の歳を忘れて、いつ迄も精神年令は若く保たれるのだと、私のハイド氏の心が反撥するのである。

多忙にかまけて、この処、二カ月半ばかり散髪にゆかなかったら結構、長髪族めいてきて、油を塗ると、ごま塩の白髪も誤魔化せてこれも老化を防ぐ手段の一つかとその気になって、鏡を覗く時間がいつしか多くなってきた。糖尿も持病化して、慢性になってくると、いつしか気にもならなくなり、同好のドクター氏が送ってくれた糖尿薬を、気の向く尽に折々に飲んで、それで気休めになるのか、食欲も旺盛で、アルコールも平気で摂取していて、一向に体調は狂わない。

今月、車を新車に買い換えるのを機会に、うんと若い服装をして精力剤で精つけて、まだまだ若いものに負けぬつもりで、ひと張り切りしてみたいと、気力だけは横溢していても、さて、体が保つかどうか。

兎も角、こうなれば、トコトンやるところまでヤッタレと、ふてぶてしく考えている。

田舎芝居の役者が、酔っ払いに近づいて、さもないなれしく友達めかして、一緒に一杯のみ、油断をみすまして、財布や時計をチョロまかしていたというニュースをきいたが、私もそんな手口に似たりやりで、マンマと喰い逃げされたことがある。

マダムがM性だといふので、かつて二度ばかり立ち寄ったことのある、大阪ミナミのスタンド・バーに、フト気が向いて所用の帰り久し振りに寄ったのが、今年の四月下旬の頃である。時間の早い宵の八時前で、広くもない十平方メ

ートル足らずの店に、先客が一人とまり木に腰を降ろしているだけであった。

マダムのダンナは、S鉄鋼の部長さんだが、月に一、二度、出会う程度の淡白な仲で、ダンナのS性は、平凡なセックスに飽いた上の、極く初歩的なものであった。

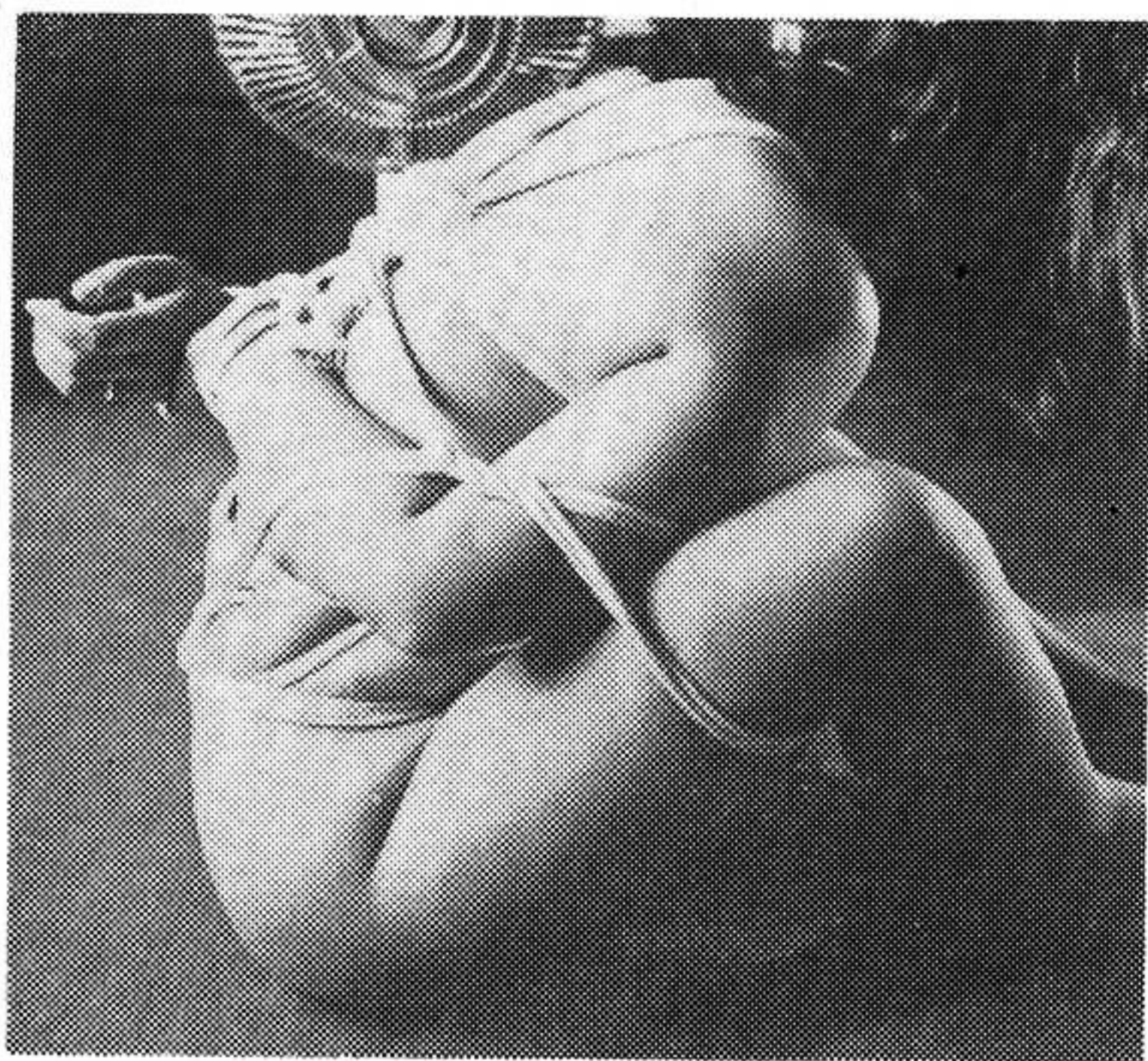
マダムの日常は比較的、自由で私さえその気になれば、誘いに乗ってきそうな口吻だが、お写真ぬきの四帖半プレイなら、せいぜい虐めてもらってもいいわと、ヌケヌケと放言する。私を抱いたらあとが高くついても知りまへんで……と、かなり大きなカラットのダイヤの指輪をちらつかされては冗談か真面目か、チト薄気味悪くなり、どうも手を出しかねて、面長の京美人風のマダムに、もやもやした野望を煽らせているだけの現状であった。

気が向けば、奇クを買う程度の愛読者であるらしいのだが、それでも私の存在は、よく知っていてこれといった客には、私の訪れることを吹聴しているらしい様子である。

時間が早いので、四人いるホステスのうち、若いキョちゃんだけが出勤していて、あとの三人は未

欲望逞しかった、あの頃にくらべ、既に頭髮に霜をおき、齒列はガタガタの隙間だらけになって、

わがプレイの記録 ----- 浜 浦 順 一 -----



だ店に姿を見せていない。
珍しく顔を見せた私を撫でて、
マダムは、あけすけにサドマゾの
話を始め、私の関心を惹こうとす
るのであったが、彼女の話は、ど
うも雑誌や週刊誌仕込みが多く、
ナマのプレイ体験は、さしてない

ようである。喋りちらかす程でも
なく、案外M性ではないのかも知
れない。勝手にベテランだと、き
めこんでいる彼女の、私に対する
とっておきのサービスの現われの
ようであった。
つい釣りこまれて相槌をうち、

いい調子で喋っていると、隣で黙
って、のんでいた男が、いんぎん
な物腰で私に声をかけてきた。三
十才前後と思われるサラリーマン
タイプの、一寸苦味走った、いい
男である。

かねがね、お名前は、お聞きし
ている。是非、同好仲間のほしに
お加え下さい。お近づきのしるし
に、自分の飼育したM女性を、カ
メラ・ハント用に紹介するからと
まるで十年の知己の如く、うやう
やしく、狎れなれしく近づいてく
る。

水割りが程よく廻り出した頃で
もあり、ついつい例の助平根性が
出てきて、彼の熱心な勧誘のまま
に、その飼育女性に会ってみる気
になった。

鷹揚なところをみせて、彼が払
うというのを押し止め、私は二人
分を支払ってマダムの店を出る。
無茶にボってもないが、かなり
の高い値段である。マダムのサド
マゾ談が、おそらくサービス料と
して含まれているのだろう。

去年の夏、秘密クラブ「前衛」
を出て、その場で一緒だった男性
から声をかけられ、ヒョウタンか
ら駒が出て、思いがけず、江口淑
子というマダムをハントしたハプ

ニングがある。柳の下の一匹目の
トジョウを狙って、私は、この斎
藤と自称する男性と連れ立って、
その場からタクシーを拾うと、か
つての赤線地帯、飛田まで車を飛
ばした。

まるで当然のように、彼は先に
立って、一軒のキャバレーへ入る
と私をボックスに坐らせて、ホス
テスに任せ、何処かへ電話をかけ
ている。多分、くだんの飼育女性
を呼び出すためだろうと思ってい
ると、ニコニコしながら戻ってき
て（すぐ支度して行くから、三十
分ばかり待ってくれといってまし
たよ。さあどうぞやって下さい）
と、楽しくてたまらぬかのように
しきりにすすめるのであった。彼
も水を得た魚のようによく喋り、
よく飲んだ。声を潜めての話は、
専らSM談義である。

小一時間は忽ちにして経ったの
だが、お目当のM女性は一向に現
われない。遅いねえと催促すると
彼は、恐縮したようにうなずき、
（この近くのアパートですから、
一走り行って、引っ張ってきます
よ。すぐ戻りますから）と立ち上
がり私達を囲んでいた三人のホス
テスに、すぐ戻るから、よろしく
頼むよと念を押して、慌しく出て

行ったのであった。どうも可怪しい。一杯、喰わされたと感じたのは、更に小一時間経ってからであった。

さも狎れなれしい振舞いに、てっきり、このキャバレーの常連だと思っていたが、ホステス達にきくと、イチゲンさんだと口々にいう。

SMの同好者めかして私に、たかったらしい。やられたわいと、早々に勘定をしてもらったら、二万円近い。

又、どうぞという声に送られ、誰が二度とくるものかと、ポンプンし乍ら、腹立たしい気持のやり場もなく、酔歩散漫と、のたる私に四月の夜の、見知らぬ巷の風はやけに冷たかったという、失の敗頭末である。

あのキャバレーと男が、客引き役のグルの様に思われるし（女達は、確か、彼をキーさんと呼んでいた）飼育女性が実在して口説くのに手間どっていたという善意にも、うけとれるし、ヒモ的存在のあいつが、女を口説いてM女性に仕立てあげ、プレイ料を稼ごうと計画したようにも思われ、やはり、江口淑子のようなハプニングのプレイは、そうそう、ザラ

には転がっていないのだと、当分の間は苦い自省に、かり立てられたのであった。

静かなブームの、サドマゾのプレイという新手の方法で、悪い奴は、貴方達を狙っているかも知れない。余りにもウマイ話は一応、疑ってかかった方が賢明なようである。只飲みされた程度で済んだ私の被害は、或は未然で、むしろ軽かったのかも知れない。

× × ×

先月、私と東京へプレイに出掛けた、同好のドクター氏は、いい東京スーベニアをモノにして帰っていた。マルゴで知り合った同好氏の紹介の奥村マリと、すっかりいい仲になって、既に彼女は、三度ばかり来阪して、ドクター氏とプレイしていたのであった。彼からヌケヌケと電話で、その実績を知らされ、してやられた思いで苦笑し、彼もなかなか隅におけぬ、いい腕になったわいと、半ば羨望気味に彼のプレイのノロケを聞く始末であった。

私は上京の朝、次のプレイを求めて、既に深更、ドクター氏と別れたが、彼は翌朝十時までプレイに耽溺し、息子のマンションの件も、電話で早々にすませ、その日

イメージ画 『憲兵再来』 森 荆



の夕暮れまで、彼女に拘束帯をつけさせ、一緒にメシをくったり、銀座を歩いたそうである。新幹線のホームで別れる間際まで、奥村マリは半日以上、ずっと裸身を拘束の革でしめつけていたと、得意気に話し、その奉仕に酬いるためマルゴで買った責め具の総てをくれてやったが、来阪の度毎に、靴一杯に種々の拘束帯や責め具を持つ

てきて、愉しさこの上もないとウソぶくのであった。彼女は根っからの責め具マニアで、ドクター氏の手によって、きつく締めつけられた拘束帯を全身に纏った後、新幹線に揺られて帰京するという。私の東京ハント行は、三兎を追って、やはり、大きい獲物は遁がしたらしい。夢よ、もう一度、というところである。

S Mの佳人に捧ぐ

△前田真知子、笠井奈保子の二嬢に▽

本 牧 野 人

八月号に可憐な花咲くは、京都慕情の佳人——前田真知子嬢。

塚本流足吊りで目を眩らされたのは、かく言う私。本誌に登場以来、彼女の慎ましい活躍に注目してきましたが、未開拓の羞恥を前にして楽しみ多いことです。

佳人、自ら記しているように、浣腸、吊り、擦り責め、バイブ責め——等々具体的な責めの分野に進出して下さい。

才色兼備の、しかも未通女の清潔な美しさが、まぶしい位、その慕情が烈しく欲情するよう、勝手にながら、お祈りします。次回には辻村流、羞恥責めのプリマとして私の前に現われますよう。

「これ以上、羞かしいことはない

と思えるほどのみだらなポーズ」で、奇巧の誌上を飾って下さい。

蛇足ながら、私は京都慕情の誌上フィアンセです。失礼——。

私も若年の読者に一縷の希望の光を投げかけてくれるような、

「玉手箱のお嬢さん」笠井奈保子嬢。けがれ知らぬ柔肌に縄目を受けて一段と美しく映ります。

「エッチな恥かしい言葉」浣腸という文字をつづけて九個も書いて

いらっしゃるが、私の予測では真知子さんより先に浣腸を受け、涙

を流しながらカメラにお尻を向けて排泄して下さるのではないかと

思っているのです。

そして願わくば、真知子さんと奈保子さんの、あたかも七月号に



於ける好美さん、久美子さんの浣腸競演のよう

うに互いにお尻を寄せ合

って、ついでに言えば、私の責めにすすり

泣いて下さい。私が奇

ク編集担当者であつても、この希望は実現不

可能に近いでしょうが

夢は夜開くとやら。

ところで、現在十名

以上の御婦人が誌上で

活躍されていますが、

彼女達同士のプレイを

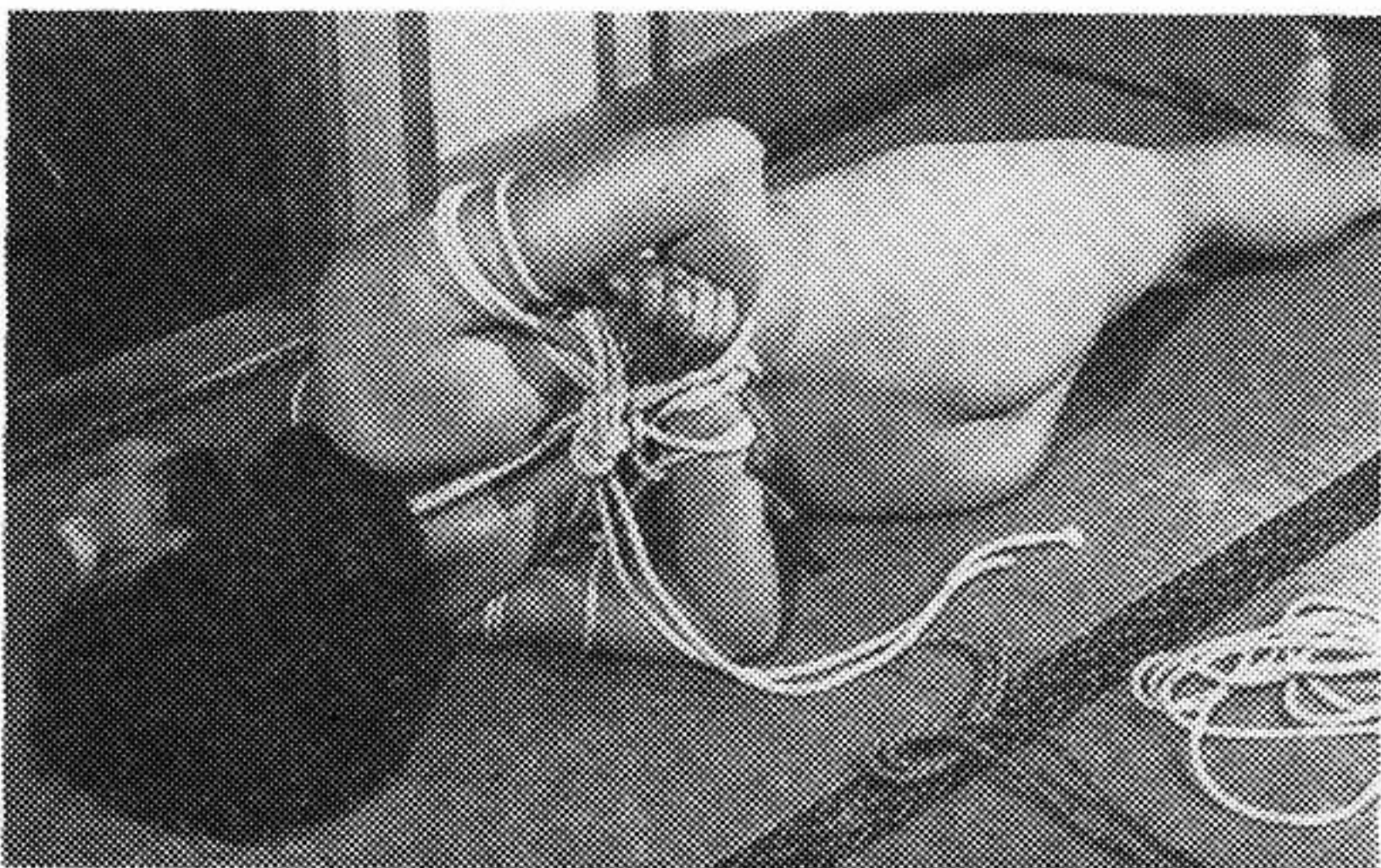
ひたすら切望します。

もっとも、プレイやS

M行為にしても、人間

各自の微妙な好悪感が

介在しているものです



から、単に外野席から

弥次る筋合いは毛頭あ

りませんが、私の誌上

に托す夢は

容易に消え

ません。

一夜。他に真弓嬢も、その事実を語っていました。

千恵子さん、桃子さん、如何で

しょうか。優しい可愛らしい同性の浣腸責め、羞恥責めプラスア

ヌス責めプレイは。私は貴女たちの勇断を心から願っています。

塚本鉄三氏の△思い

出▽に出てくる三木敬

子、浜本喜美嬢。辻村

隆氏ハントのマキとミ

キ。名は失念しました

が、カメラ店、階上の



志野春秋・画

私が奇クを読み初めて早や三年になります。でも、最初に手にしたのは、もう二十年も以前の中学生の頃でした。なにかの機会に、奇クの本を手にし、パラパラと読むというより見たという方が適切なくらいで、内容に対して、全然ショックも興味も感じずに終わったのです。

その頃、私が住んでいた所は、地方都市の、裏が遊廓と三、四軒の芸者置屋があるという所で、昼間も三味線の音が聞こえました。開店前の女郎屋、そして子供だったからこそこそ入ることの出来た裏から見た女郎屋。昼間の彼女達の洗濯していた姿を思い出します。

<告白>

色 街 の 灯 と も し 頃

愛 打 網 雄

タライの前でロングスカートをたくし上げて洗濯する姿。夏ならシュミーズ一枚で太股のツケ根まで、むき出しにして洗濯している彼女達を、私が子供だったが故に見ることが出来たのです。

洗いが上がった洗濯物は彼女達が身に着けていた下着ばかりで、それらが干されて風にゆれている光景は女物の下着に興味をもつ諸兄にはヨダレが出そうな景色です。

夕方になれば、女郎屋には桃色の灯がつき、肩や背もあらわに、ロングスカートの裾をヒザ上までたくし上げた女性や、和装の裾をヒラヒラさせて白い足を見せている女性を毎日、見られたし、また

少し帰りがおそくなれば、ここに書くことが憚られるような、お客との会話が耳に入ってくるのです。

二十数年たった今も、その頃の彼女達の姿や会話が、記憶に残っています。そして今では、自分が客として、それに類する会話を口にしていくことに気づき苦笑してしまっています。

今にして思えば、この様な環境にあったのを幸いに、最大限に探究心を働かせて、彼女達の生態を観察記録しておけばよかったと悔んでいます。

私がこの様な環境にいたが、性に目覚めたのは中学の三年の頃でした。そしてSMに興味を持つようになったのが、やっと三年程前のことです。本屋で奇クを手にした時に、この本が二十数年にわたって出版され続けてきたのかと驚くと共に、昔、初めて奇クを手にした時のことが、なつかしく胸に蘇ってきたのです。

なつかしさ一杯で手にした奇クを買い求め、時間も忘れて一気に読んでしまいました。読み終わって初めて、自分がSMに興味を持っていた事に気付いたのです。

読者諸兄姉の大部分が、小さい時から、それとなくSMに興味を

持ち、現在までSMを楽しんでこられた事を知り、羨ましく思っています。私の様にオクテの人間にはSMの世界は、これから探究してゆくことになります。

奇クを読み始めて三年。この間にも沢山の女性が誌上に現われて大活躍しているのを目にしています。道行く女性を含めて、私の周囲に居る女性全部がMの要素を持っているのではないかと、錯覚してしまう程です。

それだけ、奇クの内容が他誌より抜き出ているのでしょう。今迄にSMに興味を持つ女性には一人だけしか会っていません。その女性を、この手、この胸に抱いてプレイを楽しんできましたが、会うは別れの初めなりとか、今はその女性も、私の手元から去り、現在は新旧の奇クを読むだけで、SMの心を慰めています。

願わくば私に興味を持つMの女性があれば私に事を祈っています。また探し求めているのです。

Mの女性の方、貴女はどんな責めが好きなのか、貴女の好きな責め、貴女が快感で耐えられなくなるまで責めてあげましょう。

(横浜市港北区・愛打網雄)

早坂御夫妻に捧ぐ 私達のプレイ心情

高松志朗

私達もここ十年來の奇クファンです。毎号、夫婦プレイが誌上を賑わせて、ひそかに楽しんでゐる夫婦プレイ実践者として、心強く嬉しく思っております。

渡部、三浦、増田、新田等々、

続々と名乗り出られる各ご夫妻のプレイぶりを知るにつけ、その違い、その夫婦愛に感じ入っていたのですが、私達の到底、及びもつ

かない烈しいプレイで、身近には感じ得ませんでした。私達とて人間の悲しさ、仲の良いプレイをしながら、何か物足りないことを、いつも話し合っていました。

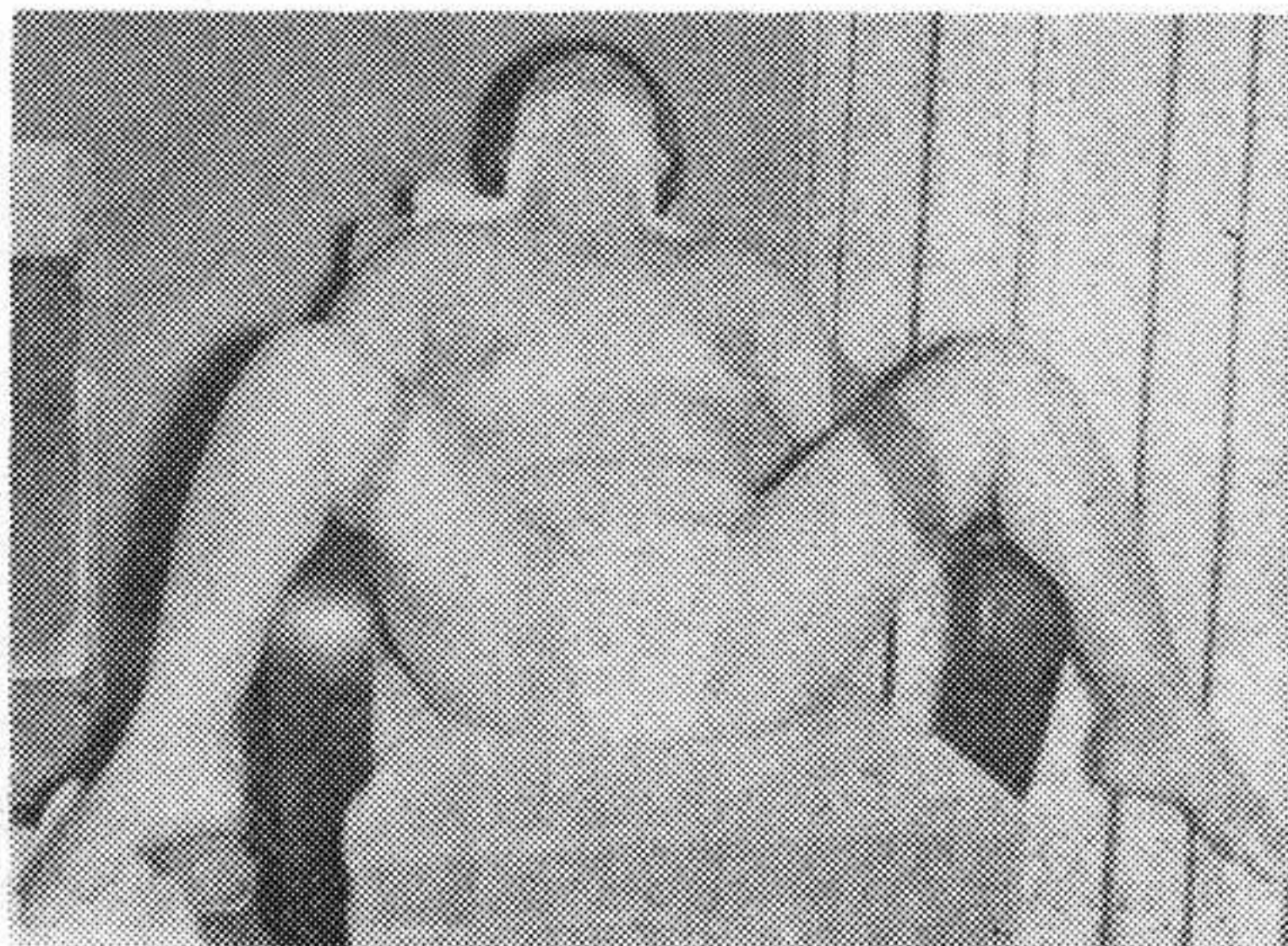
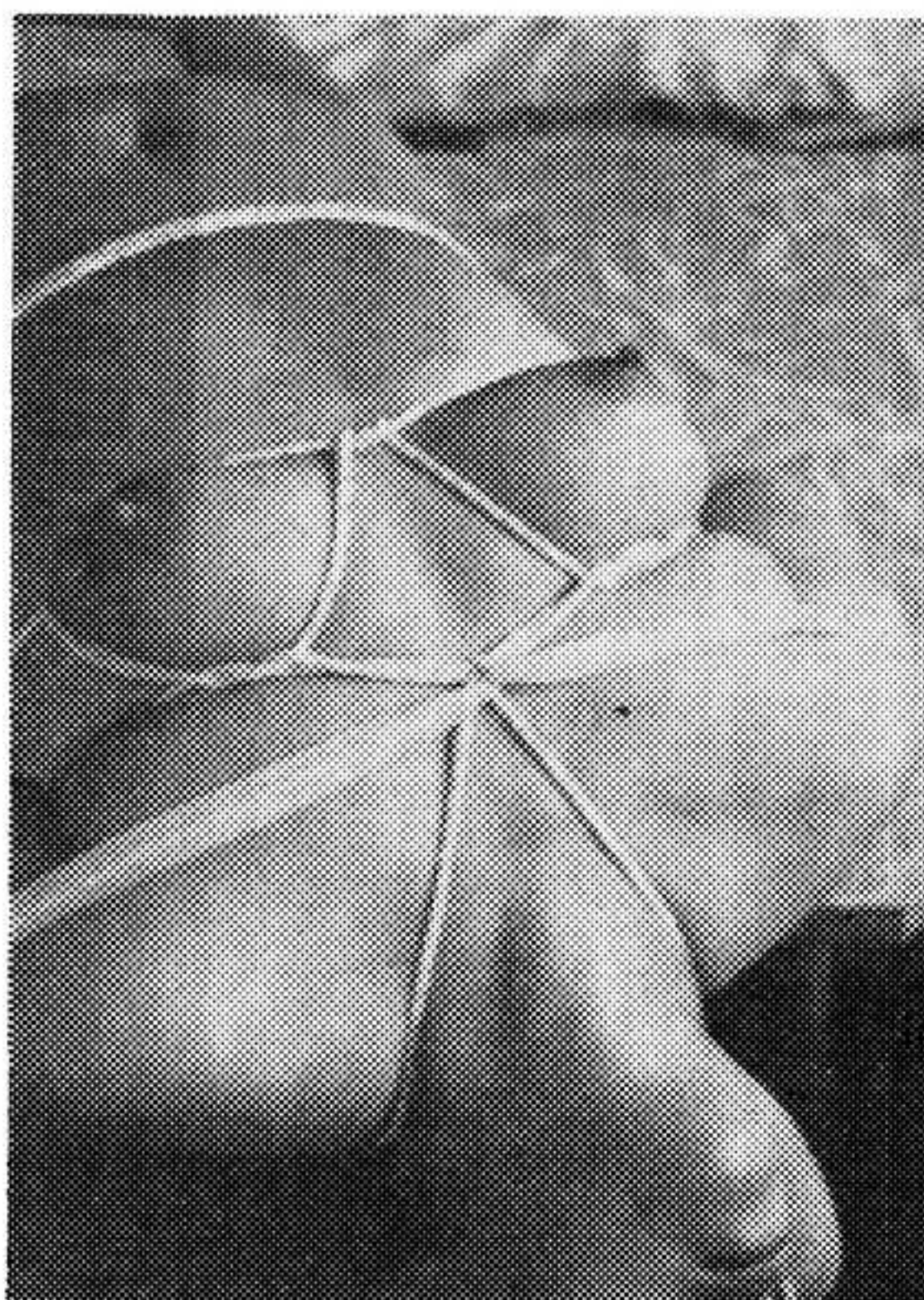
そこへ登場されたのが、早坂ご夫妻で、全く私達と同じ傾向と考え方をお持ちの早坂氏に、心から共鳴と親しみを覚えたのです。ム

ード溢れる中での前戯的羞恥責めこそ、今の私達のあり方で、苦痛責めや傷つく恐れのあるプレイは、いくら戯れといえども私達には出来かねます。

早坂ご夫妻のご登場は、私達に夫婦プレイは、あくまで二人だけのもので、公開などすべきでない、という考えをケシ飛ばさせました。これは、失礼ながら早坂夫人と妻がよく似た肢体であることも大きく作用して、妻が私以上に親しみを覚えたらしいことも理由の一つです。

とても早坂氏の足元にも及びませんが、ここに一、二葉の拙い作品を同封します。出来得れば、早坂ご夫妻のお目に止まり、御交流願いたいものだという、私達の心情からの投稿です。もし幸いにし

な肢体に氏の美しくセンスに溢れるボディペインティングが花と咲き、ナルシズムに陶醉し、快樂のプレイで天国に遊ぶ妻が現出するだろうに……と考えている今の私達です。拙作ながら、フォト作品は数百葉もございます。早坂ご夫妻の御笑覧を賜りたいものです。



短信往来

石田令子さんへ

—貴女の心を縛りたい—

井上雅人

市川にお住いの石田令子さん。誌上を借りまして初めて、ごあいさつを申し上げます。小生、東京の下町に住む三十才になるS九十九パーセントの子連れ亭主です。毎日、国電で丸の内に通う、平凡なサラリーマンで、カメラを持つ時や夜になるとSの虫が、さわぎ出します。(ただし、妻を相手だけの内ベンケイ)

『しばりのモデルになりたい』という貴女の呼びかけを、七月号にて拝見しました。『いろいろ、しばりのことなど教えて下さる方』をとの御希望、一刻も早く実現される様、祈ります。

『四月に初めて奇クに目を通したばかりで、くわしいことは何も知らないから勉強をしたい』——小生の素直な感じですが、未だ前髪もあげそめし、うら若き乙女の切なる願い、止むに止まれぬものが

あつての事と思います。今頃は、手紙を出した事、誌上に載った事だけで、すでに令子さんの胸中は自らの白き手が、細き指が、白いロープと化して、肌を喰い入り、体中を縛めて息をつまらせているのではないのでしょうか。

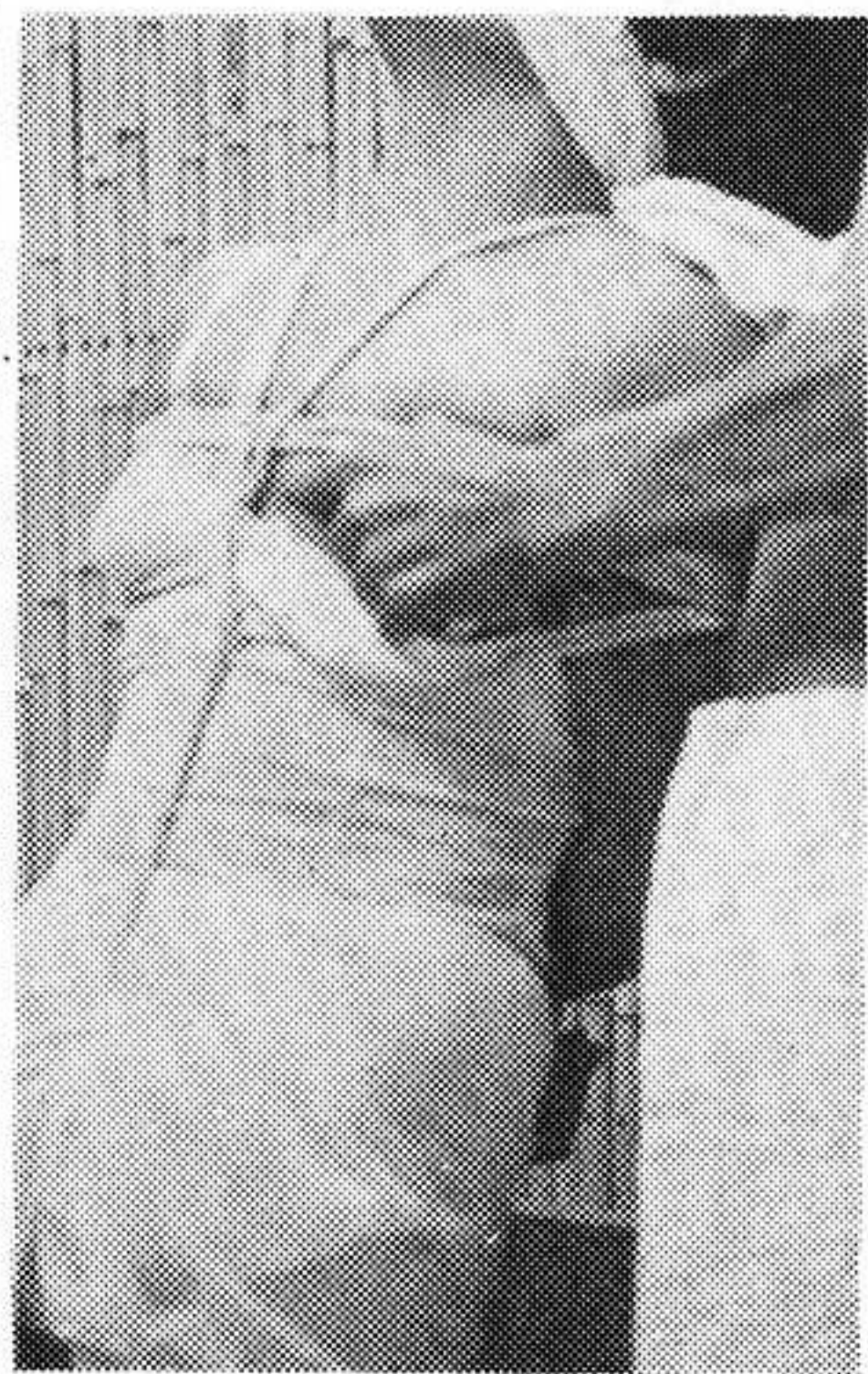
それが苦しい自分との心の斗いか、甘味なる陶酔であるかは、誰も知る事が出来ません。そしてそれを、ぜひともお聞かせ頂きたくペンをとりました。

御写真を見つけた所、表情もあどけないし、紺のセーラー服を着せても似合いそうな程に清潔な方に受け取れます。令子さんの御決心と、可憐なまでの勇氣に心から拍手を送ります。

令子さん、貴女は全国に住むS男性の前で、縛めを受ける事を自ら承諾したのです。これは、すでに貴女が目に見えぬヒモで、しばられていくという事です。

しばりについての勉強とは何か——しばり方の講義？ それともS・Mについての哲学分析？——令子さん、貴女の心は、きっと、そうしたものは求めていらっしやらないと思います。それは確かに美辞麗句や、もっともらしい事を書けば、誰でもが「読む」という

プレイの一駒 津山逸夫



場にとって見れば、素晴らしく思えるかも知れませんが、愛の芽生える如く、SとMとの出会いも、またマカ不思議なものなのです。

小生も今まで三人のM女性に出合い、写真も撮りました(その中の最後の一人が妻です)が、いずれの場合も、求め合うべくして逢ったのではなく、いつの間にか二人の間で、「しばりたい」「しばられたい」と、気持が変化をなしに行くものでした。

令子さんとの誌上でのお見合いが果たせるなら、気に入ってもら

えるか否かは別問題として、現代はスキんシップの時代であり、心と心のふれ合いは、フィーリングによって決まるものだけ申し上げておきます。

小生の他にも、多勢のS男性が令子さんに声をかける事と思えます。一人で、余り多くの誌面を独占するのも無礼と存じ、あとは令子さんに小生の緊縛作品(写真)の腕前を、お見せ致したく、出来る事なら、令子さんの了解を得た上で、回送してもらえないものかと思っています。

川路むら子さんへ

魅惑花を唄んで

志 羽 利 也

気候はよし、SMっ気のムズムズするには頃合いの時節である。奇ク誌上も正に百花繚乱、いずれが、あやめか、かきつばた。新星あり、依然おとろえを知らぬ名花あり。正に奇クファンにとっては万々才。しかし、いつの間にか、ひっそりと消えていった名前も、

数々あるようです。

「川路むら子」その名が見えなくなつてから久しい。かつて、その魔性の魅力を存分に誌上に見せてくれた、むら子さん。人妻の身の上ゆえ、モデルとして活躍を続けるには色々制約もありかと思われませんが……

熟れきつた肢体と瑞々しい肌、とくに海老縛りにされた貴女が目につくついています。全く素晴しい。八女体緊縛写真集Vでも伊東ゆかりに似た、花のかんばせを、しかめて呻吟する、むら子。



私は、その口に、さらに、きびしく猿轡をかませます。むら子にはムウと蓋うものより、歯と歯を割って噛まずスタイルが絶対にお似合いです。何故なら、苦悶するその表情が半分も隠れてしまうのは、あまりにも勿体ない。虚空へつき出されたお尻。曲げられ、すべすべと丸く輝く膝小僧。写真からだけしか、うかがい知る事が出来ないが、そこには開花したM女性性の総ての美がある。

むら子さん。又、何時の日かカムバックして、誌上を飾って下さい。又、願わくば、この目で確かめ、この手でその姿を紙の上に記録したい。

貴女の住んでいるという天竜市には、時折り所用で訪れます。当市唯一の天竜川上の公園、鳥羽山の山頂に立ち、この小さく寄りそう屋根屋根の何処かに貴女が息づいているのかと思うと、瞬時の白昼夢よろしく、むら子さん、貴女の緊縛姿が浮かんでくるのです。吹く風に夢から覚めれば、現実には厳しい。金も時間もなし、只あぐせくと働くコブつきの一人の中年男に立ち返り、せめて写真からの想像だけで、貴女を、きびしく縛り上げ、責めているのです。

皆さんが、よく書かれますプレイの事です、小生でしたらそれ以前の事として、令子さんとお逢いする時、場所を出来るだけ繁華街の駅の構内あたりにして、目じるしは、手首に真っ赤な絹のハンカチなどを、しばっておいてもらいたいものです。

これは、令子さんがM女性である事を自らアピールする、SMプレイ以前の「しぼり」です。奇クには、結婚する前から別名で幾度か創作やシナリオを載せて頂いた事もありますので、写真と共に令子さんのプレイの模様を心をこめて発表したい所存です。(小生カメラの方は、すでに十数年、家に暗室もあり、外部へは、たのみません)

貴女の可愛いらしいプリント模様のブラウスが剥がされ、素肌を晒してしばらく前に、小生は、令子さん、貴女の心をしばってしまいたいのです。

お会い出来るなら、二十冊に及ぶスクラップの写真、全巻そろえて買っていたグラビア写真全集等御希望により、ご覧に入れたいと思っています。

それでは又——さようならは言いません。

最上卓也様へ

—共にプレイを—

福島の水野生

奇ク六月号で、貴方の「我が初撮影の記」を拝見しました。小生福島市に住むSMマニアですが、車で一時間の距離に貴方のような同好者が居られたとは、意外で、大変、嬉しいことです。

初撮影の写真、誌上に掲載されなかったのがあるようで、文面から察して(6)(7)が圧巻だろうと思いますが、拝見出来ないのが誠に残念です。

写真は、欲を言えば少し光量不

渡部好美様へ

—お姉様とお呼びしたい—

北川 まりこ

渡部好美様。いつも奇ク誌上に、貴女様の求道者にも似たマゾの道への御精進振りを、貴女様や御主人様の手記、それに、辻村様のカメラハントの写真や文章等で拝見し、同じマゾの世界に生きる女として、大変懐かしく、また羨

足の感じですが、初陣のプレイ写真としては上出来でしょうし、プレイそのものの迫力で充分に補って余りあります。

特に、小生の好きな、臀部や乳房の豊かさなどが、よく表現されているし(5)の羞恥感など、見事に捉えていると感心致します。

小生も、当地で一年半ぐらい付き合っているM女性、真崇子(二十八才)とプレイしています。マネリ打開の一方法として撮影を試みてはいますが、現像その他で貴方と同じ悩みを持っています。

小生達のプレイの好みも羞恥責めですので、出来得れば御指導願いたいものです。真崇子にも、少しローソクの味を知らせてやって

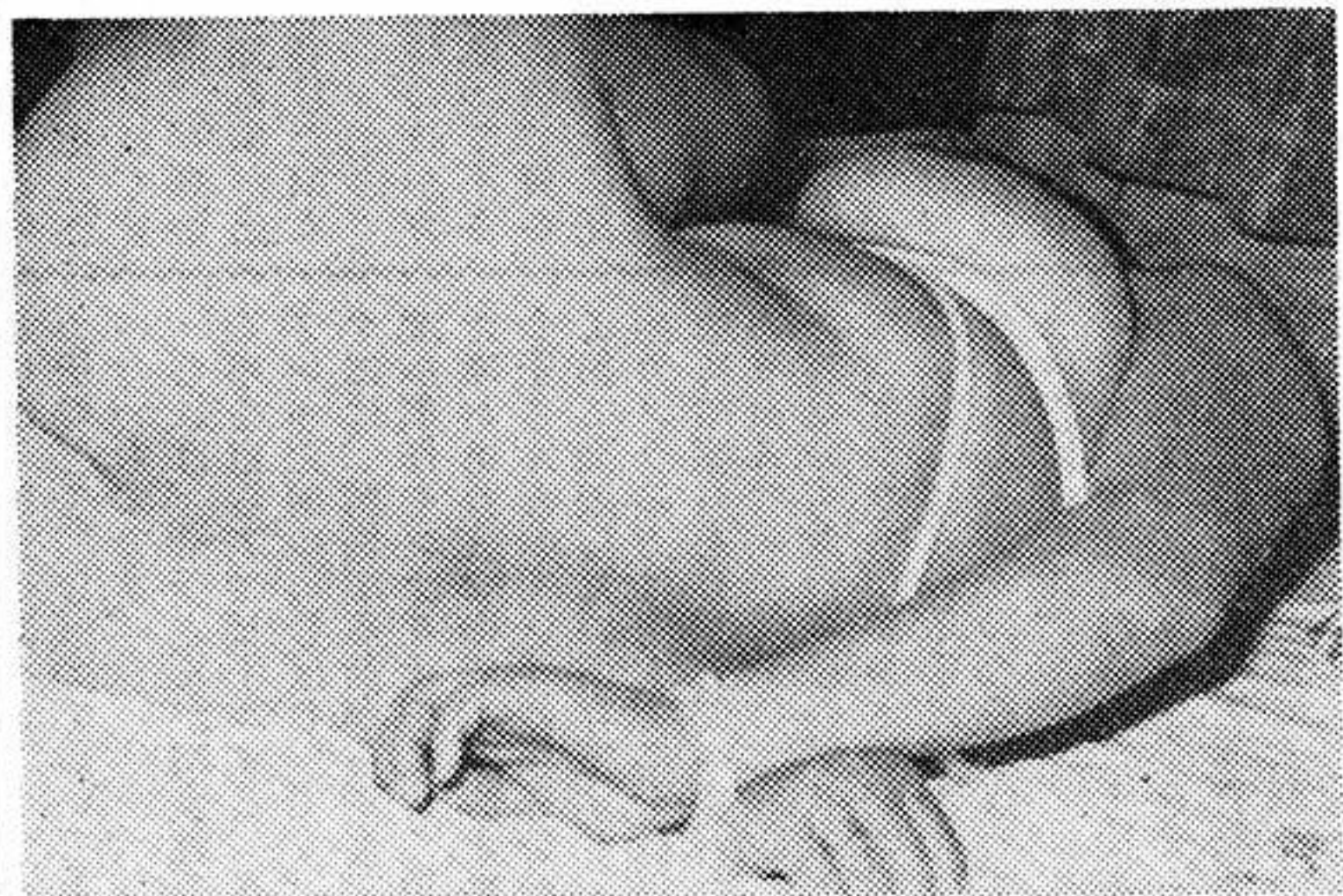
ましく存じております。かねてから、一度お便りを差し上げたいと存じながら、奴隷の身分のまりこは、文通とか外出の自由は一切、認めて頂けず、たまたま今宵、七月号で、貴女様と谷山久美子様の『Mアニマルの華麗なる対決』を読んだ主人から「お前も一度、好美さんと対決してみないか。それには、まず一度お便りを差し上げろ」と強制され、勿論、内心は喜んで筆をとりました。この手紙も

貰いたいものと思います。

これからは、プレイに最適の季節ですので、思う存分に女体緊縛を楽しめると期待してあれこれ計画しているのですが、よろしければ是非、共にプレイしたく思います。いかがでしょうか、お便りを下さい。書き忘れましたが、小生、今年四十一才のサラリーマンです。

主人の検閲を受け主人の手で投函される筈ですが、まりこは、できるだけ自分の気持を偽らず、飾らず、卒直に書くつもりです。初夏の夜は明け易く、もう東の空が白み始めております。主人は、昨夜来の調教に、すっかり疲れて休んでおります。まりこは僅かに右手の自由だけを許して頂き

裕子の縛り 最上卓也

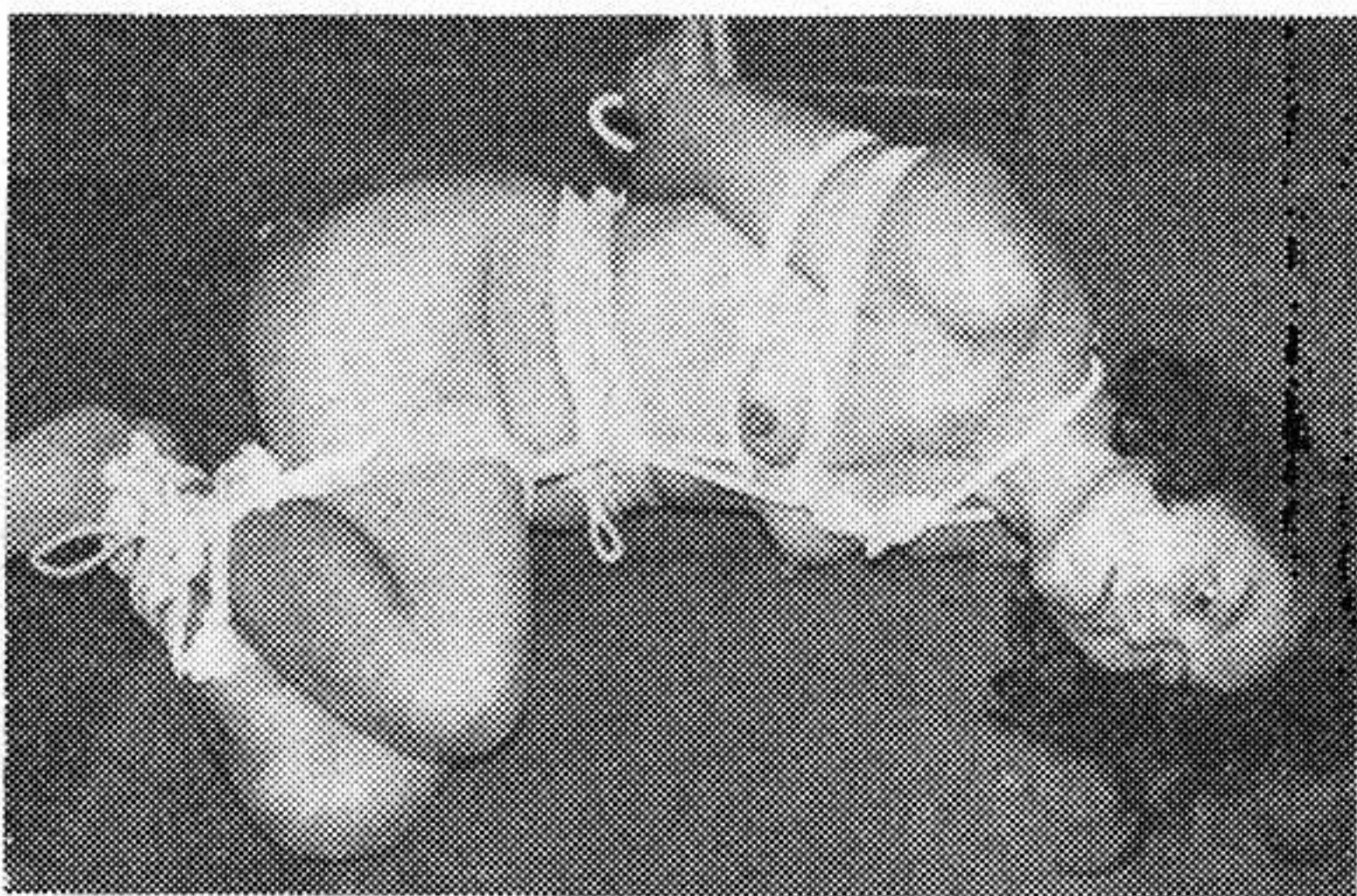


全裸開股縛りの羞かしい恰好で筆をとっていますが、強いられた文章でなく、自分の文章を認めております。

まりこは、貴女様と同じように

好美の悦虐

渡部光雄



奴隷妻でございます。いいえ、もっと賤しい奴隷妾の身分でございます。でも、まりこは貴女様を心から尊敬しています。貴女様に憧れています。まりこが奇ク誌に投

稿し始めましたのも、主人の強制によるだけでなく、四十五年四月号の、貴女様の「私はどうして、こんな女に？」の手記に刺激されたからでございます。平素は、お

しとやかで、つつましい人妻でありながら、一旦、プレイとなるとマゾの炎が燃えさかり、大胆なポーズで法悦の台詞を口走る貴女様こそ、本当にマゾの権化ではないかと存じ上げております。まりこは夫婦プレイで「静子」の役を演じながら、女らしい羞らいと初々しさを失わない貴女様こそ、本当は静子役にふさわしいのではないかと想像しております。そういえば、貴女様御夫婦のプレイで「静子夫人」と名付けておられる、本当に美しい被虐のポーズがございましたわね。

「私はどうして、こんな女に？」の手記を御発表になってから、何度か、辻村様のハントのモデルになられた映画「性倒錯の世界」に出演されさらに、寛大な御主人様のお許しを得て木山春夫様とのプレイを楽しまれる等、マゾの道一筋に傾倒されておられる貴女様を心から羨ましく存じております。

に頼みます。それにしても貴女様の大好きな浣腸責めが、まりこには苦痛ばかり強くて余り好きになれません。主人からも、いつも罵られておりますし、一生懸命で好きになるように努めます。

奇ク誌に発表された貴女様の数多くの御写真の中で、まりこの大好きなポーズは例の「静子夫人」のポーズと臨時増刊号の「祭壇の人身御供」の、ポーズでございます。この二つは、まさに悦虐の女神ともいうべき、本当に神々しいお姿だと存じます。

まりこは、今年の二月で満二十七才になりました。親も兄弟姉妹もなく、主人一人を頼りに生きていく女です。年上の貴女様を、せめて誌上で、お姉様と呼びしてお慕い申し上げます。こんな不躰なこと、お願い申し上げます。お氣に触りませんでしょうか。

初めてにもかかわらず勝手なところばかり申し上げ、それに不自由な恰好で認めました、この手紙、さぞかし読みづらいことと存じ、心からお詫び申し上げます。末筆ながら御主人様に、呉々もよろしくお伝え下さいませ。貴女様のお返事が頂ければ、まりこは死ぬ程、嬉しうございます。

妻に止められたプレイフォト発表

小田原一郎



ご無沙汰しました。筆不精のセイばかりでなく、実は妻からフォト発表を止められていたのです。しかし、大西氏や柴利好氏からお言葉をいただくと、じっとしておられなくなっていました。発表禁止を申し出た妻の恐れるのは、身近に同好の士が居て、身許が知られはしないだろうか？という懸念のようです。元々、M気は少なく、私に協力しているだけ……という妻ですから、いくら私の欲目？でMが育っているよ



うに思っても、もし「プレイまで禁止」となると困りますので、むげに打消すわけにもいきません。

妻の云うところによりますと、去年、辻村氏が朝のテレビ番組に出演された際に一緒に出演もし、カメラハント記事にも出ていたというM・Mさんは、出身校、記事内容、写真等から推して、どうも高校時代の後輩らしく、そういえば、テレビ画面に映った顔もどこかで見たような……ということなのです。

又、その後、妻の同窓会があったのですが、その二次会で数人が談笑した際に、たまたま「奇ク」が話題となったそうで、旧友中にも相当「M」に興味を示す人の居ることを知って、プレイに対する理解も深まり、後ろめたさも少なくなつた反面、自身のことがバレルのではないかと、ヒヤヒヤした……そうです。それやこれやで、もしや誌上の

編集部たより

○『夫婦プレイ』の告白や写真が数多く投稿され大いに意を強くしています。度々誌上にその美しい夫人の緊縛姿態を紹介された早坂信治氏が今度、豊富なフォトと共に真摯な告白文を寄せられました。次号の誌上を飾りたいと思っています。佐野みさ子さんも「SM代理妻」と題した一文とフォトを投じられたのですが、これも次号になりました。みさ子さんの編集部取材を、どうしてもやりたいと思っていますが、どうということになりますか、御期待下さい。

○前田真知子さんに引続き鈴木千鶴子さんも梅雨の晴れ間を狙い来阪され、迫力あるプレイと写真撮影が果されました。笠井奈保子さんに引き続いて、新しいM女性を口説いているという塚本鉄三氏からの通信に接しましたが、誌上でファンの皆様のご機嫌伺いが出来るかどうか、今のところは全く未知数です。読者通信に一文を寄せられた山添清子さんは、SMプレイはOKだが、写真撮影はオフリミットとのことで、誌上にお目見

自分の縛られた写真を見て、ヒトが正体を見破るのではないかという心配が強くなったようです。前記のように、ただ私が求めるから協力しているだけで、Mの快感など感じない（私の見たところでは相当に強度なプレイにも耐えつつこう、エクスタシーも味わっているように思えるのですが）という妻ですから、SMに対する理解と、実際の愛好とは別ものと考

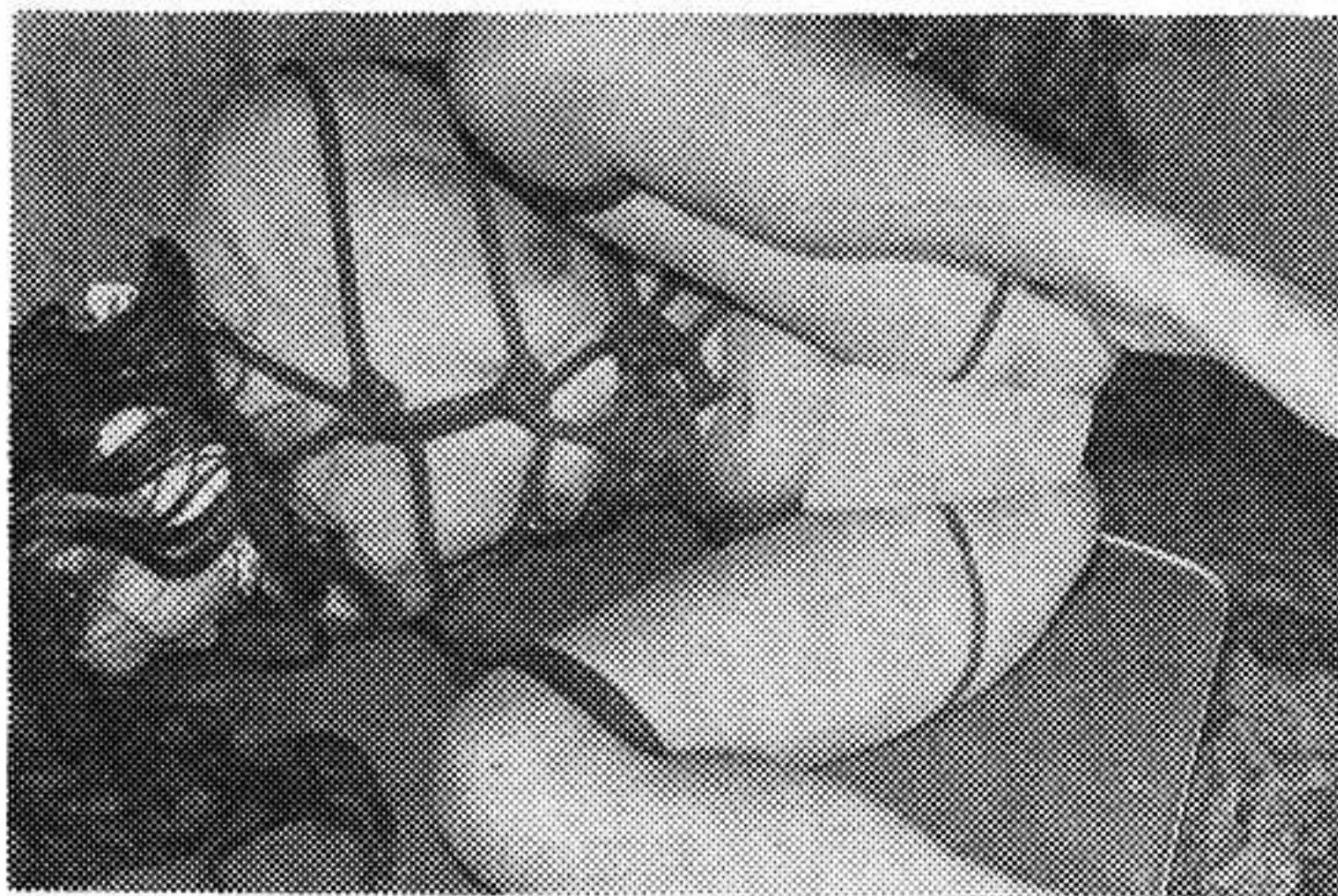


えているらしいのです。つまり、夫が縛りたがるから縛らせはするが、喜んで縛られているわけでは

ない……というところ、というより、二人だけのプレイならともかく、ヒトに、縛られて喜ぶマゾ女と思われることに強い抵抗を感じられるようです。

く、もっと強度の責めにも協力するからと云っております。嬉しいやら残念やらで、とまどっておりますが、いま逆らってプレイが出来るなくなってしまうのは一大事ですので、気長に口説く機会を待つつもりです。

今後共、どうぞよろしく。



え出来ませんでした。○S女性の川野香代嬢は、M男性遅参のためツムジを曲げられ遂にその後のプレイを納得して呉れませんでした。目下編集部から懇願してはいますが、まだ承諾は得ておりません。嘗てのSの女王春日ルミ女史の如きサジスチンの出現を大いに期待しております。○可愛いらしきM女八片えくぼのマリアV川路むら子さんからの通信を得ましたが、再び誌上を賑わしてほしいものだと思います。このことは、三浦純子さんや富田由美子さんについても言えます。○「レターM」と題する単行本を著者の谷貫太氏から寄贈を受けましたが、氏は嘗て本誌にも長く執筆されたことのあるSM作家で、この道一筋に邁進されている篤学の士だと聞いております。○マダム美美代コト福井桃子さんは愈々店を一軒持たれることになりましたので、今までのように誌上で活躍して貰えなくなるかもしれないですが、別の形で協力をお願いしています。『奈保子の自由日記帳』は、出来るだけ永く提供して下さるよう依頼しています。尚、サロンの原稿、次号には大幅に掲載の予定をしております。

奇クに想う
私 も 一 言

高崎 エネマ

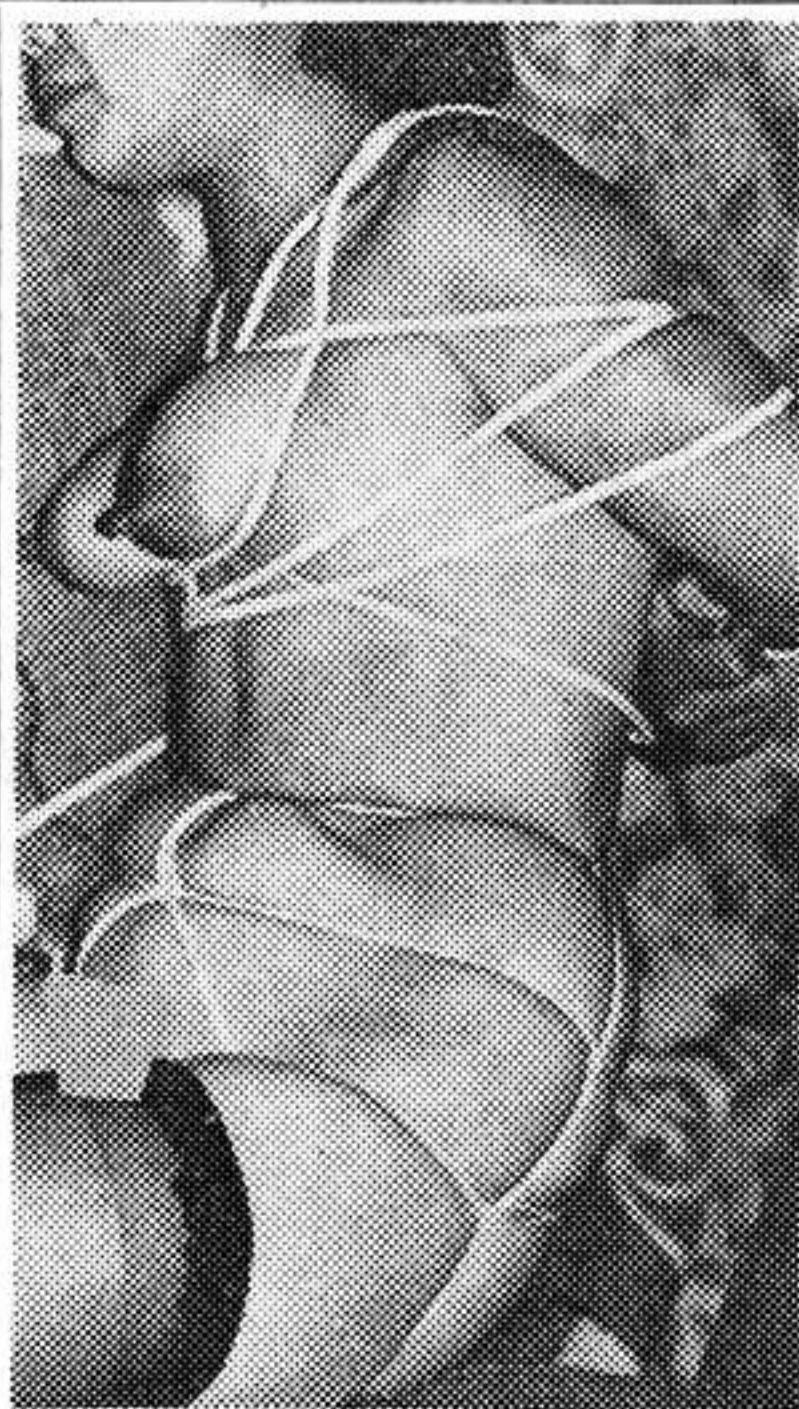
毎月、夫婦プレイの作品が誌上を賑わせていて、とても楽しい。ほとんどのご夫婦が交歓して一緒にプレイしたい、と望んでおられるが、あれもしたい、これもしたい、これはこうしたらどうだろうという想いが先に走り出し、他の夫婦はどういうふうなプレイしているのだろうかという考えが、誌上での呼びかけになるのではないかと思っている。

プレイメイトを求める人も、事情こそ違え、大体は同じような気持だろう。サロンや通信欄のあの人の人に、ドキドキしながら手紙を書いて呼びかける。しかし、返事は誌上だけで、直接交渉はまず望めないことも先刻承知だ。だが、その手紙を書いたということだけでも、かなり鎮静剤的效果があると思う。これも一種のプレイなのだろう。ひょっとして呼びかけた相手から直接の返事が——という期待を持つことも、ある意味でのプレイかも知れないが、投稿者のヒミツを厳守する奇クが、有

難くもあり、恨めしくもある。

辻村氏にお願い——となるのも毎夜々々悩みに悩んだ末だろうと思うが、全国からとなると、その数も少なくはないだろう。多忙すぎて持病に障らないかと心配。本当に、ご苦労さんと、いいたい。私は先日アメリカへ行ってきたが、見た映画はスゴかった。SMものではなく、浣腸ものだが、日本では到底、望み得られない映像が、一般の映画館で見られるのだから感心する。

しかし、すぐにこの様になったのではなく、まず小説類から解放されていったとのこと。日本が、この道程に踏み込めるのは、いつたい、いつ頃だろうか？



私の縄掛け 紀川正信

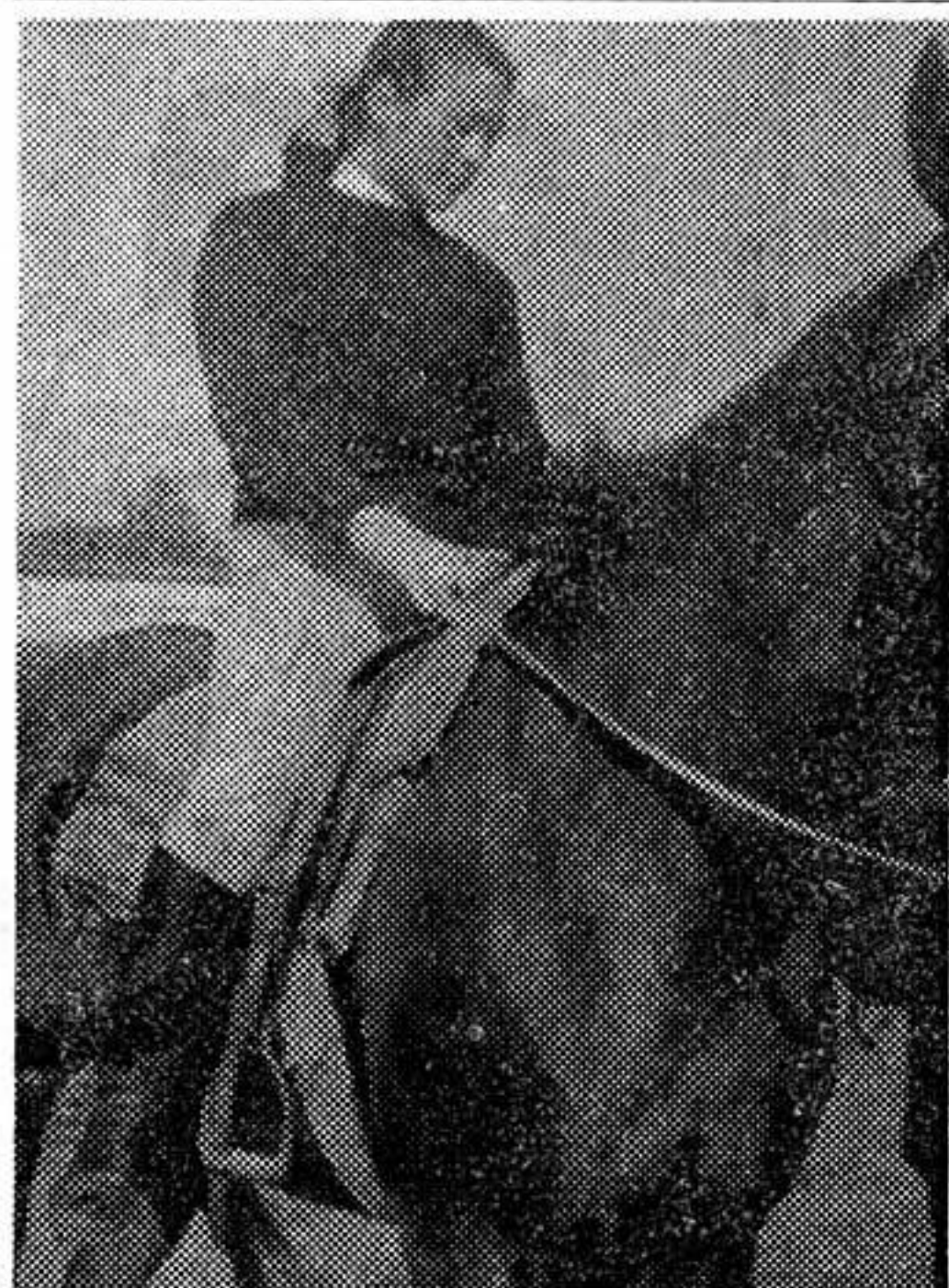
夫婦プレイを羨む

勝手にしやがれ

原 多津男

パリリと頁をめくる。ゾクツとなる緊縛裸女が居やがる。パリリとめくる。またゾクツとする。パリリ、ゾクリ。パラゾクが続く。どれもこれも、オイラを尻目に云ってやがる。アンタ、恋人ないの？ って。バカにしてもらいたくはネエもんだ。恋人の三人や五人はイラアナ。縛れる恋人は？ って訊いてもらいてえ。すりゃあオイラ、大声で答えてやらあナ。「それが、居ないの。だれか紹介してくんない？」って。そう気の

毒がるばかりじゃあラチがあかねえ。おまえさん、やってくんねえかなア、プレイを。オイラとサ。え、なに？ 主人が居ますって？ わかってライ！ おめえの縛られてる横に、夫婦プレイのナントカと書いてあらア。並べた男名前がおめえをそんなに縛り上げたヤドロク野郎だろ。おめえみたいな美人を裸に剥いて、思うがままに縄掛け出来る果報モンの顔が見てえもんだ。クソ面白くもネエよ、まったくのハナシ。だいたい、おめえもおめえだ。なんだい、幸福って、こんな風に縛られるコトよ。ってな顔をしゃがってサ。プレイメイトもねえ独りモンの身にもなってみろっテンダ！ 何？ お気の毒？ チェッ、またかヨ。ようし、おめえがホントに気の毒だと思ふんなら、おめえの口から、そのキレイな肌に縄ア噛ましたヤドロク野郎を口説いてもらおうじゃないか、オイラに縛られたいってさ。いえサ、無理は承知の上だ。たった一日、いや半日でもいい。それが駄目なら三時間、いや一時間、三十分、十分、五分、一分、じゃあ仕方ねえよ、いくら、なんでも。そうかい、わかったよ。もういい！ 何かして寝るよッ！



憧れのドミナ ----- 佐野 寿

奇クに寄せて 一輪花であれかし 城野洋之

最近、一時のように古本屋を漁るまでもなく、一流書店でも容易に貴誌の新刊を見つけたことができるようになって来ました。それだけSMが世間に理解されてきたのかと思いますが、私は、この傾向を喜ばしいことだとは思っておりません。

勿論、奇クも商業誌である以上売れなければ困るでしょうが、あ

まり大きな顔をするより、ホンのささやかな本屋の隅の方で、つましくホコリをかぶっている奇クのほうが、やはり私は好きです。

現在のこのポルノ・SM・ブームというものは、情報過多時代のマスコミが作りあげた、ウワベだけのものであると、私は見ています。そのうち落着く方向へ向かうだろうと思うのですが、私として

は、奇クが、売れるなら何でもいい式の煽情的なものと同類に見られ、SMとは、やはり変態のする事で気持ち悪い、と思われるのではないかと心配で、たまらないのです。やはり奇クは、数ある草花が妍を競い合う中よりも隅の方でひっそりと咲く、ささやかな一輪花であって欲しいと思います。

はつきり言って私は、サド、マゾ、フェチといったものへの興味は誰にでも潜在しているが、それを行動に移すのは、程度の差こそあれ、変態だと思うのです。ただ奇クに書かれていたそれは、すべて遊びの精神の上に立っていることなので、それを否定しようとするものはありません。

がしかし、世間一般の人々は、奇クを愛する者（むろん私も含まれる）や、何とかマニアの実行するプレイを、いくら合意の上の高級な大人の遊びだと言ったところで、スナナリと受け入れる筈はないと思いますし、私は、受け入れて欲しくはないのです。

これだけいろいろなストレスの多い現代社会に生活していれば、誰でも心の余裕を持ちたいと思うだろうし、裸の社会といわれるほど、すべての事があからさまにな

ってしまう世の中ですから、自分一人だけの「秘密の世界」を持つのもまた、楽しいことだと思うからです。

だいいち、SMなんてことに若い女性がみんな理解を示したら、何も知らない女性を自分好みに飼育するサディスティックな喜びや自然に湧き上がる情感なんてものが味わえず、団氏の小説など成り立たないじゃありませんか。

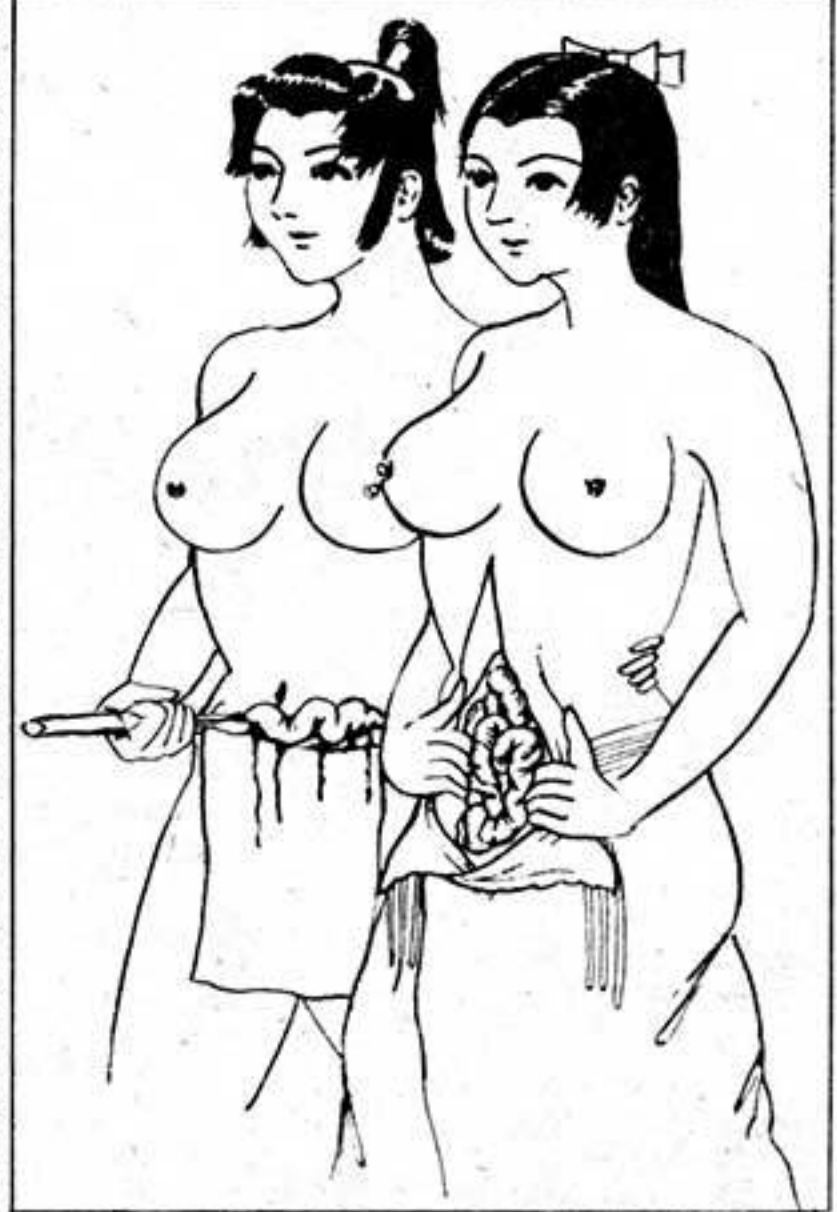
「そう。あなたマゾですか。じゃあ、このバカ野郎！ 最低！ ブタ！」……が、初対面の若い娘さんのお世辞としたら？ やはりマゾの方は喜ぶでしょうか……？

日本人の文化は「恥の文化」であると、いわれています。もっとみんなが、つつしみ深くならなくては、いけないのです。（私は思想的に右ではないし、年寄りでもありませんけれど……）

結局、私のいいたいことは、奇クが、こうした事に興味を持たない人々から、うわすべりだけの誤解で見られるのが、たまらないのだということですが、では、おまえは奇クを愛しながら変態ではないと、いいきれぬか？ と聞き直されると、ハッハハ……と笑ってゴマカスだろうと思います。

「切腹女」のおたより

井上則子



—— 美少女無惨絵秘帖 ——

—— 「披腸の誓い」 ——

—— 桐原紫門 ——

女性切腹ご愛好のみな様、懐剣の妻の則子で御座います。五月号に、また私の雑文を載せて戴き、感謝しております。

みな様は、NETテレビの「城下町一〇番地」と云う番組、御存知でしょうか？ ある小藩の勘定方を勤める夫蔵人（ハナ肇）とその妻八重（司葉子）を中心にした、マゲ物コメディですが、去る五月五日の放送を見ていた私は、すっかり感激してしまいました。と云いますのは、その中で女性の切腹が、セリフだけでしたが大き

くとり上げられていたからで御座います。

千両箱の紛失事件にからんで、夫が切腹するかも知れないとなった時、妻八重に扮する司葉子さんの口から「私も武士の妻、潔く女腹を切つてあなたの後を追います」と云うセリフが流れ、その後「切腹する」とか「腹かき切つて」とか云うセリフを、何回も聞くことができました。六月二日放送分では「切腹」と云うセリフは出ませんでした。夫が切腹した

私の淡い浣腸の思い出

金沢吾一

初めて便りをする者ですが、私は奇クを知ってからのというもの、必ず辻村氏の「カメラ・ハント」を先ず読み、浣腸場面はないかと探し求めます。それは、氏のプレイボというだけに、真実味が感じられるからです。

私が、こんなに浣腸に魅せられ始めたのは、小学校六年の時に受けた浣腸が原因だと思っています。あの時、便意があったのを我慢して、トイレに行かなかったのが悪かったらしく、やがて、父に病院へ連れて行かれるほど下腹部が痛く、苦しくなってしまうのでした。

医者「盲腸炎ではない。浣腸一本で治る」という言葉に、父も私も一安心したのですが、私は、浣腸とは注射のことだろうと思っていたものでした。

それが、針のない注射器を持った看護婦に注入された時の驚きと珍妙な感じ。そして一挙に、ほとぼしり出る排泄の快感は、今でも忘れられないほどのものでした。それ以後、私は浣腸にとりつかれたのですが、辞典や医学書で調

べた上で実践に取りかかり、イチジク浣腸から始まってシャンプーやジュースの容器でやってみたり水道の蛇口に連結したホースで直接、試みたりし、果ては川の中でホースを使ってやってみるようになつたのでした。

今でも、月に一、二度は五十ccグリセリン浣腸器でやっていますが、ガラスの嘴管は冷たくて妙な気持ちになれるものの、一人ではどうも折れそうな気がしますし、浣腸液の送り込みも浅い感じですので、普通はネラトン管を使用しています。

こんな訳で、私は、いかにも創作じみた浣腸小説は好みません。むしろ、SM的ではない、日常の家庭内で行なわれているような、さりげない浣腸の話の方に強く惹かれるのです。

私の幻想する情景は、子供のお医者さんゴッコに出てくる浣腸。初恋の人にセーラー服やジャンパースカートを着せたり、自分が着たりして施す浣腸……等ですが、女高生の制服への憧れを混ぜた浣腸場面が最高なのです。

映画通信

最近の緊縛シーン

東山 映史

最近の日活のポルノ映画に緊縛シーンが多く楽しませてくれる。ブロードヴィーナスのサリーメイ主演の「らしやめんお万・彼岸花は散った」は昭和初期の長崎を舞台に、女つばふりのサリーメイの魅力が、ふんだんに見られる。女ズベ公達が、やくざの稲荷屋

ら私も自害を、と白無垢に身を固め、帯に懐剣を差して覚悟を決めた司葉子さんの姿が、ブラウン管に登場していました。

私もプレイを始めてから、そろそろ一年。プレイにアクセントをつける為に、この頃では切腹衣装にバリエーションを持たせています。紅いミニお腰巻一枚とか、巾の狭い紅の六尺褌を思い切り、ずり下げて締めただけの、素っ裸に近い姿では、少し恥かしいのですが、思い切り身体が動かれます。お腰巻とかお褌の上に白の半襦袢

だけを羽織った姿では、恥かしさが、いくらか救われます。和服をちゃんと着れば、おしとやかなムード。和洋とり混ぜてミニお腰巻やお褌一つの裸に外出用のスーツやミニのワンピース、セーター等を着け、近代的なムードを添えることも御座います。

六月号の読者通信で、私宛のおたより拝見致しましたが有難う御座いました。御希望にそえるように、いずれは写真も投稿しようとは思いますが何となく恥かしく決心がつくまで御待ち下さいませ。

につかまり、リンチにあう。縛られて袋の中につめこまれ、吊るし責めにあう。そして内股や秘部を焼かれる。そして、また輪姦される。さらにサリーメイの妹の菊は土蔵の中で全裸に剥かれ、変質的な親分に両手吊るしにされ、責められる。その妹は女郎にされるがサリーメイは妹を助けんとして身代りになり、親分に犯され、麻酔をかがされ、背中に弁才天を彫られる。全裸で後手縛りの彫物姿がいただけだ。ラストは大立ち廻りというオマケつき。ピンク女優の林美樹もセックスシーンや立ち廻りで活躍。



不安な時間 あらい・かず

同じ日活作品の「白い女郎花」は、幕末の女郎をヒロインとしたもの。廓を足抜けした女郎の拷問シーンが目を見はらせた。拷問部屋で前手縛りの女郎が、むごたらしく打たれる。ここでもピンク女優の真胡道代の、女郎上りの、やくざの女房が責められながらのセックスシーンを見せる。

「痴態百景」がSM作家の鳴滝三郎の作品だけに、興味をもって見たら、手錠、縄による緊縛シーンで楽しませてくれた。

先ず主人公は、大人のオモチャ屋の手錠、これを買った里見孝二がカモを見つける。宝石を万引し

た珠瑠璃。美しい彼女の腕にガチャンと手錠を打つ。そして連れ込み宿にひっぱり込み犯す。この手錠が、つぎつぎと廻っていく。やくざの親分の情婦が、チンピラとの情事を親分に発見され、縛られ責められる。また、作家の青山美紗が手錠でレスシーンを演じて遊んでいる所へ強盗に入られ、連縛される。一寸、面白い着想で、いだけだ。

テレビで「忍法かげろう斬り」で范文雀のくの一が、忍び込みを発見され捕えられ拷問にかけられる。最近では時代劇の捕物帖等で美女の緊縛シーンを見せてくれる。

浣腸責め地獄の妊産婦 大手札四枚一組 略号△ほな△ 増田みゆき	浣腸責めの甘い恐怖 大手札三枚一組 略号△とか△ 中河 恵子	浣腸液注入直後の状況 大手札三枚一組 略号△とま△ 中河 恵子	強制浣腸の各美姿態 大手札三枚一組 略号△とみ△ 中河 恵子	浣腸責めの美態開陳 大手札三枚一組 略号△とめ△ 中河 恵子	浣腸を待つポーズ 大手札三枚一組 略号△とも△ 中河 恵子	エネマと縛りの恐怖 大手札三枚一組 略号△よて△ 長井葉津子	エネマ責めの恐怖 大手札三枚一組 略号△よる△ 長井葉津子	浣腸器を弄び愛撫する女 大手札三枚一組 略号△よる△ 長井葉津子	イルリガートルの浣腸責め 大手札三枚一組 略号△よた△ 長井葉津子	浣腸にむせび泣く女 大手札四枚一組 略号△つゆ△ 大島 照代	身動き出来る浣腸地獄 大手札四枚一組 略号△つえ△ 大島 照代
浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 略号△ひそ△ 大塚 啓子	強制浣腸責めの序曲 大手札三枚一組 略号△よか△ 長井葉津子	襲いくる浣腸器嘴管の先 大手札三枚一組 略号△より△ 長井葉津子	鼻孔の奥を探索魔手 大手札三枚一組 略号△はむ△ 中河 恵子	開孔器にてひらく鼻孔 大手札三枚一組 略号△はら△ 中河 恵子	なぶられる拘束裸身の鼻 大手札三枚一組 略号△はれ△ 中河 恵子	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり 大手札三枚一組 略号△はに△ 中河 恵子	美女の鼻をもてあそぶ 大手札三枚一組 略号△ちる△ 左近麻里子	美女の鼻孔を觀賞する 大手札三枚一組 略号△ちれ△ 左近麻里子	開孔器で検査する鼻孔 大手札三枚一組 略号△ちき△ 左近麻里子	鼻孔に煙草挿し込み責め 大手札三枚一組 略号△ぬと△ 美木乃々子	可愛い鼻責めのアップ 大手札五枚一組 略号△ぬは△ 美木乃々子
強烈縛りで顔面翻弄 大手札八枚一組 略号△ぬほ△ 美木乃々子	可憐乙女の鼻をいたぶる 大手札四枚一組 略号△るえ△ 一宮百合子	鼻責めと鼻孔のアップ 大手札三枚一組 略号△ねけ△ 中河 恵子	鼻責めの陶醉境 大手札三枚一組 略号△なは△ 大塚 啓子	淫虐鼻なぶりの形相 大手札三枚一組 略号△ない△ 大塚 啓子	鼻の穴を責める 大手札三枚一組 略号△なく△ 大塚 啓子	夫婦連縛にて鼻責め 大手札十枚一組 略号△らか△ 増田みゆき	鼻責めに悶える女 大手札七枚一組 略号△むる△ 木村 洋子	顔を凌辱される女 大手札四枚一組 略号△むよ△ 木村 洋子	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号△うい△ 大塚 啓子	鼻責めによる悦楽 大手札二枚一組 略号△きな△ 東浦・大塚	美しき鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号△ゆは△ 遠藤百合子
乳房いじめの責め 大手札二枚一組 略号△とお△ 大塚 啓子	豊かな乳房を責める 大手札三枚一組 略号△とき△ 東浦ひかる	逆エビ吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ1△ 梨花悠紀子	逆胴吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ2△ 梨花悠紀子	大の字逆さ吊り 大手札二枚一組 略号△むの△ 増田みゆき	豊満乳房しばり責め 大手札三枚一組 略号△うは△ 長野 良子	吊り打ち責め 大手札三枚一組 略号△やり△ 関谷富佐子	腰元の吊り責め 大手札二枚一組 略号△こり△ 村井知可子	乳房強調膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ△ 佐々木真弓	エネマシリシ挿入責め 大手札三枚一組 略号△えね△ 大塚 啓子	ワシづかみ責めの乳房 大手札三枚一組 略号△えう△ 大塚・東浦	強烈乳房責め五態 大手札五枚一組 略号△てら△ 山原 清子

パイプ責めに呻めく女 大手札三枚一組 略号八きわ 松本 たえ 五〇〇円	両足挙げ柱宙縛り 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	強烈黒縄縛り悦虐地獄 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	羞恥責めに陶酔する女 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	猿轡と縄に涕泣する瞬間 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	柱宙縛りと逆さ縛り責め 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	足を吊られた悦虐に泣く 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	浣腸溶液を圧入される 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	全裸で受ける三種の浣腸 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	イルリの嘴管挿入浣腸 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	突き刺さる浣腸器の恐怖 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	自ら施す浣腸の悦楽 大手札三枚一組 略号八きろ 松本 たえ 五〇〇円	深田 菊子 略号八みそ 四〇〇円
体内に奔流する浣腸溶液 大手札三枚一組 略号八みや 深田 菊子 四〇〇円	浣腸プレイを楽しむ美女 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	オシメから生ゴムカバーへ 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	おムツに排便する乙女 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	生ゴム製のオムツカバー着用 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	メロン腹白縄縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	正面柱縛りの蛙腹 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	開脚縛り妊娠腹 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	蛙腹を晒す開股責め 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	太鼓腹強調片足吊り 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	妊孕緊縛美の極致 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	美しき妊孕腹緊縛 大手札三枚一組 略号八みぬ 深田 菊子 四〇〇円	福井 桃子 略号八みぬ 五〇〇円
八カ月の妊婦裸身開陳 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	柱縛りの九カ月腹妊婦 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	引き回された妊婦腹 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	膨隆妊婦腹の股間縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	鏡に映る太鼓腹縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	蛙腹誇張の緊縛美 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	足挙げ縛り蛙腹妊婦 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	卓の脚に縛った蛙腹妊婦 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	九カ月妊婦腹の緊縛美 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	豆絞りの猿ぐつわ哀情 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	逆エビ地獄の美女 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	麻縄亀甲菱縄縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 福井 桃子 五〇〇円	前田 真知子 略号八みぬ 五〇〇円
後手高手小手縛り三態 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	卓上の緊縛悦虐姿態 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	全裸浴室での股間縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	悶える踊子の欲情処理 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	美しき全裸の縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	柱縛りと脚挙げ縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	麻縄高手小手首縄縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	荒縄強烈エビ縛り 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	荒縄悦虐羞恥責め 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	悶える強烈海老責め 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	柔肌をくびる厳しき縄目 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	緊縛の全裸女体をいびる 大手札三枚一組 略号八みぬ 鈴木千鶴子 五〇〇円	カラー三枚一組 略号八みぬ 前田 真知子 五〇〇円

両足首括り逆さ吊り	大手札五枚一組 略号ハ〇〇円	六尺裄着用の艶姿	大手札七枚一組 略号一〇〇〇円	ゴム衣とゴムの猿ぐつわ	大手札三枚一組 略号五〇〇円	黒フンドシの女(正面)	大手札三枚一組 略号五〇〇円
梨花悠紀子	略号ハさか	美木乃々子	略号ハぬお	木村 洋子	略号ハなと	遠藤百合子	略号ハくま
手足逆さ宙吊り	大手札五枚一組 略号ハ〇〇円	パリスSSバンド着用	大手札三枚一組 略号五〇〇円	甘美なる椅子プレイ	大手札四枚一組 略号六〇〇円	黒フンドシを誇る姿	大手札三枚一組 略号五〇〇円
逆さ吊りの女体を析檻	梨花悠紀子 略号ハさと	東浦ひかる	略号ハおこ	中河 恵子	略号ハなあ	遠藤百合子	略号ハくわ
梨花悠紀子	略号ハ〇〇円	サカエメンスバンド着用	大手札三枚一組 略号五〇〇円	開股拷問椅子の正面責め	大手札四枚一組 略号六〇〇円	黒フンドシ背面刺青模様	大手札三枚一組 略号五〇〇円
梨花悠紀子	略号ハ〇〇円	東浦ひかる	略号ハおえ	中河 恵子	略号ハなた	山原 清子	略号ハくこ
メンスバンド着用替ゴム見せ	大手札五枚一組 略号ハ〇〇円	サカエ軽便型バンド着用	大手札三枚一組 略号五〇〇円	オムツ着用の股間縛り	大手札四枚一組 略号六〇〇円	黒フンドシ入墨姿	大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる	略号ハ〇〇円	東浦ひかる	略号ハおた	オムツ着用フエチフォト	大手札四枚一組 略号六〇〇円	山原 清子	略号ハくの
股に喰い込む黒フンドシ	大手札三枚一組 略号五〇〇円	パリスメンスバンド前開き	大手札三枚一組 略号五〇〇円	オシメをつける二人プレイ	大手札七枚一組 略号一〇〇〇円	黒ふんどし媚態の魅力	大手札五枚一組 略号七〇〇円
東浦ひかる	略号ハとし	東浦ひかる	略号ハおい	大塚 啓子	略号ハむね	山原 清子	略号ハくな
股を開いた黒フンドシ姿	大手札三枚一組 略号五〇〇円	携帯用白色メンスバンド着用	大手札三枚一組 略号五〇〇円	ゴムのオムツカバー強制着用	大手札六枚一組 略号一〇〇〇円	白晒六尺フンドシの姿態	大手札五枚一組 略号七〇〇円
東浦ひかる	略号ハとし	東浦ひかる	略号ハおか	山原・東浦	略号ハむし	刑部 典子	略号ハけす
開股逆さ吊り姿態	大手札三枚一組 略号五〇〇円	パリスバンド着用縛り	大手札三枚一組 略号五〇〇円	生ゴムの猿ぐつわ責め	大手札六枚一組 略号一〇〇〇円	黒六尺フンドシを締めた女	大手札五枚一組 略号七〇〇円
左近麻里子	略号ハちて	東浦ひかる	略号ハおは	山原・東浦	略号ハむに	刑部 典子	略号ハけせ
左近麻里子	略号ハちて	パピアメンスバンド着用	大手札三枚一組 略号五〇〇円	オシメ着用と女学生	大手札四枚一組 略号五〇〇円	フンドシ姿の羞らい	栗本 ミチ
強烈責め被虐の果て	梨花悠紀子 略号ハ〇〇円	相撲裄を締めた女	大手札三枚一組 略号五〇〇円	木村 洋子	略号ハむこ	栗本 ミチ	略号ハふへ
梨花悠紀子	略号ハ〇〇円	東浦ひかる	略号ハそい	大塚 啓子	略号ハうえ	六尺裄の羞じらい	栗本 ミチ
踊り子の美しき緊縛	大手札三枚一組 略号五〇〇円	メンスバンド着用開股ポーズ	大手札三枚一組 略号五〇〇円	六尺フンドシの女性像	大手札四枚一組 略号六〇〇円	黒フンドシの羞じらい	栗本 ミチ
絹川 文代	略号ハりこ	東浦ひかる	略号ハつん	関谷富佐子	略号ハくろ	黒フンドシを着用した女	横尾 峯子
股間縛りの法悦境	大手札三枚一組 略号五〇〇円	黒ゴム衣後手縛り	大手札三枚一組 略号五〇〇円	黒フンドシを着用した女	大手札四枚一組 略号六〇〇円	黒フンドシを着用した女	横尾 峯子
絹川 文代	略号ハぬこ	木村 洋子	略号ハなほ	大塚 啓子	略号ハくふ	黒フンドシの女(背面)	玉田美佐子
相撲裄着用の艶姿	大手札三枚一組 略号五〇〇円	ゴム衣緊縛悶悦姿態	大手札三枚一組 略号七〇〇円	遠藤百合子	略号ハくう	黒フンドシの女(背面)	玉田美佐子
美木乃々子	略号ハぬわ	木村 洋子	略号ハなへ	遠藤百合子	略号ハくう	黒フンドシの女(背面)	玉田美佐子

血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 略号△せん 六〇〇円
梨花悠紀子

女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 略号△せい12 一八〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 略号△せぬ 五〇〇円
大塚 啓子

首桶に落ちる女の首

大手札三枚一組 略号△せへ 五〇〇円
水野加代子

愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 略号△せほ 五〇〇円
水野加代子

切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 略号△せは 五〇〇円
水野加代子

血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 略号△きつ 八〇〇円
大塚・東浦

介添え切腹の女

大手札四枚一組 略号△あか 六〇〇円
甘木 春子

自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 略号△えし 一五〇〇円
山原 清子

自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△やい 五〇〇円
大塚 啓子

自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 略号△やえ 五〇〇円
大塚 啓子

自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 略号△やお 五〇〇円
大塚 啓子

血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 略号△くえ 七〇〇円
大塚 啓子

哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 略号△るな 七〇〇円
大塚 啓子

絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 略号△るく 四〇〇円
新宮夫人

引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 略号△るに 四〇〇円
新宮夫人

血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 略号△わい 七〇〇円
大塚 啓子

殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 略号△わこ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 略号△わは 七〇〇円
大塚 啓子

女体自刃の美態

大手札三枚一組 略号△ねに 五〇〇円
細川アヤ子

女体切腹媚態

大手札二枚一組 略号△ねは 四〇〇円
細川アヤ子

肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 略号△なせ 七〇〇円
長野 良子

禪裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 略号△らは 七〇〇円
絹川・大塚

和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 略号△らり 八〇〇円
田中・愛川

血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 略号△らふ 一〇〇〇円
絹川 文代

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 略号△らく 四〇〇円
愛川・田中

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 略号△らみ 四〇〇円
愛川・田中

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号△のき 五〇〇円
新宮夫人

晒台の女の生首

大手札三枚一組 略号△のく 五〇〇円
新宮夫人

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号△のみ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 略号△のそ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 略号△のい 二〇〇〇円
大塚 啓子

美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 略号△のり 二〇〇〇円
大塚 啓子

屠腹される女体

大手札12枚一組 略号△のる 二〇〇〇円
大塚 啓子

立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 略号△のさ 一八〇〇円
大塚 啓子

切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 略号△のむ 一八〇〇円
大塚 啓子

絞首された女体

大手札六枚一組 略号△のひ 一二〇〇円
大塚 啓子

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号△くし 五〇〇円
新宮夫人

絞首刑にされる女

大手札三枚一組 略号△こけ 五〇〇円
新宮夫人

血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 略号△えみ 二〇〇〇円
山原清子外

ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 略号△こま 六〇〇円
梨花悠紀子

ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 略号△こは 六〇〇円
東浦ひかる

メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 略号△もか 五〇〇円
東浦ひかる

白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 略号△ひに 一八〇〇円
山原 清子

白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 略号△ひぬ 一八〇〇円
山原 清子

ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 略号△みす 五〇〇円
水本 茂美

メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号△ゆお 五〇〇円
遠藤百合子

月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 略号△ゆす 五〇〇円
遠藤百合子

竹棒と猿轡と縄と 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円	麗身の裏と表縛りの綾 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△せと▽ 六〇〇円	裸身に悶えるマゾの表情 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△せり▽ 六〇〇円	豆絞りの猿轡と縛りの表情 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△せれ▽ 六〇〇円	私を虐めて下さい。お願い 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△せろ▽ 六〇〇円	悦虐夫人のマゾの表情 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△せや▽ 五〇〇円	全裸の股間縛り 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△せら▽ 六〇〇円	ムチの一打に反る裸身 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もれ▽ 五〇〇円	富佐子の裸身を陳列 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もる▽ 五〇〇円	尻を立てたムチ打ちポーズ 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もて▽ 五〇〇円	片足吊り上げて鞭に泣く 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もな▽ 五〇〇円	私をムチ打って頂戴ネ 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もね▽ 五〇〇円	脂ぎった豊満女体縛り 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円	鞭が柔肌に炸烈する 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もう▽ 五〇〇円	滑車吊りで揮う甘い鞭 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もき▽ 五〇〇円	両手万才に縛りムチ打ち 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もこ▽ 五〇〇円	狂う鞭に哀切の表情 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△もみ▽ 五〇〇円	エビ縛りの鞭打ち 大手札四枚一組 安井喜久子 略号△しと▽ 六〇〇円	鞭と縛りに夢心地の表情 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めり▽ 六〇〇円	烈しい鞭は美肌からむ 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めも▽ 六〇〇円	狂う鞭に狂うムチの女王 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△める▽ 六〇〇円	両手吊りの女体に鞭の雨 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めさ▽ 六〇〇円	鉄砲縛りの鞭打ち地獄 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めせ▽ 六〇〇円	鞭打ちに呈す感泣の極致 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めて▽ 六〇〇円	逆エビ開股の女体に鞭打ち 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円	ムチ打ちに悶絶した女体 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めへ▽ 六〇〇円	強打にのけぞる悦虐表情 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めふ▽ 六〇〇円	羞恥責めによる法悦境地 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めら▽ 六〇〇円	足挙げ開股羞恥責め 大手札三枚一組 梨花悠紀子 略号△あけ▽ 五〇〇円	片足挙げ姿態にムチ打ち 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△こら▽ 五〇〇円	両手吊りに悶えるM女 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くい▽ 六〇〇円	開股責めに泣く女 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くあ▽ 六〇〇円	両手万才吊りで晒す女体 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くむ▽ 六〇〇円	開股羞恥責めにむせぶ 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くめ▽ 六〇〇円	片足挙げ吊り責め 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くも▽ 六〇〇円	両膝頭開股宙吊り 大手札四枚一組 中河 恵子 略号△くち▽ 六〇〇円	ムチの強打に泣く裸身 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△むち▽ 六〇〇円	足吊りの被虐肢体 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△らえ▽ 五〇〇円	鞭打ちにうねるM女 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△らあ▽ 五〇〇円	鞭に狂う女の悦虐表情 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△らて▽ 五〇〇円	美しき女体マゾの境地 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△らせ▽ 五〇〇円	全裸開股膝頭縛り 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねさ▽ 五〇〇円	菱縄縛り竹棒責め 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねし▽ 五〇〇円	開股竹棒羞恥責め 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねろ▽ 五〇〇円	手足縛り逆エビ責め 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねき▽ 五〇〇円	竹棒の開股強烈縛り 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねく▽ 五〇〇円	首縄後手高手小手縛り 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△ねこ▽ 五〇〇円	竹棒開股ムチ打ち縛り 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△つい▽ 五〇〇円
--	--	---	--	--	--	---	--	---	--	---	--	--	---	--	---	---	--	---	--	---	---	--	---	--	---	---	---	---	---	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	---	--	--

〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組百態 大手札印画紙(9×13) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚(送料共)

五組五枚

八〇〇〇円

十組十枚

一五〇〇〇円

二十組二十枚

二八〇〇〇円

五十組五十枚

五〇〇〇〇円

百組百枚

八〇〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が
出回っているようですが、これは
全部特殊マニアの蒐集用として一
粒選りのネガから直接印画紙に焼
付した極めて鮮明な逸品揃いばか
りです。きつとファンのアルバム
を最高に充実させると信じます。
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社
へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)
2 トイレ排泄強要(三浦 純子)
3 完全二つ折締め(三浦 純子)
4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)
5 超強烈エビ責め(三浦 純子)
6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)
7 全裸縛玄関晒し(三浦 純子)
8 ネどうでもして(高村 浩子)
9 蠟燭責後手縛り(富田由美子)

10 羞恥の源を抉る(江口 淑子)
11 妊婦縛りの圧巻(富田由美子)
12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)
13 正面の妊婦縛り(富田由美子)
14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)
15 両手挙前面晒し(福井 桃子)
16 強烈尻腸ポーズ(高村 浩子)
17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)
18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)
19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)
20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)
21 柱縛り開股強要(福井 桃子)
22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)
23 本格的な麻縄責(前田真知子)
24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)
25 正面股間縛晒し(高村 浩子)
26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)
27 店での全裸縛り(福井 桃子)
28 豊満な女体開陳(福井 桃子)
29 恍惚バイブ責め(江口 淑子)
30 マダム責の哀愁(江口 淑子)
31 開股強制棒責め(前田真知子)
32 大の字片足挙げ(高村 浩子)
33 雁字搦目の女体(江口 淑子)
34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)
35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)
36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)
38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)
39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)
40 マダム全裸開陳(江口 淑子)
41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)
42 女体美を晒して(深田 菊子)
43 高々と後手緊縛(福井 桃子)
44 猿轡に悶える女(高村 浩子)
45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)
46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)
47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)
48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)
49 エビ責めの序曲(江口 淑子)
50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)
51 料理される女体(高村 浩子)
52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)
53 両手両足開責め(三浦 純子)
54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)
55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)
56 浴室での尻腸責(江口 淑子)
57 股間に喰込む麻(深田 菊子)
58 尻腸責めのあと(福井 桃子)
59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)
60 スナックで縛る(福井 桃子)
61 喰込む股間縄責(江口 淑子)
62 責めに呻くM女(高村 浩子)
63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)
64 菱縄悲し泣く(江口 淑子)
65 M女を責め尽す(前田真知子)
66 引回される全裸(江口 淑子)
67 尻立蠟燭悦虐(福井 桃子)
68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)
70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)
71 被縛者のマダム(江口 淑子)
72 縄の山と尻腸器(福井 桃子)
73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)
74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)
75 両手両足吊り責(江口 淑子)
76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
77 全裸一直線開股(福井 桃子)
78 裏門を開放する(深田 菊子)
79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)
80 後手胴締股間縛(深田 菊子)
81 強烈海老責地獄(江口 淑子)
82 大の字縛り正面(高村 浩子)
83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)
84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)
85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)
86 後手吊上げ責め(三浦 純子)
87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)
88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)
90 マダム開股の図(福井 桃子)
91 がっちり後手縛(深田 菊子)
92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)
93 妊婦大の字縛り(富田由美子)
94 開脚を強要せよ(富田由美子)
95 引回される妊婦(富田由美子)
96 強烈麻縄掛け(前田真知子)
97 股間縛の引回し(江口 淑子)
98 正座する股間縛(荒尾 慶子)
99 荒縄後手二つ折(前田真知子)
100 椅子開股羞恥責(前田真知子)

〔秘蔵版写真一掃分讓品〕

昭和四十年頃より四十二年頃に
かけて天星社に於て分讓して
ましたSM資料写真は、その後分
譲中止になつておりました。最
近になつて再開を望まされた
おりますので、特に希望者に
増をいたします。御注文の方
五日間の予定で作成の上、早
御送付申上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わふ▽

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わむ▽

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わら▽

女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△六〇〇円
花田沙登子 略号△わけ▽

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わな▽

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円
花田沙登子 略号△わね▽

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め
大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よひ▽

全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よゆ▽

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よめ▽

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よす▽

全裸の四つ這い木馬責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よも▽

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よき▽

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よさ▽

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め
大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もと▽

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もへ▽

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もに▽

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もち▽

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽

美木乃々子 略号△もぬ▽

土壇で胴斬りの仕置
大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もり▽

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もは▽

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まふ▽

二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まも▽

美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まね▽

男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まめ▽

痛烈、ムチ打ちの二馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まれ▽

首絞めてM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まむ▽

汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まり▽

二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まみ▽

パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△わそ▽

豊満な太股で首を股責め

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△わそ▽

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ▽

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△わた▽

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△らも▽

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△せ10▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子 略号△ひた▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子 略号△ひと▽

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
甘木 春子 略号△まに▽

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△れは▽

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△れみ▽

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△のせ▽

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
絹川 文代 略号△ちた▽

豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
長野 良子 略号△ほふ▽

明瞭な臨月腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

双胎の臨月腹を鑑賞する

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

妊婦の乳房を縛り弄そぶ

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

妊婦後手縛り引き回し

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

亀甲縛りの臨月妊孕美

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

乳房緊縛の双胎臨月腹

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

臨月双胎蛙腹の股間縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

浣腸される妊産婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

臨月妊婦の全身像

大手札二枚一組 略号四〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

臨月妊婦腹の側面

大手札三枚一組 略号五〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

妊婦臨月腹のアップ

大手札二枚一組 略号四〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

膨満の妊娠腹の緊縛

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

妊婦開股縛り哀歓

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

八力月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

妊婦腹誇張の開股縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

妊孕美人の媚態立像

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

妊孕美人の媚態坐像

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

両手吊り片足挙げの妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

両手吊り妊婦の正面

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

臨月の妊婦三態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

動物的な臨月妊婦の腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

産み月の膨大な腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
安原さゆり 略号八〇〇円

麻縄でくびった妊婦腹

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

ころがされた緊縛の妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

臨月妊婦の革紐縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

見事に美しい臨月腹妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

臨月の妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

臨月の妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

九力月妊婦全裸正面立像

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

九力月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

九力月の妊娠腹を縛る

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

柱縛りに苦しむ九力月の妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木戸悦子 略号八〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

猿轡につめく臨月妊婦腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

革紐による臨月腹股間縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
中河恵子 略号八〇〇円

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
金原奈加子 略号八〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
金原奈加子 略号八〇〇円

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
金原奈加子 略号八〇〇円

妊婦全裸縛りの全身

大手札三枚一組 略号五〇〇円
金原奈加子 略号八〇〇円

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印面紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇〇円

十組十枚 一五〇〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇〇円

百組百枚 八〇〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天竺社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで大活躍している若くて美しいM女たちの印面紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲ります。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さいます。

☆

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|--------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 | 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 |
| 排泄を耐える女(笠井奈保子) | 臀部と後手縛り(前田真知子) | 縄で開股を強要(深田 菊子) | 後手足首後吊り(高村 浩子) | 柔肌にむごき縄(深田 菊子) | M女なればこそ(高村 浩子) | ポリウムを縛る(笠井奈保子) | 引回し股間縛り(深田 菊子) | 正面から狙う眼(鈴木千鶴子) | 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子) | 屋上のいたぶり(前田真知子) | 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子) | 高々と後手縛り(鈴木千鶴子) | 首縄に泣く屋上(前田真知子) | 美女両脚柱縛り(深田 菊子) | 豊満な尻部責め(深田 菊子) | 惨美貌の羞らい(深田 菊子) | 猪宙吊りの浩子(高村 浩子) | 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子) | 美へ与える汚辱(前田真知子) | 縦縄に呻く女体(深田 菊子) | 白き裸身の縄目(笠井奈保子) | 両足吊流腸姿態(鈴木千鶴子) | 閨での羞恥責め(深田 菊子) | 正座しての懇願(前田真知子) | 仕置と折檻の果(高村 浩子) | 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子) | 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子) | 総てをさらして(前田真知子) | 片足挙げ柱縛り(深田 菊子) | 全身に喰込む縄(高村 浩子) | 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子) | もつと股を開け(笠井奈保子) | 転がされた女体(笠井奈保子) | 形よきお脐悦情(深田 菊子) | そんなのはイヤ(前田真知子) | 喰込む股間縛り(高村 浩子) | 菱縄正面髪掴み(鈴木千鶴子) | 両足吊り逆エビ(高村 浩子) | 縄束の中の折檻(深田 菊子) | 乳房強調の猿轡(笠井奈保子) | 責め抜かれた果(鈴木千鶴子) | 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子) | 階段に呻く女体(深田 菊子) | 後手縛りの模範(深田 菊子) | 両足首逆さ緊縛(深田 菊子) | 階段で逆立縛り(深田 菊子) | 責めに反る指(前田真知子) | 豊満な全裸縛り(笠井奈保子) | プロポーズ(鈴木千鶴子) | 羞恥を晒す女体(深田 菊子) | 海老責二つ折り(高村 浩子) | 正面開股菱縄縛(深田 菊子) | 白肌に喰入る縄(前田真知子) | 尻立てアヌス責(深田 菊子) | 竹と棒責め地獄(前田真知子) | 豊隆乳房へ責め(高村 浩子) | 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子) | 羞恥股裂き責め(前田真知子) | 高々棒吊り両足(深田 菊子) | 正面片足引上げ(前田真知子) | 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子) | 二ツ折りの仕置(鈴木千鶴子) | 猿ぐつわの表情(笠井奈保子) | 逆片足エビ責め(前田真知子) | 嚴重な後手縛り(笠井奈保子) | 反り返った女体(鈴木千鶴子) | 縛りに放心状態(笠井奈保子) | 美を汚辱する時(前田真知子) | 片足吊りの正面(深田 菊子) | 乳房強調の縛り(深田 菊子) | 片足吊りの序曲(笠井奈保子) | 縄で攻める開股(深田 菊子) | 縄痕むごし柔肌(前田真知子) | 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子) | 開股を攻める縄(高村 浩子) | 放置された縛体(笠井奈保子) | 憂愁の美女緊縛(深田 菊子) | 足挙げ開股責め(深田 菊子) | 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子) | 悦虐に泣く乳房(高村 浩子) | 責められた悦楽(鈴木千鶴子) | 屋上の引き回し(前田真知子) | 写真マニアの顔(笠井奈保子) | 臀部突出足縛り(深田 菊子) | 氣懶るき責の宴(鈴木千鶴子) | さあ立たないか(前田真知子) | 棒縛り開脚責め(深田 菊子) | 人身御供の裸身(笠井奈保子) | 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子) | 痛いから許して(前田真知子) | 乳房責と股間縛(高村 浩子) | 諦観の晒しもの(笠井奈保子) | 階段で開く両脚(深田 菊子) | 強制された開股(笠井奈保子) | 顔を向けないか(前田真知子) | 大の字開股責め(深田 菊子) | 美しき縛り表情(深田 菊子) | 豊かさを縛る縄(笠井奈保子) | |

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相撲つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪のかみ合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士争い押さえ込み

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しは▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原・清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止どめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中での裸女死闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲着用連続フォト

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚・啓子 略号△すま▽

相撲禪を締ゆ込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面展開

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦さながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力技群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽



柏木真佐男・画

○ 最近の奇クは大層、充実してき

て毎月、楽しく読ませて頂いてお
ります。読み返してみても噛みしめ
れば噛みしめる程、味わいの出て
くるのは奇クぐらいのものです。
七月号では奇ク若手三人娘の前田
真知子、高村浩子、深田菊子の写
真や記事が多くて楽しめました。
更に最近には笠井奈保子に鈴木千鶴
子といった若さ溢れる女性も登場
してきて私達ファンには一層、楽
しみです。誰もかれも文章がうま
く書けるとは限りませんが、SM
に理解ある女性の告白は、どんど
ん誌上にのせてほしいものです。
福井桃子マダムのように、テープ
レコーダーにとって、それをあと
で文章化するというのも厄介でし

○ 先ず第一に、新妻の緊縛フォトを
送るつもりです。

(三重県・守井達夫)

○ 笠井奈保子さん。いい身体をし
ていますね。まるまっちい、肉づ
きのよいお尻なんか、見ていると
たまりません。7月号226頁に
のっている写真なんか、かぶりつ
きたい位。このポーズで流腸を施
したら、と思っただけで僕の指先
は、ふるえます。これは口絵では
横向きになっていますが、僕はお
尻を向けた方が大好き。日記帳を
のせていますが、これからもずっ
と引き続き毎月のせて下さいね。
僕は奈保子さんの大ファンです。
若さあふれる笠井奈保子さんに幸
あれ。
(京都市・増井 武)

○ ようが、どうか私達フ
ァンのために、少しで
も誌上を賑わして下さ
い。それともう一つ。
夫婦プレイの写真や記
事も、大いに楽しみで
す。顔は無理に正面か
ら出さなくてもよいで
すから、勇気を出して
どんどん登場して下さい。
い。私はまだ現在、独
身ですが、結婚したら

○ 私は、若い女性に流腸をしてあ
げることが大好きです。私は、便
秘でなやむ女子高校生や大学女子
学生のお尻からグリセリン流腸を
してあげて、お通じをつけてやっ
たことがあります。けれども、う
つぶせになって、はだかのかわい
いお尻をもち上げた女子高校生の
肛門に、私が上手にガラス製流腸
器をさしこんでグリセリン流腸を
してやったとき、彼女は私をお医
者様のように感じて、かたくなっ
ていました。うつぶせになって、
はだかのお尻をもち上げた深田菊
子という美少女の肛門に大きな流
腸器をさしこんでやって責めのよ
うな流腸をしても、深田菊子とい
う美少女は、かるく責められるよ
ろこびと、のんびりした、かわい
い、ほほえみさえ、うかべます。
こんなになすなおで、かわいく手あ
てを受ける美少女は、少ないと思
います。(東京都・藤田奈一郎)

○ 奇クの十数年の愛読者です。時
には執筆しています。当年四十五
才。大のS男性です。目下独身。
ぜひM女性を妻にと物色中です。
それには、奇クのお世話になるの
が早道と拙文をもにした次第。

○ 誌上を毎号のように飾っている夫
婦プレイを、小生も是非とも実行
したいのです。我と思わんM女の
申し込みを、お待ちします。小生
の好みとするのは鼻責め。しかし
他の責めも、お望み通り何でも致
します。ふるって、お申込みの程
を。
(神奈川・齊藤香根雄)

○ 初めて便りを差し上げます。私
は横浜では、かなり有名な女学院
の3年生です。この本との出会い
は今年の正月です。本屋で文芸物
の間に目につけて手にとったのが最
初です。ひと目見て、顔が赤くな
りました。心は、はやSMの世
界に入って行きました。急いでお
金を払って本屋を出しましたが、ど
こをどう歩いて家に帰ったか覚え
ていません。それから毎月、発売
日が待ち遠しくて、しかたありま
せん。本を読みながら私が主人公
になった気持ちになるのです。毎夜
家人が寝静まってからベッドに起
き上がり、本を片手に実演するの
です。もちろん一人ですから縛り
は出来ませんが、それでも楽しん
でいます。枕元にクリップと洗濯
バサミ、ベルト、ローソクを仕度
し、鏡台をベッドの方に向けて、
一日はいていたパンティを口にく

わえます。これが私のオープンングです。たまにはセーラー服を着て演技し、それを鏡に、うつすこともあります。乳房に洗濯バサミを、はさみます。乳首にはクリップです。ベルトで、ももをしぼり片手でローソクを持ちローソクを、たらしめます。アヌスにはボールペンかサインペンを差し込みます。

そして私が犯されている気持ちになるのです。時には静子夫人に、又は芸者福竜になったつもりになります。先日、薬局で、いちじく浣腸を買ってきました。もちろん、大人用です。さっそく、その晩、鏡にうつしながら自ら浣腸を施しました。しみいる冷たい感触は、何とも言えません。しかし5分ほどしか、我慢できませんでした。そこで私はモデルとして応募したいのです。年令18才、身長一六二

●御送金についてのお願い●
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合は必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もあり、普通小為替等のご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願ひ致します。

センチ、体重四九キロです。希望は縛っていただいて、浣腸と乳房いじめ、お灸、ローソク責め、剃毛などです。その他、私が恥かしくてたまらないような責めを考えて下さい。同封の写真は去年の文化祭の時のものです。

(神奈川県・高田礼子)

八月号で「夢遠き日頃」を書かれた前田真知子さんの写真の出来は、非常によかった。偽りない素直な文章も好感が持てた。飾りけの多い、ケバケバしい厚化粧のSM小説や毒々しいコントなんかの押しつけがましい文章に、あきあきしていた私は、前田さんの文章に一ぶくの清涼剤を感じた。さすがに大学卒の女性だけに、自分の思っていることを、すらすらと書いていくのには感心した。それに口絵の写真もよかった。いくら見ても見飽きない前田さんの写真に私は、じいっと見入っていたが、マスケットとして印刷紙焼付けのフォトが、ほしくなった。

(長崎市・天主堂守)

私は32才になる真面目な会社員です。奇クを愛読しだして、もう10年になります。数回しか女性

を責めたことがないS男です。七月号の三浦純子さんの投稿の中で「緊縛の悦楽には、負けます」の一文を読んで、ぜひ一度、貴女を責めてみたいと思います。私は、特に、こんな責め方をしてみたいが、いかがでしょうか。まず衣服を着けたまま、後手に縛りあげ、私の前で正座させます。そして奴隷になることを誓わせ、本格的な全裸の緊縛責めに入ります。高小手に股間縛りのまま貴女は私の目の前で部屋を一周させられる。

(勿論、足首も縛ってあります)

さらに柱に、はりつけにさせられたり、ベッドに強烈に縛られたりしながら、バイブレーター、ソーセージ、ローソクなどで、ありとあらゆるところを、責め抜いてみたいと思います。とにかく誌上では、あまり大胆に書けません。私が今まで考案した縛りを、すべて行なってみたいと思います。しかし、貴女は大阪に、私は東京に、いることが、とても残念です。けれども二月に一度くらいは大阪へ行っても構いませんので、こんな私でも責めを受けてみてほしいと思ったり、ぜひ、お手紙下さい。

(東京都町田市・東本一郎)

毎号、女王様を求める男性Mの声を数多く見られますが、ドレイを求めたS女性のそれは、ほんとに数少ない。最近の傾向からSMに関心を持つ女性が多くなった事を考えますと、根がお淑かな女性の天性の故かとも思いますが、その数少ない声の内から、一つ。週刊大衆6月22日号のポスト一条さゆりの中での、桐かほるさん。彼女は西の一条、東の桐かほると云われた名手であり、またレスビアンの先駆者でもある。彼女に責められて相手役が舞台を、のたうち回る迫真の演技は、定評のあるところであり、その彼女の弁として「出来たら今後、男の人を使って女が男をいじめるというものを、やりたいんです。でも男の人が居ないんです」と。その言や壮。是非、見つけて実行して頂きたい。必ずやストリップに新しいファンが増える事は、間違いないと思われまふ。今は昔、浅草のフランス座かロック座で、踊子の股を潜ったり首を挟まれたりしたコメディアンの姿に、えらく興奮した若き日の自分の姿を思い出します。誰方か、若さとビボウに自信のある方は、桐かほるさんのドレイを志願しては如何。女性同志のSMシ

ヨーや男S女Mの残酷ショーと異なり、ともすればグロになり勝ちの、この種ショーを美しく、或はコミカルに見せる工夫はないものでしょうか。広くKK読者の皆様のお智慧をお借りした上で、桐かはるさんに進言したいものです。今迄ストリップには関心が少なかったのですが、先の記事を読み、桐かはるさんの舞台を一通、見たくなりしましたが、斯く思うのは、私だけでしょうか。

(高岡市・西村六夫)

奇ク愛読二冊目ですが誌面の充実、うれしく存じます。8月号の読者通信欄は女性よりのたよりがほとんどなく、少々さびしく思いました。7月号の石田令子様のよいうな勇敢なモデル? 志望のM女性の便りを、どしどし投稿下さるよう、心からお待ち致します。私は縛りの写真集を作りたいと計画しております。同好の方の便りを願います。奇クを参考にして素晴らしい縛り写真集をと、夢見ております。いずれ実現出来ましたら奇クを通じて発表? させていたきたいと存じております。写真には少々自信がありますので、東京附近に住んでおりますM女性

の方の御協力を、お願いします。

(船橋市・永田利夫)

何故、7月号の中津浩氏のレポートに、わざわざ、氏が掲載を希望された元銀行嬢の磔刑フォトを載せてくれないのですか。小生も中津氏と同じく磔刑ファン。毎号、貴誌に本格的磔刑フォト・シーンが載るのを胸を、ときめかして待っています。中津氏の明美の処刑シーンは本当にズーンとくる。是非、磔フォトを出して下さい。前田真知子の磔刑シーンも是非。SMの祭壇に捧げられた犠牲の女体のポーズは、磔刑が最高です。磔刑はキツチリ幾何的な十字型よりも悩ましく身をくねらせたY字型やX字型の方が好きです。一人一人のモデルに、この磔刑のポーズを、とらせて下さい。

(東京都・中野好太郎)

二年程前、あるきっかけで貴誌を手にして以来、毎号、楽しみに熱読しているファンの一人です。昨今SMブームとかで、この種の雑誌が氾濫していますが、写真、文ともに貴誌がナンバー1です。伝統と高い格調を失っていない貴誌は、くり返し読み返して見ても

いつも新鮮で見飽きません。八月号は発売と同時に買い求め、一気に読破してしまいました。今月号は特に、たくさんの女性が縛られた姿で誌上に妍をきそい、異様なまでの熱いムードをふりまいているのには全く、たまげてしまいました。つくづく生きていたことの楽しさ、悦びを噛みしめました。やはり、前田真知子嬢の緊縛肢体は、最高の評価を与えるべきでしょう。次に肉感的な笠井奈保子嬢に、指を屈すべきでしょうか。とにかく、巻頭からムンムンする熱気で、私の頭の中をカクランさせましたが、本文中では、私の胸をワクワクさせる素晴らしい文章が、目白押しに並んでいたのは、うれしい。奇クサロンが二十頁にもなっているのは、本当に読みごたえがありました。辻村氏のSMカメラハントと塚本氏の女体緊縛の撮影と実際は今月号の双璧でした。豊富な写真と巧みな文章が、思わず私を魅了してしまっただけで、それにつけ加えて読者の告白が、また良かった。城章夫氏が例の那津子を縛っての撮影行を、そして笠井奈保子、福井桃子、前田真知子の女性読者がライターとしても登場しているのは、嬉しかった。梅川

幸子さんのゴムフェチは私の趣味ではないが、告白の文章は面白く読ませてもらいました。どうか、これからも、こうした告白文を出来るだけ多く載せて下さい。

(名古屋市中区・渋川永山)

この手紙を書くのに、非常に迷いましたが、そのためらいの一つは、やはりSMに対する暗いという、或は日陰のものと一般的なイメージ、又は、それに関連して自分の趣味(SM的なもの)が他の人に解りはしないだろうかという不安でした。けれども最近はこのような不安、又は、ためらいも、一般社会はSMを決して暗いものとは評価せず、むしろ、性の氾濫が飽和状態に近い現在、次にはSMにまで移行してゆくのではないかと思われまします。これは人間の心の中に、潜在的にSM的なものがあるからでしょう。次に、ためらいの二つ目は、こちらの方が大きいかもしれませんが、奇ク誌上でも高村浩子さんが言うておられる、文字、文章の件です。私の悪字拙文は果たして、どのように評価されるかと考えますと、全く汗顔のものです。ようやくSMを暗いものと考えることなく、始めて

奇クに手紙を書いても、自分の心は文章や字のまじいことで、再び暗い殻に、とじこもってしまいそうです。高村浩子さんのような立派な文章が書けるように、私も練習しようと思っております。高村浩子さん。貴女が、SMを生活の一部（または快楽の一部）と素直に考えているのには好感が持てました。貴女の告白文を読んで、SMに対する忌憚のない考え方に共鳴しました。私は30才になる平凡なサラリーマンですが、もし貴女が納得されるならSMプレーを共に楽しみたいと思っております。

（東京都目黒区・北原庄治）

編集長さま。はじめてお手紙、差し上げます。私は今年二十二才になるOLです。私、この頃、少しヘンなんです。それで書店で貴誌を見て、住所を手帳にひかえて、このお手紙を書きました。ほんと、この頃は、雑誌は金がないと立ち読みしただけで、買いませんでした。ゴメンナサイネ。でも、この雑誌の編集長さまでしたら、きっと私の悩みを書いた、このお便りを読んで下さるだろうと思って一生けん命に書きました。高校は出ているのですけど、字は下手で

しょ。読みづらいでしょ。ゴメンナサイネ。私の家は駅から歩いて二十分ばかりの所にあります。途中、商店街の中を通りますと、人通りもあり、明るいのですが、近まわりの道は片側はタンボで、前は変電所で非常に淋しいんです。でも、この道を行きますと、三角形の一边になっていて、十分ぐらいいで帰れるのです。一月ほど前、夜の八時頃、お花の帰りに近道して変電所の前まできたところ一人の若い男が、私のあとを、つけてくるのです。他に誰もいませんし真暗です。私は気味が悪くなつて、その人をやり過ぎそうと思つて立ちどまったんです。そして、その男の人は、私のうしろから両手で抱きついてきて、私の胸を、ぎゅっと力いっぱい、つかんだんです。私はビクビクして、ふりほどいて逃げようとしたのですが、身体中がブルブルふるえて、力が入りません。それに声を出そうにも声も出ません。余りにも私がビクビクしたので、その男の人は手を放しましたので、私はこるげるように走って逃げました。そのとき、男の人は何か言ったようですが、私の耳には入りませんでした。あとで考えてみますと、大

笠井奈保子の自由日記帳

六月号のカメラルポに引き続いて七月号の「奈保子の日記帳」で示した彼女の純情で無垢、そして肉体的に縛られることによる肉体的な情熱に、誌上では顔にあからさまに晒すことが、印象紙焼付の分では可愛い彼女の表情、羞恥の魅力も十分に組み入れました。

豊満臀部晒し責め

大手札三枚一組 五〇〇円
笠井奈保子 略号八るる

猿轡に悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円
笠井奈保子 略号八るる

エビ縛りのグラマ

大手札三枚一組 五〇〇円
笠井奈保子 略号八るる

羞恥の魅力を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
笠井奈保子 略号八るる

緊縛羞恥表情各種

大手札三枚一組 五〇〇円
笠井奈保子 略号八るる

「観世音菩薩さまの縛り」

数カ月ぶりに訪れた松本たえに對して行われた責めは、塚本氏の

柱縛りの悦虐肢体

生々しい印象の激しい被虐の極鮮明な責め、写真の秘蔵版、集めて頂きたい。アルバムの一端に、加えて記事と併せてご覧下されば、更に一層研究の成果が向上するものと思えます。

羞恥責め悶悦表情

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号八るる

強烈責めに泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号八るる

エビ縛り開股責め

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号八るる

片足吊りに悶える

大手札二枚一組 四〇〇円
松本 たえ 略号八るる

両足吊り宙縛り責

大手札二枚一組 四〇〇円
松本 たえ 略号八るる

開股責めに痺れる

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号八るる

変わかったのですが、もう一度あんな目にあってみたく、この頃、思うようになってきて、私、ほんとうにヘンなんです。それでこんな私の気持と貴誌とは少しは関係ありますでしょうか。暗い近道を通して、男の人に、こわい目にあいたいと思ってる自分が、そら恐ろしいように思えてくるのです。

(奈良県・生駒領子)

貴誌益々御発展の段、真に慶賀の至り心より御喜び申し上げます。毎号、楽しく拝読致させて戴いて居ります。七月号を手にして二、三、気付いた点を申し上げ今後の御参考にして戴ければ幸いです。まず表紙。今までと違い、うんと奇抜なアイデアと思います。縄のスカート、両手に鞭。ポーズもいい。今後共、この様な表紙を望みます。それから値段が値上げされたからグラビヤが多くなりましたが、私としては、もっと値上げしてグラビヤを、ふやしてほしいと思います。値段を上げることによって、危惧されている未成年者も手が出にくくなると思います。読物は、現在のままで良いと思います。ただ残念な事は、花と蛇が、なんだか尻切れトンボになった事

です。それから以前にも度々あった事ですが、未完と書かれて居るのに、終わってしまっている事です。終わるならば、未完と書かない事だと思えます。せっかく私達読者も熱を入れて読んで居るのに次号では、もうなしのツブテではあまりにも可哀いそうだと思います。せんか。色々書きましたが、編集氏の今後の御力ツヤクを祈りつつ、ペンを止めます。

(三重県・安藤生)

私は二十四才の大変なゴムフェチのM男です。まだKK誌を読み始めて二年程ですが、ゴムに関するKK誌の旧号は古本屋で出来る限り集めております。この頃は特にゴムに関する記事が少なく、残念でなりません。ゴムマニヤの女王、梅川幸子様。あなたのゴムプレイは正に私の夢です。羽二重や絹地のゴム引レインコートは不可能といってよい程、手に入りません。以前、中学生時代、私も三着、持っており、親の目を盗んでは素肌にと、通学や就寝をしていました。が、とうとう、母に見つかってしまい、全部、捨てられてしまいました。それ以来はゴム引を素肌にとえず、今に至って

☆福井桃子の臨月腹と臨月腹緊縛写真

愈々迎えた福井桃子さんの臨月。は私達妊婦ファンの待望の日でありました。が、出産間際までSM資料として自分の妊娠した女体を提供された福井桃子さんの協力によって、この福井桃子さんを見事に残すことが出来た。八カ月から始まる月を追った極鮮明な資料はきつとマニアの方々を熱狂させることと

思います。どうか文獻的価値高きこの妊婦資料を各月一括して蒐集下さるようお願いいたします。

出産直前の緊縛美

大手札三枚一組 略号八ぬせ 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬせ 五〇〇円
出産を目前に控えた臨月腹の上と下に縄を掛け便々とした事なまでに丸く膨らんだ妊婦を縛る。

臨月腹の緊縛縛り

大手札三枚一組 略号八ぬく 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬく 五〇〇円
もうこれ以上大きくならないという程最大限に膨らんだ妊婦に対して命を脅かす苛酷な緊縛縛り。

堂々たる臨月縛り

大手札三枚一組 略号八ぬよ 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬよ 五〇〇円
丸い臨月腹を堂々と突き出して縛られた妊婦は羞らひを含む。

両手吊り臨月妊婦

大手札三枚一組 略号八ぬり 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬり 五〇〇円
両手を首を縛って吊れば臨月の妊娠腹をかくすことも出来ず羞じらいながら巨大なメロン腹を晒す。

逞しき腹と臀部

大手札三枚一組 略号八ぬし 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬし 五〇〇円
後手に高々と縛られた臨月妊婦の豊かに脂肪のついた白のよう臀部と蛙腹の異様なまでの美景。

後手縛りの太鼓腹

大手札三枚一組 略号八ぬめ 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬめ 五〇〇円
両手を厳しく高小手縛りにされているのでパンク寸前の羞かし。巨大な腹部をかくす業もない。

全裸臨月腹の展示

大手札三枚一組 略号八ぬい 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬい 五〇〇円
あと数日で出産するという膨大な臨月腹を晒した縛りなしの全裸の全身像で妊婦の神秘を見よ。

臨月の奴隷犬調教

大手札三枚一組 略号八ぬの 五〇〇円
福井桃子 略号八ぬの 五〇〇円
巨大な臨月腹の全裸だけでも恥かしの仕込まれる哀れな妊婦。か

で福井桃子の妊婦シリーズは今回是非お求め下さるようお願いいたします。

います。現在の私のプレイは素肌
にビニールに近い、ゴム引レイン
コートをまとい、フードをかぶり
ゴム手袋を裏返してかぶせ、ビニ
ール製（ゴム製でなくて残念）お
むつをし、雨合羽のズボンをはき
田植用のゴム長をはき、次に小学
生、高学年用の合羽地のゴム引レ
インコートを、まとい、その上に
厚手の特大男用ゴムレインコート
を着けて、フードをかぶり、ゴム
手袋をし、最後に合羽上下を着て
フードをかぶったのが、私のゴム
衣装姿です。幸子様から見れば、
何と貧弱だと思いいでしょうが、
これが私の、せいっぱいの衣装
なのです。ゴムに取りつかれた、
このような若者ですが、是非、ゴ
ムの体になるように飼って下さる
事を願ひ、今夜もゴムに包まれな
がら就寝いたします。私と同じよ
うなゴムフェチの女性からのお便
りをお待ちしております。

（ゴム衣着奴）

私は二十才の男です。年上の
女性に奴隷のように、こき使われ
責められることに大変、興味をお
ぼえます。特に女性用トイレ（水
洗でない方）で逆さに吊るされ、
しばられて、ムチ打たれながら、

多くの女性の前で女性の出したも
のを飲まされたり、柱にハリツケ
にされたりすることに興味をおぼ
えます。三十七才までの女性の方
なら、どなたでもかまいません。
こんな私の願望を、満たして下さい。
い。ほんとに犬や猫のように扱っ
ていただいても結構です。

（東京都・月田経雄）

梅雨の候、ムシムシする日が続
いておりますね。先日、ふとした
ことから、奇ク七月号を手にしま
した。同じマニアの人が意外に多
いのには、一寸おどろきました。
これからも毎月、愛読させていた
だきますので、よろしく。塚本鉄
三さんのカメラとペンのルポルタ
ージュ「観世音菩薩の化身」は、
感心して読みました。ただムチャ
クチャに縛ったり責めたりするば
かりでなくて、文章に、ほのぼの
とした詩情があつて、私のSの心
を適度にくすぐってくれました。
写真も、たくさんあつて、よかつ
た。次に楽しく読ませてもらった
のは青木順一さんの記事で、猿轡
とゴムの汚臭責めにはピンときま
した。是非、森中雨奇男様も、こ
の返事を書いて下さい。口絵の写
真も文章の中の写真も実に素晴し

☆笠井奈保子の若々しき肢体を緊縛す

六月号のカメラ・ルポで、その
初々しい緊縛姿を誌上に登場さ
せた笠井奈保子さんは女性の緊縛
フォトを見るのが大好きだとい
う。第一回第二回のお嬢さんで
家の鮮鋭なるカメラを駆使して
その鮮鋭なるカメラを駆使して
迫真的な成果をここに映画紙焼
りたのアルバムの一頁を盛大に飾
りたいと思う。乞う御一見！

縄に依る悶悦姿態

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
縛られたことで心中の動揺をか
くしきれず真白い全裸の肢をく
ねとくねらせて悶える乙女。

縛りを耐える表情

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
縛られることが好きなのか嫌
いのかわからないが、強烈に縛ら
れ必死に耐える表情は美しい。

若き肢体美を縛る

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
伸びやかな若々しい肢体を思
きり開陳して緊縛美をいっぱい
ふりまく二十才の乙女の柔肌。

羞恥縛りの種々相

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
乙女の羞かしさをいやという程

女体の悦虐を抉る

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
縄―それは奈保子にとって果た
りてどのような刺激を与えるの
ろうか。この恍惚の表情を見よ。

若さを縄でくびる

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
むちむちと匂う花のような若さ
の溢れる女体を思ひのまに縄に
よって縛り上げ弄ぶSの醍醐味。

緊縛の姿態に恥ず

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
白い頬を真赤に染めて縛られる
ことを恥ずる乙女は肢体をエビの
ように屈伸させて表情に現わす。

乙女の女体を曝く

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
奈保子の猿轡をかまされた表情
美を縦横正面から女体の秘奥を
の垂れるほど正確にあばく。

開股縛りの決定版

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
笠井奈保子 五〇〇円
肉ののった太股を縄によって強
制的に広げさせられた美しくも妖
しいムードの漂う女体開陳版。

いですネ。奇ク一冊で十分、SMの心情を満足させられました。

(茨城県・中井真佐夫)

○ 私は昨年の春から、会社づとめを、はじめた一女性です。奇クは半年ほど前から手にするようになりまし。ケバケバしくなくて真面目なのが好きで、私の心の寄りどころとして愛読しております。

一つお願いがあるのですが、私はふとしたことから、浣腸に興味をおぼえ、どなたか、他人の方から直接されてみたいと考えています。が、こんなことは誰にも、たのめず一人で悩んでおります。美容のためにと自分で浣腸をしておりますが、やはり他人にしてみらうてこそ、最高だと思えます。ベッドの上に、あお向けに寝かされて数人の男性の方の見守っているなかで、浣腸されている自分を、いつも夢みています。そんなとき、私は、いつもハダカで身になにもつけていないのです。こんなミダラなことを想像するなんて、と思わず、顔を赤くしています。でも、そんな空想をするときの楽しい魅力には、勝てないのです。申しおくれましたが、私は今年二十一才になります。勤め先では、ごく平

凡で目立たない、おとなしい娘で通っております。どなたか、こんな私に浣腸をして下さる方って、おられないでしょうか。お医者さんのところで浣腸されたことは、まだ一度もありません。身体は大変健康でお医者さんにかかったことはないのです。どうか、よろしくお願いします。

(京都市・南川恭子)

○ いつも美しい写真お送り下さって有難うございます。主人から毎月の新しい写真を速達でお願いするよう言いつけられておりますので。お気づきの事とは存じますが私たちは大の奇クファンなのでござい。と申しまして私は正式の妻ではなくて十九の時からSの主人にひかれて世話になり七年目になります。そんなわけで私の家のタンスには三段にもわたって責めの小道具や衣裳がつまっております。主人は縛りの写真を見ると大ハッスルしますので、このようにいつも新しいのをお願いするわけ。電話で写真が届いたかと尋ねてまいりまして、来ておりましたら、その日は早く帰宅して宵の口からSMプレイに時のたつのも忘れるのでございます。この

頃、「一度奇クのモデルになって

みないか。お前だったら、きっと人気が出るぞ」なんて冗談を言ったりして、そんなときは一層主人も燃えるようです。私も二十六才になっていて、もう若くはなく、とてもそんな気にもなれませんが十九のときから数年間、主人に仕込まれていきますので、大ていこのとでしたら、辛抱出来るつもりです。奥さんはSMについては一向に理解はないらしく、週に二回ぐらいは私の家に泊ってゆきますが私はあくまで日蔭の女で、あとの日はお花やお茶、それに刺しゅうを習いに行ったりしております。ですから、もしモデルにというお話があれば時間はいつでもとれるつもりです。私としましては、そんな自信はございませんので、読者の中のファンの方々と、かりそめのプレイを楽しめたらと大それたことを考えております。主人はお前の若い時の写真をとっておいたらよかったのになあ、と言ってくるくらいですから、写真をとるという口実だったら許してくれると思います。もし、そんな方がおられましたら、よろしくお願いいたします。末筆ながら貴誌のご発展を心からお祈りしてペンをおきま

す。

(箕面市・玉木章子)

○ 数回にわたり妻の緊縛フォトを發表致し、この世界の楽しさというものを皆様方に知ってもらおうとして筆をとっていたのですが、現在私達夫婦は、行くべき所に行きつき厚いカベに突き当たった感じが致してなりません。手を変え縛りを変えて妻を責めてみるのですが、同じ食物でも飽きがくるのでしよう。奇ク誌上に登場する数々のM女性の人達と、妻を混じえ心ゆくまでSMプレイを楽しみたいと願っているのが現在の心境です。今までの妻の緊縛フォトを見て下さればおわりの通り、吊りもやりました。浣腸も試み、私の大好きな乳房責めも色々やってみました。これから先、私達はどうのようなプレイをしたらよいかと迷っております。読者の皆様、このあわれな夫婦の為に、より楽しめるアイデアを御紹介下さらん事をお願い致します。最近誌上を賑わしました鈴木千鶴子さん。又、辻村氏によって登場した森川美紗さん。サロン欄で活躍されています佐野みさ子さん。その他、色々の女性がおられますが、私も関東に住んでおりますので、それらの

M女を、心ゆくまで楽しませるのは、S男のつとめであらうと思います。
(埼玉県・阪東太郎)

○ 長井道雄様、貴方御夫婦の趣味と私共とそっくりなので早速投稿しました。実は小生共もビキニが大好きで普通のパンティやブリーフは外出の時だけで家に居る時は夫婦そろって変形ビキニを着用しております。私共だけかと思っておりましたので気が強くなりまして。貴方の奥様の六尺禪、なかなかお尻の形にぴったりのしめ具合で、家内と一緒に真似をして、その夜は禪プレイをしてしまいました。ただ貴方自身のビキニの写真が載っていないのが残念でした。ここに同封致しましたものは小生のビキニです。前の方とお尻の方と両方入れました。前の方は貴方様のビキニのように小さくて、やっとなPがおさまる大きさです。お尻の方は貴方の言われるものより大きいかもしれません。もっと小さいものもあります。私共もAやVにはめてむゴム球などがついたものも持っております。これから時々貴方様や奥様の禪やビキニの写真を誌上で見せて下さい。お願いします。
(東京都・坂 良男)

○ 私は最近、書店で立ち読みしていて奇クを見ました。最初は少し変わった本だなと思い、とりあえず買って帰り、家でゆっくり読みました。少し読んで見ると、今までにない新鮮味を覚えました。不思議な本で読みかえしていても、読むたびに新しい思いが、その都度、湧いてくるのです。これから奇クを愛読してゆきたいと思っています。私は26才、7月号に掲載されました愛知県の水川那美子様、6月号に掲載されました大阪の山添清子様と文通交際をしたいと思います。お便りをお待ちします。
(大阪府・北 一郎)

○ 南加津子様、長い間ほんとうにすみませんでした。二カ月ぶりに帰国して、つくづく日本は良い国だと思えます。先回はとりすました貴女を苦悶の陶酔に耽らせてみせると約束した筈です。許されるならば今すぐにでも貴女のそばにとんでいて、ぞんぶんにSMの限りを尽くしてみたい。最初は軽く後手に縛り、仰向けにして逆エビ、そして臀部責め、股間縛り。やがては開股縛りにしたままバイブレーターの手が貴女のふくよ

かな乳房へ可憐な乳首へと……。そして責めの魔手はそろりと桜色がかかった肌を、あたかもぬめぬめと這うようにのびて、哀願にも容赦なく羞恥の的へと……。「いや！ お願いだから、もうやめて、許して……」どうです。SMプレイ——なんと甘い言葉でしょう。それだけに、ただやたら苦痛のみを与える粗暴な拷問プレイは好きになれません。プレイである以上、苦痛や羞恥の内にも、それ以上の甘美さが伴わなければ、同じ思いの男女の間でのプレイとはいえなくなってしまう。次に貴女は菱縄股間縛りで全裸に剥かれ、くすぐり責めにもだえるのです。転がりながら両ひざをすり合わせ、タテ縛りだけはやめてえーと。最後に、加津子に今月の罰を与える。縄を二つ折りにして折ったところから、30、15、20、15センチの順にむすび目をつくり一番上の輪へもどしてしめ上げます。そして上から順にむすび目とむすび目の間に縄を通して、乳房ウエスト、腰としめあげると、菱縄股間縛りができ上がります。股間には適当にむすび目をつくることを忘れずに、手は後から背中へ差しこむだけで充分緊縛感がある

と思います。加津子は菱縄股間縛りの責めを僕から受けていると思つて耐えて下さい。そして、できたら感想を知らせて下さい。
(名古屋・三宅具隆)

○ 奇ク七月号と八月号を手にしてうっとうしい梅雨空をふっとばしからつとした気持ちになった。口絵グラビヤは勿論のこと、文中にも緊縛写真が沢山のっているのはイカス。不足の分は印画紙焼付のものを見て、Sの心を満足させている。塚本氏の「私の縛った思い出のM女たち」は面白かった。未公開のフォトが数千枚あるそうだがどうか、これからも少し宛でもよいかから、誌上に紹介してほしいものだ。以前活躍した人たちで思い出の人も多い。8月号の扉に出た梨花悠紀子のフォトは素晴らしい猿ぐつわの表情である。私もコレクションの中から梨花悠紀子の写真をとりだして思わず見てしまったものだ。最近でも前田真知子をナンバーワンとして、笠井奈保子や深田菊子らの若くて美貌のM女が続々登場してたまらなく感興をそそられてしまう。高村浩子や前田真知子、それに笠井奈保子のように告白や日記も、どしどし発表し

次号(十月号)は八月二十五日に発売いたします

てほしい。それから「パロディ花と蛇」や「紫蘭の門」のような責小説もハッスルしてほしい。

(北九州市・滝井耕作)

暑中お見舞申上げます。今度私も一軒お店を持つようになり、今夏を迎えて故郷の志摩へ帰っております。私は夏と海は大好き。たっぷり泳いで真黒になって再び都会のジャングルへ戻りたいと思っております。その節はよろしく。

(三重県志摩郡・福井桃子)

毎月毎月私達奇クファンの為にすばらしい編集を続けておられる編集部の方々には厚く感謝しております。最近号は益々内容が充実しています。読んで読者の方々の貴重な体験がのっており、うれしく読ませていただいております。8月号の、「美しい五月の黒髪に」を書かれた福井桃子さん。トップの甘い表情の写真。二児の母親だと言われるのに若い時は、さぞかしと想像される美貌。しかもSMに造詣の深さ。私共のアイドルとして、これからも、どうか御活躍を祈って

おります。一九二頁にのった写真の緊縛姿態のポリニームには只々ヨダレが垂れました。一九六頁の写真は、よくも縛られていながらこれまで足が上がりましたね。私はマダム英美代の大ファンです。

(東京都千代田区・平山五郎)

この頃は「奇クサロン」が増頁され、たのしく読ませてもらっています。読者による読者のための雑誌を標榜されている奇クの本領は、読者からの偽らざる記事や体験や告白によって代表されると思います。他の雑誌で大きな活字で大々的にあふって書かれているので、どんな内容かと文章を読んてみて、ガッカリすることが殆どです。中味はカスのようなものか焼直しのものが多く、いっぺんにイヤになってしまいます。奇クだけは何度噛みしめても味のあるスルメのような珠玉の内容なのでアキません。八月号では前田真知子さんの告白「夢遠き日頃」が断然よかった。この淑女がこのポーズをとるとは、私はM性の謎を思い知った気持です。責められていると

きの足の拇指の反りかげんに、責めに全身を投げ打ってうち込んでいる悲壮な姿を見ることが出来ません。

(千葉市・松坂美知雄)

パイプ責め、剃毛、開股責めetc……。外観的には、おそろしい行為と見られるかも知れないが半ば儀式的ともいえるこの責め行為は加虐者、被虐者双方が合意の上で、この甘美な、人間にだけ与えられた不思議な遊戯を楽しんでいるのである。社会的に優秀な人間も革命の志士も、愛国者も、ここでは一切が無となる一筋のロープを介して、心と心の触れあう遊戯なのだ。いたずらに煽情的なストリップショーや、卑猥な、それでいて公然と市販されてはばかるところのない、やたらと性的描写の氾濫するエセ文学書や、廃止された筈の赤線地区やトルコ風呂等に強い反発を感じざるを得ない。いや、むしろ嫌悪すらしている。ポルノ解禁をしろんだ中間小説、雑誌とやらが、いやに増えた。女の性をえぐるとか、愛欲に狂うとか、異常性愛にメスだとか、バツタバツタと、目玉に飛びこんでくる。世の中みんな色気違いとでも思っているのか、と思わせ背すじ

が寒くなる。はじめは貴誌の領分にまで手を伸ばされることに、かなしみを感じつつ、しかる広告文にひきずられて買って読んだが、所詮は題材のバラエティを考えての客引きと知って、この頃気にかけない事にした。たしかに短い時間、もんもんを晴らすには良いだろう。客待ちのタクシー運転手がギンギラギンになって、読んでいる姿を凝視した事もある。これにてS&Mを理解、いや研究したと思っでは、はなはだ不愉快でならない。この方の老舗をほめる貴誌は営業上多少のあせりもあり得ようが、正道、地味に、今迄通り部数を少なく、S&M愛好者の文献誌としていただきたいもの。いやしくも部数を増したり、グラビヤに、色刷りのフォト等やられてはデカメロンのなゾッキ本以外の何ものでもない。

(東京都・小杉 実)

愛知の水川那美子さん。お友達になりませんか。私は三十七才で奇ク愛読歴は、もうかなりになります。SMの道は年令、経験に係なく探究でき、掌中のブランドのように大事に、ゆっくり暖めてこそ味の出るものと思います。

年若い貴女が、思いきってお便りされた勇氣に感心いたします。最高の女性の美しさは緊縛によって引き出されるもの。もうすでに貴女は、私の空想の絵筆で、縄による変身をとげつつあります。せっかく見つけた素敵な世界。二人で大切に育ててみませんか。ぜひお便り下さい。（静岡・志羽利也）

○

茨木ミノル様。七月号の貴兄の読者通信を拝見しました。私も貴兄と、よく似た傾向の持主です。

二月号と五月号の私の文章を読んで下されば、お分かりいただけるかと存じます。貴兄のご体験、ご感想の、さらにくわしいところを、おうかがいしたいと存じます。

昨年七月号に掲載の二十四才の「神戸・淋しい女」様をはじめ、本誌を愛読する近畿在住の女性の皆様、お元気ですか。小生は二十一才になる某私大生ですが、昨年十月号より奇クを愛読し、それか

ら、わずか半年ほどでバックナンバー二年分を読破するほどのSMファンになってしまいました。小生のSMの知識はSM系雑誌によるものだけであり、未だにプレイの経験は一度もありませんし、また、そのような女性に、めぐり逢う機会さえもなかったのです。しかし、今ここに奇ク誌上を通じ、小生の良きパートナーの出現を求めるために筆を走らせています。小生の趣味性向は、強度ではありませんがSです。しかし、肌を傷

つけたりするのは好きではありません。せん。好きになれそうな責めは、浣腸（単なる浣腸ではなく、イルリガツールによる高圧浣腸）を主体としたアヌス責め、羞恥責めであると思います。どうか、小生のドレイとなって下さる方、ぜひ、ご一報下さい。小生の好みはプレイの経験のない方が一番よいと思いますが、私にリードし、教えて下さる方も、お便り下さい。

(奈良・藤川 豊)

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に發行のものに於いては在庫の僅少な御注文もありません。○七月一日の郵便料値上に伴い、全面的に改訂の必要が生じましたので、御承願いたします。尚、既刊の以外で、三ヵ月以上御予約の場合同様に、送料の全額を当社にて負担致します。注文の節は、小包にて発送致します。

既刊雑誌在庫案内
昭和40年12月号（送共三三二円）

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
4343434343424241414141414141414141
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
11654321161108765421
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
八八八八八八八八八八三三三三三三三三三三三三三
二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二
四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四四

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
454545454545454544444444444444444444444443
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
10876543211211098765432112
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

[illegible]

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
四四四四三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
三三三三八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
二二二二二二二二二二六六六二二二二二二二二二二二
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

いでした。もちろん、実際のところは知りません。彼も奥さんもお若いのですから……。

○その暑い中でブツブツ云いながら、どうやら埋め終わった目次の控えを眺めているのですが、本号では読切り分のスペース予定を変更して、急拠掲載した作品が二点あります。

その一つは、せつせつたる縛情を詠い上げたともいうべき小説『不毛の愛』△久留木栄△で、三カ月連載。もう一つは、文献の凝縮ともいえる研究力作『女相撲書誌雑考』△雄松比良彦△の、上下二カ月の分載です。傾向は違っても、共に個性ある重厚さという点で、各位のご賛同を得られる佳作だと思えます。

コクのある読切り短篇は勿論、望ましいのですが、いいものでさえあればドシドシ掲載して行きますので、自信作をお寄せ下さい。

ま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

郵便番号558

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番▽
(昭和三十一年四月二〇日 第三種郵便物認可)
(昭和四二年四月二一日)

○本誌は口絵、グラビア写真、検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に人意として編集いたし、絶えず、本来、人向として発行を企図しておりますが、関係上、十八才未満の方には、絶対お願ひ下さらないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。